THE CENTRAL REVIEW

中央公論

新年號

第廿七年第一号

第貳百七拾四號

新橋堂式

組合せ本箱

●最新式最新形の本箱にして目下歐米諸國に流行を極め居れり
●多數の優れたる特徴を有す、其重なるもの左の如し



△藏書の增減に從ひ自由に其大さを伸縮し得べし
△室内の構造に應じて適宜に配置し得べし
△書物を入れたるまゝ手輕に運搬し得べし
△硝子戸の開閉に巧妙なる構造を有す
△書物を分類するに最も適當なる構造を有す
△形狀優雅色彩美麗しかも堅牢此上なし

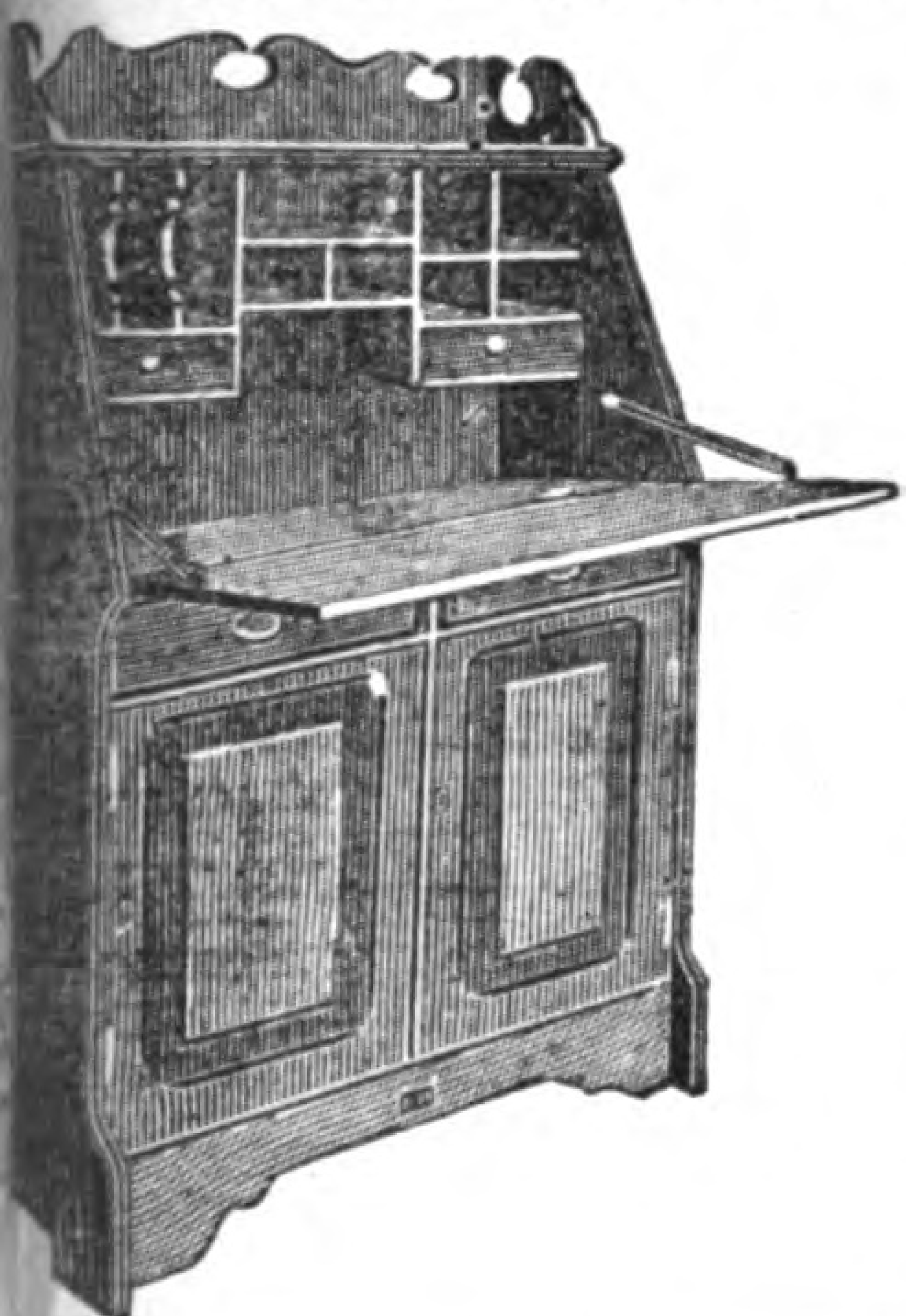
定價
金二十六圓　桧製
金二十八圓　樺製
金三十圓　櫻製
運賃荷造費御自辨

▲之れを要するに最善最良の本箱!!!
構造を示せる目錄は郵券二錢封入御申越次第進呈

理想のデスク

事務用定價廿五圓
書見用定價廿二圓
荷造費各一圓仐錢
運賃は御自辨

●デスクの上部は事務用又は書見用に用ひられ下部は帳簿棚又は書棚に使用するやう構造されて居ります●夫故日常必要の帳簿又は書物を最も手近に配置し得て便利此上もありません●デスク使用後は机板を閉ぢて其大さを短縮する事が出來ますから室内の面積も經濟する事が出來ます●材料は兩デスク共桧です塗は木地



進物用

圖書切手

發賣

書物は贈答品として最も文明的のものですが贈り先きの人の教育の程度趣味の如何等を顧慮する必要がありますので其選擇が頗る困難な事であります、併し新橋堂の圖書切手を御使用になりますれば其煩勞を省く事が出來まして便利が此上も御座いません、贈る人は斯く手數がなく贈られた人は自分の好める書物が得られ直に一擧兩得で御座いますどうぞ續々御用命を願ひます

◉東京かるた會競技用
▲萬朝報遊技部發兌

小倉百人一首

標準かるた

讀札付價四拾錢
取札定價四拾錢
郵稅各八錢同一組十二錢

愈よ歌かるたの時節が來ました、歌がるたは東京かるた會で用ふる標準かるたに限ります是で無くては市がきゝません、東京では最う何れの家庭、孰れの學校でも標準かるたを用ふる事になりました、標準かるたは假名文字ばかりで誰にも取れます、殊に御婦人お小供達には結構です、取癖や得手不得手が出來ず、是れほ[illegible]

發賣元　東京市京橋區銀座通新橋際　新橋堂　振替貯金口座二百番　電話新橋千九百九十一番

此の廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

大町桂月先生校訂解題

學生文庫

全五十冊 袖珍特製 金文字入 定價參拾錢 郵金 四錢 各冊 逐次刊行

校訂嚴密 **內容豐富** **印刷鮮明** **裝幀優良**

周到卓拔なる批評的解題は各書の性質綱要價値を詳說して遺憾なし

學生及び讀書家一般の讀物として史傳修養教訓文藝隨筆等古典的名著を網羅せる一大寶庫

拾部以上取纏め御注文の節は特に壹割引とす

既刊書目

1 南朝史傳 全
2 日本外史 上
3 益軒十訓 上
4 謠曲全集 上
5 曾我物語 全
6 西遊記 上
7 源平衰盛記 壹
8 太平記 壹
9 心學道話 全
10 常山紀談 上
11 日本外史 中
12 益軒十訓 中
13 先哲叢談 全
14 義經記 全
15 一休諸國物語 全
16 常山紀談 中
17 益軒十訓 下
18 源平盛衰記 貳
19 謠曲全集 中
20 西遊記 下
21 百人一首一夕話 附歌かるた必勝法
22 狂言記 全
23 太閤記 壹
24 大岡政談 上
25 日本外史 下
26 續心學道話 全
27 禪學名著集 全
28 新譯四書 全
29 常山紀談 下
30 源平盛衰記 三

近刊書目

川柳名句集 全
武士道名著集 全
保元平治物語 全
太平記 貳
謠曲全集 下

學生諸君の良參考書

發兌 東京日本橋區本石町二丁目　振替東京一七四四　賣捌 全國各書林

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

[illegible]品及粗惡なる買[illegible]は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御記入を乞ふ

痛快なる新年號

實業之世界

本號に限り定價十六錢郵稅二錢

▲實業界の快男兒 是れ我社獨特の三十快男兒論

● 老雄!!三浦將軍語る……不屈生

● 大山師論……仲小路廉

● 苦しい世の中か樂しい世の中か……澁澤男爵

● 女利用法……不屈生

▲福と金……三宅雪嶺

● 桃介式の成功する所以……福澤桃介

● どん天內閣の腕前……大木伯爵

● 妾が男なら……鳩山春子。嘉悅孝子。棚橋絢子

● 怪雄!!頭山滿翁と語る……不屈生

▲快男兒論……三宅雪嶺

發行所 東京芝愛宕町 實業之世界社 振替貯金口座二四二一

信用なき店舖及不堅實なる賣品の廣告揭載は謝絶す

池邊義象先生閲　市原隆作先生新著

悲壯史蹟 屋嶋と壇の浦

忽六版　四六判上製頰美本函入　正價八拾錢　送料拾錢

壯絶悲絶の光景は讀者の目前に躍如たり

明治大學講師文學士内海月杖先生新著

戰記文評釋

新刊好評　三六判上製頰美本函入　正價八拾錢　送料拾錢

國文のやはらかき情味と漢文の稜々たる意氣とを巧みに取り交ぜたる戰記文は我國特有の文體にして其叙述の大膽にして自由なる其の會話の自在にして妙を極めたる讀む者をして眼前虎嘯龍攘の光景を彷彿たらしむ。本書は保元平治物語、平家物語、大平記等戰記物語の傑作中より其最も面白き箇所を抜粋し之れに國文學の泰斗たる内海先生が特有の評釋を加へたれば、單に讀み物として最も佳なり若し夫れ文章の模範として研究せんには更に佳なるものあらん。

内海文學士著　價壹圓廿錢送料十二錢

增補七版 文章十講

文章學は本書に依て始めて大成せられたり

野上、野村、水島三學士共編

和英作文辭典

好評三版美本　價六拾五錢　送料八錢

本書があれば英文は自由自在

内谷繁實著　全拾册各册　價六拾錢送料六錢

袖珍 名將言行錄

本書は萬世不朽の名著なり

稻川雲谿書編　價四拾錢　送料四錢

手紙と葉書

拾五版　作文兼用無二の習字帖也

水島文學士譯　價壹圓廿錢　送料十二錢

森林生活

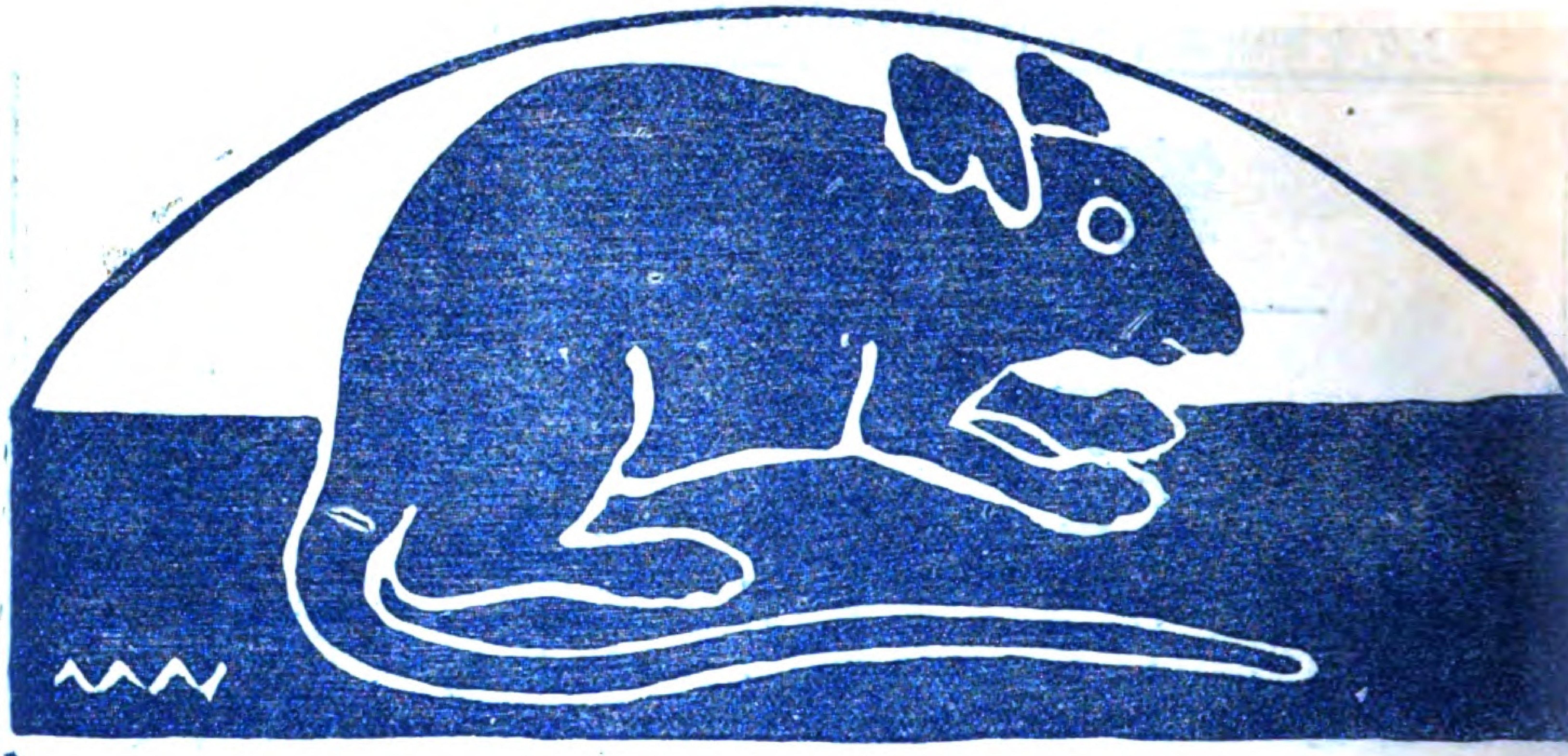
好評八版

本書は簡易生活を實行せる哲學者ハ感想錄也

東京本郷區森川町　振替壹九四六七番　**文成社**　圖書目錄はがき往復進呈



中央公論第二十七年第一號目次



明治四十五年を迎ふ

明治四十五年來る

一元老は、我が經濟界の將來を悲觀し、外國公債償還の期限至らば、我が國の年々外國に、支拂ふ正貨は、國内の硬貨を擧ぐるも、尙ほ毎年一億壹千餘萬圓の不足を告ぐべしといへり、然れども國家は釘付けにあらず、曾て渡邊國武子に由て財政亡國論を說法せられし我が國民は、今尙ほ幸ひに亡國の厄を免かるゝのみならず、年を追ふて國運の隆昌なるを觀るは何ぞや

與國の氣象は實に靜平たり、吾人は如何なる場合に於ても樂觀を捨てず、我に天佑あり、我に不世出の聖天子あり、我に三千年の歷史あり、金甌無缺の國體あり、六千萬の同胞あり、世界夫れ我を如何せんや

吾人の筆を執る、恒に此の見解を以てす、其の論ずる所、能く識者の胸中に秘せらるゝ經世の琴線に觸れて、而して世上の參考たるを得ば、吾人の志乃ち足る、例に由て新春の文壇に上るに方り、謹みて聖天子の萬歲を頌し奉つり、汎く世上諸君子の康福を壽す、孤劍床頭に在り、梅花早く窓前に馨し

元旦　　　反省社同人謹誌

中央公論



第二十七年
第一號
第二百七十四號

支那問題解決案

(一)

支那の形勢は益々紛糾せり、然かも何等中心點と視るべきもの莫きは依然たり、十一月廿七日官軍は一擧して漢陽を取り、武昌をして殆んど守るに堪えざる窮地に陷らしめしも、十二月二日革命軍に南京を奪取せられて、損得相殺の狀態にあり、十二月六日には、竟に監國攝政醇親王に、年俸五萬兩を與へて退隱せしめ、唐紹怡を媾和使として九日先づ漢口に向はしめたり。

袁世凱は、吾人の曾て想像したるが如く、皇太后、慶親王等と謀りて、以て其の宿敵たる攝政王を排斥し得たり、正に得意の壇場に立つが如きも、國庫空乏して期月を支ゆるに足らず、外國の借款は總て

不成立となり自から河南の邸宅第地を擔保として僅かに百萬兩を借らんとするも、尙ほ困難の狀况なりといふ、窮困實に想像に餘りあらずや。

　革命軍に至ては、一たび官兵の猛擊を受けば、武昌全く守るべからず、幸ひに南京を陷れて、假政府を茲に設けんとするも、漸く內訌の兆顯あり、資金の足らざるは、略々北京政府と齊しく、將さに租役を課せんとすれば、民心漸く離叛せんとす、蓋し各地の紳董及び庶民の多數は、必らずしも革命共和を賛するにあらず、唯だ北京政府の威信全く地に墜ちて、到底恃むに足らざるを看取すると共に、革命に由て新政府立たば、何等かの勢利を得べく豫期し、若くば租税課役の減免さるべきを期待して、以て革命に附和せしのみ、然かも其の豫期の將さに空想に歸せんとするを視るや、漸く失望の色あると蔽ふべからず。

　且つ南京の革命黨と、廣東の革命黨とは、必らずして緊密の聯絡あるに非ず、上海又は武昌に集會せる各省代表者なるもの、嚴密なる意義より視て、未だ眞の各省代表者と做すに足らざるも多し。故に官革兩派とも、今や其の資力に於て盡くる所あり、銃砲彈藥また乏しくして、到底大に相戰ふに足らず、尙ほ疲困窮憊を極むる兩跛者が互ひに空拳を握りて辛ふじて相睥睨するに似て而して甚だ相肖たり、唯だ此かために平和を亂さるゝ生民と、通商上の利益を刧さるゝ列國とは禍ひなる哉。

（二）

　吾人の繰返して言ふまでもなく、支那の問題は、我が國主として之を解決せざる可らず、然り、我が

國の實力は、支那問題を解決するに於て、最も優秀なる地位に在り、孰れの國も、日本の意思に反しては支那問題に手を觸るゝ力あらず、殊に伊土の紛爭、墨其哥の內訌、波斯問題、英獨問題等の續發するありて、列國多くは東亞の現勢を顧念する餘裕なきに於て、支那問題は最も日本の力に待たざるを得ざる也。

吾人の見を以てすれば、支那問題を解決するに二種の方案あり、官革兩派を媾和せしむるがため、立憲君主制を條件として、以て暫らく現狀を維持するを第一案とし、南北を兩分して君主制共和制俱に欲するに任すを第二案とす。

官革兩派が其の資財に窮し、銃砲彈藥に乏しきは蔽ふべからず、而して借款成らず、租稅の重課また難しとすれば、窮餘の結果、民物を掠め、民財を徵するに强力を用ゆるの外あらざらんとす、事茲に至らば、支那固有の習癖として、軍隊の鹵掠到らざるなく、秩序全く壞亂すべく、而して匪賊所在に蜂起して、猖獗を逞ふするや必然也、即ち收拾すべからざる狀勢となりて、列國通商上の利益は全く破滅せらるべし、是れ啻だ生民を塗炭に苦むるに止まらず、又列國通商の利を侵犯せらるゝに止まらず、實に東洋を大禍亂の底に沈むるもの也、之を豫防するがためには、苟くも東亞の平和を意とするもの、全力を擧げて爲す所莫かる可らざる也、即ち官革兩派を媾和せしむるの急要なる、何ぞ多言を要せんや。

（三）

媾和の方案として、最も容易なるは、北京政府を存續せしめて、以て君主制を支持するにあり、若し

政體を變革して新國體を立てんとせば、新政府の創設に多くの困難なき能はず、現に其の主腦たるべき大人物なく、現在各所に顯はれし諸人物にては、訌爭に次ぐに訌爭を以てして、容易に底止する所なかる可ければ也。

君主制の現狀を維持し、今の政府に若干の改良を加へて以て兩派を媾和せしむるとは、比較的に容易にして、又事を治むるの捷徑たり、素より共和制を主張するもの、今の愛親覺羅氏を戴くを悦ばざるもの等は、之に心服するとなかるべしと雖も、總てを滿足せしむる爲に、根本的解決を告げんとは、今俄かに望む可らず、之を解決せんとする間には、故障百出して、其の間或は意外の事變を生ぜざるなきを保せず、假令彌縫といはゞいへ、兎にも角にも一時平和を回復せんと、實に急務中の急務とす、寸を延れば尺を寬にすといふもの、實に今日の謂也。

此の媾和を促すがためには、我れはまづ英露と相謀りて以て、外交的手段に出でんと勿論なりとす、然れども單に外交手段のみにて足らずとせば、進んで武力を用ゆる亦辭す可らず、彼の革命派を壓迫するがためには、我が軍隊を漢口、南京、廣東に出さば、優に目的を貫徹し得ん、然かも我に於ては一擧手一投足の勞のみ。

或は革命派を壓迫するがために、其の憤怨を招き、延きて日本貨物に對するボイコットを起さんとを怖るゝものあり、然れどもボイコットは一時のみ、支那人の錙銖の利を爭ふや、マッチと雖も一箱を買ふもの少きにあらずや、彼等縱令一時は煽動に乘りて感情に走り、極力日本の貨物を排斥せんも、我が

貨物にして品質優良、價格低廉なる以上、彼等は貴に之を購はざらんと欲するも得べからざる也、列國動もすれば支那人のボイコットを恐るゝも、實は短見のみ、苟くも品質優良にして而して價格低廉なる貨物を供給せば、最後の勝利を得るや言を待たず、ボイコットの如き一時的のものは、斷じて憚かるを要せざるなり。

吾人の曾て言へるか如く、支那人は一種の雷同人種也、曹操一び赤壁に敗るれば、百萬の大軍忽ち潰ゆる底の人種也、且つ諫官國を謬まるの悶癖膏盲に入り、上下共に空論を好みて貿々に失す、之を治むるには頑き壓迫を加ふる權力の外、何物も適すると莫し、即ち共和政體の彼等に適するや否やは疑問とす、故に速かに時局を收めんとせば、君主制を以て暫らく强壓を加ふるの外なきのみ、苟くも强壓を加へんか、假令心に服せざる者も沈默を守るの外なからんとす、斯くして平和を維持するは、是れ生民を塗炭の苦より救ふ也、列國通商上の利益を支持する也、否、東亞の大禍亂を避くる所以也。

（四）

所謂南清人にして、飽まて愛親覺羅氏を戴くを欲せずとせば、暫らく其の欲するがまゝに、獨立せしむるも一策也、而して是れ南北の分立也。南北の疆域は、黄河とするも可也、楊子江とするも可也、黄河とすれば、淸帝を奉するものは、直隷、山西、陝西の諸省と、滿州、蒙古等なるべく、楊子江とせば、河南、山東、江蘇其の他之に加はらん、即ち南北の廣狹勢力畧々相若くべし、此等の事は彼等の意のまゝとし、唯だ斷して速かに兵を收めしめ、

通商貿易を復舊して以て平和を支持せしめ、寸分も之を紛更するを許さゞるを要するのみ。

此の南北分立のためにも、外交手段のみにて足らずんば、亦武力を用ふるも避くる所に非ず、我が武力を以て南北兩派を强ひて、兵を收め平和を回復せしむるの保證を爲すとも、或は必要ならざるに非ざれば也。

支那が必らず統一せられて、二分又は三分す可らざるや否やは、頗ぶる疑問也、大疑問也、然かも之を解決すると二年三年の能くすべき所に非ず、唯だ今日の要は、一月も早く、一日も速かに平和を恢復して、以て大禍亂の端を防止するにあり、生民を塗炭より救ひ、兼て列國通商上の利益を保護するに在り、此かため一時南北分立を見るも、亦必らずしも妨けざるのみ。

但だ媾和は姑息策也、根本的解決にあらざるが故に、四億の民衆をして悉く滿足せしむるに足らざるや言を待たず、隨つて今回の如き動亂の數年後に再起するや勿論なりとす、然れども牢記せよ、今日根本的解決を告げんとせば、少からざる時日を費すがために、其の間官革兩派の爭ひは繼續し、而して不逞の徒の乘ずるありて、異變意外の處より起るなきを保せず、隨つて生民塗炭の苦に陷ゐり、列國の通商貿易の利益全く破壞せられて、竟に東洋の大禍亂を釀生するなきを保せざるとを、之を防ぐがためには、假令姑息いふと雖も、一時平和を彌縫して、以て眼前の無事を求むるの外あらず、暫らく無事を保つの間、徐ろに根本的解決の方途を求むるも亦妙ならずや、經世の識慮あるもの、深く思はざる可らざる也。

（五）

支那が結局分割を免かれざるや否やは問題也、支那は尙ほ土耳其の如く、世界の大なる謎也。

然れども今は斷じて分割を許すべからず、我が最高政治の目的は、支那の領土保全にあり、英國との同盟も此が爲め也、露國との協約も此がため也、米佛と相誓ひ、相聲明せるも此がため也、此等の訂約聲明の變更せざる以上、我れ豈支那の分割を許す可けんや。

吾人の望む所は、我が政府が官革兩派を媾和せしむるがため、速かに相當の措置を取るにあり、清國の事は清人をして料理せしめよと言ふ勿れ、彼等をして料理せしめば、結局は無秩序のみ、匪賊蜂起のみ、虐殺のみ、通商貿易の破壞のみ、大禍亂のみ、

徒らに列國の意向を窺ふことを止めよ、我れ宜しく斷乎たる方策を立て、列國をして之と協同せしむべきのみ、我が立つべき方策なるもの、亦唯だ列國の利益のためならずや、世界人道のためならずや。

（十二月九日稿了）

現內閣と薩摩派

（一）

帝國議會既に招集せられたる、東京は彌よ政治季節に入れり、知らす政局の推移如何、是れ稍々興味あ

る問題ならざらんや。

政界の一隅に傳說せらるゝ所によれば、今の內閣、殊に政友會は、所謂薩摩派と提携したるものゝ如し、內相原敬氏の麾下にある警保局長古賀廉造氏は、公私の關係に於て、寧ろ高嶋系統と稱せらるゝ人也、而して氏と莫逆の友なる樺山資英氏は、高嶋將軍の愛婿にして、而して樺山大將の令息也、資英氏常にいへらく、原敬氏の地位實に同情に耐えずと、既に古賀氏と資英氏とあり、原氏が革丙將軍高嶋子と握手するに便宜多きや言を持たずとす。

且つ政友會の智多星なる岡崎邦輔氏はいへらく、桂公が內閣を罷むるに方り、其の親昵の徒に多くの好地位を與へたるは、實に官權を濫用して私を濟せる也、斷して敵として戰はさる可らすと、窃かに原氏に勸むるに薩派提携、長派分裂策を以てしたりと傳へらる。

桂公が內閣を罷めんとしたりし時に執れる措置に就ては實に毀譽兩說あり、一は岡崎氏の如き議論にして、一は即ち之に反し、此等の說を以て、一種の嫉妬に過ぎずと做す、謂へらく、其の昵近する所のものの功績を遺憾なく表彰して、與ふるに不拔の地位を以てす、是れ士の死心を得る所以にして、政事家たるの能事到れるのみ、此の一事偶々以て桂公が傑出したる大政事家の證據なりと、毀譽の當否は姑らく措き、岡崎氏等か斯の如き說を唱ふるは事實にして、氏は之に由て原氏に說て桂攻擊の謀略を勸めたるが如し、茲に於てか原氏は窃かに屢々高嶋將軍を訪ひ、老來窮するも尙ほ覇心勃々たる將軍と握手し、轉して松方、樺山、山本(權兵衞伯)の諸元老を歷訪して情意を溫め、且つ井上侯をも叩きて財政上

の擁護を懇請したり、平生一種の親族として桂公への訪問を怠らざる原氏が、豫算の大問題に就て一たびも公を訪へることなく、却つて藏相山本氏と前後して、井上、松方、山本の諸老を訪へるを視るに、其の意略を推すべし、現に豫算案の最大難關たりし海軍擴張案が、意外に無事に治まりたるも、實に高嶋將軍が山本伯に强要するに、海軍部面を抑ゆるを以てしたりし結果なりといへり。

果して之を事實とせば、其の結果は頗ぶる趣味ある問題ならざる可らず、殆んど眠れる獅子か衰へたる虎かと疑はれたる薩派が頭を擡げし一事、實に政界の注目を惹くに餘あれば也。

（二）

傳者は更らに附加して曰く、政友會は一方に薩派と提携せるも、又長州派の全部を敵とするの不利なるを知れり、故に少くも其の寺内系と相離れざるの意向を有すと。

第一次西園寺内閣時代に於ける寺内伯の男らしかりし態度は、政友會の頗ぶる德とせる所にして、殊に原氏等は、是より大に伯に傾倒する所ありといふ、岡崎氏等は策すらく、來るべき次の内閣は、好むも好まざるも必らず寺内伯に由て組織せらるべし、其の時に至らば、政友會を擧げて伯の内閣を輔くべし、寺内伯にして幸ひに政友會の援助を受けば、伯と桂公との間は、自然に疎隔せらるべし、少くも其の間に冷水を挿入するの効果はあるべし、是れ桂公の勢力を殺ぐ所以ならずやと。

寺内伯が果して桂公と相離るゝも、尙ほ政友會の援助を要するや否やは疑問也、然り、大なる疑問也、然かも政友會の策士は、之を策して其の行はるゝを望むといふ、是れまた一種興味ある問題ならざらんや

（三）

傳ふるもの更に添へていふ、山本伯實は高島子の强要を悅ばず、然かも誼斷して背く可らず、故に勉强して之に隨へるのみ、心中頗ぶる懌ばざる色ありと。

政友會果して薩派と提携せる以上、次の內閣は之を山本伯に讓るを當然とせずや、山本伯素より首相たる資望あり、一びは之をして內閣を組織せしめんとは、寧ろ天下の期待する所ならずや、伯今假令之を望まざるも、少くも其の指導の下に、最も薩摩的色彩濃き內閣を組織し、由て以て海軍擴張の宿題を解決せしむるを當然とせずや。

事茲に出でずして、來るべき內閣の寺內伯のものたるを期待するは何ぞや、高島子は果して單に原氏のため栗を火中に拾ふものたるべきか、一片稜々たる俠骨のみに由て、今の內閣を扶けたりとすべき乎。

吾人は素より十二分に政友會と薩派との握手說を固信するものに非ず、唯だ原氏と薩派とは、最も提携し易き地位に在るを認むると共に、今の內閣が意外に桂公と疎遠なるを視て、稍々傳者の說に耳を傾けざるを得ざるのみ。

（四）

四十五年度の豫算案は、兎も角も無き袖振れずの主義を押通して、曲りなりにも內定したりしが如し、而して內閣は其の無能ならざるを示さんがために、竟に行政財政整理のため、十二月九日を以て一

局を新設し、其の委員を任命せり、然れども其の委員の顔觸れを視るに、結果は既に推斷に難からず。

眞に行政と財政とを整理せんとせば、殊に行政制度の如きは、根本より一大更革を加ふるを要す、然かするには、政府部内の屬僚の手に於てするよりは、政友會の手に由て、思ひ切たる斷行を爲すを賢しとす、或は妄斷に流るゝとありとするも、一切の情實行掛を排して、根本的更革を斷せんとせば、机上の空論といはゞ言へ、寧ろ政友會より提案するを妙なりとす、各省の次官局長を委員として、幾回調査するも、畢竟は若干の局課廢合に止まり、若干の人員異動に過ぎず、到底整理らしき整理を視る能はずとす、吾人は此の一事を視て、先づ所謂行政及び財政の整理なるものに失望せざる能はざるのみ、思ふに是れ唯だ西園寺内閣の殘す所の價なき置土產に止まらん。

（五）

來るべき議會は極めて平凡なるべし、海陸軍問題の如き議論盈溢すべきものは、内閣自から提案せざる以上、別段問題と爲るの理なければ也、衆議院に政友會優に絕對の多數を占む、貴族院に至ては、反對の氣勢を蔽ふべからずと雖も、暖簾と腕押しはすべからず、僅かに皮肉なる質問の續出するに止まりて、大なる波瀾を揚ぐるが如きは莫かるべし、揚げざるに非ず、揚ぐべき問題なきのみ。

故に行政財政の整理、又は議會の如き、多く問題と爲すに足らず、問題たるべきは寧ろ來るべき内閣の果して寺内伯の手に入るか、薩摩に墜つるかにあり、而して政局の推移は玆にあり、政黨の分野の如き、或は之を標的として若干の色彩變化を呈せざるや否や、吾人は主として此の方面に注目せんと欲す。

公論

人類の征服に對する自然の復讐

理學博士　丘淺次郎

文明とは自然を征服することである、火を以て隨意に物を燒き始めてより、野獸を捕へて家畜とし雜草を養ふて作物としたのも皆自然の征服であつたが、十九世紀に至つては自然の征服が急に盛になつて、鐵道を敷いて大陸を征服し巨船を浮べて海洋を征服し、近來は又飛行機を飛ばして天空をも征服するに至つた、水を用ゐて燈を點し、炭を燃やして氷を造るは素より、電波を使役して遠距離の間にも自由に通信し、エッキス放散線によつて胎内の子供の骨をも寫す、また血清を製造して微細なる病原生物を征服し、新藥「六〇六」を注射して「スピロヘーテ、パルリダ」を絶滅し得ると云ふて居る、斯くて人間は自然を征服し得たことを誇り、文明の進んだことを得意として、今後も益競ふて自然を征服せんと努めて居るのである。

然し此所に一つの疑問がある、自然は果して斯様に人類に征服せらるるのみて、敢へて之に對して復讐を企てる如きことは無いてあらうか、我々が自然を征服し得たりと思ふて得々たる間に、恰も白蟻が寺院などを喰ひ弱らせる如くに、見えぬ所て絶えず彼が仇返しをして居る樣なことは無いてあらうか、此樣な問題は今日の人類を標準として今日の世の中だけを見目前の勝利に心を奪はれて、たゞ文明を謳歌し居る人等には

恐らく胸に浮ぶことさへ無いであらうが人類の過去の歴史を考へ、下等な獸類時代から、猿時代、野蠻時代、半開時代を經て今日の有樣に達したまでの變遷の跡を探るときは別問題に對して儻に然りと答ふるの外に途は無いのである。

自然には一定の理法があつて、之を破るものは必ず罰せずには置かぬ、たとへば人間の住所なる陸地に就て考へても、森林の樹木を猥りに伐り拂つて山を坊主にすれば、雨水を一時吸收し貯蓄する自然の裝置が無くなるから、雨降の時期毎に洪水が出て、家を流し橋を落すに至る、小鳥類を濫獲して取り盡せば昆蟲の繁殖を制限する自然の働き役が無くなつて、害蟲が忽ち殖え、作物の收獲が著しく減じ、場合によつては皆無となる、また海岸の森を切り倒したために魚の望んで來る陰が無くなり、漁期にも魚が採れず附邊の町が衰微したと云ふ樣なこともある、製造所から汚物を川へ流し出すために其先の海で蝦や海苔が出來なくなつて土地の人々の產業が絕えると云ふこともある、これ等は孰れも自然の理法を無視したために自然から罰を受けたのであつて、全く自業自得と云ふの外はない、斯樣な過ちは今日まで何所でも隨分數多あつたであらう、また今後も時々はあるであらうが、之は知識の足らぬため、先見の明の無いためである故、追々同じ過ちを避けることも出來、已に過つたことは、之を償ふて其結果を取り消すことも全く不可能ではない故、人類の征服に對する自然の復讐としては最も輕い程度のものである。

生物には絕えず鍛える體部は强く丈夫になり、常に蔽ひ保護せられる所は次第に弱くなる性質がある、之は自然の理法の一であつて、寄居蟹の頭や鋏が堅いのに反し、介殼に蔽はれた腹部の皮が薄く柔かなのも其ためであるが、人間の身體も無論此規則に洩れない、然るに人間は自然を征服し、自然力の一部を隨意に使役し得るやうに成つた度毎に、之によつて自己の身體を大切に保護し來つた故、征服の重なる毎に人間の身體は弱くなつた、火を用ゐ始めたことは文明の第一步

てあつて、人類開化史の第一頁に特筆大書すべき自然の征服であるが、物を煮て食ふ様になつてからは人間の消化器は著しく弱くなつた、食物を煮て食ふ動物は人間以外には一種もないが、人間ほどに歯や腸胃の弱い動物も人間以外には一種もない、衛生の書物を開いて見ると生水は危険なれば飲むべからず、必ず一回煮沸したるものを飲用すべしなどと書いてあるが、未だ火を用ゐなかつた頃の人類の先祖は他の總ての野獣と同じく無論煮沸せぬ水ばかりを飲んで天壽を全うして居たのである故、それより今日までの間に、斯様な注意を要するまでに體質が弱く成つたのである、衣服を着して寒氣を防ぐことも、他の獣類と異なる點として人の誇る所であるが、そのため人類の皮膚は無論段々弱くなつた、人間の如くに僅の寒暖の變化によつて容易に風を引く獣は恐らく他には無からう、今になつて急に冷水摩擦を始めても到底生れて一回も冷水浴をやらぬ獣類の足許にも達せぬ、家屋を建てて寒暑を防ぎ、市街を造つて安全に住居することは總ての文明の礎とも云ふべきことであるが、そのため日夜悪い空氣を吸ひ呼吸器官が次第に弱くなつて、終には誰も彼も肺病に罹る様になつた、結核のバチルスはコッホが之を發明しない遠い昔から無論何時にもあつたであらうから或は熊の肺に入ることもあらう、又猪の肺に入ることも必ずあらうに熊や猪が皆肺病に罹つて仕舞はぬ所を見ると、肺病の原因は結核菌なりと云ふよりも、肺病の原因は弱き人の肺なりと云ふた方が寧ろ適當かとも考へられる、人間が暖房管を備へ、煽風器を据へ付けて、如何なる冬の寒さも如何なる夏の暑さも我が知力を以て防ぎ得ぬものは無からうと誇りつゝある間に、自然は之に對する復讐として日夜の別なく、人類の體質を根抵から弱くせざれば止まなかつたのである、自然の復讐は何時も斯くの如く極めて隱微に行はれるから普通の人は之に氣が附かぬが、人間の仕事の一時的、部分的、表面的なるに反し、彼れの仕事は永久的、普遍的、根抵的である故、其結果は極めて恐ろしい、而して一般の學者等が騒ぎ出す程に結果の現はれる頃

は、已に手後れてあつて、容易に回復の見込みは立たぬ、近來歐米諸國ては人種の衛生とか民族の改良とか云ふことが喧しく論じて居るが、之は長い間の自然の復讐の結果が著しく現はれて居ることに心附いたからであらう。

醫術は文明と共に進むもので、野蠻人を文明に導くには先づ醫術から持ち込むことが多い、また衛生と云ふことも開化の進むに隨つて益々重んぜられるもので凡そ一國民の衛生思想の如何を見れば其國の文明の程度を推察することが出來る。が、この醫術や衛生の進歩に對しても自然は絶えず復讐し來つた様に思はれる醫術が進めば昔助からなかつた病氣も治する様になり消毒の方法が完全になれば外科手術も次第に大袈裟なことが出來るやうになるから、一個人の命を助ける術としては誰も其進歩の有難さを感ぜぬ者は無いであらうが、扨、人類全體の生れながらの體質に向つて之が如何なる影響を及ぼすであらうかと考へると、此所にも自然は決して復讐せずには居らぬ様である、凡そ生物體には僅な傷や少量の毒物に對しては自ら之を治し、又は之に抵抗し得る性質が備はつてある、小さい切り傷や擦り傷が知らぬ間に自然と治り、少量の脳溢血や肺炎の氣胞内に溜つた液などが捨て置いても自然と吸收せられて仕舞ふ如き、又は一度輕く濟ませた病氣に對して免疫性を得る如きは其例であるが醫術的の治療には自然の回復を待つ間、單に患者を保護することゝ、患者の回復力抵抗力の足らぬ所を人爲的に加へ補ふて命を保たしめることゝが行はれる、然して回復力、抵抗力の足らぬ體質の者を人爲的に助け人並に壽命を保たしめる場合には、人間總平均の體質はそのため幾分か降るべきは無論であらう、血清療法の如きも個人を助ける術としては恐らく大成功であらうが、人手を借りて初めて漸く病毒に抵抗し得る體質の者は、生れながらにして、自然にその病毒に抵抗し得る體質の者に比して强壯の程度の劣れるは勿論である故、若し血清の注射によつて、病を治療し、又は豫防することが、廣く長く行はれたならば、一代毎に人類總體としての

健康が極めて少し宛、降るものと見做さねばならぬが、若し人間生來の抵抗力が段々減ずるとしたならば、或は未來に於て、從來人體に對して無害であつた細菌のために侵されて、新しい病氣の種類が續々增える如きことは無いであらうか、血清療法が十分に進歩し、區役所の世話も完全に行き屆いて今日は種痘、明日は實扶的里の血清注射、明後日は膓窒扶斯の血清注射、其次の日は發疹窒扶斯、其次の日は猩紅熱と下層の人民まで强制的にやらせる時世には、又名も知らぬ新しい傳染病が幾つも生じて、病氣に罹る處は却て今日以上に上る如きことは無いであらうか、此等は素より取り越し苦勞であつて、今日何れとも俄に云ふことは困難であるが、決して無いと云ふ保證は更に出來ない。

以上述べた所は人間の身體に直接に關係したことである故、前の森林を切り拂ふために洪水が出ると云ふた類とは違い、自然の復讐としては一層重い方ではあるが、之は決して防ぐ方法が全く無いではない、衣食住に就ても、今後成るべく自然の理法に適ふ樣に改め、可愛い子に旅をさせる如くに、消化器にも時々は硬い物を消化させ、他人の飯を食はすために若い者を奉公に出す如くに皮膚も成るべく浮世の風に當てゝ辛抱させ、家屋なども庭園と交へ建てゝ、餘り密集せずに常に稍新鮮な空氣を呼吸して生活し得るやうにすれば、益々弱く成り行くことを多少は避けることも出來やう、また寄居蟹の腹の皮が柔くても介殼の内へ嵌め込んで居さへすれば安全である如く、人間も身體が少し宛弱くなつたとて、之に對する手當の方法さへ備はれば直に生活に差支へる程のことはない、唯、寄居蟹が介殼を何所へも引ずり行かねばならぬ如くに、無數の生命保存需要品を絶えず備へ携へねばならず、そのため生活が非常に複雑になつて、常に多方面に注意を配らねばならぬと云ふ面倒を我慢さへすれば濟む譯である、されば自然の復讐なるものも、人間の外圍に對し、又は人間の身體其物に對するものだけならば、敢へて絶望するに及ばぬ、素より出來るだけ之を防ぐ樣に注意することは必要であつて、今後從來の過ちを再びせ

ぬことは損得の上にも自衛の上にも大切てあるが、たとひ十分に自然の復讐を防ぎ得ずとも急に危難の差し迫ることは無いから、民種改良學などを緩々と研究して理論を闘はして居る餘裕が少しは有るかも知れぬ。

自然の復讐の最も劇しく最も慘酷なのは、人間の社會生活の不條理なる點に起因するものである、之は人間の征服に對しての直接の復讐と云ふよりも寧ろ、人間の社會制度の缺點に附け込んで自然が行ふ間接の復讐とも云ふべきもので、社會の制度が今日の儘に續く限りは到底防ぐことは出來ぬ、自然には他の缺點に附け込むなどと云ふ人間らしい性質は無論ある譯はない。落花心ありと云ふのは見る人の心て、流水情ありと云ふのも眺める人の情てある、花自身、水自身には心もなく情もない、たゞ自然は公平無私てある代りに冷淡無情てある、それ故何事にても若し不條理な點があつたならば何時ても何所ても嚴重に攻め罰して少しも容赦はせぬ、されば人間の社會制度に無理な點があり、不條理な仕組がある場合には自然より罰せられることは到底免れぬ、今日の社會の制度には種々傳來的の不條理な仕組があつて、それが各方面に禍の種を蒔いて居ることは嘗て我等が一昨々年の一月の本誌に掲げた「所謂文明の弊の源」及び一昨年の一月の本誌に掲げた「人類の將來」と題する二篇に述べて置いた故、此所に再び繰り返すことは見合せるが、その結果として自然より受ける復讐は何れの方面を見ても頗る著しいものがある、之も詳しく論ずることは今回は見合せて、唯一二の例を次に述べるだけに止める、

富者は益々富み貧者は益々貧しくなる傾のある今日の世の中ては、學者が折角汗水流して研究し發明した事も唯々富者のみが之を利用して、貧者は却てその爲に更に困難に陷るに至り易い、蒸汽機關ても水力電氣ても、人間の爲し得た自然の征服としては最も立派なものであるが、後より見れば貧富の懸隔を甚だしくするために特に造られたかの如き觀がある、歐羅巴諸國て甚だしい貧民の生じたのは蒸汽機關が製造工業に應用せられて以來てある故、此結果から見ると蒸汽機關

は一に貧民製造の機關とも名づけることが出來る、水を沸かして蒸汽とし、其力で車を廻はすと云ふことだけを見ると、如何に考へても自然から復讐せらるべき因縁は無い様であるが、之が人間社會に應用せられると忽ち多數の貧困者が出來、生活の困難が始まると云ふのは畢竟社會の制度の中に何等か不條理な點がある故であらう、究理の學問が進み、自然の征服が行はれる毎に富者の財産の額と貧者の人員の數とが殖え來つたことを思ふと今後急速度を以て文明が進めばそれに隨ふて、世の中も益々六かしくなり、人間が自然を征服する度毎に恰も自然がその復讐として人間社會を執念深く苦しめるかの如き體裁を現はすてあらう。

富者が益々富み、貧者が益々貧しくなれば、富者は富貴のために自然的の生活に倦きて不自然なことを試み、貧者は生活の困難のために止むを得ず不自然なることを行ひ、孰れも不自然なる生活を營むであらうが之に對しては又自然は必ず復讐する、十八歳の女が七十歳の老人の妻となることもあれば、五十歳まで獨身で暮す男もあらうが、斯樣なことは身體の上にも風俗の上にも必ず影響を及ぼして、次代の人間の健康はその爲に幾分か損はずには止まぬ、年々花柳病者の殖えることも、其遠い原因を探れば、社會制度に缺點があることに構はずに、智慧に委せて自然を征服したからである、肺病患者が盛に增えて何所の國でも白十字社の設立を急ぐのも、精神病者が年々增えて病院の增設が必要となるのも、殺人强盜、詐欺竊盜の類が增えて監獄が悉く滿員となるのも、その遠い原因は矢張前のと全く同じく、社會制度の缺陷が自然の征服によつて急激に現はれた爲である、斯樣に今日の世の中にある疾病も罪惡も其主なる源因を糺せば皆人間自身の側に缺點が存する故であつて、自然を恨むべき筋はないが、たとひ社會の制度に如何なる缺點があつたとしても、若し人間が盛に自然を征服することをさへ爲なかつたならば、僅か一世紀ばかりの中に今日の如き有樣には陷らなかつたに違ひない、之を思へば今日の世の中が斯く六かしくなつて多くの困難な社會問題の起つたの

は、皆人間が身分をも顧みず無謀に自然を征服して誇り來つたために、彼れより劇しい復讐を蒙むつて居るのであると云ふことも出來やう、尙此種類のことは政治上にも、道德上にも、敎育上にも實に無數にある樣に思ふが、此所には述べることを略する。

さて、今日の社會の狀態では自然を征服して文明を進めれば進めるほど、自然から劇しく復讐せられるとすれば、今後は自然を征服することを全く止めて、唯々自然に從ふては如何と論ずる人があるかも知れぬが、之は素より甚だ不得策である、地球の上には數多の異なつた民族が對立して、互に隙を覗ふて居ることてある故一刻でも油斷して競爭に後れる如きことが有つてはならぬ、然して民族間の競爭には如何なる者が勝ち如何なる者が敗けるかと云へば、他の點が總て同等なる場合には自然の征服に一歩でも先へ進んだ者が必ず他に勝つ譯である故、若し研究を怠り、努力を休んて、自然の征服を務めずに居たならば、自然の復讐を受けることは或は輕く濟むかも知れぬが、その代り忽ち他の民族に征服せられ壓伏せられて、更に苦しい位置に落ちねばならぬ、されば今日の各民族は復讐を受けることは止むを得ぬと覺悟して益々自然を征服することを務めるより外に途は無いのである、蓋し、自然から如何なる復讐を受け自己の民族內に如何に困難な社會問題が起らうとも、他民族に征服せられて其虐待を受けるに比しては素より尙忍び易いてあらう、之を物に譬へれば、恰も病人が劇しい商賣の競爭に從事して居る如くて、進んて競爭に努力すれば商賣には勝つて店が盛になる代りに病を押した自然の復讐として重態に陷るは止むを得ぬ、然しながら病を思ふて競爭を見放せば忽ち零落して路頭に迷ひ餓死せざるを得ぬのであるから、之に比すれば、病は少々重くなつても競爭に勝つた方が壽命が長く保てる、今日の各民族は略々斯樣な狀態にある故、一方に社會問題の解決に盡力しながら、他方には何所までも自然の征服に務め物質的の文明を進めて、一歩でも他の民族に先んずる樣にと心掛けることが肝要てあらう。

岩倉公を論ず

池邊吉太郎

三條公の事は私はまだよく知らない。それで速斷は出來ぬけれども、或は岩倉公の功業の方が三條公のよりもエラかつたぢやないか、大きかつたぢやないかといふ感覺を持つ。公卿の中で岩倉公の方の門地は三條公よりも下であつた。岩倉公は堀川家の次男か三男で、岩倉見慶卿の養子になつた人である。岩倉家は源氏であつて、堂上では餘り幅の利かぬ方で、堀川家と同じく子爵位の格であつたでせう。いはゞまア中以下の階級の公卿であつた。然るに三條公は藤原家である。清華の家柄だ、殊に三條公の先代實萬卿は梨木神社といふ神様に祭られる程の人でなか〳〵の勤王家であつた。そして先帝に使へて隨分働いた。官も内大臣でせう。元來が大臣になれる家柄だ。其嫡子で、早くから長州派の勤王家と交りを結んで、推立てられる事になられた。そして維新後の政府で岩倉の上に立つことになつたが、あの時代はまだ門地門閥の除れぬ時代だから、重に其方からの事では有りませんか。そこで太政大臣は三條公に落ちて、死ぬる迄三條公の方が官は上であつた。又世の中でも三條岩倉といつて岩倉三條とはいはない。然し行つた仕事はどうも岩倉の方が大きい、エライと私は思ふ。年も三條よりは上で、維新前の働きも三條より早い。維新後の明治政府となつて、明治十四年の政變——即ち大隈が國會速開論をやつて、それが落ちて、伊藤の漸進的立憲政體論が勝を占めて、十年を期しての國會開設の詔勅が出た政變、あの政變まで行つた人で、明治十六年に亡くなられた。維新當時から明治政府の相談柱は何時も岩倉であつたやうだ。元來をいへば、岩倉は薩州派の勤王家に推された

人て有るが、後には長州人にも大に推立てらるゝ事となつて、此方からも柱石視された。宮中の事は分りにくいてすが、御信任が絶對的に重くて、それてからいふ事になつたてせう。日本の今日の政體を造り立てた廟堂の上の働きは、斯人が最も多く務めたのては有りますまいか。その働きの上から推していへば、明治時代の政治家の中での第一てあるかも知れませんよ。これはまア未定稿――未定論てあるが、思ふた儘をいへばさうてある。

そこて此人のことをよく調べようとすれば一朝一夕には出來ぬ。近頃岩倉家其他に殘つて居る紀錄の寫しの樣なものを見て、瀧田さんにそゝのかされて、此まて知つて居た事、覺えて居た事、考へて居た事を、調合してお話は致しますが、間違つて居るかも知れない。其邊は御免を蒙ります。元來岩倉は隨分誤解された人てある。奸物ともいはれた。自分の帷幄の中て使つた玉松操といふ一種の學者、一種の豪傑が居る。御維新の岩倉の働きの中て王政復古の當時の政體制度に關しての草案は大抵玉松が作つて上げたらしい。それて岩倉も玉松のことを玉松先生と何かの書類に書いて居る。其玉松先生にも奸雄と喝破された。三條公も岩倉公を奸物と思うて居られた事が有るに違ひない。維新前の朝廷て、文久二年に岩倉公を彈劾した國事掛の公卿ては、三條公が筆頭てす。但これは三條が岩倉を叩いたと言ふよりも、長州が薩州を叩いたと云ふ方がイヽかも知れない。長州と薩州との喧嘩は古いもので、出合ひ頭から直に喧嘩の樣だ。今でも薩閥と長閥とはどこかの隅こて睨み合つて居るといふては有りませんか。薩閥の海軍だとか、長閥の陸軍だとか言ふては有りませんか。此喧嘩の始まりは、何事に原因してるんですか、マアそれはコヽては言はぬ事にしますが、此時岩倉を奸物視したのは、長州人一般で有つた。それて此時岩倉が落ちて、島津三郎も歸國されて、京都は三條初め國事掛の公卿と長州中心の御親兵とて固めたが、其翌文久三年には薩州が會津と一處になつて、長州人を追拂つて、三條は長州人と共に所謂七卿都落を

された。一寸復讐らしくも見へて居ます。此喧嘩の仲裁役をしたのが、土州の豪傑坂本龍馬、中岡愼太郎で、薩長も此兩人に依つて聯合しましたが、三條岩倉も同じく此兩人に依つて仲直りされた。しかし中岡が太宰府に往つて岩倉の意を承けて三條に説いた時に、三條は「あの奸物と事を共にするは嫌だ」といはれたさうです。それを東久世さんが取扱ふて、やつと承知されたさうです。此承知で三條岩倉は一致して、それから死ぬる迄、仲は惡つたそうだが、終始渝ら無かつた。薩長も同様、喧嘩は喧嘩として油斷なくやり通しつゝ、今日までも渝らずにやつて居る。これが即ち藩閥の起り。此起りは土州人の坂本中岡が造り立てゝ、最も之を保護したのは、外ならぬ此岩倉公だ。藩閥の守り本尊は岩倉公で、藩閥のお守札は岩倉邸から何時も出て居る。それは又アトで言ふ所が有りませう。であるからして、今日でも絶對の非藩閥主義よりすれば、岩倉は大奸物かも知れません。が史論の上からは、そうも一概には言へますまい。逆賊徳川慶喜が公爵になる世の中となつてますからナア。

それはまア岩倉も奸物といはれる素質がありませう。といふのは、其人物を考へた所で、非常に勘辯强い人、堪忍强い人だ。堪忍袋の底の隨分深い人だ。要するに忍の字がある。忍の字は堅忍とも隱忍ともなるが、どうかすると殘忍ともなる。だから其時々の政敵の方から見れば、奸物などゝいはれ易い素質である。が岩倉といふ人は非常な卓識家である。そして主義の人である。——別に自分の主義は斯うであるとか、方針はどうであるとか公けにいふやうな世の中でなかつたから、自分でも主義の人だなどゝは思うてゐられなかつたらう。然しあの人のやつた所を一貫して見て、そして今日の言葉で評すれば、どうしても主義の人といふより外はない。これは其人の透明であり、宏達である識見から起つた自然の現示である。それに岩倉には智恵がある。才氣がある。最も辯才がある。又頗る立派な文才がある。矢張り維新前の普通の公卿と同じ位の教育しか受けて居られぬやうだが、全く天品であ

るんでせう。そして其識見にはオリジナリチィが有つて、其主義の活用は實地實勢に應ずることを心懸けるから、或時は絶對的な調和論をやるかと見れば、又其調和論の行詰りには絶對的な剛毅果斷を見せる。まア政治家として欲しいやうな資格は大分澤山持つて居らる〻。又親切でも眞摯でもある。只少し愛とか仁とかいふ所に、外の素質に比較したら、充分でない所があつたかも知れない。少くともそちらの方の德が充分發揮されて居らない。だから後には奸物といふ稱號が薄らいだに拘らず、どうも人望が無かつた。人望といふものはどうしても人情の機微に通じて、愛情が深くて、人の欲する所は、自分を犠牲にしても遂げさせてやる、といふやうな人に歸するものだ。西郷には其德が備つてゐた。アレはもう非常の人望家だ。明治の軍人や政治家の中で、今日に至るまで第一の人望家であつたかも知れぬ。其點は岩倉は西郷に及ばない。此は一大缺點である。此缺點を除いたら、政治家に欲しいやうな性質は大抵備はつて居る。今の政界の政黨の首領を務めさせても、隨分善く行つたかも知れない。私には學問が乏しいから西洋とか支那とか或は日本の古い所から、誰かを引ばつて來て、どこがどうだと比べて見る事が出來ないが、要するに古今を通じて第一等の政治家の一人であるに違ひなからうと信ずる。ステーツメン――グレーテスト、ステーツメンの一人であると信ずる。

あの人の主義はどういふ主義であつたか、と斯う訊ねて見れば、第一は王權回復主義、從つて中央集權主義。それから第二は國權の回復主義。あの明治六年の征韓論一件で、岩倉は國權などはどう成つてもよいと思つて居た樣に見へますが、それは征韓論者と手段方針の相違が有つたといふまでゞせう。處で民權論民政論は斯人の頭の中に餘程乏しい。老後に漸進的立憲主義を執られたが、明治年間の漸進的立憲主義の本家は長州人で、其中で一番豪らいのは木戸でせう。大久保でも無ければ、無論西郷でも無い。其點では木戸が一番豪らい。此木戸も亦主義の人だ。

さて王權回復主義といへば、其比の尊王主義、勤王主義と同じな樣ですが、尊王主義は古い因緣があつて德川一門の水戶が本家本元、又勤王主義は維新前の薩長、殊に長州が本家で、つまりこれは諸藩の中で言ふ事であつて、朝廷の公卿の間では本來問題でない。此仲間では尊王勤王は無論な事である。只王權回復主義が此仲間で主義とするの價値を有するのです。それで岩倉は最初から此主義を取られた。それが珍らしいかといへば、珍らしくは無い。奈良平安朝以來、英主の出る每に、皇權回復主義は朝廷に行はれ續けてあつて、封建の世の中になつて、幕府が創立されて、武臣が政權を掌握した時代になつては、それに對して先一番に王權を回復しようとしたのが後鳥羽天皇。これは大失敗て、所謂承久の亂となり了つた。その第二が後醍醐天皇。之は一度は成功して建武中興の業が出來たのであるがとう〱失敗して南北朝が出來、終ひには足利幕府が勝つて了つた。德川幕府になつてからも動もすれば、京都の公卿衆の中に一種の學者が入り込んで王權の回復熱を吹き込んだものだ。その爲めに多少の獄が起つた。極く新らしいのでは竹內式部、藤井右門の獄などいふのがある。あの時もあれに關聯して公卿達の罰せられたのが大分ありませう。德大寺さんの先代も加はつて居りませう。岩倉公の先代は無論加はつて居る。或は岩倉家では、王權回復といふ事がトラヂショナルの主義になつて居つたかも知れない。京都の公卿達は王權を回復しないまでも德川に對して、有るか無しかの尊嚴を維持したい。間よくば之を擴張したい、と少し氣のある人々はみんな心懸けてゐたに違ひない。その中で岩倉公は特に頭角を顯はして優越な地位を占める可き人といふ譯です。

岩倉公がいよ〱政治上に乘り出して來たのは公の三十四の時のやうに思はれる。安政五年、堀田備中守が日米通商條約の勅許を乞ひに京都へ上つて來た。そして盛んに關白以下の公卿達を買收して、幕府の志を就さうとした事がある。其時に堂上公卿八十八人の同志を語らつて、大原三位と相棒になつて、堀田備中守

の運動に裏を搔ひて、とう〳〵幕府の志を遂げしめなかつた。それが岩倉公の働きの初まりだ。其時の岩倉の論は矢張り先帝の御趣意の攘夷論である。攘夷論といへばひどく頑固に聞えるが國權論といへば當世式だ。今では北米合衆國が動もすれば他の某々殖民地などの本家となつて、有色人種排斥とか何とか言つて、日本に對しても維新前の返禮らしく、隨分迷惑をかけて居ますが、是も間違ひは無い攘夷論の國權論だ。理窟を付ければどうにも言へる。だからして分析して見れば、維新前の日本の攘夷論も國權主義から出たものが多いと私は思ふ。或は比々皆然りかも知れない。然し其事を話すについては今少し古い所に遡る必要が出て來た。

ペルリの來たのは嘉永六年の六月三日。それを京都に奏上したのは六月十三日らしい。七月一日には江戸に居合はした大小名をお城に呼び集めて亞米利加の要求をどうしようかと評定に及んで居る。其時の老中の筆頭は阿部伊勢守、これは極く若い人だ。老中で三十代で死んだ人だから其時はまだ三十四五でせう。三十四五で幕府の總理大臣を勤めて居るんだから、なかなかエライ人だ。が亞米利加の要求をどうするかといふ方針もなければ主義もない。是は阿部伊勢守が足らはぬからでも無い。一體徳川幕府が大間違ひに間違つてる。祖法即ち祖先以來の掟として偏僻極まる攘夷主義を執つて居る。家康公はアレて開國方針であつたんでせう。日本國中何處でも貿易をしてもよいといふお觸れを出して居ませう。そして勘合印を貰つて居るのは和蘭ばかりでなく英吉利もさうらしい。それを改めて外國の船を見附け次第追つ拂へといふお觸れを出したのは三代將軍家光公だ。寛永の打拂命令といふんだ。それを十一代の家齊公の時、松平越中守即ち白河樂翁公の老中時代に改めて、外國船が來たら一應來由を訊ねて、薪水の補給を願ひ出たら許してやるがよからうと、打拂命令を少し緩めた。それは寛政年間である。けれても弘化年度になつて又それを打拂命令に復したやうである。それから又緩めたり何かしたけれども、

要するに幕府は打拂主義である。攘夷主義である。即ち異國船見附け次第開戰主義である。偏僻至極と同時に危險千萬だ、少くも蒸氣電氣發明後の世界列國の中では、實に危險千萬だ。然るに何も鎖國方針、攘夷主義の本尊が先帝であると言ふ譯ぢやない。其大本尊は本來德川であるんだ。處が此主義は大間違ひだ、もう論はない。德川の大失策だ。こういふ政策は日本のドラデショナルの不言的不文的な國是に背いて居る。日本は昔から開放主義の國である。開國進取の國是は明治時代の新發明で無い。儒教を容れる、佛教を迎へる、哲學文學を容れて同化する。法制でも、經濟でも、何でも御座れである。交通でも、貿易でも、島國で出來るだけは行つてある。それを德川に至つて初めて此トラデショナルな大事な國是を破つて了つた。そして鎖國を以て其祖法とした。凡て祖法を骨として、古代の支那風の例典儀式を筋として、それで封建の國を治めて、幕府の政權を維持してるのである。其祖法を毀はす事は、德川を毀はす事とならざるを得ない。骨が壞たるれば、筋も無論役に立たない。其ればかりでなく、日本の封建政治といふものが、モー末の末となつて居た。元來德川の封建幕府が鎖國でゝも無ければ持つて行けぬ時候後れのもので有つて、秋の櫻の返咲だ。それが末の末へなつて居たのだから、風一ト吹てばらばらとなる可き筈だ。德川の保てる道理はどうしても無い樣です。大觀すればかうでせう。此大勢の大變化中での小變化小得失は、どうでもイヽ。が左樣いつて仕舞へば話が無くなりますから、今少し面倒でも濃かに御話します。

て德川幕府が本來鎖國の祖法といふ厄介千萬なものに縛られてるから、所謂癸丑甲寅(嘉永六年安政元年)以後何としても動けない。平時なら明宰相かも知れぬ阿部伊勢守も立往生だ。處が其時日本國中何人も夢で居たのに、只御一人頻りに非常に憂慮して居られた方が有つた。それは先帝であります、孝明天皇であります。既にペルリの來る三年前、嘉永三年十一月に幕府に御諭書が降つて「異國船渡來の風聞がある、風聞に

止まるので結構てはあるが、油斷すな、神州の瑕玼にならぬ樣、庶民安堵する樣、精々氣を付けよ」といふ御主意が見へて居る。無論先帝は英主で、御事蹟の上からいへば御自身では御不自由御不滿足の中に崩御となりましたけれども、王政復古事業の一半は既に仕遂げて居られます、又明治の御代の基礎の一部も既に造つて御遺しになつてると申したい。帝王にはよく有る癖で、非常な逆鱗の事も有る樣ですが、幕府に對し國政に對しては、隨分御遠慮勝でどうしても專制的獨斷的な御方でない。兵備防備と最初から其事ばかり御氣に懸けられてますが、御一代を通じて、是非とも攘夷といふ御思召の處は見當りませぬ。モー只日本が大事、神國が大事、即ちやはり國權が大事といふ御思召に歸着すると思ひます。此御思召からして嘉永より安政に渉りては更に非常な御憂慮。そして日本の爲と思召込まれては、自ら皇位をも抛つといふ御決心まであつた。それはアトの話で分りますが、要するに日本の爲の其時の憂慮憂虞といふものは、將軍よりも、將軍政府の閣員よりも、諸大小名よりも、何人よりも、第一等に先帝の御心の中で切迫で有つたと思ひます。其ばかりでも王政復古の先縦となるのに十分である。まして機會のある毎に、公勅密勅いろ〳〵の御差圖となつて、次第に日本の政治統治を親らせらるゝ事となりまして、――それが幕府に對しては其時の政體では無論干涉大干涉でありますが、其干涉大干涉の成功する度毎に、自然に一段々々と政權回收となつて居るから、王政復古の事蹟の大半が先帝の御代に成つて居ると申すのてす。又それが黑船處分に對してはです、朝廷の公卿並に召に應じた諸大名の輔佐何如によつて――重に三條公を首としたる國事掛並に長藩中心の御親兵全盛時代、即ち文久二年の央から同三年までの間に、放縱的に流れた浮浪的粗暴的な攘夷命令となつて居ますが。しかし其攘夷命令は今申したる御憂慮御憂虞から出たのであつて、露骨にいへば憂慮政治憂虞統治の結果です。更にそれを分拆すれば我日本を如何にせん、屈してしまうよりも日本を焦土とするが寧ろ快

いといふ國權論の絕頂に歸着する。先帝の攘夷の叡慮といふは是である。（未完）

此篇非常の長論にして、優に本誌の六十頁以上に亘るべき豫定なりしも、池邊氏の北京風患に罹られしを以て、中途にして訂正の筆を執らるゝの暇なきに至り、僅かに全體の七八分の一より掲載する能はざりしは編者の大いに遺憾とする所なり。然れども此片鱗の光彩を認められし讀者には全龍の雄姿如何ばかりなるべきかを想像せらるゝに難からざるべし。岩倉右府を中心としたる一篇堂々たる維新の大史論が、本誌の誌上に雲を捲き風を起すべきの壯觀、今よりして讀者と共に樂み觀んと欲する所也（編者しるす）

支那の革命と國際法

法學博士　立作太郎

支那の革命的動亂に際し、諸般の事項につき我國民の態度を定むるに當り、內亂の場合に於ける國際法の規則を充分に瞭解せざるべからず。國家の緊急の必要なきに、國際法の規則に違反するは不可なり、國際法の規則を誤解して、自ら必要も無き拘束を加ふるも亦不可なり。

內亂の場合に於て、外國は所謂不干涉の義務を負ひ、政府と革命軍との間の戰鬪に關係するを得ずして、其孰れをも援助するを得ずとは屢人の口にする所にして、甚しきに至りては、內亂の場合に於ける不干涉の義務は、局外中立義務よりも窮屈なりとの說を爲し、絕對に如何なる體裁に於ても一方を利益することを避けざるべからずとし、假令外國の該國に對する條約上の權利たりとも、之が履行を迫ることが一方（革命軍）を利益する結果を生ずるときは、之が履行を促すことを避けざるべからずと爲す。（有賀博士所說外交時報昨年十一月一日號四、五頁）外國に內亂起れば、直ちに所謂不干涉の義務の結果として、外國が內亂の起れる

國の政府に對して革命軍を間接に利し、政府を間接に不利益の地位に置くべき條約上の義務（例へば借款上の義務）の履行を促すを得ずと爲す如き極端說は、他に之を聞くこと稀にして、此說は條約上の權利を主張することを以て干涉と爲し、不干涉の義務に反するものと爲すものなるを以て、其の誤謬たるや言を費さずして明白なりと雖も、不干涉の義務の結果として、外國は政府又は革命軍に對し、等しく直接の援助を與ふるを得べからずと爲す說は、國際法學者の間に於ても廣く行はるゝ說なりとす。これ一國の人民は、外國の關與なく自由に其撰む所の政治組織を採用するの權利ありて、外國が內亂に於て一方を助くるは、一國の人民の此の權利を侵すことゝなると爲すなり。余も政治上の主義として、外國の濫りに內亂に關與せざるを可とするも、國際法の法理としては、多數の國際法學者が、內亂の際政府又は革命軍の孰れを助くるも不干涉の義務を破ることゝなるとする說に滿足せざるなり。現今の國際法上の權利義務の主體たるものは、一國の人民に非ずして國內法上に於ては統治權の主體たる國家に外ならず。而して國家は其の政府に依りて代表され、政府が未だ倒れざる間は、政府の表する意思が即ち國家の意思たるなり。而して干涉は、一の國家の意思に反して該國の內事に關與するものなるを以て、政府の意思に反せずして政府を援け、又は其他の方法に依り（例へば政府と革命軍との調停を試むる等）該國の內亂に關與するに至るは、干涉といふを得ず。主として歐州の學者より成る萬國國際法協會の千九百年の會議に於て、一國の國內の靜謐の回復の爲め執る處置を、外國が妨害すべからずとし、外國が叛徒に兵器、彈藥、軍需品、軍資金を供給すべからずとし、內亂の起れる國の在來の政府に反對する軍事上の遠征の、外國の領內に於て組織せらるゝを禁ぜざるべからずとする等を決議せるも、（同協會年報第十八卷二二七頁參照）內亂國の在來の政府を助けざるの義務につきては一言する所なし。これ革命軍は交戰團體の承認以前に於ては、國際法上の主體たらざるを以て、外國に對し

て在來の政府を援けしめざる權利を有する能はざるが故なり。余は一般の政治上の主義より言ふも、支那革命の特別の狀態より言ふも、我國が支那政府を援助して、革命軍に臨むが如き處置を執ることを望まずと雖も、國際法の法理論として政府を援助するは、不干涉の義務違反に非ずとする說の理あるを思はずんばあらず、而して此に特に說かんと欲するは、政府の意思に反せずして內亂に關與する方法が、直接に政府を援助する以外に於て存し、而して一國が單獨に又は他國と連合して、政府と革命軍との間に調停を爲す如きは、內亂の起れる國の政府の代表する國家の意思に反して行はるゝものといふべからざるを以て、之を干涉といふべからず。又假令政府の意思に反して行はれ、隨て干涉と名け得べき行爲たりとも、外國は自國又は自國臣民の正當利益保護の爲め、緊急の必要あるときは、國際法上の自衛的行爲として、之を行ふを得べきこと是なり。單に所謂不干涉の義務に依り、外國が全然內亂に關與するの道無しとする如き誤想を抱かざるを要す。此種の誤想は國際法の規則を誤解して、自ら必要も無き拘束を加ふる一例なり。

交戰團體の承認ありたる後は、革命軍の地位は其以前と著るしき相違を生ず。今革命軍が未だ外國に依り、交戰團體の承認を受けざる時を見るに、外國は革命軍の國際關係に於ける存在を認めざるものにして、假令事實上自國臣民の利益保護等の目的の爲め、其の領事又は不正式の代表者をして、革命軍と交涉を爲さしむることありと雖も、何等の外交上の交通を開くを得ず。又革命軍の事實上占據する地方に於ても、其の臣民に對する革命軍の命令を認めざるを得、又其國の船舶に對する革命軍の臨檢、又は拿捕等の戰時行爲を認めざるを得、外國は革命軍に對して、何等の國際法上の權利を有せざると同時に、何等の國際法上の義務を有せず。外國は內亂の起れる國の政府を以て、依然該國を代表するものと看做し、內亂前又は內亂中之と結べる條約上の權利義務に關しては、其の實際の結果が間接に革命軍を利すると、又は之に正反對の結果を生ずる

とに論なく、義務は之を內亂の起れる國の政府に對して履行せざるべからず。權利は之に對する義務履行を內亂の起れる國の政府に對して求むるを得るなり。又外國が革命軍を直接に援助するときは、政府の代表する國家に對する不干涉の義務違反となるべし。之に反し、政府の請求に應じて、革命軍に對して政府を援助する行爲は政府の代表する國家の意思に反するものに非ざるを以て、干涉と言ふを得ずして、所謂不干涉の原則を論據として、此の如き行爲が不干涉の義務に違反し、隨て不法なりと論ずることを得ず。又承認以前に在りては、外國は革命軍の權力の濫用に因る其の臣民の被害に關しても、內亂の起れる國の政府に對して賠償を求むること屢是あり。而して外國臣民が政府に援助を與へ、又は政府に兵器彈藥を供給するは法規上何等の支障あることなきも、革命軍に援助を與へ、之に兵器彈藥を供給するは、該國の正當權力の禁止する行爲を行ふものなるを以て、該行爲に對する該國の國內法上適法なる制裁を加へらるゝに當り、該外國臣民の本國は之を爭ふを得ず。固より格別に苛酷なる制裁を課する時は、本國は之を爭ふを得べきなり。又外國の船舶は、公海に於ては正當政府の軍艦に依りても、臨檢を受け又は（兵器彈藥を輸送するの故を以て）拿捕せらるゝこと無し。正當政府若し之を行へば違法の行爲にして、革命軍之を行へば外國は海賊的行爲と看做して、之を行へる者を捕ふれば嚴刑に處するを得るなり。

然るに外國が交戰團體の承認を爲せる後は、承認を爲せる國家は革命軍を交戰團體なる國際法上の交戰權の主體と認め、戰爭に關して、恰も國際戰爭に於て、交戰國が有すると同じき戰時國際法上の權利義務を之に認むるに至る。隨て之と不正式ながら外交上の交通を爲すの必要を生ず、而して承認を爲せる外國は、中立國の地位に立ち、交戰團體に對して中立國の國際法上の權利を主張すると同時に、之に對する中立國の國際法上の義務を自ら認むるに至り、正當政府に對して援助を爲すは、革命軍に對する中立義務違反となり、

假令承認前に締結せる條約に本づくも、外國政府は戰鬪上政府を利益すべき直接の援助又は金圓若くは兵器彈藥の供給を爲すときは、革命軍の交戰團體に對する中立義務違反となるなり。又革命軍は、政府との戰鬪に於て、一の交戰國の有し得べき戰時法上の權利義務を有するを承認國に依り認めらるゝを以て、其の實際上占據する地方に於て、承認國臣民に對しても有効なる命令を發する權力を認めらるるのみならず、公海に於ても、承認國の船舶に對して臨檢、捜索を行ひ、戰時禁制品を掲載する承認國の船舶を拿捕し、戰時禁制品を捕獲物と檢定して沒收し、又（主要なる諸外國に依り承認の行はれたるときは）實効ある封鎖を、在來の政府の權力を有する地に對して設定するを得るに至る。而して承認後は承認國は、其臣民の革命軍の權力濫用に依る被害につき、革命軍の交戰團體に對して賠償を求むるを得るも、在來の政府に對しては之を求むるを得ざるに至る。（在來の政府に依る交戰團體の承認の効果は繁を避くる爲め此に述べず）

然らば外國が革命軍を交戰團體として承認し得るの時期如何が問題とならざるを得ず。簡言せば革命軍が(1)政治上の目的を有して、在來の政府に對して事實上戰爭を行ひ(2)自ら別に政府を組織して、一定の地方に於て事實上の權力を行ひ、其の地方の人民をして其の命令を奉ぜしめ(3)且つ其の戰爭に於て、戰時法規の違反を行はざる等の資格を備へたる場合に於て、(4)承認を爲す外國が、自己の利益保護上承認を爲すの必要を有する時期に達せる後は、外國は其の欲する所に從ひ、承認を爲すべきや否やを決するを得るなり。

或は「諸外國が革命軍に交戰權を認むると同時に又は直ちに其の後に於て獨立を認むるは其の權利なり」とし、「已に交戰權を認めながら、獨立を認むることを躊躇するは畢竟從來の政府に對する斟酌より起ることなり」とし、「純然たる法律上の見地よりして考ふれば革命軍の政治組織整頓するを待ちて、直に之を獨立國と認むるも何等不可なるものなし」と爲す說あり、（有賀博士說外交時報十二月一日號。一頁乃至十頁）此說に對しては三個の批難あり、(1)第一の批難は國家獨立

の承認の時期に關する現實國際法の規則を無視することと是なり。現實國際法の國家承認に關する規則に依れば、內亂に於ける革命軍が、本國より分離して別國を成さんとする政治上の目的を有すること分明なる場合に於て、在來の政府に對する獨立戰爭が、已に實際に於て終局せりと認め得べきの狀態に在りて、在來の政府が最早革命軍の占むる地方を恢復するの望なきに至りたる時に達するに非れば、外國が國家の承認を行ひ得べからずと爲すに在り。假令革命軍の政治組織整頓するも、獨立戰爭が實際上終局せりと認め得ざる時期に於ては、外國が獨立の承認を行へば、在來の政府に對する不法の干涉行爲となるべく、在來の政府の承認國に對する宣戰の原因となるべきなり。(例へば一七七八年に於ける佛國の合衆國獨立承認は、英佛間の戰爭の原因となれり。)(2)第二の批難は、國家として承認を受くる資格を具ふに至らざる團體につき、特例として交戰團體として交戰權の主體たるを認むる現實國際法上の成例を無視せること是なり。(3)第三の批難は、革命軍につき其の政治上の目的が、在來の政府より分離して一國を成すにあるか、又は別國を立つるを目的とせずして、在來の國家內に於て在來の政府を倒して、新政府を立つるを目的とする乎を區別せずして、交戰權を認められ得べき革命軍は、總て政治組織が整頓するときは、直ちに之を獨立國と認め得べしと爲せることと是なり。交戰團體の承認に關しては、革命軍の政治上の目的が別國を立つるに在ると、單に在來の國內の在來の政府を倒し、新政府を以て之に代ゆるに在るとを區別するを要せずして、共に上文に述べたる條件の具はれる場合に於て、承認を行ひ得べしと雖も、國家の承認に至りては之に異なり、革命軍が別國を立つるの意思なきに當りて、他より之を別國として承認する如きは、寧ろ奇怪に非ずや。支那の革命軍は、十月十三日漢口領事團に宛てたる照會文に於て、中華民國軍政府の名を用ゐたる如く、其中に國家の三要素已に備はるを說けるものゝ如きも、革命軍が現時の支那國より分離して、國際法上別箇の人格を有すべき一國を新

に立つるの政治上の目的を明白に有するものに非ずして、寧ろ現時の支那國內に於て、滿洲朝廷を顚覆し新制度を行はんとするに在るもの丶如く、十一月四日付の革命軍の宣言書の如きも、此の趣意に解すべきを以て、支那の革命軍を別に國家として認むべきや否やの問題は、今日の狀態に於ては起り得ざる所なり。十月十三日付の照會文が、交戰團體の承認と國家の承認とを混同せるものなること明白なり。而して若し外國が單に革命軍の政治組織の整頓せるの故を以て、直ちに國家として之を承認することあらば、國家の承認に關する現實國際法の規則を無視するものにして、これ國家緊急の必要なきに、國際法の規則に違反するものと言はざるべからず。

最後に、內亂に於て外國人の受けたる損害に關する責任につき一言すべし。左に述ぶる三の場合に於て、內亂の起れる國の政府が損害賠償の責任なきは言を須たず

(イ)內亂の起れる國と損害を被むりたる外國人の本國との間の條約に依り、一定の場合には損害の賠償に任せざるを約し、而して被害が條約の定むる場合に該當する時

(ロ)損害が之を受けたる者の重大なる過失若くは內亂の起りたる國の政府に對する抗敵行爲に因り、又は該國國內法上の禁令に違反し、若くは國際法に違反する行爲に因る時

(ハ)損害を受けたる者の本國が、交戰團體の承認を行へる時又は在來の政府が交戰團體の承認を行へる時(此等の場合には政府は革命軍の行爲に因る損害に關して責任を帶はざるに至る)

此等の場合以外に於ても、往時の學說は內亂の場合には不可抗力を名として、政府が絕對に無責任なりとする原則を立てたるが、南米諸共和國に於て、擾亂絕へず外國人の被害頻りに起るに及び、絕對無責任の原則の弱點の露出するに至り、內亂の場合に於ける外國人の損害の賠償に關して研究行はれ、少くとも次の五の場合に於ては、內亂の起れる國の政府が外國人の損害につき賠償の責任あること、廣く認めらる丶に至れ

り。（此等の場合につき余は別に議論を有すも此には通說を紹介するに止む）

（一）國家が國際法上の義務の一たる、其の土地に在る外國人の安全を確保するの義務を缺ける時（國家は特に外國人たるの故を以て之を害するの行爲又は外國の公使館を侵害するの行爲の行はれたるときは救濟を與ふる義務あり）

（二）國際慣例に反して、外國人に有害なる防禦手段を講する時（例へば一港の封鎖又は閉鎖の正式の豫告を與へずして外國船舶に對して出入を禁じ又は革命軍に情報を傳ふるを恐れて其港に於て外國港に行かんとする外國船を抑留する等の權力の濫用は賠償の責任を生ず）

（三）國際法上、戰時に於て始めて行ひ得べき行爲を、內亂の際に於て行ふ時（革命軍が未だ交戰團體として認められず隨て國際法上未だ戰時たらざるに政府が海上に於て外國船に臨檢し兵器彈藥を輸送するの故を以て之を拿捕し又は革命軍の占據する港灣に對し封鎖を行ふ時等に於て賠償の責任を生ず）

（四）政府の官吏が不必要なる權力の濫用を爲せる時（專權的なる外國人の逮捕、外國人の財産の破壞又は差押、外國人の不法の拘禁等に關して救濟を與ふる義務を生ず）

（五）未だ交戰團體の承認なき場合に於て、革命軍が權力濫用の行爲を爲せる時（革命軍の權力濫用の行爲につき政府が責任を負ふべしとすることは一八二六年希臘の動亂の際英國政府の主張し一八三四年メキシコ革命の際合衆國政府の主張し一八七三年ヴェネジュラ革命の際合衆國政府の主張せる所なり）

（十二月三日稿）

行政整理と税制整理

本多精一

行政整理と税制整理とは、古き懸案であつて、國民一般の輿論であつたに拘らず、今日まで之を行ひ得なかつたのには、凡そ二つの理由がある。其一つは、行政整理税制整理が國民の輿論であるとはいへ、當局者側から見れば未だ之を決行する必須の場合に立至らぬこと、即ち當局者は遣繰りに重ぬるに遣繰りを以てし、外債に次ぐに外債を以てして、苦しみながらも猶彌縫の餘地が存して居つたが爲めに、どうしても之を

決行しなければならぬといふ必須の場合に立ち至らなかつたのである。又他の一つは、從來民間でも行政整理税制整理を唱へ來つたけれども、其根本の方針に至つては、之を唱へ來つた人間にもまだ漠然として居つて、いはゞ只政府に對して要求せんが爲めに要求したといふ風があつた。從て其聲の大なる割合には其實行を見ることが出來なかつたのである。要するに以上の二つの原因が一所になつて、行政整理税制整理といふ事が今日までは全く空論の觀を呈した。がいよ／＼現内閣は其財政緊縮方針を擴張して、明治四十六度からは行政整理財政整理を行はうと言明して居る。若し果して之を行ふの誠意があるならば第一の要求として、先づ此等の整理に關する根本の主義方針と定むることが先決問題と思ふ。

即ち先づ行政整理について之をいへば、只官吏の數をいくらか減らすとか、或は小さな局課の廢合などを行ふとか、或は現在の制度組織の下に於ていくらか冗費を節減するとかいふ事であるならば、之は徒らに勞多くして其節減の金額が少いのみならず、根本の方針を定めずして枝葉の小事にのみ着手するの結果は、却て種々の情實が纏綿して來て、其効果が甚だ薄いものとなる。夫れ故に行政整理を行ふには先づ第一に其根本方針を確立することが必要である。

然らば根本方針とは何かといふに、我々の考では、先づ今日まで中央政府が自己の任務と認め來つた所の仕事の一部分を割いて、或は之を全く府縣に委任すると同時に、又或部分の仕事は全然政府の職務外に置いて、民業の自治に任かすといふ事が、今日の時代の進歩に伴ふ當然にして必要なる措置ではあるまいかと思ふ。今一二の例についていへば、彼の農商務所管の事務の如きは、最も此要求に當て箝るものであつて、民業の組織が已に充分に發達したる今日の如きに於ては、中央政府は從來の統一主義或は奬勵主義とも稱すべき方針を捨てゝ、出來得る丈け民業の自由を許すことにしなくてはならぬ。例へば諸會社の監督或は取引所の監督の如き農商務省に於て一々之を統轄せずと

も、之に關して必要なる監督事務は、全然之を各府縣に委任して了へば、中央政府の行政事務は其の爲めに頗る簡單にすることが出來やうと思ふ。或は一省内についで之をいへば、以上の方針によつて、中央政府の事務の一部を地方廳に委任し或は民業に任かすといふ方針を採れば、農商務省内に今日の商務局と工務局とを併立さする必要もあるまいし、場合によれば商も工も一局として之を保存する必要さへも全然無くなつて了ふかも知れない。又農商務省以外の省についていうても、桂内閣の時代には、大藏省には主税局の外に、新たに關税局なるものを設け、遞信省には貯金局、電氣局を設けたのであるが、此等の局は事實上左程必要ないものであることは政府部内の人と雖も承認して居る所である。夫れ故に此等の各局の大併合を斷行して、例へば大藏省の關税局は之を主税局に合併し、國債局は之を理財局に合併し、又他の省については遞信省の貯金局や電氣局、内務省の神社局の如き、此等の一局として存在する必要のないものに對して大斧鉞を下せば、中央政府の行政事務を簡單にする根本方針と相俟つて、少からぬ行政費の節約が出來るのである。

此場合特に一つの問題とする價値のあるのは、桂内閣の時に新たに產れたる拓殖局の存廢如何である。或者は拓植局を一層擴張して之を拓殖省となし、之を儼然たる一省としたいといふものがあるけれども、今日の實際に於ては拓殖局なるものは、只臺灣、朝鮮、滿洲等に關する拓殖事務の書類を取扱つて居る位に過ぎないのである。夫れ故に拓殖局が我國の拓殖方針の根本を案出して殖民地を支配するといふ狀態にならない以上は、此一局を特に保存しなければならぬといふ必要がないやうに思はれる。要するに一局一課の存廢は行政整理に於て寧ろ枝葉の問題であつて、其根本に於ては、中央政府が今日の政府萬能主義を放擲し、民業の自由主義を尊重し、又國民の自由活動を出來得る丈け多く承認するといふ方針を確立せなければならぬのである。さすれば枝葉の問題は自ら解決さるゝことと信ずる。今日我國に於ける行政思想の根本的の缺點は

何事にも劃一を尊び、統一を期するといふ事であつて、此點については所謂官僚政治家なるものは特に重きを置いて、軍隊組織を其儘に移して行政組織の上に施さんとする傾向がある。是に於てか行政組織は年と共に益々複雑を加へ、行政費は益々增加すると同時に、民業の自由、國民の自由活動は行政組織の複雑につれて其範圍益々縮少さるゝのである。夫れ故に此根本思想を排斥して行政組織の簡易を期するのは、啻に行政費を節減する上に於て効果あるのみならず、同時に民業の發展、國民的自由活動の發展を招ぐ上に於て無形の効力著しきを信じて疑はない。

以上の行政整理を期する上に於て尚一つ行政費節減上に注意すべきことは國庫補助金の整理である、今日の狀態では國庫の補助金は特殊會社に對する補助金と地方公共團體に對する補助金との二つに大別することが出來る。前者に屬するものゝ中では、彼の南滿洲鐵道會社の如き、東洋拓殖會社の如き、日本郵船會社の如き、大阪商船會社の如き特に其著しきものであるが、此種の補助金は果して止むを得ざる國家の必要に屬するや否や已に一の疑問であるのみならず、此等の諸會社が其篤き補助金を果して正當に消費しつゝありや否やすらも、亦一つの事實上の疑問となつて居る。蓋し此等の補助金は多く當事者の運動或は政治上の情實によつて與へられたものである事は、今日に於ては殆んと公然の秘密であつて、現に南滿洲鐵道會社の如きは、世間からは一の伏魔殿と噂せらるゝ位である。東洋拓殖會社の如きは創立以來今日まで何事を爲して居るかといふ事さへも國民は知らん位の狀態であつて、而かも少からざる政府の補助金に浴して居る。又汽船會社の如きも政府は只情實によつて保護金を交付して居るに止り、例へば日本からサンフランシスコに至る航路にも又シヤトルに至る航路にも又タコマに至る航路にも各々補助金を與へ、同じ米大陸に行く航路に只汽船會社が違ふといふ事の爲めに別々に保護金を與ふといふが如き、一個の會社から見れば特殊の恩典であるが、國家の海運政策の大局から見れば、此等の保護金

は、當然之を整理する必要のあるのは言を俟たないと信ずる、

以上の見地より現在中央政府の年々支出する保護金を整理するならば、此保護金の整理によつても幾分か今日の行政費節減の目的を達することが出來る。而して第二種の國庫補助に屬する地方公共團體に對する補助に至つては之を中央及び地方の税制整理と相待つてめ初て之が整理を期することが出來るのである。

從來税制整理といへば政府も國民も一に國税の整理のみを説いて、或は三税廢止といひ、或は所得税の改正といひ、或は地租輕減といひ、專ら國税のみに着眼して其整理を期して居るけれども、一度地方税の現狀に着眼するならば、税制整理の必要は啻に國税にあるのみならず、同時に地方税に於ても少からざる程度に於てあることを發見する。それて今後の税制整理を談ずるものは、國税及び地方税を一括して之が整理の策を講じなければ、現代の要求に適切なることを得まいと思ふ。即ち今日府縣市町村の一年の經費は已に二億圓を超え、府縣税、市税及び町村税として徴收せらるゝ所の地方税の總額は已に一億二千萬圓以上に達して、此地方税の負擔は全國を平均すれば一戸平均約十五圓、一人平均約三圓に達して居つて、國税として負擔して居る所の税額の四割乃至五割の多きを占めて居る、夫れ故に單に國税に於て一の通行税を廢したり、或は所得税として徴收せらるゝ國税に多少の輕減を試みても、此地方税の負擔に對して何かの整理を試みざる以上は、國民の實際負擔する所のものは、税制整理の聲の大なる割合には左程の輕減を見ることなからうと思ふ、特に此地方税の税源は何てあるかといふに、其大部分は國税の附加税であつて、所得税、營業税、つ地租の附加税を初め、市町村税には府縣税の附加税あて、今日の地方税は事實上附加税主義によつて成立つて居る狀態である。而して附加税には法律上附加の限度があるからして、地方公共團體は或限度以上には地方税を增徴することが出來ぬのである。而して附加税以外の地方獨立税は如何といふに、是れ亦た今日の狀

態にては已に殆んどあらゆる税源を獵り盡して、各地方の雜種税の如きは、今日にては全國を通じて殆んど八十有餘種の多きに達して居る。此故に府縣市町村は一面に於ては附加税の制限によつて其税源を束縛せられ、他の一面に於ては獨立税源の缺乏によつて、其税源を束縛せられて居る狀態である。而かも府縣市町村の經費は年々歲々膨脹して今日已に二億を超えて居る狀態であるからして、地方債の額も勢ひ著しき程度に達し、今日にては凡そ一億七千萬圓にも上つて居る。而して此地方債すらも非常に高き利子を附しても其實行を見ることが出來ぬ狀態であるからして、今日の地方財政は一口にいへば、殆んど行詰りの有樣であつて、其苦しき程度に於ては地方財政も中央財政も毫も變りなき程である。

是に於てか府縣市町村は年々あらゆる口實を設けて中央政府に對して國庫補助を要求し、或は水道の布設の爲めに、或は港灣の修築の爲めに、或は道路の修繕の爲めに、種々の名義に於て中央政府に國庫補助の請願を企てた。國庫補助の總額は今日に於ては年々五六百萬圓の支出を見る樣な狀態である。斯くの如くにして地方公共團體は僅かに其財政を彌縫し、多少の新事業を計畫して居る。而して之が爲めに地方民の負擔しつゝある租税は前述の如く今日已に一億二千萬圓の上に出てゝ、其國債として負擔するものゝ四割乃至五割は地方税として徵收せらるゝ狀態である。而して此地方税の負擔が地方民に對していかに苦痛であるかといふ事は、年々其滯納者の增加と滯納金額の增加が著しく進む統計について見ても之を知ることが出來る。

夫れ故に一口でいへば、今日中央財政に整理の必要があるならば、同時に地方財政にも整理の必要がある。國税に整理の必要があるならば、地方税にも同時に整理の必要がある。それで已に税制整理といふ以上は其税制整理の着眼は、國税及び地方税を一括して之が整理の途を立てなくてはならぬ。然らば其途を立てるには如何なる方針を採るかといへば、自分の見る所によれば、先づ其根本に遡つて、現時の地方税の方針とす

る所の附加税主義を廢するといふ事が第一の急務なりと思ふ。之を廢するには今日の地方公共團體の經費を節減し得る方針を立てなくてはならぬ。如何にして之を節減するかといへば、第一の問題となるべきものは今日の市町村の負擔する所の義務教育費の問題である。義務教育費は現在市町村の經費の最大部分を占め、町村に至つては其經費の八割乃至九割は教育費の爲めに支出する狀態である。而して義務教育費は、就學兒童の增加につれて年々增加する一方であるからして、此教育費の爲めに市町村は一方には借入金を以て學校を建築し、一方にはあらゆる税源を獵つて義務教育に關する經常費を支辨しつゝある狀態であるも、實際市町村の財政は限りなく增加する所の教育費を永久に供給する能はざるは明かなる形勢である。夫れ故に地方財政上の問題としても又國民教育上の問題としても中央政府は此形勢を傍觀して居るといふ事は出來ないと思ふ。現に英國の如きは初等教育費の約半額は中央政府に於て之を支辨し、他の半額は地方費を以て之を支辨する。佛國の如きは初等教育費の約七割は中央政府の支辨に係り、普魯士にても約四割は中央政府の支辨に屬する狀態であるのに、獨り我國に於ては義務教育費の全部が市町村の負擔となつて、而して市町村は右の如き苦しき財政上の境遇に陷つて居る。夫れ故に我國にても又義務教育費に關して中央地方分擔の方針を採つて、例へば義務教育費中の教員の俸給丈けにても之を國庫の負擔に移すことが出來るならば、之が爲めに全國の市町村は一年約三千萬圓の經費を節減することが出來る勘定となる。而して約三千萬圓の經費を節減し得れば、今日現に存在して居る所の各種の國税附加税は全然之を撤廢し得るのみならず、更らに進んで府縣の營業税の如きも雜種税の如きも幾分か之を輕減し得べく、又更らに進んで今日中央政府より得る所の五六百萬圓の國庫補助金も其必要を見ずして地方の財政を處理し得べき計算となる。此點にまで整理の歩を進むれば、假令國税に於て輕減を見ずとも地方税の負擔は現時に比して殆んど三割ばかりを輕減せらるゝ勘

定となるからして、國民負擔の上に於てそれ丈けの著しき結果を見ることが出來る。只義務教育費の一部を國庫に於て負擔する場合に於ては、國庫の財源如何を氣遣はるゝは當然であるが、國庫が假りに三千萬圓の教育費を分擔するとしても、此三千萬圓の經費は、現時の行政費を五分乃至六分ばかり節減し得るならば出て來るのであつて、中央政府が一度前に言ふが如き行政整理を根本的に斷行する方針さへ決定すれば、現に五億餘の行政費中より凡そ三千萬圓の經費を節約し得るは容易の業といはなくてはならぬ。啻にそれのみならず我々の希望する所は更らに多くの行政費を節約し、一面には地方教育費の分擔によつて地方税の輕減を計ると同時に、他の一面に於ては其餘を以て進んで國税の整理の財源に供したいのである。而して國税整理中何人にも最も多くの利害關係を有するものは、直接税に於ては所得税であつて、間接税に於ては鹽專賣を假裝せる鹽税である。此二者は恐らく國税整理の場合に當つて財政當局者の第一に見逃すべからざる所であると信ずる。

以上は行政整理を出發點として國税及び地方税の整理並びに其財源について研究したのであるが、之と同時に税制整理の財源は、今日の財政事情の下にあつては、之を彼の減債基金に求むることが出來る。現時の減債基金の制度は日露戰役後戰時公債の激増したる結果、速かに此戰時公債を償還して以て日本の財政の信用を高めねばならぬといふ議論からして、現行の國債整理基金特別會計法が出來たのであつて、此法案の出來た結果、政府は年々一億一千萬圓づゝ基金を戰時公債の元利償還に充てねばならぬといふ義務を負うたのである。それで公債の償還といふ事は他の財政事情如何を省みずして單に償還がよいかわるいかと論じたならば、償還の償還せざるに優ることは固よりであるが、實際の財政策として之を見る場合に於ては、比較的重要なる目的の爲めには公債償還の財源に手を掛けなければならぬ場合も固より認めなければならぬ。特に減債基金制なるものは英國などに於て著しき失敗

の歴史があるもので、一面法律の結果年々償還の爲めに巨額の金を差引き、一面國庫の必要上借入金をなし、或は遣繰りをなし、大いに財政の紊亂を來たしたのである。我國の減債基金制の結果は恰度此失敗の歴史を反覆するに過ぎずして、減債基金法があるが爲めに政府は今日まで無理な外債をも起し、又國庫の遣り繰りをも重ねて以て今日に至つたのである。故に今日の實際は減債か非減債かの問題にあらずして、減債基金法の存續によつて國庫の遣り繰りを繼續するか、若くは減債基金法を廢して國庫の遣り繰りをも止めるかの問題に歸着するものである。而して財政上の遣り繰りを以て健全なる財政策と認むることの出來ないものは、現時の減債基金法に對して之が存續を希望することの出來ぬのは當然の論理的結論である。故に今日年々五千萬圓づゝ國債を償還することを罷め、其一部は鐵道費の如き從來國庫の遣り繰りによつて支辨し來りたる必要なる經費に充て、他の一部は之を行政整理によつて生ずる財源に併せて、税制整理の財源に供するといふ事は當然の説であると思ふ。桂内閣は其成立の初め我國債相場が非常に暴落して居つたが爲め、之を救濟せんが爲めに假りに國債償還に全力を盡したけれども今日となつては國債相場は最早や桂内閣の政策を繼續する必要を認めざるのみならず。今日の財政狀態を見るものは恰かも桂内閣が國債の下落に驚きたるが如く、國民負擔の過重なるの事實に驚かざるを得ざる筈である。世間或は國際相場の維持と國民負擔の輕減とは兩立すべからざる希望なるが如くに思ふものがあるが、實はさうでない。若し租税の輕減によつて國民經濟の根抵が堅實に培養されたならば、租税の收入は、減税の爲めに却て永い間には增加すべきが故に此場合には政府は年々の剩餘金を以て國債償還の財源に供することが出來る。今日の如く國債償還にのみ全力を投じて居れば、租税の負擔は何時までも輕減せらるゝことが出來ぬ。其結果は租税の徴收額が今後却て自然減收の勢を示さゞるを得ぬことになる。現に來年度の豫算に於て現内閣は今年度に比して百餘萬圓の減收あるもの

と見積つて居る。之れ全く民業不振の事實に基く結果であつて、民業の不振は畢竟するに租稅の負擔が重きに過ぐる爲めである。故に此趨勢を逆轉して先づ力を租稅の輕減に用ひ、而して租稅の輕減によつて民業の繁榮を期すれば、租稅の自然增收が自然にあらはれ來るに相違ない。而して此場合に於ては政府は租稅の自然增收による剩餘金を以て安心して國債を償還することが出來るのである。

要するに國債償還は國庫の剩餘金を以て之に充つるを原則とすべきであつて、今日の如く一般會計より先づ五千萬圓以上を國債償還の爲めに書入れとなし、而して最早や財源の餘す所なきを理由として、租稅の輕減に其手を觸れないのは、結局政府の財政策としては自殺的行爲であつて、租稅收入の多からんことを欲して而して却て自然減收の勢を助長し、而して一面に於ては國庫の遣り繰りをして底止する所を知らざらしめるのである。是れ實に非常なる愚策といはなくてはならぬ。一言にしていへば、減稅と減債とは兩立せざる政策にはあらずして、減稅の結果は即ち減債となる。要は只減稅を先きにして減債の財源を涵養するにあるのである。當局者以て奈何となすか。

現代の英國

文學博士　上田敏

專門特殊の學術技藝についてはいざ知らず、一般に今の日本人が西洋文明を語る時は、英米の思想感情、氣分、考へ方を土臺としてゐる。單純なる概括論に安じる人々は、佛蘭西の精神を單に急進極端に走るもの、

獨逸の氣質を徒に細微煩瑣に陥るものと速斷して、かの常識の國、實行の民、英米の文化には健全、中庸、穩和等あらゆる平時の美德が具はつてゐるとして、之に謳歌する。今日中年以上の教育ある日本人は、其各專門とする一事についてこそ歐州大陸國の研究や結論に負ふ所が多からうが、少しく普遍性を帶びた社會上人生上の諸問題に立入つて、其意見を叩くと、西洋文明の中で、英米殊に英國の思想や狀態を以て、吾等の參考とし、模範ともす可き所謂健全のものとして推奬する。風俗、習慣、政教、文學等を論じる時、西洋ては云々といふ其西洋が多く英米であるのが普通だ。甚しきに至つては英語文明の他、西洋に之と匹敵す可き異彩ある文化の存在をさへ知らない人もある。

言語は文明を紹介し理解せしめる肝要な媒介物である。十六世紀乃至十七世紀、文祿慶長の頃、日本は葡萄牙、西班牙、伊太利亞、また羅甸の語に依つて、始めて西洋の文物に接し、德川の中葉には和蘭陀語を通じて、天文地理醫藥工藝の一端を窺ひ、幕末に至つて終に近代の國家と交通した其時、當時の諸强國、英米露佛等の語が漸く新時代の人に學ばれたが、貿易と傳道と海運との盛なる爲、英語がやがて卓絕した勢力を振ひ、明治初年獨逸帝國の勃興あつて、急に獨逸語を學ぶ人も生じたが、それは多く軍事と醫學とに止まつて、新教育を受ける者の一般はとにかく英語を學ぶ事になつてゐて、今日の中學教育でも、これを唯一の外國語として教習させてゐる。今日の教育ある人士が親英親米の傾向を持つのは當然、第一まづ每朝通讀する新聞の記事からして多少英語を通じて報道された種だ。

海外電報は多く路透に由り、英米をはじめ海外民心の趨勢を知るに倫敦タイムスを讀むのが、日本言論界目下の狀態である。獨佛の有力なる諸新聞の言論はさほど廣く吾々の眼に觸れないし、路透以外の電報通信から來る報知も分量が少いとすると、或は宇內大勢の唯一面のみが傳はるのではないかといふ虞もある。其上海外一般の事柄に關する智識と判斷とを常に英書に

のみ仰いでゐれば、自然、今日の文明に對して、多少英米人のやうな態度を執るに至るのは免れ難い、少くとも少年時代に學んだ英米の書籍或は今も習慣として通讀する英米種の多い新聞雜誌等から無意識の感化を絕えず受ける。かくいふ論者とても實は始めに英語を學んで西洋の文明を窺つたので、殊に英國の文化に對しては今も敬愛の情を抱いてゐるが、だんだん考へてゆくに、どうも世界文明の一面にのみ拘泥して、永くそこに囚はれてゐるのは望ましく無いと思立つて、他の文化も參考して見たくなつたが、まづ英語の文明もなほ一應稍進んで研究して見ると、第一に氣が付いたのは、世人が一般に信じる英人の保守思想や常識が、さほど根本的永久的のものでなく、隨分思切つた非凡の奇人や夢想家が英國の古今を通じて活動してゐる事である。政治上經濟上の革命は大陸の諸國より數世紀も早くこゝに實行され、獨創にして大膽なる言論も常に早くこゝに唱道され、それらが皆後に至つて、大に他國を動してゐる。歷史と地勢とに依つて、日耳曼の精神と羅甸の文明とが微妙な融合を遂げた英國の特色は、只徒らに前代の道を變へないといふ保守氣質では無く寧ろ文明の變遷に調子よく合はせてゆく巧妙なる適應である。羅甸の文明は明晰なる理路を履んで進み常に論理を重じる、理知の法則が其進行に方針を與へてゐる。英國の文明は理知のみに偏せず、又敢て理知を斥けず、唯時に應じて、左し右し絕えず生活に利ある道を辿つて進むのである、故に時として苟も人生に利ありと見れば、前代の尊重する習慣も理論も、何等の愛惜なく破棄して顧みない事もあつて、此時英國の天才は衆に先じて政治上、思想上に破天荒の意見を發表するのが古來の風である。かの常識の美名に隱れて根本の思索を避け、健全、中庸を標榜して、實は生命を失つた舊思想に安じる卑怯の態度は、眞に英人の精神を解する者と言へない。英人の氣質はもつと雄健である、時として矯激なこともある、唯、明快暢達の風よりか濃厚にしてやゝ執拗の趣があるから、表面に顯はれねばかり、さりとて思想の渦卷は水底に涌出てゐ

る。

英國氣質を以て呑氣な平穩なものとするのは恐らく皮相の見だらう。概して柔和になつて來た數世紀の風俗もいまだに、かの陰欝なる北人の特性を沒却するに足らぬ。英人が人生の幽暗なる方面について先入見を有つてゐる事は、文學の上によく現はれてゐるので、ビオウルフにもハムレットにも、實際の人物ではバンヤンにドクタア・ジョンソンに南歐淸明の國土では想像もつかぬ深刻な氣分がある。陰氣な風で歡樂に耽ると昔フロアサルが評した言葉が、まだ通用すると思ふのは、大陸のさかり場で英國の士女を親しく見た者の感じる所だらう。英人の一見遲鈍なる外面の下には思ひがけない感情の働が潛んでゐて、どこか重々しい威嚴を全體に附加へる。

かう考へて來ると、いかにも一般の說にわざと反對したやうな奇論（パラドクス）に聞えるが、英國の歷史や文學を研究して見ると、どうもさう思はれる。然し何故世人は英國を以てあゝも穩かな常識一點張の國と思つて了つてゐるかといふに、多分、英國の一時代だけを取つて、輕卒な概括論をするからだらう。其一時代とはヸクトウリヤ中期の事である。此一時期に全盛を極め、今もなほ惰力を有つてゐる一般の思想が、英語といふ路筋を傳つて新日本最初の人々に感化を及ぼし、いつまでもまだ英國氣質そのものと誤解されてゐるのだ。俗に所謂英國風とは、千八百六十年乃至八十年、即ち萬延元年より明治十三年頃に全盛を極め、其後漸々變化しつゝも今に英國舊時代の人物に多少信仰を維いでゐる思想を傳承したのである。文學の方でいふと、ディッケンス、サッカレエ、マコオレエ、テニソン、ブラウニング等が、終に一世の祭祀（アポシオシス）を受けた時代の氣風が今なほ現代英國の新文壇に生きた勢力を有つてゐると思ふやうなものだ。かの時代以來世紀は轉じ、君主は二人まで崩御となつて、現代をジョオジ王朝といふ。いかに急激の變化が無いと信じられてゐる英國でも既に三十年を經た。新らしくして而も深慮を要する問題は續々として英國に迫つてゐる。人心は改まる、一代の好尙と

氣分とに變化が見える。他の近代國家に發生した難問が急に此國爲政者の解決を要求してゐる。キップリングの短命であつた人望も呑氣な前代には見る事の出來ないまでに餘計な現象といへるがこれもまた世運の一轉機を示す兆候であつた。此間メレディスは終に認められ、ハアデエも尊ばれ、其後エイチ・ジイ・エルス、ベアナアド・ショオ、ガルスヲオシイ、フランク・ハリス、アアノオド・ベネット等の勃興は實に新時代の幕明を示して餘あるてはないか。而して最も世界の耳目を聳動したのは、二十世紀の初年より二大政黨の勝敗地を易べて、この數年間自由黨が政權を握つて以來、統一黨の膽を寒からしめるやうな改革又改革續々として法律となり、終に昨年所謂憲政上の大革命があつた一大事件である。ロイド・ジョオジが豫算案のぐるりにはキング・エドワアドの崩御を挿んで數年に亘る大論爭が繼續し、とうとう上院は財政法案の議決權を失つた。勞働黨の聲は聞える、愛蘭自治案　影がさして來る。要するに民主論の主張は徹底して來た。世人の所謂英國氣質即ちヰクトウリヤ中期の樂天思想は是に於て根抵から覆へされむとしてゐる。論者は今茲に自由統一兩黨の政策を批評して、其何れが英國に利益あるかを斷言するつもりはないが、とにかく現代の英國は舊來の思想や習慣を以て律し難く治め難い狀態に位してゐることだけは確だと思ふ。英國目今の動搖は、そこに潑剌たる生氣の横溢してゐる證據であつて、例の適應がまた始まつたのである。近代の異なつた周圍に對し、此老文明國が、新しい態度に出て、またもや清新なる生命を吸收せむとする光景は日々の海外電報に寫つてゐる。

一の國民が生存し永續せむが爲に不斷の努力を竭すその第一の方法は何よりもまづ適應である。地勢或は人種のやうな自然の狀態に適應することもある、又は政治經濟道德等社會の狀態に適應することもある。この適應の方法と度合とが時代精神の特色となる。どの國民も皆此適應如何によつて榮枯盛衰するのであるが殊に英國は此適應術に長じてゐる爲、今日の盛大を來

した。而して英國が昔から用ゐ來つた適應の方法に二つある事は、ソルボンヌ大學講師ルイ・カザミヤン氏の近著「近代英國」といふに、巧に說いてある如くであつて、それは直覺的適應と理知的適應とである。第一の直覺的適應とは、無方針無主義といふ一の方針や主義に從つて、均勢、緩和、補遺等種々の努力を自然に働かせて、生活の要求に應じてゆく遣方である。此時意識や自覺は殆と助力しない、理性の補佐も無い、曖昧模糊の裡にどうやらかうやら、巧に切り拔けて行くので周圍の事情に從つて行動し、折ぎに應じて驅付ける。故に非然たる劃一は得られぬ、其達する所は常に大凡の目分量である、概當（アプロクシメイシオン）である。而も複雜なる生活に處する時、これが最も安全な、大過のない賢明な方法であつて、實は昔から英國の制度工業、風俗思想感情にこの態度がよく表はれてゐる。然し此方法では全體の適應は望めない、唯個々特殊の適應を其場、其時に限つて行ふ。

第二の理知的適應とは前の自からなる無意識の適應に對し、更に新な努力を之に加へ、又時に之に代つて活動するもので、それは秩序、整理、排列等の精神である。雜然たる生活はこれが爲に統一され管理され、目的手段との間又各の手段の間に明晰なる關係がついて來る。唯此方法の缺點は稍もすれば實生活から離れて空理空論になる事である。即ち知力と自然との全然冶し難い不一致がある爲、もし性急に此方法の未熟なものを實行すると、思ひかけぬ弊を見る事がある。然し遠謀深慮の後、計畫して之を行へば、清明典雅の特色を發揮して、後世に範を垂れることになる。パスカルの所謂數學氣質の長處短處を兼ねてゐるのは此方法だ。第一の直覺的適應は習慣の道、第二の理知的適應は學術の法、前者は生に從ひ、後者は知に賴る。

英國の大を致したのは、實に此等の二方法を生活の要求に應じて代る代る行ひ來つた爲であつて、實はいつも全く此等の一に偏する事なく、兩々相補つて互に利してゐるが、時代に依つてどれかゞ特に目立つて働く事がある。一體近代英國の基礎は千八百十五年、即

ち文化十二年ワアテルロオの戰から千八百三十七年即ち天保八年クイン・ヸクトウリヤ即位の頃までに定つたので、此時進歩革新の精神が生活の要求に合したから當年の英人は理知の聲に耳を假して、頗る大膽な適合を試みた。佛蘭西大革命の直ぐ後で、一時反動の爲阻まれた政治的社會的合理主義（ラシオナリズム）の波瀾は、ワアテルロオの戰後、更に勢を得て、千八百三十二年選擧改正案通過の頃、在來の制度、生活を蔽うて汎濫し、爲に法律習慣の民主的改革は遂げられ、甚しき社會的弊害は除去せられ、企業交易の自由は確立して、マンチエスタア派の經濟論が勝利を得、所謂英國の自由主義個人主義が全盛となつた。かくの如く近代英國はまづ社會と法律と思想とを新時代の要求に適合させて建設されたのだから、理知的適應より發生したものといへる。

然しながら之を發達せしめたのは、直覺的適應であつた。強大なる直覺の反動は夙に起つて、當年の思想家や詩人等、新時代を導くに理知の燈を假らず、却つて感情の光に頼つて、功利の哲學が不知不識の間に教へる利己心を和らげ終に千八百六十年乃至八十年にはヸイクトウリヤ中期の民心に樂天的安心を與へたのは、人のよく知る所、これが今なほ世人の誤つて永久の英人氣質と信ずるものである。然し時勢の推移はながく英民をして、一處に逗留せしめず、到底舊思想の人が舊方法を以て解決できない新問題が續々として迫り來るのである。さきには世界の市場に覇を稱した英國の商工業は、日々益々攻勢を執つて來る新興國と競爭しなければならず、北米合衆國と獨逸帝國の發達は英國の商工業又政治上の威名を脅迫して、仰々しく言へば獨立をさへ危からしめるかと思ふほどである。内政も亦難局に遭遇して殊に經濟問題と勞働問題が急に解決を促してゐる。關税改革の可否、鐵道其他の職工間に於ける不平の聲は、何とか早く處置をつけねばならぬ。帝國主義の勃興につれて起つた殖民地と母國との關係を如何にすべき。又は徴兵制度採用の可否、海軍擴張の程度、如何等に

ついて、英國政治家の苦心は並々ならぬ事であらう。宗教も哲學もまた今日は未來の大飛躍を豫想する試みの時代であつて、前代の纒つた然し生氣を失つた思想に比して外觀は堂々としてゐないが、二十世紀に入つて以來、面白い意味のある新意が、そろそろ表はれて來た。文學に例を取つていふと、詩人イエイツ等の愛蘭詩派或は近頃獨佛の語に飜譯されて、大陸の具眼者に歡迎される短篇小説家たちは當來の英文學に先驅たるものだらう。何しろ今日の英國は新勢力の迸發して、前代と異つた適應を試みる時代である。英國は自分より若い新進諸國と角逐する爲、彼等に理知と方法とを學んで、個人の能力を更に增大しようと心掛けてゐる。一言にして盡せば、現代英國の要求は舊習を打破してまでも新時代の用に足りる人物や制度を作出すことにある。商工業、敎育、軍備等の改善が凡べての階級から叫ばれるのは此爲であつて、つまり知に賴り學に導かれる理知的適應が現代の趨勢である。

現代の英人は、保守的傾向の人、進歩的傾向の人たるを問はず、とにかく現狀に何等かの改善を施して、眼前に迫る經濟上、軍事上、社會上、政治上の危機を切拔けなければならぬと覺悟してゐるので、もとより保守の人は急進論者の極端に走るのを稍抑へて、時勢の加速度を弱めてはゐるが、到底全く一般の前進運動を止めることは出來ぬ、時としては保守家自からが隨分思切つた革命的色彩を帶びた勇斷を決行する。例へば千九百九年、ロオド・ランズダウンの言に從つて、上院が下院通過の豫算案を否決した如きは、自由黨內閣の政策にも劣らぬ非常手段ではないか。

最後の塹壕に踏止つて戰はう、降參は決してせぬと揚言したロオド・ハルスベリ黨の奮鬪も、何等の効なく、英國上院は、終に屈服した。理論上からは自由黨の主張に勝味はあつたが、何しろ數世紀の舊慣に關する難問を論理的に解決したのは、非常な事であつた。總理大臣大藏大臣等の作戰計畫がいかに巧であつたにもせよ、もし英國の狀態が舊時の如くであつたなら、とても今回の平和的憲政革命は不可能であつたらう。

續いて去年の大同盟罷工が起つた。社會主義風の運動が盛てなく、萬事商業會議所や勞働紛議仲裁所の斡旋て治まつて來た十九世紀の英國には、未曾有の事てある。而もかの職工組合(トレイド・ユニオン)が稍もすれば、大陸の組合主義(サンヂカリズム)の色彩を帶びて來さうな傾向も見え出しては、愈以て油斷ならず、舊時の如き淺薄な樂天觀ては、とても今後の社會を治めて行けさうもない。又英國人種そのものゝ樣子までが、新時代の空氣に觸れて變化したやうて、近代の神經性や不安靜を覺え出した現代の英人はよほど大陸國民に近似して來た。是に於て今日の思想家も實際家も齊しく、一般人が更によく自覺し、更に多く理知を向ひ、更に深く學識あらむことを望んて、列强間の競爭に後れを取らぬやうにと心掛けてゐるのが、今日の狀態てあつて、要するにこの二十世紀に入つては益々理知的適應の盛に行はれるのを見る。ヸクトウリヤ中期の調和は破壞された。今はもつと合理的な思索的な方法によつて、更に大なる調和を求めむとしてゐる時代、混亂もある、疑惑もある、唯然しそこが英國のなほ當來に光明ある所以て、それらの混亂や疑惑は、死の先驅たる姑息偸安て無く、却て甦生を豫想せしめる有望の奮勵努力てあるらしい。現代の英國が新理想を樹立して猛進する今日の生みの苦みは、痛ましくもまた勇ましい、而も吾等日本人にとつて頗る興味もあり、教訓にもなる實物示教ては無いか。時代の推移を知らず、人心の轉化を認めず、偏にヸクトウリヤ中期の英國を以て、全豹を窺ひ盡したと思ふ人が、現代の英國に就いて判斷を誤り、且つ吾邦國運の進步を阻害する言論の證左として、前代の英國を引用することもあらむかと憂ひて、精細なる實例を省略した咄嗟の感想を斯の如く書き流したのてある。（完）

廣軌改築延期に反對す

男爵 後藤新平

我輩が廣軌改築を主張するのは。廣軌鐵道は狹軌鐵道に比して理論上優勢である。それで今後は從來の狹軌鐵道を罷めて、日本の鐵道を是非廣軌に改築せねばならぬと、斯樣な論結を下して之を斷行しなければならぬと言ふのではない。左樣な理論的、演繹的の主張にあらずして、もつと實際的、歸納的の研究の結果である。

今之を綜案するに至つた徑路を一言して見れば、元來鐵道といふものは始終改良しなくてはならぬものである。改良する爲めには必らず改良費を入れなくてはならぬ。年々改良費を入れて改良を加へて、そして其收入の增加を計らねばならぬ。依て茲に運輸の增加發展があれば、從て改良費を入れ、改良費を入れゝば又從て運輸の增加をも見るのである。斯くの如くして年々入れて行く所の改良費を積算し來れば、なか／＼の巨額に達する。殊に東海道線山陽道線は帝國の最も運輸の盛んなる幹線であつて、從つて利益も多く、之を經濟的に運轉すれば他の不經濟的な線路の經費不足を補ふことが出來るのである。然るに此大事なる東海道線山陽道線に運輸を妨ぐる所が數ヶ所ある。其の最も著明なる一例を擧ぐれば、彼の箱根であつて、東京から五十臺の貨車を運轉すれば之を三つに切つて、之が後押しをする爲めに六臺の機關車をつけなくてはならぬ。之を避けんとすれば機關車を三臺もつけて、而も三臺で引くにしても之を二つに分けなくてはならぬ。其困難なる實に局外者の想像に餘りある。斯くの如きは單に不經濟なるのみならず又實に帝國の運輸を妨ぐるものである。之は獨り箱根のみならず、他にも數ヶ

所同樣の障害がある。て之を如何にすればよいかといふ事が問題となつたが、箱根の如き險阻な所は其勾配を百分の一位にしなければならぬ、其れよりも寧ろ熱海線の方が勾配が少くてよからうといふことになり、此熱海線を新らしく拵へるについて、之を狹軌にすべきか廣軌にすべきか、其利害得失如何を明かにせんが爲めに實に種々の方面に捗つて調査研究を遂げたのであるが、何れの方面より打算しても、結局帝國の發展と共に運輸の增加する以上は、熱海線を狹軌にし、從て東海道線を狹軌の儘にして置くのは非常の不利であるといふ事が明かになつた。——世間往々我輩が廣軌をのみ調査して狹軌の研究を疎かにしたやうにいふものもあるが、それはいふもの丶誣罔であつて、我輩にはそんな馬鹿な事が出來るものでない。——そこで今日より着手する改良の工事は、——少くも東海、山陽の幹線は廣軌によらなければならぬといふ結論を得たのである。即ち我輩が主張した廣軌改築案は全く實際的、歸納的の結果であつて、決して理論的、演繹的の妄斷ではない。

世間の廣軌案に反對するもの丶理論を聞くに、第一は、狹軌なれば金が安いから早く普及が出來る、廣軌なれば金が高いから全國に普及が出來ぬといふ誤解の爲めに之を不可とするものである。之れ即ち普及の遲速の點から反對するものである。第二は廣軌は狹軌よりも經濟上不利である。廣軌は狹軌よりも費用を多く要する。日本の如き財政裕かならざる國に於ては先づ狹軌の方がよろしい。又狹軌と雖も改善を加へ速力を增し、運輸の法を研究すれば廣軌と匹敵することが出來ぬ譯はないといふ議論である。之れ即ち經濟上より反對するものといつてよからう。第三は鐵道系統上から反對するものであつて、一部は廣軌にして一部は狹軌なるは、之れ帝國の鐵道系統を紛糾せしむるものであるといふのである。此等各種の議論が一所になつて廣軌改築の斷行を不可とするに足るかのやうに誤解する人も少くない。

然しながら此廣軌改築の事たるや、前に述べたる如

く、多方面の研究を綜合したる歸納的の結果であるが故に之を斷行するの利益は事實の上に於て明々白々であるのであるが、一方に於ては倘理論の上からも之が攻究に取かゝり、實際、理論の兩方面から研究調査を遂げたのである。理論上の研究としては順序上先づ第一に鐵道網を作つて見た。即ち將來帝國の發展に伴うて運輸の增加する曉には鐵道線を如何に敷設すべきかを豫定したのである。換言すれば現在の既成線及び將來の豫定線を圖にあらはして、帝國の運輸系統を豫定したのである。之は我輩が初めてやつた事であつて、從來は只、此處は出願あるから許す、彼處は有利だから着手する、といふ具合で、帝國の運輸を全體として見たる系統、理想がない。それで我輩は所謂鐵道網を作つて見て、之によつてその線網の普及を計らんとしたのである。それで之を爲すにはどの位の金がかゝるかといふに、之を三つに分けて攻究して見た。

第一は全國總て狹軌

第二は東京下關間廣軌其他は狹軌

第三は本州全部廣軌其他は狹軌

斯くの如く三つに分けて、此等のものを斷行するに特別會計が一般會計に累を及ぼさずに元利償却を爲し得るや否やを調べて見ると、何れもなし得る。然し何年間に幾何の力を盡してなすかについて、其方法を種々に分つことが出來るが、先づ最も穩當なものは、豫定の線路網を拵へ上げて全國に運輸の便を普及せしめ、其費用の元利償還を特別會計にのみよつて、決して一般會計に累を及ぼさずにやるとすれば、其完成年限を二十八ヶ年と見積ることとであらうと思ふ。此年限には多少の長短を附し得るが廣軌鐵道改築準備委員會に於ても、此年限に一致したのであるからして、此年限を論點として以上三案の利害を調査して見るに、

第一の全國狹軌によれば二十八ヶ年間に十二億七千萬圓餘を要する。此元利償還の年限は利率の高低によつて差異を生ずるが先づ最も高き四分八厘と通算して今より七十年後、即ち明治百十四年に至つて元利を償還し了るのである。此計算は實に一哩いくらといふ直

錄式最小自乘法を用ひ、最も確實なる計算と、又將來の貨物乘客の率は過去の精細なる統計によつて、寧ろ內輪に見積つたものによつたのであるからして、決して間違ひはないのである。或は今少し收入を多く見積つても差支ないといふ議論がある程である。それ丈け確實であることを斷言するに憚らぬ。之によれば第一案は即ち明治百十四年に至て元利償還するが故に明治百十五年からは年々九千三百五十萬圓の純益が取れる。

第二の東京下關間廣軌其他は狹軌にすると、完成年限を同じく二十八ヶ年間とし他の條件も總て同一とし、之に要する費用は十二億五千六百萬圓である。而して年々の純益は全線狹軌よりも多いからして、其元利償却年限も第一案に比して九年早く、即ち明治百〇五年に至つて完濟することが出來るのである。其上明治百〇六年以後の純益は九千九百萬圓に上るのである。夫れ故に此計算に從へば第一案に比して已に工事費に於て一千四百萬圓安くなり、其償却年限は九年を短縮し、且つ年々約一億圓の純益を生ずるが故に全線狹軌の償還年限に至るまでに既に九億圓を利し、且つ其以後の純益も遙かに多い。加之、此運搬力及び速力の增加によつて我農工商各種の產業が利益を受くることの莫大なるは之は算盤に上すことが出來ない。然らば廣軌は狹軌よりも優勢であるが高價であるといふ誤解は誠に根據なきものであつて、我黨の議論を以て一種の誤魔化してあらうなどゝいつて居る向きもあるが實に笑ふに堪へたる愚論であつて、そんな事は出來るものぢやない。何故廣軌の方が比較的金がかゝらぬかといへば車輛、土工等に於て非常に經費が浮きる。之を委しくいへば岐路に亘るから今は避けるが簡單にいへば、例へば現在は七噸貨車である。之が廣軌となつて十五噸貨車となれば、第一此十五噸貨車を作るに七噸貨車の二倍の費用は要らない。修繕費も同樣である。又復線を作る場合に七噸貨車二臺ならば長さが長いから停車場附近のカーブを長く作らねばならぬ、從てポイントが多い。其長いカーブを作る費用や、ポイント

に置く人員等の費用もなか〳〵少くない。まア分り易い所でいへばそんなやうなもので廣軌は狭軌に比して案外費用がかゝらぬのである。

第三の本州全部廣軌其他は狭軌に要する費用は十四億〇四百萬圓で第一案第二案に比すれば費用が多い。然し矢張り之を二十八ヶ年に完成すれば元利償還の年限は明治百〇六年にして全線狭軌に比すれば完濟期八年早く、之を東京下關間廣軌に比すれば完濟期一年遲れる。然しながら明治百〇六年以後の純益を計算すれば毎年一億〇八百萬圓になるから、第二案よりも更らに純益が多いのである。

之を要するに狭軌の利なるや廣軌の利なるやは、何人が見ても明瞭なる事實であつて、狭軌でやれば早く普及が出來るといふ誤解は自然に無くなることゝ思ふ。成程初最の五六年乃至十年間位は廣軌の爲めに、新線路の普及を妨げらるゝことゝなる。然し廣軌が多くなり次第年々出て來る利益が段々多くなるからして、廣軌は却て普及の速度を加へ、一方には廣軌を完成し、他方には狭軌を新設することも出來るのである。夫れ故に現在目前の所のみを見れば廣軌をやめれば狭軌の普及が早いやうに見ゆるけれども、其爲めに運輸力が發展せず、利益が上らず、甚だ不經濟なる結果を來すのであつて、十年二十年の先きを考ふるものにとつては甚だしき短見の議論といはねばならぬ。況んや帝國百年の長計を思はゞ廣軌案の斷行せざるべからざる多言を要せずして明かである。

我輩が鐵道院に就職してから諸般の事に改良を加へ、年々七百萬以上一千萬圓に近き純益を得るの基礎を作り、廣軌案を斷行するについて充分なる計畫を立てゝおいたのである。此案は已に廣軌鐵道改築準備委員會の調査を經、多少の修正をも加へ、以上の論結の決して獨斷にあらず、妄斷にあらず、實に精細なる、眞面目なる研究の結果なることを裏書して居るのである。若し我輩の言を疑ふものあらば一部の「廣軌鐵道改築準備委員會調査始末一斑」と題せる精細なる研究書が之を辯明して餘りあると思ふ。

近頃世間の噂する所によれば、現内閣は廣軌案を延期するとか延期せぬとかいろ／＼の風說がある。然るに廣軌案は前述の如く其利益明白なることであるからして、若し之を延期するとすれば、我帝國の目下の財政上、公債を募集するのがよろしくないといふやうな所謂消極悲觀論の結果であらう。是に於て我輩は一言を費さねばならぬ。凡そ我帝國の前途を誤るもの、我帝國の運命を信ぜざるものより甚しきはないのである。我財政の前途を悲觀し、國家破產論を書いた政治家は從來決して少くない。其最も顯著なるものを算ふれば先づ第一の國家破產論は明治六年井上澁澤の手によつて書かれたのである。第二の國家破產論は渡邊國武によつて書かれたのである。而して第三の國家破產論は、其形式は山本達雄によつて、然しながら事實に於ては矢張り第一の破產論を書いた井上澁澤によつて書かれたのである。是に於て我輩は敢て世人に問はんと欲する。第一の破產論の書かれた後我帝國は果して破產したか。獨り破產せざるのみならず、帝國の國運は駸々として進步したではないか。第二の破產論に賛成したものは當時朝野に少くなかつた。然しながら我帝國の勢力は其後益々膨脹力を加へたではないか。焉んぞ知らん今日の所謂破產論なるものも他日之を顧みたならば、第一第二の破產論と同じく一笑にだも値せざる兒戲となり了らんことを。我帝國の財政は昔から、炭團を埋けた炬燵に入つて、其上で算盤を彈いて居る若旦那の計算には合はぬのである。然しながら帝國の國運は愈々益々膨脹發展したのである。父死して三年其道を改めざるを孝といふ時代ならばイザ知らず、又入るを量つて出るを制するといふ時代ならばイザ知らず、今日の如き益々國運の膨脹發展を計らなくてはならぬ時代に於て消極悲觀の說を唱ふるが如きは帝國の爲め實に寒心に堪えざる次第である。公債は不生產的の事業に、償還の見込なき事業に向て之を募集するのは惡いのである。然しながら廣軌案の如き生產的にして有利なる事業に向ては之を募集して何のわるい事があるか。若し我當局者にして之を斷行するの

勇氣が無いならば、外國の會社中には我輩の前述した計算によつて引受けてやりませうと申出るものがあるかも知れない。それ程此案は有利にして確實なる案である。それを廣軌案は不經濟などといふ、丁度驢馬が集まつて駱駝の荷物を議するやうな俗論に誤られ、且つ財政悲觀論を唱へて其實行を延期するなどいふ事は甚だ解すべからざることである。然しながら最後に一言して置くが、以上述べた廣軌案の有利なるは何人が見ても事理明白なる事であるが、然し目下の如き悲觀論を唱へて居つては或は自ら之を行ふに不利なる狀況に陷らぬとも限らぬ。所詮總ての仕事は人に存する。之を爲し得る人が之を爲さゞれば、爲し得べき事も遂に爲し得ざるに終る。我輩は必らず其相當の人を得て此案の斷行せられんことを切望する。

カイゼル論

福本日南

勉強なる太陽は又々公轉し來つて諸君と共に新年を迎ふることゝなつた。流石に今朝は一年の初め丈けに、自家も快ければ他人も快からうと思ふ。自國の正月を見るにつけても又他國の正月は如何てあらうかといふ思ひも浮ぶ。此思ひは東西南北を驅け廻つて歐洲に至れば、忽ち中歐の中心スプレー河畔の伯林に停るのである。伯林の今日は如何にして夜が明け、如何にして目出度きお正月が來るてあらうか。未だ彼の地を見ない人の爲めに

伯林の今月今日

を一顧して見やう。昔の詩人は姑蘇城外寒山寺、夜

半鐘聲到客船と歌つたが、それは寂寥な、然し今日では騒動具最中の支那江南の一風色。それとは違つて今一願ぜんと欲する所は、スプレー河畔の伯林市、夜半の鐘聲新年を報ずる所から始まるのである。除夜の夜半頃から伯林の市中は滅法賑かになる。何處から出て來るが、出るは〳〵、市中は非常の人込みとなる。中にも學生連は大威張り、あちらにも學生、こちらにも學生。到る處學生を以て滿たさるゝ。夜は漸く更けて十二時となるを合圖に、日本ならば百八煩惱ともいふべき所の鐘の音が處々方々から響き渡る。すると例の〝Prosit(プロジット) Neu(ノイ) Yahr(ヤール)〟〳〵の聲が潮の如く湧いて來る。知るも知らざるも相逢へば、出會頭(であひがしら)がプロジット、ノイ、ヤールである。中にも滑稽なのは、今晩殊に夜會が多い。夜會歸りの紳士連がシルクハットを被つて進み來るを見るや否や、書生の連中がステツキを振り上げて、プロジット、ノイ、ヤールの一聲で其シルクハットを叩き落す。而して今晩に限つては此惡戯(いたづら)を尤めるものはない。それで何れの町にてもシルクハットの先生方は此襲撃に出會はんことを恐れて、逃るが如く狐鼠〳〵と行くのである。外國人の眼には殊に之が面白く見える。扨いよ〳〵黎明ともなれば、群集は陸々續々として宮城の邊に集るのである。それが午前の十時頃から十一時頃までには約四五萬に至る。宮城前は全く人を以て埋めらるゝ。東洋流にいへば此の所先づ立錐の地なしと形容すべきである。此晨宮城内には早く嚠喨たる軍樂が起る。午前七時には皇后陛下、皇太子殿下並びに諸親王の參賀を受けさせられる。次には宮廷大小官吏の參賀となる。已にして十時からが諸皇族、各國の大使公使、乃至本國の諸貴族連の參賀を受けらるゝ。金光燦爛たる馬車は數十丁の間打續いて、宮城に向つて走るのである。群集は畢竟之を見んとて集るのである。扨此十時から十一時までの中に皇帝は此等の參賀者に向て一々謁見を與へられ、且つ勅語を賜はる。すると筆頭大使は又勅答をなすのである。其次が陸海軍將校の參賀である。之に對しても亦獎勵の勅語を賜はる。かくて十一時に一旦切り上げられる

が、參朝した貴官貴爵の人々は何れも宮廷の溜りに其儘集つてゐる。十二時過ぎともなれば、玆に大飾宴が開ける。皇族、大使公使から大臣將官などが皆此宴に列するのである。此中に目立つて面白き珍客は、ハレ市附近にゐる百姓の代表者として三人の百姓が獻上物を捧げ來つて、此宴席に着く一事である。之はブロイス王朝時代から百有餘年間繼續する古典の一つである。其代表者の百姓は、毛皮の上衣を襲ひ、絹のジヤケットを着て而かも其ジヤケットは銀の小釦を以て飾らるゝ。而して膝限りの天鵞絨のズボン、そして其膝から下は絹の脚絆をつけて、手には銀釦を以て飾つた手袋を箝めてる。扨其獻上物はと顧れば豚の臘腸、佛語の所謂ソースッソシなるものと、種々の卵とそれに飄を加へて盆上に盛り、恭々しく捧げて罷り出るのである。彼等は之と同一の獻上物を澤山持つて來て、之を諸親王家にも獻上する。而して彼等百姓連は日本語でいつたならば松の外まで、即ち元日から八日まで帝室のお客となつてお馳を受ける。そして其間はイハヘリアル、オペラでもミュジアムでも無代價にて勝手次第に見物するの權利を與へらるゝ。いよ〳〵お暇乞をして歸るといふ際には、馬が一頭に旗二流、盃一個の下され物がある。此古例の起源はまだ詳かにせざれども、ホーヘンゾルレン家の先王が危急の際か何かに、ハレーの人民が今日まで繼續する進物のそれを捧げてお救ひ申したとでもいふ古傳から來たのであらう。斯くの如き事は立君制の國には間々あることとて漫ろに我國の往昔に於ける三河萬歲なども憶ひ出されるのである。三河萬歲といへば忽ち德川家康の趣味如何までが聯想せられる。あの英雄天下は取つたが、矢張り木偶殿流の豪傑で、其頃有つたか無かつたか知らねども、常盤津、清元、一中節、扨ては淨瑠璃などの趣味などは到底解し得ないので、矢張りお國の「ヤッ、ポン〳〵」位の處が恰度此先生の趣味に合ふのであらう。こんな閑話は休題として

かゝる朝賀を受けさせらるゝ君王

即ち今日の世界に飛ぶ鳥も落すウィルヘルム第二世陛下の御經歴如何と顧れば、一千八百五十九年即ち我安政六年一月二十七日に伯林の宮城中に御降誕あらせられた。今年今月の二十七日で滿五十四歳即ち第五十五回の天長節を迎えらるゝ譯である。陛下の祖父はウイルヘルム一世にして父王はフリードリヒ三世である。又其母后は英國から來られたヴイクトリア陛下である。それで此ウイルヘルム二世はホーヘンゾルレン家の家風に從つて七歳の時から早く軍事教育を受けられた。最初の教授はオーダンネ、其次にお附申した教授はヒンツペーテルであつた。此ヒンツペーテルは出色の教授であつた丈け、此人の感化は後々迄も長く皇帝に附き纒うたやうに思はれる。已にして二世は十五歳にしてカツセルのギムナシユムに入られ、二ケ年にして卒業し、十八歳から御家風に從つて身は一個の軍人として、軍職を自らせらるゝやうになつた。之と同時にボンの大學に入つて在學二ケ年、其間に研究せられた所のものは羅馬法、國際公法、哲學史、獨逸文學史、經濟學等であつたと聞える。尚茲に一言すべきは以上の大學に御在學中までは左まで出色の御評判もなかつた。只よく知れ渡つた所のものはビールの痛飲をやらるゝのと、決鬪仲間の一人としては寧ろ勇者の方だと聞えた丈けである。一千八百八十一年、我が明治十四年の二月十七日を以て茲にシユレシユレツヒ、ホールスタインの侯女、オーガスタ、ヴクトリア殿下と御結婚の式を擧げられた。之が當年二十二歳の時である。其後數年にして一千八百八十八年即ち我明治二十一年、二世の春秋二十九歳の時である。此時までは祖皇ウイルヘルム一世も在せば、御生父のフリードリツヒ三世も居られた。それで何時帝冠が二世の頭上に來るかは殆んど未だ計るべからざることであつた。然るに此年の初めにウイルヘルム一世崩御せられ、父帝フリードリツヒ三世が其後を繼がれたが之も在位僅か

に四ヶ月にして崩御せられた。爲めにゆくりなくも六月十五日を以て茲に獨逸皇帝の位に就かるゝことになつたのである。是に於てか溢るゝばかりの活動が此時から初まつた。以上は極めて簡單なる皇帝過去の經歷一班である。之から此皇帝の人となりについて少々觀察を試みようと思ふ。世界一般に知るが如く此皇帝は

多藝多能多情多恨多趣味

多角形の君

てある。巴里發行の一パンフレットが我國で申さば千手觀音の如き圖を描いて、一本の手にはパイプルを持たせ、一本の手には十字架を握らせ、一本の手には毛筆を取らせ、其外の手には或は石盤、或は鑿、又は鉋、扨ては小銃、ピストル、指令棒。それから恐ろしき長劍を振り翳されて居る手もあれば、又は可憐なる菫を持たるゝ手もある所の王様を描いて此大君主を表示した。一寸可笑しいやうなれども極めてよく此君主の人となりを書きあらはしたものてあると思ふ。皇帝は自ら深く何事にても爲し得るとの自信を有せらるゝ。從つて文學なり、技藝なり、宗教なり、哲學なり、科學なり、法律なり、政治なり、外交なり、軍事なり――別つて言へば陸軍なり、海軍なり――何についても意見がある。口を出されぬといふ事が無い。此の處少々大隈伯の御親類である。然しながら口も八丁、それのみならず手も八丁の處に至つては寧ろ遙かに大隈伯に超越して居られやうと思ふ。彼大君主は自ら信ぜらるゝ處極めて篤く、現代に於ける世界のヒーローは只乃公あるのみといふ事を色にも言葉にも、行住座臥の行爲にもあらはさるゝ。之について憶ひ起すのは東洋にある英雄色を好むといふ言葉てある。惟ふに之は未開時代に製出した言葉で、英雄の人となりを狀出せんと欲して得ず、其最も人目に觸るゝ、殊に未開の人間に理解し易い、色の一點から英雄色を好むというたのてあらう。其實は英雄何でも好む。色も好めば酒食も好む。功名も好めば土木も好む。申さば好まずといふ事なしといふのが即ち英雄である。其れは何に由つて然るか

といへば畢竟絶倫なる精力である。若し精力主義といふものが一主義となるならば英雄は即ち其標本であらう。此點から見ればカイゼルは確かに現代の英雄らしい。カイゼルは先づ

第一に音樂の批評家―作曲家―演奏家―合奏の指揮家

である。何を以て音樂の批評家といふかなら、何人の奏樂乃至作曲についても必らず批評を加へられる。實に遠慮會釋もない。近代の斯道名家にして陛下の批評を蒙らざるものは殆んど稀であらう。就中ワグネルの如きは最も屡々帝の批評を受けられた。それから次に帝を作曲家といふのは、自身に盛んに作を出されるのである。就中エーゲルの讃美歌などは最も有名にして音樂界に傳唱せられてゐる。其次には演奏家である。殊に帝はピアノの名人である。それ丈けに何れの御所にもピアノを備へられる。大觀兵式の幕營中にも持ち込まるれば、帝室ヨットの御座所にも据え附けられる。而して得意に之をやらるゝのである。それと同時に又合奏の指揮家である。一例を擧げれば獨逸の名將中で故モルトゲ伯の如きは有名なる音樂家であつたが、或時皇帝は伯の統率する軍を見舞はれ、其際に伯は豫てから皇帝の音樂を好ませらるゝを熟知してゐるから、中世の古樂を少し變調して皇帝の前に之を奏せしめた。すると帝は大御滿悦で始終傾聽して居られたが、今一回と所望された。命に應じて演奏すると、半ばに及ぶと帝はつと起つて、それからは自分が指揮者になる、やらせて呉れろと鞭を執り上げて其終曲まで指揮された。兎に角それが節に合する。並み居る將校何れも帝の敏捷に驚いた。

第二は好劇家―脚本家―批評家―座元―役者

を帝自身は一人にして兼ねらるゝことが出來る。其好劇家であるといふ事は帝室劇場の開場中一日として皇帝の影を場内に見ないことがないといふのでも知れ

る。が帝は觀劇丈けては滿足されぬ。自分自身脚本家として作を出さるゝことが少くない。それから又帝は批評家である。所謂見功者連である。いかなる作いかなる劇についても痛切に批評を加へらるゝ。之については專問の劇評記者が跣足て逃げるの概がある。其處まてはよろしい。が其得意の極は作者の作に向つては屢々修正を申込まれる。役者のアクトについても大干涉を加へられる。終には其度を超越して自分自身が座元氣取りになられて、あの道具立はわるいの、あの書割は直せの、種々の指圖を加へらるゝ。其れが當ることもあるが當らぬことも頗る多い。爲めに作者は閉口し、役者は泣き、座元は困り、見物に不平の聲も聞えるのである。而して自分自身頗る役者氣取りの事がある。髮を捻つて天に朝せしめ、演說の際にも頗る名優の動作が見える。そこに至ると偶々憶ひ起すことがある。之は獨り皇帝のみに限る譯てもない。歐洲の政治家中には往々時の名優の言動を學んで頗る氣取る人がある。今は巳に故人となつたが、我國で之を一寸試みたものは櫻痴居士であつたらう。あの先生大の團十郎好きて先生得意の時代には府會や其他の議場に於て團十郎の白で演說をやつて先生大得意てあつた。然し其割合に一般は頗る不評判てあつて、詰らぬ洒落の爲めに先生の鼎の輕重を問ひ出されたのは之が緒端であつたやうてある。どうも役者の眞似は時と場所によるらしい。カイゼル陛下の如き、文明なる獨逸帝國におはしますから、それても結構であらうが、之を東洋の天地にても出されて見たならば一寸變なものであらう。それから

第三には詩人

てある。詩が頗るお得意て、之は皇太子時代から御作を伺ふのである。希臘の神話なども屢々詩にせられる。此處頗るホーメル氣取りが見える。又羅馬の古英雄などをも屢々歌はれた。此處は即ちヴアージル氣取りとてもいふだらう。然しなか〳〵旨い作も得らるゝ。上にも擧げたエーゲルの讚美歌などは確かに合作の一

つであらう。而して御本人には之が頗るお得意で、御自分の感服せられた諸名匠や、又は或機會に於て或者を籠絡するか又は買收せらるゝといふ場合には皇帝御自作御自筆の詩を賜ふことが少くない。此處頗る祖王フリードリッヒ大王の風がある。大王がなか〳〵の作家であつて、そしてわざ〳〵有名なるヴォルテールを佛國より招いて、御作の添削を托されたのである。するとヴォルテールは無頓着な先生で其御作を一々感服せぬ。又往々にしてそれに大斧鉞を加へる。紅紫滿面で本人の御自作は何處へやらとなることが少くない。一方には皇帝大御不滿である。他の一方に於ては大王御親作が出來上つて之をヴォルテールに示さるゝ毎に、ヴォルテールは苦り切つてそれを受取る。又も惡詩を捻られたかといはぬ許りの顔附である。爲めに最初は禮を厚うして驩迎せられたヴォルテールと何時しか不仲となられて終りには兩方の感情は非常に遠ざかつた。其れが爲めにヴォルテールは袂を拂つて佛國に歸つたといふ事である。それは御祖先フリードリッヒ大王の逸話であるが、今のカイゼル陛下の英雄さは果して大王に匹するや否やを知らずと雖も御作の詩丈けは確かに大王に超越せらるゝものと見える。歐洲の文學界では皇帝は帝冠を拋たれても作家として喰へるといふ評判であるさうな。果してそれが適評か酷評でないか、事によつたら現世に仕合せにもヴォルテールがゐないのではなからうか。其邊の所は我々の知る所でない。それから

第四には演說家―博言家

にておはしますといふ一事である。之は確かに何人も先づ其大演說家たる事を認むる。帝の聲は極めて强くして且つよく透るのである。只其お言葉はちと急速過ぎるが然しながら流暢である。而して其調子は强弱高低自由自在にして措辭の用法も亦極めて妙である。之に加ふるに得も言はれぬヂェストを交へらるゝ。其れて聽くものをして厭くことを知らしめぬ。就中帝の演說は場當り演說の標本である。之は獨り御演說のみ

てはなからう。總ての場合に帝は場當りを考へてゐる方らしい。從つてそれが演說にも出て來るものと見える。其一二の例をいへば或時學校に於ての演說には近來の學生が餘りに多讀の弊を痛論せられて「人間には天與の眼がある。此眼は生れながらにして人間に備つて何物をも判明に見分けるやうに出來て居る。然るに今日の書生は多くは厚いガスラを透してでなければ世界の事物の判斷はつかぬとは情けない事である」といはれてアッと聽衆に感服せられた事もある。又或時には近衞の第二聯隊に臨んでの御演說中に「聯隊は第二であれども、隊の名譽と光榮は決して〱第二にあらず」などゝいはれて兵士を喜ばせられた事もある。一年キールの軍港に臨まれた際には獨逸海軍の軍旗を指して「此旗の黑白赤の三色を備ふるものは第一、黑色は勤勉と勞作を意味し、次に白色は光榮と休養とを意味し、最後に赤色は汝等の祖先が國の爲めに流したる紅血をあらはすものである」といはれた事もある。獨逸の三色旗が左樣な譯で出來たかとうかはチト覺束ないが、時にとつての妙案でもあらう。キールの演說といへば又思ひ出るが、彼の膠洲灣を支那からフンダクラレた時にハインリッヒ親王をして艦隊を率ゐて玆に臨ましめんとする際に演說せられた。其廿分演說の中に平和といふ語を何十回か繰り返されたといふ事である。而して艦隊の行先きは平和の爲めに赴くかといへば、其平和とは膠洲灣を占領して極東に大飛躍を試みらるゝ根據地開拓の爲めの出發であつた。隨分危ぶない平和である、兎にも角にも帝の御演說はなか〱聞き物との評判である。それから帝は博言家といふ事もいひ得るであらう。就中佛語などは餘程お手に入つたものらしい。之を操らるゝことの妙なるはパリジアンてさへも驚くといふ程である。而して博言を衒はるゝ――オット之は失敬――博言ておはしますことも亦實にエライものである。學者に寵翰を賜ふの際乃至寵也を寄せらるゝ際には往々にして羅甸語をお用ひになる。其御意中を忖度すれば陛下は學ばせられざるなく、知ろし召さざる所なしと評せられたいが一パイといふや

うに見える。それから

第五には美術家―繪畫家―賞鑑家

ておはす。之は御上手であるか御上手てないかは別問題として兎に角御自身に丹青の筆を揮はるゝことが屢々てある。時としては諷刺畵までも描かるゝ。近年の事で一時世を騒がしめられた黄禍の諷刺畵などは隨分有名なものであつた。之によつて歐洲人をして極東に於ける一國の勃興を憎疾する念を高からしめるには多少の効果もあつたかに思はるれどもそれよりも當時恩怨の情なき極東人をして一種厭ふべき反感を起さしめたのと利害得失を計較されたならば何れが得てあつたか何れが失てあつたか此邊は或は少々お筆が辷つたのてはなからうか。而して其鑑賞家にてもおはしますといふ事も亦一通りてない。古英雄の筆蹟のコレクシヨンなども餘程澤山であるといふ事てある。殊に陛下は現在の那翁一世を以て密かに自ら期しておはしますといふ事である。それ丈け那翁一世の筆蹟が非常にお好きてある。今より餘程前の事てあるが一年倫敦を見舞うて獨逸の大使館に滯在せられた事がある。當時此地に駐劄した獨逸大使ハッフエルド伯爵はプロイスの名門丈けに千八百〇六年に那翁一世と屢々交渉した時の手簡五六通を持つてゐる。ハッフエルト伯爵夫人はカイゼルの御徒然の慰みとして之を御覽に入れると、愛玩して手を放されなかつた。如何にも欲しい御容子である。それで夫人は之を帝に奉つたなどゝいふ話もある。それ丈け熱心に英雄の古筆蹟を極めて澤山に集めてゐらるゝ。其外帝の嗜好は陶器である。陶器といつば、古燒きの皿が最も御好きだ。此種のコレクションが實に洪大で、代價に見積つて五百萬マルク以上の皿を集めてゐらるゝ。帝の物好きは之によつても知ることが出來る。

第六には大宗教家―説教家―神學家

にておはします事てある。其宗敎家說敎家として基督敎の敎義を一般に向つて自身說敎せらるゝことは各所に於て屢々承る所である。が近年は其區域より逸進して、神學者の範圍にまて入られた。それは現在獨逸に於て有名なるデリック敎授の神說に對する反對論を帝自ら公けにせられたのても知れる。デリック敎授はアッシリアの古學通てある。それて此人がアッシリア古典を硏究の結果、舊約聖書に載する所の神の默示なるものは概ねアッシリア並びにカルヂアの古典から出たものであつて、決して神の默示てないといふ事を立證した。此議論は皇帝の前に於ても講演せられたのてある。其當時皇帝は頗る感動せられたるやの態度にて敎授の手まで握つて讃嘆されたが、それは單に其際のお愛嬌であつたと見えて、未だ幾何ならずして極めて長文の手書を所親の人に與へて敎授の議論に對する反對論を公けにせられた。之はやがて伯林其他に於て新聞にもあらはれ、冊子ともなつて歐洲に於ける宗敎社會の一問題となつた。帝の論旨は宗敎なるものは歷史的發達と宗敎的默示と相待つて行かねばならぬ。然るに敎授の立論は只一片の歷史觀に止つて宗敎觀を忘却せるものである。斯くの如きは結晶せる一般の宗敎觀念を破壞するものにして決して之は得論とはいへぬといふのである。之が爲めに宗敎家は自家の立場から非常に喜んで現代宗敎の維持者とまて賞讃した。然しながら學者の社會ては皇帝の議論は論理の的を外れて寧ろ多く迷信に傾いたとの評がある。酷評家に至れば帝は敎授の說を聞かれた當時には彼が如く感服せられたてはないか。其感服は虛僞の感服てもなかつたらう、が、追々に宗敎社會から種々の說を吹き込まれて見れば、前說に感服するのは政略上に不都合だと氣附かれて、そこで借り集め、寄せ集めの說を按配して彼の反對論が出來たのであるとまて冷笑した。酷評かも知れぬが他國の他人から之を見れば或は然らんと思はるゝ所もある。要するに皇帝は中々の宗敎家らしい。其身は新敎信者のホーヘンゾルレン家に生れ、新敎の間から出て來られた。今に於ても新敎徒の方に力を用ひらる

〻かと思へば羅馬法皇へも秋波を送つて頻りに舊教徒を懷柔せらる〻のである。是に於て新教徒は疑惑を起し、皇帝は新教を捨て〻舊教に傾かる〻のではなからうかと思ふのである。それと同時に舊教徒の方からは政略を以て我々を誤痲化されるのではないかと目を睜つてゐる。其結果は新教徒からも餘り信ぜられず、舊教徒からも餘り喜ばれないといふ結果を生じてゐる。つまり皇帝は新教徒であるか乃至は舊教徒であるか譯が分らぬといふのが現時歐洲の輿論である。然しながら帝の胸中に立入つて見たならば帝は當さにいはる〻てあらう。宗教なるものは臣民の信ずべきものにして主權者の信ずべきものではない。あれは畢竟治民の具てある。自家は無神教である。イヤ〱自らは新舊兩教を信ぜぬでも何でもない。自分は更らに自分が編み出す一新々教の宗祖であるといふ意を持てゐらる〻らしいといふものがある。見て來たやうな話て、左樣かどうかは分らねども、又或は然らんと思はる〻。斯の如きは往々英雄にある事てある。彼の成吉思汗の孫であつた忽必烈の言ひ草が之によつて思ひ出されるのである。彼は毎朝太陽も拜めば耶蘇も拜み、マホメットも拜めば釋迦にも祈つたといふ事である。それて侍臣の一人が此大可汗に向て、大王は毎朝太陽、耶蘇、マホメット、釋迦牟尼を拜ませらる〻が、此等の神は互に反撥して相容れざる神である。それを同時に信仰せらる〻のは可笑しくはありませんかと問うた。すると忽必烈は之に答へて自分も左樣氣づかぬてはない。左りながら四教徒の長老に聞けば何れも自家の奉ずる所が誠の神であるといふ。それには各々一理がある。それて先づ此四神を並び拜して置いたなら其中に一つ位は本當の神があらうと思ふのであるといつた。實に横着な言ひ草てある。然し其意中を碎いて見れば、彼は止むを得ずか〻る遁辭を使つたのである。當時大可汗の大版圖は亞細亞から歐羅巴にまで接してゐる。それで其版圖内には四教を奉ずる人民がゐる。此等を懷柔するのには其宗教の本尊を拜むに限る。そこて全く政略上から四神を倂せ拜んだものである。若し率直に

一つ進んで彼にいはしたならば己れは元來無宗敎であるといつたに違ひない。時代が時代丈けにカイゼル陛下はそこまでは、あらはにいはれぬが、秘奥の秘に立ち入つて見れば忽必烈汗と大概伯仲の間にゐらるゝであらう。若しもさうでないとお仰るならば我輩甚だ失言である。どうか眞平御免下さい。それから

第七には狩獵家

にておはしますといふ事である。ホーヘンゾルレン家では代々狩獵を好ませらるゝので、帝室相傳の御獵場も少くない。然しながら現カイゼル陛下は殊に之を好ませらるゝ。從つて陛下の御世に及んで新たるお獵場を買ひ入れられた事夥しい。獨逸國内到る處に皇室御獵場は設けられた。西に於てはメッツの邊にユーバールのそれも出來れば、アルサスに於てはゲンスブルヒの御獵場も出來た。これなどは殆んど佛國との境界近くである。それから最も有名なのはプロイス東部のローミンテン城である。御獵場の中央にある本城は一切那威式の建築を用ひられ、離宮の建物の如き悉く材料を那威に於て切り組ませ準備されて建てられた程である。箇様な獵場を持つておはします丈けに田獵の御催しは一歳中に屢々である。其中には時々喜劇を演ぜらるゝ事もある。或歳の如きはあの市街に近いポッツダムの森林中にて皇帝自ら先頭に立つて狩りを催された事などもある。其時に一匹の牡猪が荒れに荒れて森林中から飛び出して終にポッツダムの市街に入り込んだ。而かも車馬の往來頻繁な市中の眞中に飛び込んだ。其騒ぎといふものはなかつた。之には皇帝も呆氣にとられて如何に焦せらるれども鐵砲を提げて市中を追廻される譯には行かぬ。御者やコックや馬丁や町の小僧やが終り追かけて、やつとの事で市外に追ひ出して打とめたなどゝいふ大笑ひもある。それから

第八には愛馬家

でおはすといふ事を語らねばならぬ。皇帝のお好きといつたら何よりも〳〵――何よりもといふのは餘り酷

からう。皇后と皇太子を愛せらるゝ其次には馬である。馬には實に浮身を窶さるゝ。從つて御有の馬は數百頭を數へるであらう。年々主馬頭が帝國馬匹育飼場より四歳駒を限つて選拔し來るもののみにても數十頭を數へるのである。扨其馬を徵收さるゝ區域は獨り獨逸の國内に止らず、乘馬は多くアイルランドより買ひ入れられ、馬車馬は多く匈牙利及び露西亞より求めらるゝ。其御厩の完備さといつたら諸皇室のそれに冠たるであらう。一切最新式を用ひ、それは〱行届いたものである。其如何に完備してゐるかは馬に關する圖書館まで備つてゐるのでも知らるゝであらう。カイゼルの最も好まるゝ毛色は班紋ある灰色の馬である。それのみでも何時も廿頭は揃ふのである。而して帝は自ら此等の馬を御せらるゝ。其愛用の極は往々酷用に至る事がある。氣に入るが最後、乘つて〱乘り廻される。爲めに露西亞皇帝の送られた駿足の如きは半年にして廢馬となるに至つた。が、斯くの如き愛馬家である丈けに自家の御乘用にせらるゝ乘馬の資格はそれは實に矢釜しい。第一に馳驅力の優越なるものならざるべからず、第二に忍耐力の優越なるものならざるべからず、第三に行動の安全なるものならざるべからず、第四に絶對の沈着を有するものならざるべからず、第五に敏捷に命令に應ずるものならざるべからず。此五つの資格を備へざるものには如何なる名馬と雖も御乘馬とせられないのである。從つて一度駿足を見出さるれば以上の五資格を具備せしめんが爲めに其訓練は非常である。主馬寮の大小官吏がよつてたかつて此訓練を施す。之が爲めには如何なる費用をも惜まれぬ。殊に絶對の沈着性を備へしめんが爲めには、大演習に引出して大砲連發の中をも引廻され又は大軍の進み來る前にも立たせ、或は突嗟に軍樂の起る場所にも伴はれる。斯樣にして如何なる音響如何なる動搖にも驚かぬやうに訓練して終には其沈着性を養成し上げるのである。此方法丈けは我々實に大感心である。之は獨り馬のみでない。人間にも應用したいものである。自分日頃からの素論に從へば道德家といつても箱入娘の道德は餘り確かな

道德でない。誘惑に觸るゝ機會がないから其道德を維持して居るのである。それで少しの機會が綻れば、堂々たる貴爵の令孃が車夫馬丁と駈落したといふのも之から起る。田舍の道學先生などにも得てある。田舍の隅つこでこそ村中切つての道德家であるが、一度都會に來て、なまめかしい風に當るが最後、大碎けに碎ける連中なども隨分見かけるやうである。人事の複雜せる、妖魔の横行せる都會に於て、磨ぎ上げたる沈着性が本當の駿足になるのである。カイゼルの乘馬訓練法は人間訓練法にも適用したいものである。皇帝はかゝる愛馬家である丈けに馬學の講釋と來たら恐ろしい。皇帝の前に一度馬論でも持ち出さうものならばそれは大隈伯の前に經濟問題を持ち出すよりもつと御難である。御講釋が何時間でも繼續して盡る所が無いさうな。我々は皇帝の御性格や御嗜好を數へて已に馬にまて至つた。馬は畢竟何の爲めの用であるか。それを熱愛せらるゝ位の大英雄であるから、それより以上何れの點か之に似た嗜好はなからんと欲すと雖も得んやてある。そこで

第九には戀愛家

である皇帝を一顧しよう。皇帝は御壯年頃からなか〳〵の御好色と承はる。巴里の諸新聞の書き立てる處は十の七八まで惡評としてそれは退けるとしても、伯林府下の住民にして、リンデンのストラッセ邊に行けば、そこには高貴の御顏に生き寫しの私生兒があるなどといふ事も下世話に聞いてゐる。陛下最初の戀愛はホーヘナウ伯爵夫人であつた。それから中間に幾多の浮名を流されたが、此君のなか〳〵愛嬌ある所は伊太利に旅行せられたる前後幾十回。彼の國は宗教國なり、美術國なり、乃至は風光絶佳の國なり、それで行幸遊ばすのであらうと思ひきや。ミユンヘツチー伯爵夫人との御交際は尋常でないとの評判であつた。而して少々困るのは馬鹿に何々夫人附きておはします事てある。最後の戀愛が有名なる問題の種となつたウエーデル伯爵夫人てあらう。此御關係丈けは餘程久しく續い

たのである。未だ東宮にておはします頃から已に此貴婦人との噂が立つた。東宮のオーガスタ・ヴイクトリア妃殿下と御結婚せられたのは千八百八十一年であるが、それから已に七年も經つて即位の前年千八百八十七年の頃まで前夫人との關係は繼續し、殊に其翌年御即位より數月前に至つて夫人との愛情が幾分か冷却したやに噂せられた時、夫人は當時の東宮に艶書を寄せて其無情を打ち怨じ、いよ〳〵捨てらるゝ氣かと責めたのである。すると東宮は指輪に添へて親書を贈られ、此指輪を見られよ、二つの筋は相交つて端は合して一つとなつてゐる。此指輪にして中絶えずば兩人の中も同じであると書き送られた。かゝる秘密の秘事までが小說家にあらざる我々にまでも如何にして知れたかといへば、皇帝即位の後、戀と名譽を均衡にかけて、名譽の戀よりも重きを感ぜられたか、次第〳〵に皇帝の方から伯爵夫人に後ろを向けられて來たのである。然しながら千八百九十三年頃までは、冷えたなりにも倘其關係は繼續した。そして其次には冷え切つた氷は石に當つて二つに碎けた。之が我國の女流なら、恨みを含んで閨怨の歌にでも其情を慰めながら終るであらうが、そこは歐洲の巾幗社會である。なか〳〵默つてゐるものではない、一旦伯林の地を去つてヅーリッヒの地に於て皇帝との抑々戀の初まりから茲に至るまでの顚末を一書にあらはして世間に公けにしたから堪らない。讀むにも讀み兼ねる熱情の親書が一通や二通でない。幾十通つゞけ樣に其書中に掲げられた。大皇帝の御迷惑左もこそと猜し奉る。爲めに獨逸の警察は國境にあつて鵜の眼、鷹の眼で此書の國內に輸入するのを防遏した。さりながら見られぬといふものを見たいのは人情の常、獨逸の國內には敎科書の如くに配布されたのである。流石英雄色を好むの大本領を失はれない此皇帝である。然しさうはいつたものゝ皇帝の戀は如何にも英雄の戀らしい處がある。熱するも早いが冷めるも早い。拾ふも早いが捨るも早い。此處は我國の故伊藤公の戀に似た所がある。兎に角も一寸は惚れる。然し其間にも地位と名譽をまでは決して忘れられない

らしい。それでウェーデル夫人にはチト深入し過ぎられたやうであれど、其他の戀はどちらかといへば先づアッサリーした方であらう。而して當年の妃殿下即ち今日の皇后陛下と御結婚以來皇后を愛せらるゝことは又實に非常である。あれ程英雄ぶる皇帝が皇后陛下に對する親愛さは過度であると評せらるゝまでゞある。現に皇后の爲めには何から何まで世話を焼かるゝ。其お召物のモードにまで神經を惱まさせらるゝといふ事である。尤も之には多少のキッカケもある。嘗て一度皇后御同伴て伊太利に赴かせられ、同國皇帝皇后兩陛下と御會見あらせられた事がある。其時に伊國皇后の御召物はソックリ巴里式て而かも當時のモードの生粹の御服てあつた。此時之に對せられた獨逸皇后陛下の御服裝は如何にもクドク重々しく、丸で田舍物らしく感ぜられたのてある。勝氣のカイゼル陛下は之が遺憾て堪らなかつた。それから以後は皇后の御服裝について實に非常の注意を拂はるゝやうになつたといふ事てある。然し獨逸の皇后様たつてオシャレなさらぬ譯ても

ない。皇后が寶玉のコレクション家であるといふ事は實に隠れもない。歐洲の諸皇后中に此お方位多く寶玉を有せらるゝ方はおはすまい。皇后の御殿には寶玉室の一室があつて、そこには守衛と玉匠とが附つきりについて居つて皇后のお靴の先まで幾多のダイヤモンドに飾られてあるといふ程てある。而して皇帝皇后の御中らひの如何に御睦さかといふ事は十四人の皇子皇女が螽斯の羽詵々たり、宜なり爾の子孫振々たることよと歌はるゝに至つたことでも分る。之について歐洲の口惡る連のいふ事を聞けば、墺國の皇后は嘗て庖厨に意を用ひられ、體操の御嗜みなども尋常でない。露西亞の皇后は冬宮のガーデンを愛せられ、伊太利の皇后は文學の御嗜み深く、西班牙の皇后と同じくシガレットをふかすことを好まるゝ。ルーマニアの皇后は詩賦を喜ばれ又劇に多大の趣味を有たれる。ナタールの前皇后は之もシガレットを好まれる。巴里伯爵夫人はバナヽを喜ばれる。葡萄牙の皇后はドレスデンのシガレットを好まれる。何れもそれ〴〵の御嗜みがあるが、

独逸の皇后に限つては何の御嗜みもない。之は如何なる譯であらうかと或人が言つたらば、又或人が之に答へて。それは其筈である。此皇后はお子さんを作るゝことを何よりも喜ばるゝ。それで殆んど年子のやうに多くの皇子皇女を產けられた。多分其御教養に總ての趣味を犧牲にせらるゝのであらうといつた位である。それ丈けに皇帝皇后の御睦しい事が見えるのである。而して皇帝の子煩惱たる事も亦非常である。それから

第十にはスカツト家

ておはしますといふ事も亦數へねばならぬ。スカツトはカルタの中でも餘程複雜なる勝負である。複雜なる皇帝は此複雜なるカルタが大好きであると同時に大の名人である。之を試みらるゝ時は平常の尊嚴を抛たれて喜怒色にあらはさず處でない。一度勝たるればハツハと笑ひ喜ばれる。が若し負けられたと來た日には苦り切つて怒氣滿面。おまけに味方が負けて來ると味方の下手さ加減を罵らるゝ事も非常である。皇帝と同じ組になつた貴爵貴夫人連中など何時も皆ハラ〳〵するといふ事である。それから

第十一には愛嬌家

である。內外に對して萬遍もなく愛嬌を振り撒かるゝ。此點からいへば八方美人的皇帝といふべきである。然し其中には帝王らしい無遠慮な擧動も隨分やらるゝ。例へば御臨幸の强制などは隨分猛烈といはねばならぬ。帝の親まるゝ、寧ろ親友待遇をせらるゝ貴族の中などには、御自分から往々押しかけらるるのである。尤も左様な場合には四角張つた皇帝の儀式を以て臨まるゝのではない。最も多く帝の臨幸せらるゝのはプレツス公爵の邸である。其際には何時もいはるゝ「今日は皇帝の冠を門前に置いて來たのである。決して皇帝として待遇して吳れるな」といふ前置きを置かるゝ。而して氣に入つた時には一週間以上も滯在せらるゝ事もある。それでも公爵の方では出來る丈け鄭重に待遇

する。それて晩餐にあたつて他の貴族や貴夫人などを陪宴せしむることがある。其際には主人は皇帝と相對して席に就く。或時の如きは斯樣にして食事が初まると皇帝は起ち上つて「主人の皇帝扱ひには閉口する。寧ろ自分はあの兩美人の間が結構だ」といひながら皿とコップを手に持つて傍への美人の間に割り込まれた事もある。而して食後になればお得意のスカットカルタや扨てはピンポンなどを弄してたわいもなく愉快げに暮らさるゝといふ事である。それから

第十二には修飾家

ておはします。帝の如き自ら一世の大英雄を以て氣取られ且つ八面玲瓏通達せざるなしと自信せらるゝ方には修飾は自然免れざる處である。第一皇帝は威嚴嚇々たる一世の雄たることを萬姓をして瞻仰せしめやうと思はるゝ。それで何時でも大概軍服を着けられぬ事はない。大宴會は勿論、謁見を受けらるゝ時、自身人を訪問せらるゝ時、宮中にあつて政務を見らるゝ時、又は他に行幸せらるゝ時、未だ嘗て軍服を着けられぬ事はない。帝の軍服姿でないのを見やうと思へばテニスをやらるゝ時か、又はヨッチング倶樂部に臨まるゝ時位のものであらう。テニスをせらるゝ時には、大概白フランネルの服を着けらるゝ。それからヨッチング倶樂部に臨まるゝ際には他の倶樂部員と一般の服を着けらるゝのである。其外は田舍に旅行せらるゝといふ場合に平服を着けらるゝ事がある。かゝる場合には多くは灰色の背廣を着らるゝ。それを心得て居るものは、それてアレが皇帝であるといふ事を認めるさうな。御服裝はザット斯樣であるが如何に帝が修飾家であるかといふ事は有名なる彼のカイゼル髯にて知らるゝであらう。あの髯が何時頃から天に向きかゝつたかといへば、千八百九十四年頃からの事である。指折り數へて見れば恰度即位から五六年の後即ち三十四五になられた頃からである。古く皇帝を熟知するものゝ說によれば帝は青年の頃には平凡なお顏て、少しも英雄らしい處を龍顏の上に見ることが出來なかつた。それが段々

鬚の天に上ると共にエラさうな顔になつて來られたといふ事である。惟ふに其鬚が水平に擴がり、斜に空を指し、遂に直角に天に朝するといふ、此鬚の角度と共に皇帝の自尊心が高まつて來たといはなければならぬ。それで鬚は皇帝の信念のバロメーター見たやうなものであらう。即ち三十四五歳から四十の境涯、最も覇氣の滿々たりし時が最も鬚の直立した時であつたらしい。近四五年即ち五十の境涯に上られた以來又あの鬚が少々下向いて來た。之には如何なる意味があらう。思ふに二十餘年の帝の諸經驗は少しく意を下して人を容れなければならぬといふ事が鬚の尖端にあらはるゝのであらう。若し我言を疑ふものあらば、十數年前の帝の寫眞と今日の寫眞とを取つて比較せられたら自ら首肯せらるゝものがあらうと思ふ。それから

第十三には酒量家—喫煙家

てある。帝は平常は餘り大酒をせられないが時と場合によるとなかなかの大酒家で、豪飲人を驚かさるゝものがある。只其中に面白く感ぜらるゝのは、一般に祝宴に用ひらるゝ處のシャムペン酒は大のお嫌らひである。これはシャムペンの味がお嫌ひといふのではなくして、シャムペンの出元がお嫌ひであるらしい。それで宮廷の大饗宴といふ時には何時もシャムペンに代ふるに墺國産のトーカイといふ酒を用ひらるゝ。之は一瓶六七十マルクする高い酒で、從つて饗宴の御費用も非常なものであらうと思ふ。此酒の名のトーカイといふのは地名から來たか或は他の意味から來たか、それは我々には分らぬが其音が我々東洋人には一寸面白く聞える。楠正成が天王寺で讀んだ未來記に鯨魚となつて東海を呑むといふ事が此際に聯想せらるゝ。帝は好んでトーカイを飲まるゝ。何處まで東海を呑まるゝかと少々無氣味にも感ぜらるゝ。又帝は大の喫煙家で、特に命じて强烈なるシガーを製造させ、之を朝から晩まで吸ひ續けに續けらるゝ。但し近年は少々其れに當てられ賜ひし氣味があつて餘程節せらるゝといふ事である。然し其節せらるゝといふのも數日の間罷めて谷

いて、そこで休養をとつて又々大いに吸はるゝのである。皇帝が多方面の人であるといふ事は以上述べた所て大抵知られませう。此際

帝の日常生活

を述べて帝の私的生活の方面は終らうと思ふ。帝は非常な野心家でおはします丈けに其御心は世界の隅から隅まで駈け廻る。斯樣な人に定まつた生活の出來やう筈が無い。故ビスマルク公は嘗て帝を評してウイルヘルム二世の日常生活は恰かも天候か風のやうである。時々刻々に變化するといつた。大概之が適評であらうと思ふ。然しながら通じて其日常生活をいつて見れば毎日略ぼ六時頃に起床される。其儘將官の略服を着けて皇后と食卓を共にせらるゝ。次には東宮諸皇子方のお早うの挨拶を受ける。八時から九時の間は書齋に入つて茲に執務せらるゝのである。其書齋の卓上には大凡毎朝六七百通の書簡が上る。帝王の職業もなか〳〵容易でない。之を他の帝王に比較すれば羅馬法皇は日々二千餘通の書簡を受取らるゝ。英國皇帝は千三四百通を受取らるゝ。獨逸皇帝と露西亞皇帝との受取らるゝ數は略ぼ似たものであらう。此中から極めて必要と認めらるゝものは自身に見られて、其他は宮內官をして處理せしめられるのである。而してそれは通常の事でクリスマスなどの頃になると種々雜多の請願などが出て來るのでなか〳〵六七百通などではないといふ話である。それから帝は大の電報家である。電報政略は帝の最も慣用せらるゝ處にして如何に多く電報をかけらるゝかといふ事は宮廷に於ける電報費が年々六萬マルクであるといふのでも推察される。此電信は三種に分れる。第一は御親電で之は自身に之をかけられるのである。其次は皇帝の名を以てかけらるゝもので之は侍從が取扱ふ。第三は皇帝の命令を奉じて宮內大臣が取扱ふ。宮中には皇帝專用の電信局がある。其電信の取扱は非常に嚴密である。殊に秘密多き帝丈けに秘密を尊ばれる事も亦甚しい。此等の處理は大抵以上申した八時から九時までの間の事である。九時から十

時としては皇后と共に馬車に召して馬車運動を試みらるゝ。それが一週り済むと十時から午後一時までが主として政務を見らるゝ時である。此際には一番最初に宮内大臣が謁見して種々の事を奏問する。其次には大宰相、引續いては各大臣が謁見して政治上の各般の事を奏問する。それが一時になつて全く終る。一時半に晝餐に就かれて、餐後兩陛下は又相伴うて或はミユヂアム或はガーデンなどを見物される。二時半からして又再び政務に意を用ひられて、自身出てゝ大使館を訪問さるゝ事もあれば、宰相の家に入らるゝ事もある。又此時間には多くの新聞を徴して讀まるゝのである。其新聞は大概切り抜てある。然し何か大問題の起つた時には見出された新聞の全部を讀まるゝ事も少くない。それから夜は宴會であるとか舞踏會であるとか、之を宮中に催さるゝ事もあれば、出てゝ催しのある所に就かるゝ事もある。其間にはお好きな芝居見物も繰り合はさるゝ。スカット遊びも亦此間の娯樂の一つだ。十二時頃に至つて初めて枕に就かるゝので、なか／＼勤勉な皇帝といはねばならぬ。皇帝御自身の御身についた觀察はザット此位に止めて、之から少しく

帝の政治的生活

に入り込もうと思ふ。露西亞の聖人トルストイは曾て「隣りの獨逸までが立憲政體の中ださうな」と冷評した通りに、立憲國は立憲國でもあらうが、然し恐しくいへば

一 帝は事實的獨裁政治

の中心である。帝の政治的生活を顧れば、即位後未だ二年を出でざるに、甘言を以て故ビスマルク公を田舎へ追ひやり、其不在中に乘じて對社會黨政策の詔勅を發せられたのである。帝國の慣例によれば詔勅には必らず大宰相の副署を要する。然るに當時副署をビスマルク公に求めらるれば、公が頭を横に振ることは極り切つてゐる。そこで獨斷を以て非立憲的な――イヤ之は口が辷つた――獨裁的な詔勅を下されたのであ

る。之が抑々ビスマルクに對する挑戰であつた。爾後種々の計略を用ひられて御祖皇以來帝國の建造者と稱せらるゝビスマルク公を一千八百九十年には取つて除けられた。之に次いで陛下の信任せらるゝ大宰相として拔擢せられたのはカプリビイ將軍であつた。此大宰相は如何なる人であつたかといへば單純なる一軍人、只皇帝の命令を嚴格に執行し、百の官僚を規律正しく統御するといふに止つてゐた。之に次いで大宰相となつたのはフオン、ホーヘンローヘ公爵であつた。之も亦柔順なる叡慮の迎合家である。次に擧げられた大宰相は前年まで其地位を保つたフオン、ビユーロー公で、此人も亦前諸宰相の御多分に洩れぬ柔順家である。最後に前年以來新たに拔擢せられた大宰相ベートマン、ホルウエッヒの人となりは我々未だ詳しく承知せざれども新令尹の政は舊令尹に繼ぐ位の所であらう。皇帝は非常の大英雄、非常の大英明家を以て自ら居らるゝが故に、總ての天才、總ての英物、總ての俊傑を尊敬し信愛することを絶えず廣告的に示さるゝ。然し實際は如何てあらうか。かゝりかまへのない遠い所の天才や英物や俊傑には如何にも信愛尊敬の意を表せらるゝが、實際御自身に用ひらるゝ所の人物は果して左程な英物でありや否や前諸宰相の如き、ビスマルクを除く外は何れも只帝意の奉承家である。命令通りに働き、又其を迎へて動くといふに止る人物丈けである。而して大宰相たるものゝ一番御難は何樣大雄辯家の帝の下に居る事である。到る處て帝は雄辯を振り廻される。而かも場合によると盛んに激語を放たれる、場當り演説である丈けにアット人々を感服せしめらるゝやに見ゆれども、往々にしてそれが國際關係の上に非常な傷を殘すのである。すると大宰相はそれからそれと其尻拭ひをしなければならぬ。前大宰相ビユーロー公の如き、公の手腕如何を顧れば巧みに之が尻拭ひをされたといふに止つてゐる。此等の點より見來れば皇帝の信任せらるゝ人物は皇帝の有せらるゝ何物かの反影ではなからうか。皇帝自身は如何なる君主にておはしますかといふ事も大抵は推測せらるゝてあらう。皇帝の在

位廿餘年に亘つて宰相を代へらるゝこと僅かに五人、内閣更迭の頻繁ならざる所以のものは何れの宰相もよく皇帝の使用せられ易き忠僕であつたからである。それて伯林の朝廷に立つ大臣の資格の第一は無我でなければならぬ。自家の意見があつたり、創意によつて動くといふが如き人々は多く擧げられもしないが、又永く地位を保つことが出來ないやうである。從つて帝の自ら用ひらるゝ事も又實に甚しい。例へば御旅行の際ても、海外にあつて議會開會中の如きは電報によつて一々議會の形勢を聞き取られるのである。少しく困難な場合には幾度も電報を發して報告を徴せられる。それは實にお氣が揉めたやり方である、又帝は軍事的教育から身を起された丈けに、又申さば亂世の大英雄を以て自ら居らるゝ丈けに、總てを軍事的規律に入れやうとせらるゝ。大宰相と雖も諸大臣と雖も恰かも下士官の上長官に對して姿勢を正して命令を受くるが如く、這般の方式を以て一切萬事を律せんとするのである。斯樣な皇帝の下に果してよく英物が留り得るや否やは疑問である。皇帝の意圖は已に此通りであるから大臣などにも多く將軍を用ゐられる。それて獨逸大帝國を擧げて寧ろ軍隊政治に入れられるといつても決して不可はない。こゝに到つて少々迷惑に感ずるのは東洋の一國の一部の政治家が、此カイゼルがぶれをしてゐるのである。單純なる軍人、即ち政治の何物たるを多く解せざる軍人にして、嘗て一度獨逸に學びカイゼル政治を見來つて、政治なるものは斯くすべきもの、斯くの如くせざるべからざるものと得心して歸る。左樣な連中が又不思議に國務の其處此處に配らるゝのである。それて此等の政治家の爲す所も亦大抵此方面に出て來るのである。昔の東洋にあつては宰相の心得は君を堯舜にするといふのであつた。此君を堯舜にするといふ事は、事へる所の君を完全なる名君にしやうといふ事である。從つて銘々責任をも重んずる。君主に忠諫を容れる。それを宰相の本分と心得てゐた。それが今日の獨逸見學の宰相は君をカイゼルにするのを以て本分と思つてゐるやうである。斯樣な政治の繼續する

といふ事が果して皇室の御爲め乃至帝國の爲めなるや否や我々には解することが出來ぬ。それは扨置き

帝が大元帥としての擧動

は如何と顧れば自ら現代の那翁一世を以てゐらるゝ丈けに其御擧動は素晴らしい。一二の例を擧げて見やうか。嘗て伯林の第三軍團とボーセンの第五軍團とを合して伯林附近に於て大演習を行はれた事がある。其時に帝は第三軍團を率ゐ、一方の第五軍團は將軍フォン、スツルプナーゲルをして之を指揮せしめられた。第五軍團は防禦の地位に立つて、第三軍團が攻勢を取ることになつてゐた。第五軍團は一の高地に據り壘を高うし濠を深うして相對した。皇帝は白馬に跨られ、騎兵の十餘個聯隊を率ゐて之に迫られた。若し之が實戰ならば兵器の進歩した今日、而かも其れが高地に高壘深濠を施して據つてゐるのである。所謂騎兵を以て之に突戟せらるゝとも騎兵は目的の地點に到着しさうもないのである。然るにも拘らず以上の十餘個騎兵聯隊を麾いて之に突戟し、一擧に敵の占據地點を拔かれたのである。見物の人は大喜び、帝御自身は大得意。如何にも那翁一世の再現かとも見えた。然しながら破られた方の第五軍團指揮官は密かに呟いた。「若し之が實戰であつたならば皇帝は果して戰勝の名譽を有せらるるや否や疑問のやうに思はるゝ」といつた。又千九百〇二年のエルベ河口に於ける艦隊攻擊は如何であつたか。此時一方の防禦軍は河口にある所の諸砲臺と又河口に敷設した水雷と相待つて侵入軍を防禦することになつた。他の一方は皇帝が艦隊を率ゐて之を攻擊するといふ方略に出た演習であつた。諸砲臺には非常な銃砲を並べ又水雷はボートの一艘も無事には通過せしめないと構へてゐる其河口である。然るにも拘らず、皇帝は其御座船のヨット、ホーヘンゾルレン號に召して、而かも其ホーヘンゾルレン號は如何と顧れば僅かに數門の輕砲を乘せた御座船である。帝は之に召して其ヨットを先頭に立て他の諸艦を引率して驀らに河口に乘り込まれ、之を以てエルベの河口を占領して艦隊

の大捷を示された。此時も見物人は大喝采、如何にも帝は那翁にしてネルソンを兼ねた大將のやうに見受けられもし、又自身の肩をも搖ぶられた。然し心ある海軍の軍人は皆眉をひそめたのである。以上の二役は何れも演習てあるからそれても結構てあつたらうが、箇様な擧動を以て若し實戰を經來られたとするならば、カイゼル陛下は埃及の古傳にある副身の十や二十を御有にならなければ、御一人のカイゼルで此等の諸名譽を荷はせらるゝ事はチト不可能てあらうと思ふ。かくの如きは意氣衝天なる皇帝陛下の軍事的行動である。とはいふものゝ帝の軍事に對する熱心丈けは感服てある。それは過去に顧るも帝がオーガスタ、ヴイクトリア皇后と結婚せらるゝ時はまだ親王にして中隊長てゐられたが、其結婚當日も軍隊を指揮して終日演習をして居られた。宮廷のお使が來て、度々促さるゝに逢うて初めて演習をやめて宮中に歸られた。而して御結婚の式が濟んだ翌朝未明に早く起床して、將校に勳章を與へんが爲めに。ポッツダムの宮中に赴かれた事もある。如何に皇帝の軍事に熱心てあるかといふ事は之にても知れる。それから

帝の内政

に對せらるゝ御手腕を伺はうか。帝は即位の初め、御壯年ではあるが、如何に英明な方であるかといふ事を國民にアッと感服せしめやうといふ思召であつたらしい。そこで當初には如何にも自由寬大の政を行はうとせられたのである。此の時に當つて當時の大宰相ビスマルクは盛んに社會黨壓迫政策を採つてゐた。帝自身は之に反して社會黨との調和を心懸けられた。それで主として萬國勞働黨大會を國内に開かれたのである。此際皇帝の御演說中には確かに斯樣な事を明言せられたのである。「朕は朕が採つて進むべき途を茲に天下に明かにする。今後如何なる時代に遭遇するも朕は決して此途から離るゝことなかるべし。即ち社會主義的政策を以て天下に臨むは朕が固く把握して失はざる所の方針てある」と述べられたのである。之は千八百九十

年六月二十日の有名なる御演説として公私の記錄に上つてゐるのである。處で此大會の結果は何となつたかといへば、社會黨は大いに喜んで、喜ぶと同時に非常の勢力を加へ來つたのである。其結果は忽ちルール地方の炭鑛夫大同盟罷工となつてあらはれた。鑛夫と資本家との間に調和すべからざる程の大軋轢を生じたのである。帝は得たり賢しと自ら仲裁者の地位に立たれた。一方は鑛夫連を慰め一方は資本家に諭された。不經驗なる皇帝は温言や一般論で兩者の調停が出來るものと思召されたのである。それて鑛夫に向つては、兎に角勤勉に働かねばならぬ。而して資本家の意を受けてかくして働けば汝等の希望にも近づくといはれ、又一方の資本家に向ては成るべく鑛夫を愛して調和するやうにいふ事をいはれた。然しながら實際問題は簡樸な温言や一般論で形付くものでない。其紛爭は益々激しくなつて、最後には實に手古摺られたのである。のみならず皇帝の社會黨に對する同情は社會黨議員をして非常な便宜と口實とを得せしめて其勢力は驚くばかり増加して來たのである。すると國内の保守黨連は非常に憤激した。此保守黨の憤激は皇帝に取つての大禁物、何となれば獨逸の陸軍なるものは彼等保守黨の同情によつて、其勢力を維持してゐるのである。それで保守黨が怒つて皇帝の言ふ事を聽かぬとなれば陸軍の擴張は到底見込が無くなる。加之社會黨議員の次第に増加して來るにつれて、こゝに大危險が生じて來た、といふのは獨逸の議會はプルイス議員が總議員の約三分の二であつて、他の聯邦議員が殘りの三分の一しか占めてゐないのである。それてプロイスの輿論が輿論となつて皇帝の政策を助けて來てゐるのである。然るに社會黨の眼にはプロイスも聯邦もない。聯邦議員と合して多くは皇帝の政策に反對する。それて將來プロイス議員の多數が繼續するや否やといふ事が怪しくなつて來た是に於て皇帝は忽ちにして先きの詔勅は忘却せられたかの如く、盛んに今度は社會黨高壓政策を取つて來られたのである。爲めに社會黨は一層憤怨の眼を皇帝に注ぐ。而して保守黨も餘りに帝のアテにならない

事を感ずるやうになつたのである。斯様な形勢であるから、今度は皇帝は盛んに保守黨の機嫌を取ることを努められた。保守黨は讀んで字の如く保守黨であつて、之は殆んど農民階級といつてもよろしい。從て保護政策黨であつて農民の利益を保護するを以て目的とする。皇帝は之に向つて其歡心を收めんが爲めに、農産物の保護政策を取られなければならぬ。すると今度は更らに自由黨が腹を立てゝ來たのである。自由黨は寧ろ商工黨である。商工黨に取つては保護政策は大禁物である。何となれば食料品や原料等の輸入品に對して重税を課けらるゝ結果となるので、材料が高くなる。勞働者の賃銀が高くなる。夫れ故に保護政策には大反對である。而して彼等に反對せられて皇帝の困るのは、彼等は、皇帝の熱中せらるゝ海軍擴張には贊成論者である。此等が擧つて皇帝の政策に反對するとなれば皇帝畢生の目的たる海軍擴張は玆に其歩を停めなければならぬに至る。そこで皇帝は兩楔に繋がれたる馬の如く右せんと欲すれば左の綱が引き、左せんと欲すれば右の綱に絡まれ、殆んど窮し切られたのである。以上の對社會黨政策と殆んど一班であつたのは獨領ポーランドに對する政策である。之を如何と顧ればビスマルクを怕怨せらるゝ結果として、ポーランド人をも大いに懷柔せらるゝ積りでビスマルクの高壓政策を破つてかゝられた。最初は大いにポーランド人に自由を與へ、プロイスから送られたアルスペックの如きも免職してポーランド人を擧げらるゝなど、如何にも自由寬大の意志を表示せられた。之によつてポーランド人は其德に懷くかと思はれた所が其結果はポーランド人の勢力を大いに養成せられたに止つて、其養成された勢力は一層皇帝に對する反抗力を强からしむることになつた。そこで又大いに怒られて、今度は非常なる嚴酷なる高壓政策を取らるゝやうになつた。ビスマルクすら敢てし得なかつた所の壓制を加へられた。爲めに國內のポーランド人は勿論、露領及墺領のポーランド人も擧つて皇帝を敵として獨領ポーランドに應援するに至つた。之が又帝の內政に一困難を加へたのである。

是に到つて可笑しいのは初めは毀してかゝられたビスマルクの政略に結局は悉く從はなければならぬことになつた。而してビスマルク公は流石に老政治家丈けあつて、社會黨に對しても、ポーランド人に對しても、高壓政策を加へたが、それが順序があつて而かもジリジリとやつて來たのであるから、收まりがついたのである。然るに皇帝は自身の手で一度娑婆に浮べて置いて、それを奈落の底に擲されたのであるから、爲めに大疵が生じた。今となつては内心にビスマルクはエラかつたと感じて御座る所もあらうと思ふ。序に帝の軍政をいはうか。軍隊丈けは一切紀律づくめて行くものであると皇帝は自信せらるゝが故に、兵卒たるものは一切萬事下士官以上の命令に服從して敢て一語の異論を唱ふべきものでないといふ事を度々宣言された。其結果下士官以上の連中は大いにいゝ氣になつた。兵隊に對して如何なる苛酷な事をしてもいゝといふ氣になつて傍若無人に振舞つた。それが爲めに兵士の脱營するものは一年に三千人の多きに達して來た。それて之も近頃は感附かれて頻りに何とかしなくてはならぬと御工夫最中であるらしい。先づ此等の爲政は寧ろ御失敗の方に近い。然し其中に大いに成功せられたのは

帝の新聞政策

であらう。皇帝が新聞政策に金を投じらるゝ事は實に非常なるものである。どれ丈け多くの費用がかゝるかといふ事は計り知るとが出來ない。從つて國内の半官報的の新聞は無數である。其中でも最も有名なのはケルニッシエ、ツァイツングてあつて、ケルンにあつて盛んに皇帝政略を代表する。外國人は此新聞を名づけて「ケルンの風信機」といふ。何となれば此新聞ほど定論定說のない新聞はない。昨日まて盛んに熱心に主張して來た議論ても今日は忘れた如く他の議論を主張する。それが極めてよくカイゼルの意志を代表するのであるから、此新聞の說の變ずるのを見て、皇帝の御意向を窺ふに足るのである。「ケルンの風信機」なる名稱は此處から起つた。此新聞と並んて有名なのはス

トラッスブルゲル、ツアイツングてあらうか、之は佛國から割き取つたアルザス、ローレンの誤魔化し機關てある。――誤魔化しといつては失禮――パン、ゼルマニズムの機關てある。然し此新聞の巧いのは、種々の問題に對して實に巧妙な詭辯を弄して、アルサス、ローレン二州の民を煙に捲き、獨逸皇帝の政策の如何に二州にとつて幸福なるかを主張して、それて二州を率ゐ來つたのてある。第三に有名なのはスッド、ドイッチエ、コーレスポンデンツ即ち南獨逸コレスポンデンツてある。之は南部の諸聯邦は最初からして餘りプルイスに心服してゐない。寧ろ止むを得ずして聯邦に加入した位のものてある。そこて此新聞を利用して此等の聯邦を盛んに懷柔せらるゝ。而して外交文書の如きは多く此新聞によつて發表せらるるので、外交社會ては見落すべからざる新聞として受取られてゐるのてある。其他、國内に無數の半官報があつて、其等が相應じて皇帝の政策を皷吹するのてある。それて兎も角も今獨逸帝國民は今日まて煙に捲かれて來てゐる。皇帝の御事業としては之が一番成功したものてあらうと思ふ而して此新聞事業と殆んど兄弟分の電報政策も亦帝の慣用せらるゝ所てある。遠くは日本などへも獨逸電報といふものが盛んに來る。而して其電報の如何なるものなるかは數千里外の我國民てもよく呑込んてゐて、ソラ又獨逸電報がといふ事をよく口にするのてある、斯樣に新聞政略と電報政略とを用ひて成功はしてゐるが、然しながら同國内にも帝の政策に反對する新聞も亦極めて多い。此等は遠慮會釋もなく帝の政策に反對し、帝の魂膽の如何なるものてあるかを曝露し、甚しきは帝を誣罔するまでに到るのてある。皇帝たるもの一分間の御安心も出來ないのてある。これより進んて

帝の外交政策―殖民政策―海軍政策―大帝國主義

の上に言及せねばならぬ、帝は即位の初めよりビスマルク公と反對の意見を有せられた。公にあつては大

膽ながらも、其大膽の中に細心を有して列強との折衝をなし來つた。然るに帝は傍らより之を見て之を歯痒く、もどかしく思はれたらしい。それて登極の初めから海外旅行列國君主の訪問を初められた。それが一通りの旅行、訪問てないから、ビスマルク公は大いに之に反對して屢々引留め策を講じたけれども、帝にあつては少しも之に耳を藉されず、思ふが儘に働かれた。其後ビスマルクを追ひ出された以來は最早や天上天下唯我獨尊てある。其爲さんと欲する所を爲し、其行かんと欲する所に行かれた。帝の政策は年々其手を伸べて來た。帝が日頃羨まれる所は、一方に於ては、陸に於て際限なく東亞に擴大した露國であつて、他方に於ては海を以て家とする英國である。皇帝のアムビッションは寔に宏大であつて、陸に於て香象となると同時に海に入つて鯨魚とならんと任ぜらる。然るに陸には先代讓りの敵國たる佛國あり、それの與國には露國があつて、國は露佛の間に介在する。而して海に力を伸さんとすれば百有餘年海上を檣制する英國がある。是に於てか帝のアムビッションを充さんとすれば何等かの政策を以て此等の國を悉く叩き附けなければならぬ。此に於てか故ビスマルク公の遺留したる賢明なる三國同盟を第一に繼續しなければならぬ。此同盟の力を用ひて西の方は佛國を威壓し、東の方は露國を牽制して而して雄圖を歐洲の大陸に伸べやうといふのである。それて獨逸の最も久しい與國はいふまでもなく此同盟なる墺伊二國であるが、而し皇帝最後の希望は何處までも之を同盟として提携するのであるかといへば、帝が墺國に對する秘中の秘策は掩はんと欲して掩ふべからざる所がある。彼の墺國たる人々の知れるが如く墺太利と匈牙利との兩國より成つてゐて而かも匈牙利は久しき前から獨立を回復せんと欲し、次第に勢力を增加し來つてゐる今日である。然しながら今に於て一旦墺國と分離すれば墺太利も匈牙利も二千萬足らずの中等國となる。而して中等國となつた結果は野心ある隣國の餌食となるといふ事は常に忘れぬのである。夫れ故に兩國の分離は容易に行はれさうもない、されてか

イゼルの此方面に向ての希望が帝の一代に實現せらるゝや否やといふ事は勿論疑問である。それから其次に帝の眼中に映ずる所のものはバルカン半島の併合てあらう。之については味方たるべき墺國も甚だ之を好まぬのてある。況んや露國は尙更ら之を欲しない。是に於てか帝の手は此方面に向ても伸べんと欲して伸べらるることの出來ない狀態にある。さらば海の方面は如何といへば此方面に帝の置かるゝ希望はそれは廣大なるもので千九百年の巴里萬國大博覽會の際、海中に設けられた北獨逸ロイド館の壁上に「獨逸の將來は海上に在り」といふ大文字をあらはされたが、帝の一代の政略をいひあらはされたのは此語である。此政略を實行せんが爲めに帝は孜々として海軍の擴張に從事し來られた。さりながら獨逸をして海上王たらしめんと欲せらるるには其國は餘りに北海の奧に引込み過ぎて居る。英國の前に立て彼國の海權を奪はんとせらるゝには、今少しアトランチックの方面に良好なる商港や軍港を有せねばならぬ。是に於てか帝の希望は和蘭のロッテルダムやアムステルダム、及び白耳義のアンヴエルに向はざるを得ない。多年一日蘭白の兩國を併合しようと思召す帝の希望は年を逐うてあらはれて來たのである。若し此絶對の中立國たる蘭白兩國が獨逸の版圖に歸したが最後、歐洲の均衡が忽ち破れる。然るに近年の狀態ては佛國一個の力てはカイゼルの此野心を挫くに足らぬ。是に於て最も恐怖を抱く所のものは誰よりも先づ英國てある。英國は其海權の自衞上、佛國を助けて之に當らざるを得ぬ事となつた。それて久しくカイゼルの間にあつた英佛の手は、ドヴアーの海峽の此岸彼岸から誰れ命ずるとなく伸ばされて、今てはコルチアル、アンタントと稱せらるれども、事實的同盟を形成するに至つた。即ちカイゼルの野心は兩國を驅つて敵國とならしめられたのてある。斯樣な次第であるから東の方バルカンの方面に出でんと欲して得ず、墺匈國を併すのは容易の業てなし、蘭白兩國の背後には英佛が陸海の力を併して控へてゐる。此等に向て如何に辣腕を揮はるゝと雖も皇帝の政策は近き將來には物に

なりさうもない。そこでずつと遠方の爲し易しさうな處に手をつけられたのか、歐洲に於ては土耳古であり、西部亞細亞に於ては波斯であり、東洋に於ては支那である此方面に向て得意の外交政略を盛んに振り廻されたのである。然し之も容易でないのは、土耳古及び波斯に關しては最も大いなる利害を有する露國がある。又支那に對しては我日本帝國といふものがある。カイゼルの希望を手放しに遂せられた日には露國も立ち行き兼ねれば、日本も立行き兼ねるのである。露國が如何に東方戰爭失敗の餘とはいへ、左程長く引込んでゐる譯には行かぬ。昨今の新聞を御覽なさい。波斯に向て存外強硬に折衝の手を加へつゝあるではないか。又日本とて臆病なりと雖も支那に對する皇帝の希望を手放しに實施されて、我々指を啣へて見てゐる譯に行かぬではないか。がそれはそれとして帝の烈々たる希望は年を追うて增大し來るのを見る。獨逸海軍の年々其勢力を加ふるは何よりの證據といはねばならぬ。帝は斯樣なる野心を有し賜ふが故に暫しの間も安閑としておはしまさぬ。サルタンを訪問せらるゝかと思へばツアールの手も握らるゝ。轉じては印度皇帝兼ブリテン王との御會見も一再でない。其間には偵察半分遊山半分に巴里まで年に一度位づゝは微行して步を移さるゝといふ事である。此行幸は何人も知らぬ。國内の人も知らねば國外の人も知らぬ。然しながら年に一度ケルンの地方に行幸せらるゝと丈は世間一般に認めてゐる。此ケルン行幸が擬物である。其御滯在中から伊勢への拔參り、イヤ巴里への拔け遊びもあるらしい。御滯在になる所は新聞にも雜誌にも出ないが、頭文字丈けを取つていへばR.Iとなる御旅館だといふ事である。年によつて一週間もこゝに滯在せらるゝといふ事である。此際は御微行も御微行、丸て田舍の伯爵か子爵が巴里見物といつたやうな、簡單な扮裝て、信任する左右二人を連れて赴かせらるゝといふ事である。古語に

白龍魚服して漁父に窘めらる

といふ言葉があるが或時の如きは、此巴里御微行の

時に非常な危厄にあはれたといふ事もある。それはモロッコ問題發生の當初であつた。例によつて兩人の侍從武官と共に輕裝して巴里に入り込まれた。すると蛇の道は蛇ともいはうか。如何にして之を探知したか、當時佛國の外務大臣であるデルカッセは何日の何時頃にどの方面から皇帝は入り來るといふ事を突き止めた。するとデルカッセ氏一代の奇策を案出したのである。警視總監を呼んで密かに之に内意を含め、高等警視二三名を破落漢に仕立てゝ、帝の進み來る路上に之を要したのである。其場所はバルコモンソーの邊であつたと聞いて居る。黄昏頃皇帝は二人の侍從とバルコの邊をスタ／＼やつて來られた。反對の方面から來た破落漢は行き摩り違ひに帝に衝き當つたのである。素より仕組んだ芝居であるから、破落漢も相當の紳士らしい扮裝をしてゐる。紳士は行き摩り違ひに衝き當るや否や、何をするかと憤つた。連れの兩人と共に皇帝の一群を目して、此奴等は掏摸らしい、自分の時計を掏摸らうとしたといふ言ひ掛りをつけた。皇帝は佛語は巧みである。二三語互に論判をしてゐると傍らから正服を着けた警官が出て來た。兩方を制して何事かと尋ねる。一方の紳士風らしき男は帝を捉へて此奴は只今自分の時計を掏摸りかけた。其儘に措けぬ奴といふ。帝の方では自分は決して左樣な胡亂なものでない。巴里見物の爲めに來た旅客であるといふ。互に之を訴へると警官は嚴めしき顔をして、此頃得て左樣な掏摸がある。兎に角も双方警視廳まで來いと拘引した、警視廳では一通りの調査をして、充分掏兒といふ嫌疑を帝の上にかけ、忽ち一行を拘留したのである。之を知るものは何人もない。只一人の外交家デルカッセが知るのみである。處がケルンに於ける皇帝の行幸先きでは前日來皇帝のお姿を見失つた。何處にゐらせられたかといふので伯林政府は非常な心配である。或は又例の巴里御旅行ではなからうかといふので、巴里にある獨逸大使館に秘密電報がかゝつたのである。然るに大使館に於ても之を知らぬ。少しも其消息を聞かぬ。大使も非常に心配らしく見えたが何うしても當りがつかぬ。

此際フイと思ひついたのは紐育ヘラルドの巴里エヂションの主筆である。此男は外交上乃至列强の帝王卿相の秘密については知ざる所なしと云ふ評判があつて、此れ迄も列强國の秘密を如何にして知るのか、素破抜いた事も度々ある。彼は或は皇帝の所在を知つてはゐまいかと氣が附いて之を大使舘に呼んで相談した。主筆は面白き鳥が懸つたといふので飛耳長目諸方に手を伸ばして、忽ちにして其夜の中に探り當てたのである。そこで彼は警視廳に赴いて、先きに拘留せられた掏摸の嫌疑者に面會したいと求めた。當局者は之を拒んで見たが、自分は嫌疑者の朋友で、彼は決して左樣な胡亂者ではない。是非面會さして貰ひたいと押問答の結果、拘留所の入口の所で帝を見た。それしやとそれしやの出會であるから餘り多く無用の言語をあからさまに費さずして、自分は獨逸大使の使命を帶びて陛下を訪問したものであるといふ意を通じた。其時皇帝は拘留所の中に居つて、じつと物案じに沈んで居られた。徐ろに此記者を見て、此細工をやつた男はデルカッセであらう。あの奴自分を何とする積であらう。少し探りを入れて知らせて呉れろといはれた。記者は萬事を呑み込み、少々御辛抱なさい。私に一策がある。時を移さずお救ひ出し申すてあらうと、言葉を殘して此處を立出て、其足にて直ちにケードルセイにある外務大臣の官舍を訪れた。有名なる記者であるからデルカッセは早速に面會した。すると記者は先づ問を發して、貴下は掏摸の嫌疑者三人が警視廳に拘留せられて居るのを御存じてあらう。如何にあれを處分せらるゝ積りか。其御處分如何によつては由々しき佛國の大問題てある。無論貴下は或一强國の主權者であるといふ事を御承知の事であらうと直ちに其的を衝いたのである。デルカッセの眼は輝いて、何、主權者といふか。自分は少しも左樣な事を承知せぬ。さりながら一國の主權者たるものが豫め何等の通告を共和政府に與ふるなくして此共和國内に入り込み來るべき筈がない。若しも果してそれが入り込んだとすれば、それは取りも直さず、共和國への侵入ではないか。佛蘭西には佛蘭西自衛の

權がある。自衛の權によつて自國を防衛するの外はない。適當に之を處分するの外はない。といひながら更らに言葉を變へて、然し左樣な事が今日あるべき筈がない。無論それは何かの思ひ違ひであらう。それはそれとして君は左樣な問題に携はらなくてもいゝではないか。茲に自分は君を煩はしたい事件がある。長くとは言はぬが、茲二日ばかりの間自分に買はれては吳れまいか。報酬は幾らでも出す。君の希望を滿足する丈けのものは出す。それて買はれては吳れまいかとの相談てある。記者先生は考へた。デルカッセも相當に出すは出すてあらうが、之れは一大帝國の帝王に買はれた方が餘程利益てある。と胸算をして、折角の御相談てあるが、昨今は非常に忙しいのてお求めに應じ兼ねると謝絕して、再三の懇囑を撥ね附けた。其儘彼はケードルセイを去つて、其足にて獨逸大使館に赴き、其始終を物語つたのてある。大使は實に眼を廻さんばかりに驚いた。そこて大使は之を公然の問題にした日には、それこそ非常の大事件てある。大使としては働き兼ねる。そこて一切を君に委任するから何等かの方策を以て救ひ出して吳れといふ事てある。記者先生は透かさずデルカッセの臭はせた鼻藥の談をも此際持込んだのてある、大使は引取つて無論其幾倍ても出すといふ話てある。記者は素より巴里の政界通てあるから、早くも此際に一策を劃したのてある。そこで、申さば成功報酬の約束までチャント取り極めて、再びフラリと大使館を出た。而して直ちにシャンゼリゼーの大統領の官舍へと馬車を驅つたのである。當時の大統領はファリエールて有名なる穩和家である。記者先生は大統領に見えて。閣下は今夕此巴里に起つた、佛國の一大事を御承知てあるかと問うた。ファリエールは怪訝な顏て、それは何の事かと問ひ返した。ある一大强國の主權者を警視廳に拘留せられたのは定めて閣下と外務大臣との御協議の結果てあらうといつたので、大統領は目を睜つた。それは一體如何なる事てあるか、自分には丸て寢耳に水てあるとの事てある。そこて記者先生は一部始終を話して斯の如きことは實に獨佛戰爭の再現てあ

る。外務大臣に如何なる胸算があるかは存じませぬが、斯様な事をせられては佛國を危険に陥るのではなからうかと心配の餘り閣下のお耳に入れるのであるといつた。記者の策略は果して圖に當つた。ファリエール氏は非常の驚愕と恐怖とを以て若しそれが事實とすれば片時も捨て置かれぬ事であるといひながら、直ちに馬車を命じてデルカッセ氏の官舍に赴いた。穩和なる共和國の首長の勸告は、辣腕なる外務大臣をして終に其政策を遂行することを得ざらしめた。其夜の中に嫌疑者のカイゼルは放還せられたのである。翌日の議會にファリエールは下院に臨んだが廊下に於て、極めて親しき朋友の一人に、前夜の有様を咡き、「あの小人島が殆んど共和國を戰爭に陷れやうとした」といはれた。此最後の語を聞き取つたものは對話者の一人のみでなかつたといふ事である。それかあらぬか秘密に佛國の政界に働いた獨逸政策の手は同國社會黨の首領ジョーレ氏によつてモロッコ問題について大攻擊の鋒先がデルカッセ氏に向けられた。一年の後にデルカッセ氏は遂に外務大臣の地位を退くの止むを得ざるに至つた。此際に外交家の一人が獨逸の大宰相フォン、ビューロー公爵夫人を訪問し、談偶々デルカッセ辭職の事に及んだ。すると公爵夫人は「辛やく昨年の仇が打てました。」といつたといふことである。以上の談は餘り小說染みてゐるから果してそれが事實なるや否やは明言するの限りでないが、然し巴里では確かに事實であると今に信じてゐるものが少くない。皇帝は隨分危險な橋を渡らるゝ人である。然しながら最後に

帝の英略

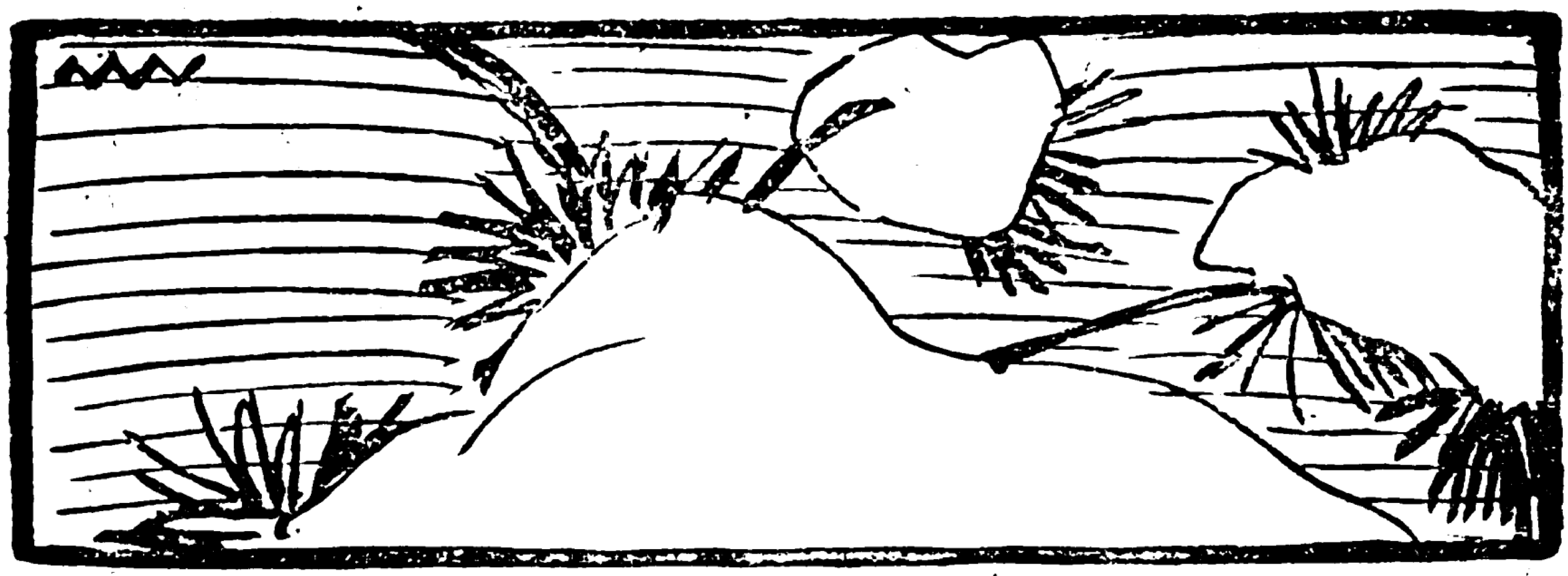
を吾人は認めねばならぬ。帝は即位の後未だ一年をも出でざる中に土耳古の地方から地中海沿岸の二三國を訪問せられた。其際にマルタ島の近傍にある何とかいふ島、今一寸其名を度忘れしたが、其島が海軍の根據地に適當であることを見出されて、やがて外交の手を用ひて之を獨逸の旗下に置かれた。此等を手始めとして或は波斯に獨逸の勢力を擴大せられ、殆んど波斯

の國を擧げて一時は全く獨逸の勢力の下に置かるゝまてに至つた。又サルタンの政府を籠絡して昨年の如きは獨逸と秘密同盟が成立つたと世界に信ぜらるゝ迄此國をも懷柔された。それから亞弗利加に於ては彼の英國の縱斷鐵道に對して横斷鐵道を計畫して、將來同大陸に大勢力を扶植するの素地をなされたのも此帝であり、モロッコ問題については少々藪を突ついて蛇を出された氣味が無いでもないが然しながら種々の難問を吹き掛けて佛國の弱味に附け込まれた結果はあれでもコンゴーの方面に於て少からざる殖民地の讓與を贏ち得られたのである。而して東方に於ては人々の知る通りに明治三十三年の北清亂以來膠洲港は永く獨逸三色旗の下に置かれ、機會が來たならば山東の大半島もどうやらゼルマンゼーせられさうな樣子も見える。而して彼の三國同盟の基礎が緩みかゝつたのを見るや否や露西亞の西に向つて之を爭はざる丈けの機會を捉へて、墺國をして土耳古領のボスニヤ、ヘルツゴヴイナを墺國の勢力範圍に收めしめて同國の歡心を收攬し。又同盟の一たる伊太利が墺太利の此擧に憤慨し、隨て獨逸の賴み甲斐なきを怨むの結果、動ともすれば英佛に接近せんとするを看取せらるゝや、皇帝の手は再び動いたと見らるゝ。大抵其筋を辿つて最近の出來事を讀んで見れば、伊太利が打切棒にトリポリ占領と出かけた如きも之も何かの報酬ではなからうか。爲さしむるものあつて之を爲し、認めるものあつて之を認めたものといはなければならぬ。先月土耳古の議會に於て進歩派の首領が此現狀を憤つて新同盟國を求むるの必要を公言したのも偶然ではないと思はれる。而して帝の御世に及んで獨逸の海軍は年々に盛んになつて、海上王の英國をして尚且つ之に對して戒心せしむるまでに至つたのである。此等の中には破綻もあり、失敗もあるが、兎も角も當代の英主といはねばならぬ。只帝に遺憾とする所は詐力を尊んで王道を後にせらるゝ事である。それで緣遠き所の國民までが帝に對して

ゲルマニのなかを流るゝスプレ川
　濁れる水に鬼の影見ゆ
逆しまに裂くゐそらす國宗(コニキン)の

つら靡ておろす山風もがな
仲連が屍草むす野邊にして
我コロニーといふは誰ぞも

と歌はしむるゝは、餘り帝にとつて結構な事ともいへぬ。帝の御祖先フリードリッヒ大王の起されたポッツダムの離宮の正門には、今に"Sans Souci"の二大語が掲げらるゝ、譯して之は「莫愁城」の名によつて東洋の端までも聞えてゐるのである。此宮名は何によつて起つたかなればフリードリッヒ大王が此處に離宮を置かれた際に、皇宮の前面に風車を以て麥を精げて之を商賣にして居る老翁が居た。此爺極めて暢氣な爺である。當時宮中には大詩人のヴォルテールが大王の招聘に應じて滯留してゐたので、此詩人が右の風車爺を捉へて命名したのが初まりてある。日本語で言つたら「暢氣爺」といふことてある。處が其風車は普通の屋根よりも高いので、離宮から前面の眺望を遮るのである。そこで一日大王は爺を召されて、貴樣の持つてゐるあの風車は如何にも目障りてある。早々あれを取り除けるやうにと命じられた。處が此爺暢氣な丈けに又極めて無遠慮てある。それは陛下のお言葉とも存ぜぬ。此爺にあの風車のあるのは大王にプロイスのあるやうなものである。今、人があつて、大王にプロイスを取り除けるやうにといつたならば、大王は何となさるゝか。陛下のお定めになつた國法は決して個人の財産を取り上げらるゝことを許さぬ。左樣な理をお仰つても此國法が許さないといふ事を御承知なされと言ひ放つた。流石に創業の君主である。之を聞いて大に感嘆された。爺は朕が國法を此處まで深く信頼するか。風車を取り除けろといふものは全く朕が誤りてあつた。そちと朕とは之から隣家の附合をしてお互に長く此プロイス國に安んずるてあらうといはれた。そこで直ちに爺の譯名"Sans Souci"を採つて離宮の名とせられたのである。此宮殿にはカイゼル陛下も月に幾度となく入らせらるゝが、扨カイゼルの今の狀態では、身は假令"Sans Souci"の宮城にゐらるゝとも、それが「莫愁城」にあらずして事實は"Souci"即ち「煩悶城」である。"Sans Souci"を"Souci"にせられて陛下は自ら憂ひられぬかも知れぬが、寧ろ見物の方が氣に掛る。も少し安らかな道を行かれて獨逸帝國を"Sans Souci"にせられる方が寧ろ得策てはあるまいか、といふのが世界一般の閑評てある。遠い所から斯樣な事を申しても所詮お耳には達しまい。（完）



死馬の骨

東京朝日新聞記者　楚人冠

一、幽靈

此の次の讀書會には、僕が「タイムス」のディレーン傳の梗概を解說するとになつてゐた。丁度横濱開港五十年祭の騷ぎも過ぎ、露國觀光團の一行も東京を引上げ、夫に「東京朝日」の社賓といつたやうな「タイムス」のチロル君も愈々亞米利加へ立つとになつたので、僕が關係の仕事は一時に片づいて、左しも忙しかつた僕が身も俄に身輕になつて來た。此の間にこそと、僕はディレーン傳二卷とブームラン一本とを携へて、飄然として藤澤在は明治村の海岸に下つた。――忘れもせぬ明治四十二年の七月六日、雨のしと〱と降つてゐる夕まぐれ。

何がしといふ宿に着いた。此頃大分降りつゞいた雨に恐れたか、いつも今頃は賑はふ海水浴の客も此處には丸で見えず、見たところ、殆ど人らしい人の氣はひもしない。僕は、僕が來たのを見かけてあわてふためいて雨戸を繰り明けた二階の黴臭い一室に通されて、一先ぽつねんと其處へ坐つては見たが、後から誰かゞ覗き込んで、ふうふと襟元へ息を吹き入れるやうな氣がし

て、以ての外に薄氣味が惡い。一寸廊下に出て見ると、心せずに踏み〆めた足音が、びん／＼と其處等一面に響き渡つて、何だか其の邊の薄暗い片隅からわアッと言つて飛び出て來る奴があるやうで堪らない。折ふし遠い／＼臺所の方で茶碗のかち合ふやうな音でも聞えると、其處に言ひ知れぬ人間のなつかしみを覺えて嬉しかつた。それ位淋しかつたのである。

全く誰もゐぬと思つて、こは／＼二階を見て回つた。廊下を中にして四室許りある。十五疊位のが一番大きいので、夫から八疊六疊又六疊などある。孰も雨戸をしめて暗がりのまゝてあつた。順々に見て回つて階子段の處へ戻つて來ると、薄暗がりてしかとは見えぬが、足音もさせずにまち／＼と女の顔が見える。段階子の中程に立つて、昇らうか止さうかと躊躇つてゐる様子てある。夫が僕の顔を見るとひとしく、搔き消すやうに下に消えた。――是れ大變、決して生の物てはない。顔の色も透き通るやうに蒼かつた、氣のせいかにたと笑つたらしいに顔、見たことのある女とも見えた。僕はぞうッと頸筋から水を注された心地がした。

嗚呼まち／＼と女の顔！

今思ひ出しても馬鹿／＼しくて吹き出したくなるが、其の夜女中が夕餐の膳をもつて來た時、僕は此の家には何か變つたことがないかと聞いて見た。若し少しても胡亂な挨拶をするやうてあつたら、早速幽靈が出るだらうと、急所を突いてやる積てあつた。所が女中は存外平氣てゐる。變つたこととは一體何なとかと聞いた。今は騎虎の勢、『例へばお化が出るとか何とかいふやうな――』と言ひも終らぬに、女中はぷッと吹き出した。『あら貴方もあんなことを仰るのね。あれはちやンとした生の女てすよ。』と何もかも呑込んてゐるらしい。僕は流石にきまりが惡かつた。『貴方も』といふ所から見ると、外にもさう思つた人があるのかい。全體あれは何だい。』節を屈して僕は有りの儘に尋ねた。女中の說く所に據ると、之は大分前から逗留してゐる東京のお客てある。しとやかな、おとなしい女て、廊

下を歩くにも足音もさせずに靜かに歩くから、時々不意に後から呼び掛けられたりするヿさへある。夫が面やつれのした白い顏を薄暗がりの中へ出すので、此の前にも或るお客がお化と間違へて聲を立てたヿがあつたさうな。何時も夕方には二階へ來て、此處から海を見晴すことにしてあつたので、今日もうかと登つて來た所が、僕が居合したので、其の儘引下つたのだといふ。成程と僕は赤面した。

「いゝ女てせう」と女中が言ふ。

「暗がりてしか分らなかつた。色の白い所だけは見えたが――」

「新橋から出てゐたのてすッて」

「今は？」

「今ても出てはゐるンてすけれど、今は何處とかの知事さんだか何だかの世話になつてゐるンてすッて。病氣や何かて大方は休んてゐるンてすッて。」

「てすつて」が邇りにつゞく。

「それから？」

「夫が病身なもンてすから、長い間此處に來てるンてすよ。時々其の知事さんだかゞ見えますわ。忌な方ッたらありませんの。旦那が見えると、乾度其歸つた後て、熱が高くなつて二三日寢込むンてすもの、可愛さうてすよ。旦那の來るッて日は朝から顏をしかめて居ますわ。だけれどもあの方は感心てすよ。病身て居てそんな痛い辛抱をして、夫てお父つあんと姉さんとを養つて、弟さんを大學校へ通はせてゐるンてすッて。弟さへ居なけりや死んてしまつても宜んだけれどもなんて時々言つてますわ。商賣に出てゐた方に似合はない、そりやア人柄な方よ。だから宅ても皆が大事にするわ。」

宜い氣になつて、女中は段々ぞんざいな言葉使ひを始めた。聞くに隨つて、思ひ當る所があるやうな氣がする。

「何といふ名？」

「ただふうちやんてますわ。文さんてんてすか、多

子さんなんてすか、知りませんわ。』
『顔は？』
『丸い方てせうね。宜い毛ッたらないンですよ。』
『背は？』
『低い方。』
『色は？』
『黒くはないけれど、際立つて白いといふのてもないてせうね。』
『年頃は？』
『二十三四。夫とも五六にもなりませうか。』
『もしや其の女が物を言ふ時、前歯の隙から風が洩れて、いゝ、すッすと口笛のやうな音をさせやしないかい。』
女中は目を丸くした。
『能くお存じね。全く其の通りですわ。』
もしやと思つたが、果して夫てあつた。

二、げいしや

ふとしたとから、其の女の名は、僕の記憶に留つてゐる。

僕が初めて露西亜に出かける時のことてあつた。出立の少し前に、社中の誰彼と一夕大に新橋て飲んだことがある。其の時、何かの話の次手に、來合せてゐた藝妓共が、行く先々から畫端書を送つて呉れとの注文てあつた。其の中にたしか不美子とかいつたおとなしい女がゐて、之が一番仕舞になつて、貴方が歐羅巴とかへ一足ても踏み入れた其の處から一枚送つて下さいとの注文てあつた。不美子といふ珍しい名と、注文の一と風變つてゐたのとが頭に殘つて、僕は馬鹿正直に、西伯利亞の旅路の中て、愈々ウラル山の絶頂停車場ズラトウストを過ぎて、身は歐羅巴の人となつた時、山の彼方の麓のウフワといふ驛から、約束通り此の女に畫端書を送つた。所が其の後日本に歸つて見ると、もう此の女は新橋に居なかつた。落籍されたのだとも言ふし、病氣て休んてゐるのだとも言ふし、さては、死んだのだといふ者もあつた。

何ても此の女はもと横須賀の相當な商人の娘て幼い

時は、人並の教育も受けたものであつた。夫が一年橫須賀の大火に焼け出されて、之が爲に家運一時に衰へ、いつかは遂に身を藝妓に迄落すに至つた。美人ではあり、人柄ではあり、夫に饒舌ではないが、愛想よく打解けて何かの物語をする所に一種の才があつて、追々に最負の客もついて隨分流行らした女ではあつたが、哀矣哉、彼は性得身體が弱かつた上に、火事の時逃げ損ねて手ひどく胸を打つたのが原因で、結核性何やらといふ變な病氣に取りつかれて、始終藥を手離したとはなかつた。父なる人の若い時の不身持から、三腹だか四腹だかに出來た此の女の同胞が、男女合せて十四五人もあつたが、夫が又揃ひも揃つて碌でもない者ばかり、殆ど盡く此の女の厄介にならぬはなかつた。男の方は、兄なるものが三人は三人とも不良少年の群に入つて、賭博は打つ、小泥坊はする、金がなくなつたとては妹の處へせびりに來る、手も足もつけられない。頼みに思ふは只一人の弟あるきりだが、之が又、姉に似て始終身體が弱くて、時候の變り目には必ず二週間か三週間ばかり寢込む。夫れも病氣の名も分らぬ、いやな容體で、たゞ午後になると熱が出て、幾日も／＼退かないでゐて、其末やつと治ればげッそりと痩せるのは定りだ。醫師に聞いても、分つてか分らずにか、曖昧なとばかり言ふので、姉は其度毎に氣が氣でない。更に飜つて、女の方はと言ふと、十幾人の女の内、半分は死んで、半分は勝手にいゝ加減な男を拵へて、片づくともなく片づいて居る。片づき損ねて宅に殘つた姉一人は、若い時から激しいヒステリーで、發作が來る時は丸で氣違ひ同樣になる。恐らく此の女の命のあらん限りは、妹の世話になるより外はあるまいといふ。永年の苦勞に胸を痛めて母親は疾に世を去る、父は得たり賢しと年甲斐もなく女狂ひをする。彼[illegible]慘たる有樣はほゞ之を以て[illegible]

然るに、不幸はまだ之に止らぬ。

彼が藝妓となつて出た家の姉といふは、名代の强慾非道の女であつた。惣じて藝妓屋の主婦などいふ者に聖人君子のあらうやうはないが、夫にしても此處の

女將は一通りの者ではなかつた。——よい來手だから此に一撃を加へておくが、凡そ世に藝妓屋の主人なる者ほど不埒千萬な者はない。藝妓にでも出やうといふ貧しいかよわい女を捉へて、虐げられる限り之を虐げるのを己が能事としてゐるのである。先づ某々の年期の約束で、何がしかの金を借りて、女が藝妓に出たとする。不幸にして其の女が餘り流行らなかつたとすると、其の初己が撰擇を誤つた罪は顧みずして、當りちらす、叱りつける、こきまはす、見るにも聞くにも忍びないやうなことを無理强ひに强ひる。泣かうが喚かうが、そんなことに驚くものでない。假に又此の女が出る早々大に賣れて、主人の實入も思ひの外に多いとなると、咽喉元過ぐれば熱さを忘るゝの譬通り、之を愛撫せんとはせずして、更に改めて之を窘むるに別途に出る。何年稼げばとて、何千圓儲けたればとて、稼ぎ高の勘定は、本人が督促する迄決して知らせず、本人から求められて漸く見せたところが、無敎育な女の身には、はツきり何程入つて何程儲かつてゐるか分らないやうな勘定書を見せる。だから隨分亂暴なことを書き入れてあつても其まゝ泣寢入になつて了ふのである。之を泣寢入にせぬやうな女に對しては、稼ぎ高は正直に書き出しても、之に伴ふ出費が何程〳〵と宜加減な事を言ふ。弱味のある女の哀しさ、ちと怪しいとは思ひながらも、さうづけ〳〵と言つて了ふことは出來ないから、其末やつとの思で約束の年期が明けても、思ひがけぬ借金はまだ殘つてゐるといふ譯になることが屢々ある。又稼いで稼いで間もなく借金も何も拂つて仕舞ひさうな流行妓と見ると、今度は態と勸めて入用でもない衣物や頭の物を買はせて、借金を增させる工夫ばかりに頭を惱ます。甚しきは、賭博を敎へ、役者狂ひをさへそゝのかして、金を使はせて、以て少しでも年期を延ばさせやうとするさうな。延ばされるだけ延ばさせて愈々もう之て如何ともすることが出來ぬといふ時に至らずんば、決して引くとも自前になることも許さぬ。之を許すといふ前にも、禮奉公とか何とか唱へて、又餘分に無報酬て、半年や其處等は働かせる

のである。夫もすんて、やつと自前になるにしても、兎角看板を分けてやることは分け澁つて、出來るものなら看板借か何かて自分の店に留めやう留めやうとのみする。これほどの剛慾を乾く位のことだから、偶ま其の女に宜い旦那でもつくとか、罷り間違つて落籍といふ相談でも起るかすれば、吹き掛けるの何のと言ふも愚かや、絞られるだけのものは絞り取つて、而かも當の本人の女には丸て殆ど與ふる所がない。其の剛慾非道凡そ此の商賣をする者の如く甚しきはないと聞いてゐる。此等が僅ばかりの金を貸したを笠に着て、貧しい弱い女を苦めて金にしやうとするのは、正に赤子の手を捻ぢ上げ、病人の枕を押へて、金を強請るにも似てゐる。不埒とも何とも言はうやうはないのである。

百人が百人、悉く斯うでもあるまいが、先づ大抵斯ういふのが多い。中にも右に出た女の宅などは、其の極端なるものであつた。いつか其處の抱への或女の親が非常に之を憤つて自由廢業をさせた時、又さる年新に抱へた年増藝妓が大酒食ひの道業者であつて、散々金を主婦から借り出した揚句、ふいと行衛を晦まして了つた時などは、後に殘つた一同手を打つて、其の痛快を喝采した位だといふ。

此の話は、不美子がまだ出てゐる頃最も親しくしたといふ或女が後に何かの話の次手に僕に敎へて吳れた所である。「ほんとうに不仕合な氣の毒な方でしたわ」とさも氣の毒さうに彼は結んだ。併し此の女も不美子が今何してゐるかを知らなかつた。

そんなこんなて、顏も何も全く忘れて了つた今日迄、女の名だけはちやんと忘れずにゐた。其の後僕は二度西伯利亞を通つたが、道ウラルにかゝつてウファを通過する每に、不思議と此の女の名が思ひ出された。だから初めて此處で突然ふうちやんの名をきいた時、直ぐ若しやと思つたが、いろ／＼聞いて見た結果何やら矢張り夫らしかつた。夫にした所が、僅に名を覺えてゐる所の僕の方でさへ、顏は全く忘れてゐる位、況や、先方は唯一度大勢て會つたきりのこととて、無論忘れ

てゐるに相違ない。此の互に一度きりしか逢ひ見ずして、其の儘分れて、双方で名も顔も忘れて了つた頃に、不圖此の飛んでもない片田舎で邂逅ふといふことが、何だか非常にローマンチックのことのやうに僕は思つた。同時に若し其の女の方でも僕の名だけも記えてゐたらば、愈々以てローマンチックだらうにと思つた。

こんな埒もないことを考へながら、其の夜は其のまゝ臥床に入つた。

三、新聞記者

翌日は、朝早くから一室に閉ぢ籠つて、デーセントのディレーン傳を讀み始めた。何にしろディレーンは年僅に二十三にして倫敦「タイムス」の主筆となり、死に至る迄其の職に在つて、「タイムス」の爲に草すこと三十有七年、其の間自ら公にする所の論文、約四萬餘編に及んだといふ程の古今無類の大記者である。殊に彼れの主筆時代には、從軍記者の鼻祖たるヰリアム、ラッセルがゐる。古今獨歩の通信員たる巴里のブローヰッツがゐる、英露の戰がクリミヤに起るべきを衆に先じて豫言したオリファントがゐる。其他デーセントがゐる、キングレーキがゐる、上には社長の第三世ジョン、ウヲルターあり、之を助けて營業主任にはモーブレー、モリスあり、正しく一代新聞界の精華を、わが「タイムス」に集めた觀がある。然るが故に傳記の大筋は頗る面白いものに相違なかつたが、何分其の書き方が如何にもだらく\/して、小うるさい程澤山な書面が交つて、くど\/しいなんど言ふ段でない。之を二卷六百五六十頁今日中に讀み終つて明日は東京へ歸らうと言ふのだから、さながら大般若の轉讀も斯くやとばかり讀まなければ追ひつかぬ。讀むといふよりは寧ろ飛んで行くのであつた。

夫につけても思ひ出すとがある。僕が昔し居た學校に、「國家及社會」といふ講坐があつて、ドラパースといふ先生がその受持であつた。學年の初に、教科書はブルンチュリーの「國家論」と定めて置いたが、元來僕の級は生徒といふのが僕一人、始終先生と只二人きりであつたから、先頃亡くなつたロイド教授の英文學

史の講義などには時として無關係な世間話を持ち出して一時間何につぶれたか分らぬやうな講義に終つたときある位、此のドラパース先生も、教科書は其方のけにして快辯滔々と社會主義やら日本の財政論なんどに切り込んで、口角沫を飛ばしてまくし立てることが多かつた。此の調子で面白可笑しく一年は過ぎたが、何分早口の快辯滔々とあつて、試驗前になつても筆記も何も一切僕の手に留つて居らぬ。せうことなしに之を先生に相談すると、生徒も暢氣なら、先生も隨分暢氣なもので、先生自分にも何を講義したかさッぱり記えて居らぬとのことであつた。そこで兎角の評定の末、兎に角試驗は豫て定つてゐた教科書でしやうとのことになつたので、僕は殆ど初の二三十頁の外全く讀んだとがないブルンチュリーを急に引張り出して、一日の間に三百頁許讀んだ。天にも地にも之ほど滅法界な讀み方はないと思つてゐたが、今日のディレーン傳の飛び讀に至つては正にそれの上を越す。僕は晝少し過ぎる頃までに第一卷を讀んで了つて、チャンと要點をノートに取つた。勉强すれば出來るものと、平生不勉强な僕は、何だかむづ〳〵と身體中の痒いやうな心地がした。

午後になつてからは、更に第二卷目に讀み續けたが、疲れた故か何か、今度は一向捗らない。强ひて讀み進めやうとしても、更に頭に入らぬ。已むを得ず茶を飲んで見たり、烟草を吹かして見たり、ぽかんと天井を眺めて見たり、さま〴〵に身をもがいて悶えに悶えてゐる處へ　今朝から姿を見せなかつた昨夜の女中があわたゞしくやつて來た。變ににや〳〵と笑つてゐる。

『彼方でもちやアんと記えてゐるンですッて』

又「ですッて」かと僕は可笑しかつた。

『今宿帳を見ましてネ、「アヽラ此の方なら能うく知つてるワ」ッて言ひましたよ。何とか仰しやいよ。今此方へ伺つてはいけませんかッて。何しませう？』

僕は今其處どころでない。

『折角だが、今日はいけない。明日ゆッくりお目にかゝりませうと言つて吳れ。』

一言の下に斥けた。何だか非常に痛快を覺えた。實をいへば、内心一寸逢つて見たくないでもなかつたが、女中の口上が如何にも何か大變な吉報を齎らし來つたやうな調子で、之を僕に傳へれば、僕が如何にも相好を崩して躍り上つて嬉しがりでもするもの丶如く思つて居るらしかつたのが、少からず僕の自負心を傷つけて、僕はふと反抗して見たくなかつた。女から逢はうと言はれて、直ぐ承知するが如きは、「一句合頭語、萬劫繋驢橛」ぐらゐに僕は心得てゐた。腹がへつてもひもじくないのを古武士の面目とするなら、逢ひたくても逢ひたさうな顏を見せぬ所に、男の意地はある。全體世の中の男共は兎角女を珍重しすぎていかん！餘まり珍重するから、女は宜い氣になつて男を馬鹿にするのである、逢はうとてさう容易に逢つてやるものかと僕は憤慨した。いじくもやりつるものかなと、僕は腹の中で笑つた。

女中は折角持つて來たものを斥けられて、不興氣にぶつくさ言ひながら出て行つた。

ディレーン傳はもう夫れきり進まなかつた。僕は讀んだ所だけのノートを整理して、次の讀書會の講莚は、先づ第一卷だけで間に合せるとに定めた。

四、知事

翌朝其の女がやつて來た。

開け放した夏のとて、別に案内も乞はずづか／＼入つて來て、輕く目禮した後、「明日來いなんて貴方は相變らず貴方ねえ」と花やかに笑つた。逢つて見ると、流石に見覺えがある。「貴方も相變らず貴方ねえ」と前齒の隙から息を洩らして、可愛らしい口つきをしながら笑ふ所は、此の女も相變らず此の女であつた。

話頭は自とウラルの端書から始つて、あの端書を戴いたのは、丁度病氣で臥せつて居る時であつたといふ。長く煩つたのかと聞けば、少し言ひ澁りながら、僕が立つた後間もなく、或る人に落籍されて、初めて人の妻となつたが、夫から又間もなくひどい肋膜炎に罹つて彼此三月ばかりも床に就いてゐた。同じ肋膜炎でも餘程性の惡いのとかで、一時は醫者も大分心配し

て呉れた。夫がやつと治ると、今度は賴みにしてゐた良人が、相場にしくじつて、夜逃同樣何處へか逃亡して了つたので、良人の身の上を思はぬではないが、宅が宅て一日も安閑として居られぬ所へ、お聞き及びてもあらうが、例のやかましい父のゐることとて、餘儀なく暇を取つて再び藝妓の身となつた。其の中今の旦那の世話になることになつたが、此の正月から又もや前年のと同じ肋膜炎に罹つて、大分寢込んだ揚句、やつと起きられるやうになつて此處へ療養に出て來た。此處へ來てからでも、もう二月ほどになる。「何だかもう私も長いことはないやうでしてね」と附け加へた。

　氣の短い僕が書き縮めたればこそ之れだけだが、しんみりと落着いて、夫から夫へと細かに話して行くのを聞いてゐると、中々急に埒が明かなかつた。僕に小說家の筆が有つたら此の女の物語だけでも結構一條の小說が出來やうものを、好漢、惜むらくは小說は書けずと、殘念に思つた。

　女の談が尙つゞく。

今の旦那なる者は、某縣の知事である。一寸いゝ男ではあるが、いやにつんとして、しつッこくて、おまけに燒もちやきて、いやで／＼ならないけれども、此の人には此の前の方に落籍される前から御贔負になつた緣故があつて、今度出てからも病人と知りながら、御世話下さるといふので、難有いやうな、迷惑なやうな氣て我慢してゐる。「どうせ藝妓の旦那なんてものに、滅多にさう氣の利いた方はありやしませんわ。」と憮然として女は言つた。五十萬の縣民の上に臨んで、鹿爪らしく地方の政治を司る身ながら、一たび此の女の口にかゝつては「どうせ氣の利いた方ではない」となる。成程斯ういはれて見ると、大分氣が利かなくなつて來る。

　何いふ行きがゝりてあつたか、つい言葉の調子とでも言ふものか、此の無口らしいおとなしい女が、先づ總じて旦那などいふ者に碌なのはないと罵つた次手に、更に其の知事なるものを散々に嘲つた。

「男も何處かにきッとした所があつて、何だか斯う

馬鹿に出來ない、——私共のやうな女に一寸見當のつかない所がある方だと、頼もしう御坐んすが、あの方みたいに、私の機嫌ばかり取つて、右向け左向け、どちらにでも私の言ふ通りになる方は、御親切は有り難いけれども、失禮ですが、私好きませんわ。與し——何とかと能く殿方が仰いますね』

きまり悪げにほゝゑみながら尋ねた。

『——その與し易いとか何とか言ふのですよ。あんなて能く知事なんか勤まりますことね。私は成るべく少しても御恩になりたくないと思つて、出來るだけ無駄な費をかけないやうに心掛けて居ますが、もし之が腕のある妓か、又は前に私のゐた宅の、————ネ、ホラあの宅の母さんのやうなえらい方がついてゐたのであつたら、夫こそいくら絞るか知れやしませんよ。夫てなくても何か要るものがないかの何のつて、始終御自身の方から仰るのですもの、勿體ないけれど、うるさう御坐んすわ。』

『お醫者さまもさう仰いますし、それに十年このかたの持病ですもの、どうせ私も長いことは御坐んすまいよ。ですから餘まりうるさい時は、慾も得も忘れて、いつそすツぱりと切れて、太く短くてなことを考へることもありますけれども、——』

と太息を吐いて、

『あの酒ずきの父でせう、氣の狂つた姉でせう、而して學校には居るものゝ年中藥を絶さない弟が居るんでせう。私が何かなつたら、何することも出來ないぢやありませんか。どうせ長くないものなら、暫くの間の辛抱だからと、我慢をして居りますの。』

如何にもほろりとした調子で言つた。斯な話になる筈ではなかつたが、話頭が妙にこぢくれて來たのであつた。

『いつかも或るお坐敷で、宅がまだ横須賀て立派にやつて行く頃にお附合してゐた方の息子さんといふのにお目にかゝりますとネ。私を見て、しみ〴〵とお氣の毒なと仰るンですよ。「何とか勘辨が外にありさうなものぢやないか」と、——いゝえ、悪氣でな

く、御親切に仰るンですよ。それはもう私共の商賣は、賤しいことに相違ありませんけれど、之をやめて、正業——てんですか、——其の正業とかに就いたら何なるでせう。教育もなし、行儀も知らず、まア何處かの女工にでも雇はれるか、堅氣のお家の女中にでもなるより外に、仕方がないぢやありませんか。なつた所で、迚も今の一家を何するとも出來やしません。誰が好んで斯な商賣をするものですか、御親切かも知れないが、餘りだわと、其の時は思ひましたわ」

と今度は少し勢づいて來た。

次手に聞いて見ると、此の女などが商賣に出て、藝妓といふだけの收入が、少し能く稼いだ時に樂に三百圓以上に上る。一日にお約束を平均二つもつとすれば、此の額になるので、格別むづかしいことでも何でもない。此の上働きのある女が然るべき旦那を持つとか、さてはずッと身を下して賤しい勤をかまはずやるとかすれば、二百や三百の金は何とでもなる。學問も藝も格別ない女の身で、外に之だけの收入のある仕事があるものでないとのことであつた。——いや、男にしても一寸ないと、僕は内心可笑しかつた。

此の女の話だけ聞いても、彼れの病は既に膏肓に入つてゐると僕は察した。此の病餘の枯骨を提げて、身を捨てゝ一家を支へて行く所は、さながら名將が敗殘の兵を率ゐて孤軍奮鬪するの概があると、僕はつく〴〵感心した。彼の助平親父の某知事が、此の女の爲に月々百二百の金を投じて惜まぬのも、見やうによつては玄妙な天の配劑かと僕は思つた。女には馬鹿にされ、世間からは物笑ひの的となつて、而も顧みずして金を貢いで行く所の知事は、或は恐る、放身捨命、兒を憐んで其の醜を忘るゝ底、一切の名も利も棄てゝ、此の可憐の少女を救はんとする大菩薩の權化であるかも知れぬ。と思ふと今の今まで愚かしい男とばかり思つてゐたのが、急にありがたくなつて、假に紫磨黄金の色を放つて見えた。

『斯なにいろんな内手の事までお話するのは今日が初

めてゝしてよ。何したんてせうねえ。」と女はにこやかに笑ひながら言つた。「てしてよ」といふのが此の女の癖てあつた。

五、博士

ぢぼたら／＼と未練たらしい雨は、其の日の午後迄降りつゞいた。會話の種も大方盡きた頃午餐を一所に喰べて、さて所在なさに試みに五目を列べて見る。始は僕が勝つて、次の二番は女が勝つて、最後に又僕が勝つた。今度は五番勝負にして何か賭けやうといふとになつた。不圖西洋の或る書物の中に、男と女とが何事かを言ひ爭つて、其の末遂に接吻を賭けた話を思ひ出した。勝つた者が負けた者に接吻をするといふのてあつたが、つまり何方が勝つても同じ事をするのてあつた。僕が此の女と賭けた所が、結局何方にしても僕の負に歸するのだとは思ひながら、兎に角、僕が勝てば女は東京迄僕を送つて來る、女が勝てば僕は大磯迄此の女を連れて行くといふ事に決めた。

やつて見ると、初めの三番とも僕が勝つて、夫れ切り勝負はついた。冗談と許り思つてゐたに女は約束通り是非東京迄送らうといふ。僕にはちと迷惑てないてもなかつたが、斯な冗談のやうな事にも、言責を重じて、病を扶けて約を果さうとする此の女の意氣は少からず僕を動かした。好矣、夫ては行かうとなつた。

此の道中は心苦しいものてあつた。宿を出しなに此處の主婦が笑ひながら何とか女にからかつた。女は颯と面を赤らめた。之れが僕に取つて一方ならず心苦しかつた。停車場迄折ふしの霽れ間を幸ひぶら／＼と歩いて行く中、道行く人は孰れも僕等をぢろ／＼と見送る。之れも心苦しかつた。停車場に入つて列車の着く迄が殊にさうてあつた。汽車の中て何時何な知人に出逢はぬとも限るまいと思つて、豫て斯いふ約束をした。若し車に入つて見て、知つた人が居るか、又は途中て知つた人が入つて來るかしたら、僕は眼鏡を取つて拭く眞似をするから、其の時は、お互に知らない振をして居やうとの約束てあつた。之を要するに、僕は僞善者てあつた。

幸にして、藤澤では一等室に誰も乘つてゐなかつた。大船迄來ると、俄に乘客が殖えて、其の中に知つたやうな知らぬやうなビール會社の某君や、一寸一面の識ある某博士などがどや〳〵と入つて來た。僕が面喰つて、あわてゝ眼鏡を外した所は、我ながら可笑しかつた。僕は何しても僞善者である。

車の中では夫れきり會話も何も出來なくなつた。退屈な一時間半を費して列車がやつと大森に着いた時、僕は故さらに一目も女に呉れずに、勢よく戸を開いて出て、大森倶樂部の前て、過ぎ行く列車を見送つて、窓の内外て輕く目禮を交したまゝ、其の儘自宅に歸つた。女は無論東京の宅へ歸つたのてある。一所にゐて談話もせず、分れて挨拶もせず、何の爲に此處迄一所に來たか一向無意味なものになつて了つた。——が併し、此の無意味な、何氣もない二人の道中が、他日一波瀾を生じて、此の物語に多少の小說的色彩を添ふることとなつた。

六、朋輩の女

其の後彼此半年ばかりは音も沙汰もなくて過ぎたが、或日倶樂部て球を突いてゐる最中に電話が掛つた。丁度倶樂部へ僕が入つて行く後姿を通りがゝりに見かけたから、急に近邊の朋輩の處へ寄つて、此の電話を掛けるといふのてある。沈んだあの女の聲が今日は尙沈みがちに聞えた。電話の要領は「其の後例の知事とは分れて、夫から病氣して色々くさ〳〵したことがあつたが、今に身體がよくない。言つて宜い事か惡い事か知らぬが、兎に角電話てはくはしいとは言ひ兼ねるから、朋輩の何某といふのを呼んて聞いて呉れ、其の時屆ける物があるから夫も受取つて呉れ」とのことてあつた。「藤澤は面白う御座んしたわねえ。」と最後に哀しさうに言つた。何故かは知らず、斯う聞いて僕も無上に哀しくなつた。

「言つて宜い事か惡い事か知らぬが」と言ふ一語が、一方ならず僕の好奇心を刺戟して、おぞましくも僕は、其の夜其の何某なる女を呼んて聞いて見た。あの藤澤から歸る日僕が變に心苦しく感じたのも虫の知らせた

といふものか、其の日に斯ういふとが起つた。僕等が藤澤を立つた日の夜、突然知事がやつて來た。居るべかりし筈の女が居ない上に、聞けば東京から來た男と連れて、出て行つたのだといふので、知事公大に憤つて、其の夜は散々四方八方に當り散らした後、翌早朝女の後を追うて東京に上つた。女に會つて聞けば、隠し立てをして胡摩かすことの出來ない氣性の女とて、あけすけに何もかも言つて了つたので、知事公僕と女との間に何か譯でもあるやうに疑つて、むしやくしやまぎれに、打つやら蹴るやら散々の目に女を遭はせた。——あの病身な弱い女を打つやら蹴るやら散々の目に遭はせたのである。斯うなつては女の方でも默つて居れない。道樂をしたでなし、役者狂ひをした譯でなし、知つたお客と道連れになつて東京へ來た位のことで、夫ほど迄に打擲されるならいつそ分れやうといふことになつた。

何處まで意氣地のないか知れない此の淫蕩なる知事は、三四日經つて、惡いことをしたとても思つたか、先日の暴擧は改めてあやまるから元々通りになつて呉れと申入れて來たさうなが、今度は女の方で承知せず、到頭かねて買つて貰つて居た電話も指輪も綺麗さツぱりと返して了つて、長へに緣を切つた。

其の以來は、家業一方で必死と稼いで、彼の大勢の家内を養つて來たが、永い間の辛勞で、甚しく健康を損じて、又もや例の性の惡い肋膜炎が再發した。其の上結核性の何とやらいふむづかしい腫物迄胸に出來た。そこで流石の彼も我を折つて、明日からさる外科病院へ入院することになつたが、其の前一度僕に會つて、藤澤以來の成行を話さうか何かと大分迷つたものださうな。併し今更話した所が何として見やうもない今日、徒に話して僕の氣を惡くするよりはと、彼の女は彼の女に似つかはしい思案を定めて、到頭僕に會ふとは一切思ひ止つた。所がいよ／＼明日入院と定つて大手術の結果が死ぬとも生きるとも分らぬといふ段になつた今日、不圖倶樂部の前で暢氣らしい僕の姿を見かけて見ると、何やら默つてゐるのが馬鹿々々しいや

うな氣がして、つい我を忘れて電話をかけたのだといふ。『何處まで氣の毒な方でせう』と女は言つた。誠に知事と切れて以來の女の苦境は、推察するに餘りがある。之が多少僕に關係あると知つては、僕もぢッとして居れぬやうな氣がする。といつて何うするとも出來ない。嗚呼僕に遊んでゐる金があつたならと、僕は腕を撫した。

『今度はどうせ長いこともあるまいと思ふので、死んだら必ず知らせますから、其の時はせめて之でお念佛位唱へて下さいと言つて、貴方に之を置いて行きましたよ』と言ひながら、僕に手渡したのは、小さな一聯の珠數であつた。僕は思はずぞつとした。何やら其の一粒〱に女の深刻な怨念が彫りつけられてあるやうな氣がした。

僕は今も尚此の珠數を持つてゐる。

七、金もち

其の後幾ほどもなく人づてに斯いふ噂を聞いた。

世には棄つる神もあれば、助くる神もあるもので、此の女の意地を通して窮狀に陷つたのを且つは憐み且は壯として四國（としておく）の或る有名な富豪の息子が、一切此の女の世話をやくこととなつた。之はずッと以前此の女が雛妓であつた頃に知つてゐた人だとかて、或時上京の折ふと或る待合の主婦から女の事情を聞いて、如何にも氣の毒だとて、自ら之を病院に見舞つた上、急に話を纏めて、女の姉は腦病院に入れ、弟は行く〱自分の店へ引取ることゝし、父には別戶を構へさせて、剩さへ此の死馬の骨にも似たる女に、月々三百圓許りの手當を與へることとなつた。

色々心配をかけたとて、此の由去年の暮に前の朋輩なる女を介して、僕の方へ知らせて來たが、其の後の消息に至つては丸で僕も知らぬ。死んだら知らせる約束だから、其の報知のない所から見ると、無事に暮してゐるに相違ない。全治はしない迄も少しでも長い月日を見させてやりたいと思つてゐる。——若し夫れ此の女に棄てられた知事公閣下に至つては、其の後何と悟つたか、飜然として十幾年來の行を改め、今は謹嚴

なる君子人となつて、專ら縣治に腐心してゐるといふ。正しく以て天の配劑である。

嗚呼神よ、願はくは此の不幸なる女と、此の不幸なる女を救へる男と、次手に此の不幸なる女に救はれたる良二千石とに、長へに幸あらしめ玉へ。（明治四十四年十二月十日稿了）

附言

一、例に依つて人名地名共に皆變へた。事實も根本の大筋に關係しない所では、今度に限つて、大分加減した點がある。明かに言つては、夫と直ぐ分つて、之が爲に一方ならぬ迷惑を感ずる人があるに由る。

二、初に僕が書かうと思つてゐた或る事實譚は、友人の忠告に依つて見合せることとなつて、原稿の締切間際に急に此の物語に書き改めた。急いて書いたとて、其の時は左ほどに思はなかつたが、後に讀んで見ると一昨々年の「時子」と趣の似た所が大分あつて如何にもまづい。併し今更再び之を書き直す餘裕もない。已むを得ず之は此のまゝにして、謹て大方の寬恕を祈る。

三、本篇には關係のないことだが、幸便に任せて、此に申し上げたいことは、一昨年の今月今日此の欄に掲げた『變な女』の中の醫師岸君が、昨年に至つて目出たく開業免狀の再下附を得た一事である。三たび代つた知事が盡く氏の爲に利益ある具申をしたのと、高木兼寬博士其他の篤志家が氏に同情を寄せて其の筋に運動せられたのに由るといふ。僕の愚稿も多少其間に役に立つたのだともいふ。記憶のよい讀者の中には多少御心配下された方もあらうと存じて、之だけ書き添へておく。

明治四十四年十二月十日の夜　楚

其二週間

倫敦 繞石生

ボスカスルの二週間は夢の間に過ぎた。實に樂しい二週間であつた。

八月五日

不圖眼が覺める。寢過ごしたかなと、枕頭の懷中時計を取上げて見ると、恰も九時だ。昨夜の約束を思ひ出してベッドを飛び下りる。そして孃の部屋と境して居る壁を右手の指の節てコツ〳〵〳〵と敲く。トタンと床から下りたやうな音がしたと思ふと、同じくコツ〳〵〳〵と壁を敲く音がした。「起きましたよ」といふんだらう。

ブラインドを絞りあげて裏の谿を見る。霧のやうな雨がしめやかに降つて居る。溪川は極細いのか、谷の雜草が丈高く繁つて居る所爲か、音ほどはきこえるが、姿は見えぬ。その、川のあるらしい處の向側は、高さ三丈許りの懸崖になつて、、其の上は斜面の緩やかな、芝草計りの、小山を墾いて均らしたらしい牧場があるのであつた。其處に一團、此處に一團と、羊がウヨ〳〵居る。例の、メエ〳〵といふ妙な鳴聲がわびしげにきこえる。

身仕度終つて九時半過に下の食堂兼居間へ下りる。今日の倫敦新聞が來て居たので披いて讀む。そのうち孃も下りて來た。

「お早う」

と僕は新聞に眼を向けた儘、挨拶する。

「お早う。御免下さい、斯んな扮裝て」

眼を擧げて見ると、細かい草花模樣の、品はモスリンらしいドレッシング、ガウンを着て居るのであつた。孃・にはドレッシング、ガウンを羽織つて、緩くり朝食する

てなとは、倫敦ぢや出來かねるのである。それて、斯んな田舍へ來て、そんな氣樂な所行がして見たいのてあるらしい。左右の手頸に、電信線程の太さの金の環を嵌めて居るのが眼についた。

やがて宿の主婦が朝食の料理を持運んて來た。

「お早う御座います。よく御やすみになりまして御坐いますか。雨ていけませんて御坐いますね」

「えゝ、よく寢ました。なに、却つて涼しくてよう御坐います」

と、女は女同志て、テエブル、クロオスを敷いたり、食器を置いたりする間、互にペチヤクチヤ話す。

昨夜と同じて、マントルピイスを背にした孃の席の前にお茶道具が一式置いてあつて、僕の席の前には皿が二つ重ねて置いてある。そしてその皿の前に、ベエコンエッグが大皿に入れて置いてある。その横にパンの大きなロオフの截つてる木盆と小皿が二枚置いてある。矢張り僕がベエコンエッグを盛り分けたり、パンを切つたりしなきやならぬものと見える。玉子を碎かぬやう、手元危うくベエコンエッグを皿へ移して孃へ渡す。パンも切る。『ヂヤムを取つて上げやうか』とか、『それぢやマアメレエドは』とか、一々御用を伺はなきやならぬ。素人下宿屋とは勝手が違ふし、相手が女だから、少し氣骨が折れる。食後僕は孃を殘して置いて、昨夜聞いたバワッシングといふ、橋の近處の酒屋へ行つて見た。地階は、片方は厩て、片方は酒庫だ。二階へ上つて見る。

二階も、一方は酒の小賣場になつてるが、罐詰物や雜貨の置いてある帳場もある。スタウト三本、エエル半打と注文して、ワインのいゝのがあるかと訊くと、ポオトもクラリットもセリイもあるといふ。ソオタアンがあると知つて、その大罎二本も注文した。煙草もあるといふので、スリイカスルはあるかと尋ねると、ゴオルドフレエクが一番良いので、それより良いのは有つちや居無いといふ。仕方無しにゴオルドフレエクの五十本入も注文した。『後刻御屆致します』といふ。『ミス、オルドの宅だよ』と言つたまゝて通ずるから世

話は無い。小さい村だから、番地なんか言はんでも、何某の宅で充分判るのだ。

歸つて見ると、嬢は衣裳を着換へて居間に居る。薄い空色のブラウズに、茶羅紗のスカアトを着けて居る。倫敦を出る前に、

「わづか二週間滯在するのですから、着換は持つちや行きませんよ。それでよう御坐いますか」

と、わざ／＼斷つた癖に、矢張り女は女だと微笑せざるを得なかつた。

「背中のフックは皆んな掛つて居て？」

と尋ねる。後ろへ廻つて見る。皆んな掛つて居る。がわざと

「三つもはづれて居る」

といふと、

「オオ、ワツト、ア、シエエム」

と仰山げに喚く。

「嘘だよ。一つも外れちや居ないよ」

「オオ、ユウ、ノオチイ、アイル、シユマク、ユウ。」

と、睨む眞似をする。幾千里の東から來て居る僕、半年經たぬうちに永久に英國を去るべき僕、黄色人種の僕、それを弟の如く兄の如く思ふて、現在の身の上を語れば將來のことも相談する。そして假令室を異にして眠るとはいへ、女一人身で以て男一人の僕を旅連として二週間の夏休を此の田舍家で暮すといふ女だな、と思ふて見ると、國情人情の相違に奇異の感が起らぬでも無かつた。尤も嬢は所謂サフラゼツトの一人で、その上非結婚論者であるから、普通の英國の女とは大に異つて居ることを玆で斷つて置く。

晝食は昨夜注文したマトンチヨツプと林檎のパイであつた。酒屋から注文の品を屆けて來たから、水代りにエエルを飲んだ。そして今日から、晝食にはエエル、夕食にはワインを飲むことに二人で定めた。エエルはグラスに半パイ、ワインならワイングラスで二ハイ位は飲めると嬢はいふ。

食後買物に出るといふ。隨行しなきやならぬのだ。嬢はヲオタプルウフの薄い外套を羽織つて居るのだ

が、僕は荷物の嵩ばるのを恐れて外套は一つも持參しなかつたので、蝙蝠傘をさしてトボ〳〵傍に立つて行く。

酒屋の三軒目にグロオサアがある。其處でビスケット、チィズ、鰯の鑵詰、バナナなど買込んだ。それ等を詰込んだ大きな紙袋は、男たる僕が携帯しなきやならぬのだが、餘りい丶圖でもないから、屆けさせるとにして手ぶらて出た。雨が歇まぬので海岸へ行つて見る氣もしないから其ま丶歸つた。

歸つて繪葉書を書いたりしてるうちに暗くなつてしまつた。

八月六日

日曜だ。空は一點の雲も無く晴れきつて居る。

ミンスタア、チャアチといふお寺へ、朝の勤行に參詣した。

宿から坂道を四五丁上ると、左へ折れる細道がある。道は段々上つて、海が見えるやうになる。路傍の草花が美しい。道はいよ〳〵上つて、僕等の居間から見える小山の絶頂に達する。それからは下り坂になる。路の兩傍にブラックベリィが繁つて居る。二三丁行くと、晝なほ暗き森になる。森へ入ると、すぐ眼の前に寺の塔が見えるのであつた。

寺は田舍家同樣、扁平な石を積上げて、漆喰て隙間を塗込めた質素なものであつた。參詣も三十人足らず。式も簡單だつた。

歸途、寺の後ろの墓場をぶらついて見た。寺は十五世紀に創建されたものほどあつて、墓場の墓石にも、古雅な、苔の蒸したのが多い。森て日を遮つて居るせゐか、種々な羊歯が綠濃く繁つて居る。倫敦ぢや見られぬ苔が絨毯のやうに路を蔽ふて居る。言ひ忘れたが、今日は日曜とあつて孃は晴衣を着て居る。ブラウズは薄い、模樣の細い、レエスの附いた白絹のて、スカアトは裾に縫模樣のある、微かに黄味を帶びた白地の羅紗のてある。それを平素よりか曳きずり氣味にして居る。そして肱までの白の皮手袋をはめて、水紅色の絹のパラソルを杖について居るのである。

「墓場は何處でもだが、殊に此處は靜かでいゝねえ」
「妾(わたし)も斯んな靜かな處が大好き」
といふ。花も無い、殆んど羊齒許りの墓場だが、それでも蝶が飛んで居る。小紫と稱する可愛い小さいのである。

午後初めて海岸へ行つて見た。

坂下の石橋の横から、川――ヴレンシイ川といふ川に沿ふて左へ進む。川は底(そこ)は一面の岩で、その岩には皺襞はあるが、小石も砂も無い。水は非常に淸潔(きれい)だ。小魚の泳いで居るのが數へられる程だ。

川の兩岸は傾斜の急な岩山だ。路は次第に川と遠ざかつて、山腹の、稍や傾斜の緩な處を縫ふやうになつて居る。山は岩だが、例の英國一流の靑芝でつゝまれて居る。ヒイスが點々と生えて居る。

四五丁行つて山鼻を左へ廻ると、今迄對岸の岩山に視線を遮ぎられて見えなかつた海が、忽然として眼前に展開する。川は此の山の鼻の處で鍵の手に曲つて海に注いで居るのである。

此邊から見ると、對岸の突端は、岩の形が、兩前足を伸ばして、それへ顎をつけて居る獅子の頭に酷似して居る。そして僕等の立つてる左岸の、更に最も海に突出して居る處の岩の姿は、長い耳を垂れた犬の頭にそつくりだ。プロフアイル、ロックの名がある所以がうなづかれる。その左側の岩山――犬の頭と見ゆる岩山の天邊に、四角な塔のやうなものが立つて居る。海岸の望樓だといふ。海面からは餘程の高さだ。

海は鏡のやうだ。漣だも無い。吹き來る風は夏服の襟を立てたいと思ふ程涼しかつた。

八月七日

午前中は曇つて居て稍や蒸暑かつたが、午後は全く霽れた。

朝食後、川の右岸の岩山の突端まで散歩した。午食後チンタアゼルへ行かうと孃が言ひ出す。
「暑いから、明日か明後日か、朝行かう」
といふと、
「日本はもつと暑いとあなた何時(いつ)か言つたぢやありま

せんか。此れしきの暑さに、男の癖に」

と一本參らせられる。日本の暑さは此節もつと非道いのは事實だ。然しいくら薄くとも下着を着て居て、その上へソフトながらシャツを着て居て、これも薄いとは言ひながら手で織つた上衣をその上に着て居るのだ。日本ぢや斯んな衣裝で、午後の一二時といふ暑さ盛りに、蝙蝠傘もさゝずに五哩六哩と山道をあるいたとは無いのだからと辯解すると、

「オオ、ユウ、アア、レイジイ、ボイ」

とやられる。仕方無しに出かけた。

出がけに近處の、林檎畑を有つた田舍家で孃は林檎を幾つか買つた。そして上衣の兩方のポケットへ二つづゝ入れて置けと言つて四つ呉れた。殘りはパラソルの中へ入れて、パラソルはしぼめたまゝ手に提げて居る。おまけに日に燒けたいのか、ボイスカウトの冠つてる帽のやうな形の、白いのを阿彌陀にかぶつて、空色のシフオンで頰冠りしたやうに、帽子を縛つて居る。風に帽子を吹き飛ばされぬ爲めてある。暑さなんか平氣な顏で、トットと先に立つて坂路を上ぼる。

村の坂道を上りきつて、左の岐路を行けばカメルフオオド、右のを取ればチンタアゼルへ行けるのである。

道は海岸――水面から幾十丈の絕壁を爲した海岸から四五丁時には十丁も離れた山腹にある。右側は絕壁まで勾配が緩やかだが、左側は山の絕頂まで傾斜の度がはげしい。左右とも、畑――麥や蕪を植えた畑もあるが、大方は例によつて靑草の牧場だ。立止つて見ると、海からの風が涼しく吹いて來るが、步るくと仲々に暑い。僕は汗の拭き通しだが、孃は顏一パイに西日を浴びながら平氣で居る。總じて西洋人は日本人程に汗をかゝぬやうだ。

チンタアゼルの村へ着いたのは三時過であつた。渴いてたまらぬので、とある茶店へはいつて茶を命じた。避暑地のとて、茶店の設備は仲々行屆いて居る。

暫く休息してからキング、アアサアの城跡を見に出かけた。

村の中程から左へ切れて、小徑を谿へ下りる。谿に

は小川がある。川岸には、名を知らぬ草が生ひ繁つて居る。紫、白、黄、紅と美しい花を咲かして居る。殆んど路を沒して居るその草花の中を廻つて、とある丸木橋を向岸へ渡る。日本の女だといふと、斯んな路は結付け草履か何かでやつて來て、そして『私し、どうしませう。危つかしくて到底も渡れやしませんわ』と、泣聲でも出す處だが、

『カム、オン』

と僕の先になつて、褄もからげず孃は渡つて行く。

渡つて、うねりくねつた小徑を登ると、長く海へ突出した海角の背梁へ出る。背梁の細道を右へ廻ると、海角は忽然くびれて、右には先刻の小川が注ぐ入江が見下ろされ、左には幾十丈の絶壁の下、岩礁に激する白浪の寄せては返へす水際が、つい脚下に見えるやうになる。足が震ひさうだ。

此の、幅三間許りにくびれた――8字形にくびれた海角の絶端に、殆んど四方を海にした、江の島に少し小い岩山がある。それがキング、アアサアの城と稱せられて居る處である。

此の岩山の周圍は總て絶壁だ。絶壁の上には、石を積上げて粘土で堅めた亞字形の城壁があつたものだといふ。今はたゞ處々にその遺跡が存して居るばかりである。「ル、モルト、ダアサア」の、たしか四卷目であつたらうと思ふが、ランスロットが巨人と鬪つた景色が最も能く想像し得られる。

二人は此岩山の天邊、芝草の厚い上に腹這ひになりながら、林檎をかぢりつゝ海を眺める。北の方「エエルス」の連峰がそれかと許りおぼろげに見える。海は沈むにはまだ高き日を映じてギラ〳〵光つて居る。海岸は、東も西も、長短幾つかの海角が數へられる。幾百の海鷗が僕等の頭上高く、猫のやうな鳴聲をして、翔け廻つて居る。

『テニスンの「カミング、ヲヴ、アアサア」を讀んだとがあるかへ』

『知つてますとも。倫敦を出る前にも少し讀みました。あなた

And then the two
Dropt to the cove, and watch'd the great sea fall,
Wave after wave, each mightier than the last,
Till last, a ninth one, gathering half the deep
And full of voices, slowly rose and plunged
Roaring and all the wave was in a flame.

といふ處の洞穴は、乾度あの洞穴でも見て考付いたもんでせうね」

なんかといふ。孃が斯んな文句を暗記してるのは驚くに足らぬ。僕だつて、歌や發句は隨分暗記してるから、とは思ふものゝ、人に度々敎へたことのある詩でも、五行と續けて暗記してる英語文句は無ささうだと思ふと、衷心いさゝか忸怩たらざるを得なかつた。

遺跡のうちて、セント、ジユリオットの禮拜堂と稱するのが一番完全に保存されて居る。花崗岩て造つた祭壇の斷礎も見られ、石のベンチも見られる。マアヨンが埋められたと「物語」にあるのは此處なんだな、とうなづく。

本丸と城內にあつた牢獄との遺跡は判然とわかる。規模頗る宏大な城塞であつたに相違無い。

尤もアアサア王其人の存在如何も怪しい問題だし、考古家の說によると、此の城は十二世紀までは、即、「バシング、ヲヴ、アアサア」後六百年までは、確かに無かつたものだといふことだ。そんなことはどうでもいゝ。テニスンの詩を讀んだものには、いつまでも此のチンタアゼルの海角は興味を以て眺められるとと思ふ。

聞けばボスカスルから此處までは四哩足らずだといふ。歩るいて歸らう、路傍の生垣にハネサクルが澤山咲いて居たから、それも取りたいし、と切りに孃は徒歩を主張したが、僕は暑さによわつてしまつたから、行きに休んだ茶店の主婦にワゴネットを傭つて貰つて、それに乘つて灯ともし頃に宿に歸つた。

八月八日

今日は朝から暑い。

朝食後、海岸へ行つて見る。對岸の、獅子の頭に似

た岩が眞正面に見える處まで行く。其邊に、岩づたひに、水際まで下りられる小徑のあることを知つた。それを下りると、岩を刳抜いたやうな、小さい洞があるのださうな。其處へ衣物を脱いで置いて泳ぐといゝ、など孃の話すのを聞いて居ると、ジャブンといふ音がした。今言つた洞穴近くの岩から飛び込んだのであらう、やがて岩鼻を廻つて沖の方へ泳ぐ人影が見えだした。

「女ですよ」

といふ。

「どうして判るの」

「帽子かぶつてますの」

と答へる。男は帽子無しで入るのが普通ださうな。見て居ると、仲々上手に泳ぐ。拔手を切つて、スイ〳〵と進む。孃もはいりたさうな顔をして居る。僕は笑はれるのがいやだから、滯在中決してはいらぬことに心中きめてしまつた。

午食後は、居間から見える、谿向ひの小山へ登つて見た。海岸の山の背越しに海が少し見える。山の絶頂は松林になつて居るのであつた。谿と草原との境にはホオソンで生墻が設けてある。生墻に接して、十間置き位に栗の大木が一列を爲して居る。枝葉が日光を洩らさぬまでに繁つて居る。僕等はその一本の下へはいつて飽かず涼風を貪つた。孃は足を投げ出して坐つて、皮手袋のつくろひをする。僕はポケットに入れて來た、バビットの『新ラオコン』を取出して、帽子枕に仰向けになつて讀む。

一つ星が空に輝くやうになつてから宿へ歸つた。

八月九日

昨夜、宿の主婦が

『明日デラボオルへ乘合のワゴネットを出しますが、御出になりませんか』

と勸めたので、何のある處か知らぬが、行つて見ることにした。

十時に宿を出た。宿の主婦の弟が御者臺に乘つて居る。きけば馬車も馬も、此の弟自身の持物で、夏うち、避暑客を附近の名所と稱せらるゝ處へ乘して行つて、

小遣もうけをするんだといふとだ。

デラボオルといふのは、僕等が汽車から下りたカメルフオドの西南一哩餘りの小さな村で、ボスカスルから近道五哩あるといふ。

乘客は夫婦の老人、三十恰好の若夫婦、教師らしい若い女二人、それに僕等二人で、都合八人であつた。着いたのは十二時近くであつた。「石板石の採掘場を見て行らつしやい」と御者が言ふので、皆んな下りて、採掘場の構内へはいつた。

此處の石板石を採掘し初めたのは何時の頃からか判らぬのださうな。エリザベス時代の史家の書いた本に「デラボオルの採掘はなほ盛に行はれ」とあるので考へると、兎も角エリザベス時代前に始まつたとは確かである。石炭坑のやうに、穴を掘つて採掘するのぢや無くて、平地から、底へと横へと、同時に掘つたもので、擂鉢形になつて居る。その鉢の上部の直經が五丁はあるといふから、大きなもんだ。此邊一面に石板石だといふ。底で働いてる礦夫が蟻の如く小さく見える。

加工場が五六軒ある。粗末な板小屋だ。穴の底又は横から切り出す石には、疊四五疊敷位の大きさのもある。墓石や壁石に使用し、質のいゝのは磨いてマントルピイス用にもするといふ。鋸で挽いて、厚さ二三分の薄板にして家根の瓦にも出來るといふ。價は頗る廉だといふ。道理で、此邊の田舍家は、家根は總てスレイト葺で、百姓や礦夫の住居としては上等過ぎる家が多いと思つた。

待つて居るワゴネツトに乘つて、二哩半餘りの田舍道を走らして、海岸のトレバアキスといふへ着いたのが二時頃であつた。チンタアゼルの西一哩餘の、人家が十四五軒しか無い小さい村である。それでも夏中は十人や二十人の避暑客はあるといふ。

此處も海岸は絕壁續きだ。絕壁の、幅二丁許り途切れた峽谷に此の村はあるのである。

海岸は、縱ならべに並べた洋書を推倒したやうに、幾十疊敷の岩が、層を爲して遠くの沖まで參差としてつゞいて居る。僕等の同行は、その岩を傳つて浪の打

寄せる處まで行つて、銘々勝手な岩角に腰かけて、行厨を披いた。

脚下に打よする巨浪の飛沫(しぶき)を浴びながらサンドキッチを貪る。麥酒が一本あらばと思つた。やつと嬢が持出した林檎で渇を醫した。

滿潮と見えて浪は漸次脚下に迫る。次の陸近い岩角へ移る。浪は更にそれへ迫る。更に次の岩角へと移る。かうして到頭一番陸近い岩まで退却した。時々思がけ無い大波が打寄せて、皆なの頭から飛沫をあびせかけると、女連は仰山にキャア〱叫ぶ。老人夫婦は何時も退却の先頭だ。若夫婦は退却する時も坐る時も組み合はした腕を離さぬ。女教師らしいのは、靴をぬぎ、足袋をぬいで、岩の裂目へ注(さ)しては引く水へ爪先を浸してボチャ〱いはして居る。スカアトは膝まで捲くつて居るのである。日は洽く此の岩礁の上を照らして居たが、風が凉しいので皆んな襟をかき合せて居た。

四時半に一同ワゴネットに乗つて、登坂程は下り〱して日暮にボスカスルへ歸つた。

八月十日

此日は終日無雲の大快晴であつた。

朝食後、海岸の望樓のある處まで行つて飽くまで海氣を吸つた。午食後は、今日も嬢に強ひられて、汗をふき〱セント、ナイトンの瀧といふのを見に行つた。

チンタアゼル道を二哩半ばかり行くと、ロッキ、ヴレイといふ喬木の繁つた谿がある。谿の迫つた處に木橋が架つて居る。此の橋を渡つて小山を二つ越へるとチンタアゼルの村になるのだ。橋の手前を左へ、小徑を辿つて谿底へ下りる。淸らかな谿川がある。川に沿ふて、石から道を奧へ奧へと上(のぼ)る。川の兩岸には、松や樅のやうな木が見上ぐる許りに高く、枝を差出して居る。涼しい風が奧から吹いて來る。汗かいた後で、冷たい程だ。

川は段々に細くなつて跨がれる程の幅になる。道は次第に急になる。やがて小さい家が見える。チユウドル式の窓のある、破風の古風な家だ。其家の門を覗い

て見ると、向ひに極めて小さい建物が見える。家根に十字架が立つて居る。「セント、パイランの靈泉構内にあり」と、門に貼札がしてあるのが目に付いた。

此の家の横を通つて右へ曲る。暫く行くと、小さな木橋がある。それを渡ると木戸がある。木戸を開けて石段を六七段下りると、二段になつて岩から落つる小さな瀧がすぐ眼の前に見える。岩には羊齒が茂つて居る。

昔々、セント、ネクタン（ナイトンとも言ふ）が此の瀧近くの禮拜堂に住居して居た。堂の尖塔に銀の鐘が吊るしてあつた。その鐘の音は遠く海まで響く清らな音をしたといふ。ネクタンその死期の近づくを知つた時、その鐘を塔から取下ろして、瀧の近くの岩の裂目から下へ落とした。死んだ時、その屍骸は、堂の聖器寶物と共に、大きな櫃に納めて、瀧の下へ埋められた。數年經つてから、さる男がその櫃を堀り出して聖器寶物を盜まうと企てた。瀧の水を側へ落ちるやうに工んで、發堀に取掛つた。すると、岩の中から、かの銀鐘の音が響いて、且つ何處からとなく「かの聖器寶物を獲んものは子孫絶滅」といふ聲がきこえた。その男は、びつくりして一目散に飛んで逃げた。その後かかる企をする者は一人も無い。だからセント、ネクタンの遺骸と聖器寶物は今猶ほ瀧壺の底にあるものと信じられて居る。

それは、岩に踞して瀧を眺めて居る間に、孃が語つてきかした物語である。

スチイヴン、ホオカアに「ネクタン谿の姉妹」といふ詩がある。あれはホオカアが此處で誰れかに聞いた話を詩にしたのだと、これも孃の講釋で成程と思つた。

日暮まで、斯んなやうな話て、瀧を見ながら凉んで居た。

歸る途中道々、兩手に餘る程ハネサクルの、赤いの、白いのと、摘み取つた。實にいゝ匂ひだ。

寢る前、窓のブラインドを絞つて見たら、水の如き空に、滿月らしい月が照つて居つた。あまりいゝので、ブラインドは絞り上げた儘、床へはいる。寢て居て見

ると、丁度窓の眞正面に、庭の樫の木の木末から少し離れて見える。微風に戰ぐ樫の葉が銀で縁取つたやうに美しく輝く。壁越しに、

「いゝ月だねい」

といふと、

「私も今窓から見て居る處ですよ」

と孃が答へた。

八月十一日

午前は海岸右岸の、岩山の絶頂まで登つて見た。今日も一點の雲翳の無い上天氣だ。眼下の海を見て居ると、魚の大群が波に皺紋を描いて右往左往するのが能く分る。海鷗が頻りと其魚群の上を飛び廻つて居る。さつと飛び下りると、羽影が映るものか、魚群は底へ沈む。海鷗は又空高く飛びあがる。するとあらぬ方に又魚群の皺紋が見える。海鷗は又飛び下りる。魚群は又沈む。いつまで見て居ても、到頭海鷗は一疋もその魚を啄むとが出來なかつた。

地平線近く滊船の煤煙だけ二つ見える。エエルスの石炭を積んで外國へ行く船だらうと、孃が言ふ。

とある大きな岩の日蔭で、仰向けになつてポケットへ入れて來た今日の新聞を讀む。ストライキが仲々盛んならしい。孃は僕が持つて來たランドアの「イマジナリイ、コンヴセイション」を讀む。そのうち中食時になつた。

夕食前に、橋から右へ外れて、ヴレンシイ、ヴレイを少し散歩した。

（次號完結）

「その二週間」の續稿は已に到着せり。叙事益々精細を極めて興趣横溢す。乞ふ次號の出づるを待て。

畫趣の美少年

黑頭巾

其一

●帝劇の吉三は、お七に壓せられる。此の舞臺の畫面に發揮する艶冶渾厚の趣味は、其の大半を、お七に占斷せらる。「媚」の畫趣を以て、お七と角逐せしめんとしたるが、吉三を誤りたるなるべし。

●吉三は一代の美少年、その畫趣の美は「媚」の一點にては有る可らず。

●先年、岡田三郎助の「あるか無きかのとげ」の一枚は、お七、吉三の畫趣を、新たらしく鼓吹せるものならずんばあらず。然れど、此の時の吉三も雛妓をモデルとしたりしにや、艶媚の氣、空しく勝ちて、お七の氣分と多く異なるところあるを見ず。

●お七、吉三は絕好の畫趣なり、畫題也。白花と白花とを瓶中に挿みては畫趣を發揮せず。お七、吉三は、須らく、互に、コントラストの色彩美を映射せしむべき也。

●然りと雖も、事實に於ては、吉三は、純ら艶冶の美少年。お七、吉三は、似寄りたる艶花を同瓶に活けたるの畫趣なりしやも知れず。

其二

●吾輩をして、續けて、舞臺を帝劇に取らしめよ。吾輩は、石橋山の旗揚に於ける賴朝の畫趣に失望せずんばあらざりき。

●賴朝の郎黨、擧げて平兼隆の營を衝く。彼の左右を護るもの、政子を始め、侍女の一隊あるのみ。

●賴朝が女護島に渡りし事を聞かず。彼程の大人物の旗揚が、何んぞ、如此、女々しき畫趣に蔽はるゝぞや。然かも、舞臺に於ける表情は、賴朝は弱くして、政子は男勝りに見ゆ。

●彼の時は、賴朝決死の場合也。名だゝる勇士、戰場に去らば、寧ろ、少年勇士を以て護衞せしめよ。

●信長の最後は、華やかにして色彩あり。蘭丸、力丸、花の姿に、義憤溢れて戰ふ。嵐に、花の揉まれつゝ、枝を離れじと狂ふにも似たらんか。

●蘭丸は、美少年の雄者也。頼朝には蘭丸無し。彼の場合、侍女を羅列して、撫子、菖蒲、菫等を以て、喬松を中に、花壇を作り成すの畫趣を爲すもの、また已むを得ざるに出づる乎。

●吾輩思ふに、東洋英雄の典型は、唐太宗と頼朝となるべし。これほどの偉人を描き出す舞臺の畫趣には、作者、一番の工夫無くんばある可らず。

其　三

●春も雪ならば、山科の段を思ひ出すことあるべし。小浪、力彌を尋ね來るの一段は、頗る畫趣あり。

●浄瑠璃に、小浪を形容して、「谷の戸明けて、鶯の梅見付けたる、ほゝ笑み顔」といへど、此の好辭は、移して力彌に當つべし。

●義士が揃ひの裝に、雪を衝いて、吉良の屋敷に討入りし時、彼が、凜々しく、鉢巻して、鎗を提げて、門を乘越え、仇家を見下し勇ましく微笑したりけん。其の情趣は、鶯の梅見付けたる氣合ありしを疑はず。

●畫趣の美少年は、花ならば、媚めかしき花壇の草花にはあらず。梅花の雪中に發くの精神あり。然れども、必ずしも梅花の如く、淡泊なるのみにはあらず、春風駘蕩の時、また艶美の麗彩を發する也。

其　四

●吾輩、去春、堀江座に、春子太夫の合邦を聽く。清艶の音、細緻の節。新左衛門の華やかなる糸と相待ちて、玉手を活躍せしむ。人形の玉手は甚だ美女也。

●俊徳丸は、蓬々と、過大の衣物に包まれ、輕石のようなる假面を被りて、手探ぐりに探ぐりて行く。癩病に悩める心なるべし。

●玉手が身を殺して捧ぐる奇藥を飲下する一刹那、輕石の面は剝脱して、眞白の美少年現はる。戸隱シヨーマの花一時に破蕾して、思掛無き麗彩を煥發するにも譬ふべし。

●「槍の權三は好い男、油壺から出たよな男、しんとんとろりと見とれる男」といへるは、如何にも、元祿の輝く男を想ひ見る。燈火革新の、今の世の少年は、油壺から出たよな精彩といふものを想像し易からず。

其　五

●熊谷陣屋の段にいはく、「經陀羅尼より笛の音を手向けるが直に追善、敦盛樣の御聲をば、聞くと思ふて遊ばせと、勸めに隨ひ、藤の方、涙にしめす歌口も、ふるふて音をぞ澄ましける。親子の縁の緒にや、障子に映つるかげろふの姿は、確に敦盛卿」蓋し、花の敦

卿は、青葉の笛に誘はれて、霞の中の花の如と、朧ろに、障子に映つりしなる乎。

●此の時、若し、その畫趣のみを以て論ぜば、王安石が、春夜に、ひとり「月移ニ花影ー上ニ欄干ー」と歌ひしもの、まさに這般の情味あるべし。

●花の敦盛は畫趣、詩趣あり。其の駒を波間に乘入れ、引返したる花の武者振、青葉の笛に寄する餘韻、千古に遺芳あり、遺響あり。仇に咲き、仇に散りにし、花の美少年にはあらず。

●敦盛が「二八の御顏に、鐵漿黒々とつけ玉ひ」とは、今の人、歌ひても、其の畫趣を想像する者少し。彼ほどの少年の鐵漿つけたらんも、長閑かに、艶やかなりし花の姿を、一段、媚めきて見せしやも知れず。

其六

●敦盛の身代はりとなりし小次郎は、定めて美しきが上に、逞しき魂ありしならん。「門出の時に振返り、につこと笑ふた面ざし」といふもの、尤も精彩に富める美少年の畫趣を發揮したる刹那なればこそ、流石の侍の母にも、忘れ得ざる面影なる可けれ。

●這般の面影の美を語るもの、太閤記の十段目に明智十次郎あり。「十八年の春秋を刄の中に人となり」と言ふを見れば、彼は、小次郎よりは年長なりし。けふの初陣に、天晴、功名手柄して、父上やばゝ樣に、譽めらるゝのが樂みと、につと笑ふた其の顏が、わしや幻にちら付いて」とて、健氣の母も嘆きぬ。實に、戰國の美少年には、這般の魂あればこそ、出陣の畫趣に、限無き美しき笑顏を見せたるなり。

其七

●「白梅の折知り顏に咲く花を手折りて來鳴く鶯の鳴音」の一節、お染、久松の舞臺を描き出す。此の時、尋ね來れる律義そうな田舍爺の子に、能くも久松の美しきが、生まれ來しと思はぬは無かりしならん。

●久松ほどの美少年を、首縊りて死なせたるは、吾輩、淨瑠璃作者に恨無き能はず。彼に、士魂を持たせて、士らしく往生させたかりしなり。

●馬琴は、松染情史を述べて、町人の久松に士魂を吹き込み、元とは、楠氏忠義の餘黨なりと爲す。彼の理想の戲作者に、一頭地を拔きし所也。

●町人に美少年無きにあらず。然れども、戰國の美少年が今に至つて艶稱さるゝものは、花の姿に、武士道を發揮するの畫趣に存せずんばあらず。

其八

●白井權八、鼠小僧の次郎吉の如き、ともに其の艶容を以て稱せらる。是等は、鷄鳴狗盜の類、僅かに毒艸の色香新たらしきにも比すべきのみ。

●木下蔭狹間合戰に依れば、石川五右エ門は美少年なりき。二十二三のころ、白皙にして鼻筋通り、乾と、見事の男振也。厚額に、有紋の冠を着け、蒔繪の太刀を佩き、淺沓の音高く押出したる威儀、とても贋勅使とは受取れず。

●彼は計らずも、其の系圖を調べて、大内氏の餘類たるを知り、されば琳聖太子の後裔なりとこそ思ひ、不逞の志を起せし也。

●美しき花の毒あるもの、五右衞門のみにはあらず、陽虎も孔子に似たりといへば、吾邦の聖像ばかりを見たる人は、陽虎の少時を、美少年なりしと想像するなるべし。

●馬琴の、描きし毒艸花は陶朱之介なり。朱之介は晴賢なり。彼の、少時、其の美貌を利用して飽くまで、不義の快樂を貪りし事を、細寫し、毒草花の臭味を、人の鼻前に突き付けるの概あり。

●朱之介は、あらゆる毒草花の美少年を、集成して、擬人したるものならずんばあらず。

●馬琴は、朱之介の毒草花に配するに、大江隆元の、清き水仙花のやうなる美少年を以てし、香、臭相映發せしめて、以て、畫趣の美少年錄を爲さんと試みたるなり。

其九

●畫趣は、有の儘にて、理窟めかぬこそ好けれ。近代の文豪、美少年の畫趣を說く者、馬琴に過ぐるは無く、彼は、例に依つて、勸善懲惡に寄托して、理路に陷れり。

●美少年錄は、彼の一傑作也。美少年の着想の下に、これ程の大作を出だしゝ者は未だあらず。八犬傳も、また一の、異趣、異彩ある美少年錄といふ可し。兎も角も、彼は「美少年」の謳歌者ならずんばあらず。

●八犬傳の中にても、道節は奇傑、現八は勇決なれども、花の趣味の愛す可きは信乃なり。親兵衞は、造花の如し、畫趣の言ふ可き無し。

●雙六の中に、八犬士を子供に見立てたるがあり。お芥子頭に、胸當てして、勇ましく刀を提げたる、殊に愛らしゝ。

其十

●花に淸香あり、美少年には意氣あり。意氣の發現は、

美少年の畫趣なり。

●晴の舞臺に、繪に描いたやうの美少年の、弱々しからんは、如何に口惜しかるべし。「心なら、武者振なら、コンな凜々しい子」といはるゝ美少年は、人生の畫趣ならずんばあらず。

●先頃、帝劇に於ける越路一坐の、最終の語物は市若初陣なりき。聽衆は、如何に、此の稀有の少年の畫趣を感得したるぞや。

●市若は少年といふも痛々し。僅に十一才の蕾の未だ固く、寧ろ童兒なり。然かも、「潔ふ腹切つて流石は武士と言はるゝぞや」といふは、彼の抱負なり。

●市若は、錦がはの鎧を着、鍬形打つたる兜を猪首に着なし、弓矢手挾み、突立ち、名乘をあげて、初陣の證據の一矢を放つ。

●吾輩は、市若の武者姿を冥想すれば、涙無き能はず。子無き者は、左程にも思はざらん、子有る者は、彼を、いぢらしと思ふべし。實に、端午人形の尤も美しきものと雖も、彼ほどの崇高なる畫趣を發揮するものあらず。

●今の教育より見れば、市若は、如何にも不自然なりと思ふ人もあらん。「溫室の花」には、凜烈の香芳無し。彼は、野山の寒風に咲ける自然の花なり。

●如何に稚木なればとて、梅花は霜雪を壓して開く。稚けれど、市若は日本武士なり。彼は美少年の精華なり。

●市若は、芝居にては、板額の子也。板額は稀代の勇婦。木村鷹太郎の娘子軍には、彼女を美人なりしといふ説を否定せり。吾輩は、市若の母ならば、板額は美しかりしならんと思ふ。

其十一

●「繪に描いたような殿御」の一句、維盛をして千古の美少年たらしむ。「大和路や芳野に殘る名物に、維盛彌助といふ鮨屋、今に榮ふる花の里」彌助鮨のスタンプ、今に、吉野の繪葉書を劇的に、趣味あらしむ。

●同じく助といふも、新薄雪物語の吉助を、歌舞伎座に見たるとき、吾輩は、其の徒らに美貌なるに、落膽せずんばあらざりき。

●歌六の五郎正宗、先づ、日本刀の、萬古の名鍛冶とは思はれず。羽左エ門の吉助、やがて來國俊ともいはるべき美少年とは受取れず。

●「水になりたやヤレサテ化粧の水に」といふ地につれて、一荷の水を擔ひ出る羽左は、吉助とは見ゆれども、

國俊たるべき人柄にあらず。日本刀の名作を鍛ふ美少年の秀才は、今、少し、シャンとして切味を想像せしめざる可らず。

其十二

●一夜、春尙ほ淺し、更闌けて、濠に沿ひて、四谷の十手內を過ぐ。凍れる空に、星稀に、潑墨のやうなる松の並木に、低く、遠く、片割月の落ち掛る。

●此の時、詩興に暖かき肌を、柔寒の、斷えず慄りつゝ、恰も、軟風の殘酔を吹くがよう。うつとりとして眺めつゝ行く、行く手の途の朧ろなるかな。

●路の一轉して濠端に出づ。濠の水の、川のように、細く、遠く、薄く光りつゝ、盡くる彼方に、月影の映射しつゝ、濠を縁ち付けて、延びゆける、松の墨の線の、潑墨のように、滴たりて、濃く、留まる塊の森の上に、月は在り。

●此の時、輕く、ステッキを挾み、外套のポケットに、手を突き込み、立ち留りて想ひ見る。「橋のほとりの、烟ぶる青柳の、糸より細き腰付にて、すつくと立ちたる、女すがたの」美少年の、有りもやせん。

●月の缺けて、地上の朧ろなる、薄寒き夜こそ、畫趣の美少年を見る可かりけれ。

其十三

●五條橋下の水は、潺々として、萬古、鳴つて流る。橋畔の垂楊、依稀として綠也。牛若丸の稚兒姿を見ず。

●謠曲、橋辨慶の一篇ほど、決戰の詩的なるものは、古今東西に、また有ること無し。昔より、美少年の畫趣を說くもの、牛若丸を推して獨步と爲さずんばあらず。

●辨慶の、ゆらり〱と出てたる有樣、如何なる天魔鬼神も、面を向くべきようあらじと、吾ながら賴もしく、手に立つ敵の戀しさよ、意氣慷慨、其の人、また堂々たる美丈夫なりしならん。戯曲の作者は、一面には、彼を、書寫山に艶名滿ちし美少年の鬼若なりと認めつゝ、橋辨慶には、則ち、彼を、むくつけき大男の樣に作り爲すは矛盾なるべし。

●舞臺に現はるゝ美少年は、概ね、艶なれば柔媚に失し、悲壯なるは、不運に虐げられて、餘りに悲しきもの多し。唯だ、五條橋上の牛若丸ばかりは、花の姿、限り知られず艶やかに、惡くきまで美しきが、勇あり、孝あり、不敵の魂、勝運の高潮に、油の乘り來る。彼は、夢にあらずんば、畫としか思はれず。

●蓄音器に吹き込みし美音が、還原されて吾輩の耳に

響くがよう。實に、橋辨慶を讀めば、畫趣の牛若丸に波立ち、昔人の脈搏が、吾等の心臓に傳波するを覺ゆるなり。

其十四

●吾輩は、近代の、美少年の畫趣を說くときは、鹿兒島、熊本、佐賀の風景に想到せざる能はず。

●近き世の、美少年の畫趣は、平田三五郎を白眉とせずんばあらず。琵琶の音、橫笛の音、花耻かしき唇に、燃ゆる思を歌ひけん。櫻島山の烟も、落ちて流れしか。

●聞く、鹿兒島の國、秋蟲ことに多く、蟲聲、雨の如く、兵兒の都に灑ぐ。吾輩、嘗て「蟲聲の鹿兒島」を描かんことを想ふ。彼の、繁き蟲聲は、美しき三五郎を長へに弔ふなるべし。

●銀杏城下、戯山に、主計之介あり。父清正の「此の身、此の儘、高樓に、四海を守護する吾が精神」を彼に吹き込みしは、彼の十七才の時。清正の毅魄は、其の後、代々の、城下の美少年を、如何に感發せしめしか。秋々の松蟲、鈴蟲、星衆光の威德に啼きつゝあり。

●銀杏城外、阿蘇山の噴煙、頗る雄奇。山陽の詩に、郊外の松杉の畷手路を描きて「時々缺處見二阿蘇一」の句あり。城下より清正の本妙寺に到るの途中、此の風景あり。

●佐賀に、士道の典型、葉隱集あり。吾輩、此に、多く、其の書中の、畫趣の美少年に說き到るを要せず。今、此の國の人、伯大隈あり。美少年を以て艶稱されしと聞く。

●伯大隈は藩黌に在りしとき、つねに首席を占む。彼は、初より凡ならず。彼が、巨眼、巨口、廣長舌を揮ふを聞けば、何人も、其の稀代の智勇辯力に打たる。然れども、彼は、もと、春、艶やかに、才華の輝く、不敵の美少年なりし也。

其十五

●「日照雨」は、最近の文展の花なりき。近來、淸方、蕉園、耕花等、頻りに、艶冶の美婦を描く。而して、未だ、絕代の艶少年を描きて呼物となりしものは有らず。

●昔の錦繪に描かれたる美少年の艶麗なるは、つねに、美婦をして顏色を失はしむるものあり。歌麿、淸長等の麗筆を以てすとも、遂に、絕美の美少年より以上の、美婦を描き出さず。

●支那人は、古來、美少年を艶稱す。「步々、蓮花を生ず」の形容辭に至つて、實に、艶美の極を極む。然れ

ども、支那人に大和魂無し。日本武士道の、精華の、艶やかに表現せる、吾が美少年の畫趣は、彼等は、未だ解道せざるなり。

●吾が美少年の畫趣は、武士道の發揮に依つて、美感を崇高にす。此の點に於て、吾輩は、尙ほ、從來の、錦繪の美少年に慊らず。

●「詩趣の武士道」の流露せる「畫趣の美少年」は、今、尙ほ懸案の畫題として、將來の畫家に待ちつゝある也。

其十六

●美少年は過去の畫趣に非ず。つねに、到處に有り。

●美少年の意義は、吾に在ては、古今少しも渝らず、意氣第一、美貌第二。蓋し、美少年の、崇高なる情緒の、詩的表現は、則ち、畫趣を爲す。

●錦繪の美少年は、古文學の畫趣に屬す。譬へば、熨斗目の振袖は、金釦となり、大小は短劍と變はり、却つて、今に於て、新味の畫趣あり。

其十七

●歌に、「櫻三月、菖蒲は五月、少年の盛りは十五六」といふ。これ唯だ、其の可憐の美容を云爲するのみ。眞に、崇高なる意氣の發揮を見るは、寧ろ其の以後に在り。或は、十五六歲より廿二三歲の間を、其の全盛時とすべし。

●西洋にも美少年の畫趣を言ふ者あり。然れども、彼の國人、吾輩の、此の文を讀まんとも、十分、默解するを得じ、恰も、切腹の精神の、彼等に了悟せられざるが如くなるべし。

●歐米人の、日本人の所謂「畫趣の美少年」を了解せんとする者は、須らく、吾が練習艦を訪へ。吾が海軍は、年々、少年候補生を滿載して、練習艦を歐米に送りつゝあり。

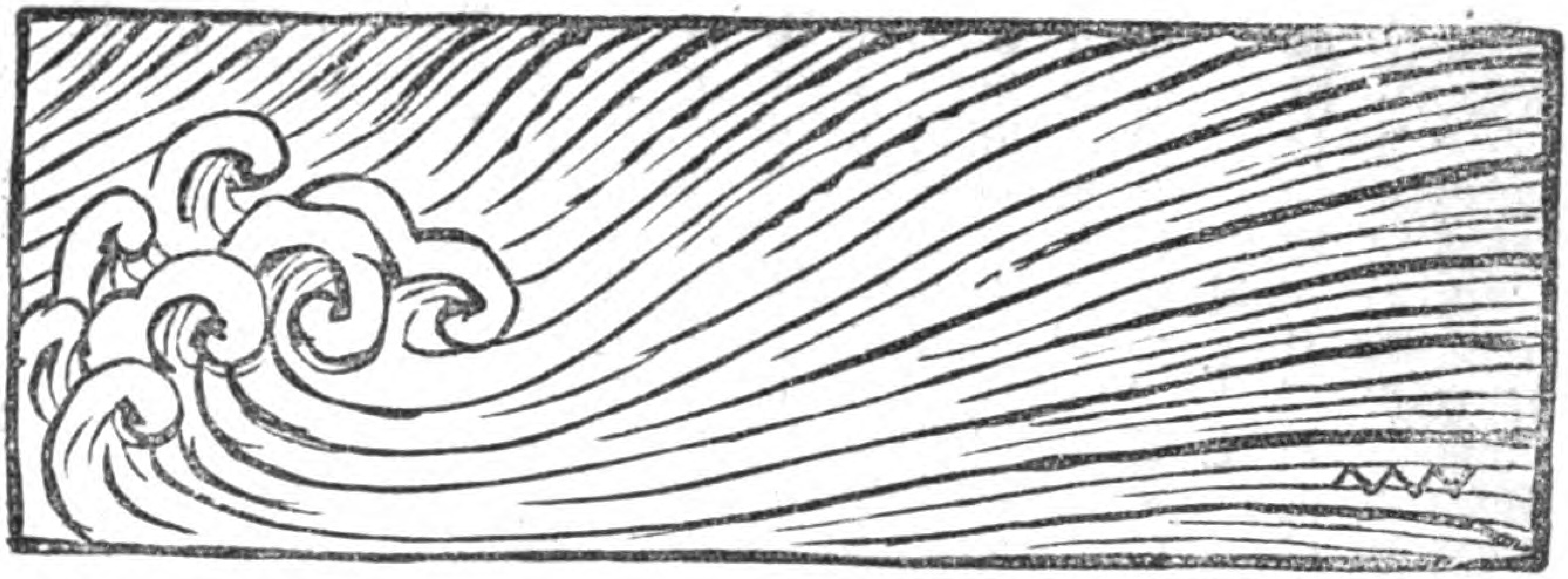
●吾が海軍は、風貌の整はざる者を取らず。彼等は、既に十分、忠勇の精神を以て鍛冶せらる。故に、其、稍美なる者は、之を日本の美少年として推稱するを妨げず。

●彼の高き甲板が、大洋の奔濤に洗はるゝとき、堂々として、外國の軍港に投錨するの時、彼の美少年は、如何に、文明的の色彩を以て、其の勤務に向つて、日本人の忠勇の精神を發揮するかを想像せよ。

●吾輩は謂ふ、彼の美少年は、世界の波の上に、日本人を代表する『美しき愛國の肉彈』ならずんばあらず。

吾輩、先きに、練習艦阿蘇、宗谷の外航を横須賀に送り、候補生の艦中勤務に感發するありて、此の稿を草す。此の夜、曉に到りて稿を畢る。外は星に冴ゆるらし。鼠、梁を奔る。

黑頭巾記



數奇傳（八）

——一小文學者の自叙——

田岡嶺雲

（貳拾壹）姑蘇の一年

(1) 上海の今昔

六年振りて再び上海の土を踏んだ。

六年前初めて此地に着いた時、懐に僅に八十錢しか剩つてゐなかつた心細さを、今更のやうに憶ひ起した。

六年の間に上海に於ける邦人の發展は、内實は知らず外見だけは目覺しく見えた、三十三年の北清戰役に一エポックを劃して、俄に振つて來たのださうだ。

領事館は元のまゝに、宏壯な郵船會社の前に威壓せられたやうに狹小てあるが、宿屋や料理屋の數が驚くほど殖えて、且いづれも立派になつてゐる。六年前まで薄汚ない支那家に、夫婦共稼ぎの下宿屋てあつた者が、三階建ての歐風のホテル式な宿屋になつて、市場の側の僅か二階二間きりの小料理屋が、大きな玄關を控えて藝者の十幾人をも抱へてゐる、僅か二人しか居なかつ

た藝者が何十人とか居るのださうだ、虹口の一角を夜通ると內地の色街のやうな三味線太鼓のざんざめきに覺えず眉が顰められる。但喜ばしいのは、書店が二軒も出來て大概の新刊物は揃つてゐる事だ。

物皆新たなる活動の氣に充ちてゐる中に、我獨り依然たる阿蒙の舊態を脫せぬやうにおもはれて、何となく我が身の影が顧みられた。

去年から此地へ留まつてゐる家弟に會つた。初めての此地の激しい暑さに負けたのであらう、頰の邊に窶れが見えて、何となくいぢらしいやうな氣がした。三年後の同じ月に遂に此地に斃れる運命の影が映(うつ)してゐたのかも知れぬ、但神ならぬ身の夢にも思ひ寄らなかつた。

前程(ゆくて)を急いで、匆々に手を別つた。予は直に船で蘇州へ向つた。月の明るい夜で、江水に浸つた兩岸が夢のやうに淡かつた。

前年上海に居た頃、蘇州には一度遊んだ事がある、瘦馬で寒山寺へ往つた事、舟を石湖に泛べた事、大東汽船會社下の流で泳いだ事などが船室に獨り寂しく寐た胸に浮んだ。

けたたましい人聲に眼を覺ますと、夜は纔かに明けて、霧の中に見覺のある蘇州の城壁が認められた。

(2) 吳王の舊都

支那に遊んで、其山の容(かたち)、河の姿、其野色其樹影其村落其人家、其塔其橋、其舟其帆などを見ると、嘗て讀んだ詩の句や、懸物で見た畫の樣が面のあたりに展べられたやうで、何となく懷(なつ)かしい。吾が生れぬ前に家を出た叔父に他鄕で名乘合うた心地がする。

予が今度聘せられた蘇州は寒山寺のある所謂姑蘇、恐らく支那の地名中で此ほど日本人の耳に熟した者は有るまい。實際支那に於ても、其山水の明媚を以て著(あら)はれた者は杭州を除いては先づ指を此地に屈する。此地の山は大陸のつく著的でなく、削つた樣に聳えてゐる、水も黃濁した流れのみの支那には珍らしく淸い。其山水の美と其古蹟に富めると其美人と織物の產地たるに於て、蘇州は我が西京と相似てゐる。其靈巖山か

ら遙に太湖の一角が浮いて見えるのは、比叡から琵琶湖を望むだのにも當らう。三條通りにも比すべき閶門の熱鬧は古く此地に刺史たりし白樂天の詩にも見える。廓外の遊樂地としての虎丘は、東山にも比ふ可きか、蘇州城萬戸の甍が一目に瞰下される、山上の崩れかゝつた塔は唐代の遺物とか傳ふ、眞娘の墓も此に在る。水を隔てた楓橋は上國往還の一小驛、三十石船の伏見にも當らうか。天下第一關門と題した赤煉瓦の穹窿の外に目鏡橋がかゝつてゐる。例の寒山寺は驛の傍に廢頽して、寺内に文徴明の書いた例の夜泊の詩の碑がある、日本人が來ては缺いて持て往く爲めに碑面の字は殆ど痕が無い。范石湖が栖遲した石湖も此處から遠くない。

春風秋雨三千年、姑蘇の臺の那の邊て、呉王豪華の跡尋ぬるに由も無いが、伍子胥が吾が目を抉りて其上に懸けよ、以て越の寇の入りて呉を滅ぼすを觀んといひし東門は今に胥門の名を留め、其上客に珠履を踏ませて趙の平原君と伊達を競はせた楚の春申君の廟は確か知府の衙門の邊に在つたやうに覺えてゐる。

長髮賊の亂の刧火に罹つた一部分は、草茫々と荒廢して、實際に雉兎の栖處となつてゐるが、而し有繫に江南の大都たる俤は猶存して居る。風流な都、典雅な都、又文學の盛な都として、此地から出た雅人騷客も尠くない。書に著はれた張瑞圖も此地の人、畫に名高い唐伯虎も此地の人、八家文の編者たる沈德潜も此地の人、詩人呉梅村も亦此地の人てある。今も猶此地は剛强の風には乏しいが、俊才の士が多い。

予の聘せられた江蘇師範學堂は三元坊といふ處にある。三人の狀元を出したから起つた名だそうだ、亦以て此地に學問上の英髦を出だすことが窺はれる。

(3)　蹇驢に跨つて秋晴を趁ふ

我が學堂は固と紫陽書院といふ朱子學派の學校だつたのである。孔子廟の後、巡撫衙門の前に當つた位置を占めて居る。門前に池があつて、架つた石橋の横に大きな柳が毿々と枝垂てゐる。

此の石橋の上に立つと、孔子廟の大成殿の朱楹碧瓦

が蒼蒼たる森を隔てゝ見へる。屋根には晝はいつも喜鵲が群をなして飛んでゐる、夜は森から名も知らぬ怪禽の聲が聞こえる。

同じやうな構の屋根門を二つ入ると、突當りが朔(ついたち)十五日に行ふ皇帝及孔子の禮拜場に當てた瓦甃(たゝ)みの堂で、其前の中庭には靑桐が二列に屋根よりも高く聳えてゐる、月の夜其下を歩むと蒼い影が地に落ちて、月の光に流れさうだ。

門を出ると孔子廟と路を挾んで此土地の前賢を祭つた祠堂が有り、此と並んで荷池に臨んで滄浪亭がある。孔子廟の前を右に折れると府學の蹟に草のみが徒に茂い。大きな狛犬の門前に立つた寺があつて、其前に頽れた塔が危なげに立つてゐる。盤門を出て左へ城外を進んだ處に日本專管居留地がある、日清戰後に獲たものだが、汚ない娼家と日本商人の家が少許ある外は、幾萬坪の廣い地面が空地のまゝで領事館の日章旗のみが佗し氣に風に飜つてゐる。

城外は此の日本租界から閶門外まで濠に沿うて所謂馬路（馬車路）の坦道が開かれてあるが、城内は縱横に通じた街路が極めて狹い、少し繁華な通りは肩摩轂擊の文字が決して誇張で無いやうに雜閙する。馬路には馬車も人車もあるが、城内には馬か驢馬か若くは轎による外は無い、要處々々には辻待ちの馬と驢馬とがある。驢馬は中流以下の乘物ではあるが、蹇驢に騎つて秋晴を趁ふ、詩句の中の人となるも亦風流である。

(4)

初めて貯金といふ事をした

二年間の蘇州に於ける生活は、前度の上海に於ける放逸不檢束に比して寧ろ極めて嚴肅であつた、官立學校の敎習といふ身分に對して謹愼した爲めもあつたが、一つは殆ど其滓(おり)までもを飲み盡くした苦(にが)い經驗に反省して、眞面目に考へ眞面目に行はうといふことを、齡(とし)と共に漸く悟るに至つたのである。惡酒の醉の醒め際に、淸冽な水を欲するやうに、淡い淸い意味ある生活に復(かへ)りたくなつたのである。

岡山から東京に歸つて、自分の荒(すさ)んだ生活の結果を覿面(てきめん)に感じた時から、慚愧と悔恨とに心を責められた、

其の萌した向上の一念は、支那に來ると共に、所謂敎育者なる境遇に扶けられて漸く堅さを加へた。

學校には日本の敎習が十餘人居た、予等は學校內に一室を與へられて其處に起臥した。隙間の多い板敷の部屋で天井も張つてない。僅に細い椽木を四隅に立てた許りの粗末な寢臺と、机と書架と籐椅子二三脚と洗面盤の外には何の裝飾も何の道具も無い。二間に三間の其一室が即ち書齋であり、應接所であり、寢室であり、又便所ともなり、洗面所ともなる、貧素といへば貧素、簡單といへば簡單な、所謂簡易生活の理想的な者ともいへる。固より住宅としての設備が無いから、冬は檐からも戶の隙間からも、板間からも、寒い風が四方から洩れて入る、夏は灼けるやうな日に熱した瓦屋根の餘熖に蒸さるゝ樣である。予は甘んじて此部室に棲んで何の不便をも不足をも感じなかつた。

此頃から旣に病が潛んでゐたのであらう、何となく沈鬱になつて、他の連中が營門外の日本人の宿屋へ往つては酒を飲む其仲間にも外れることが多かつた、醉うては疊の上に敷いた寢床を懷かしがつて、土曜日など此處に泊るものも多かつたが、汚い疊穢れた薄團に寢るよりも予は佗しいながらも自分の部屋の慣れた寢臺が寢心地が良かつたから、城門の閉ぢる時刻に遲れぬ限り外に泊る事は多く無かつた。何の部屋もどの部屋も人の氣合もない。森とした闇を唯一人歸つて寢た事も往々あつた。

古本屋や骨董屋が能く出入をした、古本を買ふのが此頃の唯一つの道樂であつた。一週十幾時間敎場に立つ外は多く書籍に親しんだ。

斯んな簡易な生活に甘んじてゐる上に、綸前のやうな不檢束な行に伴ふ浪費が止んだので、外國敎師として得る比較的潤澤な報酬は、餘裕を生じた。予は從來鄙吝な事と賤しめてゐた貯蓄といふ事を此時自ら始めるやうになつた。

卑しい者、汚らはしき者と貶しながら其金の爲めに絕えず受けた壓迫や恥辱や束縛や屈從やに對する恨は、深く胸に刻まれてゐた。金を使ひ得ず、金にのみ

使はるゝ情無さを沁々と味うてゐた。固より富を積み産を殖やすが如きことは予には出來ぬ、而してせめては清く高く己の欲するまゝに身を持し得るだけの資を得たいといふ心が常に念頭にあつた。

始めて此が實行の機を得たのである。

此くの如くにして予の作行は青年時代の刺激を求め刺激に反抗する華やかさより、一轉して着實な質素な方面に嚮はんとするに至つた。

（貳拾貳）病の衰え

(1) 漂浪の人

其歳の暮頃から此と現れた病氣は無いが、何處となく身體に衰えを感ずるやうになつて來た、正月の休みを幸ひに同僚のもの二三と歸朝した。

其頃は日露戰役の跡始末て、未だ御用船が解かれてゐなかつたので、郵船會社の上海航路も借船て間に合はしてゐた、借船は施備なども固より不十分であつた。一等は滿員て、二等は無い、予等は暗い船艙の棚の上の三等船客となる外は無かつた。

船が波止場を離れる時、予等の側て欄干に倚つて、送つて來た一人の紳士らしい服裝の者と別を叙してゐた外人があつた。ホワイトシヤツも着ず襟飾も懸けてゐない、よれ〳〵になつたネルのシヤツに、古ぼけた服を着た勞働者かと想はるゝ見すぼらしい服裝の男てあつた。但服裝に似ず風貌は決して下品て無い。何時長崎へ着くかといふ質問から話の口がほぐれて、其の語る所をきくと、彼は露人て長崎へ行くのだといふ。獨逸語て話す所を見ると、下等な勞働者ては固より無い、幾國とかの語を話すが唯英語だけは知らぬといつてゐた。話し振が頗る快活て且率直だ、手眞似や身振りて不十分な話を補ふて暫くの對談の間に全然友達になつて了つた。

酒を飲むかときくと好きだといふ、ボーイに吩付けて正宗の壜を贈ると喇叭飲みに一息に飲み干して此酒は弱いといふ、幾本かを立續けに仰ぎ飲んでゐる中に、先生全く醉つて了つて管を捲き始めた。長崎へ上陸る

時の案内を繰返し〳〵賴む、自分は眼が惡いから眼醫者へ連れて往つてくれろといふ、又自分は決して貧乏ては無いといつて世界到る處て受取れる銀行の切手を出して見せたりなどした。

船が呉淞沖を離れると荒れ模樣の空に風が寒い。彼の男が室へ歸つて着て來た外套は、身裝とは飛び離れて立派な臘虎か何かの總裏を附けた者てあつた。

外套に就て此んな事があつた。

予は昨日まて兄讓りの、袖に筋の入つた頗る古い型の外套を着てゐた。一所に歸る連中の外套が孰れも襟と袖口との人目につく場處のみへ毛皮を附けてゐるのに、小供らしい敵愾心を起した。學校へ出入の洋服屋を喚よせて、故らに襟や袖口は避けて裏に一面に羊の毛を着けたのを昨日の午頃に誂へて、今朝船の中て受取つて、夫を衣て心窃に得意てゐた。

然るに今此男の外套を見て、連中から反對に冷評せられた。

夜に入つてから暴風雨となつて長崎へ着くまて止まなかつた、予等は下に、彼の男は甲板の上の室にゐたので、船に醉つた予等は長崎へ上陸る迄彼の男と相見る機會が無く、又暴風雨の爲めに船が遲れて、夜に入つて着いたので、夜中なり雨中なりの混雜に紛れて、終に此男のくれ〳〵もの賴みを果たすことが出來なかつた。

彼の男は着たまゝに何の荷物をも持つてゐなかつたが、唯座の傍にヴァイオリンが置いてあつたと、見て來た予の同伴者が話した。

一張の胡琴を持して漂泊の旅にある音樂者か、或は西比利亞の獄を脱して異郷に自由の空氣を求むる革命黨か、將た又た故らに變裝して讎の國を探る間牒か、孰れなるか予は知らず、予は唯何となく此男を幽しくおもうた。

今も此男を憶ふ毎に、予はゴルキーなどの筆に描かれた放浪の人を偲ばぬ事は無い。

(2) 警察の國

長崎から小濱の温泉に往つた。

小濱は溫泉嶽を後に負うて、不知火の灣に枕んだ海濱の小さな村である。長崎在の茂木から汽船に乗つて曉方に着く、霧の晴れゆく波打際に立並んだ碧瓦堊壁、宛がら繪て見る龍宮城が浮出した様におもはれた。

税のかゝらぬ煙草を輪に吹いて、警察の無い國に住む暢氣さは、日本へ一歩足を踏めば直ちに破られる、日本はうるさい國である、齷齪ついた國である。

日本は有難たすぎるほど警察の保護が行届いてゐる事を實驗した。

或日のこと長崎の知る人から宿へ宛てた電報が來た、夫は予が在否を問合せた者であるが、此の打電者は予が此宿に居ることは十分承知してゐる筈であるのに訝しいとおもつた、尤も隙があつたら遊びに來るやうに約束がしてあつたので、其のための問ひ合せかとも想つた、夫にしても予に宛てずに宿へ宛てたのが解せられ無かつた。

兎に角在宿の旨を予から返電した。

其翌日浴場に居ると其男が遣つて來た、予の顏を見て怪訝な顏をしてゐたが、先づ無事で安心だといふ、何の事だか判らない。

宿へ歸る途すがら事情を聴いて愕いた。

大阪の兄の家へ其土地の巡査が來て、予が捕縛せられたといふ報知が此地の警察からあつたと告げたのださうだ。

後て聴いたが其時兄は旅行中て留守であつた、姉が心配して直ちに旅行先へ打電する、兄は愕いて神戸の兄に打電する、神戸の兄から此男の許へ取調べ方の電報を發したのだ。

想ふに、予は大阪の兄の處を宿帳に記してあつたから、此地の警察から何か予の身分に關して取調方を大阪へ照會したのであらう、夫を巡査が予が捕縛せられた事と想像して兄の家へ話したのてあらう、平生から軌道に外れた行ひの多い予の事であるから、有得べき事として兄等も之を信じたのであらう。

間違ひとは判つたものゝ、何故予の身分が大阪へ問合せられるだけの嫌疑があつたか。兎に角日本の警察

は鋭敏過ぎる。

(3) 哲學も文學も何の要ぞ

健康の變調を來たした故であらう、予の思想は此頃から復た一種の悲調を帶びるやうに成つた。

元來予の思想には早くから厭世的な暗影があつた、ショーペンハウアーの哲學に深く心を動かされたのも、其の厭世觀の爲めであつた。併し世間の風塵裡に落ちて、内省の遑を得なかつた爲めに、一時は忘れた樣に心の底に影を潜めてゐたのが、身體の衰えと共に、外と鬪ふ精力が萎縮して、内に向ふやうになつたために、再び思想に悲調を帶びて來たのであらう。

精神に反撥の力を減じた爲めであらう、海に臨んだ宿の、朝夕に聞く波の音が堪えられぬまで厭はしくなつた、其の寄せては返す響に何處までも／＼と追かけられ追詰められる樣て、夫に抵抗すべき力の衰えた自分の微弱を感ぜずには居られ無かつた。

此と共に予は又、書籍と筆の上に活きて來た從來の事業の無意味なりしことを切に感じ初めた。學者の高論は畢竟空疎である、人生と沒交渉である、飢に泣く者天下に多きに、哲學は彼等に一椀の食を與へるだも得ないでは無い乎、寒に凍ゆるもの亦天下に多きに、文學は彼等に一枚の衣を與へるだに得ないでは無い乎。理を説き道を談ずることは空腹の者に何の養ひにならう、美を歌ひ藝に遊ぶことが、襤褸を纏ふ者に何の慰めをか與へやう、畢竟は思想を玩ぶ遊戯たるに過ぎぬ、文字を弄はす道樂たるに過ぎぬ、人生と渉らず、人道に要なき榮耀の贅澤たるに過ぎぬ。理法は不易なりといふも、眼前の悲慘を救ふに孰若ぞ、文字は不朽なりといふも、現在の一人を扶くるに孰若ぞ。貧者病者は天下に滿つ、而して皆同じく人類では無いか、同じく同胞では無い乎、人間としては此の同胞人類の爲めに努力してこそ、始めて人生の意味が有る、人類の爲め同胞の爲めに何等切實の貢献なき者は人間の務むべき第二義の者である、弱者を扶けよ貧者を救へよ、書籍を捨てよ筆を抛てよ。然る後吾は始めて意味ある我を觀ることを得ん。

予は友もなき旅の宿に獨りこんな事を考へた。

予にして若し熱し易く冷め易き心をもたず、意志の執着あり、實行の才能あらしめば、或は予は此時宗教の人となつてゐたかも知れぬ。

併し予は竟に空想の人であつた、此の發念も終に實行の上には何等の發展を見なかつた。

「淪落の女」に就て

松崎天民

中央公論の新年號に賴まれて、『淪落の女』と題する小說的雜文を書いた。書いて三分の一に至つた夜、新聞社から自宅へ歸る途上、これを落失した。

時計を落したり、金を落したりした經驗は、天下萬人の上に共通であるが、未成品にしろ、自分の感情を打込んだ一種の製作品を、世に公にするに至らずして、落失した事は、斯うした事業に關る人でないと、判らない一種の經驗である。初めて此の經驗を嘗めて、自分は逝かんとする年の暮に、一つの學問をした。

事實を根據にして居るとは云へ、其の多くは空想的色彩ある非小說的小說である。再び書くのは、自分に於て大なる困難でないが、雜誌社の囑望を空しうするのみならず、折角新年の誌上に、一つの讀物として、大に歡迎され樣とした自分の名譽心は、これがために勘らぬ打擊を受けた。酒にも醉つて居ない人力車上で、自分の書いた作品を落すとは、何と云ふ間の抜けた話であらう。親に死に別れ、兄弟に死別れたとは、違つた氣持ではあるけれど、殆ど夫れに相似た、諦められない樣な氣持がする。作品を第二の自分と心得て居るだけに、夫れだけ思ひ切れない口惜しい心地がする。

『淪落の女』は、牧師、女子教育家、小說家、救世軍、新俳優の五人に宛て、日蔭の花たる薄倖な女の身の上を語るものである。落した原稿は、新俳優喜多村綠郎君足下に宛た、『黑縮緬日記』と題するもの。葉山の星月夜を背景として、感慨ある叙情的筆致で、一賣春婦の告白を書いたので、これから面白くならうとする三十枚の所で、遂に遺失して了つた。然も主人公たる女は、信州上田の資産家に生れて、長野の女學校に學び、齡若ふして肉慾に落ちた『伊藤操子』である。信州の讀者には、殊に深い興味を以て讀まるべきものであつたに、實に惜い事をした。『中央公論』では、折角豫告までしたから、一月號には間に合はなくとも、二月か三月の誌上に書いてくれと云ふが、自分も書く積りでは居るもの丶、最う勇氣がなくなつて了つた。

然し書かう、書きたい、大に書く。新聞記者が、此の人生と世相を何う見るか。人間の研究と云へば、小說家の手にのみ委ねられて居る今日、新聞記者と雖も、活きた人生を觀られぬ譯はない。新聞記者が事實の報道と解釋のみを、本職の樣に心得て居る時代は、最う過ぎ去つて了つた。常に活きた人間に接し、動きつゝある世相に觸れて居る自分等は、人生の研究者としても、極めて便利な位置に居る。この位置に座して居ながら、斯うした點に着眼し、斯うした點に力を注がないのは嘘である。自分は書く、大に書く『夜の女』のためにも書く。自分一人のためにも書く。大に書かう。

カーライルは、非常に苦心して書いた原稿を、不注意な下女のために、ストーブで燒かれたとか、彼は失望し落膽したてあらうが、氣をまがらすために、小說を讀んだと云ふ。自分は、惡文ではあるけれど、落失した殘念さを、此の一文に依つて慰めたい。斯う書いて行きつゝ、自ら僅に慰めるより他に詮方無い。

明治四十四年極月十日の夜は、斯て生涯忘れ得ない思ひ出となる。貧しいけれど、金でも落した方が、何の位宜かつたか、幸福であつたか知れない。(十一日夜)

長谷場文相論



△長谷場純孝氏

三宅雄二郎

薩摩人は割合に多く文部大臣と爲つて居る。西郷侯が文部卿でなく文盲卿であると洒落れたのを初とし、森子があり、腰掛にせよ大山侯があり、其次に樺山伯があり、前西園寺内閣に牧野男があり、現西園寺内閣に長谷場氏がある、薩摩出身なるは何處にか文部大臣に爲り易い處があると見える。

薩摩人の如何いふものであるかは今日でも一の疑問である、長州人も疑問であるといへば疑問であるにし

ても、大體は分つて居る、薩摩隼人といへば日本第一の尚武者の様に考へられ、骨格の逞しい所、頭大の禿げた所、強い者の響に引かれた程であるに、徴兵検査の體格の数も劣等なのは琉球に次いで薩摩である。士族が養成の結果で強くなり、他は昔から弱いのであるか、其士族とて果して眞に強いのであつたか。樺山伯の如きは立派な體格だが、又甚だ劣等な體格の者もある。此等は調査する必要がある。又西郷南洲が我家遺法人知否、不爲兒孫買美田といひ、實際兒孫の爲に美田を買はず、之と共に死んだ連中も概ね美田を買はず、薩摩人は利慾に淡泊、誠にサッパリして居ると思はれたに、現に薩摩出身で多少身分あるものは殆んど一として美田を買はぬのはなく、中に貪慾を以て目し、鄙吝を以て目すべきものもある、其の極端なのもある、南洲一派が金錢に頓着しないのであつて、他は昔から金に目の無い方であつたか、或は南洲一派も生き長らへ居れば金貯め主義になつたであらうか、此邊の事は調査せねば確められぬ、何にせよ疑問である。

長谷場氏は初め南洲一派に屬し、後に現代の薩摩人の部類に入つたのである、前の薩摩人でも、後の薩摩人でも、若し薩摩人に取るべき所があれば、氏にも取るべき所ある筈である。今こそ動もすれば長州の天下と言はれるが、曾て薩摩の天下と言はれた事があり、多くの官吏が薩摩から出た、其出たのは維新の際に働いて功があつたといふのみでなく、人と爲り悠々迫らず、ドッシリとして重みがあり、智略も無く智識も無くても人に長とし推さるゝ體格であつて、西郷の將に將たるを初め、以下それぞれ一方に長と爲り、以て顯貴の末に至り、顯貴の語が薩摩調を標準とするかの有様なのに徴しても、如何に薩摩の勢力が廣きに及んだかを察するに足る。長谷場氏も左る意味に於て人に長たる の資格がある。今少しく年上で維新頃に出て居つたら、相應に働き、相應な位置を得たであらう、或は西南の戰役に死んだでもあらう。併し年が若かつた爲てあるか、死ななかつた。死ななかつた爲に現代の薩摩人の群に這入つた。現代の薩摩人は西郷一派と違ひ、金儲けに務め、家計に巧である、高島子の様に借金で困るのは珍しい。併し政治上で長州に抑へられ居る事は現に目撃する通である。が是も無理はなからう。元と戰場で人に長たる所があつたのに、物事複雜になり、智略智識を要する場合、智略智識の缺け居るのは無能と見られる、軍隊に於けるが如く年功を重んずる所では、早く昇進して要地を占め居るものは相應に敬意を拂はるゝが、左も無い所では實際の事務に堪ふるか否かが問題である。薩人が長人に劣ると見られるのは其邊に在る。

併し薩人で或る位置を占め居るものは何れも現代の形勢に適するからであつて、何といふ事無しに人に長たるといふ丈でない。多少の能力があるのだ。長谷場氏は今の世に處して相當にやり切ることが出來る。西郷一派と違ふとして怪むべきでない。その一派に屬し居れば屬し居る丈の事を爲したであらうし、後に或る地位を占めれば又之に應ずる様にするのである、面倒な政治界に立ち、剰へ政黨の中に揉まれ乍ら、兎に角多少の重きを爲すのは何等かの能力なくては叶はぬ。西郷と比べれば初

論の事、村田新八の如きと比べても、品性の如何はしく感ぜらるゝ所あるが、現在の位置は自らの能力で贏ち得たとすべく、衰へたる藩閥の勢力を維持するに與つて力無しとはせぬ。衆議院議長として相當に職務を果し、文部大臣として別段下手な事をせぬ、といふのも氏は常識を具へて居り、多年多數の人と交つて少からず人間の事を知つて居るからであらう。別段に智識が無くても長く官吏生活をして世間を知らぬ者よりも人事の機微に通じた所がある。前文部省は非常識を露骨にサラけ出し人をして呆れ返らさしたが、氏は大人しく出て來て居る。王安石が法律づくめで苦めた後に、司馬光が出て何事をもせずに人望を收めたのと、大小の程度は比較にならぬが、いはゞ幾分か左る關係もある。前には御セッカイが餘りに過ぎた、諸學校では訓示に飽き〳〵し、後には馬鹿にした、長谷場氏は別段教育の事を知らなくても其邊の手心が分つて居るのか、今日まで餘り下手な事をせぬ。小面倒な事いはずに、一部小學校長を奏任待遇にするなど、一寸面白い。

氏が文部大臣として適任であるかは疑しい。氏自らも文部に入らうとは思はなかつたらしい。文部大臣に是迄褒むべきのが少く、氏は何れかといへば惡るくない方であるに、まだそれ程と思はれぬのは、自分の意思に非る處に當て嵌められたと察せられる點もある。入閣がなか〳〵六かしく、若し入閣し得るならば面倒の無い司法と見當が附いたのに、松田氏が之を望み、取り殘された文部が手に入つたといふは、如何にも餘り物を貰つた樣である。文部は左る劣等な處でなく、實に帝國の將來の運命に關すといふべきであるが、從來の習にし、大臣が伴食扱ひされつゝ、其の割りに面倒が多い、政治家が好まぬ。やつとの事で人の好まぬ所に就いたといふは、世の中に滑稽の極と爲る。

氏にして入閣を望まず、相談があつても之に應ぜず、總選擧後の衆議院に再び議長となつたならば、更に重きを有し、次の政友會内閣に強いて或る重要なる位置を占むる樣に勸められたであらうが、氏に於て爾するを許されざる事情がある。安政元年の生れで、次の政友會内閣の成立を待ち居れば或は全く一の老翁と認められるにならぬと限らぬ。世間の相場は善い加減のものが多く、前大臣などいふは仲々通りが好い、何でも彼でも一度大臣と爲つて置く方が都合の宜い事がある。松田氏は七十に近くして黨に重きを爲して居るが、是とて三度も大臣と爲つたといふ所が助けて居る。長谷場氏に於ても、入閣を斷つて次の政友會内閣の成立を待つよりは、一度大臣と爲つて置く方が得策と見えるだらう。文部大臣と爲つた順序は立派でなく、大臣に爲りたいばかりに爲つたとしか見えず、如何にしても大きな人物と受取られぬが、大臣と爲らなんだならば、或は一層値打が無いと見られたかも知れぬ。そこで何でも彼でも大臣と爲つた方が得策として、扨て今後二び大臣と爲り得るか如何か、是は豫言し難い處だが、次には六十幾つといふ所である。希望が春の海の如しといふ譯に行かぬ、或は今が最後であるやも知れぬ。すれば文部大臣として勉め得られる丈勉めた方が宜いてはないか。

氏は教育に關係の薄く、學問も乏しい方だが、全く之た離れた性質で

もない、頻に南洲を擔ぎ出す處、世の敎化に趣味を持つて居る。曲りなりに歌を讀む所も風流氣がある。如何しても牧野男程の智識は得られぬが、武骨一片の報と限る譯に行かぬ、勉强次第、相應に遣り得るであらう。井上子は文部大臣として重んぜられたが、子自らいふには、品行の事を言はれては少々御恥かしい方だとの事であつたが、文部の衙に當つてから大に注意する處があり、袴を穿けずに如何なる客にも會はなかつた。袴なんかどうでも善いとして、注意すると注意せぬとに少からぬ差がある。長谷場氏が文部大臣に爲つたとて世間の多くは笑つたが、氏にして奮つて職務に盡したならば、前に笑つた世間をして感服させるに至るかも計られぬ。氏は物の分らぬ方でない、注意したならば相應に遣つてのける事が出來さうである、單に政治家氣取りに爲らず、文部大臣として如何にすべきやを考ふべきである。

銃獵の如きも體育を勸める意義に於てするならば宜い。獲物を獲んとし、要らざる殺生するならば考へ物である。學問の事も强いて半可通を粧ふに及ばぬが、心掛けられるが宜い。若し文部大臣として相應に勤まつたならば、後史に好い位置を得るに至るだらうし、左る事ないにしても一生を飾るのみでなく、君國の爲に盡す事となる。南洲は盡人事待天命といふを書き殘し、長谷場氏は之を服膺し居るとの事、文部大臣は伴食であるか如何かは問ふを要せぬ、折角黽勉すべきである。人事を盡して天命を待つべきである。

△もつと味噌の香が取れれば好い

曲肱政客

短處をいへば邊幅を飾ることだ。宿屋へ着くにも長谷場衆議院議長御旅館と書いた大々しい文字でも見えて幔幕で圍うてでもないと機嫌でない。が長所からいへば熱心な男だ、政友會の元老中老を通じて此點では長谷場が一等に宜しい、長谷場が掛れば如何様な六かしい處でも如何なり斯うなり切り脱けて來る、だから彼が巡れば地方の入黨者も多くある、忠實熱心を言へば實に政友會中其比を見ぬ。それ故何だ小積に障ると半面には怒つて居乍らも半面には又好くのだ。如何もぶるからね。一所に旅籠屋になど泊ろと堪つたものぢやない。我々仲間からすれば長谷場が何でも無いさ、皆が左様思つて居るのさ。それを自分だけ如何にも偉らく扱はれぬと氣に喰はぬ。坐るにも先づ二枚蒲團か、左なくば特別な蒲團の上でなくては心持が宜くない、それも皆が同じいんてはいけぬ、先づ宿いたなら長谷場丈を別間に引張り込み、他の者は次の室に入れ次の蒲團を出す、左も隨從者らしく取扱へばよい。他の者を皆自分の隨從者だと人にも見せ附けぬと承知せぬのだ。併し銘々の選擧區やなどでも兎に角六かしい處となると特に長谷場の出場を注文して來るも、普段邊幅を飾る厭な處を其場合には我慢して彼に屈するが、それは職として彼の厭

事に熱心な質である。

無學といふ、それは左樣だけれど、其代りに黨員中の力あるものには能く耳を傾けて聽く。日頃傲慢で少しも人に屈せぬ樣であり乍ら、自分の知らぬ事は皆から能く聽く。無學を標榜して胸襟を披いて聽く。それだから文部大臣には最も宜い。文部大臣には狹い專門的智識よりも、能く大體を洞見して方針を立つる統一的智識が欲しい。博士なんといふ者には專門の事は別として統一的智識あるものは望んでも得られぬものぢやない。此點に於て寧ろそれを捨てゝ此れを取る。僕は兎に角持論として、大なり小なり能く大臣たり得るの器でさへあつたら之を文部大臣としたいと思つてるんだ。

今日の教育の弊はハイカラ風に在る。即ちハイカラ教育に在る、物質的教育のみ獨り盛で精神的教育所謂日本的教育といつたら地を拂つて空しい。皇室の如何、國體の如何などいふ事の痛切な考は博士などいふものどもの心頭にはない。一切歐米のハイカラ思想にのみカブれて行く。時に日本國民たる點を失うて相脊いて世界的國民たらしめんとして居る。日本は支那の如き革命國とは根柢を異にする。其處に國礎の鞏固な所以が存在して居るのであるに、それ等の辨へもなく只新を追うて動かんとして居る傾がある。本づく所國體の如何を解せざるに因るので、抑も近世我國の學者の弊である。而かも此學者の弊が一般學生の頭に浸潤して居る。國體の國粹のといふものは無い、言ふものは時勢に後れたとする。是は日本の爲に甚だ寒心すべき現象で、國家興亡の所以より深く思を潜むべきである。が長谷場なら國體、皇室に關する觀念は根本的に胸に沁み込み、始終重きを爲して居るのだから、此人にして倘ほ衆說に耳を傾け、之を能く自己の胸裏に陶鑄し、統一して、宜しきに從つて處斷し行くなら宜からうと思ふ。只帷幄の人に宜しきを得るが肝腎だ。秘書官といふて無しにもつと別なもので、兎に角參謀だ。それの必要はあるが、それさへ旨く見附かれば文部大臣の仕事は一番能く擧がらうと思ふ。剛情は頗る剛情だ。せぬといつたら決してせぬ、が又するといつたら如何でもする、豪氣がある。此處が頼母しい。只守る所を失はず、而かも日新の智識を吸收し了解する參謀があり、能く傍から智慧づけて行くならば、長谷場は吾人の期待する最良の文部大臣であらうと思ふ。

が彼の弊をいふと餘り御馳走し過ぎる。一にも人を集め二にも人を集めて振舞ふが、其結果阿諛に見え、貫目を不足にするらしく思へる。けれど御馳走は此人の性來好む所だ、性質だ、衆議院議長の時にも能く各派の代議士や大臣を招んだものだ、衆議院議長で彼の樣な事をするのは彼を以て初とする。敢て文部大臣になつて始めたといふてはないのだ。

仲の惡いものをいつたら、左樣！、元田等とは相容れぬ、是は何方らかといつたら互に地位を爭つた結果だね、互に先んぜられはせぬか〳〵と考へて來た點から、長谷場は自然元田に注意の眼を向ける樣にするし、元田も長谷場に越されはせぬかと矢張り視線を向ける樣にする。その中に遂に越されもしたものだから夫れて仲が惡いのさ。處が今は、內閣員

でない乍らも元田と閣議に列する樣になつた所から。近來その間に餘程直つたらしく思ふ。元田は或場合には長谷場を助けもし、長谷場も亦助を求める傾がある樣になつた。

　原との間にも一種の間隔があるね、是は何方かといへば黨内では大して惡くはなく、却つて善い方の眼で見て居る。といふのは此樣な點なのだ。一例を言へば秋田へ往つた時に、彼方では原前任内務大臣を正席に据えて、現任衆議院議長の長谷場を次席にしたが、それが長谷場には甚だ面白からぬ樣子であつた。議長の位置は高い。現任内務大臣たりとも其次席に就くべきでない。それを肯てする樣では議長の職分を辱むるものだ、個人が個人を招ぶなら天爵を以て人爵より高しとし、そして其點から原を上にするも宜いか知らぬが、今日は現任の衆議院議長を矢張り其資格を以て招待したのではないか。すれば幾ら原が偉らいとて此席次は何事だと思つたのだ。即ち長谷場の不平には衆議院議長を重しとし、其體面を維持するといふ立派な主張があるものだ。之を原の考へぬのは惡いと側の者も皆左樣思つて居る。が原にすれば又原で、長谷場はいやに邊幅を飾る奴とのみ思つて居るから、自然好かぬ樣になるのだ。

　でも長谷場には大きい處がある、人に心服される處がある、政友會の幹事長の奥繁三郎は、剛腹自ら用ふる男で容易に人に許さぬが、唯長谷場に丈は服して近く出入して居る。長谷場の一面勢力を得るのは其子分に厚い點に在る。一度び子分と爲つたもので一人も彼に背くものはない。一例を擧げれば鹿兒島の如きは全部長谷場の崇拜者で、長谷場の區なら一令の下に集る、又一人の異分子を其閥に入るゝを許さぬ有樣だ。之に反して岡山の犬養の如き、其生地の岡山一つが治まらんで困つて居るでないか、原も松田も亦左樣だ、此點では長谷場は獨り出色で子分を持つこと實に多い。政黨の首領には最も適した人格だ。只その邊幅を飾るの一事が妙に鼻に附く。鼻に附く中は味噌も上味噌でないと同樣に彼の人物も玉成されたものでない。後藤などの一番醜いのは矢張り其邊幅屋といつたら恐らく彼れ程のものはあるまい。手足の置き處、定まり處から氣にして、彼方に持つて行つて見たり此方に持つて來たりする。或は稍々反り身になつて見たり、口を工夫して動かして見たり、目を吊し上げて見たり、其一擧一動の裏に潜む心根が如何にも人の眼にブラ下つて見える、如何したら大臣に見えるか知らと二六時中それにのみ腐心して居るらしく思はれる。長谷場はそれ迄に至らずとするも矢張り比は其比、類は其類だ。

　只長谷場は一黨の首領たるには能く衆を率ゐる雅量を要すると知つて居り、其方に勉める處があつて餘程人造が自然に近づいて居るから、それで子分も澤山集まるのだ、なぜそれを人造といふかといふに、只邊幅を飾るの一事が好個の證據でないか。併し段々には進化して行くので今其過程に在るのだろう。性相遠く習相近し。習慣は第二の天性なりで、其中には自然に味噌がコナれて來て味噌臭くなくなるだろう、左樣コナれて來てそれさへ鼻に附かなくなれば彼の人望は到底後藤の比ではあるまい。

△文相としての長谷場

足立北鷗

問題外の樣ではあるけれども、文相を評する順序として先づ文部省其のものゝ歷史的因緣から說き進まう。明治政府も木戸の文部卿時代迄は教育を非常に重んじたものだ。勿論國政急變百事一新せんとした時だから勢ひ當然の事でもあらうが、歷代の文部大臣中彼れ以上のものは無からう。福岡孝悌子の時にも「普通教育の弛張は云々」と書き起した訓令が出たが、實に堂々たる一篇の大論文で、如何に重きを教育に置き、教育の力を以て興國の氣運を作らうとしたかが見える。がそれより後は文部省の貫目が次第に輕く見へて來、遂には內閣の組織に當つて一番文部省が後に廻る傾向と爲つた。それには由つて來る所がある。維新の初は薩長土肥四藩の勢力は互に犄角の姿であつたが、次第に土肥は第二流に落ちて來た。そして他の內務省、大藏省等には井上、大久保等薩長出身の、時の堂々たる政治家が居たに拘らず、司法省や文部省には土肥が多い。大木喬任にせよ河野敏鎌にせよ、江藤新平にせよ福岡孝悌にせよ。皆土肥出身である。既に土肥の勢力が薩長に及ばぬとすれば、それの據る處のものも亦勢ひ弱からざるを得ない。此勢に對して土肥は自ら防禦線を張らざるを得ない。自衞の策を講ぜざるを得ない、夫の司法官を終身官とする制度も斯くして生れ出たものらしい、司法權の獨立には司法官の地位の安全の保證なかるべからず、それには司法官を終身官とするを要すといふ、立派な學理上の理由よりも、更に一種の他の勢力より動かされざらんとする退守策、籠城策の含まれたものだといふ者がある。兎に角土肥は此處に立て籠る傾向があつた。退守するものは伸びず、自然無勢力と爲つて、其據る司法、文部の二省は今日迄に至つて居るといふ風である。內務、大藏の參事官でさへも、之を司法、文部のそれと比べると輕重の異なるものがあるといふ噂があるが。必ずしも左樣とは限るまいけれども、其傾き位はあるらしい。

因習の久しき斯くして兎角司法と文部との役割は後廻しになる。今度の長谷場氏の如きも、任命の前日迄當人は少しも知らなかつたとの話である。即ち他の閣員の詮衡は早くから定まつて居たのに、長谷場、松田の二人丈は最後になつて定まつた樣な話がある。その爲に長谷場氏を詰らぬ者に言ふものもあるけれどそれはいけぬ。それでは長谷場は迷惑である。內閣組織の時に後廻しにされた文部省の輕重と、それに引張り出された人物の輕重とは自ら別論と謂はなければならぬ。けれど引張られておいそれと無雜作に出るのもちと輕々しい、と言はれゝば是れ亦巳むを得まいが、併し私はそれを言ふよりも左樣いふ詮衡の仕方をするものが怪しからぬ、即ち內閣を組織する者が怪しからぬといひたい。

日本程先の見えぬ、單に目前の事をばかり腐心して居る政治家の多い國はない。議會の操縱を如何するとか、借金の遣繰を如何するとか、差し當つての目の前の事には一體に注意もするし考慮もするが、國家の生命は永遠である、此永遠の生命を有する國家に對して所謂百年の長計な

立て、未來の我國民を如何すべきかといふ最大問題に至つては、近頃頗と深謀遠慮のある者が見當らぬ。その由つて來る所を惟ふに、夫の明治十三四年の頃板垣等の民權自由を唱へて蹶起した當時の勢といつたらない。天下靡の如く應じて諸方に民論の翻沸を見、薩長政府は堪らなかつた。で政府は極力之を抑へる爲に教育家は絕對に政談を聽き政論を讀むを許さずといふ極端の干涉をした。其結果、政治家は純政治家である。教育家は純教育家である。全然別なものである、と此時かくして明瞭に二つに振り分けて仕舞つた。が能く考へて見ると。國家の政治の中一番大切な部分は那邊に在るかといふに、國家の運命は偏に國民の性情、抱負及力量如何に依つて定まるもので見れば、其教育には非常な重い深い意味がなくてはならぬのであるが、悲哉政治家と教育家とが極端に分離した爲めに政治家に此深重の意義を認めぬ者が多く爲つた。

教育も廣義に言へば其範圍廣汎であるが、國家の立場から考へて見れば其方針を立てる爲めには種々の事を考慮せねばならぬ。即ち日本の國狀は如何であるか、列國の大勢は如何であるか、それが能く參酌熟考して立國の長計を立てゝ之と相戾らざる樣に國民が指導し陶冶し行かなければならぬ。具體的にいへば兒童、生徒、及學生な一貫して其訓育者には此經世的の根本の頭がなくてはならぬのである。日夜國家の大計長策の存する所を思ひ此經世の大事業に自らも參與する一人たるの自覺がなくてはならぬのである。教育者とは須らくかゝる氣魄あるの人でなければならぬ。然るに本邦の近時の教育家には前言つた事情に依て此經世的頭腦無きこと恰も政治家に教育的思念無きが如くである。實に困り果てた事と謂はざるを得ない。世人はよく明治の維新は彼の賴山陽、藤田東湖、吉田松陰等の人々が作り出したのであるといふが、彼等は抑も如何なる人であるか。之を一方から見れば皆政治家であるが、又之を一方から見ると皆教育家である、それも其筈政治を教育とは元と一身同體相離るべからざるものである。苟も政治思想あれば勢ひ其人は皆教育の事を考へざるを得ず、苟も教育家であれば其人は又當然經世思想を持たなくてはならぬ。之を分けて無關係としやうとしたのは生木を裂いた樣なものである。其結果双方とも枯れて仕舞つて、全然生氣がないのは、理の當然である。

事情此の如してあるから曰く伊藤、曰く松方、曰く西園寺、曰く桂の歷代の政治家先生は何れも皆重きを文部に置かず、其大臣の銓衡も最後に廻して所謂伴食の人を置く樣になつたのである。私は之を日本の近世に於ける邦家の一大失計であると考へる、百弊雜出の根源であると考へる。

斯樣な日本の有樣だから長谷場氏位の人の文部に引張らるゝのは勢の然らしむる所、左樣有り相な事である。それを彼此言ふのは可愛相である。此點に於て私は長谷場に同情する。といつて長谷場で滿足するかどうかといふ事は自ら別問題てある。

以上は一國の文教に就いて說ひ、引いて文部大臣に對する自己の所見を述べたのであるが、長谷場氏一個に就いて言へば、氏は能く無學だと

言はれる。けれども私は、何も大臣が大學の諸教授の持つ如き智識を持たねばならぬ事はあるまいと思ふ。そんな事をいへば、今迄の文部大臣中外山や菊池が一番宜くなければならぬ筈である。が、外山氏は廣義の文學しか知らず、菊池氏も理學の一分科たる數學以外には分らない。幾ら角の三等分に關する議論に詳しくとも何も凡ての學問に普通的の智識を持つて居たといふのではない。して見れば長谷場は無學だ、郡長上りに過ぎぬ、一地方の郡長上りに何の能があるものかといふのは間違つて居る。世間のものが動もすれば彼は偶然で出世したなどといふが私は平生之を聞くを好まぬ。私は餘程稀有の場合でなければ世に偶然なるものあるを信ぜぬ。あるべき様がない。多くの場合は偶然でなく、偶然と見へるものも詮索すれば必ず其人に爾か爲り得べき素質が備はつて居る事を發見すると思ふ。これ故長谷場氏の場合でも彼の今日あるは偶然とは思はぬ、彼が一郡長より進んで衆議院議長と爲り今又文部大臣となつたのは、決して德富君が國民新聞で煽動てたから云々といふ様なものではなく、それ相當の理由相當の力があつたのだと思ふ。兎に角彼に專門學の力はなくとも、教育の如何なるものかを解し、文教の力を以て國家の運命を左右せんといふ、それ丈の熱心があつて實行亦之に伴はゞ大臣の能事了れりと信する。

單に專門的智識の有無を以て大臣を評するのは私は嫌である。世の中の分らず屋は森有禮が好い大臣だつたの、井上毅が好い大臣だつたのといふけれども、私は初から與しない、森や井上如きは以て一私塾の長とすべきも、以て一國の文教を托すべからずと思つて居る。彼等は皆一種の、窮屈な學風を持つて居つた。杓子定規の人達である。各々私塾を開いて門戸に標榜し、其學風の下に書生を養成するなら宜かろうが、それを以て直に一國の文教に臨み、國民總體を支配されては堪らない。文部大臣たるものは虚心坦懐苟も邦家裨益する所ありと感ずれば、劍道の所謂他流をも歡迎し之を補助誘掖するといふ雅量を持たなければならぬ。大綱目は國家の長計より割出して確然動かさぬと同時に、細節目は一切放任といふ行き方でなくては駄目だ。今の長谷場が此點に氣附くか氣付かないか、氣付いても實行が出來るか出來ぬかは保證の限でないが、兎に角菊池、外山に比べて學者でないからとて、それで長谷場を不適當といふの丈は下らぬ事と思ふ。但し右は文部大臣は必ずしも學者たるには及ばぬ、是れ丈の抱負あり、識見あり、技倆ある人なら宜いといふ丈の話であつて、それならば長谷場は學者の方は駄目だが理想の文相たる資格は有るのかと言はれゝば、私には知らんといふの外はない。唯長谷場氏が此際大に卓勵風發して國家民人の爲めに教育上の宿弊を一掃する位の心掛あらん事を千祈萬禱するのである。

△現内閣に出來した者の一つ

伯爵 大隈重信

長谷場の文部大臣それは宜からう、我輩は今度の西園寺内閣に出來し

たものは二つある。それは山本の大藏に長谷場の文部だとして居る。

凡そ一知半解のものゝ文部大臣程厄介なものはない。寧ろ長谷場の樣に何も知らないで、參議に聞いて宜きに從ひ處斷し行く方が過が少かろうと思ふ。生半可の學者などよりもいつそ官僚は官僚政治でやつて行つた方がよい、多少は間違つたことも有ろうけれど其代り思ひ切つた事も出來る、專門の技師見た樣のものゝする仕事は、下らぬ細かい處にのみ拘てこだわり勝ちで何事も捗々しくいかぬ。

彼の學制を色々にいぢり廻してやれ大學の門戶を開放し商科大學を立てろの何のと騷ぐものは、皆大勢に通ぜぬ一知半解の徒のする事で、左樣しては彼樣な紛擾を惹起すのだ。

今日の文部の弊は勝げていふべからずだ、大體今の我國の文部は、樞密院、議會、文官令と三重の束縛を受けて居る。斯う迄束縛を受けて居る文部省が如何して思ふ樣な活動の出來るものでない。敎育行政の大刷新を行はうとするには根本からして改めていかなくてはならぬ。樞密院の如きも以前通に復し、單に憲法の疑義、外交の條件等を丈議する所とするの議があるが、其方が宜しい、又文官任用令の文官分限令のといふものがあつて、自由に老朽を淘汰し適才を適所に置くことが出來ぬ。今では中學程度の敎員などは澤山出來て敢て官立の高等師範などの必要はない程であるに、依然舊時の儘にそれを存續し、其卒業生を保護するが爲に無暗に私學を忌憚し厭迫する樣な事もする、そして官學の中にも又派を分ち、大學派の高等派のといつて騷ぐ、無用の經費と無用の勞力とを拂つて釀す所は只幾多の弊害のみ、何等の效果はない。試驗制度なども今の樣ではいかず、又試驗委員などにも譯の分らぬものが多くて困る。が此等を代へるにも矢張り任用令、分限令などが邪魔になつて思ふ樣にいかぬ。今日の文部の刷新は單に經費節減を計る行政整理のそれではなく、實に一國文部の上よりして大なる手腕を用ふる必要がある。

分らぬ役人原の干涉程厄介なものはない、少し話は違うが此處の書生が此頃一等切符で米國遊學の途に上つたら、橫濱を出帆する時に警官が來て仔細に渡航の目的を聞き、法學研究の爲だといつたら、其種類の學問をするに態々米國迄行く必要がない、思ひ止まれと說諭する。が本人は溫和な性質のものだから荒立てた事もいはなかつたらしいけれど、大に憤慨して我等の學問の目的に迄其筋の干涉を受くる必要はないとて拒んだ相だ、政府の仕事といふと此樣な事に迄立入つて入らざる御セッカイをし、無用な人間に高い給料を拂つて養つて居る。此調子で凡ての方面に當り私學などをも監督するから堪つたものでない、是非とも根本的大革新が望ましい、そして是は一知半解の技師的大臣に望むことは出來ぬ、我黨は此に於て政黨出の長谷場に多く屬望する。

何、長谷場の識見？、それは彼の好む銃獵と同じ事、斯うやつて狙つてズドンと放したら中る事もあらうさ。人物？そんな事を聞くものがあるか。人物がカン〳〵で謀られるものぢやあるまいし、機に觸れて其働を現はす迄は分るもんぢやない。長谷場だつて縣會議員もし、郡長にもなり、國事犯で牢へも入る、一般政黨の元老中老の經驗して來た丈の經

路は踏んで今日に及んで居る、矢張りその徒に伍する丈の値打はあろうき。

△近來漸く得た政治家の文相

早川鐵治

今度の政友内閣組織の時に入閣の一人として文部大臣の椅子に凭つた。野武士で無教育で學識もなし、私學校派でも漸く小隊長で在つた位に過ない、其長谷場が一躍して文部大臣とは怪しからぬと、世間では兎角の評がある様だが、僕は寧ろそれを歡迎して居る、由來教育家なるものは技師である、只人に本を教へろより外の能はないものだ。が長谷場は政治家である。左様の技師的の働はあるまいが、國家の大勢を達觀してそれに副ふ様に國務を執り行くことが出來る。文部省の振はぬのは餘り教育家をのみ大臣に擧げたので、大臣に能く國勢を達觀するの明あるものがなかつた爲である。これ迄の大臣中森有禮は未曾有の人物であつた、その前に江藤新平がある、此二人だけが宜かつた。その以後は駄目だ。濱尾の校長上り、久保田の會計官吏上り、續いては樺山、大山の二武將の用いられ、行政官としての器械の試驗所として文相の位置が彼等に與へられたといふ有様、此様な譯だから一向國家の爲にならぬ、間に井上毅があつて稍々注目されたものゝ、是とても只事務に通じた一儒者に過ぎぬ。外山だの菊地は所謂教育家の技師で彼等に天下の事が談ぜらるゝ筈がない。然るに今長谷場は政治家である。それ故當然彼は國家の大勢上より割出して大小の施設をし、國運の進歩に伴ふ丈の教育行政の實蹟を擧げる事と思ふ。是が僕が彼れの文相を歡迎する所以で、西園寺さんであればこそ此地位に彼を置くものと見たのだ。

此頃見て居るに彼は教育家に大分評判が宜い様だ、が何處が宜いのと聞くに、文部省の要求通りの豫算を能く取る、それから教育會などにも能く顏を出して愛嬌を振り蒔くといふ様な事らしいが、是では吾人の期待とは甚だ違う。會などへ出て人の御相手する丈なら特に大臣に政治家の要はない、書記を置くが宜し、又今は行政整理の必要に迫られ、大抵の新事業は皆中止すべき時である。然るに餘計な豫算を取つて其れで歡迎されるといふは聞こえぬ。今や吾人は教育の爲めに破産せんとして居る。教育が國を亡すものゝ様にも思つて居る。曰く普通教育、曰く中學教育、曰く師範學校。それから又、曰く工業學校、商業學校、農林學校と、幾多の實業學校があり、其上には更に高等工業高等商業等がある。進んでは大學があり、それが又近年諸方に増設される。之を國家今日の實狀より見るに殆んど消化し切れぬ程の教育が國民に與へられて居る。その結果無職者が年々多くなるのは已むを得ない。何、職工なり丁稚なり百姓なりになれば宜いのだか、生中教育のあるはかりでそれを爲し兼ねて居る。政治の才能ありて新に文相の椅子に凭るものは、須らく斯らいふ方面から着眼して整理をして行かねばならぬ。即ち教育も民力に適

當する丈の事をすれば宜い。國運の進歩に伴ふ丈の事をすれば宜い。長谷場の勉むべきは此處である。それをば能うせずに徒に割前を多く取つて下僚に喜ばるゝ如きは何たる事か。尤も根本的の刷新は一ヶ月や二ヶ月で出來はしまいけれど、併し縮少すべきを縮少する事に勉むべきでないか。此を爲さずして彼を爲すは政治家のすべき事でない、それをする樣なら寧ろ教育の事に明るい技師の文部大臣を置くが宜い。大學を如何する、其學制を如何するなどいふ樣な巨細な事務を執るに於て彼には當に一日の長が有るべきだからだ、菊地技師や外山技師の大臣の方がズツと結構だろう。僕等から見れば文部大臣は一政治家である。技師の任ずべきものでない、歐米各國に於ては陸軍大臣と雖も又一政治家が任ぜられて必ずしも武人が任ぜられるではない。我國に於ても當に倣すべきものと僕等は信じて居る。が折角政治家が出ても、其本領の發揮が出來ん樣では致方ない。

長谷場は初め縣會に牛耳を取り、それから郡長に買收され、議會が出來ると國會議員になり、それから內務省官房局長となり、憲政時代に本黨の旗頭となり、政友會創立以來それに加はり、其力で衆議院議長と爲つた、法律思想の無いものが敢て議長と爲り、又今文部大臣と爲る如き、皆巧に政黨を利用したもので、政黨の御蔭で彼は今日迄の出世をしたのだ。若し彼にして初の通りの順序を以て官海を泳ぎ上つたとするなら、高々警視總監位のものだろう、それ以上の事はない。相當の教育もなく泰西の事も一切分らぬのだから。森、江藤を除くの外初めて今度政治家の大臣を得たのだから頗る喜んで居たけれど、昨今の樣では駄目だ、が今少し長い目で見ねばならぬ、四五年の後は或は宜かろうかとも思ふ。

△長谷場文相の人物

覆面道人

政友會の領袖といふ側からは他にも之を論ずる人があらうから、私は政黨出身の文部大臣としての觀察を少々試みやうと思ふ。

長谷場氏は政黨出身の文部大臣としては第三番目である。最初は尾崎行雄氏、次が犬養毅氏、それから今度の長谷場純孝氏である。其中で尾崎氏は一番穩當でもあり、又理想もあつたやうに思はれて居つた。所が、例の共和演説で以て叩き落されて、再び其方面での活動が六つかしい位の手疵を負うた。其次の犬養氏は學問もあり主義もあり人物としても異彩を放つてゐるが、ナニセ所謂三日大臣であつたから兎角の評をすることが出來ぬ。それから以後政黨出身の文部大臣は全くなかつた。なかつたといふ事は其間に政黨內閣が少かつたといふ爲めもあるが、一つは矢張り政黨內閣の出來た當初に、政黨の領袖を文教の主宰者とするのはどうだらうといふ尾崎氏以來の古疵が祟りをなしたのだらうと思ふ、其爲めに官中のお氣受けをも考へねばならぬし、又大學の教授連などは昔からなかなか制御しにくいから、政黨出の文部大臣も久しく見ることを得

なかつた。今度の西園寺内閣は其古敍から大分年數も經つて居るし、又近來の文部大臣が一向に振はず、議會には豫算も取れず、世間には重きをなさぬ所から、一層思ひ切つて政黨の領袖を入れて重きをなさしめやうとの考もあつたのであらう。兎に角西園寺侯が長谷場を文相にしたのは一寸面白い事と思ふ。長谷場は遣り場がないから伴食として文相にしたのだと觀察するのは少々酷だ。それから又長谷場も文相になつた以來存外内外の氣受けもよく、旨くやつて居る。つまり尾崎氏の遣り損じつたやうな處を償うて餘りあるのみならず、世間一般からも批難を受けず、寧ろ好評を受けて居るのはなか〳〵遣り方が旨いといはざるを得ない。

長谷場は此位やるといふことは、あの聰明な西園寺侯が初めから知つて居つて今の椅子に据ゑたのでせう。從來政黨の領袖が文數の主宰者になるといふ事は、宮中や元老や、貴族院あたりの感觸には案外障つたやうだ。處が今日の場合に於ては、前文相時代から正閏論、維新史料編纂事業等が形がつかず、又櫻田問題の餘熱が殘つて居る。そこへ長谷場が出て來たといふのは非常に其時を得て居る。といふのは長谷場は此等の三問題については總ての方面から大變氣受けのよい人だ。一昨年櫻田會といふものが出來て、櫻田の十七烈士のお祭をした。あの時の會長は實に時の衆議院議長の長谷場てあつた。衆議院議長を會長にしたのはあの會の成功した所以で、アレは長谷場が松下軍治に擔がれたのだと思つてゐる人もあるが強ちさうてはない。長谷場に親しい人から聞けば長谷場が自ら進んでなつたものだといふ。元來長谷場は自ら好んで吹聽する通り、西郷に引立てられたもので、いはゞ西郷門下だ。それて西郷の感化をも確かに受けた。だから櫻田事件や、正閏論や、維新史料編纂などに對する根本の考は西郷に養はれた。だから小さい時から井伊は奸物だと思ひ込んでるので、自分から櫻田會長になつたものと見える。玆に歷史上面白い事には櫻田事件の背後には大久保公がゐる。又西郷も關係してゐる。又阪下門の變には其背後に木戸公がゐる。此二つの暗擊の役ろ立ては所謂維新の三傑だ。それはそれとして、兎に角長谷場の頭には西郷に仕立てられたさういふ考がある。獨り長谷場に限らず薩摩の人には大抵今樣の考があるやうだ。大山公にもある。又さういふ考などのなさゝうに見える大浦兼武子にさへある。有馬新七の「都日記」などいふものも大浦さんが自分で以て出版して全志者に頒つて居る。薩摩人の進み來つた道は一筋で、皆西郷や大久保の提撕を受けぬ人がない。西南戰爭頃には長谷場は一兵卒で、後にも小隊長位にしか成れなかつた。あの戰爭には長谷場の親子とも働いた。此西郷門下て西郷の感化を受けたといふ點で、櫻田事件や維新史料編纂や正閏論に對しては、元老諸公と話が合ふ。彼の國體論的趣味は思ひの外此等の諸公にも歡迎されて、政黨出身でありながら無事に文相の椅子に就くことになつた。それだから政黨出身の文相が從來受けたやうな其方面の嫌疑は長谷場は全く受けない。又實際維新史料編纂事業などに對しての長谷場の關係は決して淺くない。あの案の議會を通過したのも長谷場が衆議院議長の時てある。又通過にも力を盡した。又文相になるや否や此事業の爲めに、蔭になり表にな

て謙讓して居るらしい。

一體薩摩人は昔から一種の教育風がある。大抵の人はみんな多少國學をやつて居て、そして歌を咏む。長州の政治家には詩を作る人が多い。歌をやるのは山縣公一人位だ。薩摩の人は殆んど歌ばかりだ。お歌所の高崎正風男も亦薩摩隼人だ。長谷場も亦此一味に洩れず歌を作る。薩摩の人にいはせると薩摩の生粋は歌の道にあるといふ。それは所謂大和心を涵養するものだといふ考らしい。此邊から何時の間にか國體論の方へ頭を突込む様になるのかも知れない。長谷場の歌は大分ある。近來でも時々作つて居る。長谷場は西南戰爭以後牢に入つて、牢に居る間に本も讀み歌も作つた。出てからいろ〳〵の事をやつたが、官歴としては郡長となつた時に非常に成功した。普通の事務家的でなく政治家的にやつて評判がよかつた。又一方支那に手を出して事業をやつて金を作つた。かくして郡長て作つた名聲と事業で作つた金とを以て代議士となつた。彼の代議士となつた主因は郡長としての名聲である。一體郡長といふものは地方の勢力を作るに極くよい舞臺である。そして代議士で通して來て遂に衆議院議長となり、とう〳〵大臣にまでなつた。これは彼が郡長の時に得た經驗で以て、旨く政黨の間を渡つて來た爲めである。彼は硬骨があるといはるゝ。それはある。あるけれども然し一本調子でない。なか〳〵圓轉滑脱なものだ。之は長谷場に限らず薩摩人一般にある事だ。薩摩人の勝れたものになるとみんな愛嬌がある。あの大山公の如きもなか〳〵の愛嬌家だ。元老政治家などの會合に出ても先づ第一に大山公に話したくなる。彼の大西郷などもなか〳〵の愛嬌家であつたさうだ。今は婆さんとなつて居るが、西郷の馴染んだ藝者などに聞いて見ると、愛嬌があつて女に好かれる人だといふて居る。只大久保公丈けは例外で、あれは沈毅で、男からも女からも寄り附きにくい人であつたらしい。其他の薩摩人の主らなるものはみんな愛嬌家だ。無愛相なやうにして愛嬌がある。此點に於ては長州人の方は遥かに薩州人に及ばない。如才ないやうに見えてゐながら、底に何處か圭角がある。客の爲めに下駄を直しても、薩州人の方では朴訥で親切らしく見える。が長州人がそれをやれば輕薄て、阿諛したやうにしか見られぬ。此愛嬌があつて人に好かるゝ所が薩摩人のボンヤリしてゐるやうに見える割合に成功した所以である。長谷場の成功し來つたのも此呼吸も大いにある。

長谷場が文相になつた當時大いに世間から冷やかされたが、數ケ月經つても別に攻撃もされず、又新聞記者なども惡口をいはぬ、長谷場はあの才槌頭に葉卷を燻らして文部省の新聞記者室などへ入つて來て、「何か面白い事があるか」などといつた調子で、新聞記者とも親しくする。新聞記者の方は多くは三面の訪問記者であつて、蔭では長谷場の硬骨とか何とかいつてゐるが、出逢へば兎に角向ふは大臣である。其大臣が、「ヤ、君」といつた調子で親しく話を持ちかけるから内心嬉しくない事はない。さういふ具合だから、新聞記者は此文相から立派な教育論も聞けず、立派な教育政策も聞けず、又聞かうと期待されてもゐないが、それでゐて兩者の間に親睦がある。細かい事は次官以下から聞いて呉れ玉へと調子

て、只大ざつぱにやつて居るから、今迄六つかしい大學などの方面も案外旨く行くだらうと思ふ。彼は自分は教育家でない、教育上の實際の事は福原次官に訊して呉れ、自分は只文教の行政の實際を處理するといふやうな事を、餘り品位を失はずに言ひ放つ。それだから案外好く行くだらうと思ふ。

四十五年度の豫算についても、文部は割によく取れた方で、萬事消極主義を標榜して居る今日、あれ位は先づ上出來といはなくてはならぬ。流石政黨出身の大臣を持つて來た丈けあると思はれて居る。尾崎は文部大臣になつて直ちに文教論の理想を說いた。あの時は尾崎が三十七八の時であつたから、其氣焰もなか〳〵高かつた。處が實際豫算の時になつては非常に削られた。今の文部大臣は流石にエライとて彼の外山正一氏から冷かされた事がある。今度の長谷場は理屈は丸でいはぬが豫算を取るには手際よかつた。此調子で行けば大抵の事は旨く行くだらうと思ふ。

昔から文部大臣になつた人で一番よかつたのは木戸公で其次は西郷從道侯であらう。其れ以來文部の方は豫算が取れず、取れぬのが文部の本色のやうに思はれた時に長谷場が割合によく取つたんだから、長谷場の位置が存外進んだやうにも思はれる。此西園寺內閣は餘り長い事はあるまい。何れ議會の二つもやればお了ひであらう。あとに殘つてよい事をするものは長谷場であらう。彼は一方には政黨の首領として、一方には西鄉門下の關係から元老にも近いて、いはゞ二重性格のやうな事をして

來た。そして今は文相の位置に立つて案外旨くやる。努力して旨くやり通したら、彼は更らに人氣ある椅子に倚るの日も來るであらう。



東京日日新聞

清國政變と本紙

一たび清國革命軍事變の蜂起するや本紙は彌々益々その本領の發揮に努め日日の紙上に又號外に獨特の通信機關に由る世界的特電を利用して詳細的確に事件の推移變遷を歷々睹るが如くならしむ

今上陛下御尊影

來る明治四十五年は實にわが　今上陛下御還曆に當らせ給ふ。我社即ち五千萬の同胞と聖壽無疆を慶賀し奉るべく元旦號の本紙に添ゆるに　聖上陛下御近影の大附錄を以てすべし。原畫は當代一流の大家が謹寫丹青を凝らせる油繪にして畏くも森嚴崇高の御威容は筆者入神の妙技と相俟つて躍如として人に迫るものあり、加ふるに印刷の巧緻と用紙の精良を以てす、蓋し昭代を紀念すべく國民千古の逸品たらずんばあらず。

御還曆紀念　**大繪附錄**

▶郵送料とも三ヶ月前金一圓廿錢◀

東京市丸の内有樂町　**東京日日新聞發行所**　貯金口座二八〇〇番

新春劈頭の大躍進

中學世界

一月元旦發行 第拾五卷第壹號 正價廿錢 初刷に限 郵税二錢五厘

新年附錄

◉利家の驍勇 文學博士 幸田露伴
◉五條頼元の忠節 文學博士 久米邦武
◉支那の軍神關羽 伊藤銀月
◉源為朝 山路愛山
◉スパルタ攻め 文學博士 箕作元八
◉ウエリントン 文學博士 瀬川秀雄

◎青年の事業 三宅博士
◎偉人の感化 牧野男爵
◎大國民たるの素質 肝付男爵
◎歴史小説 茶臼山 塚原澁柿
◎世界最大の二彫像 關野博士
◎水仙屬の分布 伊藤博士
◎雪山觀野紀行 小島烏水

●奇獸オカピ 谷津博士
●正月の食物 澤村博士
●若水 鴨居博士
●法制講話 美濃部博士

○時評 笹川臨風
○英雄花見立 懸賞問題

繪附錄・大額面畫……中村不折筆

東京本町 博文館 口座二四〇番

(中付一の三)

恭賀新年

中央公論及各種書籍雑誌大取次低廉迅速主義

上田屋書店

神田裏神保町一番地
電話本局三八二八番

四十五年春季
種苗營業案内

此營業案内は種子、苗木、農具、農書、種禽、種畜、等數千種に畫入解説を附したるものなり

ハガキにて申込次第無代贈呈

東京内藤新宿
日本種苗株式會社

信用なき店舗及卑猥なる廣告掲載は一切謝絶す

一日も離されぬ讀賣新聞

年中無休

定價一ヶ月卅五錢

記事も意見も穩健で高尚有益なのは勿論趣味が滾々として泉の様に湧いて盡きぬから何事にも最も信頼して讀むべき新聞です又家庭の好侶伴として他に類の無い新聞であります從つて卑俗の記事や虛搆の文字や無趣味の紙面を避けて面白く品の良い且有益の新聞を望まるゝ方々は何を措いても讀賣新聞を御覽なさい

且多大の勢力あり信用ある我讀賣新聞の廣告の効能は實に絶倫であります

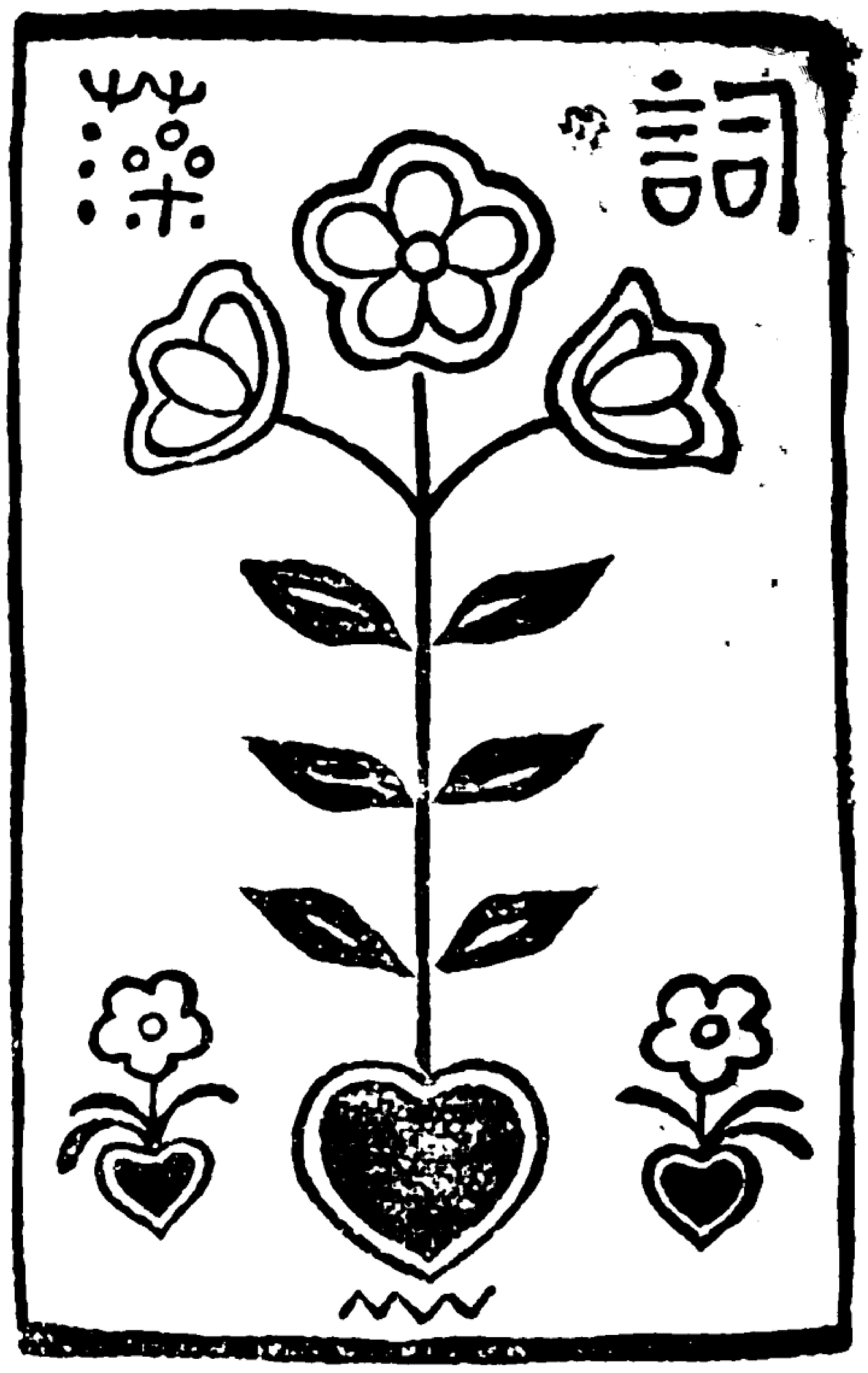
東京市京橋區銀座一丁目

讀賣新聞日就社

電話 編輯用 一七〇一番 二二六四番

京橋 廣告用 七〇二番 事務用 七〇三番

振替口座六壹貳番



河岸

柴舟

朝の河岸(かし)動かぬ霧にしつとりとぬれて櫻の紅葉散るらむ

白き指いとこゝろよくまはしつゝ午後を處女の赤とんぼとる

月ながら土にはわれの影もなしこの柔かき夜のうるほひよ

のぞきては晝の木の葉の落ちてゆくかあてんに日のそゝぐ小窓を

いかならむ花よりしぼむ土にしむ月の光の白さするどさ

木と木と相憎むに似たり葉の散れば枝と枝とが猶きしり鳴る

五六人とる鶴嘴もかんてらの火もすさましき夜のちまたかな

瓦斯の火の反射の白き常磐木の中に椿の花一つ見ゆ

赤き灯の蛇のごとくに這ひ上る廣告塔に夜のあらし吹く

折々はかなしき顔をよせて見る壁の鏡の底ぐもりかな

和歌

尾上柴舟選

○　安井竹美

櫛あつれば髪ぬくるにもわがこゝろいたみて秋はものぞ淋しき

いづこやらむ女がひとりわが顔をじつとみつめて恨めるごとし

わりなくも死といふ事が思はれてひとりさびしう夜の壁にむかふ

生きのこる忘れがたみをそだてをる人妻の家の秋は淋しや

いつになくことしはいたく弱りしとかなしき事をいひたまふ母

父母しねば天地に身はひとりなり僧ともなりてひとり死なまし

高き木の梢の空の秋になる碧さに啼けるかなかなのこゑ

○　内田月城

うすみどり柳もあまた花つけてわがふるさとも春となるらむ

旅人の疲れし眸に青白くうつりてかなし夜の多摩川

屠牛場の柵にもたれてほの白う夕あかりする海をみるかな

くれがたの水をわたりてかなしくも三味のきこゆる利根の川船

月の出のうすら明るき大利根の水をみだして飛べる青鷺

朝静か大川端のにごりたる波の間にとべる白鳥

大船は青き夜明けの港にぞ入りて静かに笛ならしける

○　捫垣青花

死を絶えずおもふ心に虫なけばうすあまく滲むわが涙はや

愁へつゝ別れてひとり愁へつゝ秋深けし野の草にねころぶ

秋ふけぬ思ひさびしみわれしらず泪うかぶる夜となりしかな

しめやかに夜霧に衣をうるほはし蒼くふるへる
月夜をあゆむ

つゝましうひとのなさけにすがるこのさびしさ
顔を吹くな秋風

○　日下實

群集におくれて一人ものうげに歩めり青き顔を
うなだれ

つゝみ得ず顔一ぱいによろこびをあらはしてゆ
く春の人々

なつかしき都に別れかへる日も涙ながさずつよ
き子なれば

見るかぎりかたきのみなるふるさとに事なく過
ぎし今日の一日よ

眼をとぢて春ゆくゆふべ戸によれり都の空の戀
しきがまゝ

しばらくは石のごとくに默然とくびたれてあり
ちゝはゝのまへ

酒の香をめづるにあらずやるせなき自棄のきは
みのたへがたくして

ふと階子のぼるけはひにおどろきて涙をぬぐひ
口笛をふく

○　林久男

慈善會我が教へ子が歌ふ樣ねたましきまで愛ら
しい哉や

つのを出せ夕べ母校の塀によりかたつむり手に
一人遊べる

漂泊ふ可く生れし樣に思はれて夕暮は雲を眺め
やるとか

かま切りを追ふな妹よ見苦しく生れし蟲はさび
しからんに

住み慣れし峽間を出てん行くとして樂しき國の
有るとあらねど

○　飛川晶鬱

すさみ果てし心に悔と信仰のひらめける日よ悲
しう虫なく

わがまゝより邪道に墮ちて行くわれを哀れむ父
がにがわらひかな

松ひともと立てる暮秋の丘に來てひとり蜜柑を
むく夕かな

枯れ黍の穗ずゑ寂しくうちそよぐ夕風のなかを
走るやせ犬

かなしみは果てなしひとり松かさを子どもの如

く投げて遊べど

○　　井田葉歌

何事ぞ胸はおびえてとめどなし大かたの樹のもみづる頃を

目瞑れば未來の我が見ゆるかな冬は街路に靜かに流る

悲しくも寝ざめしものを何にしかさうぞき止まぬ秋の野風よ

なべてもの聲すみ來たるこの寝ざめ一人しあるに何ぞかなしき

○　　宮内柳葉

熱病みてうち臥す君が枕邊の水薬瓶の黄なる悲み

しのびかにわがふみのぼる石階に冷たくふるふ青き月光

なみ／＼とつげる杯ひといきにのみほして又うなだるゝ君

こゝろもちうるめる比叡の山脉に午後の日光（ひかり）の白く流るゝ

○　　林秋月

桑の葉の枯れて落つるを愁然と見やりて遂に涙ぐみけり

野菊摘みて贈る人無き身ひとりが襟にさすこそうら淋しけれ

やるせ無く窓を開けばうす寒き秋風めぐる君が家見ゆ

○　　小川流葉

彼の森の落葉の上の夕明り我が足さきに泌む心地する

おもむろに風のふく頃山裾に灯（ひ）の見ゆる頃我れの泣く頃

思出の味なきことゝ行くすゑのはかなきことが迫る宵かな

淋しさをまぎらさるゝが悲しさに友等にわれは離れこしかな

○　　林白愁歌

うす蒼き海の反射に光りたる帆のかくれ行く島の姿よ

霧深き谷底を行く滊車の窓に泣き度き心もたせて行く

誰かかるく抱き與れしが如くにも恥かし心ときめきて來ぬ

悲しき日ことさら笑みて居し故かあな嬉しさに涙ぐまれぬ

○　丸山英

月並の寡詞の如くたゞごとを並べて泣きて別れ來し夜

枕べの赤き藥のつゝみ紙有明がたのさびしき火影

心なきはからひなりし憂き戀を忘れんとして旅に出てしは

女阪われより先にのぼりゆく足袋の踵の目に白き朝

○　木暮刀水

遠き灯や大河長く黑だみて靜かに闇の中をながれぬ

灰色の寒き笑ひの天地に滿ちひろごりて冬の來りぬ

おん襟と南天の實と紅かりき初雪降りし朝の庭に

大事いま起らむとする前に似て靜かに白き冬の夜の街

○　鈴木風影

薄日さす榛の木の間の細道をから／＼走る空車かな

今宵ふと久し振りにて歌ひたる我が追分の聲の衰え

ダリヤの香門に籬に漂へり秋の夕の我が雜司ケ谷

○　外山廉三

酒酒と酒に親しさ覺え初めし少年の身ぞかなしかりける

樹々みなが落葉しにける霜月はあまり明るくあまり寂しき

たそがれの靜寂の氣に身をひたしたゞ一時の小安をめづ

○　下浦潭水

人がふく莨の煙にやはらかくわが嗅覺のそゝらるはよし

病人のするどくなりし神經につめたくふるゝ體溫器かな

子を抱ける男つくばひ豆まきて鳩とあそべり晝のしづけさ

○　はくるい

今年と云ふ今年こそはと定めつるわが計ひのたふとき元日

ちゝとなく小鳥の聲をまばらなる林に今日も聞きに來しかな

○　江澤虹花

樂まん日もなく冬にたどりきぬ疲れしあとのやるせなき身は

しげしげと白粉やけの横顔を凝視る如く冬は悲しも

別れ來てもの佗びしさに取上げし裸像はしらじこの泣きたさを

○　若木花次郎

卓につきふと思出ししげしげと祖母の顔みる刹那の心

風凪げる小春日和の晝すぎに祖母が豆選る格子際かな

煮物する祖母の姿のほのみゆる雨ふる夕の小暗き厨

○　齋藤浦

花火の粉病院の前の川はたにちろちろと散る夜のあはれさ

うす明りするに落葉の哀れさが身をそゝりくる森のいりくち

あからめる夕の空にも夢などのあるならずやとしげく見つむる

○　武田青眼

美しくなりしと髪を撫でやれば羞らひて少し笑むが可愛さ

手を置けば靜かにすべる汝が髪のふさふさしさに涙あふれつ

鏘々と朝よりひゞく鐘の音よ彼岸の入よ亡き父母よ

○　戸島家路

洋書など置きみだしたる中に座す明るき冬の日をたゞに座す

何一つ釣れぬ日なりき枯葦の戰ぎて弱き秋の日なりき

追はるれど足も得たてぬ夢の如あせりぬくわが面やつれかな

○　京野青磁

赤色のインキに染みし金ペンの輕き光を淋しむ秋の日

君ととも酒をのみては唄ひたる唄なり今日もふ
と口すさむ

○　　　　　　　　　鹿野春吉

隅田川藝者が通る三味がなる夜はなつかしき江
戸となりにき

湯上りのたそがれごろを靜やかに町歩み行く豐
かなる心

○　　　　　　　　　松井綠水

草踏めばほのかに秋は匂ふなりそゞ嘆きつつも
待つ人となる

大川端まち疲れたる黃昏の波の光ぞさむく身に
泌む

○　　　　　　　　　森一雄

雜囊を肩よりはづし夕暮の濱邊に身をば投げし
旅人

歸りてもわが哀傷のこしかたを泣くところなし
かなしき鹿兒島

○　　　　　　　　　高瀨蕉雨

月まどか去年市ヶ谷に間借して見たる夜こそう
ら戀しけれ

別れむと思ふ心をもちながら似かよふ人を見る
は悲しき

○　　　　　　　　　望月快哉

瀨戸物の白きかけらのかゞやける小川の岸に家
鴨出て鳴く

○　　　　　　　　　奥屋白葦

とぼ〳〵と一人男が辿りゆく防風林の白き月光

目的(あて)もなくさまよひ出てぬ道なき野月下の山の
愁ふるを見て

○　　　　　　　　　石田俊雄

我がもてる此の悲しみが樂しさにならむ日をま
ち只生きてあり

○　　　　　　　　　宮内柳葉

掃かれたる庭にはら〳〵散りてきぬ梢がすてし
黃なるいてふの葉

漸やくに家になづめる猫の子の如き思ひに君を
眺むる

指先のインキの沁みをかぎてみる講義をきくに
飽きしひととき

○　　　　　　　　　西村孤舟

秋の夜の枕の方に波よするけはひもすなり君お
もふとき

○
捨て鉢の女が酒にはしやぐごとき梧桐の枯葉の悲しき葉づれ　徳島杜の子

○
砂に坐しあみすく人の背を射る秋の眞晝のかよわき光　岩出金次郎

○
夕餉たくくりやの窓にせまりよる夜のまんまくにコスモスの浮く　島津浩宇

○
台ランプ押えて地震のやむを待つ君が瞳の恐れたるさま　加藤きよし

○
酒の醉只徒らに過ぎゆきぬこの悲しみをおきざりにして　高波死江

○
冬がれの野に夜の霜の下るゝ頃月の明りのいたいたしさよ　川田登美雄

○
殘月や薄き煙に燒き捨つるかの思ひ出のふみの一束　横田湖峯

秋風を慟哭のごとわれは聞くわが長髮を亂し吹くとき

例に由つて投稿非常に多く、掲載その半に充たず、餘は次號に廻せり。諒せられたし。

（選　者）

應募和歌は
東京市小石川區原町百十五番地尾上柴舟宛
封筒の表面には「中央公論歌稿」の六字を朱書すべし

▲本號の口繪▼

本號の口繪はエドガル・ドガ氏の筆に成る。ドガ氏は千八百三十四年佛國に生る。古典派と印象派との長所を巧みに採り來つて別に一家をなし、斯界第一流の名匠となれり。我國の歌麿、清長等又幾分か氏の畫風に影響を及ぼせりと稱せらる。氏は女性について一種厭世的（ペシミスチツク）なる感情を有し、女性は只男性の玩弄物として存在すと思考せり。好んで舞妓と競馬とを描き、此種の畫に於ては世界獨歩と目せらる。本號揭ぐる所の「踊り子の仕度」亦氏の傑作の一也。

俳句

初暦

高田蝶衣選

禁札に期して解くものや初暦　翠郭
左祖すべき慶事を生みて初暦　同
婢は己が奉仕日繰れり初暦　同
縁紡ぐ孤閨庵初暦貼る　同
初暦杞憂既に水旱に及ぶ　同
懈怠を覺ます事や初暦期す　同
初暦梅荘に再遊の約文す　波月
又も聞く阿蒙の誹り初暦　同
折衝の疲れを歸臥す初暦　同
鍼灸醫の宿繪暦の新なる　同
雲水の歸山期を暦新なる　同
初暦淋しさに訪ふ船長の宿　靑輪
小著成りて書肆にもらひぬ初暦　同
相伴すれば老客が解くも初暦　同
適任に望開けぬ初暦　同

初暦講中に入るもよすがありて　同
姿見もあり巫女寮の初暦　綠羊子
初暦聖旨に倣ふ一詩あり　同
初暦改規して師僧晨讀む　同
布賣が呉る初暦誤もある　同
初暦布教の日取齎せり　不寐庵
健番に下され長屋初暦　同
鐘撞きに猥俗事あり初暦　同
初暦我が庵ながら晴がまし　同
吉報に明るさの宿初暦　柳子
返輸に償ひし机下初暦　同
初暦出廬約ある日木々の晴　同
慶事鑑附記の初暦尊くて　狠子
復縁一縷の望に暦新なり　同
初暦貧に處しての大計や　胡鬼子
沙門言を年頭の戒初暦　同
初暦貼れば柱に歪あり　芳葩
この家にいさかひも無し初暦　同
氏子皆宮の御判を初暦に　螳郞
我死なば何日がよろしき初暦　同
猿買が爐邊の閑初暦繰る　三石

時雨せる松翠も見て暦賣　同
初暦盆景に朝日明るき間　都月
初縁日待つなるに暦かけ換へし　同
初暦神事に年番の家　白青
初暦夢判ずるに方位など　同
初暦や丶山間の教化見ゆ　丁字
哲理得て政事に飽や初暦　同
遷謫の主に従らん初暦　愛子
鶴翁にこの節女あり初暦　營耳
初暦父と見えて事々に談　孤風子
割策の大安日や初暦　蒼古
暦請けて社務所出るや黒木賢　六絲生

古暦

獻米も果て爐に倚りつ古暦　朱雀
秘め減りの壺のもの解く古暦　同
睨み合ふ太き柱や古暦　同
天領の山守り古りぬ掛暦　同
默索の爐邊の主や古暦　同
古暦と火事免かれし一帙と　營耳

夜學猶怠らず庵の暦古る　同
木賃さがす旅なりし思ふ古暦　同
後ろ暗きこともなかりし古暦　同
柱暦掛け古りし宗廳の宝　波月
古暦放資回收を網場來し　同
暦古る頃御用機織り收む　同
古暦解偈の餘日配すなど　胡鬼子
戀に居し頃の追憶や古暦　同
交易船の終航を泊す古暦　同
瑣事に渉る齷齪裡又古暦繰る　翠郭
鼎座君を寒うして納む暦かな　同
針踏んで心すぐれず古暦　美田
鍋蓋の毛程細りて古暦　同
丹念は老こそよけれ古暦　備田
古暦氏の長者の鎧櫃　同
左官日選みて棚に失ふ古暦　青輪
筋書と共に納めぬ古暦　同
この土地の行事遅れや古暦　芳蘭
哀別の以後を訃音や古暦　同
古暦焚く神事あり神輿夜を渡御　六絲生
連累を閉舗やむなし古暦　楚丘

古暦餘生の情日永き思ふ　綠羊子
神暦の今無きを漁翁藏しけり　狠子
古暦積祭の名殘油染む　白青
數奇の名に多少の恨古暦　蒼古
神文の附釋請はれつ暦燒きし夕　三石
播種期を附箋の尾ひく古暦　愛子
衆と容れざりし實行難も古暦　國郎

課題　千鳥　一月十日〆切
　　　椿　　二月十日〆切
規定　▽一人三十句以下▽用紙半紙
　　　▽淡路假屋在釜口高田蝶衣宛

評論

英國と印度

一

十二月十二日印度の名都デリーに於て、英國ジョルジ五世親臨の上、戴冠の盛儀を擧げさせ給ふ、山村水郭、歡舞和樂、太平に醉ふの聲を聞かざるなし。

顧みればデリーは思ひ出多き舊都也、現在の市街を去つて南方に出づれば六箇の都市相次て起り且つ倒れたる古跡、徒らに旅客をして追懷の涙に咽ばしむ、況んや一八五七年印度叛亂に際し、英軍の勇士が奮闘苦戰、遂に國土を安泰ならしめたるもの、實にデ市のリツヂ(高丘)なるに於てをや、思ふに印度皇帝戴冠式の

舉行地としては其最も適當なりしを疑はず。大に注意を値ゐするもののあるを覺ゆ、何ぞや、一八五八年印度が東印度會社を離れ、英國の直轄に歸するや、最初の總督カンニング卿の布告文朗讀ありたるに過ぎざりき、一八七七年キクトリア女皇が、初めて印度女皇の稱號を採らせ給ひし時も、總督リットン卿、七十七の印度王、三百の貴族をデリーに召集し、其趣を宣明したるに過ぎざりき、又一九〇三年先帝エドワード七世の戴冠披露式の如きも、コンノオト親王、御名代として渡印あり、皇帝の親臨とてはあらざりき、然るに獨り今帝に至り、俄かに先例を打破し、千里渡海、行幸を敢てし給ひしは何故ぞや。

何故などとは野暮臭し、吾人は其英國が重きを印度に置くと共に、最近印度の形勢に鑑みて、其將來を憂懼し、英印調和に力むるに至りたる徵證なるを見ずんばあらず。

最近の形勢とは何ぞ、曰く新進ノ教育を受けて覺醒し來れる印度人の不平と獨立熱是也。

二

「印度の不穩」、吾人は此語を耳にすること三十年に垂んとす、然かも最近四五年間、最も甚しきを覺ゆ、見よ、前印度總督ミントオ卿は刺客に仆れんとして辛くも免れたるにあらずや、英國高官サー、カーズン、ウイリーは彼等の毒手に仆れたるにあらずや、ベンゴール州の官憲は、着々新聞紙迫害を試み、獨立的言議を鎭壓するに力めつゝあるにあらずや、印度國民黨の會議は、或は公然、或は陰然（官憲の壓迫の場合に）開催せられつゝあるにあらずや。

如何にして斯くの如き叛亂熱を釀成するには至りたる、說者は曰く、是印度の物價騰貴し、官吏、教員其他有教育階級の生活、却て大工其他勞働者以上に困難なるに至れるが爲めのみ、或は曰く南阿弗利加始め英領土諸州が同じく自國臣民たる印度移民を酷遇し、劣等視するを見、之が反動として排英熱を勃興せしめたるもののみ、或は曰く日露戰勝に於ける日本の勝利は、印度人の自重心、自負心を喚起したるのみと、之等は皆多少の關係あらんも、公明に觀察すれば、寧ろ文明的教育、印度に入りたる結果、若くは印度人自身、近世の思潮に觸れたる結果、漸く獨立論若くは自治論を發生せりと言ふを適當とす可きが如し。

思ふに斯くの如き現象は、世界的現象也、清國に於

ける革命も、埃及の國民黨運動も、同一經路たるを疑はず、然かも他は少焉らく問はず、印度の不平熱傳播、叛亂從慂が多數の新聞紙若くは秘密出版物に依りてせられ、此出版物、新聞紙が、或は英國オクスフオルド、ケンブリツヂ諸大學、若くは印度諸校舍に學べる青年秀才の手に成るを見ば、誰か亦近代思潮が印度に入りたる自然的結果なるを疑ふものぞや。

三

是時に當つて英國は冷然、飽く迄印度人の活動を無視す可き乎、是其斷じて能はざる所也。

抑も印度や面積一百七十七萬方哩、英帝國全領土の六分一を占め、人口二億九千四百萬、實に英吉利本國のそれに七倍す、殊に近來印度人が英國産物の顧客として重きを成せるは縷說する迄も無し、然かのみならず印度は地理上東洋の中心に位ひす、即ち英國は之を根據地として政治上、通商上、雄腕を馬來半島、濠洲、清國に振ふを得、又英國にして印度を失はんか、國防上より見るも、到底濠洲、新西蘭を維持するとを得ざる可し、之を要するに印度の存否は、英國の殖民的强固たる地位を左右し、一等國たるの地位を左右するものと言ふ可き也、然らば則ち英國の印度統治策の秘訣は如何、其先づ印度人と和するの一點にあるや恐らくは言を俟たざる可し。

是に於て乎多少頑冥の嫌ありたる印度英人官憲も漸く印度人の參政權を認むるの端緒を啓きたり、是方今印度人にして高等裁判所判事に上れるもの十數名、高級行政官たるもの六十餘名、地方官吏たるもの二千名に達したる所以也、殊に一九〇九年、モーレー卿の印度改革案成り、總督の立法及行政參議院、各州參議院共に印度人を入るゝに至る、之等の機關は一の諮問機關たるに止まり、目するに議會を以てすべからずと雖も、以て英國人が漸く印度人との調和を謀らんとするの證とす可し。

記して玆に至る、英帝親臨の叡慮も、自ら明瞭なるを覺ゆ、唯だ願ふ所は、左右の忠良なる輔弼、能く聖意を奉體し、眞に能く印度人と相和する策を講じ、所謂「印度不穩」の聲をして昔日の夢と消散せしむるに在り、知らず總督ハルヂング男の政策、果して能く此希望に副ふや否や。

亡び行く國の姿

十二月中旬、波斯國民黨、書を我が春秋會（新聞雜

誌記者團體）に寄せ、哀訴して曰く、露國暴惡を極め、我邦土將さに危からんとすと。

何ぞ其聲の慘々として悲さや。然りと雖も、今にして波斯國運を救はんとするも、恐らくは難からむ、試みに少しく過去を顧みしめよ、抑も同國や三十三州に分れ、中央政府の任命に係はる總督之を支配す、總督の下に副總督あり、市尹あり、制度一見井然たるが如しと雖も、裏面を檢すれば、各地方、殆んと獨立の姿あり、テヘラン政府の權勢は空名に過ぎざる也、加ふるに一九〇六年八月憲法制定し、議院政治成立したる以來、人種を基礎とする黨爭益々甚しく、内協力して、外侮りを防ぐとを知らず、從つて内亂相次ぎ、商路危險となり、爲めに南方の英國通商隊の如き、五年前に七千に上りしもの、今や三千に下れるにあらずや、換言すれば、波斯人は確かに内治に失敗したりと言はざるを得ず。

加ふるに波斯の併呑否寧ろ分割を欲するものは、獨り露國に止らず、英國も亦同じ、見よ、一九〇七年英露協約は、カスルイシリン、イスフアン、エスト以北を露國の勢力範圍とし、阿富汗國境よりガシク、ビルシヤンド、ケルマン及バンダーアバスに達する線の以南を英國の勢力範圍にせるにあらずや、言ふ勿れ、同協約は序文に於て波斯の領土保全を言明せりと、近年他國の分割を豫約する國際條約、孰れか其領土保全若くは獨立維持の文字を用ゐて、體裁を繕はざるものありや、然かのみならず、英國は波斯分割を利益とす可き事情頗る多し、第一、南部波斯は印度北境の要たる阿富汗蠻族に武器を供給する關門たり、依つて英國政府は年々約一百萬圓を投じ、軍兵を動して武器輸入を禁止するに汲々たり。南部波斯にして英國の治下に歸せんか此防止は容易に行はるゝの利益あり、第二、英國は波斯灣の一點カルムミセよりアワスを經てコラマバッドに達する鐵道布設を熱望せるが、此鐵道成立せば、英國も久しく南波斯を放棄し置くを得ざる可し、何となれば英人の力に依りて地方的平和と繁榮とを謀らずんば、鐵道も無用の長物として損失を招ぐに止る可ければ也、又況んや上記の隊商保護は英國貿易家が切りに聲を高うして要求せる所なるに於てをや。（中略）

英國の態度斯くの如くんば、波斯何を恃んて獨立を維持し得可きや、國民黨の檄文、悲痛を極むと雖も、日本と言ひ、米國と言ひ、何等の利益關係を波斯に有せざるもの、千百の懇訴、恐らくは其甲斐無かる可し、

違莫、吾人は寧かに亡び行く國の姿を憐む。

伊太利軍の艱苦

伊太利軍、大にツリポリに苦む、傳ふるもの曰く、阿拉比亞人、オーシス（沙漠中の樹叢）に隱れ、棕櫚樹頂に鐵砲を匿し、巧みに伊兵を狙擊するに依ると、而して最近電報に依れば、伊軍は今やオーシス燒拂ひに其力を致しつゝあるが如し。沙漠に於てオーシスを失ふは、阿剌比亞人を苦むる所以たるのみならず、やがて伊軍自らを苦むる所以たる可き也、是に到て吾人は益々思ふ、彼の虐殺事件に依りて、阿拉比亞人を激昻せしめたる伊軍の愚は殆んど及ぶ可からざるとを。

（ツリポリの阿拉比亞人等は土耳其政府に歸服せるものにあらず唯回々教徒たる關係より同情厚き位ゐのみ、然るに伊軍上陸後虐殺に次ぐに虐殺を以てす十月二十六日一工場の勞働者等約四千名を孱弱なる嫌疑の下に殺害せるか如き其一例也、英國倫敦デイリー、ミラーの記者の如きも此事を報道したる故を以てツリポリより放逐せられたり）

獨逸海軍費膨脹

キイルのノイエスチ、ナハリヒテン新聞傳て曰く獨逸政府は更に海軍擴張を企てんとす、即新計畫に依れば七箇年に亘りて一億七千萬圓の海軍費増加を來し、毎年の海軍費二千五百萬圓を加へずんば止まざる可しと、借問す新英國海軍卿チャーチル氏は、如何にして此計畫に對抗せんとする乎。

佛國の將來を奈何

一九一一年前半期に於ける佛國の死亡數は出産數を超過すること一萬八千二百七十九に上る。吁嗟巴里の志士、國家滅亡を憂ふるもの亦何ぞ偶然なりとせん。

南阿英人の不平

南阿弗利加聯邦成立以來、ボーア人の勢力隆々として英人の氣勢太だ揚らず、英人の黨與たる南阿統一黨は、之を極端なる中央集權の結果なりとし、十一月末反對の決議をなす。然りと雖もボーア人多くして英人少き南阿に半獨立的聯邦の建設を許す、今日の事あるは、始めより明か也、ジエムソン氏一派若し、英人の勢力維持を豫想して、聯邦に贊成したりとせば、吾人は寧ろ其淺見に驚かざるを得ず。（懷沙隱客）

藤村氏の『家』

樗陰生

綠蔭叢書第三編として『家』が出た。上下二卷九百頁。例によつて極くサッパリした裝幀だ。
此編を讀んで第一に感ずるのは、此小說は此十倍にも書けるものだといふ事である。それ丈け總てがコンデンスされて、內容が充實して居る。ナニシロ二大家族の十三年かの間の出來事を之れ丈けに書き縮めてある。何代と續いた、大きい田舍の舊家が毀れて、新らしい家族が都會の方へ押し出して行く。其間には老いても尙、自分を捨てゝ行つた夫を求むる女もある。落魄して家族と別れて滿洲に落ちて行く男もある。廢疾に罹つて親戚の厄介になりながらも、矢張り自己の生存の權利を維持してゐる者もある。妻子と別れて下宿住居をしながら尙事業の志を抛たぬ人もある。入牢する者もある。自分は自分のする丈の事をしようと眞面目にコツ／＼と世を渡りながら、世の中のいろ／＼の義理や人情に絡まられて苦んでゐる人もある。田舍の暗い家から一飛びに都會に出て、一儲けしやうとして失敗して死んだ人もある。舊い戀人を自身の妹の夫に持つ妻もある。其妻の心持を疑つて悶ゆる夫もある。澤山の子供を產んで、其子供に一人／＼死なれて行く親もある。一人も子供のない淋しい若夫婦もある。夭死した多くの姉とは似ず後からノコ／＼と育つて行く子供もある。妻の留守に我知らず若い姪の方へ心を惹かるゝ男もある。仝じ若い女でも勝氣な、仇つぽい女もある。大人しい、地味な女もある。單純の極、痴呆に近い女もある。凡そ、生、死、夫婦、親子、親戚、離別、得意失意、愛、戀、肉慾、義理、人情——凡そ我々が日常に經驗し目擊する人生の大事實は、其一角／＼を極めて印象的な筆に描かれて、全體の光景と意味とが強く讀者の胸に迫つて來る。苦しい、張詰めた、泣くに泣かれぬやうな、暗い、遣瀨ない心持に讀者を連れて行く著者の筆力には何人も驚嘆せずに居られまい。
『破戒』の出た當時、故獨步氏は「僕ならば此小說を十分の一——五十頁に書いて見せる」と言つた。若し氏が生きてゐて此『家』を見たなら、よくもこんなに短かく書けたものだと驚いたであらう。
『破戒』で芽を出しかけた著者の新藝術は『春』に於て著しく成長して、此『家』では花を發き實を結んだ。『家』は著者が今迄に登り得た絕頂の作である。獨り著者のみのでない。我明治文壇に之と並ぶべき作を問はれても僕は一寸其答に窮する。
此書を一讀した感じを述べて此餘白を埋めて置く。

中學程度の男女學生に性慾に關する知識を與ふるとの可否

拜啓。時下愈々御清榮奉欣賀候。扨弊社發行の『中央公論』新年號に於て『中學程度の男女學生に性慾に關する智識を與ふるとの可否』と題し、教育界の諸名士、全國の師範學校長、中學校長、高等女學校長各位よりの回答を發表いたしたき計畫に有之候が、惟ふに、男女の風儀の如何は直ちに國家の盛衰に關する儀に有之、且つ目下の如く青年の花柳病患者年毎に增加し、一國壯丁の體格頗る不良に趣き、又屢々同性間の情死等を見、心中論なども世間に囂しき折柄、親しく文政の局に當られ又は中等以上の教育に從事せらるゝ各位の御高見を世に紹介するは、極めて緊要有益の事と存じ候につき、御多忙の處恐縮に存じ候へ共何卒右に對する御高說御洩らし下され度伏して懇願仕り候。敬具

次に掲ぐる所は右の如き問に答へられたるものなるが、記者は玆に公務多端の際懇篤なる返書を賜はりたる教育界諸名士に深く感謝いたし候。尚可否の意見の明瞭ならざる返書多數ありしも、そは頁の都合上掲載せざることゝいたし候。(一記者しるす)

○ 仙台高等第二學校長　三好愛吉

(一) 予は今日の如く中等程度の學生に性慾教育を施さぬ否寧ろ施すことは悪いといふ一部の說に反對して積極的に之を施すべしといふ說を主張するものである唯其教育の方法に至りては最も愼重に考慮せねばならぬことは勿論である。卽先第一に起るところの問題は

(二) 現今の中等程度の男女の學校に於ては何年級から又年齢として何年位から此教育を施すべき乎といふことである

予の考では中學校に於ては五年級で又女學校に於ては四年乃至五年級て授けるがよいと思ふ即年齢でいへば男兒に在りては滿十六年位女兒てへば滿十五年乃至十六年位である此年齢は恰かも男女の春情發動期の平均年齢である其以前に性慾教育を施すことは却て此發動期を早める虞があつて宜しくない又學校でいへば學生が卒業に先つこと一年前であつて智識上にも道德上にも多少分別が付きかゝつて來る時である即中學校女學校の卒業生は悉く一通りの性慾教育が施されたものとして其以上の學校では其心持を以て教養を施すときは種々の點に於て非常の便益があると思ふ次に起る問題は何人が其の教授の任に當るべき乎といふことである予の考では中學校では男子女學校では女子に限ると思ふ而して教授者

は學校の敎師では宜しくない或は學校醫が適任だといふ者もあるかも知らぬが現今の如き無信用の學校醫では不結果に終るは明かである矢張博士か學士か乃至は土地で最信用の厚い醫師に限ると思ふ但し女醫の少い今日では當分女學校も男醫の受持とせればなるまいと思ふ次の問題は

(三)敎授の事項は如何なる程度まで及ぶべき乎其方法如何といふことである是は種々の境遇によりて多少の差異は免れないことではあるが概して言へば性慾に關する大體の事項に止めて其詳細の事には渉らぬ方を可とするのである其例を擧げて見れば動植物學上より生殖の事を論じ一般動物の性慾の自然なること及放縱の弊害より人間の性慾を理學上醫學上社會上道德上概論し殊に自淫他淫に伴ふ病氣の恐るべきことを警告し又特に女兒に對しては其特種の生理狀態に對し又婦人病につき注意を與ふること等は必要であるが其以外却て淫情を挑發する如き一切の細事は之を避くる方がよい而して敎授者は學生の充分信任する人たるべきは勿論其敎授の方法は極めて嚴肅にして且暗示的感動を與ふること强大なることを期せなければならぬ是れ實に性慾敎育の第一の難事である

(四)次に家庭と學校とは特に性慾敎育に就て聯絡を取り學校に於ては敎授の事項を成るべく父母保護者の會合に於て說示し以て家庭の注意を促すを可とする但し家庭に於て父母から直接に子女に對し性慾の世話を燒くは宜しくないと思ふ

以上述べた外性慾敎育の必要なる理由其他の條項に付申したいことは澤山あるけれども餘白なき故玆には略すことにする兎に角此問題は我國に於ても充分研究の必要と價値があると信ずる

○中學程度の男女學生に性慾に關する智識を與ふるを可とす

廣島縣立福山中學校長 青木儀太郎

性慾は自然の本能なれば或る時期に達せば自ら之を感得し遂に不自然なる方法を濫行し或は不品行に陷るもの少しとせず而して其の結果或は腦を損ひて痴呆となり或は恐るべき病毒に犯さるゝに至る如きは何れも其の害毒のしか恐るべきものあるを知らざるに起因せるものとす依つて彼等に充分なる智識を與ふればその害毒を防遏するに多大の効果あるべきは信じて疑はざる所なり然れども之を充分知悉して倘劣情を制すること能はざるもの無きに非らざるべきも之を敎へずして無智無學の間に放任せんよりは豫め之を知らしむるの効果大なるは論を俟たざる所なり

世に之を否とする論者は多く、何事も知らざる少年少女に性慾に關せる事を說明するは却て劣情を挑發し、危險なる弊害を招くに至るとするものと又一方に斯る事柄は公々然と口にすべきものに非らずとなすものなり然れども此等は一は其方法を誤り他は餘り僞善に過ぎたるものなりと信ず

玆に唯、可否を論ずれば足れり、其の方法に論及するの要を見ざるが、一言之に論及せんとす

性慾に關する智識の如きは決して之を一齊に敎授すべきものにあらず決して何事をも知らざる少年少女に說くべきものにあらず又之を講堂に於て講ずべきにあらず必ず其の私宅に於て或は寢室に於て叮嚀懇切にそ

の無暴を指摘すべきものなり尚此の際性慾に關せる一大良著の刊行せられ之が弘く流布せられて青年男女間に閲讀せられ尚世の父兄も之を子弟に與へてかの恐るべき害毒を免れしむるに至らんことを切望して止まざるなり

○姫路高等女學校長　溝口鹿次郎

予は大體に於て否とする論者なり。

中等學校に於て理科の中にても生殖に關することは授けざることゝなれり、之はその知識の必要不必要と云ふより各種の聯想を怖るゝが故ならむ。

又古より性慾に關する智識を授けたるものは漢籍に一二あるを見たるが、本邦にては貝原益軒の養生訓の外直面目なる著書には見受けざる様なり。固より專門家の書籍は格別なり。

予は此の種の智識を授けたる經驗なきも、要するに各種の惡聯想を伴ひ甚だ教授し難きことなるべしと思ふ。されど研究の價値あるものと信ず。

先づ此の智識を授く可きものとしても如何なる時如何なる方法によるべきかは甚大の注意を要し、如何なる範圍程度まで之を授くべきかも少なからざる思慮を費すべきことなり。夫の不注意不正式なる男女の交際により卽賤業婦等に接して傳染せる花柳病患者の如きは、そが衛生上危險なるのみならず必ず同時に道德上極めて邪惡なることなれば、之を防ぐの目的ならば強ち性慾に關する衛生上の方面より之を豫防する講話若くは注意を與へずとも、修身道德の側より努力するを本領と信ず。

次に時々耳にする男女學生間相互の如何はしき風儀も、必ずしも性慾を滿足せしむるもののみに非ず、又實際性慾を滿足せしめたるものは極めて少數なりしならんと信ず。此の如きものは性慾に關する智識を授け、依りて以てかゝる交際が危險なることを知らしめたりとて、恐らく其の效なかるべき徒にして、實際は同行散步し又書信の往復等に止まるもの多からん、果して然らば此の如きものを濟度するは修身訓育の上より眞實の心を以てなすべきことなりと信ず。

たゞ女生には聞かざれども、まゝ男生に聞くものは性慾の自己滿足なり。かつて東京某學校に於て、某教授が一生の俄に成績不良に傾き元氣銷沈せるを認め、之を獨室に招き溫和に注意したるに性慾の自己滿足なりしを告白せしかば、深く之を戒めしに後改悛の曙光を認めし經驗談を某雜誌にて見たることあり。旣に成績不良に傾き意氣銷沈したる後に之が手當をなすは甚だ後れたるの憾ありと雖も、豫め之を防がんが爲に學校として執るべき方法は、極めて抽象的の言辭を以て其の恐るべきを知らしむるより外なかるべく、從て其の效果の乏しかるべきは明なり。此の如きことこそ學校教育を補助すると稱する科外の讀物に於てその智識を與ふるは容易からん。

之を要するに性慾に關する智識を中學程度の男女學生に與ふるは、その智識の要不要と云ふに非ずして、先づ學校に於て授けらるる緩漫なる抽象なる程度の授與にありては其の效果は期する所に添はざるべく、效果

あらしめんとする瞬密なる露骨なる教授は、人格德望共に高く且極めて巧なる教授者に非ざる限り、惡聯想の惹起を免れず角を矯めんが爲に牛を殺すの類たらんか。

特に女學生にありては、例の定期的經水のことすら老練なる女敎員の口より巧に注意を授け、一方に於て印刷として閱讀せしむる外目下良方法なき狀況なればその困難なる想ふ可し。但し修身訓育の上に努力を加へ各種の施設に於てその考を以て元氣に活動せしむることを勵み、又性慾の自己滿足を開始する徵候あるものを適當に暗示するは將にとるべき方法なりと信ず。されど予は此の如き事を以て性慾に關する智識を與へたりとは思はざるなり。

○

文學博士　建部遯吾

○智識を知識と解釋す

○貴問の如き知識を中學程度の男女學生の有するは不可に非す中學卒業程度の男女學生の有するは望ましき事なり

○されど與ふるは有するに異なり與ふるは有せしむる所以の一方法なれども與ふるには與ふる人なかるべからず與ふる人と與へらるゝ人との關係に直接と間接とあり

○其直接なるは教師と生徒との間に之有り其間接なるは著者と讀者との間に之有り

○直接に與ふるは斷して不可なり品格教養の精神を害すること甚たしかるべし殊に女子に對しては他人の其品格に對する侮易は蓋いて女子自ら其品格に對する侮易に隨了すべしさらでだに女子學校の寄宿生活が幾分紡績工場に近つきつゝある今日斯かる不注意なる教育は女子の品格を害ふこと絕大なるべし

○間接なるはさまでの害なかるべし

○貴問にある如き諸々の弊害は貴問の如き知識の欠乏によることとしありとしても極めて小なるべしかゝる知識を與ふるの却りて弊害を加ふることもありぬべし且知識は内外の諸專門學者の著述に見るもさまで斬新有益なるものに非ず

○同性間の情死、心中、の如きは全く別種の事項にして本問と何の關係なき事なり是等の現象に對しては精神病學の初步を中學生に授くるを利とすべし

○專門的學習として貴問の如き知識の授受研鑽は全く別種の問題なること言ふまでもなし

○貴問の如き知識の或る方面の普及は適々以て佛國米國に於いて、また英獨諸國の大都會に於いて、幷に所謂高等の學校教育を受けたる婦人等に於いて、見る所の人口上の文明病の一原因たらずとも限らずこれ本問題に關聯して尤も經世家の留心すへき所たり貴問未た此點まで考へ及ばれぬやの迹あるを以て聊か一言を附記すること爾り

○

群馬縣立高等女學校長　佐藤穗三郎

小生は該問題に關しては、或特殊の惡習に陷りたる學生に對して、其惡習に伴ふ害毒の恐るべき所以を敎ふるは、頗る緊要なるべしと存候。

併し一般の學生に對して、此種の知識を與ふるは、其知識の程度如何を問はず、すべて良果あるまじと存候。元來小生の見る所にては、女學生が異性又は同性に對して、特殊の關係を生ずるが如きは、大多數中の極めて僅少なる一部に止まるのみ。一二の非行者によりて全學生を疑ふかの如きは、聊か杞憂の感なきにあらずと存候。實際高等女學校四年生位迄は、大抵は無邪氣者に候。されば此種の知識を與ふるは、却て性慾を誘發する媒となるべく候。而して人の知力は性慾の前には其微弱にして、よく之を制する能はざるは世間其例に乏しからずと存候。故に如何程、性知を與ふるも、其爲に情死などは減じ申すまじく候。唯花柳病患者などは或は減じ申すべく候。されど同時に避姙法の如き、由々しき惡風も起り易かるべく、男女の風儀は、寧却て亂るゝに至るべしと思はれ候。此種の知識に富める某外國民が、聞くも恐ろしき、卵巢除去の手術を施してさへ、倚性慾を恣にするは、其實證と申すべく候。されば小生は、一般學生に對し、若しも性慾の弊害を防止する必要ありとせば、此種の知識を與ふるの直接法を取らずして、他の間接法を取るを可なりとなす者に候。

○

京都帝國大學
總長理學博士 菊池大麓

「性慾に關する智識」とは果して如何なる意味なるか斯の如き問題は意義を明確にせざれは誤解を生ずるの虞有りと存候今假に之を廣く「性に關する知識」とすれは小生は問題は之を與ふるの可否に非らずして其程度及方法の如何に在りと愚考仕候方法にして其の宜しきを得ざれは却て害有り事之を企てざるに如かずと存候近頃此問題は英米教育界に於ても注意致され小生先年彼地に於て親しく教育者に就て其意見を聞き方法等も尋ねたると有之候へ共此種の問題は社界の情態に依りて其趣を異にするは勿論に候へは吾邦に於ても充分研究されたきものと存候

○

樋口秀雄

此問題に關しては小生は勿論これを授くるを可とするものに候。但しその方法が大問題なり。若し方法にして宜しきを得ざらんか、さらでも靑春の血燃ゆる若き男女をして、却て徒らに情欲の滿足を求めんとし、竟には墮落の淵に臨ましむるの虞あるべしと存じ候。中等教育の教科目中にては、生理衞生の學科が性慾教育を施すに最も直接なるものたるは勿論なれど、たゞ露骨に年若き男女に生殖作用の生理衞生を語るべくもあらねば、むしろ生物(動物學)の教科に於て暗にこれを致ふるが得策なるべきかと思はれ候。またこれと共に修身の教科に於ても制慾の道德的幷に功利的意味を明かに致へて、各身を刺激するその性慾的衝動を仰ずるの道を知らしむること特に肝要なりと確信致し居り候。但し小生は普通發育を自ら施したる經驗なき故、仔細の點に關する注意幷に最良の方法に就ては、記者足下と共に世の實際教育家の高論を傾聽せんとするものに御座候。匆々

○

丸龜中學校長 阿部虎之助

適當なる方法と適當なる程度に於て相當の人格ある人の口より之を與ふれば敢て不可なからんも方法を誤り程度宜きを失はんか寧ろ益なく危

女

險にして害あるべし故に特に性慾に關する智識を與ふるよりも現在の修身科を一層有效ならしめ或必要なる普通の智識は生理の部に於て授くれば足る事と信ず

○

和歌山縣新宮中學校長　寺内頴

性慾に關することを口にするを士君子の恥となせるは獨り東洋君子國の風習たるのみならず、西洋に於ても亦然りしが如し、拉丁人は青年の前にて自由に性に關する事項を話すことを禁ぜられたりといふ、而して元老院議官マニルスは其の娘の前にて已が妻に接吻したりとて罰せられしといふ、然るに現今に至り思潮漸く變じ、性慾に關する事を秘密にするは却つて好奇心を挑發するの弊あり、寧ろ之を明白に公にして其の弊を除くに如かずと論ずるものあるを見るに至れり、殊に中學程度の男女學生に性慾に關する知識を與ふるの必要を唱ふるものあるに至れる、思潮の變化驚くに堪へたり、スタンレイホールも性に關する教授をなしつゝありて、其の効果の大なるを認め居らるゝが如きも、かゝる教授をなすは眞に Painful duty なりと云ふを以て見れば、更に愼重なる研究を要するを知るべし、

性慾教授の可否を決定せんには先づ其の内容と方法及び其の目的とを知らざる可らず、從つて所論多岐に渉るを以て、玆には單に目的上より論述せん、

性慾教授は(1)性慾の抑制をなさしむる方便としてなさんとするか、(2)性慾の健全なる發達をなさしめんためなるか、(3) sexual organ の不完全ならずやといふことに對する恐怖心を除かんためなるか、

第一　Onanism は人類の退化的行動にして其の弊甚しといへども、性慾教授を爲して之を抑制するを得べしとは信ぜられず、之を抑制するの方法は他に求めざる可らず、

第二　Menstruation に關することは之を知らしむる必要あれど、之を以て性慾教授と稱する能はざるべし、

第三　不完全ならずやとの疑惧の大なることはスタンレイホールの著「アドレセンス」中「性的發展」の處に引用せる例に見るも明なり、故にかゝる疑惧を除却するを講ずるは必要なれど、之を以て性慾教授なりと云ふ能はざるべし、

彼の花柳病患者の增加、同性間の情死等を見て、これ性慾に關する智識の缺乏より來れるものとなすは大なる謬見なり、青年時代は良心の勢力往々强大を缺くものにして、弊害多く玆に因す、ホール氏曰く、

Vanity and a manly tone are often stronger than conscience.

是に由つて之を見れば性慾教授は所期の目的を達すること能はざるが如し、動植物及び生理學にて學べる程度にて可なるべし、尤も性慾に關する智識は泰西の醫家尙之を盡さずといふ、然らば適當の教授をなすことも現今に於ては不可能なり、急速に泰西の流風を追はざるを可とす、

○

京華中學校長　磯江潤

拜復御垂問に預り光榮に奉存候然處小生はかゝる問題に觸るゝことのそれをも好ましからずと存候、さりながら現今の男女學生が貴說の如く

導くべき途徑柔弱の狀態に陥りつゝあるものに候はゞ之に就て意見を聞はす亦止むを得ざる一義に候はむも意見を聞はすそれが却て挑發煽揚の因となることを懼るゝ次第に御座候、かの「賢賢易色」の四字は斯問題に對しても適當の答案かと存候試みにかゝる情念を未萌に遏むる方法として一、前途の光明を示し之に向つて邁進するの勇と樂とを起さしむ二、學事に多忙にして間思雜慮に暇なからしむ三、斷慾を起すの端を警しむ四、其身分責任を自覺して自重自敬の念を持せしむる等數へ來らば幾多の道これあるかと存候、

殊にかゝる問題は年齒の長ずるに從ひ自然に其智識を得るものにて若し其智識を與ふるの幾分か利益安全なりとするも與へられたるより生ずる危險害惡の猶、甚太しからむことを惧れ予輩をして之を得るの一日も遲かるべきを庶幾ふて止まざらしむる次第に御座候貴意如何敢て教を請ふ　頓首

○ 東京女子師範學校長　鈴木光愛

性慾は人の青年期に達すると共に、自然に發生する本能に外ならず、人間の性狀として毫も怪しむに足らざるのみならず、之あるが爲めに吾人の種族は存續し繁殖することを得るものなり、故に之を罪惡視するの不合理なるは勿論、青年に對し勉めて之に關する智識を與へざらんとするの謂はれなきことも理論上予輩の首肯する所なり。然るに我國從來の道德は斯る事柄を平氣に云爲するを以て耻づべきことゝ爲し、成るべく忌避するを以て善なりとするが故に、今日の我社會狀態に照らし、將た道德觀念の上より觀れば頗る實行難を感ぜざるを得ず、殊に青年に對しては其の說明の如何に依り、却て不良の傾向を挑發することなきにあらざるべし。歐米にては教育上夙に注意せらるゝに拘はらず、尙ほ家庭醫をして青年に說示せしむるの方法を取れるものありと云ふ、參考すべきことならん。要するに予は性慾に關する智識は何等かの方法に依り授くべき必要あるを認むるも、今日の場合に於ては未だ之を實行するの勇氣を有せず。唯此事たる我國にては家庭に於ても學校に於ても、餘りに閑却せられたれば今後其の說示の方法時期等に關し十分に研究せざるべからざると同時に、必要上、學校に於て說示する場合には決して團體的とせず、箇人別に爲すべきものなることを確信す、

○ 柳河高等女學校長　水谷兵四郎

凡物一利あれば一害を免かれざるは數の常なり左れば苟も事を創むるに當りては先づ以て其の兩面に就きて最愼重なる考慮を回らさずんば一利或は百害の伴ふことなしとせず青年男女に性慾に關する智識を與へんとするが如き夫れ之に適きか予は强ちに之を以て無用なりとは云はざれども寧ろ之に手を着けざるを以て勝れりとする者なり其の理由に至りては玆に詳說せず要は唯之が爲め却て情的危險の生ぜんことを恐るゝが爲めのみ更に切言すれば予は此等の問題の教育社會に現はるゝさへ悲む者なり

○ 愛知縣第一中學校長　日比野寬

青春血氣の中學生を指導するに當り性慾問題の最も注意を要すべきも

のゝ一たるは疑を容れずと雖も進んで性慾に關する智識を授くるの可否に至ては容易に之を論斷するを得ず之を授くる方法の如何と其機會の如何とに依り妄に之を不可とはせざるも彼の普通學課と同く授くるに於ては之に依て性慾調攝の實を擧げ得るといはんより却てさなきも燃ゆる如き靑春の氣を刺戟挑發するに止り終に土崩瓦解の慘を見るに至らんか恐る固より誘惑に犯されんとし或は既に犯さるゝ疑ある者に關し十分の訓誡を施すの要あるに際し說いて性慾に關する智識に及ぼすが如きは適宜其處置を執るも可なるべし要するに食色は性なり其常調を失ふに及では區々たる言說片々たる智識の能く之を阻止し得べき者に非ず然れば豫め性慾に關する智識を與へて之を刺戟挑發する憂ある擧に出てんより寧ろ其心身を奪て他に傾倒せしめ以て高潔なる性情を養成し彼の不潔なる觀念を起すの餘地なからしめ而して靑春血氣の時期を過さしむるの遙に有効にして教育的なるべきを信じて疑はず吾人は此點に於ても平素唱導して已まざる體育的運動の重要視すべき者たるを感ぜざるを得ざる者なり

○

北海道小樽中學校長　淸水實隆

拜復

御提示の問題に關しては從來研究し居らず何等の御回答も致し兼候又日限までに考究致し度候も目下多忙の事あり是亦餘裕無之遺憾ながら突如思ひ付き候事を述ぶるに止め御參考に供すべく候

性慾に關する智識は中學程度の學生に絕對に秘すべきものには之なかるべく機會ある每に說諭する位を以て限度となすべく組織ある教科の如くに教授する必要はなきことゝ信じ候中等程度の學生と一と口には申せども初年生より高級生に至るに從ひ知識身體の發育上大いなる變化ある時代のものなれば何處を限界とするとなく大凡そ二期に分ちて論ずる方便利と存候初年期には性慾に關する知識を與ふるも解することなかるべく又體慾も未だ此の點に及ぶまで發達し居らざることなれば毫も性慾の知識を與ふる必要なかるべく候高級期にあるものは體慾の要求を感じ來る時期に際し居ることとて却て好奇心を惹き起し實現の慾望を早むるに傾くこと多かるべく候成る程恐るべき結果を知らしめて警戒せしむる効はあるべきも自制力弱き彼等には萬全を期し得べきか疑ひなき能はず候否な其の知識あるが爲に豫防策を講じ或は姑息の彌縫策を施こして教ふべからざる弊に陷るもの生ずること必然と存候斯かれば知識を與へたるが爲に起こる弊と知識を與へざるが爲に起こる弊と輕重ある間敷候寧ろ與へたる方の弊大ならんかと存候右は議論よりも實際に徵して知り得たることにて候直接には教へざるも間接には新聞雜誌其の他により知り得る便宜ある現代の方が舊時代に比し御質問にある如き惡弊少かりしの觀を呈し居り候畢竟知識あるものは其の知識に依賴して警戒を怠り油斷大敵の諺に漏れざる儀と存候こは皮想の見かも知れず候へ共研究の餘時なきを以て感じたるまゝに引例致したる次第に御座候明治初年の頃同輩學生間に好んで自由民權の書を讀むもの有之爲に學業も卒へず左りとて政治家にもなり得ず其の後の消息を失したるもの多々有之候思想薄弱の處へ金玉の知識を注入するも右の少年政治家同樣何等の利益もなかるべ

く存候小生の考ふる所にては知識は風俵に對し有力のものに非ずと存候知識は如何に該博なりとも其の人の自制力にして全からざれば何等の効なく却て反對の用に供せらるゝに過ぎずと存候故に少年男女に對しては先づ道德上の修養を先にし自治自制の習慣を基礎とし之に加ふるに世人失敗の結果性慾に起れるものにつき訓諭すれば足れりと信じ候性慾の原理的講義の如きは不必要なりと考へ候

○　石川縣立高等女學校長　土師双他郎

該問題ば議論する迄もなく余は之を否定するものに之あり候是認論者は之が智識を與へて青年の性慾を抑制せしめんとの意なるべしと雖智識が意志感情を左右する力は極めて微弱なるものに之あり候誠に中年以上の同問題に關して相當の智識あるものが性慾を適當に抑制することが出來るや否やと云ふに余は寧ろ出來ざるものゝ多きを悲むものに之あり候俗諺には候へ共醫者の不養生といふことも之あり若し學生に該問題に關する智識を與ふれば却て之を惡用するものゝ生ぜんことは想像に難からざることゝ存し候

○　石川縣師範學校長　中山文雄

◉中等學校に於て、男女生徒に對し、性慾に關する智識を與ふるの可否は、極めて緊要なる問題なれば、最も愼重の態度を以て、十分に其の利害を考慮せざるべからざるなり。

◉假りに、學校に於て性慾に關する講話を爲すべきものとせば、何人か其の任に當るべき。學校長か。敎員か。將た學校醫か。思ふに學校醫は、專門の智識の豐富なる點よりすれば、最も適當なるが如しと雖も、性慾上の事實が、餘りに其の耳目に慣熟せると、敎育的素養を缺くとに由り、生理衛生上必要の事項を逸し、却つて敎育上有害なる事項に說き及ぼすの弊なしとせず。學校長及敎員に在りては、斯ゝる憂は無かるべしと雖も、一般生徒に向つて、性慾問題を公言するが如きは。動もすれば誘惑に陷り易き、青春時代の好奇心を挑發して、危險なる結果を釀すに至るべく、加之人情の機微に觸るゝことあるがゆゑ、瑣々たる一言に由りて意外の失笑を買はんか。百日の說法も何とやらにて、遂に豫定の効果を收むるを得ざるのみならず、或は却つて、敎師の威嚴を損するやも計り難し。知らず、全國幾多の中等學校長及敎員にて、能く無難に而かも有効に性慾上の講話を爲し得るもの、果して幾人かある。

◉中等程度の學生が受け易き、性慾に基く弊害は、不知不識の間に之を豫防し、又は除去するに如かず。而して其の目的を達せんには、須く積極的の方法と消極的の方法とを取るべきなり。先づ消極的方法の主要なるものを列擧すれば、

甲、身體に關しては、

（一）局部の物に依りて摩擦せらるゝを防がしむること。

（二）神經を刺戟する飲食物を、成るべく避けしむること。

乙、精神に關しては、

（一）卑猥なる小說講談等を讀ましめざること。

（二）猥褻なる行爲又は野卑なる繪畫塑像及演劇等を見せしめざるこ

と。

(三) 下劣なる歌曲情話等を聞かしめざること、等なるべし。積極的方法も亦種々あるべけれども、

甲、身體に關しては、

(一) 運動を奬勵すること。

(二) 身體各部を清潔ならしむること。

(三) 冷水浴又は冷水摩擦を爲さしむること。

乙、精神に關しては、

(一) 人格を高尙ならしむること。

(二) 趣味を清新ならしむること。

を其の眼目とす。尙又「小人閑居して不善を爲す。」の道理にて、彼等をして一時たりとも無聊に苦しましむるときは、或は空想に耽り、或は性慾を縱にするの虞なきにあらざるを以て、斯ゝる餘暇なからしむるやう、常に周到なる注意を加ふるも亦極めて必要なるべし。

◉我が校にては、一般生徒に對し右等の方法を實行すると共に、特殊のものに向つては次の手段を取れり。即ち「生徒動靜一覽表」と題するものを備へ、各自に就き一年三百六十餘日の欄を設け、毎週土曜日に於て出席簿と缺席屆とに依りて日々の出席缺席を調査し、病氣缺席の場合には、相當の符號(呼吸器、消化器、神經系、眼病、全身病、脚氣、其他の七種に分つ。)を記入することゝし、此の表に依りて病狀の疑はしきものを發見せるとき、若くは顏色の著しく蒼白となれるものあるときは、舍監より個人的に注意を與ふるなり。

◉之を要するに、中等學校の男女生徒に向つて、公然性慾に關する講話を爲すは、種々の弊害を伴ふを免れざれば、特に必要と認めたる者のみに對し、諄々として指導訓誨を施すを得策なりと信ず。

○ 三重縣立高等女學校長　清水誠吾

學校教育は被教育者の現在及將來の爲めに必要なる事項を撰みて教授及訓練を施すにあり、されど其事項の分量と性質とは被教育者の年齡等により即其受容力に相應せしむべきにより自然に限度の定まれるものなるを沒却すべからず、

中等程度の男女學生は性慾の萌動せる時機に向へるを以て其性慾に關する相當の知識を與へて無知の爲めに陷るへき諸種の弊害を未然に防がんとする學者教育家も近來少からざるが如し、是一應然るべき用意なるが如くなれども、果して生徒の受容力に相應するの處置なりや否、余は事實上或は豫期に反對せる意外の結果を發出し來る可きかを恐る、蓋中等程度の學生は斯る事項の教授に對して能く冷靜に理解し判斷するには餘りに其受容力の幼稚にして或は却て一種の好奇心を刺戟する可きや頗る研究を要す、之を譬へば腸窒布斯の回復期に於ける食慾の發動の如し、患者の受容力完全ならは食物に關して時宜の節制法を說示する時は善良の効果を奏すべきも、患者の受容力に幼稚未熟の疑あらは、飲食に關する說話は却て眞意義以外の聯想を挑發して一層不良の狀態を生ずるの實例は絶無ともいふべからず、

要するに性慾的諸問題の教授は中等程度の學校教科としては不適當なる事項なり、但父兄又は特殊の關係を有するものにして相當の機會を利用して極めて眞面目に助言約指導を與ふるは甚必要有功ならんとおもはる、何分斯ることは學校等の公的教示よりも特殊の場合の私的助言に讓ることを余は極めて自然的にして有利なるを信ずるものなり、

○ 青森縣立八戸中學校長 小泉秀之助

貴社ます〳〵御旺盛の段、欣賀々々。至極よき御企故、左に二三、書きつらぬるも、元より、かいやりすつべきものにて、實は大方諸彦の高見を聽かんとてに御座候。

A 中學程度の男學生には、該方面の智識を與ふるを可なりと信ず。

（理由）——如何に千金の子なりとも、何時までも箱入息子に住まはす譯にも行かず、やがて毬栗の口明く時節もある可く、いつかは浮世の風にもあたり、虫喰まれ、つつかれ、あたら青年を賊ふこと往々有りがちのこと也。夫の腦病といひ、神經衰弱といひ、將又生殖器病の蔓延といひ、要は性慾の誤用惡用に基因するもの少しとせず。眞に戰慄にたへず。この際斷然この方面の智識を授け、禍を未萌に防ぐの得策なる、自明の理也。

（方法）——

1. 主として四五年の高級生に授く可し、あまり前々より教ふるよりも、青年期に達して後の方、可なる樣におぼゆ。

2 學校長、修身の時間を利用し、修養談として折に觸れ教ふる方結果よろし。

3. （イ）學校醫　（ロ）舍監　（ハ）修身及理科擔當の教師

右の中、教授に適當なるもの、出でて其任に當るを可とす。

元より特設にあらず、機を見て時々教ふるなり。

（注意）——

1. デュッセルドルフ市のギムナージュームの如く、上級生に限り特に性慾に關する講義を開くの要を見ず。

2. かへりて、伯林市のケムジー氏の如く、動植物、生理、倫理、宗教等、諸種の教科を教授する際に、特に此點に注意して、便宜適當の教訓を加ふる方可なるべし。

2. 父母兄姉は、直接に教へぬを可なりと信ず。當人も亦聽くを好まざる可し。

4. 例之、校長、徐ろに教壇に立ち、謹嚴なる態度、慎重なる言語にて、深く熱誠をこめ、「我邦の將來は諸子の道德と健康との上に懸る」云々と説き出し、言々句々人の肺腑を刺し、たえて輕佻浮薄に流るるが如きことなき樣にすべし。

5. 滑稽に陥り、卑猥に流れ、徒に人の嘲笑を買ふが如きは、かへりて有害なり、此點よく〳〵戒心すべし。

13 中學程度の女學生には、尚早しと信ず。

理由は知らず、たゞ何となく、しかく感ずるなり。然し、人身生理に因み、節制擁護の義務を、倫理道德の敎授と聯關して授くるが如きは、敢へて妨げず、否、かへりて奬勵すべきことに屬す。

○ 富山縣立高岡中學校長　田村喜作

中學程度の學生に性慾に關する智識を與ふるの必要は之なかるべし彼等は元來思慮淺く感情極めて鋭敏なるものなれば其與へられたる智識は彼等の不謹愼に對する警戒とならずして却て彼等を誘致して淫猥なる思想を喚起せしむるの動機となる惧あり之の如き例は近時一般學生が浮華淫靡なる風儀が輕浮なる圖書刊行物を亂讀するより生ずると如何に多きかを見ても知るべし元來青年の性慾は之を發達せしむべきにあらずして之を抑壓すべきものなり之が爲めには常に他に一層大にして高尚なる慾望を起さしめ且つ之に關する智識を與ふること必要なり若し彼等にして性慾に關する智識なきが爲め豫知すべからざる殃禍に遇ふことありとせば只彼等が其慾望を滿足せしむるより生ずべき恐るべき罪惡慘毒の結果を暗示して自ら警戒せしむるに若かず

○ 栃木高等女學校長　西岡嘉藏

此問題に就いては私は「不可」と答ふるに躊躇しないのである、固より現今青年の花柳病患者が年毎に增加する事や、同性間の戀愛の如き不自然の現象がある事は認めて居る、けれども此等の事實あるが爲めに、性慾に關する智識を青年男女に與へたからとて、直に其弊害が救はれるとは思へない、試みに思へ現時青年の風儀が惡いのは性慾的智識が缺けて居る爲めであらうか、決してさうであるまい、彼等は社會の制裁監督が嚴格で且自ら克己節制の意志が强かつたならば決して墮落すべきものでない、彼等が不自然の情慾の滿足を得んとするに當り心中最も恐れる所は、生理上の結果より寧ろ道德上の責務である良心の呵責である中には生理的結果を恐れて戒愼する者もないでもないが、しかし其位の智識ならば學校に於て授けなくとも誰も常識的に知つて居る筈だ、若し又常識以上卽ち專門的智識を授けると云ふ意ならば、それは醫學專門學校以上の事で中等程度の學校では法則上之を許してない、それも敎授する方が利益あれば法規を改正してもよいが私は其の必要を認めない、其の理由は別に說明する迄もない、理性的光明が往々燃ゆるが如き感情の爲めに掩はれんとする青年に向つて、生殖機の構造や性慾的作用を說いたならばそれこそ肉慾を挑發して毒蛇的結果を生ずるは火を覩るよりも明である。

酒や煙草の害毒を生理的衞生的に青年に授けるときは反省戒愼の材料となつて非常に有益である如く、性慾的智識も亦彼等の戒愼反省の材料となるであらうと云ふのは青年の心理を知らない迂濶な議論である、胃病患者に向つて胃腸の構造や食物の成分を講釋しても格別の効もあるまい、それよりか寧ろ運動を奬勵し飲食睡眠等に規律があるやうに導く方が有効であらう、之と同じく青年男女の墮落を防ぐ爲めに性慾的智識を授けるよりも、趣味を高尚にし思想を純潔ならしめるやうに導くのが要

に有効であらう、規律的生活に慣れしめて閑思雜慮の起る餘裕がないやうにするのもよい、精神的慰安を與へて肉體的快樂を防ぐのもよい、出來るならば一定の信仰を得しめて理想の光明に猛進せしめるのが一番よからう。

されぱとて私は性慾の事を學校で口にすべからずと云ふのでない、其恐るべき結果其心身に及ぼす害毒は、機に觸れ時に應じて感情に訴へて戒懼せしむる必要がある、或は各個人に就いて警告する必要もある、又家庭に於て父兄に注意せしめる必要もあらう（特に家庭に於て談笑の間に父兄より注意するのは有効である、學校に於ても此呼吸を忘れないやうに行ふのがよい）何れにしてても青年の感情に訴へて反省戒懼せしめるのであつて、智識として授けるのではない、智識として授けるのは百害の伴ふばかりて格別の利益はないと思ふ。

○ 愛知縣立松山中學校長 廣田一乘

貴社の御尋ねにかゝる性慾に關せる智識と云ふ意味の範圍を廣くして論ずる時は余は與ふるを可とするものの一人てある。凡そ常識ある教育者ならば之を絕對的に否とする者はなからうと思ふ。然し其の智識の程度及び之を教授する方法如何は大に考慮を要せねばならぬ。先づ其の程度より云へばあまり深入りせぬを得策とす、即ち性慾の原理とか男女兩性の特質とか又はその組織構造とかを說くことなく、單刀直入性慾を弄ぶ害早婚の弊又は花柳病の恐るべき事などを敎ふるので充分てある。次に其の教授の方法は間接には修身科直接には博物科就中生理科に於て便宜を授くるを最も適當と思ふ。此の教授の際は教師たるものは最も嚴格なる態度をとらねばならぬ、然らざれば却て有害無益となり終るであらう。以上の答は簡單ではあるが此の問題に對する要領をつくしたと信ず。且つ此の教授は男生のみならず女生に對してもある程度までは與へてよからうと思ふ。

○ 岐阜高等女學校長 遠沼靈學

本問題に就きて明瞭的確なる意見を陳述せんとするには性慾に關する智識を與へたる結果如何、性慾に關する知識を與へざる結果如何を充分に攻究せんことを要す

余は本問題に就きては從來多少の注意を拂へりと雖も尙ほ深く研究することをせざりき、從つて明瞭的確なる意見を陳述すること能はざるを憾とす唯目下左の如き考を有すといふことを告白するに止めん

男女風儀の頽廢、壯丁の體格の不良、同胞間の情死、青年の花柳病患者の增加等は主として青年男女が性慾に關する智識を缺くに歸因すとは考ふること能はず、寧ろ性慾に關する智識ありて而も之を制御すべき意志の力の薄弱なると青年男女の性慾を挑發すべき諸他の事情多きとより來ると考ふるを至當なりとす、若し中等程度の男女學生に性慾に關する智識を與ふるが如きことをせんか偶以て卑猥の情を挑發し之を讃ずべき方法を授くるの結果に終るべし

○ 長野縣立長野高等女學校長 渡邊敬

女子教育の側より

(1)女子に貞淑の德の必用なるを說き男女交際に對する注意を與ふるが如き一面より云はゞ從來とても消極的ながら性慾に對する智識を授けざるにあらず性慾に對する智識固より必用にあらずと言はず然も此事たる嚴肅なる家庭に於て眞面目なる態度を以て兄弟姉妹列座の處に於て父母の口より授くべからざると同じく敎室に於て敎師の口より敎授し得べきや否恐らく言ふべくして實際に行ひ難き問題にはあらざるか要するに性慾に對する智識を授けずといふも授くるといふ程度問題にして絕對に授く可らざるものとは謂はず只今日より特に更に項目を設けて之を授けよといふが如き某は其可なる所以を知らざるなり

(2)花柳病情死等云々是等の害毒は之を知れるが爲めに止むものにあらず寧ろ是等に關する事を目にし耳にする多ければ多き程人を邪路に導くの恐あり今の新聞紙とても情死を奬勵し花柳病者を嘆稱するにあらず然も彼等の事の紙上に上れば上るほど之を犯すもの多きを見るなり

某は信ず現時の憂を救ふの道は中等敎育を受けつゝある生徒に向ひ性慾に對する智識を與ふるにあらずして別に其方法を求むべきものなることを。

○　千葉縣佐倉中學校長　山內佐太郎

言ふ迄もなく中學程度の敎育は單に消極的養成に止らずして積極的養成の方針を取る必要あり性慾に關する問題の如き臨機應變に注意を加へ之を利用し活用して學生を指導するに適當なる方法を以て善良且つ强大なる勢力に薰化することは敎育當事者の心掛くべきこととなるべし就中左記の如き注意は缺くべからざることならんか。

一、先づ敎師其人に在ること。敎師たる人にして一言一行すべて肺肝より出て一毫の苟且輕浮なき德の人ならば直ちに生徒の肺肝を貫き生徒を薰化すべきや言を俟たず。故に敎師其人にして此かる機微を穿ち得るほどの人物ならば勿論性慾に關する注意の如きはなるべく精細に周到に指導するほど可なるのみならず寧ろ必要なることゝ思ふ。

二、青年心理に通曉すること。敎師たる人其識見に於いて十分に春情發生期に於ける青年心理學を研究せるのみならず實地につき各個身體の發達精神の變動並に其心の傾向を知悉することを要す。殊に敎師は自己の青春時代を回想し之を憶念し之を生徒の擧動と比して其大體を直覺し機微に觸れて生徒を指導すること必要なりと思ふ。

三、生徒と同舟の人たるを要すること。凡て同情なきものゝ言は如何なる嘉言金條と雖も他を動かすに足らざるや言を俟たず。故に平生敎師は己を忘れて一切生徒と共に遊び共に勵む熱誠あり、不斷生徒と同舟に身を委ねて始めて同情同感湧くが如く、血氣方に盛んなる青年に對して自己の人格を證據として諄々語るべく而かも其一言一句悉く青年の肺肝を貫き其の心を支配せずんば止まざるものありと思ふ。

四、學校長たる人の意氣。中學程度の學校長たる人は深く自重し一校精神の中樞を以て自ら任ずると同時に前條の人に求むるほどのことは必ず先づ自ら之を己れに求めざるべからず。加之學校長は進みて其卒業生の前途に於いて學成り、婚を成す曉には其配偶者選定の相談に與か

り、且つ其世話をも爲し、愈大晴れ華燭の典を擧ぐるときは學校長は其身式典に臨みて共に其の良緣を祝する底の情誼あらむことを望む之を要するに敎師其人により指導を受くる學生の心理狀態により其時と場合とを慮り愼重の態度を以て注意すべきことゝ思ふ。

○ 滋賀縣膳所中學校　堤　寛

學生に性慾的智識を與ふるの可否は夙に歐米識者の硏究する所或は既に之が實行を試みつゝあるあり。されど今遽に之を我邦に施さんとするに當りては宜しく一顧する所無かる可らず。第一目下我邦一般の趣味は非常に低下しつゝあり。此際に於て說くに生殖器能を以てする或は火に注ぐに油を以てするの虞なきか。第二斯る智識を說くや其人格たる高潔にして大に世の信望を博する所無かる可らず。若否ざらんか單に劣情挑發の機會を作るに止る。余輩は社會の風俗頹廢せる今日其人を得る頗る難きを思ふ。是れ余の該問題に對する尙早論を唱ふる所以なり。余は一方敎育の力に由りて學生趣味の向上を促し一方上流紳士の純潔なる示範に由りて謙格の精神を啓發することを現下の急務と信ずるなり。

○ 愛知縣岡崎師範學校長　後藤嘉之

小生は男女性慾問題の如きことは靑年時代の敎育には必要を認めざる一人に有之兩親として將た敎育者として發護の方面より心得べきことならんも靑年其者がかゝる知識に接觸することは寧ろ多害ありて寸益なからん靑年には身體の鍛鍊讀書の獎勵品性の脩勵に全力を傾注せしめ又他を顧みるの暇なからしむべしスタンレーホール式の知識は日本の中等敎育の現況には程度合ひ申さざるの感あり。兎角靑年時代には質實剛健にして盛んなる意氣と水火尙辭せざるの風骨あらしめ所謂スパルタン的なるを可なりと信ず。

○ 岡山縣立高梁中學校長　柳井道民

性慾に關する知識を與へるといふことは必らずしも、絕對的不贊成ではない、併し、智識を與へる丈で靑年の人格操守を一變し得べきか、ちと疑はしい否甚不安心であると思ふ、法律の智識ある人に詐欺恐喝の行爲は無からうか、生理衞生の智識に富める醫者に不養生は無からうか、王陽明は知行一致といつて居るけれども普通の意味に於て「知る」といふ事と「行ふ」といふ事とは然く容易に一致し得るものであらうか、現に學生中、性慾に關する智識に富める者としては何うしても醫學生を推さゞるを得ないが其の醫學生に墮落する者の多いといふ事を聞くはどうした譯だらう、見方によつては「其の智識を與へる事は寧ろ危險なり」と言つて善いかも知れぬ、生理を敎ゆる時間などに、病毒の恐るべきこと、其の感染の激烈な事、其の他注意すべき點につき、機を捉へ時を見て、ヒントを與へ警告を加へることは勿論差支も無く、十分深刻に腦裏に印象せしむべきではあるが、抑此の性慾の智識などいふことは末の末なるものでは無いかと思ふ、十分な德育を施し、堅實な思想を持たせ、敢爲剛毅な人間と爲すことに努めたならば、強ひて此の智識を與へる必要が無いかも知れず、又與へても此の危險は無いと思ふ、源にして濁る安んぞ下流の清きを望まむ、此の德育、人格の敎育にして行はれざる限、千の

性慾的智識、寧ろ其の好奇心を動かすに過ぎないと思ふ、抑、現代の教育には殆ど何等といふ事がない、暗くして、如何にして彼等青年の模擬を損ねないやうに導いて行かうといふ、周到にさはるやうな教育、そこに何の權威があらうか、眼の目もなき有りて彼等に臨む時に、氣の抜けた茶ず、形式の教育であつて、吾々の施設も多く徒爾を爲すに過ぎないことと思ふ、

青年子女の情慾の盛んなることは憂慮せざる限、寧ろ歡迎すべき事だと思ふ、若し水の如く淡く、石の如く冷たい枯木寒灰的の青年があつたならば、其の病的たるや言ふ迄もなく、社會に立つても活動するの氣力を缺き、幾艱難辛苦に屈せずして忠臣となり孝子となることは出來ぬ、人道の戰士となり學界の選手たる事も無い、內炎々の情ありよく之を涵養し正しく之を喚發ずれば、之を君に捧げ、父母に奉じ、社會に施し、國家に結び付けて、忠となり孝となり同情となり愛國の精神となるものである而して其活動の分量が情慾の乏しきものに比して多大なる可きは勿論である但、世の悪風潮、不健全な思想文学、心なき擯斥者の批判、罪惡なき教育と相伴ひ相向けて。此の貴ふべき情慾は、不幸、漸々より情的方面に投せられをそゝのかれて之を正しく導いて情に適當に向い、其の發揮を擯擇させなければならぬ、

さらば如何にして情的潮流に向はせるかに付いては、余に多少の卑見が無いでもないが、之は問題外でもあり且紙數の制限もあるから茲には省くこととする、又教育をして謬戾あらしむる手段方法に付いても茲に言及しない、要するに貴社より徴せられた意見に付いては、此の性慾的智識を與ふる必ずしも不可ならざれど、只本末を辨ずべきのみと言ふに在り

○　大阪府立富田林中學校長　大里猪熊

性慾に關する知識の中其解剖生理に關することは寧ろ與へざるを可とす、其の理由は未だ自制力全からざる青年男女に之を知らしむるの弊端を與ふるときは好奇心盛なる彼等は此方面の實驗に耽りて觀念活動の理により實行を誘發墮落に赴くの恐あればなり

然れども性慾に關する倫理的社會的方面の知識は或程度まで之を教ふるの要あり即ち意志の鍛錬及社會の秩序を尊重するの諸件に關聯して自制修養の効果並に其方法を詳說し又た其墮落より生ずる悪結果を適切に知らしむべし而して之を教ふるには極めて嚴粛なる態度を以て痛切に說得せざるべからず曖昧模糊の言語を以て諷するが如きは却て不可なり

要するに性慾に關する教育は青年として高尚なる理想を懷かしめ其品性を陶冶せんとする希望と勇氣とを鼓舞して初めて其目的を達し得べきものにして徒に自然科學的說に依て其形骸を知らしむる如きは殆んど其功なきものとす

○　愛媛縣女子師範學校長　鹽谷作造

適當の年齢に於て青年をして性に關する健全なる思想を發展せしめざるは是れ青年に對する最も重大なる罪悪の一なりと說くものあり青年期學生の教育に於て性的問題を等閑に附するは堅實なる教育をなす所以に

えらざるを以て教育者は之に關して周到なる注意研究を怠るべからざるは勿論にして若し是等に關する智識を授くる、せば其程度方法及教育者の人格につき大に考慮を要すべし否らずんば却て惡しき結果を來す虞なしとせず

信任ある教師が個別的に教訓をなし老錬なる家治科の教師が婦人衛生として注意するが如きは行はれざるにあらざれども然も其程度につきては大に研究を要すべく且此る教訓は極て穩當なるを要するは勿論なり

大體論としては余は寧ろ消極論者にして性慾に關する智識を積極的に授くるよりは自制克己の力を養ひ醜劣なる情慾の奴隷とならしめざる樣苦心努力するを可なりと信ず而して此る自制力を養ふことの困難なるが爲却て積極的に如上の知識を授け以て其害毒を防がんとするが如きは教育の功果をして無意識的に減殺し居るものと云ふべし

○

茨城縣立太田高等女學校長　池田昌久

拜啓益々御清昌慶賀此の事に御座候陳て今般性慾問題につき卑見開陳せよとの御申越拜承仕候此の問題は歐米等にて盛んに研究論議せられ居り我が國にても近時其の聲漸く大に相成候樣相覺え候要するに問題は青年男女生徒に性慾に關する知識を教授すべきか否かといふ一點に係り居候樣に存候小生は凡ての點につきては性慾に關する間接の知識則ち可成劣情を抑制するに堪ふるだけの方法を講じたき所存に有之候一例を擧れば生理上より運動を獎勵し冷水摩擦をなさしむるが如き精神上よりいへば高尚にして興味ある讀物や其の個性に適合したる或種の趣味を助長せし

めて正課と併行せしむるが如きは最も必要なる措置かと存居候現に弊校に於ても此の問題には深甚なる注意を拂ひ如上の方法を行ひつゝ有之候直接性慾問題なるものを提出して眞向より教授することには賛成仕り兼候論者は蓋し青年男女の性慾は寧ろ之が知識を得しめて其の害毒より免かれしむるを以て能事なりと致居候樣に相見え候へども愚老にては之が知識を授くるよりして却つて劣情を挑發せしむること多々生じ來る場合も有之これを授くるより來る弊害は授けざるの害よりも一層大なるにはあらざるかと思惟致居候故に間接には性慾に關する知識即劣情を抑制するに堪ふるの事項を教ふるを必要なりと信ずれとも直接には教へざるを以て安全なりと存居候實は此の問題に關しては尚ほ卑見も有之候へども多用の際とて先は其の要領だけを記して御返事となし責を塞ぎ候段惡からず御諒承被下度候　敬具

○

新潟師範學校長　江口照造

拜啓貴社益々御清榮奉賀候御求めにより愚見を左に開陳仕り申候

中學程度の男女學生に性慾に關する知識を與ふることは不可である。性慾に基く害毒は知識の欠乏より起ることは極めて少い。恰も酒の害煙草の害の如きもので知りつゝも尚ほ其害を免れ得ざるものである。よしんば、公然其知識を與へて極めて特殊なものを救ひ得るとするも、それがために多數の生徒に刺戟を與へて挑發することもあるので、煙草や酒の害を説くのともちがつて却て藪蛇になる恐が多い。加之如此問題を教室で喋々するのは我國の現況に於て斷じて人情に反して居

る。理窟ばかりてはいけぬ。又た害毒を豫防し惡癖を矯正する方法としても直接に性慾そのものに沒頭するは甚だ拙い。少くとも教育的でない。よろしく常に運動を奬勵して身體を健全ならしめ病的慾望を起さしめず情操を涵養し意志を鍛錬して以て誘惑に克ち刺戟に抗するの性格を養成するに勉むべきである。この根本を培養することを得ば其枝葉たる性慾問題、少くとも中等程度の學生のそれは自ら解決することが出來る。

右可然御處理被下度候早々

○

某女學校長　S・Y生

此問題を決せんとせば先決問題として

一、惡風の盛なる都會の地の學生と善良なる風儀を維持せる田舍の地の學生と同一の取扱をなさゞるべからざるか

二、中等程度の男女學生と云ふと雖も年齢に著しき差あり心身の發達に大なる懸隔ある者を同一の圏内に混入して可否論を決せざるべからざるか

の二問題を決する必要あるが如し余は二者何れも其區別を立つるの必要ありとするものなり

然れども善惡の風儀を區別し年齢に境界線を引くこと極めて困難なり故に寧ろ常に學生の言語擧動に注意し中學程度の學生の快活なりしものの傳幽に傾くか學業成績可なりしものの不良に傾くか勤勉なりしものの怠慢に傾くか綿密なりしものの粗放に傾くかの如き心身に著しき變動を來したるの際一應其原因を探査し性慾に關する智識を與ふるの必要ありと認めたる者に對し醫士をして之をなさしむるを得策と信ず

○

長野縣下伊那高等女學校長　湯本政治

御書面拜展新硯益御清適の段奉賀上候陳は男女學生に性慾に關する智識を與ふることの可否につき愚見御照會に預り候處定見これなく甚だ慚愧の至に有之候へ共平素左の如く信し居候

凡て歷史的習慣の存することは何事に關はらず俄かに改むべきにあらずと信じ候何時迄舊習を固守せむは嗚呼の沙汰なるべけれど男女性慾に關することを口にするは耻づべきことゝ爲したるは久しきに渉りたる風習なれば假令へ其智識を與ふるは理論上可なりとするも大に警戒を要する儀と存じ候況んや可否の疑問なるに於ては倘更のことなりと信じ候學生中にても醫學生は其目的上最も此種の智識に富む者而して其操行之を他の學生に比して良否如何は恐らくは疑問なるべく考へられ候されば此種智識の豐富が直接に男女の風俗に良影響を與ふるものなりとは差向考へられず候西洋諸國の狀況は知悉せざれども恐らくは疑問とする者多からんかと想像致し候況んや我國の如き永き習慣の存する國に於てをやと存じ候

又凡て事に反對作用の存することも許さゞるべからざる一の道理なるべし所謂「恐いもの見たさ」の念あるも亦一の事實なるべし男女を餘りに遠くるは却て接近を促す原因と爲らざるを保し難し然れども「男女別あり」とは是亦久しき歷史的習慣の存する所今俄かに接近せしむべきに

あらざるも責めては小學校位は尋常高等を通じ男女共學を爲さしむること如何あるべき先づ此の邊より始めて久しき經驗を積み然る後漸次研究の歩を進むること如何要するに理論の如何に拘はらず此種の智識を與ふる云々に對しては尙早と信ずるものに有之候

尙ほ花柳病患者增加云々に對しては多少の意見なきにあらざるも自から別問題と信じ候につき略し申候匆々不一

◎　氏名不詳

靑年男女學生に性慾に關する智識を與ふるの可否との御尋ですが私の考では可否を論ずべきではない直に之に關する智識を與へざるべからずと謂はねばならぬと思ひます何となれば人は誰でも年頃になれば性慾は發達するものです若し之に關する智識なき時は性の奴隷となる恐があるからです尤も之に關する智識さへあれば情の奴隷にならいで濟むとは申されません智慧の働と情の發動とは必ずしも一致するものではありませんから併し知らずして自ら身を害ふ人でも情の未だ病的にならざるに當りて早く物の道理を悟れば情の奴隷となることを避ける工夫が出來ると思ひます唯此工夫を爲すには之を爲すに要する力が外の方面で養つて置く必用があるのです本來此力さへあれば性慾に關する智識は有つても無くても大した差異はないのですが此智識があれば其力が一層强くなることが出來るのです又此力が無いとなると惡事を働く上に於ては智識の有無は甚しき影響を及ぼさぬものです場合に依れば智識は惡事を增長せしむる助となることもあります併し是は全く墮落した人間の事で普通の人は彼力は無くとも智識があれば幾分か善の方面に向ひ善に達せんと勉むる内に彼力も自然と養成せられるものです西洋では智識の發達は著しい從て性慾の害を怖れることも甚しい去りとて情を制することは出來ない一面には理想を全くし能はざるを悔み一面には害を怖れること甚しい結果隨分神經衰弱を起す學生が多いのみならず煩悶の結果自殺を企てる者もあるとの事です我國では性慾の奴隷となつた結果神經衰弱を起して居る學生は大變多いのですが理想と實際とが一致しないのを苦にして神經衰弱を起すと云ふことは有りとしても極て少い樣です東西文明の差は妙な處まで影響するものです

性慾は天然自然の者であるから之を滿足せしむることは少しも惡事ではないのに過去の道德が之を罪惡と看做して居たのは間違であるとの說がありますが是は大なる謬見です例へば食慾は人間に自然と備はつたものです從て之を惡事と謂ふものはありません然れども之を滿足せしむるに時と度とを失すれば罪惡になつて應報忽ち來ります性慾其物が不自然であつたら夫婦と云ふことも不自然になりますから人間社會は滅びます然れども夫婦の間と雖ども性慾を妄に致しますれば矢張罪惡です況んや其他をやです

以上は性慾問題に就いて抽象的に論じたのですが我國現在の男女學生に性慾の智識を與ふるの可否と云ふ具體的の問題になると少し趣が違ひます今日とても智識を與へた方が害の少くなることは疑ありませんが人生問題を全く度外に置く無趣味の教育を受けた學生は此種の智識を濫用

する恐が無いとは決して申されません併し是は智識の罪ではありません教育が悪いのです性慾の事計りではない總ての智識が惡用せらるるのです返すぐも教育當局者の猛省が促したくござります

○ 埼玉縣川越中學校長 前原仙太郎

青年男女が性慾のために風俗を亂し、健康を害し、遂に一身を誤るもの多々あるは、實に慨歎すべきことであります。之れを救濟せんとして、性慾に關する智識を與ふるの可否杯といふ問題も起つたのでありませう。僕の見る所を以てすれば、憂ふべき現象は、性慾に關する智識の深淺有無の結果でなくて、他に大なる源因があると思ひます。抑性慾は何人も可婚期に入れば自然に起る情慾であつて、所謂教へざるの能である、知愚賢不肖皆之れを有せぬものなく、性慾は其の智識の有無によつて消長するものでないのみならず、去勢術以外には如何なる術を施すも之れを消滅さすることは出來ないものと信じて居ります。故に單に性慾の消長といふ點のみからいへば、之れが與ふる必要もなく、之れを與へたとて格別害があるとも思ひませぬ。唯必要のないものならば、教へざるに如かずといふまでゞす。

然れば頽廢の大源因とは何であるか。教育の缺陷、不良の誘引、不良の習慣、不良の先例感化等であると思ふ。僕自身の教權の範圍内に於ては、出來得る限り微力を盡して居る積りですが、殘念ながら僕の教權の範圍外に大なる缺陷があつて、充分の功果を奏することが出來ませぬ。故に僕は其の缺陷について、一般社會に對し、世の先覺諸公に對し父兄母姉に對し、教育者に對し大いに訴へたい所があるのです。併此は今日の問題外である故、此所に開陳する權能を持ちませぬが、要は青年男女の風儀の維持は性慾の消長、若くは性慾に關する智識の消長によるにあらず、全く理想と修養とにあると思ひます。

○ 福島縣立福島中學校長 桐谷文平

社會の風教並に國民體格の改善、人種の改良等重要なる問題が直接間接性慾に關する研究に須つべきは今や明かなる事實とはなれり。

去る七月英國兒童研究會に於て會員皆性慾教育の必要を認めながら、教師、醫師、宗教家等が之が教育上の責任を互ひに他に讓らんとしたるは、尙未だ社會の手前を憚りたることならんも、斯の如き教育は實に此等の人々の共同責任たるべきなり。

近年歐米に於ける性慾に關する研究は、頗る多面に涉り、單に醫學、衞生學のみに止らず、社會學、心理學、倫理學等に及び、性慾衞生に關する參考書目のみを掲ぐるも、尙數頁を要する程にして、近時歐米の教育或は心理に關する雜誌には、此問題盛に論究せられ、既に自ら教授上の實驗をなし、中等教育に對する教材を提供して批評を求めつゝあるものあるに至れり

余は茲に性慾に伴ふ害毒を詳述すること能はざるも、人若し此種の事例を調査し其統計を一覽せられなば、性慾衞生を無視するの結果、社會の風紀、國民の體格に如何なる惡影響を流しつゝあるか、實に寒心すべき事實あるを發見せん

元來性慾教育の可否論は性慾教育其ものゝ可否論にあらずして、寧ろ其内容即ち教授の材料、教授の時期、教授者の人格、教授の方法等によりて決すべき問題なり。然るに世人性慾教育と云へば其内容を精査することなく、直に下品なりと斷じ、或は恥づべき私事を公表するが如くに考へ、或は羞恥心を害するものなりと論じ、或は却て好奇心を增さずやと疑ふものあれども、之れ實に早飲込に過ぐるものなり。人若し精選せられたる内容を聞かば、成程然るかと合點するに相違なからん。余は爰に詳細の内容を述ぶること能はずと雖、彼の清潔の習慣を養ひ、身體に關する諸種の注意を與へ、或は機會ある每に簡單なる注意を與ふるが如きは、幼年時代より何等の危險なく之を教育し得べきは何人も認むる所なるべし、而して此種の教育は家庭に於ても學校に於ても成べく個人的に行ふを以て勝れりとなす

さて學校に於て此教育の基礎を博物教授に置くの方法は(去る十月教育心理學誌上エッデー氏報告の如く)普通に考案せらるゝ所なれども、余は如斯教育は生理的因果の事實に置くべきものにあらずして、必ずや道德的に考案さるべきものなりと信ず。蓋し博物上の事例を引證し或は博物教授の際機會ある每に相當の注意を與ふるが如きは、元より望ましきことなりと雖、自然法が主たると、道德法が主たるとは、其末千里の差を生ずることあるべければなり、されば之が教育管理の責任は何人が之に當るとするも、其指導たる單に生理的なるに止まらずして常に道德的訓諭となり、其取扱ひが常に美化され總化され聖視さるゝが如くなるを要するなり

以上の如く性慾教育は必ず道德的に考案すべきのみならず、現今の如く本問題の研究が多面に渉り、而も未だ統一なく且其材料教授的に選擇せられざる今日に於て、徒らに新を競ふが如きは最も愼まざるべからず。故に現下採るべき途は、事間接なれども、先づ幼時より清潔衛法の習慣を養ひ、漸次長ずるに及び鍛練的體育、文藝、音樂、手工上の工夫等の興味を振作し、兒童青年の勢力をかゝる方面に注がしめ、一方には境遇を改善して克己的道德を獎勵し、以て性慾催進の機會を失はしむるを以て最も穩健なる方法なりとす

○ 千葉縣師範學校長　田村勝次郎

拜啓貴社益御隆昌奉賀候陳ば中學程度の男女學生に性慾に關する智識を與ふるとの可否に就きて諸家の意見を御纏め相成候御豫定の由教育上極適切なる御計劃と存候右に就き愚見を提出せよとの御來示に候處小生は性慾に關する智識は中等程度の學生には之を與へざるを可と信じ候素より經驗に基づきて結論せし次第には無之候へども性慾に關して講話することは却て性慾を挑發し或は爲に不道德の行爲を爲すに至らざるかと存候尤も特別の生徒に向つて單獨に訓誡の際說明するか或は花柳病の恐るべきことを說き或は該病患者の患部模型等を示すこと等に宜敷存候右極めて簡單に申上度如斯候　草々敬白

○ 栃木縣女子師範學校長　東　[illegible]吉

中學程度の男女學生に性慾に關する智識を與へて、夫で以て性慾の節

制を守らせ樣とすることは、假令効力ありとするも甚だ微弱である。而して若し其方法宜しきを得ない時は、反對に其弊を大にする恐がある。今日に於ては、自分でも尚未だ之を教授する適切の方法を考究してなく、且つ寡聞にして、他先輩諸氏よりも之を聞かないので、學校ではこれが知識を與へることには賛成が出來ない。

外國では青年の性慾不節制は、日本よりも甚しく、從つて此問題も一層痛切に論ぜらるるにも係はらず、この方面に關する知識教訓は、家庭に於て父が男兒に母が女兒に與へるべきで、然も其方法に就きては充分愼重なる注意を要すると或學者はいつて居る。

凡そ事物の害を除かうとする場合に、直接之に當つては反つて功なくして其害を助長することあり、寧ろ間接の方法が案外に奏功することのあるものである。自分の考では、性慾の如きものも間接の方法で充分抑止することの出來るものであつて、直接に正面から說明して單に知識で以て抑制させ樣とするのは、少くとも中學程度の學生に對しては、執るべき方法でないと信ずる。

一般に、身體、精神共に活動的のもの、趣味の高尚なものは、共に性慾上から來る惡習慣から免れて居ると思ふ。從つて青年を教育するには、身體も盛んに運動させ、精神も出來る丈け活動させて行く樣にすれば、自然性慾などには耽らぬ、かくして尚性慾に耽る樣な人間は、知識を與へたつて矢張駄目なのである。知識で以て犯罪から免れることの出來るものならば、教育も亦容易いものといはればならぬ。畢竟活動的な青年を無爲閑居せしむることが、最も危險である、爲すべき事があれば情死などは自然爲すものではない。

も一つは趣味の問題である。文學美術の如き勿論卑猥なるものは遠ざけて、高尚雅正なるものに接せしめればならぬ。趣味の涵養が間接に此方面に就きて最も有功な方法である。而して此點が今日大に我國で缺けて居る點だと思ふ。

然しながら、花柳病等の恐るべきことは、飲酒の害なども同樣に、性慾問題から離れて、教ふることは必要で且つ出來得ることと思ふ。

○　吳市立高等女學校長　福井敬勝

拜啓時下愈々御清榮奉欣賀候扨中學程度の男女學生に性慾に關する知識を與ふることの可否と云ふに就て小生は否とする意見に候本問題の如き性質のものは歐米に於ては其効を奏するも我國青年に對し一般的に諭說するは不可と存候但特別の場合個人々々に對しては自ら別問題に候右簡單ながら結論のみ申述候　敬具

○　第三神戸中學校長　泥谷良次郎

與ふる智識の程度と其方法とが問題にして、與ふることの可否に就ては既に北米合衆國などにて論究せられたりとなし、小生の意見にては、帝都にある謹愼なる教育家と醫師との協同によりて中學程度の男女學生に知らしむべき性慾關係の智識を選擇排列せしめ之を小冊子に綴りて、學生に購讀せしむるを以て最も適當なる方法と考へ候、現時の教育狀態に於て教師が學校教室内にて之を說くは方法として適當にあらずと信じ

申候該小冊子の購讀に關しては學校が一ト通りの勸告を生徒に與ふればそれにて十分の效果を收め得べく候、

○ 米澤市米澤中學校長　松山亮

記者足下、余は此の論題に就いて多言を好まず、唯否なりといふを憚らざるのみ、何となれば予は現今の青年男女にして若し性慾の發動に基因する不行跡少からずとせば、そは性慾に關する知識の缺乏に由ると謂はんよりは他に原因あるべしと信ずればなり、誠に思へ往時男女の品行比較的端正なりし時代の青年は、果して性慾に關して現今の青年よりも深き知識を有したりしか？、又思へ現今の醫學生の如き性慾に關して比較的豐富なる知識を有する者に、果して品行良正の者多きか？、社會の實際は或は之に反するものなきか？、されば青年の不行跡を目して直ちに性慾的知識缺乏の結果なりと速斷するが如きは、聊か見當違ひの論にあらざるなきか、予は思ふ斯る考よりして青年男女に性慾に關する知識を附與し、此によりて其の風俗を矯正せんとなすが如きは、是則古人の所謂緣木求魚の類なるべきを、蓋し現今の青年に比較的品行不良の者多きは必ずしも性慾的智識の有無如何に關せず、他に種々の原因あるべし、試に其の一二を擧げんか、第一軟文學の影響、第二教育者感化力の微弱、第三上流人士の示例（惡例）の如きは其の最も有力なるものなるべし、されば青年風儀の改善を謀するには須らく先づ此等の方面に着眼せざるべからず、事此に出でずして青年に性慾的智識を與へんとするが如きは予の斷じて不可とする所なり

○ 長野縣師範學校長　太田秀穗

謹啓貴社益々御隆盛之段奉大賀候、十二月付高田師範學校宛の御書面唯今當地に於て拜承仕り候、

仰越しの件につきては（小生は高等教育ならば兎も角）中等教育に於ては男女學生に對し故意に性慾に關する智識を與ふるの必要なしと申上くる外無之候、外國に於ては可否の議論あるやにきゝ及び候へども我日本に於ては未だその必要なしと存じ候、且つ如何なる場合に如何なる人が如何なる教案によりて性慾に關する講義をなすべきや疑問に候、たとへ生理衞生に通ずる大德人が講義致し候としても之をきくものゝ内利益を受くるもの半數ならば弊害を受くるものも半數ならんと存じ候、

今日は先覺の惡模範と職業的美人の横行と新聞雜誌の挑發的文辭を用ゆると戀愛神聖論の喧しきと近世的新夫婦の跋扈とによりて青年の氣風益々不良となりつゝあるやに存じ候へども斯かるとは性慾上の智識を與へたりとて矯正し得べきにあらずと存じ候、

寧ろ青年學生をして（一）學習運動に熱心ならしめ（二）國事に對する興味を起さしめ（三）高尚なる文學を奬勵し（四）下劣なる繪畫彫刻演劇文學等を法律により禁示し青年に觸るゝの機會なからしめ（五）青年の身體をして清潔ならしむる樣絶えず注意する等により邪淫の心を起すの餘地乏しからしめやがて思慮判斷の圓熟する頃を以て不合理的性慾の恐るべきを教育するを以て得策と存じ候又生計の餘裕あるものは可成早く結婚せしむるを以て得策と存じ候、

追々生活難の相加はるにもかゝはらす婦人の驕奢は益々進歩するの結果として婚姻は益々不經濟となり從て青年男女も不良なる方法により肉慾を恣にするは(文明に伴ふ弊害とは申しながら)實に痛心の至りに候、斯かる點よりしても小生は婦人の虚榮心を煽動するは國家、家庭の基礎を弱むる所にありと存じ候、

最後に小生は先覺者に對し少年子弟の爲めに品行を正ふすべきは勿論不良の影響を與ふるが如き事は可成之を口にし筆にせざる樣切に希望致し候　敬具

○　三重縣第一中學校長　弘田正郎

小生は病氣中にて執筆も叶はずとても十分に意見を發表することは不可能なれども折角のお求め故簡單に愚見開陳致候小生は從來性慾に關する智識を與ふるを可と信ずるものに有之されど其の要は之を與ふる方法に在り方法にして宜きを得ざれば反て弊害ありと存候生殖機の事を說き又は反自然罪等のことを露骨に告ぐるは甚だ宜しからざることにて之を與ふる方法は大凡左の順序に從ふて可なるかと存候

一、性慾の動物慾にして飲食等と同じく其の質の下劣のなること

一、邪淫の道德上衞生上大害あること

一、邪淫とは夫婦外の交りを云ふものにして其他獨淫反自然罪及び餘りに早く色情を動かし又は不相當なるものに色情を動す等も邪淫の中なること

右等の事を種々說諭し尙邪淫の事は苟も心に思ふべからずすべて性慾に關することは秘密し又は談ずることも不可なりと戒むるを可と信し候尙細目は修德綱の邪淫戒中に詳說致置候先は右御返事迄匆々

○　佐賀縣師範學校長　川島庄一郎

御承知の通り性慾は內發にて、自然と發達し來り、發達するにつれて世人の之に關する一切の談話、文學、俳諧等の中に含まれたる又はそれらを擬物化したるものゝ意義を鋭敏に領解し又彼等同齡者間に於て之に關する智識感情を交換するものにして特に之に其等の智識を與ふる必要は無之きものと認めらる故に我等の學校に於ては未だ此の問題に關し何等施設したる事なく又直接に右樣の事を論じ理解せずとも自ら思うて「中らずと雖も遠からざる發見」を得る人間たらしむべく努力し、此の方法の効力を恃となしつゝあり故に生徒の手前にては「祖先に享け子孫に貽す所以」の正式結婚の外性慾の事はすべて惡事若は無意識の事にては公然と言葉にすら上すべからざるものと考へ居る筈なり但萬一此の考に入らざる不料見者あるに於ては其の重き狀情の者は退學放校を以て後を警しめ輕き狀情の者には彼等が既に有する性慾並に其の智識の誤を正し整理作用を加ふるのみなり一般に對し何等の施設なし

○　山形縣莊內中學校長　宗像逸郎

御尋ねの件簡單に左記御回答に及び候

(甲)直接に性慾に關する敎育、

一、男女の交際(往來、會合、交通等に關して正當なる心得を敎ふること

二、結婚は人生の大儀なること其時期、方法、及び結果等結婚に關する道徳を教ふること

三、貞潔が重大なる道徳なることを教ふると共に不貞潔が道徳及び人格の破壞なることを教ふると同時に不貞潔の生理的悪影響を教ふること

以上は中等學校生徒の程度に應じて生徒一般に其の概要を教授するを要するものなり若し特殊の生徒に對しては個人的に一層精密深刻に教ふることを要す

(乙)間接に性慾に關する教育

一、冷水浴、或は武術遊戯等の運動を奬勵し之れを實行せしむること

二、生活を簡單に且つ規律的にし情慾の發動を成るべく平靜簡單ならしむること

三、學科の勉强を奬勵し學科の趣味を養はしむること

四、進取活動の氣象及び勤勞の習慣を養はしむること

(丙)根本的に道念養成に關する教育

一、道徳が社會生活の條件なることと隨いて人生の無上權威なることを了解して之れを尊重敬信するの心を發はしむるに厚く力を用ふること

二、良心(天道或は神佛と云ふも可なり)を尊崇し敬虔不欺の德を發はしむると共に天地人の恩を感じ報謝の心を發はしむるに厚く力を用ふること

三、道徳的偉人を崇仰せしめ道徳的活動中に現はるゝ道徳美を鑑賞し道徳的趣味を養はしむるに力を用ふること

以上の中甲乙共皆甚だ肝要なれども丙の道徳の信念を發はしむることは最も肝要なりと信ず丙の根抵を培養せずんば甲乙の教育法も其の効甚だ薄弱なり

右にて所見の大概は承知相成度候也

○、横須賀高等女學校長　北村包直

中等程度の男女學生に對し學校に於いて教師より直接に性慾の智識を與ふるは大に不可とす但し適當の時機を察し父母若くは保傅なる人より嚴格に性慾に關する智識を授くるを可とす

○　廣島縣立忠海中學校長　江口俊博

肅啓益御盛運奉欣賀候御高命の問題は小職等にとりては尤も緊要適切なる事項に候間豫々隨分心掛け居候へども固より不敏の性御恥敷次第ながら今日に至る迄科學的研究も出來上らず又實地應用上の自得も生せず徒に個々の場合に對し手探りに臨機與樂流の處置を講じ居るに止り何等特殊の材料をも公表する能はざるは遺憾千萬に御座候只兎も角も實務の經驗より今日迄に朧氣に小職の心得として浮びかけ居る意見としては性慾に關する問題は何處迄も個人的のものとして取扱ふべきものにして之れに關する智識を中等程度の學生に與ふる可否が何れに決するに係らず教室事項として公開的に授くるには不適當と信じ候小職は人間の羞恥情を保護すると無關心者の好奇心を煽るを避くる必要上性慾に惱まされつゝありと認むる生徒を物色し時機を見只二人差向ひになりて極めて素朴に且

極めて眞面目に注意を與ふるに止めいまだ曾て一般的に性慾の生理的方面を説き示したる事候はずかくては教育者として頗る不行屆の樣にも見え候へども青年學生が性慾によりて惱まさるゝ度合は主として性慾に關する智識の缺乏に基くと言はんよりは寧四圍の空氣に淫猥の香を含む度合如何によると被存候間小職は專ら學生自邊の恬淡無邪氣を圖るに力を用ひ一字不説にして不知不識性慾圈外に導く事を勉め居候要之小職には殆んど積極的の意見無之につき御社の此貴重なる御企により幾多の先輩より有益の御説を承ることを樂み居候　拜具

○　長岡中學校長　元田龍佐

中學程度の學生に性慾に關する智識を與ふることは亦極必要なることゝ認む然れども學校の教場に於て教師又は校醫の口よりするは勿論不可なり全一學年の生徒もその發育には遲速の差ある故適當なる時期を觀て個人別に行ふべき性質のものなり而して個人の發育の程度を知ることは教師よりも父兄の方遙かに便なれば通則として家庭に於てこれが智識を與ふべきものと謂ふべし然れども父兄の口より之を説くは人間羞恥の情を傷くること深大にして教育上大に恐るべく又到底實行し難きことなりされば文部省に於て學者をして性慾に關する良書を編纂せしめ學校は豫めこれを父兄に紹介し置き父兄をして生徒の發情期に入りし時巧に之を生徒に與へて自から讀ましむべきなりこれ最も實行し易き穩當なる方法と信ず

○　山口縣立萩中學校長　村上俊治

拜啓貴社益御隆昌之段奉賀候扨御申越の「中學程度男女學生に性慾に關する智識を與ふることの可否」てふ問題に就ては本職更に定見無之世間大膽なる教育家ありて試驗的に所謂性慾に關する智識なるものを學生に教授して若し良好なる結果を獲は本職は其方法に倣はんと欲する者に有之候右御回答迄如此御座候

○　福島高等女學校長　熊田子之四郎

御書面拜讀文部省制定の教授要目(高等女學校)を見るに家事科に於て女子に必要なる家事衛生の事は一通り教授致す事に相成り居り候小子は常に中等程度の學校に於ては學科過重にして何れも充分に了解せしめ難きを遺憾とするものに候今日の教授事項の上に男女性慾に關する智識を與ふる時間も無之亦其必要も認め不申候要は從來の學科を尚一層有效に教授する方法を講ずるを今日の急務と信じ居り候故に小子は右性慾に關する智識を與ふるを否とするものに候　早々

○　福島縣相馬中學校教授　櫻井賢三

現今、獨逸に於ても飲酒問題と、性慾教育とは、中等教育の大問題である。抑、性慾問題の等閑に附すべからざる事は、已にルッソー。バセドー。ザルツマン等の稱へし所なるも、爾來一般教育上の與論は沈默を唯一の方法となし居りしが、今や又、此沈默主義が僞善、虛僞なるを悟り、公平の態度と、道德的熱誠とを以て、研究するの急務なるを感ずるに至つた。其理由は次の如くである。

一、文明と共に晩婚、獨身、淫賣、の增加するより、花柳病の增加甚だ

しくなる。從て之に關し無智、陰蔽は益々、害毒を增すのみと、醫家の論、先づ出づ。

二、教育家も又現代青年の不自然性慾滿足（ウイダーナッールリッヘルベフリーヂグング）の害毒蔓延を知らざる眞似するは、餘りに冷淡、僞善である。且、生存競爭の激烈と共に、青年女子は早くより家庭を出て、獨力社會に立つが故に、學校に於て充分の思想を與へ置く必要がある。

三、又道德教育上、單に消極、姑息的手段にては到底、現代の害毒を救濟し得ざるが故に、其理由を說明し、其害毒を知らしめ克己自制の精神を養はしめざるべからずと。

四、宗教上でも從來の如く、聖書中の色情に關する部分を、曖昧に葬らんよりは、寧ろ著實、健全の思想を與ふるを適當なりと。

以上の理由より適當なる講話を主張するは正當と思はれる。乍然、予は現今、我醫家の稱ふる如く、直に性慾問題の講話をなすべしと云ふにはあらず。醫家の性慾教育は單に醫學、衛生上より見たる單純なる問題なるも、吾人教育家の見る此問題は實に教育の全般に涉れる複雜なる大問題である。之れ醫家が飜譯問題を輸入して、直に性慾講話をなすに反し。教育家の躊躇する所以である。抑性慾問題研究の必要なるは云ふ迄もない。然し必要なりとの故を以て直に性慾講話をなすべしとの結論は早い。予は其講話に先ち、踏むべき幾多の階段ありと思ふ。

一、不自然性慾の習慣は何歲より起り、且ついかなる程度迄蔓延しつゝありや。之れ第一に研究すべき問題である。若し之を究めずして慢然、形式的講話をなすは無知の者を挑發する患がある。

二、學校にて積極的、直接講話をなすに先ち消極的、間接的に豫防、訓練の手段なきか。予は日々の教授、訓練、寄宿舍生活等に於て最有効安全なる豫防、矯正の方法少なからずと思ふ。故に赤裸々の講話よりも、婉曲に力を濺くべきである。

三、此二ツの道を盡して尚救助の策なく、荒療治を要すとせば之が講話をなすも可ならん。乍然、之に關しては考慮すべき多くの條件あるを知らざるべからず。卽ち如何なる方法にて、如何なる事を、如何なる場所にて、如何なる人が、如何なる時にすべきか。若し一條件にても誤れば啻に其効果なきのみならず、不測の弊害を生ずる事あるを知らざるべからず。

今之に關し愚見の大要を述べて見たい。

目的。生殖作用の清潔なるべきこと及び之を愼む事が青年の一大義務なること、及び之に關する道念を高め、自瀆及花柳病の恐るべきものなるを說き、之に近よらざる意志の力を養ひ、其誘惑を遠ざくるに勉めしむべきである。かの生殖機能の詳細なる說明は反て宜しからず。「悉しく說明して其印象（アインドリュック）を鈍くすべし」との論は只理屈のみ。實際に於ては反て彌其好奇心を挑發するものである。又幾分之を說明するも嚴格なる事實たるを要しない。專門醫家の往々「事實は何處迄も事實として授くべし」とは未成年者の心理を解せざるものである。プラトーの言の如く眞理も未熟なる精神に對しては時に虛僞たるのみならず、實際上不道

律、危險なる事がある。實に彼等には嚴密なる眞理、事實に拘泥するを要しない。時に宗教的文學的にて差問がない。

方法。曾て東京の某中學にてなせし如く、本問題を取出してなすは宜しからず、種々のよき機を見て之に觸るればよいと思ふ。又何によりなすべきかにつき、學者に議論がある。曰く性慾の秘密は反て青年に牽引を起すが故に早く其機能を猶行により知らしむべし。之れ性的興味に知的方向を與へ得るからであると。或は動物によるべしと云ひ。或は人體骨骼によれば情を伴はずして、智識のみ與ふる事を得ると。又コン氏の如きは其方法は書物を可としてオーカー、ブロム氏の一田舍の叔父（ベイム、オンケル、ドクトル、テウアフエム、ランデ）醫者」の如きをなすゝめて居る。然し予は機能の說明につき、苦心して、新奇の方法を案出するの無効なるを信ずるものである。中學、女學校にて課する博物科以上に何等說明するの要がない。機能說明の深入は却新興味を挑發するのみである。又かゝる特種の方法、珍奇なる方案により此人性根本的の罪惡が容易に治せらるべきものでない。

又、團體的になすが如きは、之れ又弊害多くして効果の少きものである。同年齡と雖個人差（インディビデュエル、ディフエレンツ）の最甚たしき性慾に關し、年齡の差ある數百の生徒を漫然集めて說明するは、各生徒に對し其好機に合せざるのみならず、羞恥心を害ふ患がある。故に本問題は個人的敎訓によるべきである。

時期。之れ又最大切なる事項にして、青年が其惡習に正に陷らんとするに先ち、之をなすを最適當なりとす。未だ、何等の考を有せざるものに對しては無意義たるのみならず、反て挑發する怖がある。又、已に其惡習に陷りしものに對しては、特異の訓戒を與ふべきものにて、一片の講話は、殊に、其場限りの小言に終るものである。殊に、女性初經の衞生につき、徒らに早く之を敎ゆるは、反て來潮を早め、或は其來らざるを患ひ、爲めに、不測の禍を釀すことがある。又已に初經が無智の間に來りて、其手當、方法を誤り、心身を害ひし後に之をなすも、已に遲しである。故に通常の時期迄、月經の來るを待たしめ、然して之が敎訓を誤らざる樣、其機を見るは最必要である。男性に於ても、又之に似たる時期がある。かの只の夢精の如きは、夫自身何等の害なく、通常の健康狀態なるに拘らず、無知の爲め、非常の恐怖を生じ、沮喪、絕望、想像的疾病、自殺等を誘ふが如きことがある。更に又いかなる機嫁の時を擇ふべきか、之れ又必要にして、時に、同一敎訓も何等の効果を奏せざることがある。

人。校醫は機能の說明者としては冷靜にて適當なれども、已に述べしが如く詳細なる說明の必要なければ醫師たるを要しない。殊に、醫師には人を器械視するより來る弊がある。且常に接觸し居らざる故、最必要なる機を見る能はざる不都合がある。敎師には醫師の弊なしと雖、普通の敎師にては說明の効果を全うする能はざるのみならず、自己の人格を害ふ患がある。然しよく生徒と接觸し、知悉する上に於て利あるが故に、人格高き敎師に不都合はない。兩親は子女の心身狀態を知悉する上に最もよけれ共、之が說明の資格あるものは甚だ少ない。且子女も父母より

聞くことを好まぬものである。最良きは宗教的信念ありて、然も常識と技巧ある人格が宗教的、性慾的、文學的に見識にして、然も精選せる語を以て、簡單明瞭、巧妙温和に、機を見て說くを最もよしとする。女性に對しては特に適當なる注意の綿密になす要あれば、その知己、親戚にして、經驗ある年長母性の口よりするをよしとする。されば此問題は、單に、學校內の問題にあらずして父母及び先覺者が皆此點に注意し、學校と協力すべきであると思ふ。

○ 第三高等女學校長　小林　鎰

拜讀陳は御申越相成候「中學程度の男女學生に性慾に關する智識を與ふることの可否」に就ては深く講究致したるとも無之候へども利益よりも弊害の方多かるべしとの豫想と實際適切なる教授をなし難かるべしとの見地より小生は右智識を時に授くるの必要を認め不申殊に女學生に對しては授けざるを可なりと信じ申し候　拜復

○ 加治木中學校長　相良三之助

人の生涯より見て中學時代は發育の盛なると共に性慾も其萌芽を發し逐日勢を加へ一たび其制御を過つときは所謂盲目的勢力を加へ來りて遂に其身を過つに至るされば此問題は常に家庭及び教育者を困厄せしむるものにして之れが解決をなすには中學時代が一生中如何なる時期にあるか性慾强大となる順序制慾の理法を研め尚は地方の風俗をも考慮せざるべからず

壯年以後は生活力は諸器官の消耗を補充すれば足るのみ更に新勢力を經營するの要なく人の父として勢力を頒つに足るといへども中學時代は生理上身體諸器官尚は未だ堅固ならず之れを完實するに尚ほ幾多の勢力を要する上に人の父たる職分を果すの餘裕あらんや又之れを精神發達上より見るも大切なる修養の時期にして複雜なる學問の基礎は此時期を措いて他に修むべからず凡そ學藝以外のものは壯年にして尚ほ學ぶべしされば中學時代には專ら學業に注意し其外には心を向はしむべからず

然れども此間性慾は自然に發生す故に適當なる教育をなすことを止むを得ざるが如しと雖も異性相愛の情は漠然として未だ個人關係の生せざる間は之れを抑ふるに困難ならず多くは恐怖羞恥の間に過ごすを得然るに一度び個人關係相生ずるに至れば其慾は益々盛となり相戀の情烈しく復た忘るべからず其情を満すことを妨げらるゝに至りて煩悶となり或は又た他の相手を求むるに腐心するに至る彼の同性相愛し又は自己充慾の如き不自然にして身心を害ふこと更に大なるものは全く其弊にして之を以て異性間の慾を防ぎ又は和ぐるものとなすは大なる謬なり

凡そ慾望は之を充すに從ひ益々强大となり之を抑ふること困難となる其不自然なる狀態に於て殊に然り已に發したるものは出來得る限り其慾を昂進せしむるを避け意志を以て抑制し得る狀態に止らしむべく勉めて之を不自然に早生せしめ又は其昂進を促す機會を與ふべからず此見知を以て非禮を見聞せしめず專ら消極的監督を嚴にし酒を禁じ輕き食物を與へ適當の運動をなさしめ以て慾を充す機會を與へざるを主張す

當地は古來尚武の餘風として武士の子孫は尚ほ女子を輕んじ青春の男

女は互に言葉を交ふるすら擯斥せらるゝの風あり中學生にして花柳病に罹るもの又は情死等絶へてあることなし之に向つて性慾上の知識を與へんとするは徒に其好奇心を動かし性慾を充たすの動機を與へ却て之を激烈ならしむるの恐あり若し智識を與ふべくんば已に異性を知り又は異性相交はることの自由なる處に於てすべきものなりと信ず

○　佐賀中學校長　岩田靜夫

拜啓御申越し「中學程度の男女學生に性慾に關する智識を與ふるの可否」に關しては小生は否を唱へ度候匆々

○　岐阜縣立大垣高等女學校長　關藤十郎

折角緊要なる事實問題に關し御尋ねに與り職掌柄鄙見開陳是正を請わんと存居候へ共恰も御書簡接手の頃より病魔に襲われ今に全癒に至らず乍殘念纏りたる意見を綴り貴需に應し難く然りとて折角封筒迄添へての御清囑せめて御厚情に丈けも酬ひ申されば相すまざる事と存左に要點のみ略述致候に付宜敷御取捨被下度候

中等程度の男女學生に性慾に關する智識を與ふるの可否如何と云ふ事は現下青年男女に對し好個痛切なる問題にして吾人は實際に於て往々之が解決の必要に迫らるゝ事あり從て相當の意見をも持し研究をも爲せる事なるが其本來の希望としては一切の性慾的智識を與へざるは勿論自然の發達に伴ふ情慾の發露をも封鎖抑壓し所謂神秘主義に出る事の安全なるべきを思ふものなれ共如何せん發情期の青年が情火裏に燃ゆる事盛なるに加へて一般鳥獸虫魚の下等動物より雞犬牛馬等家畜の類に至り進みては吾人社會の人情風俗職業談話等世間四圍の事狀は陰陽公私各種の場合に於て極めて露骨に極めて不健全に其事實を青年に提供し其見聞に任すものありて到底青年の視聽を防止禁遏し神秘主義を執る事の不可能なるを思ひ實際の意見としては寧ろ如上の如き不健全なる知識の收得に任せ危險の地に放置せんよりは進みて健全なる智識を與へ安全の法を講ずるが指導者の責務にして青年に親切なる所以なるを思へり然れ共吾人の意見は一般の青年に一樣の智識を普遍的に授くべしとには非ず各個人に就き秘密的に訓戒的に解說せんとするにて畢竟は醫師が病人を診察して之に投藥するが如く發情期の青年に對し日常の個性觀察に力を用ゐ言語動作身體精神の模樣等機微の間に觀察し其未だ病を爲さゞるに先ち必要に應し適切なる智識を授け指導救濟邪路に陷らざらしむるに止めんとするものなり

○　水戸中學校長事務取扱　菊池謙二郎

▲折角の御尋ねであるが是は問題にならぬと思ふ。性慾に關する智識を與へたとて性慾に關する風儀が改まるものではない。智識と實行とは必ずしも伴ふものではない。論より證據、學生中で最も性慾に關する智識を有して居るのは醫學書生であらう。所で此の醫學書生が最も女色を漁ることに堪能で是は隠れもない事實である。梅毒や痳疾の害毒は百も承知で不品行を働いて居るのではないか。智識と實行とが伴ふものならばソンナ事實は無い筈である。又言ふまでもなく論理學者は必ずしも徳行家、教育學者は必ずしも教育家、政治學者は必ずしも政治家ではないの

である。であるから御提出の事は土臺問題にならぬ。問題にするには先決問題がある、即ち性慾に關する智識を男女學生に與ふれば性慾に關する風儀が改まるかどうかといふことを先以て定めねばならぬのである。

▲それから一層怪訝に堪えぬのはこの問題が中學程度の男女學生に限つたことである。中學程度の男女學生の風儀が一般に良くないからといふなればそれは事實に相違して居る。今日學生間で風儀の惡いのは中學以上の學生である。中學程度の學生中にも不品行者はないではないがそれは極めて少數であつて心配するほどのことはない。又中學程度の學生は春情發生の初期で大切な時代であるから性慾に關する智識を授けたいといふなれば一應尤であるけれども、この道にかけて甚だウブな少年にそんな智識を與へるのは却て外道に誘致する恐がある、畢竟良くない智識を與へるやうなもので問題提出の本旨に背戾するものと思ふ。否々中學程度の學生は手淫を覺え始むる時代で手淫は最も身心を害するものであるから主として之に關する智識を授けたいとの事であるといはるゝか。成程手淫を盛んに行へば害がある。盛んに行つて甚しく心身を害するやうな奴は其儘にして置くがよい。そんな奴は土臺愚かなものであるから何を爲しても駄目である。優勝劣敗致し方がない。手淫は輕微に行つても害があるから行らせ度ないといふなればそれは無理である。大きな聲では言へないが今日立派な顏をして居る先生達でもお互でも青年時代にはよい加減に手淫を行つたではないか。一切手淫を行らないといふやうな意志の強固なものは禪坊主の中にもあるまい。それに今更白々しく若い者に手淫は一切行つてはならぬなどゝ言はれるものか。

▲男女の風儀が若し憂ふべきものがあるとすればそれには大なる原因がある。兎角大なる原因を等閑に附して些細なことに躁躪するのが教育界の弊である。

○ 島根縣杵築中學校長　加藤常七郎

男女學生に性慾に關する智識を與ふるを可とするは勿論なれども其方法宜しきを得ざるときは却つて意外の結果を來すべし。局に當る者の深き注意を要す。抑も讀書又は談話等により新奇なることを見聞するときは其善惡如何に關せず自身に之を實行して見たき好奇心の生ずるは人情の常にして特に青年に在りては免れ難きものなり故に何事も知らざる清淨潔白なる青年男女の生徒に向ひて性慾に關することを具體的に且つ詳細に語るは危險の至りなり、然れども發情期に至れば父母の注意十分に行屆きて圖書を制限し朋友を精選し如何に之を抑へんとするも淫慾の方法は自得するに至るものなれば惡習に染まざる以前豫め中學校高等女學校に於て一二年級生徒に梅毒の甚だ恐るべき疾病なることを實物の標本、模型、幻燈、繪畫、講話等により知らしめ且性慾の不自然的なる遂行(手淫)の恐るべき害毒を及ぼすこと並に此害毒は後日に至り如何に悔ゆとも恢復の途なきこと等を世間の實例によりて警戒を與ふるの必要あり、然れども性慾の説明及び青年間に行はるゝ惡習等の具體的且つ詳細に是等無垢の生徒に示すことは避くべきなり、手淫と云ふ言葉も是等の

前には發せざる樣致したきものなり、(因に云ふ女學生に對しては月經の大略及之に對する心得方を女教員より示すこととしたし)。然れども三年級以上の生徒及び一二年生徒中にても十七年以上のもの又は既に手淫の惡習に染り或は男女の肉體的關係ありたるものに對しては憚る所なく未婚者の性慾に起因する害毒を具體的に詳細に說き示し尙惡癖に染み不品行に陷りたるものは之を救濟し又之に對して自ら奮て其の惡習を除去し品行を正し得べき方法をも授くることを要す

答　○　豐橋市立高等女學校長　本間小左衛門

貴社の提出せらるゝ問題に關聯する二三の事項を擧ぐれば

一、中等程度學生の心意狀態、此等生徒の心意を見るに志操未だ確立せずして容易く外部の影響に感動し、其の左右を作らせらるゝこと最も多き時代なるが故に、之が指導監督には最も深き注意を要す、一方身體の發育盛なるが故に精神上には缺陷を生じ、些々のことより往々迷路に外れるもの多きを見る、鞏固なる意志の修練は此の時期に切要にして、外部の影響に深大の注意を拂はざる可からず、

二、外部の社會、舊來の風習既に廢れて、新しき習慣未だ確立せず、又社會の環視嚴密ならず、男女間の作法禮儀嚴正ならざる現時に於ては放任なる靑年男女の交際は甚しく危險なり、其の他健全ならざる文學上の作物及び演劇は志操確立せざる子女を惰弱に導くこと屢々あり、故に少年男女に劇場に出入すること、小說を耽讀することは最も戒む可きことなり、

三、高尙なる趣味の養成、意志修練の第一着として靑年の心意を下賤なる方向にむかしむる餘裕なき迄に學問上の趣味音樂繪畫又は園藝等高尙な方向に轉じ、之を研究して之れ日も足らざる樣仕向くることは子女教育上至極大切なる事と信ず、

○　鳥取縣立鳥取高等女學校長　矢野利喜藏

本題の可否は其の智識を與ふるの方法と其の智識の深淺とによる者と思ふ機に觸れて其の愼むべき所以を簡單に注意する如きは固より必要の事なるべし然れども其の爲めに一場の講話を爲して其利害等を詳說するが如きは其の利益が其の害を償ふに足らず槪して利害を聞きたるのみにて謹愼の人となるか如きは常人には望むべからず

意志強固にして謹愼なる品性の養成は根本の必要事なりとす而して斯の如き人を養成するの道は他の方法と教師の人格とに賴るべし之を要するに智識に訴へてのみ善行を奬めんとするは不可能の事なりとす

○　新潟縣立村上中學校長　安田英吉

(1.)今玆には中學校生徒を對象とし極めて簡單に卑見を述ぶることゝすべし

(2.)氣候風俗習慣等に鑑み年齡に應じ性慾に關する智識を述ぶるを可とす

(3.)學年なる團體としては大抵三學年(年齡十五六年)の終り頃より四學年の終りまでの間に博物科中生理衞生の事を教授する際に之を講じは特に之を敎ふべし

一般に早なる團體としては三學年の終り頃以下二學年一學年には寧ろ之を教へざるを可とす勿論性慾發動の狀態特に之を教ふるの必要あるものは此の限りにあらず

凡そ一學年より五學年に至る生徒中特に個人として之を教ふるの必要あるときは教師は只其の個人に對してのみ穩密に之を教ふるを可とす

(4.)之を教ふる教師は學德共に高く殊に品行端正にして妻子を有し可成は年齡四十年以上のものを可とす

(5.)之を教ふるに當り教師は飽くまで嚴肅の態度を持し苟も野卑淫猥に流れざる樣十分に戒愼を加へ如何にも眞面目にして其親切ならむことを要す

(6.)之を教ふる教師は親ら愼重に選擇を加へ有益にして卑猥に涉らざる書籍を指定し三學年の終り頃より以上の生徒に熟讀せしむべし

(7.)修身科に於ても三學年の終り頃より五學年までの間に於て機に臨み變に應じ性慾に關することを教ふべし

勿論修身科に於て教ふるときの教師の態度も嚴に博物科に於て教ふるときの教師の態度を失はざるを要す

(8.)凡そ性慾に關する事を教師最も好く之に適し父兄の如きは寧ろ却りて之に適せずと思ふ尤父兄といへども好機會あるときは之を逸すること無く嚴肅に教訓を與ふるは惡しからず

(9.)間接には諸學科就中修身科並に體操科の教授を一層有効ならしむることに努め愈々道念を深厚ならしめ且身體を剛壯ならしめむことを要す

○　宇都宮高等女學校長　伊藤裕

御尋の「中學程度男女學生に性慾に關する智識を與ふる可否」に就ては遺憾ながら今愚見の詳細を申上ぐるの餘裕を有せずと雖も余は適當なる方法を以てするときは或る程度まで之に關する智識を與へ一警告し自ら抑制するの要を感ぜしむるを可とする者なり男子の學生に對しては教育學教授の際相當之に論及して警告を與へたる事も少なからず方法其宜を得ば決して忌むべき一種の感を誘發する虞なきのみならず學生も頗る眞面目に傾聽し自ら警備するの徴あるを認む只其方法と程度と及之が教授に當る其人とに就きては十分研究すべきものと信ず之が十分なる研究もなく輕々に實施するが如きは深く愼むべき事なるべしと存ずるなり詳細は他日機を得て又開陳する事あるべし

○　天王寺師範學校長　村田宇一郎

提出せられたる問題より其範圍が少しく廣くなるかも知れぬが「青年の性慾に關する教授上の注意」として御答することにしやう

性慾は人類の生存上極めて大切なる本能であるがこれが不自然なる滿足と亂行とは人類の健全なる發達を妨げ甚だしきに至つては社會に悲慘なる害毒を流すものである

だから何人といへども之れに對して最も健全なる思想感情を有すると同時に不自然なる且つ不德なるこの種の慾望の滿足を愼まねばならぬが

殊に青年活氣の時代に於て最も注意を要することである

左に青年教育上この種の注意に關する卑見の一二を述べて見よう

第一は間接の方法である不自然なる性慾滿足の豫防法であるが直接には之れを口にせずして施す方法である

1. 常に興味ある精神的の仕事を持たしむること

科學や技術の研究に熱中して居るものはかゝる弊に陷らぬものである

2. 健全なる運動に趣味を有せしむること

(1)の興味と相待つことを要す

3. 就寢前には明日の仕事を豫定し多少の運動をなし疲れて直ちに眠りに就くの習慣を作るべし

4. 毎朝眼を開けば直ちに床を離るゝ習慣を養ふべし

5. 食物は過度の美食殊に肉食の過度に失せざる樣にすべし

6. 衣服及び寢具の構造に注意すること

7. 不健全なる讀物艶な物に接せしめぬこと

等である

第二は直接の方法である即ち人類の性慾に關する健全なる知識を「ある程度」まで授くるといふことである從來は教育上に於て之れを說示することを避けた傾があつたが全くこの問題を說き聞かさぬことはよくないとおもふしかし其程度、場合、方法等につきては頗る困難であるが大體左の如き程度までは說示することが適當であると思ふ

1. 一般生徒に對し共通的に說示することゝしては

○生理衞生の教授と連關し不自然不德なる性慾滿足の結果個人の心身及人類全體に及ぼす害毒を知らしむること

○修身教育などと連關し青年期に勃發するこれ等の情に同情すると同時に青年をしてこの一時的感情の滿足と耽溺が人生永遠の幸福を犧牲にすることを說き各自ら自我永遠の目的たる理想を喚發しこの優良なる精神を以て劣情を制禦する勇氣を鼓吹すること

2. 其他個立入りての事實說示と其教訓は個人的に實行し男子にありては其父より女子にありては其母よりするを最も適當と思ふ若し教師よりするとせば個人的懇話の際適當なる機會を捉へて親切に注意するがよい

以上一般的に何れにするにしてもこれが任に當る教師父母たるものは最も高雅純潔なる心情を有し嚴正に且つ親切に說示し苟も野卑露骨に失してはならぬ若し說く人にして純潔なる感情を欠くときは却て惡傾向を挑發せぬとも限らぬ愼まねばならぬ

○

岡山縣津山高等女學校長　堀尾金八郎

拜啓今度「中學程度の男女學生に性慾に關する知識を與ふるの可否」と題し卑見御求め相成候處拙者は從來此の種の問題に關し科學的研究を致したること無之從て何等御回答も致兼候只傳來的の感情により中等の學校少くとも女學校に於ては此の問題に觸接する必要無之と存じ居候間より一片の感情に過ぎざれば之を說明する根據を有する者にあらず貴誌

に所謂青年の花柳病患者年毎に增加し一國壯丁の體格頗る不良に赴くとのことが果して事實に候はゞ國家之爲人道の爲殊に憂慮すべきことに候得共獨り學校に向て其の解決を求むべきにあらず思ふに西洋諸國とは國風民俗を異にする我國に於ては彼に必要なりとて直に採て用ふべき理由は無之候實に性慾に關する問題の如きは大なる社會問題にして文部省よりも内務省に屬すべく從て本題の適當なる解釋は之を狹き教育界に求めず廣き社會問題となし社會各般の方面より風紀の振肅を圖る方有效にして且捷路と存じ候　敬具

○ 福島縣立會津高等女學校長　長谷川一典

中等程度の女學生には性慾に關する智識を授くるの必要を認めず服飾に眩し學術に誇り名聞に迷ひ利慾に誘はれて一生を誤る者あるは皆虛榮心の致す所なれば深く之を戒むべきことを銘せしむべし

○ 群馬縣女子師範學校長　岩谷英太郎

此問題につきては余は性慾に關する智識を與ふるを可とするものなれども其の方法に關しては愼重なる考究を要すべきものと思ふ

性慾に關する智識を與ふべき理由

我國は維新以前社會の制裁嚴重に四民の階級整然として生活亦安易なるが故に結婚容易に行はれ青年男女は父母親族の盡力によりて男子は約二十二三歳女子は約十七八歳にて配偶を得たるものなれば風義上及衛生上より性慾に關する智識を與ふべき必要少なかりき然るに今日は生活の困難より男子の結婚期は殆ど三十歳に達し女子亦二十五歳に近く獨身生活を行ふもの亦漸次增加せんとするが故に其間に性慾の衝動に堪へず社會風紀の弛緩に乘じて或は男女の風俗を亂し或は花柳病に罹り或は神經衰弱を患ひ或は同性の獸慾を起すに至る然るに青年に於ける性慾教育全く缺乏し中等學校に於て毫も其智識を與へざるは恐らくは方法の困難によるならん世人動もすれば性慾を不潔として之を排斥し又は之を語るときは劣情を挑發するものとして噤口すれども是れ實際に迂濶にして且子女に對する不親切なりと謂ふべし余は時勢の要求に基き相當の方法によりて性慾に關する智識を中等學校生徒に與ふる必要を認む

性慾に關する智識を與ふる方法

一、社會教育上

(1)父母兄姉は機會あらば其子女弟妹に對して誠實親切なる教訓を與へ交友を選び起居動作に注意して性慾節制の法を講ずること

(2)醫師學者は其專門とする性慾に關する著述を公にし之を一般青年に閲覽せしめて反省を促すこと

(3)記者は新聞雜誌に於て衛生上の問題を鼓吹し殊に性慾濫用の弊害は一身より子孫に及ぼすことを眞面目に唱道すること

(4)小說家は性慾節制の教訓的動機に本づきて清新壯快なる讀物を供し亂倫の害毒疾病の危險等を青年男女に知らしむること

(5)社會の有力者は務めて尙武の氣象及清潔なる娛樂を獎勵し社會の風紀を取締ること

二、學校教育(中等學校)

(1)教室にありては學校長は修身科に於て節欲堅忍の教訓を與ふべく學校醫は生理科に於て性慾に關する衛生法を講ずべし寄宿舍にありては男子舍監は男生に對し女子舍監は女生に對し恰も父母同樣の親切を以て實際問題として適切なる教訓を與へ殊に飲食衣服起居動作につきては相應の規律を立て性慾鎭制の方法を講ずるを要す

(2)現今中等學校敎員の多數は性慾に關する智識に缺乏するが如し故に先決問題として中等學校敎員に對して性慾に關する智識を與ふるを要す其他學校に於て生徒間の制裁を重んじ且運動競技を正當に奬勵し質朴剛健なる氣象を養ふべし若し夫れ實際の教授管理は男女によりて之を斟酌し特に女子にありては貞淑の德を養ふに注意すべきものとす

男女學生の性慾問題に對する**醫學大家十數氏の說**は頁數增加の爲め、**二月號の誌上**にて發表することゝせり。此旨寄稿家並びに讀者に謝す。

噫其日

（池邊三山氏退社當日の光景）

蛯原紅郎

全く何人も意外とする所であつた。一人や二人の者が傳ふ思つたのではない。年は變つたが過ぐる九月三十日、三山池邊吉太郎先生が東京朝日新聞社を去つたその日。

暖い日ではあるが晴れた日ではなかつた。編輯室の硝子窓から射し入る日影は茫乎と沈んでゐた。澁川玄耳氏、山本笑月氏と向合ひに予は根本吐芳の隣の机に寄つて編輯の手傳をしてゐた。後ろの方の机に誰やらが三四人腰を据ゑてゐたやうだつたが何時もの賑さに似ず、社會部は朝から寂しい日であつた。その上吐芳氏は用事があつて午後に遲れて來るとか、自分と向合つて澁川氏と山本氏との眞中にゐる樋口銅牛氏も未だ見えない。正午には疾うに廻つた頃お定りの近所の辨當に腹をこしらへ、冗談もせずに忙しくコツ〳〵と仕事を片附けてゐると、澁川氏の姿はちよい〳〵見えなくなる。多分社の倶樂部へでも行つてるものと思つてゐた。

❀

左右してゐる中「君材料は間に合ひそうかネ」と澁川氏は自分の机の所に立つて、壁にかかつてゐる時計を見上げながら予に向つて訊く。二時半に近く、三時の初版締切に間がないので予は「大丈夫です、今松崎君の原稿が出る筈ですから」と答へ澁川氏の方を見ると、椅子をすり寄せて山本氏と頭を突つけ、原稿紙に何か書いて見せながら小聲に話してゐる。山本氏はフムと頷いたが只ならぬ容子を示してゐた。澁川氏は直ぐその原稿紙を丸めて抛つて了つた。山本氏はペンを執つて書かけの原稿紙に臨んだが頻りに外の事を考てゐるらしく見えた。何事だらうと思つたが予は氣にも留めず、原稿の少い無事な日だなと思ひながら卷煙草を啣へて天井を眺めてゐたが、松崎君の原稿が未だ出ないので氣掛りになつて容子を見に出かけた。松崎君は編輯室外の一室に閉籠つて頭を抑へながら焦つて書いてゐた。時間がないが出來るかいと聞くと、今直ぐだと云つて見向きもしない。君は彼の時ベーとホールの記事だつたか、發カラ傳だつたかを書いてゐた。

再び編輯室の扉を入つて自分の處へ來る間に見渡すと、政治の外勤部の机には四五人の者がゐた。その中に部長の弓削田精一氏は見えなかつたやうに思ふ。別室になつてゐる電話部からは……に據れば伊國艦隊は既にトリポリ市の沿岸に……と云ふやうな送話の聲が喧しく聞える自分等と斜かへになつてゐる政治部の編輯の机には、編輯長の佐藤眞一氏が通信を擇り分け〳〵屑籠に投げ入れてゐた。其處に續いた地方版編輯の池田氏の次の一卓、室の一番奥の所が池邊さんの場所である。池邊さんと予は以前には云はなかつた、池邊先生と呼び慣れてゐた。然かし社へ入つて見ると誰も池邊先生とは呼ばずに皆池邊さんと云つてゐる。一體先生などゝ云はれる程平俗な人柄ぢやないのかと思ふ。兎も角も予等の

如き背後では、さん〳〵云ふよりは先生と呼んだ方が何んだか敬意を失はぬやうに思はれるが、姑く皆の云ふやうに池邊さんと呼ぶ。その時池邊さんの姿は見えなかつた。偶に遲く見えることもあるが、大概十一時頃にはその場所に滿室を壓するやうな躰軀をそつと椅子に掛け、默つて室内を見てゐるのである。

予は机に寄つて木版や、寫眞のゲラや、原稿の順序表などを取揃へてゐた。その間松崎君の原稿を催促して來てから未だ十分とも經たない。急に室内がザワ〳〵するので眼を移すと、既うその間に五ツ紋の羽織に袴の村山社長と背廣服の池邊さんが見えて、池邊さんは何時もの場所より少し階の方へ寄つて腰を掛け、村山社長は室の中央に寄つた椅子に掛けてゐた、と見ると社長はすツと立つて『一寸皆さんにお話申上げて置きたいことがあります』と云つて立つたまま室内を見てゐる。社長の聲の下に誰も起立した。電話部や校正部や外勤部の人々はゾロ〳〵出かけて來て輪を描いて立つてゐる。池邊さんも起立してゐたかと思ふ。松崎君は營業部長の上野さんから呼びに行かれて、あたふたと原稿を手にして入つて來た。倶樂部にゐた連中も慌ててやつて來た。略ぼ人が揃つたと見た時社長は再び『皆さん』と云ひ出した。予は何かの報告位に思つてゐた。驚いた、社長のさびのある併し透る聲が一層耳に泌みて、

『かかる事を皆さんに申上ぐるのは如何にも悲しく存ずる所でありますが、永らく主筆として力を盡された……』あゝ何事を云ふのであらう。社長は言葉をついで、

『池邊吉太郎氏は此頃身體が惡いといふので切に靜養を希望される、で、お氣の儘十分靜養を願ふた處、同君の平生の氣性として社に關係ある間は到底仕事を顧みぬ譯には參らぬと申されるので、強ひて客員といふ事だけ御承諾を願ひました、何に致しても功勞の非常に多い同君の事であるから今迄通り御優遇致すとは申す迄もありません、同君に對しては十分御靜養を願ひ、皆さんには益御奮勵を願ひます』と社長の言はこれで終つた。寐耳に水の多數の社員は唖氣にでも觸れたやうに吃驚して、暫し寂寞したとも云へやう。

沈默の次の瞬間を破つて池邊さんは立つた。

『私からも一寸』と云つて後の言葉を發する前に見ると、池邊さんは鐵緣の眼鏡をかけてゐた。そして兩の手をヅボンのかくしに入れて、少し下を向いた形で、

『多年諸君の御助力を得、大過なく務め得たことに就きて厚く御禮を申します、未だ一日と雖も自分の意に叶はぬやうな新聞の出來たことのないのは、殊に私の滿足に堪へぬ所であります云々』と極めて簡明な挨拶があつた。

これより愈沈默の絶頂に入つた。社員は各自分等の場所に腰を据ゑたまま、誰も何の話もせぬ。外へ出て行く者もある。予は思つた。池邊さんが病氣といへば、平生聞いてゐる心臟病なのだらうか、否な〳〵池邊さんはこの節其樣病氣の風も見えないぢやないか、思へばこの頃社長が上京したり、再三幹部の會議があつたりした。その結果こう云ふ事にな

つたのであろうかと、思つて向合の澁川氏を見ると默つて机に向いたまゝてゐる。山本氏は何か書いてゐた。聞ゆる者は遙に隔つた電話部の聲ばかりである。

社長は直ぐ前の机にゐる地方版の池田氏を捉へて伊土戰爭が何うとかかうとか話してゐるやうだつたが、間もなく去つて了つた。

池邊さんは椅子を何時もの場所に進めて夫に靠つて殆んど習慣のやうに片足を膝の上に輕くのせてゐた。そして卷煙草を右指に挿んで稍上向になつて燻らしてゐる。何んにも考へて居らぬのか、又何か深く考へてゐるのか、ただそうして居られる。

工場へ行つて初版を組んで歸つて來ても未だ池邊さんはそうして居られる。澁川氏は後手にして室内を行つたり來たりしてゐたが、間もなく見えなくなつた。松山哲堂氏、杉村楚人冠氏、何れも先刻社長の話のあつた時見えなかつたと思ふ。室内は氣味の惡い程沈靜である。――池邊さんは朝日の池邊さんではない、日本の新聞界の池邊さんである、今池邊さんが朝日新聞を去られる、日本の新聞界を去られるのも同じである、池邊さんは記事に六ケ敷い文字を使つてはいかぬと何時も云はれる、又三行五行の記事でも少し穩當を欠いてゐる時には親切に注意をして與れる、池邊さんの眼光は輝いて怖ろしい、併し言語は極めて柔しい、すべてに對して鄭寧である、態度と云つたら最も鷹揚である、そして時々奇警な言葉を發して人を笑はせる事がある、大體からいへば默つて居られる方である、原稿は立派な字で速く書かれる、首めから終ひまで消した事がない、自宅では簡素な生活をして居られる、夜間は大抵面會を斷つて讀書される、室内には大きな書幅と刀劍を置かれる丈で、他の裝飾は何もしてない、正月などは質素な素燒の盃で客に酒を侑める、木綿の紋附の着物に袴を穿いて居られる――予は留め度もなくある限り池邊さんについて思ひ浮べたそして染み〲と懷しく悲しく淋しくなつた。

ふと氣がついて見ると、池邊さんは未だ先刻のやうにして默つて居られる。

池邊さんがあゝして煙草を燻らしてゐる間、小一時間にもなつたであらうと思ふ時、靜に立つて工場の方の降り口に向つて行かれる。その時山本氏は机を離れて池邊さんに何か話してゐた。池邊さんの聲で『否や矢張り遊びに來る、英語會へは必ず出席する』といふやうな事が聞えた。社中の英語會では池邊さんは熱心な生徒である。若い女先生のルースさんを先生として研究されてゐるのだから面白い。池邊さんは悠乎して室を出て行つた。その後影を見戍つた者は、あゝ予の外にも――恐らく室内の誰人も見戍つたてあつたろう。十年も十五年も机を並べた者のその時の感想は、迚も予が今茲に書いた位のものではあるまい。

新刊批評

▲英雄論
福本日南著　東亞堂發行

種々の方面より英雄を解剖し、批判し、論述したるものにして、神人時代より現代に至るまでの英雄を捉へ來て、或は其籠罩術を述べ、風丰を敍し、本領を論じ、特能を記し、特質を說き、襟度を仰ぎ、性癖を詳かにし、而して英雄の必須にして、現代の青年宜しく英雄に學ぶ所なかるべからざるを唱導せり。文章明快にして勁勁、覺えず快哉を叫ばしむ。著者自ら敍して曰く「昔は楚人揚言して曰く、楚國は以て寶とすること無し。惟善以て寶と爲すと。善とは何ぞや、拿破崙謂ふ所の公善是なり。而して公善の指導は英雄に待つ。今や海內に英雄なし。稱々とを懷へば、應に覺含、閭巷山林、藪澤の間に伏すべし。我一歎して之をして其人起さんと欲し、茲に英雄論を作る」と以て著者の抱負を見るべし。又以て此書の內容をトすべし。(定價一圓)

▲獨逸帝國
井上正毅著　博文館發行

現代に異彩高き君主カイゼル、國民性の趨向急遽南方文明の香氣中に下らんとする獨逸帝國は、凡ての意味に於て、世界の、就中東洋の新興國民にとりて、深き興味と多くの利益とを與ふる好箇の對照なるべし。彼は佛米二國とその發展趣を等しうして、而もその差違の最も顯著なる點を、此等三國の文明の楷梯に發見する吾人にとりては、獨逸帝國の新研究に致さるゝ努力の永く止まること無からんを望み、更に大聲して本書の推薦を江湖になさんとする者也。(金二圓二十錢)

▲個性教育の研究
竹下和治著　敬文館藏版

個性教育の必要は已に我國育英界に自覺せられたる問題なるが、之が實行に關しては、現在せる方法乃至事實に見て少からざる不充實を感ぜざる能はず。低能、諸質及び天才を通して行はるべき學校に於る個性教育の研究は此書に於て未だ簡疏なるを免かれずと雖、著者が兒童に對する熱愛は此一卷に溢るゝに似たり。(金八十錢)

▲流れ
小澤久雄著　劇と詩社發行

「流れ」「行李」「醫師の子」三篇を收めたり。兎角、達者なる作を持てる人又は筆のみ走る時代の作物には、內容の人を動かすもの尠きが如し。寢て讀まるゝには面白きに相違なし。(金七十錢)

▲金儲けの瓜哇
伊藤直矢著　實業之世界社發行

著者瓜哇にありてその風土文物制度交易に親しめる事六年、歸來此書を梓して最もくだけたる南洋の金儲け話をなす。此書尚南洋の熱氣と椰子樹の薫香を放つが如き、例の景氣のいゝ書物なり。(金五十錢)

▲商法通義
我孫子勝　矢部克己　共著　寶文館發行

總則、會社、商行爲、手形、海商、の五大綱目の下に、商法の意義と實用を明かにし、且商法改正の理由を知らしめんとす。九百頁の大册、之に改正法律附則及索引を附したり。(金三圓五十錢)

▲巨帥
井田白蕉著　以文館發行

武漢の革命黨が事を擧ぐるまでの情史ともいふべきもの、探偵物めきたる處面白し。（金三十五錢）

▲花中の華　井田麟鹿編　以文館發行

「壯烈篇」「獻身篇」の二篇に分れ、凡て日露戰爭當時華々しく戰死せしもの〻逸話小話を集めたるものなり。（金六十五錢）

▲三ぼう主義　宮川すみ子著　寶文館發行

女房、説法、鐵砲、即ち家庭宗教兵備三力養成の主義なり。説くところ概ね日英兩國に於ける比較にして、文章も確實にて明暢なり。家庭乃至婦女子の讀物としては、快活な靈氣と精神を與ふるに好適の書なり。（金八十錢）

▲我が一生　敬文館發行

新形の家庭日記なり。紙數が少し足らぬやうなれど、考へも面白くよく整頓して新らしき思ひ付きも少からず。（金一圓）

▲歐洲畫行脚　三宅克己著　畫報社發行

著者が歐洲寫生旅行より齎らせる努力の結晶の多大なるは世の先づ感嘆せる處なりき。吾樂樓上に列ねられたる大小の作品は主として著者が技巧上の新生を語れるものなりき。本書收むる處の繪畫之を語り、少年の如き心に映れる南北歐の風物を盛れる一卷の行脚日記はよく著者をして今日の傾向あらしめたる氣質を語る。繪に於ける寫生旅行にして又よき追憶の寫生日記なり。裝幀は布クロース、鮮美なる挿畫百三十、三百五十頁の美しき本なり。（金三圓）

▲傳説の江戸　柴田流星著　聚精堂發行

著者と意氣と美の生活及藝術、これ等のもの〻なかに劇的江戸の記録は殘れり。四十有餘篇の小品は凡て著者が感嘆と傳説との交錯するものと見るべし。唯その著者が感嘆の聲を發するの態度にま〻不充實の個所あるを惜む。美しき書物なり。（金八十錢）

▲豐臣秀吉　緑園生著　東亞堂發行

藤吉郎の卷にして、日吉丸の卷よりは必ず續きて讀まるべきものなるべし。（金一圓）

▲邪宗門　北原白秋著　東雲堂發行

北原君が邪宗門はそゞろに藤村氏の若菜集を思はしむるものあり。明調秋空に上る草笛の如く、低誦すれば、濃厚なる色彩に包まれたる感情の驚くべき充實、秋の入日に熟れつくしたる果實の林を望むが如し。（金八十五錢）

▲學生文庫叢書　至誠堂發行

○益軒十訓（下）
○源平盛衰記（二）

▲日本文藝叢書　東亞堂發行

○通俗三國誌（七）
○雨月物語外二種
○通俗三國志（八）
○八笑人
○浮世床

（並製金二十錢特製金三十錢）

▲小林富次郎傳　（加藤直士著　警醒社發行）

二月號豫告

- 岩倉公を論ず（五十頁の大論文）…………池邊吉太郎
- 京都大學々生の氣風（京都の風光、京都人氣質を詳論して大學生の氣風論に及ぶ十五頁の長論文）…………山本良吉
- 勞働者の生活問題（勞働階級の衣食住の實況を調査し、日本人の食物問題を詳論し、下層民の救濟策を說く廿頁に亘る經世濟民の大文字）…………稻葉良太郎
- 行政整理と稅制整理（現下の財政經濟上の大問題）…………諸名家
- 選擧法改正問題（來るべき議會の大問題となり且つ直接國民の權利に關すべき時事問題）…………諸名家
- 淪落の女（著者の見たる白粉の女の懺悔錄告白錄）…………松崎天民
- その二週間（本號の續稿愈く佳境に入る）…………大谷繞石
- 數奇傳（回は回毎に悲慘を極む）…………田岡嶺雲
- 男女に學生性慾上の知識を與ふること可不適度及び方式…………醫學博士十數氏
- 小說 惡魔（苦心慘憺、推敲又推敲遂に本號に間に合はざりし此作はいよく次號の誌上にあらはるべし）…………谷崎潤一郎
- 脚本 白壁（著者脚本の處女作）…………正宗白鳥
- 小說 題未定（病氣の爲め本號に執筆する能はざりし著者苦心の作）…………島崎藤村

其他社論人物評論及び題未定の記事尙甚だ多し。以て如何に次號の光彩を放つべきかを見よ

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

サンデン電氣帶

主治効能

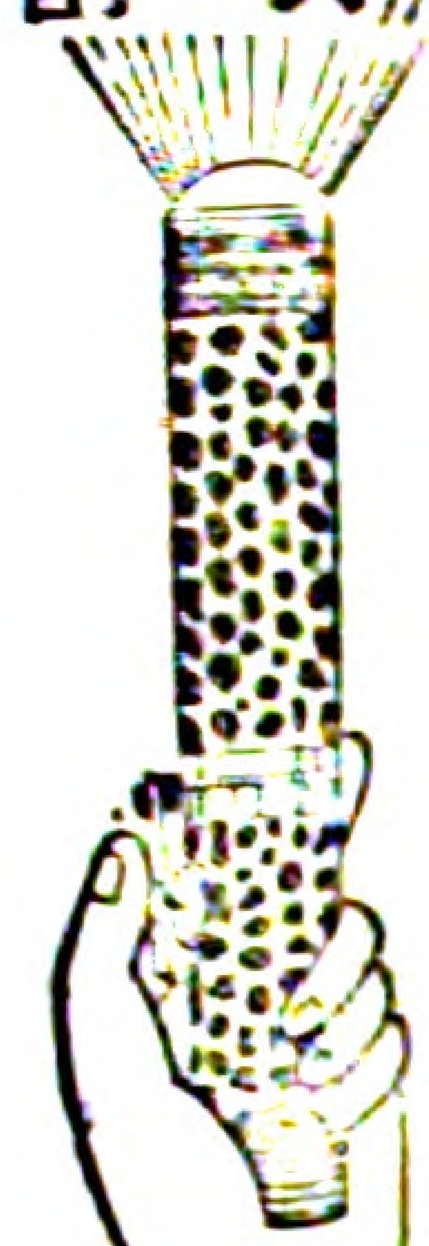
神經衰弱諸症―精神經衰弱―不眠症―消化器衰弱―胃痙攣―胃下垂―胃腸病―消化不良―腎臓不良―神經衰弱及無氣力―遺精―夢精―早漏―遺尿―慢性腎臓炎―糖尿病―一般の腎臓の衰弱―諸神經痛―坐骨神經痛―神經性頭痛―顔面神經痛―腕部神經痛―リウマチス―腰痛―脚氣
婦人諸病―ヒステリー、貧血、月經不順、子宮病
老齢、脊髄、中氣。産後及病後一般の衰弱（説明書無代進呈）

定價

舶來品
第三號帶附屬品一式共 金八圓
第四號帶同 金拾五圓
第五號帶同 金貳拾圓
第六號帶同 金廿五圓
第七號帶同 金參拾圓

和製品
戊號帶 金五圓
丁號帶 金七圓
丙號帶 金九圓
乙號帶 金拾壹圓
甲號帶 金拾參圓





探見電燈 懐中電燈

（大割引）



定價

（大形）（小形）
特製貳圓半 最上八拾五錢
最上壹圓半―上等八拾錢
上等壹圓廿錢
中形は拾錢安、小形替
電池廿五錢、大中形替
電池參拾五錢

定價

特製 二圓四十錢
最上 一圓八十錢
上等 一圓拾錢
（小形）最上八十五錢
上等八十錢
替電池大三十五錢同
小二十五錢
▲以上電燈送料拾貳錢

サンデン電氣商會

▲凡て代金引換は前金貳割御送附を乞ふ

營業品目

●電話●電鈴●表示機●避雷針●醫療用感電機●電池類●電球類各種●電線類●電燈花笠各種其他電氣に關する一切の諸器具卸小賣並に設計
●電燈類受次販賣御希望ノ方ハ照會アレ最モ安價ヲ以テ貴需ニ應ズ

●本店（東京市京橋區尾張町二丁目（銀座通東側）電話新橋四一二二番…振替東京一八四七三番
●支店（大阪市東區心齋橋筋博勞町南入西側 電話南二二〇九番地…振替口座大阪七三四四番
横濱市吉田町一ノ二九…電話一九三一番



主治効能 眼、耳、鼻、咽喉、船暈、頭痛に奇効を奏す

（説明書無代進呈）

奇効可驚

定價 拾貳圓

（中付二の一）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

不斷大車輪に活動し勉強する故
何時何處で誰が讀んでも面白く
今や發行部數日本全國に冠たり

國民新聞

過去一年間に掲載せる廣告行數
本紙七拾六萬行地方版參拾萬行
併て壹百餘萬行即ち帝都第一位
（日本電報通信社統計參照）

發行所　東京市京橋區日吉町二十番地

男爵後藤新平閣下譯

最新刊 官僚政治

菊判洋裝全一冊
紙數三百六十八頁
定價金壹圓貳拾錢
郵稅內地金十二錢

官僚政治とは、ビューロークラチスムスの譯語也。然るに所謂藩閥政治乃至軍隊組織と同一視し、世人の之を喜ばざるは何ぞや。官僚政治果して而かく不健全の現象なるか。知らずや官私の別を問はず一般政治界といはず、商工界といはず、苟も一定の組織の下に成立せる各種の機關に在つては、必ずや何等かの形式に於て所謂官僚政治の發現を見ざるなきを。然らば官僚政治の弊害の及ぶ所、豈啻に官府の行政機關にのみ止らんや。大銀行も其弊あるべし、大會社も其弊あるべし、否堂々たる大政黨と雖も一定の統率規律に從て行動する以上、同じく其弊なかる可らず。官僚政治の講究は官民を論せず、苟も眞摯に國家社會の公益を思ふもの一日も念頭を離る可らざる急要の一大問題たらずんばあらず。後藤男爵の此譯は之を打破せんとするものなるか、將又之を助長せんとするにあるか。乞ふ本書を繙いて知れ。

發兌元 東京神田 振替貯金口座五〇一番 電話本局四一三〇 合資會社 富山房

賣捌所 全國各地及滿淸地方到る所に有り

新年讀物として特價發賣

（特價申込期限四十五年一月十五日限り）

小杉天外先生作

一名『天外傑作集』

小説 草笛

自然主義の最初の唱道者たる文豪が既往十八年間の著作中より得意の篇を拔いて草笛は成れり收むる所七篇『大作家』『楊弓場の一時間』『仇なさけ』『みだれ髪』『とめ人』『おとし種』『うつり氣』或は人情の迂曲曲折を描き或は戀愛の艶姿妖態を寫し波瀾に富み趣味に豐かなる卒讀を覺えしめざるものあり文學を談じ藝術を説くの士は速に一本を座右に備へられんことを

全壹冊
菊版總クロース
金縁箔入
廣瀬尋常、飯澤天洋二青年畫家意匠
最新式美裝
紙數六百九十頁
正價金貳圓

特價 金壹圓貳拾錢
小包料拾貳錢

昇曙夢先生譯

（再版發行）

小説 白夜集

露大陸の自然は其外形の無奇を彩るに多趣を以てせり如何に其名に心緒の躍動を感じ憧憬の眼を輝かしけり本書は露國の代表的文豪たるツルゲネフの『草場』『凄艶』プシキンの『吹雪』『黒人』『海少女』コロレンコの『奇火』チエホフの『窒扶斯』『拳銃』ゴーリキイの『惡魔』等を我邦唯一の露西亞文學通たる著者が翻譯せるものにて彼國獨特の香や色や本書に依つて遺憾なく發揮せられたり

全壹冊
ゴリキイ式
菊版總クロース美裝
紙數二百八十頁
正價金壹圓

特價 金六拾錢
小包料八錢

發行所 東京市日本橋區箔屋町十四番地 長 電話本局二〇八五番 章光閣

文壇の大傑作

（中付二ノ八）

中央公論　新年號創作

別るゝまで……田山花袋

老後……小栗風葉

暴君……永井荷風

鏡……鈴木三重吉

かのやうに……森鷗外



別るゝまで

田山花袋

一

譲は役場に居る間、お雪のことばかり考へて居た。『あんなに家に眤まない女は、歸して了ふ方が好いと父親も言つたさうだし、母親は初めから不賛成だッたから、何ぞと言つては、あらばかり探して、出て行くやうに、やうにと仕向けて居る。お雪は何んなに辛らかつたらう。時々人知れず陰に行つて泣い

て居るやうなこともあつたに相違ない。あれでも己を思つて呉れゝばこそ、今まで辛抱して居て呉れたんだ。今に父さんも母さんも可哀相に思つて呉れるやうな時が來るだらうと思つて辛抱してたんだ。それが何うだ。今になつてあの騷ぎ……』

讓は自分の家の厭な空氣をまざまざと眼の前に浮べて見た。母親も默つて居る。父親も默つて居る。かれ自身も默つて居る。かれは寧ろ今の生活を全く破壞して了はうかとまで思つた位だ。『よう御座んすとも、そんなにお氣に入らないんなら、お雪は出します。歸して了ひます。しかしその代りお父さんもお母さんも私を東京に出して下さい。私はまだ勉强しなければならない體ですから、……私はこんな田舍に埋れて、先祖代々の家を嗣いで、平凡な人間になつて了ふのは厭ですから』かれは其時さう言つたことを思ひ出した。

厭なことだ！こんな田舍に。話相手になるやうな友達は皆な東京に出て行つて了つて、何處を見渡しても、因循した後れた考を持つて居る奴しかありやしない。日が暮れさへすれば何處でも戶をぴつしやり閉めて了ふやうな暗い田舍の町、碁と將棋と酒と縣會議員と地面の話とそれより他には何もないこんな色彩に乏しい町になど何時までじつとして居られるものではない——お雪が來ない前には、一日としてさういふ考を抱かないことはなかつた。かれの心は唯々都會へのみあくがれて居た。都會に行きさへすれば、どんな事でもどんな希望でも成し遂げることが出來るやうに想像して居た。

お雪だッて、可愛い可愛いお雪だッて、かれの其の心を全く其方に轉じさせて了うやうなものではな

かつた。綺麗ないぢらしい影を帶びたお雪の眼でも、白い柔かい美しいお雪の肌でも、かれからその希望を全く奪ひ去つて了ふことは出來なかつた。

「私を東京にやつて下さい」

父母がお雪に對してやかましいことをいふ時には、讓はこれまでにも既に幾度となくそれを言出した。

お雪を貰はうと言ひ出した時にも、父母は其家柄とか氣風とか周圍とかには贊成しなかつたが、嫁を貰ふ、妻を持つといふことには贊成した。嫁を貰つて、子供でも出來たら、口癖のやうに言ふ『東京に行く』も出なくなるだらうと思つた。落付いて田舍の古い家の後繼者になつて呉れるだらうと思つた。

讓にしても、可愛いお雪の爲めに、自分の一生の功名を犧牲にしても構はないと思つたことがないでもなかつた。……何も東京になど行かなくつても好い。家にはお雪がゐる。あの可愛いお雪がゐる。歸ると、默つて入口に迎へに出て來る。顏を見合せてにつこり笑ふ。そのにつこり笑ふ心がかれには捨て難くなつかしいものであつた。

父親の勸めて、唯遊んで居てもつまらないと言ふので、やがて役場に出ることになつた。町長とも助役とも書記とも父親は懇意である。だから、何事につけても便利で、その居心も決して惡くはない。『菅井さん、菅井さん』と言つて心置なく使つて呉れる。用事も馴れないものは古參のものにさせて呉れる。一日仕事もなくて烟草ばかりふかして笑ひ話などをして歸つて來ることもある。家に居るよりも却つて

樂な位だ。――役場は町の裏の南の外れにあつた。かれは毎朝、裏道を通つて、貧しい人達の住んで居る處を掠めて、ひろびろとした野に出て行つた。其處からは、役場の白い壁が朝日に輝いて見えた。秋も遲くなると、コスモスの紅い白い花が其處に一杯になつて咲いて居た。

時間になつて、すぐ歸らうとすると、同僚が、「菅井さん、碁でも打つて行きませんか」などとにやにや笑ひながら言ふ。と、年老つた書記さんは、「菅井さんはとめるのは可哀相だ、奥さんが待つてる」などと言つてからかつた。

路傍に小川が流れて居た。小さい紅い白い花などが咲いて居た。秋の雲が靜かに鮮かにその水鏡に映つてゐることなどもある。町の子供達が目高をすくつてゐることなどもある。秋雨が肅々と波紋をつくつて降つてゐる時には、かれは傘を斜にして通つて行つた。「東京に出てつらい思をしたツてつまらない。それに成功するものもあれば墮落して了ふものもある。寧ろかういふ靜かな田舍の方が好い」お雪に可愛がられた翌朝は、こんなことを考へながら、かれは靜かに落附いた心持で其處を通つて行つた。

かれは稚い頃から筆を持つのが好きで、繪を畫くことや文を作ることが上手であつた。好加減大きくなつた頃には、文章を書いて、東京の雜誌に投書してゐた。そして其の短い長い文章は過分の批評をつけられてよくその雜誌に載せられた。後には其雜誌の有望な投書家として寫眞を載せるから送つて來いなどといふ手紙が其處から來た。

一時はそれがかれの生命のやうに見えた。中學から歸ると、かれはすぐ机に向つて筆を執つた。夕飯

などは食ふのも忘れて居た位である。そしてそれが少なからずかれの「東京熱」を煽つたものゝ一つてある。けれど今ではもう忘れたやうになつてゐた。かれの居間にはお雪の持つて來た新しい簞笥と、雜誌や小說をギツシリ入れた本箱とが並んで置いてあつて、かれの文章の掲載されてある雜誌が山のやうに積んである。それをお雪が毎日拂塵をかけて掃除するが、それでも埃がよくたまつた。

秋の晴れた日曜日の午後など、日當りの好い其緣側の障子を明けて、其處にごろりと身を橫へて厚い小說などを讀んでゐると、赤い手絡をした、銘仙の羽織を着たお雪が靜かに入つて來て、「好いお天氣ですね」などと言つて、緣側に立つて碧い晴れた空を見て居る。お雪はこれから三里ほど山の方に入つて行く農家に生れたのだが、家がかなり金持で、少しの間、町に來てゐたものだから、田舍の娘にしては、何處か垢ぬけがしてゐて、背の高いのと色の白いのとが常に際立つて人の眼を惹いた。それに甘へるやうな調子で口を利いた。

それから店の方に出る處が、父母の居間で、猶ほ二つ三つの室を隔てゝ店になつて居る。今は商賣はさう盛にしては居ないが、それでも土地では名高い舊家になつてゐる。

讓には二十になる弟と十五になる妹とがゐた。

小舅達とお雪とは交情が好い方ではなかつた。お雪が默つてゐる方の性質である爲めに、一層其間が面白くない。それに、弟の理一は兄とは丸で違つて、氣分が學問より商賣の方に向いてゐた。

お雪に讓が優しいのが、母親にはその機嫌を損ふ大きな理由の一つになつてゐる。餘りやさしくされると、自分の子が嫁に取られて了ふやうな心持がすると見える。讓はそれを知つてゐるから、つとめてさういふ素振を見せまいとするけれど、夜など二人でその居間に入ると、つい内所話をするやうな調子でこそ〳〵話を始める。それが母親の耳に入ると、嫁を憎むやうな氣分が一層烈しくなる。

これまでにも、お雪が里に行つて十日も二十日も歸つて來ないやうなことがよくあつた。『私はとても母さんの氣に入らないから――』こんなことも言つた。讓とさし向ひて話をする時には、『あなたは私のやうなものでない、もつと母さんに氣に入るやうなお嫁さんをお持ちなさい』などゝも言つた。

『お前が家に居るのが厭なら、何うでもなるんだから、親達と別居することも出來るんだから――本當にお前の心持を聞かして呉れ』此間里に行つて歸つて來なかつた時にも、讓はわざわざ迎へに行つて、さう言つてつれて歸つて來た。

其時、讓にはお雪の心持を疑ふやうな氣分も起つて居た。生憎車がなかつたので、二人は山道を歩いて來た。丁度秋の初めであつた。お雪は讓の後に跟いて歩いた。

『僕の心は解るだらうね？』

婆さんの出してゐる休茶屋にやすんだ時、讓はかう訊いて見た。

『え』

お雪は笑はうともしなかつた。

「本當に解るだらうねえ。」

「え、わかります」

「お前がイヤなら、家に居ないたツて好いんだから。親達と別れて、分家して貰つても好いんだから——」

「でも東京に入らツしやつた方が、貴方の望が叶つて好いんでせう？」

「東京になぞ行かなくつても好いんだ。お前さへ僕と一緒に居て呉れゝば、どんな苦しをしても好いんだ。お前が居ない間、どんなに僕は心配してたか解りやしない」

お雪は點頭いたばかりで唯默つて居た。

「お前達も子供でも出來ると好いんだけどもねえ」

町に居る伯母さんがある時二人に向つて笑ひながら言つた。

其時は唯笑つて挨拶して居たが、時々その言葉が讓の胸に蘇へつた。二人の間に、子供のないといふことが飜つて考へられるやうな日が續いた。

讓は子供を抱いて居る四邊の若い細君を見廻した。其人達は嬉々として樂さうにして笑つて居た。子供をあやしたり、子供に乳をふくませたりしてゐる細君達は、機嫌もよく、血色もよく、元氣もよかつた。世に苦勞などはなささうに思はれた。

二

お雪の母方の伯母が町に居た。それはお雪のこの町に於ける唯一の親戚であつた。ある日、お雪は無斷て其處に遁げて行つた。

父も母も尠なからず激して居た。「さう度々は許されない……我儘にもほどがある。お前はさういふ了簡なら、何うとも勝手にするが好い。お前もあのお雪にそれほど心が殘るのなら、もう子にはして置かれない」かうした語氣があつた。

讓は役場に行く前に、その伯母の家に出かけて行つた。兎に角其處でかれはお雪に逢つた。

「とても居られませんから」

かう言つたお雪の顏は蒼かつた。

讓はいろいろになだめたり賺したりした。しかしお雪は低頭いたまゝ默つて居た。別居の話をしても默つて居た。

そりそり袖て眼を拭つた。

伯母が上つて來た。

それは南に向いた晴々した二階の一間てあつた。其處からは田だの山だのが打渡して見られた。

「でも、親御がさう仰しやるんだから」

伯母がかう言つたのを讓は引取つて、

「でも、親のお雪ぢやありませんから——僕のお雪ですから」かう言つたかれは思はず激した。

「お雪さへしつかりして居て吳れゝば、何うでもします。一體、親が惡いんです。それや親が贊成しなかつたには違ひないけれど、僕は僕の妻としてお雪を貰つたんです。僕は何うにでもします。勘當されても好いんです」

「さうばかりも言へませんけれど……」

「いや言へないことはない。僕は言ふ。僕は父親が勘當するなら勘當するでも好い。僕は立派に別居する」

「しかし、さう角を立てないで……圓く治まるものならば——」

伯母はかう言つてなだめたが、讓は今までに付てないほどに昂奮してゐた。

「一體、親が惡い」

かう幾度も繰返して言つた。

お雪と讓とは默つて相對して居た。

讓はやがて、

「それでお前の了簡は何うなんだ」かう言つて、「默つて居ては解りやしない。お前は何うしても里に歸

ると言ふのかえ？それなら、さう言つて吳れ」

お雪は輕く頭を振つた。

「しかし、本當に言つて吳れ。今度は僕も親に言ふだけのことは言はうと思ふんだから。僕も隨分こらえて居た。お前が可哀相だと思ふから、言ひ度いことも言はないでゐた。」

「私だッて辛抱したんですけれど……」

お雪は半言ひかけて聲を曇らせた。

伯母は一應里の方にも話して、一時お雪を其方に遣つて置いた方が好いと言つたが、讓はそれを承諾しなかつた。「まア暫くこのまゝにして置いて下さい。里になど言つてやる必要はありません。伯母さんは御迷惑でも暫くお雪を此處に置いて下さい。」かう讓は賴んで行つた。

お雪はその二階に日を送つて居た。伯母の家は小商賣をして居たが、子供が居ないので靜かであつた。伯母の方でも、お雪の里の方から、萬一の時には世話になるやうにかねて賴んであるので、いろいろに不自由のないやうにお雪の世話をして遣つた。讓は役場の行きに歸りに廻り道をしては寄つて行つた。「餘りひどいことを言ふもんぢやありません。何にしても親ですから」やさしい伯母は讓の顏を見る度にかう言つた。それにも拘らず、話は益々難かしい方に向いて行つた。二日目の夜、讓は遂に父親と衝突した。「勝手にしろ——」「勝手にします」さういふ處まで行つた。父親の顏にはめづらしく靑筋が立つた。

譲はブルブルと總身を震はした。

「貴様は勘當だ」

かう言つて父親は立つて行つた。

難かしい母親てはあるが、――人一倍お雪を邪魔にした母親てはあるが、譲が立つて出て行かうとするのを見ては、流石に默つてそれを見て居るに忍びなかつた。引留めていろいろとなだめ賺した。子供の時、何んなにお前の爲めに苦勞したか知れないなどと言つて聞かせた。後には不孝な兒を持つたほど辛いことはないと泣いて居た。

譲は母親の言葉などは耳に入らないほど激して居た。それに若い血が總身に漲り渡つて居た。「自分が悪いんぢやない。不孝、不孝と仰しやるけれど何が不孝です。」かう言つた言葉が自分の體に反響して聞えた。母親がお雪の弱點を數へ立てゝ、「お前は解らないけれど、お雪はそんな親切な女ぢやないよ。あの位の嫁は腐るほどある」などゝ言ふのを聞くと、そこにさうして立つて居られないやうな氣がして、母親の手を振放つて、帽子も冠らずに戸外に飛出した。

お雪は階下で伯母と話してゐた。譲の顔の蒼いのに何か事のあつたのはすぐ知れた。譲は一伍十什を話す間、絶えず體を震はして居た。

「あれても親だ！」

拳を握り詰めたやうにして言つた。

伯母は聞終つて嘆息をついた。「困つたもんだねえ」しんみりした、心から心配したやうな調子で言つた。痩せた其顏が四邊に際立つて見えた。

外に出て居た此家の主人はやがて歸つて來た。其話は繰返して語られた。主人は考へて居たが、主婦に、「それぢやお前、これから行つて樣子を聞いてお出！」

「私が行つたッて仕方がない」伯母は讓の家庭の難かしいのを兼ねて知つて居るので、其處に出かけて行かうとは言はなかつた。それに、同じ町内に居ても、さう深くつき合つても居なかつた。讓とお雪との結婚が、普通の媒妁で出來た結婚なら、もつと深い親類づき合をして居たであらうが、二人の間が先に出來て、それから話を進めて行つた結婚であるだけそれだけ、親類同士の間にも何處か圓滿に行かないやうな空氣があつた。

其夜、第一に起つて來た問題は、讓が二階に泊つて行つて好いか惡いかといふことであつた。口には出さぬが、誰の胸にもそれがあつた。

「何うするの？今夜？讓さん」

二階で遲くまで二人が話して居るので、階下から伯母がかう聲を懸けた。

それには讓は答へずにお雪が下に下りて來た。「泊つて行つたッて構やしない、此處を出れば、己は泊る處はないッて言ふんですがね、伯母さん？」かう言つてお雪は伯母の顏を見た。

「歸る方が好いがねえ」伯母は二階に上つて行つた。讓は其處に横になつて居た。

「私がかばふやうに思はれても困るねえ」

かういふ聲がやがて聞えた。

「……いゝえ、僕は明日になつたッて、家に謝りになぞ行きやしません、人を間に立てゝ何の彼のと厭なことです。僕等はこれから二人で世の中を渡つて行かなけりやならないのです。伯母さんが何うしても泊められないと言ふのなら仕方がないですけども……泊められるなら何うか泊めて下さい。二三日緩くり考へさせて下さい。頭が痛くつて堪らない」譲は此上考へるには堪へられないといふやうにして頭を抱えた。

主人に話すと「仕方がない、己が一寸行つて向ふの家に斷つて來る。それにしても、何とか言つて來さうなものだがな。譲が來てるか來てないか位聞きに來さうなものだがな」こんなことを言ひながら出て行つた。

主人はそれから一時間ほどして歸つて來た。「駄目だよ。非常にお父さんが怒つてゐる。……何うかまはずに置いて吳れッて言ふんだが。仕方がない。これだけ言つて置けば、此方の義理が立つから」

「隨分酷い親達ですねえ」

「矢張、始めが出來合で、お婿が譲さんを騙して居ると、てんから思つて居るのだから駄目だ」

「困つたものねえ。」

二階の二人は其夜は遲くまで眼を覺して居た。話聲が細々といつまでも聞えて居た。主婦があとをす

つかり片附けて床に入つてもまだ聞えて居た。

讓は目が冴えて眠られなかつた。

東京に行けたら、二人で一緒に行かう。かういふ話をした時には、お雪の眼も光を帶びて來た。『さうすれば、貴方の望も遂げられますねえ』かう言つて喜んだ。

しかしそれが出來ることか出來ないことか？それがすぐ二人を暗い前途につれて行つた。廣い世界、自由な世界、それを讓はかねてから望んで居た。その意味の十分に解らない時分から『自由であれ』などといふ短文を書いた。しかし自由を得て、赤裸々な人生に向つて、今更に寂しさと心細さと便りなさとを感じない譯には行かなかつた。

その心細さは細い綱で深谷を渡つて行かなければならないやうな心細さであつた。その寂しさは人の居ない廣々とした野原を歩いて行くやうな寂しさであつた。それに、讓の心にはお雪に對する多少の不安と疑惑とがあつた。此方から心をすつかり開いてゐるだけそれだけ、お雪の心は自分から離れて行きつゝあるのではないかといふやうな疑惑を持つてゐた。默つてゐて、ずんずん實行して行く女の性質も、かれに賴りないやうな心を抱かせるに十分であつた。男の手を握つたのも女だつた。默つて里に遁げて歸つたのも女だつた。今回の事も女が自分で決心して實行した。これから先何をするか解らないといふやうな不安が微かながらも起つて來た。

『もう少し本當のしつかりした處をきかして呉れ』讓は幾度となくかうお雪に言つた。けれどお雪は決してはつきりしたことを言はなかつた。言はれる度に唯點頭いて見せるばかりである。

夫婦が！――其の成立は兎に角、結婚して盃を取換した夫婦が、かうして自分の家を出て、他人の二階に寐て居るといふことが、讓には不思議に思はれた。空想が果てしもなく續いて行つた。

幾度か寢反りを打つたり、嘆息をついたりした。

お雪はスヤスヤと寐て居た。

三

中に入つて呉れた人達もあつたが、ぢき手をひいて了つた。三日目には、家から讓とお雪との身のまはりのものを荷車に載せて屆けて來た。

お雪の里の方にもやがて其話が知れた。お雪の兄が心配して出て來て、形式だけでも媒妁に立つた人に頼んで先方へ行つて話しをして貰ふことにした。其時兄も一緒に行つて、頭を下げて、お雪の爲めに、重々その我儘であつたことを謝した。しかし讓の父母は容易に解けなかつた。成行にまかせるより他に仕方がない。わざわざ出て來た兄はその翌日から言つて山の方に歸つて行つた。

譲の父母にしても、その親類の人達にしても、矢張自然に任かせて置くより他仕方がないと思つた。「あの譲の氣違ひは無理をすると、何んなことをするか解りやしない、あの女にすつかり騙されて居るんだから、それが覺めるのを待つより他に仕方がない……なアにぢき覺めるよ」などと譲の伯父に當る人は父親に言つた。

譲はそれでも毎日役場に出掛けて行つた。役場の人達はぢきその話を耳にしたが、しかし誰も面と向つてそれを聞き糺さうともしなかつた。いつでもと同じやうな仕事をして、同じやうな談話をして、そしてかれは歸つて行つた。

譲は役場に於ける自分の地位――僅か月給が十二圓ではあるが、今では自分達の生活する唯一の財源である役場の地位、それを父親は激怒の餘り罷免させるやうな手段を取りはしないかと心配した。しかしそれは單なる杞憂に過ぎないといふことが段々知れて來た。家では、父親も母親もつとめてそれを世間から隱さうとしてゐるといふ話を耳にした。

それでも一度譲は町長の家から呼ばれたことがある。果して問題が起つたと見える。かう思つてかれは其家を訪問した。しかしそれは案外であつた。町長は自分一己の了見で、譲からその話を聞かうとしたに止まつて居た。「はア、さうですか……しかしお父樣を怒らせては仕方がない、それにこれから細君と一緒に居やうと思ふなら、猶更父母の機嫌を取つて置かなければならない。親を粗末にしては此方に道理があつたつて何だつて駄目ですからね……私も機會を見て、お父さんにお詫をして上げるやうにし

ますから、君もそのつもりで居なくつてはいけません」かうした和らかな物の解つた意見をされて、讓は歸つて來た。

二階では夫婦と言ふよりは戀人同志と言つたやうな生活が續いた。

伯母さんに世話をかけるのは氣の毒だと言ふので、土鍋やら七輪やら茶道具やらを買つて來た。「それぢや御飯だけ一緒に交ぜさせて下さい。土鍋のお飯はおいしくないから」お雪はこんなことを言つて伯母に賴んだ。

「私も勝手元をしますから」かうお雪は伯母に言つた。けれどお雪の起きる時分には、いつももう朝日が窓に當つて、下では伯母があと仕舞の釜を洗つて居た。

瀨戶の丸い火鉢を室の片隅に置いて、そこに伯母から借りた鐵瓶をかけて置いた。水さしは大きな土瓶で間に合せて居る。其二階には三尺の半押入しかないので、蒲團は半ば室の隅に積まれてあつた。小さな机の上には、新聞や雜誌が一杯に散らばつて、硯箱は蓋をしたまゝ、幾日にもつかつたことはなかつた。午後の日影は、裁縫箱だの、紅の片だの、新聞だの、物尺だのゝ一面に散ばつた一間を明るく照した。

讓は歸りに牛肉などを買つて來た。「おい、今日は御馳走がある」などゝ言つて、風呂敷の中から竹の皮包を出したりした。讓が七輪の火を煽ぐと、お雪は駈出して行つて自分で葱を買つて來てそれを俎板

て細かく切つた。小さい茶湯臺の上に置いた目ざるの中には、燒豆腐だの、糸こんだの、馬鈴薯だのがごたごた入つてゐて、鍋から騰る湯氣は薄暗くなる空氣の中にぱつと白く立つて居た。樂しさうな讓の顏か其中に見えた。

ある夕暮、お雪は下りて來て、

「をばさん、德利がありますか?」

「何うするの?、德利なんか」

「お酒を少し買つて來いつて言ひますから」

「酒を飮むの?」

此處では酒を飮むものはなかつた。主人は酒の匂ひを嗅いだだけでも醉ふといふ方の人であつた。伯母は酒粕も食はなかつた。

「家には德利なんかあるか何うだか」伯母はかう言ひながら、戸棚の奥を彼方此方とさがして、漸く埃に埋れた燗德利を一本取出した。「これはいつか兄が燗德利に盃位なくつちやッて置いて行つたんだけれど‥‥使つたことなんかありやしない」かう言ひながら流し元に行つて、それを洗つて、お雪にわたした。お雪は近い酒屋に酒を買ひに行つた。

時には友達などが訪ねて來ることもあつた。「菅井があの戀女房と別居してるさうだ」などと言つて遣つて來た。一緒に雜誌に投書してゐた友達が來た時には、話がいつもはづんだ。お雪が傍て見て居ても面白さうであつた。

大福などを袂から出すものなどもあつた。ある友達は、親と子との關係を盛に議論して行つた。「本當だとも、親の嫁ぢやない、子の妻だ。今の親達は干涉ばかりして仕方がない。」こんなことをも言つた。

此處に來る友達の中て、お雪のことをかなり詳しく知つて居るものもあつた。それはこの町の在に住んて居る小學校の敎師てあつた。お雪も其男を知つて居た。「まア香取さんてすね、御久振てすこと！」などと言つた。

其男は其時一緒に來た友達に、「お雪さんといふ女ね、あれは不思議な女だよ。菅井の處に來る前に戀人があつてね、大分深い交情だつて言ふ話を聞いたことがあるんだ。よくあゝして一緒に居るね」

「さうかね、そんなことがあるのかね」それを聞いた友達はかう言つて、「それて、今その男は何うしてるんだ」

「矢張、在の小學校の先生をしてゐるがね。今ても手紙位往復してゐるんぢやないかと思ふんだけれど……」

「そんなことはないだらう」

「いや、何とも解らんよ。あの女はあゝ見えてあれて中々評判だッたんだからねえ。容色が好い女は、

何うしたツて、さういふことになるよ」

「さうかなア」

考へるやうにして其友達は言つた。

ある友達はまた次のやうなことを話し合つた。

「菅井は納りかへつてゐるぢやないか」

「あれて長く續くかね」

「怪しいものだよ。家でも手古摺つてゐるらしいよ」

「さうだらうねえ、お雪さんは綺麗だけど……菅井が惚れてゐるほど、お雪さんは菅井に惚れて居ないんだらう」

「それはさうだ。僕等が行つて見てもわかる」

讓の周圍の人達は、二人についていろいろな噂をした。二人の生活は人々に好奇の情を起させるに十分であつた。

讓は時々眞面目に考へ込むやうになつた。二階の一間にも晴れた日ばかりつゞいては居なかつた。雨が降つたり、風が吹いたりした。障子がぴつしやり閉め切つてある時もあつた。

伯母とお雪とお雪の里と、それが讓の心にある暗い影を投げて行つた。さうした考は以前にも起らぬ

ことはなかつたけれど、此間、ふと伯母とお雪と何か頻りに話して居るところに歸つて來た時ほど鮮かに其の暗い影を意識したことはなかつた。「何を話して居たんだえ？」「別に何も……」簡單な會話で其時は濟んで了つたけれど、それから讓は注意してお雪の擧動を見るやうになつた。

お雪の籍はまだ入つて居なかつた。それも讓に不安な心を起させた。お雪の里から籍のことを度々父母に言つて來た。父母は其度毎に何の彼のと言つて成たけそれを延すやうにしてゐた。父母には其頃からお雪を本當に家に入れる積りはなかつたのだといふことが今になつて始めて分明と解つて來た。それと共に、籍のまだ入つて居ないお雪と自分との關係が甚だ覺束ないやうに思はれ出して來た。

其時、お雪と伯母とは確かに籍のことを話して居た。「まだ籍も入つて居ないんだからねえ」かう言つて、それから伯母が何か言ひ出さうとする處に讓は其姿を顯はしたのである。と、二人は言ひ合せたやうに狼狽てゝ話をやめて了つた……。

尠くともそれから二日ほど讓は默つてお雪のするさまを見て居た。お雪は常よりも一層沈默の淵に墜ちて居た。點頭きもしなければ笑ひもしない。讓の命ずることは默つてした。夜は背中を其方に向けて、話相手にならうともしなかつた。

其二日間は雨がびしよびしよと降つた。灰色の雲が隙間もなく空を蔽ひ包んだ。かれはそれでも傘をさして役場に出かけた。と、ゆくりなく途中で角を此方に曲つて來る妹に邂逅した。妹は知らぬ風をして、其儘すれ違つて行つた。「妹！現在肉を分けた妹にも見放された！」かう思つてかれは下唇を嚙んだ。

暴風のやうな心持に悩まされて居た。これほど思ふ心の萬分の一も知らないで、スヤスヤと寐て居る女が憎い。「貴様の爲めには親をも捨てた。兄弟をも捨てた。財產も名譽も捨てた。それも知らないで、里に歸ることなどを考へて居やがる。」かう思つてかれは夜中に跳ね起きて床の上に座つてゐた。

「此間、お前は籍のことで何か伯母さんと話して居たらう」

三日目の朝、堪らなくなつて、譲はかう言出した。

かれはじつとお雪の顔を見た。

「いゝえ」

お雪の顔は赤くなつた。

「虚言を言はないで、話して呉れ」

「いゝえ、そんな話しはしません」

「本當にしないのかえ」

「……………」

「したッて好いよ。したッて惡いッて言ひやしないよ。しかし、僕の心も少しは考へて呉れるだらう?」

お雪は默つて了つた。

「それぢや己は伯母さんを呼んで來る。こんな生活――こんな虚僞な生活に甘んじては居られない」かう言つて、譲はドンドン音を立てゝ階子を下りて行つた。

伯母さんはやがて伴れられて來た。「さういふ譯ぢやないんだよ」伯母さんは困つたやうな風で靜かな調子で話し出した。

「實は譲さんにも話さうと思つて居たんだけれど……まだ話すほどのことでもないと思つて默つて居たんですよ。此間、兄の方から手紙が來て、籍もまだ行つて居ないのではあるし、お互に若い身の上ではあるし、「お雪の爲めに親御との間を割くといふのも具合がわるいから、二人が承知なら、無いものとあきらめて歸して貰ふやうにしたいと言つて來たんだが……」

「籍、籍ッて言ひますけど、お雪は正當な私の妻です!」

譲の聲は高かつた。

「さうですとも――さうの位ありはしない。だから譲さんに話さないで何うの彼うのと言ふのではないんだよ。烏渡其の話をしたばかりですよ」

「それでお雪は何うなんです。そんな話を默つて聞いてゐたんですか?」

「默つて聞いて居るも居ないもないんですよ。唯、さういふ話をしたばかりですよ」

話はそれきりでおしまひになつた。

四

讓は絶えず苛々して居た。此頃では血色もよくなかつた。お雪の心は常に疑惑の恐ろしい種をかれの胸に蒔いた。お雪と別れる！それを考へると、心臓の鼓動が高くなるほど、かれの心は女の方に偏つて居た。お雪を離しての生活をかれは考へて見ることが出來なかつた。時には、「何うか、さういふ考を起すのだけはよして呉れ、お前の爲めには何んなことでもするから。お前の前に手を突いて謝ることでも何でもするから」といふやうな消極的な氣分にもなつて居た。

自分の心、自分の言葉、自分の態度が女の心持に合はないのが、自分にも腹立しいほど情けなかつた。て、かれはお雪の機嫌を取るやうな言葉のつかひ方をしたり、態度をしたりした。わざと笑つても見せた。戯談をも言つて見せた。

それに讓に取つては、親まで捨てゝ、揚句にお雪に捨てられるやうなことがあつては、それこそ男としての一分が立たないといふ腹もあつた。――二階には同じやうに日が照つたり、雨が降つたりした。畑に咲いてゐるコスモスの花が夕日に榮えて絹のやうに見えた。

勉めて其心を靜かにしやう、つとめて平氣で居やう。かう思ふこともある。まだ起りもしないことに取越苦勞をしたッて仕方がない。かうも思ふ。それに、お雪の身になつても心細いに相違ない。家に居る時と今とは身分が違ふ、生活が違ふ。これから何うかして生活の方法を立てなければならない身だ。

少しは女の心も察してやらなければならない。かうも思ふ。けれどさうした考はいつも自分の苦しいつらい情けないのに引寄せられて了ふ。て、ついイライラする。默つて蒼い顏をしてゐる。神經の昂奮したやうな態度を伯母だのお雪だのについ見せて了ふことになる。

何うかすると、お雪が眼を赤く泣腫してゐることがある。いつもなら心配して何の彼のと慰めてやるのだが、その事があつてからは、虚僞の涙！不安の涙！不平の涙！すぐかういふ風に取つて了ふ。何が悲しくつて泣いてゐるんだ、何が辛くつてそんなに眼を赤くしてゐるんだ！男の心も知らないて——すぐかういふ風に自分の身に引寄せて考へる。「そんなに悲しいなら、何うでもしろ」こんな風に捨鉢にも考へる。

時には何も彼も捨てゝ、新規蒔直しとしやうかとも思ふ。お雪に逢はなかつた前、お雪を妻にしなかつた前、その生活は何んなに生々として居つたらう？何んなに活氣に富んで居つたらう？其頃には、かうして田舍になどぐづぐづして居る氣はなかつた。東京！東京！とばかり心が動いて居た。何うにかして機會を探し出して都會に出やうとばかり思つて居た。かれは棚の上に塵埃に埋れてゐる書籍を思出した。自分の文章に加へられた希望に富んだ批評を思ひ出した。花々しい一小成功者！かれは其頃その得意な姿を夢に見た。それから比べると、今の狀態は？今の離れやうは？毎日てくてく役場に通つて行つて、戸籍の臺帳やら筆記の寫し物やらに齷齪して、くだらぬ話に笑ひ興じて、歸つて來ては女の動搖した心に頭腦を勞らしてゐる。これが二年前の菅井讓と同じ人間か。「いつそ破壞して了はう。新しい自分

の生活を打建てやう。」かう思つて断乎とした決心をして見る。しかしそれがいつでも一時間と續いて居ることはなかつた。お雪——その可愛いお雪に別れる！かう考へると、それが忽ち鈍つて了つた。

女の機嫌を取るにも取られない、自分で決心することも出來ない、意味のない不愉快な今の生活を辿つて行くより他仕方がないといふやうな日が續いた。前途に起つて來るのは雨か風かそれとも晴か、それはかれ自身にも解らないが、しかしいづれは何等かの現象を呈するには相違ないやうにかれには思はれた。

かれは不愉快な神經性な顏をして日毎に役場への路を歩いて行つた。

ある夕暮、お雪が竊かに手紙を隠したのを譲は見た。確かに見た。

「何處から來た手紙だ？」

「………」

「お見せ」

お雪は默つて階下に下りやうとした。

「お見せッたら、見せないか」

かう言つて、譲は後からお雪の胸を抱いて、帶の處に手を遣つた。其處に手紙をかくしたのを譲は見たのである。お雪はそれを取られては大變と言つたやうに、一生懸命になつて男の手を捺へた。取らう、

取られまいとする爭闘が暫し續いた。

「あれ――」

と言ふお雪の聲が聞えたと思ふと、長い手紙が男の手にあつた。女は白い手を延してそれを取らうとした。そこにまた暫し爭闘が續いた。女は一生懸命になつて男の手に武者ぶりついた。長い手紙は三つにも四つにも扯き裂かれた。男はその一片を確實に握つた。

二階の爭ひの音を聞きつけて、伯母さんが上つて來た時には、お雪は打伏になつて歔欷げて居た。男は薄暮の光の中に立つたまゝセイセイ呼吸をきらしてゐた。

「また夫婦喧嘩かえ」

かう言つて伯母さんは、先づお雪の傍に行つて、其樣子を聞かうとした。

「伯母さん、投つて置いて下さい……あんまりだから」

お雪は猶歔欷げた。

「何方があんまりだ、馬鹿!」

誰も激して居た。

長い間こらへて居た悲哀が一時に胸にこみ上げて來たと言ふやうに、ヒイヒイいふ女の泣聲が暫し四邊に聞えてゐた。

伯母も呆れて立つて居た。

讓は立つたまゝ、暫しお雪の方を見て居たが、「馬鹿！」ともう一度言つて、そして机の前に座つた。
女の泣聲は漸く斷續いて居たが、やがてそれが段々歔欷になつて行つた。
「お前さん方、まア、何うしたッて言ふんだえ？」
伯母さんはかう言つたが、何うすることも出來なかつた。
男の握つた一片は、その長い手紙の丁度中頃とも思はれるもので、次のやうに書いてあつた。男の手跡だッた。

……貴女の不幸福は貴女の心より起りしことにて、今更、何とも申上ぐること出來ず候、御同情申上候より他に言葉は無御座候、しかし今更いろいろにお考へなされ候ふても詮なく、夫を大切になさるより他無仕方と存候、困難は人生の常に有之、小生などのこと御考へ下され候はゞ思ひ半ばに過ぎ候ふことに存候。
小生は田舍のさびしき處にて子供を相手にさびしき口を送り居候、最早當年の希望も水の泡と相成り、かうにしかならぬ身とあきらめ居候――これも貴孃の爲めと存候、一時は身も世もなきやうに思ひ候ひしも、今こそは大分落付き申候、御訪ねくだ……

これで切れて居た。丁寧な文句で書いてあつた。中途で切れて居るので、あとにはどんなことが書いてあるか解らないが、別にこれと言つて大したことでもないやうにも思はれた。お訪くだ……其處を讓

はいろいろに考へた。

日が暮れて了つた中に、机の前に坐つて頬に兩手を當てた譲の姿がいつまでもいつまでも黒く見えて居た。

お雪の眼は翌日まで赤くなつて居た。

二人は何も言はなかつた。譲は何方かと言へば機嫌を取るやうな樣子を見せて居た。お雪は默つて朝飯の支度に取かゝつた。朝飯も二人は默つて食つた。

その頃お雪は體が汚れて居た。汚れてゐると言つた。夜も二人は床を別々に敷いて寐た。

お雪を伴れて東京に行かう。譲はかう決心した。

自分の家の父母、お雪の里、お雪の伯母、此間のやうな手紙を寄越すお雪の昔の友達――さういふものからお雪を自由にしなければ、かれは落附いて生きて居られなかつた。お雪にしてもさうだ。誘惑の多い女の身にしては、一層かういふ境遇に居るのが、心を迷はせる種となるらしい。東京に行つての生活の辛いのはかれは知つてゐる。運が惡いと路頭に迷はなければならない。しかしそれよりも今の生活が一層惡い。

譲は東京に行くだけの準備をしやうと決心した。一月暮す金さへあれば好い。かう思つた。實行に取

懸らうとすると、いろいろな不安やら疑惑やらが起つて常にそれを躊躇させた。一日二日はかうしてまた經つて行つた。かれは遂に決心した。かれが一番先に行つたのは、つい一里ほど離れた伯父の家であつた。百性をする伯父の家では、收獲に忙がしい頃であつた。伯父も家族の人達も一緒になつて働らいて居た。「よく來た。よく來た」かう言つた伯父は畠から上つて來た。二人のことなども心配して聞いて吳れた。やさしい伯父は、讓の話出したことを「好い思ひ立ち」だと言つて、「それは爺に話して見る方が好い。お前が話せないなら、己が話してやる」かう言つて吳れた。忙しい中で饂飩など打つて御馳走して吳れた。

歸途は月の明るい夜であつた。近い山と山との間には、小さな谷川が流れてゐた。月はそれにキラキラと美しく碎けた。野にはまだ働いて居る人達もあつた。讓は久し振りで昔の若々しい心にかへつたやうな人であつた。東京、そこにかれはお雪を置いて考へながら步いた。何んな艱難とても戰はう、何んな飢餓とても戰はう。かう思つたかれの脈には、生々とした力强い血が流れた。お雪さへ居たら――お雪の莞爾した顏さへあつたら何んなことでも出來る。かれの前には新しい人生が展けたやうな氣がした。

かれは谷川に架つて居る橋を此方から向ふに渡つた。肌にしみ透るやうな鮮かな水の音が聞えた。靜かな靜かな自然！　思はず橋の上に立留つたかれの眼からは涙が流れた。

五

家に歸つて見ると、お雪が居ない。

机の上には、置手紙がしてある。それにはかう書いてある。

――いろいろお世話になりました。私は考へに考へた上、御暇を戴く方が、貴方のお爲めだと存じまして、今日永のお別れを致します。實はお話をしてからと存じましたけれど、とても御ゆるしがないと思つて默つて家出します。伯母さんにも話してありません。また里にも歸りません。何うか私の跡をさがさずに置いて下さい。

私が居なければ、自然お父さんの勘當も許りることゝ存じます――好い奥さんを持つて幸福に暮して下さいまし。

雪より

ゆづる樣

かれは思はず跳り上つた。眼に映つた文字を疑つて今一度見返した。矢張お雪の字である。かれは天と地とが倒さになつたやうな氣がした。「馬鹿な奴だ！」と叫んで下唇を噛んだ。

猛然として起つて來たのは、伯母のさし金だといふことである。伯母に話してない。譃だ。譃だ。そんな筈がない。かう思つたかれはすぐ階下に下りて行つた。

「伯母さん、お雪が家出した」

「え――」

伯母は驚いた顏をした。

「伯母さん、何處に遣つたんです、後生ですから敎へて下さい。歸るんなら、歸るんて好う御座んす。緣も切ります。けれどこんなことは出來ない。こんなことをしては別れられない。伯母さん後生ですからお雪の居る處を敎へて下さい」

「まア、氣を落附けなさいよ、讓さん」伯母はかう言つて置いて、『本當に、あの子は何處かに行つたのかしら、鳥渡、お友達の處まで行くッて言つて出て行つたんだがねえ」

「伯母さん、そんなことを言はずに敎へて下さい。後生ですから敎へて下さい」

「だつて、私、ちつとも知らないんだもの……まア本當に、あの子は出て行つたのかしら？……。讓さん、何うしてそれが解つたんだえ？」

讓は手紙を見せて、

「此處にはかう書いてあるけれど、伯母さんは知らない筈はない。そんな筈はない。何うか敎へて下さい。」

「まア、それぢや本當に出て行つたのかねえ。さつき三時頃、伯母さん鳥渡お友達の處に行つて來るッて、あの銘仙の衣服を着て出かけて行つたから、私はそんなことゝはちつとも知らずに、遲いことだ。何うしたんだらう。久し振てお友達に逢つて、話がもてゝ遲いのだらうとばかし思つて居たのにねえ。

呆れた子だねえ、まア」

　本當に知らない伯母は、かう言ふより他に仕方がなかつた。

「本當ですかえ？伯母さん。本當に知らないんですかえ。伯母さん！」かう言つたが、讓は痛恨に堪へざるものゝやうに、「僕の心持が解らんのかなア。これほど思つてゐる僕の心持が解らんのかなア。馬鹿、馬鹿、馬鹿な女だ」

「まア、讓さん、そんなに言つたッて、出來たことは仕方がない、今少し落付いて話をなさいよ――」

伯母はかう言つて、倒れやうとする讓の體を支へた。

「己のこの心が解らんかなア」もう一度繰返して言つて、「伯母さん、その友達の家ッて言ふのは何處です？」

「それは石町の八百屋の角を奥に入つたしもた屋の娘――其處に行つたんだとばかり思つてゐたんだがねえ、私は――」

「本當に何とも言置いて行かなかつたんですか」

「本當ともねえ、虚言を言つたつて仕方がないぢやないかね」

　讓は默つて考へて居たが、「譃だ、譃だ、伯母さん達が寄つてたかつて、かういふことにして了つたんだ！僕が親から離れたもんだから、役場の安官員になつて了つたものだから‥‥」かう言つて、手紙をビリビリと引裂いて、いつもの外套も着ずに、プイと戸外に出て行つた。

その石町の八百屋の角では、月が好いので、町の若い衆だちが、娘子供と何か言つて騒いでゐた。八百屋の肆には、マントルをつけた瓦斯が青く美しく柿だのバナ、だの野菜物などを照してゐた。子供達は「かげやどうろくじ」を遣つて遊んでゐた。しもた屋の格子戸の中には、ランプが明るく障子に映つてゐた。笑聲も聞えた。あんな手紙を置いて行つて、わざと自分を調戯つて見る積ではなかつたか。お雪は讓の此處に來るのを待設けてゐるのではなかつたか。かう思つて、讓は暫し其處に立留つて、家内の話聲に耳を欹てた。笑聲がまた聞えた。お雪の笑聲もこれに交つて居るやうにも思はれた。かれはガラと格子戸を明けて案内を乞うた。

「靑井てすが、もしやお雪は參つてをりはしますまいか」

ランプを持つて出て來た中年増の女は、讓の顏を見て、鳥渡會釋をしたが、奥の方を見てから、「先程入らつしやいましたけれども、おさきにお歸りになりまして御座いますが──」

「參るには參つたんてすか」

「え、鳥渡お見えになりました」

「何時頃てした?」

「さうて御座ますね」また奥の方を見て、「四時頃て御座いました。娘と鳥渡話してお歸りになりました。

──何うかなさいましたんてすか?」

「え――少し用事が――ではまた」
譲はソヽクサと戸外へ出て了つた。顏を見られるのが辛いのであつた。二歩三歩歩いて、「娘に會つて聞いて見やうかしらん」かう考へたが、「何うせ駄目だ！」と頭を振つて、通の方へとすたすたと歩いて行つた。
今一軒――お雪の乳母の家がある。それは場末の大工の上さんになつて居た。お雪と一緒に一度行つて見たことがある。無論今日は町の中に居るに相違ない。三里もある里――其處には俥も通はない――其處に歸る譯がない。さうだ、無論町の中に居る。探し出さないでは置かない。かう思ふと元氣が出た。
その大工の家に曲る横町の處に來ると、かれの胸はまた早鐘をつくやうに騷ぎ出した。かれはお雪が其處に居て、兎に角かれに逢つて呉れるのを望んだ。結果は何うなつても構はない、兎に角其處に居て逢つて呉れさへすれば好い。大工の家では戸がもうピツシヤリ閉つて、二階も全く暗くなつてゐた。隙間を洩れて來る灯も見えず、唯月が屋根の黑い影を地上に映し出してゐるばかりである。
遠くでは犬が吠えた。
「お免なさい」
それを少くとも五六遍繰返した。漸く奥で返事がした。
戸を明ける前に、「何方ですか」
「菅井ですが」

やがて前の戸を細目に明けたのは、その乳母である。

「お雪はこちらに參つてゐないでせうか」

「え、參つて居りません」

「晝間出たつ切り戻つて來ないんですがな――」

「參つて居りませんがな――それはまア、何うしたつて言ふこんてせう。ひよつとかすると、お里の方にても――」かう言つて、「でも、默つてお出やるといふことは――何うしたこんてせう」

讓は困つた顏をして立つて居た。

「まア、こつちにお入んなされや」

かういふ乳母の言葉の跡について、

「本當に來て居ないんてせうか。もし來てゐるなら、鳥渡でも好いから逢はせて吳れる譯には行かんてせうか。」

「それやもう參つて居さへすりや――」

居るやうにも思はれゝば、居ないやうにも思はれた。て、讓は暫く其處に立つて居た。

「もう、歸つて居さつしやるかも知れねえ」

乳母はこんなことをも言つた。

いつまで其處に立つて居ても仕方がなかつた。て、讓は「ねた處を起してお氣の毒でした。來たら數

へて下さい」かう頼んで置いて其處を離れた。

月の明るい夜更の町をかれは醉漢のやうにして歩いた。何處に行つた？他に行く處がない。あの手紙を寄した男の處？かう思ふと、全身に燃えるやうな血が流れた。「探し出さないで置くものか」かれは拳を握つてかう叫んだ。

ふとまた思附いた。「乳母の家に居るんだ！確かに居るに相違ない。男の處に行つたとは思はれない。そんな深い交情だとはあの手紙では思はれない。あの乳母め、確かにお雪をかくしてゐる！それに違ひない」かう思つてまた二三間取つて返した。「駄目だ！駄目だ！行つたつて駄目だ！」再び立留つたかれは聲を擧げて泣きたいほどであつた。

お雪と別れる？そんなことが出來るか。かれは遂に、拳を顔に當てゝ泣き出した。

かれは何う町の通を歩いたか自分でも分らなかつた。其處等には灯が見えたり、人が通つたりした。月は依然として通の家並の屋根を黒く地上に落して居た。ふと三味線の音が耳に入つたので氣が附くと、其處を折れ曲つた細い通に軒燈が賑かに點いて居るのが見えた。灯の明るくかゞやいた二階には女の騒ぐ聲も聞えた。「こゝは新町だ。己は何處を何う歩いてこんな處に來たんだ」かれはかう言つて、其處から引返した。

「よし、明日、里に歸る途中でつかまえて呉れる」

かれが歸つて來た時には、もう夜が十二時を過ぎて居た。あんな置手紙をしたが、思ひかへして歸つて來たから、何うか堪忍して下さい。かう言つて歸つて居やしないか。かうした願ひも儚ないあだなる願ひであつた。主人夫婦は心配さうなしかも眠むさうな顔をして火鉢に對して座つて居た。

伯母さんは何か二言三言言葉をかけた。しかしかれにはそれが何を言つたのだか耳に入らなかつた。

伯母はかれの跡からランプを持つて二階に上つて來た。「分りませんか、――困つた子だねえ。何とか一言位相談して呉れても好いのだのに……」かう言ひながら、讓の蒼い顔を無氣味さうにして見た。

讓の眼の前には、二十日間お雪と一緒に暮した室が依然としてあつた。お雪の座つてゐた火鉢の前の座蒲團、お雪が昨日默つて裏の畑から折つて來て生けた菊の花、衣紋竹にその人の姿そのまゝにかけてある不斷着、――お雪はまだ其處に居て、鳥渡便所か何かに階下に下りて、いつものやさしい小刻な足音を立てゝトントン上つて來はしないかと思はれた。機嫌の惡い默つたお雪の顔、伯父の家に行つての歸り途の月夜、橋の上に立つての久し振の感興、それが今に比べていかに離れた事實、いかに離れた心持をかれに與へたか。

其間には百年の年月も經たなければ味はれないやうな相違した寂しさが横つて居た。

外套も脱がずに其處に棒立に立つてゐる讓を見て、「讓さん今日は寢る方が好いよ。明日になれば私も

一緒になつてさがして上げるから……さあ、休む方が好い」伯母さんはかう言つて、其處に積上げてある蒲團を敷いて、「さア本當に休む方が好い。今夜は遲いんだから」

「え、寢ます」

かう言つたまゝ讓はまだ立つてゐた。

「本當にさ……明日になりや分りますよ。お雪は身を躱したつて何處に隱れることが出來るもんですか。よく解るから」伯母は無理に讓に外套を脫がせて、傍にある寢衣に衣服を着改へさせやうとした。

讓は漸く氣が附いたやうに「伯母さん、心配かけてすみません……え、私がします、私が着改へます」かう言つて帶を解いて、手ばしこく寐衣を着て、轉がるやうに蒲團の中に身を入れた。

「それぢや本當に氣を落附けてお休みなさいよ。明日になりや、私も一緒に探して上げるから」やさしい伯母さんは、讓の顏を覗くやうにして言つて、寒くないやうに掻卷を叩いて、そして階下に下りて行つた。

その足音の消えて行くのを待つて、仰向に寐反を打つた讓の眼は、猶暫くの間大きく鋭く明いて居た。その眼は薄暗いランプの光に照された天井をじつと見詰めて居た。夜はしんとしてゐる。通りを行く人の足音ももう聞えなかつた。やがて深い深い嘆息の音が聞えた。幾度となく寐反りを打つ氣勢もした。「馬鹿な奴だ!」と言つた言葉の中には、辛い苦しいあきらめられない男性(をとこ)の苦悶が名殘なく現はれて居た。讓は今一度起きて、蒲團の上に座つて、長い間じつと空間を見詰めて居た。

六

山の方に通ふ街道は、町の中頃から分れて、田だの、畑だの、小川だのゝある野を横ぎつて、遠くうね〳〵と續いて居た。機廻りの車が通つたり、早立の旅客が脚胖ばきで通つて行つたりした。朝日は晴れた晩秋の山々に美しい光線を漲らした。

路傍の林の葉を散らしたり萱原の中の赤い實をあらはに吹いたりするこがらしも、今朝は全く跡を絶つて、丘の麓にある百姓家の烟も靜かに眞直に立のぼつてゐた。袷のやうな靜けさ！本當に袷がちでもなければ味はれないやうな朝の靜けさであつた。其の靜かな平和な朝の道を、謙は騷しく波立つ心を抱いて彼方に往つたり此方に來たりしてゐた。

町外れから二三町行つた處に、一軒離れて休茶屋があつた。其處の上さんは、外套を着た三十四五の男から、朝早くいろいろなことを聞かれるのを不思議にした。昨日、此處を若い女が一人通つて行かなかつたか。ひさし髪に結つた背の高い女は通つて行かなかつたか。ことに寄ると、一人ではなく、二人づれであつたかも知れない。かうしたことを何彼ときかれた。上さんは三時頃からならば始終私が此處に出て居たが、さういふ女の人の通るのは見かけなかつたなどと話した。其男は上さんから不思議さうに顏を見られるのが辛さに、「鳥渡其女に話したいことがあるんだが」などと言譯するやうなことを言つ

た。

「まアお入んなされや」

茶代を過分に貰つたので、上さんはかう言つて客に勸めた。柿を盆に載せたりなどして持つて來た。茶も幾度となく湯をかへて來た。

土地の人が通つて行くと、

「お早う」

などと上さんは元氣のいゝ聲をかけた。

客は朝日の袋を袂から出して吸ひ、出しては吸つた。若い心配さうな顏をしてゐるのを上さんは見た。客は吸ひかけた卷烟草を捨てゝ、慌しく通りに出て行つて見たりした。

讓はかうして二時間近く居た。日は段々長けて行つた。かれは自分のして居ることの馬鹿馬鹿しいといふことに氣が附き出した。こんなことをしては居られないやうに思はれて來ると、例の不安が烈しい力で再び頭を擡げ始めた。かれはそゝくさと其處を去つた。

かれの姿は再び町に現はれた。何う考へて見ても、乳母の家に居るとしか思はれなかつた。昨夜の乳母の態度も怪しかつた。一二度は逢つて知つてる間柄だ。何もあんなに冷淡な挨拶をしなくつても好い。……さうだ、確かにさうだ。かれは其方に向つて歩いて行つた。

町の通は明るい日影にかゞやいて居た。國旗がところどころに立てられてあつた。今日は新嘗祭だ。

かう思つたかれは、今日の大祭日を何う面白く暮さうかと昨日考へて居たことを思ひ出した。お雪と一緒に何處かに行つて見やうかと思つて居た。一夜の中に俄然として變つて行つたかれの生活をかれは考へずには居られなかつた。この人々の樂しむ晴れた暖かな大祭日をかうして歩いて居る身が情けなかつた。

郵便局の前を通つた時、兎に角里に電報を打つて置かうと思つて、中に入つて行つた。電報なんか打つたつて仕方がない。一方ではさういふ心の聲もした。奴等ぐるになつて遣つてる仕事かも知れないとも思はれた。それでもかれは電報用紙を一枚貰つて、「オユキイヘデシタ、」と書いて銀貨をチャラチャラ音させて頼んで出た。

乳母の家のある横町にやがてかれは入つて行つた。ふと見ると、其の格子戸の前に後姿を見せて立つて居る女がある。紅い袖口が見える。帶が見える。お雪に似てると思ふと、此方を向いた。確かにお雪だ。かれは駈け出した。

此方を見た女は、慌てゝ家の中に姿を隠した。

乳母は矢張居ないと言つた。

「居ないなんて言はせない。今日は騙されない。現に僕は見たんだ」謙は聲を震はして言つた。

「今、其處に居たのは、あれはお雪さんぢやごわせん。あれは近所の女だが」乳母は飽までもかくさうとした。

讓は爭つて居る暇がない。蒼い昂奮した顏をして、ヅカヅカ上つて行かうとした。「お前さんも解らねえ奴だナ。居ないと言ふのに、ヅカヅカ人の家に上つて來なさるか」頑固な乳母は高い聲で怒鳴るやうに言つて、讓の外套を引いた。

讓もかうなつては激さない譯に行かなかつた。

「このうそつき婆！」

かう言つて、かれはそれを振切つて奧に入らうとした。乳母は遣るまいとした。此處に忽ち一場の爭鬪が起つた。讓は忽ち鐵拳を振つて乳母の横顏を打つた。「この野郎、打ちやがつたな」と言つた聲は高く四邊に響いて聞えた。其聲を聞き附けて慌てゝ裏から遣つて來た大工は、外套を着た背の高い男に自分の嬶が引摺られて居るのを見るや、いきなり飛蒐つて、滅茶苦茶に其男に打つてかゝつた。拳と拳とが一しきり空間に行違つた。近所の人々は何事かと急いで飛んで來た。家の前には忽ちにして黑山を築いた。

「よくもうそをつきやがつた。己のお雪を己が探すのに文句があるか」絶えずかう怒鳴る讓の蒼い顏は四邊に際立つて凄しく見えた。やがて巡査が劍をヂャラつかせて遣つて來た。

群集の中には、「何だ、上町の〇屋の息子さんぢやないか」などと言ふものもあつた。

七

讓は本家から來た人達につれられて父母の家に行つた。かれは再び父母の監督の下に置かれる身となつた。

町では其噂がそれからそれへと傳へられた。新聞にも書かれさうにしたのを、讓の友人達が行つて、漸くそれは揉消した。「外聞がわるい。逃げた女房の尻を追つて歩くやうな子を持つて――」かう母親は恥かしさうに近所の人達に言つた。父親は多くは默つて居た。

讓は以前の六疊の間に起臥して居た。役場の方は病氣屆を出してそれから全く缺勤した。二十日間お雪と生活した二階からは、蒲團やら机やら本箱やらがやがて送り歸されて來た。かれは日常の好い座敷にごろりと横になつて、頬杖をついたり、組んだ手を後頭部に當てたりして、時間の經つて行くのを見詰めて居た。

痛恨、悲憤、忿怒、さうしたものが烈しい力で押寄せて來て、檻の中の獸のやうに暴れ廻つた時のことがあり〳〵と眼の前に見えた。父母をも罵倒した。兄弟をも突飛ばした。歸らぬと言ふのを無理に伴れられて來た時のあばれやうはなかつた。「親の世話になどならない。僕のしたことは僕がする。」かう言つて、讓は大道の眞中で怒鳴つた。

かうした狀態に到達したのは、皆な親達か手を下してしたことだ。家に居られないやうにお雪をしたのは誰だ。度々里に逃げて行くやうにしたのは誰だ。親達の氣に入るやうな嫁を迎へなかつたからとて――お袋が心で定めて置いたあのお多福を貰はなかつたとて、それで子はかういふ運命に邂逅せなければならないのか。そんなことがあつて堪るものか。――反抗の念が時としては火のやうに燃えた。

親達の遣つたことが、時を經るに從つて段々讓にも解つて來た。初めから親はお雪を出すつもりで居た。それで嫁の里や、その親類や、その周圍の人達などに對しても、打釋けた親しい態度を取らなかつた。さうでなければ、お雪が伯母の家に遁げた時にも、向ふから出て來た親類の人に對して、もう少し溫和な相談をしなければならなかつた。親達は始めからかうなる日の來るのを期待して、二階で暮した二人の二十日間の生活の破綻を待つて居たのだ。家に伴れられて來た時、讓は父親の顏を見て、「勘當した子息は構はないで放つて置いて下さい」かう叫んだことを思ひ出した。

お雪の里の方の意向も解つて來た。力になつて呉れてやさしいと思つた伯母も、讓を思切らしめるために熱心にお雪を說いた一人であつたといふことも知れて來た。かれ等二人は兩方の家に釀された危險な空氣の中に暢氣に日を送つて居たのであつた。

飽きも飽かれもしない二人の間を兩方の親達が割いた。かう思つたかれは居ても立つても居られない

やうな無念を感じた。女も憎い。後姿を見せて慌てゝ駆け込んだ女も憎い。しかしそれよりもさういふ態度にお雪を誘つて行つた奴等が一層憎かつた。「唯は置くものか。乾度思ひ知らして呉れる」かれはかう叫んだ。

「默つて逃げて行くやうな女に未練を殘すものぢやない」

母親は幾度もかう言つて聞かせた。

田舎の伯父も話を聞いてわざわざ出かけて來た。「わしはまた惚れ合つたものなら、東京に行つて暮すも好いと思つたが、女の方から出て行くやうなのでは仕方がない。……いくらも好いのがある。お雪なぞよりもつと綺麗な娘があるから、それを貰つて、見かへてやれ！男がそんなことにぐちぐちしてゐては仕方がない」かう半ば慰めるやうに、戒めるやうに言つた。

友達などもそれに同じやうなことを言つて慰めた。ある友達はお雪の町に出て居た頃の不身持などさへ話した。

火事の跡に雨が降つたやうな佗しい日がかれには續いた。激昂の後に絶望の時が來た。かれは誰も心を知つて呉れるものゝないのを嘆いた。かれに取つては、お雪の町に居た頃の不身持などは何でもよいのである。どんなに容色の好い娘があらうとも、それに代へられるやうな手輕な苦痛ではないのである。戀人があらうがあるまいが、そんなことは問はないでも好い。お雪の髮、お雪の眼、お雪の肌、お雪の

肉體、それがかれにはなくてはならないのだ。未練？未練が何だ。世の中に笑はれる位は何でもない。男がすたる位は何でもない。お雪さへ自分の傍に居て呉れたら――

女を憎む心と、女を憐む情と、女を恨む念とが縺れ合つて執念深くかれの胸に附き纏つた。そんなことはないとは知つて居りながら、昨非を悔ゐて、女が詫びて歸つて來はしないかとも思はれた。

かれは毎晩のやうに夢に壓はれた。そしてそれは大抵刄物を女の肌に當てたやうな夢であつた。白い乳房からは紅い血がだらだらと流れた。その血汐に塗れた女の肌を抱いてかれは泣いた……

『一人、己一人だ！』

夜の臥床に入る時には、かれはいつもお雪を思ひ出した。樂しかつた月日、それももう過ぎ去つた。紅い房のついた枕に漲つた黒い房々した漆のやうな髮、それももう其處には居ない。あの髮と、あの肌と、あの肉體とをもう誰れでも自由にすることが出來る！

かれは夜着を被つて歔欷げた。

家の人達は、日數の經つのにつれて、讓の心の段々落附いて行くのを待つて居た。成たけそつとして置くやうにもした。

讓は矢張蒼い神經性の顏をして居た。

十一月でなければ見られないやうな晴れた好い日が續いた。遠い山の頂にはもう雪が白くかゞやいて

居た。譲の居間の前の庭には黄い豆菊が一杯に咲いて居た。

家で親類達が寄り集つて、譲の善後策について相談したのは、そのよく晴れた日の一日であつた。何うも女がその近所に居ては不安心だ。今の様子ではどんなことをとても仕出かさないとも限らない。いつそ一年なり二年なり東京に出しては何うだ。かういふ話がその席上に出た。

「それが好い」

賛成するものも多かつた。

「東京ならよろこんで行くつて言ふかもしれん」

かう言ふ人もあつた。

父親が一應考へて見るといふことで、その相談の席は濟んだ。それからまた幾日か經つた。ある日、田舍の伯父が遣つて來た。伯父が譲にその話をすることになつた。

「何うだ、お前、そんなにしてぐづぐづして居るより、東京に行つて見る氣はないか」

かう伯父が言つた。

譲は伯父の顏をじつと見た。

「お前もあんなに前から行きたがつてゐたんだから、行つて見たら何うだ。行く氣があるなら、己が一つ父に相談して見てやるがなア」

譲は行つても好いやうな行かなくつても好いやうな煮え切らない返事をした。そんなことは何うでも

よかつた。

また幾日か經つた。

落附いた靜かな氣分になつて行くのを家の人達も見た。此頃では以前のやうに物を言つても、返事をしないやうなことはなかつた。

唯さびしさうにして居た。

八

一夜、かれは友達に伴れられて町の遊廓に行つた。

春駒——さういふ女郎が其處に居た。かれがお雪をまだ妻にしない前には度々其の友達と一緒に其處に通つて行つたものであつた。多い其家の女郎の中では、小づくりな、色の白い、華奢な、やさしい女で、初會の時から讓には氣に入つて居た。

本を讀むことが好きで、小說や雜誌を持つて行つて遣ると、何を貰つたより喜ぶといふ女であつた。他の女郎のやうに酒を飲んで騷いだり大口を利いたりするやうなことはなかつた。賑かな大勢な女郎の中にいつも獨りさびしさうにしてゐた。

讓は雜誌に載つた自分の詩や文章をよく其女に讀んで聞かせた。可哀相な小說の一章を讀んで聞かせたこともあつた。

生れは山の向ふの隣國で、此處に賣られて來る時には、馬に乘つて、さびしい高い峠を越して來た。裏の窓から雪に光る遠山を見ると、來た當座は故郷のことが思ひ出されて仕方がなかつたなどゝ其女は讓に話した。

其中不圖したことからお雪と戀に落ちて、かれはすつかり其女のことを忘れて居た。

町から少し離れた處にある廓は賑かに灯にかゞやいて居た。三味線や鼓の音が到る處で聞えた。三階の大きな家の一間では、鉢卷をした客の躍つて居る影が鮮かに障子に映つて見えた。兩側に並んでゐる張見世は繪のやうに綺麗であつた。

春駒はもう居なかつた。この秋の初めに、好いお客が出來て引かされて行つたとの話である。その弱々しいやさしい心に縋つてなりとこの癒し難い心を慰めやうとした儚い希望――それすら遂げることが出來なかつた。讓は浮かぬ顏をして、佗しさうに座つて、友達が酒を飲んで、女を傍に引寄せたり、調子外れの聲で唄をうたつたりするを唯默つて見て居た。

綾衣といふ背の高い元氣な丸顏の女がかれの相方として出た。「何だか浮かぬ顏をして居るねえ、此方は」などと言つた。友達が「綾衣さん、しつかり頼むぜ、その方は失戀して居るんだから」と言ふと、「失戀――さうなの、本當に貴方失戀？失戀なんか見つともないからおよしなされや」傍から女達がわいわ

い[illegible]した。

それでも床にだけは入つたが、かれはすぐ其處から出た。かれはさびしい堪へ難い心を抱いて、田圃を通つて暗い町の暗い家の方へと歩いて行つた。

九

ある日の午後、かれの姿は町の大通から裏町へ出て、其處から畠の中の細い道を通つて山の方に通ずる街道へと急いで歩いて行くのが見えた。

お雪が里に歸つて居るといふ報知を今朝かれは確かな人から聞いた。

こんな風にしては別れられない。是非一度女に逢つて心を聞かなければならない。かう思つたかれは、此頃家での監督が緩くなつたのを利用して、友達の家に行くと言つて、そして出かけて來た。

折々日影はさしたが、雲の多い風の寒い日であつた。路傍の萱や薄は枯れてガサガサと音を立てゝ居た。かれは急いだ。唯急いで歩いた。町の姿の後（うしろ）に見える中は、あとから追手でもかゝつて來はしないかと思はれて安心が出來なかつた。

かれの前には砂利の敷いてある路が長くうねうねと續いて居て、その向ふには、高い山の下に小さい岡が重なり、そのまた下には丘が幾つとなく重つて起伏して居た。最初の村の樹立の中からは、新しい

茅葺屋根だの、高い半鐘臺だのが見えて居た。

近い山の中腹からは、處々の炭燒の烟が曇つた空に低く漂つて居た。

かれは半鐘臺のところまで來て、ほつと呼吸を吐いた。此處まで來れば安心だ。かうも思つた。かれは其處に緣側の長い庭の廣い百姓家があつて、一杯になつて晩稻の收穫がひろげて干されてあるのを見た。その隣りの飲食店では旅客が腰をかけて饂飩を食つて居た。

かれはとある店で朝日を一箇買つた。其處でかれは緩くなりかけた帶を締め直した。

其處からかれの心は全く女の方にのみ向くやうになつた。

「居るには違ひない」

かう思ひながら歩いた。

「逢はせるだらうか。……尋常では逢はせない。屹度逢はせないに相違ない……。しかし逢はずには置かない。逢はずに歸らない。……何も無理なことを言つて行くのではない。逢つてお雪の心を聞かせて貰ひさへすれば好いのだ。親と親との權力で互の戀を割く、それが心外だ、それでは別れられない。それでお雪の心を聞きに行くのだ。無理なことは少しもない」

さうしたことをかれは幾度となく心の中で繰返した。「しかしお雪が逢ふか何うか。」時にはかうも考へた。「女の氣が腐つて居て、逢はなかつた時には何うする。……男の一分が立たなかつた時は何うする。

「それでも貴様はおめ／＼と歸つて來るか」

から考へると、かれは苦しくなつた。心臓の鼓動が俄かに高くなつて來た。乳母の家での一活劇が再び繪のやうになつて眼の前にちらついた。

女の心のほども疑はれた。友達が報告して行つた女の不身持が新しい事實となつて襲つて來た。友達の言つたのは手紙をよこしたあの男かも知れない。あの男との關係が切れないで、それであゝして逃げて行つたのかも知れない。肉の關係があつたのかも知れない。かう思ふと、男には解らない、女の淫猥な腐つた心が犇と胸に迫つて來て、天も地も汚い不潔なもので充たされたやうな厭な不愉快なつき詰めた心になる……。

「そんなことはない、お雪はまだそんなに腐つた女ではない」

考へるのが苦しいので、かれはかう獨りで辯護した。

「存外やさしい心持で逢つて與れるかも知れない。あの時は申譯がなかつた。ついあゝした行がゝりでむしたもんでもしたかな。」かう言つて笑ふかもしれない」こんな風に思返しても見た。

路は綺麗な谷川に添つて居た。白く泡立つた瀬が見えたりかくれたりした。サアと流るゝ水の音が段々狹くなつて行く谷に反響して聞えた。

百姓が畑に出て居た。穀物を載せた機廻りの車が幾臺も通つて行つた。鶏の群の餌をあさつて居る農

もあれば、新しく建てた家屋の荒壁のまゝで人が住んで居るのもあつた。實を取つたあとの棉の木は枝ばかり際立つて四邊に見えて居た。橋の懸つて居る處もあつた。

お雪との縁が成立つて、此道を歩いた時のことが不思議にも讓にはくり返された。其時はどんなに愉快であつたらう。車で通つたこともあれば、歩いて通つたこともある。忘れもしない、里歸りに、峠の下に丁度車がなかつたので、其處からお雪は裾を端折り、自分は尻を捲つて歩いて來たことがあつた。其時、お雪は庇髪に結つて、白いリボンをかけてゐた。何んなに樂しかつたらう、何んなに睦しかつたらう。戀を遂げた極樂境、體と體とが一緒になつて、自分の見るものはお雪も見、お雪の喜ぶものは自分も喜び、自分の指さすものはお雪も指した。丁度四月の末で、山には櫻が白く咲いて、鶯が好い聲で鳴いて居た。讓はそれを文に綴つて東京の雜誌に投書した。雜誌の選者は『里歸の若い二人の睦しさが眼に見えるやうだ』といふ批評を添へて翌月の雜誌に載せた。本當に蜜のやうな睦しさてあつた。それが一年經つか經たないのに、こんな風になつて行くとは誰が思はう?

それからお雪を初めて見た時のこと、手紙を取交した時のこと、お雪の里の村にお祭があつて一緒に出懸けたこと――さうしたことが絶えず眼の前を繪卷物のやうになつて通つて行つた。鎭守の祉の前の廣場に芝居の棧敷がかゝつて、田舍の見物がぎつしりそこに詰つてゐた。お雪とかれと並んだ姿は人々の眼を惹いた。『あれが婿どんだとよ。えらいよう似合うた初雛様だ』などゝいふ聲が絶えず二人の耳に

入つた。……其時舞臺に出た定九郎や勘平の姿とかれとお雪の並んだ姿とが一緒になつてかれの眼を掠めて通る。ごたごたした雜踏、大きな口を開いて物を食つてゐる百姓、醉ばらつて成田屋などゝ聲をかける男……いろいろなことが縺れ合つて、こんがらかつて、際限なく浮んでは消え、消えては浮んで來る。

かと思ふと、不思議な空想が果しなく起つて來る。氣が附くと、かれは思ひかけないことを頭に描いて居た。群集を前にした廣場、一段高い處に立つてゐるのは、死刑を宣告された若い一人の青年であるそれはかれである。かれは今死に臨んで一場の告別の言葉を述べやうとしてゐる。群集は喚いたり叫んだりしてゐる。手を振り上げてゐるものもあれば、人をつき飛ばして先に出やうとしてゐるものもある。野原のやうな都會のやうな處で、背景には黑い雲が幕のやうに垂れ下つてゐる。集つてゐる人間も日本人ばかりではなく、フランス人もドイツ人もロシア人も居るやうである。かれの一言は滿場の人の血を湧かせるやうなものである。かれの死刑宣告は社會の大事件で、社會はかれに多大な同情を注いで居る。社會を動かした事件でこれほど大きな意味の深い事件はないと思はれて居る。……かれの一言一句は火である、血である、銳利なる刄である。かれの告別の言葉は始つた……この廣場に集つてゐる諸君、……予は……予は……何も言はない中に、ワッといふ聲が嵐のやうに聞える……群集の動くのが眼に見える。……神よ……メシアよ……かれはいつか新しい使命を臨終の場に宣傳する再生の基督になつてゐる……

矛のやうな鎗がヒカヒカと四邊にかゞやく。馬に乘つた異樣な形相をした兵士が列を為して向ふの方

を通つて行く。砂烟が黄ろく颺つて、それに反映する黒雲が一種凄しい色を呈してゐる。夕日が死のやうな厭な佗しい光線を投げてゐる……諸君、予が斷頭臺の露と消える光景をよく見ておかれよ……凄しい叫喚が手に取るやうに聞える。死の時刻の來たのを報ずる號砲があたりに響く。斷頭臺が厭な音をもて動き出す……

重い苦しい氣分が續いた。氣が附くと、かれは街道から岐れた峠の方への道をたどつて居た。頭がガンガン痛む。お雪の顔が見えては消える。空は全く曇つて、雨になる前の暗い霧が、路傍の葉の落ちた林を籠めた。

峠の上の茶店――お雪と通つた時にいつも休んだ茶店、其處の婆さんは、汚い外套を着て居る譲を、それとは氣が附かずに迎へた。冬になつてからは、近所の村のものが通るばかりで、茶店に休んで行くやうな旅客もなかつた。手が切れるやうに冷たいので夏は評判な前の清水も、徒らにチヨロチヨロと落葉の中に落ちてゐた。

かれは色の褪せた毛布を敷いてある縁臺に仰向に倒れて、長い間默つて煤けた天井を見て居た。婆さんが何か言葉をかけたのをも、温い茶を其處に持つて來たのをも何も彼も知らずに居た。

頭が絶えずガンガンする。

暫くして身を起したかれは、其處に萎びたさざ柿が五箇六箇置いてあるのを見た。かれは山坂を越え

て來て、いくらか咽喉が乾いて居た。かれはそれを三箇ほど取つて自分の傍に置いた。婆さんは柄のついた切出しを其處に持つて來た。

自分で皮を剝いて、旨さうにして食つたが、ふとその鋭利な小刀が氣に懸り出した。「さうだ、こいつを」と思つて見て、自分で自分の恐ろしい考を起したのに戰慄した。小刀はいかにもよく齒がついてゐた。

裏で誰か婆さんを呼ぶ聲がした。「あんだよ、今行くだよ」と言つて、婆さんはぐづぐづしてゐた。渠は柿の價を聞いて、白銅の銀貨を一つ其處に投出した。そして釣錢は要らないと言つた。婆さんは「有難う御座りやす、難有う御座りやす」と幾度も禮を言つて、草履をぺたぺたさせて、呼んでゐる裏の方へ行つた。

「今だ！」

かれはかう思つて、其小刀を取つて、慌てゝ懷の中にかくして、そして急いで其處を出た。一二間行くと、一散に驅出して、暫くは足を留めなかつた。其間にもかれは二三度振返つて見た。

少くとも七八町は驅けた。とある岩の角の處に來て漸く足を留めたかれは、手の汗ばむほど堅く握りしめた懷の中の小刀を出して見た。齒の處がいかにも鋭利さうに見えた。これなら何でも出來る。かうも思つた。かれは口の邊に凄い會心の笑を浮ばせた。

袂から紙を出して、何だか解らぬやうに、それを包んで、そしてまたそれを懷の中に收めた。

かれは步いて行つた。

其村に入つた時には、もう日が暮れかけて居た。雲は益々低くなつて、今にも雨が落ちて來さうに思はれた。畑には塵埃を燒く火が處々に燃えて、赤く薄暮の空氣を彩つてゐた。一日仕事に勞れた百姓達は、鋤や鍬をかついで家の方に歸つて行つた。

かれの前には、夕炊の烟に包まれた村が展げられた。白壁だの、樫の垣だの、茅葺屋根だのが見えた。山と山とが迫つて、谷川の瀬の音が身に染るやうに聞えて來た。

かれは路に茫然として居た。村の大通から傍道に入つて、それから少し行つたところが其家である。青々とした大根や、桑などの畑が其前にあつて、奥に草葺の大きな家屋が一軒ある。半分白く塗つた物置とも土藏ともつかない建物がその右の方にあつた。廣場に面した長い縁側の雨戸はもう閉つて居た。

かれは暫く立盡して居た。胸がさまざまの考に戰へた。心臟の鼓動が自分にも解るほど高くなつて來た。此處までは何も考へずに遣つて來たが、かうして自分が直接(ちか)に訪問するといふことは、いかにも突飛であつた。逢はせて呉れるものも逢はせなくなる恐れがあつた。誰か第三者に頼んで話して見て貰ふ方が順序よくもあり便利でもある。しかし此村にはさうした親しい人もない。それに、人頼みでは成功した時は好いが、成功しない時には自分で滿足が出來ない。第三者を仲に立てゝは十分に互に了解することが出來ないからこそ、かうして獨りで出懸けて來たのである。卒直に訪問しやう。默然もして見やう。かう決心はして見ても矢張胸が戰へた。かうした幕を演ずる役者としては讓はまだ餘り壯若かつた。

人の足音が聞えた。譲はびつくりして傍の木蔭に身を躱した。それは向ふの畠道を人が通つて行くのであつた。譲はほつと呼吸を吐いた。「ちつとも躱れる必要はないぢやないか、馬鹿！」かう自分で自分を罵つた。けれど矢張躊躇せずに居られなかつた。……さうかうして居る中に日が全く暮れた。腹の空いたのを感ずると共に、俄かに寒くもなつて來た。三里の山路に疲れ果てゝも居た。

其家から誰か出て來る氣勢がする。その人は何か高い聲で話しながら出て來た。くゞりを明けた家の中には、風呂の火の赤く燃えてゐるのが鮮やかに見える。譲はその出て來た人にお雪の居るか居ないかを聞いて見やうかと思つて居る中に、その足音はかれの躱れた木蔭の横を掠めて向ふに行つて了つた。あとはしんとした。

何時までかうして居たつて際限がない。かれは後からある力に推され、前からある力に引かれるやうにして、其家に通ずる路に出て行つた。井戸の傍を通つて、その明るいくゞり戸の前に來てまた立留つた。何か賑かに話して居る聲がする。聞くともなく聞いて居た。と、急にくゞり戸が開いて、またそこから人が出て來た……前に男が立つて居るのを見て、出かけたのを止して、無氣味さうに、

「誰だな――」

譲はどぎまぎして返事もしなかつた。と、其人は半分出し懸けた體を中に入れて、「誰かそこに立つて居るぞな――薄ッ氣味の悪い」かう今迄話して居た此家の召使の男に言つた。

召使の男は顔を出して見て、

「誰だな――何か用かな」

「町から來たんもんだが――誰か兄さんか誰かに……」

讓の聲は顫へた。

「町からッてばかしては解らねえが、誰だな」

「町の菅井から來たんだが」

菅井といふ言葉はすぐ事件の輪廓を鮮やかに男に呑込ませた。闇に微白く出て居る讓の顏をもう一度見て、急いで奥に引返して行つた。他の一人の男は輕く挨拶して表へ出て行つて了つた。

奥に引込んだ召使の男は、容易に出て來なかつた。何かごたごたと話をしてゐる氣勢がする。表では讓の胸が烈しく波打つ。一分待つのも長いやうな氣がする。吉か凶か　長い間を置いて漸くに出て來たのは、お雪のすぐの兄になる男であつた。氣の毒さうに揉手をして、其處に立つた。「まア、上れ」とも言はなかつた。

「お雪に逢はせて頂きたいてすが」

讓の方からかう切出すと、

「逢はせねえこともないてがすが……」少し言淀んて、「本當にお氣の毒てがすが――わざわざ遠い處をかうやつて來て下すッたんて、逢はせて上げたいんてすがな、逢はせられないやうな行懸りてがして……」

「それは知つてるんです。僕がかうやつて來るのが間違つて居るのは、自分でもちやんと承知して知つてゐるんです。そこを折入つてお願ひに上つたんだが――」

お雪の兄は氣の毒さうにして、「當り前なら、かうしてわざわざ來て下すつたのを、「上れ」とも申さないなんて、そんな不人情なことは言はれないんでがんすがな……今も貴方がお出だと言ふんで、爺やお袋とも相談したんですがな……どうか、それは斷つた方が好いと言ふんで……」また揉手をして、「本當に貴方にはお氣の毒でがんすが……」

「逢はして頂く譯には參らんでせうか」

讓は泣きたいやうな心持を押へて歎願するやうな調子で言つた。

「どうも道でないこんですから」

「決して危險なことなんぞしやしません。それは僕も惡いんだ。あんなことを乳母の家でしなけりやよかつたんだけれど、ついはづみであんな具合になつて了つたんだんだから――何うか逢はして貰ひたいものですが」

「それは駄目でがすがな」

讓は困つた風で暫し默つて立つて居た。

「何うか不人情と思はねえで、今夜は歸つて下さい」かう言つて、兄はくゞり戸を閉めやうとするので、

「もし、もし」

と譲は慌てゝ呼んで、「何うしても逢はせては呉れられないでせうか」

その返事はなかつた。兄の奥に入つて行く足音がした。

譲は戸の傍の壁に凭りかゝつて歎息をついた。最後の絶望！何うせさうとは思つたが、想像したのと事實に打つかつたのとではその絶望の度數が夥しく違つて居た。かれはかれの體が地上深く陷ちて行くやうな氣がした。絶望につゞいて忿怒の情も烈しく起つて來た。しかし一番かれの頭を刺戟したのは、お雪、こひしいお雪に逢ふことが出來ないといふことであつた。

お雪！お雪！情いお雪！こひしいお雪！かれの頭は麻のやうに亂れた。

風呂の火は靜かに燃えて居た。四邊はしんとして居た。

くゞり戸の一寸位閉め殘してある處にかれはまた顔を寄せて、

「もし、もし」

かう呼んで見た。返事がなかつた。

譲は歎息を吐いた。

「もし、もし」

暫くして又呼んで見た。

居ても立つても居られないやうな苛々した氣分と、泣いても喚いても足りないやうな氣分とが混り合つてかれの全身を動搖させた。かれは何うすることも出來ない自分の身を先づ粉韲して了ひたかつた。

風呂の火がチヨチヨした。
「もし、もし」
また呼んだ。
今度出て來たのは總領の兄であつた。この兄は縣廳のある町に出て少しは學問をしたことがあるので、譲とは話も合へば、氣質も合つて居た。
「ヤア、兄さんですか」譲はわざと砕けて出て、「本當に申譯がないんです……」
「でも君、無理は言はずに、今日は歸つて呉れ給へ。」總領の兄は直截な調子で、「逢はせられるものなら、お互にこんな思ひをしないで逢はせるよ。僕の方だッて困るんだから」
ふと東京行のことが譲の胸に浮んだので、
「實は兄さんだから言ひますが、僕も東京に行くことになつたんです。彼方に行けば、逢ふことが出來ない。何うかそれまでに一度逢ひたい。そして別れるものなら、綺麗に別れたい。お互に心を殘さずに別れたい。かう思つて爺やお袋には默つて來たんです。何うか、兄さん、一度、僕の兄さんになつた好誼で、お雪に逢はせて下さい。鳥渡でも好いですから」
兄は困つた風で暫らく默つて居たが、
「兎に角、今日は爺もお袋も困るッて言ふんだから……それは君には氣の毒だが、今日は溫和しく歸つて呉れ給へ。君も男だ」

譲はその言葉に少しく激したといふ風で、

「ぢや、私の來たことをお雪に知らせて下さい。私がから遣つて來たことを知らせて下さい。それで逢はないと言ふんなら好いですから」

「それは知らせるけれど」

「まだ知らせてないんでせう。……一體、親だの兄弟だのが、自分達の家に都合がわるいと言つて、他をもあかれもせぬ仲を」

「まア、そんなことは此處で言はんでも解つてるよ。兎に角、君が遣つて來るといふことが道でないんだ。僕等にしても、君に今此處で、しかも夜、妹に逢はせることは出來ない」

「兎に角お雪に知らせて下さい」

堪らなくなつたといふやうに、譲は聲を擧げて泣出した。

沈默が續いた。

兄も默つて立つて居る。

「淸太！」

奥から父親らしい聲で呼ぶ聲がする。

「淸太！淸太！」

兄は引返して行つた。奥で何か話をする氣勢が續いて聞えた。しかしそれもやがて絶えて跡はしんと

なる。

譲は拳で涙を拭ひながら下唇を堅く堅く噛んだ。女が憎い……かういふ眼に逢はせる女がつくづく憎くなつた。知らないでゐるのか、そんな筈はない。己が來たのを知らないでゐる筈がない。お雪が變心したに相違ない。あの淫婦！

一方ではまた人の情の頼み難いことがつくづくと思ひ當る。義兄と頼んだ人、舅姑と頼んだ人、その人達が婿と呼ばれた男を、たとへどんなことがあらうとも、この掌をかへしたやうな取扱は何事だ。上れとも言はない。遠い山坂を越えて來てさぞ勞れたらうとも言はない。腹が空いて居るだらうとも言はない。只歸れ、歸れとは何事だ。

「もし、もし」

また呼んで見た。

くゞり戸をがたがた言はせた。

矢張何の返事もなかつた。

かれは猶暫く其處に立つたり蹲踞んだりして居た。ふとお雪の居る氣勢でも聞きたいと思つた。譲は中庭を通つて、こつそり裏の方へと廻つて行つた。

其處に厠がある。其處の雨戸も堅く閉つてゐるが、隙間から灯がちらちら見える。かれは其處に立つ

て、默つて耳を欹てた。矢張何の物音も聞えて來ない。しんとしてゐる。

其處の六疊、其次の八疊て、里歸りの祝ひをした。親戚達が其處に大勢集つて、酒を飮んだり唄を唄つたりした。忘れもしない、その六疊は其夜二人が寢たところだ。何んなに二人は睦しかつたらう。何んなに二人は樂しい私語に耽つたらう。二人は其夜は終夜目覺めて居た。……お雪は居るに相違ないが、その氣勢位はしさうなものだ。かう思つてかれはまた呼吸を殺して耳を立てた。矢張何の音もしなかつた。時計のセコンドの音が聞えるばかりてあつた。

……腹が堪らないほど空いて居た。……とても駄目だ。憎い、憎い女だ……一家鏖殺にして呉れなければ腹が癒えない……覺えて居ろ……乾度この怨はかへして呉れる……かう思ふと、一方ては闇の中にかうして立つてゐる自分が馬鹿々々しくも思はれる。ふと氣が附くと雨がぽつつりぽつつり降つて來た。

俄かに人聲がしたと思ふと、

「あきらめて歸つたと見える」

「何處にも居ないか」

「何處にも居ないやうだ」

「あゝいふ思詰めた人間は何をするか解らんてな」

かういふ二三人の會話が聞えた。

闇が一ところ明るくなつて、やがて其處に提灯が見えた。

かれは見つけられまいと、勝手を知つてゐる裏の方から、竹籔の中を通つて、芥溜の傍を拔けて、勝手元のところへと行つた。何うせ今夜は駄目だ。兎に角此處を去らうとかれは決心した。畠から垣を破つて通りへ出た。

雨は繁く降つて來た。腹は空いて居る。體はヘトヘトに疲れて居る。もう何うでも好いといふ氣にもなつた。かれは知人のないこの村で、何處に食を求め、何處に寢る處を求めるかといふことを考へる力もなかつた。かれは闇の中の樹の幹に身を凭せてボンヤリしてゐた。

ふと友達の親類で、里歸の時の祝宴に列つて居た農家を思ひ出した。かれはその方に足を向けた。

十

藁を打つ音が何處かでして居る。暗黑で道も何もさつぱり解らない闇の中に、ほつつり灯の影が見えた。かれは入口らしい處を漸く探し當てゝ、案内を乞うた。

藁を打つ音が矢張して居る。

「御免なさい、御免なさい」

「それでもまだ返事がない。

「御免なさい！」

漸く奥から誰か出て來る氣勢がした。やがて薄暗いランプを手にして、六十位のお婆さんが姿を現した。障子の破れて居るのが洋燈の光にそれと見えた。

「誰だんべい」

お婆さんはすつかり忘れて居た。名告つても解らなかつた。頭の髮の毛から全身雨にぬれて立つて居る男をお婆さんは怪訝さうにして見た。

仕事場の方に行つて、

「誰だんべい。菅井ッて‥‥達の友達だッて言んだがな」

藁を打つ音がぱつたり止んだ。「菅井？あれだんべい、それ、其處の清太の妹の婿殿だんべい」

「さうだ‥‥やつと思ひ出した。お雪姐の旦那どんだ‥‥まア上らつしやれ」

躊躇する場合でもないので、讓は點滴の垂れる外套を脱いで其儘上らうとした。洋燈の光で見ると、足袋も夥しく泥にまみれて居た。で、かれはそれをも脱いだ。

「御迷惑でも今夜一晩泊めて戴く譯には行かないでせうか」

讓はすぐから言出した。

「何故や？本家さア泊つたら好かんべいがな」

「泊める處か、内にも入れて呉れないんだ!」
「お雪の姐、昨日見えたつけがな」
讓は掻いつまんで其話をした。
たまげたやうな顏をして、婆さんはそれを聞いてゐたが、「さうかな、それでかな、お雪の姐の此頃ちよいちよい見えると思つたのは、……ふむ、……さうかな、内にも上げねえ。犬猫のやうにして追かへした。それはさぞ困らつしやつたんべい……」
て、婆さんはまた仕事場の方に行つて、その話をした。低い訥るやうな聲が暫しの間聞えて居た。「わざわざな、來たものを、一目位逢はせたッてよかりさうなもんだにな……この雨の降るのに」から言つた婆さんの聲が高く聞えた。
「本家のやうな綺麗の寢道具は無いが、それさへ構はねえけりや、泊つて行くくれゐ何でもねえだが……」婆さんは其處から出て來てかう讓に言つた。
「何うか、一晩泊めて下さい。御恩は忘れませんから」
讓は蘇つたやうな氣がした。
「やれやれ、えらい眼に逢ひなさつたな」婆さんは、火鉢の火をかき起しながら、「まア、こつちに寄んなされ。寒かつたんべい。山はもう寒いだ……さうかな、此頃、逢にも逢ひなさつたかな……丈夫で居るだんべいな……この正月には來るッて言つてゐたが、あれも忙しい體だからな」鐵瓶に觸つて見て、

「丸で水だ。少し待ちなれ。今、すぐ沸かすて」から言つて勝手の方に行かうとした。

「お婆さん、まことに申兼ねるけれど、僕はまだ飯を食はないんだが……」

「飯？夕飯をな」驚いたやうに、「飯も食はせないのかな」

「飯どころか。戸の内にも入れないんてすからねえ」

「それはまア腹が空いたんべい。何にもありアしねえが、わり飯に漬物位はあるだ」

やがて婆さんは立つて行つた。勝手て七輪に火を起す氣勢がした。

讓は顔に掌を當てゝ、今夜の活劇を思ひ出さうとするやうに深く深く考へ込んて居た。義兄弟や舅姑達に引かへて、他人の親切をも考へずには居られなかつた。思はず嘆息が出た。

仕事場の方て、膝をパタパタと叩く音がしたが、やがて岩乘な背の高い爺さんが障子をあけて此處に入つて來た。

「今夜は飛んても無いお厄介をかけまして……」それと見ると、讓は丁寧に挨拶をした。

かれは爺さんを相手に種々な話をした。別れるやうになつて行つた一伍十什、双方の親達の感情の齟齬、今夜の出來事、最後に東京に行くといふことを事實のやうに話して、「てすから……もう東京に行けば、何年にも逢はれるか逢はれないか知れないから、一度逢つて、此方の心も話して、別れなけりやならないものなら、止むを得ないから別れるとしても――一度逢ひたいと思つてやつて來たんてすが、何う思つたか、危險にても思つたのか、いくら頼んても承知して呉れないんてす」讓はかう爺さんに話し

て聞かせた。

「明日にでもなつたら、向ふでも逢はせて與れるかも知れないから、餘りくよくよ思はない方が好いだ」人の好い爺さんは、讓のをりをり激昂する樣子を見て同情してから慰めた。

「わしが言つて上げても好いだ――ちやんと譯が分つてゐるんだでな」爺さんはかうも言つた。

婆さんは其處に夕飯の支度をして持つて來た。大根の味噌汁の臭ひが讓の餓えた食欲を刺戟した。菜の漬物、玉子、茶碗には挽割の飯が山盛にしてあつた。

「町の衆にや食へるやうな飯ぢやあんめいが、たんと食つてくらつしやれ」婆さんはかう言つて勸めた。平生なら咽喉にも通らないやうな飯も、餓えた腹には旨く食へた。三杯までお替りをして讓は箸を置いた。

話がまた續いた。

「淸太の處でも餘りだな――あの父さんも解らねえからな」

婆さんはこんなことを言つた。

「何アに、夜だもんだて、薄ッ氣味惡く思つたんだんべい。……明日、己が行つて聞いてやんべい。東京さ行くに、別れに來たに、逢はせねえッていふ法がねえ。」

爺さんは茶を飮みながら、事もなげに言つて笑つた。暫くしてから、再び仕事場の方に立つて行つた。

藁を打つ音がまた聞え出した。

譲は勞れて居た。今日のことは今日、明日のことは明日といふ氣になつて居た。火鉢の火の溫氣と、食慾の飽滿とて、眠氣が頻りに催して來た。婆さんが膳を片附けて其處に來た時には、疊の上に突伏して、半ば眠に落ちて居た。

「もうやすまつしやれ」

婆さんに起されて、かれは次の六疊に行つた。其處には綿の固くなつた蒲團が敷いてあつた。かれはごろりと横に倒れて死んだやうになつて熟睡した。

外では雨が音を立てゝ降つて居た。

十一

譲の話は少なからず爺さんや婆さんの同情を惹いた。翌朝、蒼い顏をして譲が緣側に立つて居ると、婆さんは其處に來て、『くよくよ思はつしやんなよ』などと言つた。昨夜とは打つて變つて好い天氣であつた。朝日の軒には元氣の好い雀の百囀が聞えた。

「もう一度行つて見ませう」朝飯を濟してから譲が言ふと、「なアに、お前さん行くより、爺さんが行つて話してやるとよ。……お前さん、なまじい行かねえ方が好うかんべ」婆さんはかう言つて留めた。

讓は朝日の當る暖い緣側に寢ころびながら、矢張そのことを考へて居た。もう終結が近づいたやうにも思はれた。爺さんが行つて話しをして來て吳れるにしても、もう再び元の鞘に收るやうなことはあるまい……かう思ふと町から山を越えて來た昨日と、一夜過ぎた今日との間に夥しい狀態の變化と感情の差違とをかれは認めた。女の心も分明解つたやうな氣がした。焦立つやうな神經の昂奮よりも堪へられない佗しい辛い暗愁を身に覺えながら、讓は緣側の節穴を數へたりして居た。

『爺さんが話して吳れて、此處にお雪を連れて來ても、東京に行く爲めの別れの言葉を述べ得るに過ぎないのだ。……別れ……別れの言葉……別れの言葉を述べて他人にならなければならないのだ。他人に……お雪と自分とが他人に……』かう獨りで繰返して、かれは其の言葉の持つて居る意味を辿つて考へて見た。自分は自分でこの苦痛を何うかしなければならない間に、お雪はその昔の戀人なり誰なりの妻になることが出來る……小鳥の影が障子に移つて枝から枝へと飛んで行つた。讓は長い間身動もせずに其處に橫になつて居た。

庭の隅にはそれでもまだ黃い豆菊が霜を帶びて殘つて居た。厠の側にある背の高い南天燭の實や、葉は落ちて實の赤いのが際立つて見える錦木や、枝ばかりになつた柿の木や、さうしたものに日影が鮮かに照つた。畑の大根や菜は靑々として居た。

爺さんが羽織を着て出かけて行つた間を、讓はそはそはと落附かないやうに見えた。其姿は緣側の處

に見えたり、柿の木の下に見えたり、裏の方に行つたりした。仕事場の戸の少し開いてゐる處に半分頭を入れて、中を覗いて見たりした。其處には藁を打つ石があつて、藁が一杯に散ばつて居た。堪らなく頭が痛むといふやうに右の拳で後頭部を叩いて居たりした。

晴れやかな明るい光線の漲つた庭の中に、讓の鬚の生えた頭髮の亂れた蒼い顔が際立つて見えた。

元氣な婆さんは、井戸端に盥を持ち出して洗濯を始めた。桔槔の動くのが地上に映る影と共にギイギイ聞えて、やがて水をあける音がした。暫くして讓が其處に行つて見ると、繼の當つた紺足袋と白足袋とが堅く絞つて盥の傍に置いてあつた。婆さんは爺さんの襦袢を洗つて居た。

「忙しいもんだて、洗濯がたまつて」

などと婆さんは言ひながら、ひゞの切れた手でごし／＼やつて居た。

時々表の路を人が通つて行つた。「お婆、朝から精が出るね」かう聲を懸けて通つて行くものもあつた。傍にブラブラしてゐる此處の子息とも違ふ若い男を振返つて見て行く人もあつた。

やがて婆さんは二三枚の洗濯をすまして、それを持つて向ふの方に行つた。樹と樹との間に一筋の繩が引いてあつた。その繩の綯目の間に婆さんは先づ足袋を一つ一つ挾んだ。解いた衣服と襦袢とは小屋の傍の日當の好い處に持つて行つてかけた。其處の荒壁にはひばなどが吊されてある。

讓の顔を見て、

「何うしたんべ。爺さん、えらう遲いが、話が難かしいんだんべいかな」

こんなことを婆さんは言つた。

讓はまた緣側の方に行つて、長い間其處に腰をかけてゐた。障子に映つた日影が段々低くなつて行つた。何處かで薪を割るやうな音が聞えた。

やがて泥濘の深い道を拾つて、疎らな垣の方に寄りながら、爺さんの歸つて來る姿を見ると、讓の胸はまた烈しく動悸を打ち始めた。

「やれ、やれ、やれ、話が難がしくつてな……解らない奴ばかりゐるから仕方がねえ」かう言つて爺さんは入つて來た。

婆さんは迎へて、

「それて、何うしたゞ?」

「やつと、それても話して來たゞ。爺さんが折角さう言つて仲に入つて呉れるんだからッてな。淸太がつれて、鳥渡此處に逢はせに來る筈だ。……やれやれ、骨の折れた話ぢや」かう言て爺さんは讓の方を見た。

十二

淸太に伴れられてやがてお雪は來た。

お雪は庇髮に結つて居た。銘仙の鳥渡した衣服を着て、繻子と縮緬との派手な帶をしめて居た。色の白い上に薄く化粧をして來たので、常よりも一層美しく見えた。

「いつも綺麗な姐御ぢやな」

こんなことを婆さんの言ふのが聞えた。八疊と六疊との仕切の襖は閉めてあつた。それを待設ける爲めの六疊は綺麗に掃除がしてあつて、中央に火の活々と起きた火鉢が置いてあつた。爺さんの信仰する宇賀神の蛇のとぐろを卷いて鎌首を高く揚げた掛軸が其處にかゝつて居た。その六疊に讓は居た。

爺さんや婆さんや淸太の聲が入り混つて聞えた。挨拶が長く續いた。「今度は飛んだことで御厄介になりまして、本當にすみません」かういふお雪の聲もした。

爺さんが先づ入つて來た。そして四邊を見廻してまた出て行つた。襖は其時明けたまゝになつた。座敷の隅に坐つてゐるお雪の帶が此方から見えた。

爺さんと淸太とがやがて入つて來て、その後からお雪が續いた。お雪はちらと其處に坐つて居る讓の方を見たが、そのまゝ眼を外して、俯向き勝に隅の方に小さくなつて坐つた。

日影に遠い裏になつてゐるやうな室であつた。明るい八疊から入つて來ると、暫しは物が分明と見えなかつた。皆な挨拶をしただけて暫く默つて居た。

其處に婆さんが茶を運んで來た。

「昨夜は失禮しました」淸太が一番先に口を開いた。「君には氣の毒だッたけれど、今の場合何うもさう

も行かないんてね」

「えー僕も失禮しました」から言つた讓の聲は少し顫へた。

「まア、此方(こちら)も東京に行くッて言ふんだしな、……緣がなくつて、かういふことになつたんだから、誰も惡いッて言ふものはないんだから、綺麗に心殘りのないやうに話してな……」爺さんはゆつくりした調子で、「何うもな、仕方がない。なア淸太さん」

「え、え」

淸太はかう言つて聞いて居た。

「お雪やんも此方(こつち)に寄んなされ」

婆さんも傍から言つた。

淸太と讓とはやがて打解けた口の利き方をした。何時東京に行くの、何年位行つてゐる積かなどと淸太は訊いた。「幾年て歸つて來るか解らないんです……私のやうなものには、何うせ何も出來やしないんですから」などと讓は言つた。

「また、彼方に行つたら、時々は手紙をくれたまへ。僕は君に對しては惡意なんか持つてやしないんだから」淸太はかう言つて、「僕もその中出かけて行くかも知れない」

何か事件が起りさうなどゝは何うしても思はれない柔かな話が一座の中を賑かにした。婆さんが出たり入つたりした。茶菓子なども出た。

やがて清太も爺さんも其處から出て來た。あゝいふ調子では、そんなに心配をすることはないと清太は思つた。清太は火鉢の傍で、今年の漬菜のよく出來た話などを爺さんとして居た。

六疊と八疊との間の襖は半ば開けてあつた。お雪の坐つてゐる姿は半分ほど清太にも見えて居た。やがて二人の何か話して居る聲が小さく聞え出した。

「僕の心持は解らないんだね」

讓のかう言つた聲がした。

「だッて、私だッて……」

暫くしてから、お雪のかう何か辯解するやうな聲が聞えた。

また低い聲が續いた。

「ぢや何うしても歸つては呉れないんだね？」男の聲が高く鋭く聞えるかと思ふと、「あれ――」といふ女の悲鳴が聞えた。清太も爺さんも吃驚して立つて行つた。

顏を押へたお雪の顏からは血がだらだら流れた。

老後

小栗風葉

一

堀田の後家さんが女の腕一つて拵へ上げた財産は五萬以上といふ噂てあつた。大部分は地所と家屋て、外に公債のやうなものが少しと、銀行に幾らかの定期預があつた。

後家さんの名はお菊と云つた。此所の舊藩の相當な家格の娘てあつた。維新の瓦解の際に、出入りの呉服屋の番頭と一處になつて小さな太物商ひを始めた。亭主は人の好い働きの無い男てあつた。自分の脊丈もあるやうな太物の荷を背負つて、毎日〳〵近在を歩き廻るのが爲事てあつた。店の方はお菊が取爲切つた。問屋の仕入から資本の融通、然ういふ事まで女の緻密な頭て

細かく切り盛りした。

お菊は亭主の知らぬ間に小金を溜めてゐた。それを内々高歩で信用貸のやうな事に廻した。彌張り舊藩の男で、お菊の仲人であつた齋田といふ金貸の世話であつた。

其頃お菊はお政といふ女の子を産んだ。三十一の初産であつた。而して後にも前にも子といふのは其れ一人しか無かつた。

「お政ちやんは誰に肖たづら――齋田の小父さんにお肖りたね。」稚い者の耳へ、こんな事を言つて聞かせるおセツカイもあつた。

「私、齋田の小父さんに肖とるらか。」と罪の無い小兒は然う言つて母に譴られた。

「お肖りんと言つても、あゝ又阿父さんに何處一つ肖とらん子も無い。誰が見ても貴方の子のやうには思へん。」と亭主に諷する親内もあつた。

「何あに、お菊が産んだ子なら私の子だあね。」

と亭主は重い口からモツソリ言つた。

其一言で、誰も最う言ふ者は無かつた。

人の好い大腹な亭主は、急性の腦充血でコロリと死んだ。默つて、而して滿足らしい佛のやうな死顔であつた。飽氣無い急な死方を何か意味ありさうに、疑ひの目を以て若後家のお菊を眺めた者もあつた。然かし佛の平和な死顔を見た者は其れを打消した。

亭主の死んだ後には、亭主の知らない地所だの家屋だのがお菊の名に書き換へられた。

二

娘のお政は小さい時から虚弱であつた。色の青い頸の細い娘で、小學校も一年遲れて入學した。男勝りのお菊も此子の爲めには人一倍優しい母親であつた。所々の溫泉へも連れて行つた。醫者に勸められて夏毎に海水浴へも出掛けた。公向きには求められぬやうな俗間の秘藥など飮ませもした。人の好いと言ふ事は錢金厭はず娘の體に試みられた。一時金光教の信者になつたのも、人間の災難——殊に病苦といふやうな事に功德があると云ふ其現世的敎旨に誘はれたのであつた。

母親の注意深い保護に由つて、虚弱な娘も何うやら恁うやら年頃にもなつた。小學校を濟して、お針へ通ひ出した二三年が此娘の發育盛りであつた。小兒から急に女になつたやうにメキ／＼體が出來た。母親は長い間の心配が漸と拔けたやうにホッとした。と思ふと、今度は又好い婿を貰つてやらねば成らないと云ふ新しい苦勞があつた。娘の爲めにも自分の爲めにも、考へれば考へるほど其れは容易ならぬ問題であつた。此家の總てを——自分が女の腕一本で作つた半生の努力の總てを、擧げて其れに相續させるのだと思ふと、貰ふ對手も決らぬ中から疑惧と不安が先に立つた。人から恁ういふ養子はと話を持込まれる度びに、お菊は慌てゝ手を掉つた。娘の耳に入れまいと話もソコ／＼に聞いた。賴まれた人も張合ひが無かつた。懷育ちの娘は、然ういふ事には一向未だ無關心らしかつた。お菊は女親の情として

氣には懸けながらも、一方では又其問題に觸れたくないやうな風であつた。
漸と婿の決つたのは娘が十九の年であつた。其間には色々の所から申込みもあつた。候補者の中には醫學校の得業士もあつた。山畠何町歩と云ふ持參附きの大百姓の息子もあつた。娘よりも母親の方が迷ひに迷つた擧句、結局氣心の知れた者が好いといふ事になつて、今まで骨折つて捜したのが馬鹿〳〵しいやうな、つい手近から貰つた。それはお菊の實家と同じ舊藩の家格の子であつた。師範學校を卒業して土地の小學校に奉職した。
婿は然ういふ若い普通の教育家に能く見るタイプの男であつた。傲慢と卑屈の中間を行つたやうな、而して小さい自分の殻を造つて、其中で固く自分だけを守ると云つた風な男であつた。養子に取つては然ぞ難かしい姑であらうと評されたお菊にも、別に折合ひの惡いといふ方でも無かつた。娘に優しいのが何よりだと人にも喜んで話した。
娘は結婚して二年目の冬、些つとした引風が元でブラ〳〵二月餘りも床に就いた。小兒の時にも同じやうな容體で肺炎を病つた事があつた。お菊はそれを心配したが、醫者は內々それ以上に首を捻つた。而して娘は一旦床を放れる事が出來たが、醫者に勸められて冬中何所か暖い所へ轉地しようと言つてゐる中に血を吐いた。最う疑ひも無い肺結核であつた。
肺結核と診斷されてから彼是半年餘りも娘は生きてゐた。死ぬまでの間のお菊の丹精は、話に聞いても涙の零れるほどであつた。霜の深い朝々金光樣へ跣參りも續けた。月に幾日と堅く鹽絕ちもした。婿

も若い者に似合はず能く行屆いて看護をした。男には出來ないやうな事までも忍んでやつた。それは後々までもお菊に賴もしく思はせた。娘に死なれた彼女の力落しも、婿の優しい其の氣立てに幾らか慰められもした。一人きりの娘に死なれて了つて、後には最う賴りにする者は婿より外に無い事も考へた。彼女は最う五十の坂を踏出してゐた。

娘の生前、それの對手にと云ふので亡夫の妹の子をお菊は取引つて養つた。娘と一處に學校へも遣りお針へも通はせたが、家では下女の代りを勤めさせた。死んだ娘が生更へられぬものとすれば、娘の代りも婿に貰つてやらねば成らない。それには氣心の知れた姪をと云ふ議も周圍の者の口に上つた。娘が生きてゐてこそ、お菊と婿との間にも緣の繫がるものがあつた。其娘も死んだ。お菊には血緣も無いが、切めて亡夫の姪といふだけでも堀田の家統の繫がるやうに彼女も思つた。

婿は然かし其れを喜ばなかつた。其姪といふのは、死んだお政と反對に體は壯健であるが、容色が惡い。それに今まで下女同樣に追ひ使つた女である。今更其れを自分の妻に直すのは自尊心が容るさなかつた。年月同じ家に見馴れて、異性に對する樣な衝動も其女には發らなかつた。

女の方では若い小さな胸にも利慾の打算があつた。彼女の實家は今零落してゐる。二度目の嫁の話が發り懸つた頃から、目に立つて彼女の樣子が變つた。用ゐなかつた白粉なども內密で着け出した。是まで平氣で口答へをしたりした婿に對して妙に含羞んだりするのが、先づお菊の目に苦々しく映じた。而して間も無く實家へ歸された。

姪が居なくなつてからは、子守のやうな小女を傭つて、それを對手にお菊は臺所事から婿の身の周圍の世話までした。婿に取つては心苦しくもあり不自由でもあつた。二度目の嫁をと云ふ話は種々の方面から絕えなかつた。婿は姑の氣を圖りかねて自分からは進んだ返事もしなかつた。お菊は何の話を聞いても猜疑の念のみ先に立つた。堀田の身上に目を懸けて來たがるとしか思はれなかつた。本人の出來が善ければ、親元が胡散に思へるし、本人も親元も無難だとすると、媒介人に何か思はくでもあるのでは無いかと邪推もした。

「お前さんもお飽きたづらね、私も最う嫁の話には飽き果てたあね。金光樣でも然うお言ひるて、當分まあ思うして氣樂にやつて居らまいか。」

お菊は飽倦ね切つたやうな口振りで婿に言つた。

時次は其頃から些い〳〵家を明けるやうになつた。同僚の所で御馳走になつたと言つては、酒臭い息をしてゐるやうな事もあつた。お菊は見て見ぬ振りをした。尤も家を明けても夜十時前には必ず歸つた。酒量も分つてゐた。不斷日本酒の一合も飮めば眞赤になつて切ながつた。

三

三月の學期前であつた。時次は受持生徒の考査が忙しいと言つて、時々遲く歸る事があつた。不順な氣候は此月へ入つてからも霙が降つて、何時までも寒かつた。お菊は冬のままの置炬燵に炭團を埋けて

晝の中から時次の着更へを暖めて置いた。ビショ〳〵と冷たい雨が彼女のリョウマチスを疼かせた。小女を對手に痛みを擦り〳〵夕飯の支度をした。時次が顫へて歸るのを思つて、食ひものも暖いものを選んだ。火鉢の銅壺には湯を沸ぎらせた。此節は時次が夕飯の膳に一銚子づゝ添へられた。お菊の圖らひてある。外て飮まない爲めの牽制てもあつた。

表の木戸の開く音がして、ビショ〳〵と人の足音がした。お菊は吸懸けの長煙管を持つたまゝ格子戸の所へ出て見ると、それは郵便配達てあつた。堀田時次さんと呼んて、格子の間から一通の封書を手渡しゝた。お菊は其のまゝ火鉢の猫板の上へ置いたが、何氣無くランプの明りに裏返して見た。所書きも何も無しに、汀月と唯二字だけ署名した。お菊には讀み方も分らなかつた。スタンプを見ると「岡崎」とある。今は衰へたが、昔は街道て指折りの盛り場てあつた。土地の人目を憚る者は今ても故々其所まて遊びに行つた。汽車て一時間足らずの道程てある。お菊は然ういふやうな連想から、汀月の二字も堅氣の名ては無いらしく思へた。

手紙の封はお菊の手に切られた。彼女の想像は反した。然かし意外な消息が中から現はれた。時次は養母に秘密て岡崎の學校へ轉任の運動をしてゐるものらしかつた。而してこんな意味の文句があつた。此前の土曜日の晩、名古屋から來た友人を連れて久振りに例の家へ出掛けた。Tの字にも逢つた。彼も頻りに君の來岡を切望してゐる。僕も繰返し校長に推薦はしてゐるが、君も例の視學の方の運動を怠るな。然ういふ意味が拾ひ讀みて略ぼお菊にも解せられた。中の署名には藤井汀月とあつた。

お菊は手紙を卷き收めて懐へ藏つた。顔色が變つて見えた。
「藤井ちふのは何ういふ人だね。」
雨に濡れた洋服を暖い重着の寢衣に着更へて、ランプの明るく點つた膳の前に伸び〳〵と寛いだ時次は、始めて養母の險しい顔に氣が付いた。
「藤井が來ましたか。」
「いゝえ、何ういふ人だちつて聞くだあね――お花、お前金光樣のお例祭へ詣いて來ておくれ、今夜は私用があつて詣れんに。」
と少女を出してやつた。
時次が轉任を希望する理由は、單に岡崎の方が待遇が好いと云ふのに過ぎなかつた。それは勘定高い彼の考へとも思へなかつた。家に居るとは違つて、岡崎では部屋借りをするなり下宿をするなり、それだけ餘分な經費も要る譯である。二圓や三圓の增俸では引合ひさうも無かつた。
「女て何にも知らんと思つて、そんな云譯にも成らん言譯をお言ひたちつて、お前さんの肚は能うく分つとるに。可いとも！私の傍に居るのがそんなに厭なら何所へでもお行きんさい、後の事なんか何うでも管はんに。」とお菊は厭味を言つた。
「お政が亡くなつて、貴方も不自由だらあと思つて、私も何のくらゐ氣を付けて面倒見て上げとるか。其の義理も思はんて――」と口惜しさうに涙含みもした。

時次は何と言はれても默つて唯俯いた。お菊は持つてゐた長煙管で其膝を衝突いたり擲つたりした。何か言ふ度び、藥て染めた黑い小さな髷が搖てブル〳〵顫へた。

「そんな大きな聲をお爲んでも話は分るて。隣近所へ聞えても外聞が惡い。」と時次はそれのみ憚つた。

「聞えたつて管やせん。もつと町中へ聞えさせて、お前さんが學校へ出られんやうにしてやる。」

こんな爭論があつてから、間も無く時次は正式に家督相續をした。それまてお菊が女戸主てあつた。

時次は名ばかり戸主にはなつたが、財產は未だ觸らせられなかつた。金庫の鍵も戸主の實印も是まて通り隱居のお菊が放さなかつた。時次はそれが不平てあつた。然かし小學校の先生よりも白髮を染めた後家さんの方が貨殖には長けた。萬といふ家產を處理するだけの經驗も信用も無い事は、彼自身ても承知してゐた。不平を言ふだけの尤もらしい口實も無かつた。

「充らんなあ。岡崎へても行かあか知ら。」

と時々又口へ出して言つて見た。

一旦思留つたやうてあつた轉任の事も、其實思留つた譯ても無かつた。岡崎の方の口も其のまゝ話は切らずにあつた。而して久しく決しなかつた話が今度何うやら決りさうにもなつた。

「名義は戸主ても、私が帳面一冊扱ふぢや無し、お母が何も彼も一人て家を行つとつて、私は言はゞ用の無い證だてね。丁度岡崎の方ても來いと言ふし、待遇も今より好いて行つて見たいと思ふが何うづら。向うには郡視學にも心安い仁があるし、何時までも此所の學校て辛抱しとるより先きの見込みがある

て。」時次は口利きの人へ行つて、公然相談もした。

其人も尤もだと同意した。添合ひの娘は死ぬ、二度目のと話のあつた姪は歸る。婿と姑と唯二人きりの今の暮らしは、邪推深い世間の口端も煩い。出世の爲めてはあるし、本人の望みに任せて暫く岡崎へ遣つて見たらばと、其人からお菊に話し込んだ。

時次が憎かつた。然かし其れは口へ出して言はれる事では無かつた。煩いと云ふ世間の其の蔭口もお菊はチラ〳〵耳にせぬでも無かつた。其人の勸めに任せて、岡崎へ手放して遣る事に彼女の年が分別させた。

四

お菊が女の腕て何萬といふ資産を拵へたに就いては、金貸の齋田の力が可なり手傳つてゐた。今ては彼女の幸運に對する嫉妬もあつて、齋田の方から餘り接近しなかつた。お菊の方でも昔のやうに接近されるのを恐れた。死んだ娘のお政が小兒の時分には、齋田の小父さんに肖てゐるとさへ人から言はれた。處が齋田にもお政と同じ年格恰の娘があつて、名を富江と云つた。可怜しい事には其富江が又、何所かお政と子柄が肖通つて見られるのてあつた。

「他人の空肖ちふか、富江ちやんとお政ちやんとは全て姉妹のやうだね。」と人から能く言はれた。

「私、貴方と姉妹づら。」稚い富江は年上のお政に能く然う言つた。

齋田の小父さんに育てゐると言つて譏られた覺えのあるお政は、返事に困つたやうな顏をして母の氣色を窺つた。

「姉妹て無くても、姉妹のやうに仲好くせるだあね。」とお菊は娘に言つた。

お菊は又姉妹てゞもあるやうに、自分の娘と別け隔て無く富江を可愛がつた。富江の父の齋田は、家族に對して恐しく氣難かしい慳貪な男てあつた。金錢と云ふ事の爲めには妻子の愛情も棄て得られた。頑是無い富江が赤い帶なぞ欲しがる年頃にも、齋田は簪一本買つてやるては無かつた。毎も盲縞の上張りを着せて、男の子のやうに細い帶を貝の口に結んだ。母親が仕立物をした內職賃て、交織の一枚も拵へては餘所行きに着せた。お菊が自分の娘と同じやうに富江を可愛がつたのも、其の恰しい事情を憫んてゞあつた。女の子の持物なぞ、能くお政と對に買つては富江に與へた。

お政の死ぬ頃には、富江は可なり上役の鐵道員の亭主と一所に横濱に暮らした。其後亭主は何か面白く無い事があつて、職を退いたやうな話があつたが、近頃歸つて來て夫婦とも齋田の家に居た。

「前のもあのまゝになつてゐて濟みませんが、來月は內のも會社の方が決まる筈てすから、然うしたら一處にお返しゝますから。」富江は十圓十五圓とお菊の所へ時借りに來た。

富江夫婦が横濱へ赴任する時にも、お菊は幾らか借りられた。それは最う四五年にもなるが其のまゝになつてゐる。お菊の方ても催促もしなかつたが、今度歸つて來て又借りるに就いては、富江の方て心が尤めた。

「其のくらゐの事は阿父さんがしてお上げれば可いのにね。可哀さうに、貴方が中へ入つて一人て苦勞お爲るだね。」と富江に同情しては、其都度お菊は快く貸してやつた。

「あゝして居ましても阿父さんと内のとは全て氣質が違ふんですから困りますよ。餘り躁ると足元を見られるからと言つて、暢氣に内のが構へてゐるものですから、最うボツ／＼阿父さんの澁い顏が私には見えましてね。口が無くてゴロ／＼遊んでる者が、毎晩酒など飲むつて事があるものか。口のあるまては酒も控えるが可いつて言ふんてすけど、飲むたつて貴方二合足らずの御酒てすしね、それに内のも晩酌を頂くとらゐが樂みて、外には何にも道樂が無いんてすから。」

「然うともね、家てお上りるぐらゐの酒が何だらあね、貴方がそりや氣を付けてお上げるが可いぞね。家の時次などと違つて働きのあるお人だもの、一月や二月遊んてお居てたちつて、そんなお好きな酒まて干すちふ事があらあかね。あんな立派な婿さんを阿父さんは何が不足づら。家の時次をお見さい、陸な働きも無い癖に我儘ばかり言つて、此節は貴方、私が留めるのも肯かんて岡崎へ行つたは可いが、月給だけては足らんて、毎月のやうに無心だあね。」

娘ても生きて居たらば、婿の無心ぐらゐはお菊も氣には懸けなかつたらう。富江の父に比べれば、彼女は未だしも金放れの好い方てあつた。他人に對しては齋田に讓らぬ甚い方てもあつたが、女だけに親内には情が脆かつた。

五

お菊の亡夫の妹にお竹と云つて、人並に少し足らぬやうな女があつた。一度嫁入つて出されて、兄の存生頃から堀田の家の厄介者になつてゐた。今の養子が娘の所へ決つた時、お菊は小商ひの資本と貸長屋を一棟彼女に附けて別家をさせた。家賃と店の方とて女一人食つて行くには充分であつた。其時は最う四十を出てゐた。それにも拘はらず、生れて始めて生活上の自由と滿足とを得た彼女の戀しい慾望は、其頃流行つた源氏節の女藝人など追ひ廻した。女の癖に酒を飲んで、醉ふと爪彈きで流行唄の一つも轉がす樣子が、何所か小意氣に見えた。不斷見るやうな頭の鈍い女とは思へなかつた。

お菊は呆れて家へ引取らうとしたが、娘の反對で見合せた。其代りお竹自身には小使錢も自由にならないやうに、嚴しく後見をする事になつた。究りは女一人て置くからの間違ひてある。未だ年も年てあるし、相應な連合ひを見付けてやつたらばと勸めた親戚もあつた。然かしお菊は、其の連合ひにと推擧された男を聞いては、一も二も無く斷らずには居られなかつた。

それは齋田の義理の兄て重吉と云つた。若い時から身持の治まらぬ爲めに實家を出されて、餘所から來た齋田が代つて後を相續したくらゐてある。人の妾揚りの女房にも遁げられて、一人の息子もあつたが若死をした。其時は最う好い加減に年も取つて、是から自分の身を何うするといふ分別も付かなかつた。ブラ〳〵と親戚や知人を食ひ廻つたり、女暮らしの所へ入り込んだり、何時までも決つた家らしいものも無かつた。

お竹と一處にしたらばと云ふ話のあつたのは、重吉も寂しい老後の事がボツ〳〵氣に懸り出した時であつた。慾も手傳つて、彼も其話には乘氣になつた。お竹とは不斷笑談口を利き合ふやうな間でもあつた。

「お竹も最う些と滿足な人間であつてくれるとねえ、貴方のやうな人に懸らせたら私も安心するだが——何うもあんなではね、末始終到底も面倒見てやつて貰へさうにも思へんで、可哀さうでもまあ、那れはあゝして一生暮らさせるだあね。」とお菊は先を越して重吉に言つた。

其後お竹は金光敎會の講師とか云ふ男と持合ひ所帶を持つた。無論お菊の圖らひであつた。其時は重吉も、或る小料理屋の長火鉢の前で、朝から啣楊枝で赤い顏をしてゐるやうな身であつた。あんな薄馬鹿と一處になる物好きな男もあるかぐらゐに思つたが、お菊の爲打に就いては好い心持もしなかつた。

一體重吉の實家の齋田と云ふのは、お菊の實家の古い本家に當つた。お菊が亡夫と一處になる時にも、齋田の養子夫婦が仲人になつて、其頃最う家を出てゐた重吉が亡夫の兄親と云ふ名義であつた。そんな關係からお菊は重吉を義兄さんと呼ばねば成らなかつた。重吉も亦堀田の那れがとか、義妹がとかと言つて二言目には義兄風を吹かせた。

お菊は重吉の貧乏とヅボラとに蟄縮しながらも、彼の案外人の好いのを附け目に些い〳〵利用する事を歇めなかつた。頼まれると何でも引受けずには居らないと云ふ方の男であつた。好い年をしながら、

若い頃に覺えた柔術が今でも自慢であつた。女の獨り暮らしには、然ういふ風な男も必要であつた。質の惡い店子の店立てなぞには、毎も重吉を頼むのが例であつた。

「用が無い時は洟も引注けやがらんで、厭な事や困つた事が發るとワア〱言つて呼びに來しやがる。あんな得手勝手な奴も無いものだ。何も那奴が爪に火を點したのを一文缺ら貰はうとも思はんが、人間の義理ちふ事を考へたら、偶には酒の五合も下げて、お世話樣とか何とか禮に來しやがるが本當づら。」

お竹の一件から感情を害した重吉は、恁う露骨に罵つて歩いた。

「何かお前、時次の事で氣が付いた事でも有りやせんか。」

とお菊の氣を揉むやうな事を故と聞かせにも行つた。

「何か那れの事で、お聞きた事でもあるのかね。」

「でも、金を强請つて來て困るちつたぢや無いか。」

「本當に貴方、何かお聞きたら隱さずに言つてお下れませう。那れに今間違ひでもあられちや私も困るで――」案の如くお菊は目の色まで變つた。

「お前も大事な養子なら最つと氣を付けんが惡い。時次の噂は昨日や今日に始まつた事ぢや無い。岡崎へ行かん前から聞いとつた。」

「そんなら早く聞かせてお下れりや可いに。岡崎へ遣るのだちつても、貴方がお勸めたどもの。」

「そりや勸めた、お前の爲めを思つたもんだで。まあお前、久振りに養子の顏を見て來るが可い、然う

すりや何も彼も分るに。己れも人の噂を聞いたゞけて、嘘だか本當だか分らんもんだて知らせる事も見合せとつたが――それに本人の爲めにも好い事ぢや無いしの――」

「ぢや、噂が本當の事がお分りだゞね。」

「まあ向うへ行つて見りや分るに。」と重吉は意地惡い笑ひ方をしてゐた。

六

八月に入つて、何所の小學校も休暇になつたが、時次は講習會とかへ出なければ成らないと云つて歸らなかつた。夏季講習會は毎年此地てもあつた。それは長くて十日ぐらゐのものに決つてゐた。お菊も重吉の話て思當る事もあつた。其日の午後急に思立つて岡崎へ行つた。

照り續きの熱い日てあつた。汽車が間のステーションへ停車する其の一二分間づゝが、焼付くやうな西日の影にジッとしてゐる車室の中は目が眩みさうてあつた。お菊は汗を拭ふ度びに石炭の油煙と、生際に滲んだ白髪染めとてハンケチが氣味惡く汚れた。汽車を降りて、岡崎の町までは未だ小一里もあつた。馬車の込合ふのを見て、お菊は俥を傭つた。薩摩芋畠の中の樹蔭一つ無い野天の道は、草熱れと熱灰のやうな砂埃とて息も塡まりさうてあつた。漸と岡崎の町へ入つて時次の宿の門口へ降りると、お菊はグラ〳〵として倒れ懸つた。兩方から體を支へられたのは覺えてゐるが、後は氣が遠くなつて何も分らなかつた。

宿の主人は藤井と云つて、時次が師範校からの同窓で、而して今の學校の同僚であつた。曾てお菊が疑つた事のある汀月と云ふ名は、此男の雅號であつた。

「貴方は堀田さんの？」主人はお菊の額に當てゝあつた手拭を取替へながら問いた。「何うも然うのやうに私もお見受けしとりました。まま、最些と然うやつてお靜かに――なに餘り熱い所をお來てたもんでお逆上せたゞに、冷しさへせりや直き下がります。」

時次と同年ぐらゐであるが、薄髯など生して、年の割に分別らしい男であつた。家族は貧相な細君と小兒が二人あつた。お菊はこんな厄介を懸けるやうだつたら、手土産の一つも持つて來るのだつたと思つた。漸と氣分も治つて起き得られた時、二人の小兒にお菓子でもお買ひませうと言つて、小さい銀貨を握らせた。

時次はと聞くと、主人の分別らしい顏が一層然かつべらしくなつた。

「堀田君は些つと出とられますが――出先きへ是から御案内しても可いてすが――それに就いて豫めお願ひしときたい、ちふのは外ては有りませんが、何うか其の、出來て了つた事は致し方も無い事てありますて、貴方も御勘辨のなるだけは御勘辨なして――」

「一體そりや、何ういふお話てお有りますね。」

と耐らなくなつてお菊は問いた。主人の重々しい廻り冗い前置きが彼女の不安を彈ませた。

「到頭貴方、お子さんがお出來ましてね。」

と細君が傍から言つた。

それは又餘りに話が突梯過ぎて、お菊は何の事やら呆氣に取られた。段々聞いて見ると、時次が或女に懷姙させたのであつた。而して女とは岡崎へ來ぬ前からの關係らしかつた。彼が强ひて轉任したのも、女と自由に逢引きする爲め養母の監視から遠ざかつたのだとも取れば取られる。轉任の運動し始めたと同時頃に、女も岡崎へ來て或料理屋の仲居に住込んだ。今は懷姙六ヶ月と云ふので、暇を取つて知合ひの家に二階借りをしてゐる。時次も今日は其所へ行つてゐた。

「堀田君も出拔けて吃驚されるか知れんが、何うせ一遍は貴方のお耳に入れにや成らん事だて――それに何時までもあゝしといて、學校の方へ聞えてもすると可かない。丁度貴方もお來てた次手だし、何とか話を決めて了ふやうに、是から行つてお會ひて貰へませんか、私が御案内しますて。」

お菊は早速の分別も付かなかつた。左に右く會ひたく無い。今日は氣分も惡いし、とくと一つ考へても見たいからと言つて斷つた。而して暇を告げて直ぐ歸る事にした。

丁度ステーション行きの馬車が出懸かる所へ行き合せて、お菊も其れに乘つた。吹き曠しの芋畠へ差懸つた時激しい夕立が來たが、直き霽つた。橫降りに叩き付けた雨脚が窓ガラスの毀れ目から繁吹き込んで、お菊の帷子をグショ〳〵に濡らした。夕暮の汽車は夕立擧句の涼しい風を突いて、乘つてゐる彼女の昂奮した頭を冷した。體も心も濡れ潮垂れたと云ふ風てションボリ家へ歸ると、留守居をしてゐた小女に直ぐ床を取らせた。ゾク〳〵と寒氣がし出して、起きてはゐられなかつた。

翌日も翌々日もお菊は頭が上らなかつた。醫者は暑氣中りだと言つた。庭前の詰つた風通しの悪い緣先に寢蓙を敷いて、夏の永い一日惱しい體をゴロ〳〵と持扱つた。氣の紛れやうは無かつた。

「貴方も最つと早く知らせてお下れりや可いに。子なんか出來て何うせい、困つたもんだあね。」と怨みらしく重吉に言つた。

「最うそんな者まで出來たのか。」と重吉も其れには意外らしかつたが、「何うせい、出來たもんなら爲方が無い、一處にしてやるが可い。」と無造作な事を言つた。

「いゝえ、そんな何所の馬の骨だか分らん者を家へ入れる事は私あ不承知だ。何うても一處になるちふなら、時次にも出て行つて貰はにや成らん。」とお菊は息卷いた。

「時次を出すちふのかい。」パクッと口を開けて、大きな掌て蓋をするやうに撫て下ろしながら、「然うも行かまい。」と言つた。

何か當擦られたやうに取れて、お菊はプッと怫れた。然かしそんな意味は措いても、時次を出すの離緣するのと云ふ事は今更出來難い事てあつた。正當に家督相續をさせた戶主てもある。それに自分ても體の衰へが分るやうな自分の年といふものも考へられた。結局女と手を切らせるより外に道も無かつた。

外の職業とは違ふ。然ういふ曖昧な女と關係してゐる事が表沙汰になると、本人の一身上に取返しの付かない結果を來さうも知れぬ。今の中に早く片を付けなければと岡崎の藤井も言つた。女の方は差當り身二つになるまでの手當をしてやつて、身二つになつた上て、又母子の身の立つやうな相談もしよう。

左に右く女と手を切らせて、時次を連れて來て貰ひたいとお菊は頼んだ。

頼まれて、重吉は岡崎へ出向いた。

七

自分では、一廉口利きの意りであるが、重吉のお人好しの事は時次も呑込んでゐた。女にも含めて、小父さん／＼と如才なく取持たせた。藤井も髯の生へた勿體らしい容體て、貴方のお力を借りるより外に、我々の力では及ばないと言ふやうな風に頼んだ。彼は重吉の對手が出來るくらゐの酒量もあつた。重吉は好い機嫌に醉つて、悉かり時次の言分に乘つて了つた。

「己れが引受けたからには、最う義妹が何ちつても承知させるに。ぢや早いが可いて、時次は私と一處に行つてお母に會ふが可い。」

愁がる時次を連れて、重吉はお菊の所へ歸つた。彼が引受けて行つた其の口振りとは、全て反對の口上を持つて歸つたのにはお菊も呆れさせられた。

「何うも緣と云ふものは不思議なもんだ。お前は何所の馬の骨だか分らんちつたが、聞いて見ると彌張り同藩の者だ。そらお組頭の大塚――お前も覺えとるづら、那所の娘ださうだぜ。」

「大塚の娘がそんな最う年頃だつたづらか。あれは慥かお鶴さんとか云つた――」

「然うてす、お鶴ちふてす。」と悄げ切つてゐた時次が、心持顔を紅めて言つた。

「口の大きな見苦しい子だつた。」とお菊は憎々しさうに彼を見遣つた。

其當座お菊は親戚知己へ此話を持ち廻つた。それに對する意見は誰も同じであつた。今更養子を出す譯にも行かないとあれば、子まで出來た仲でもあるから、女に大した缺點の無い以上は、不承して一處にしてやるが可からうと。それが一番當り障りの無い答へでもあつた。

「お政さんは死ぬし、時次さんは餘所から來た人だし、其處へ又見ず識らずのそんな女を入れにや成らんちふのは、そりや貴方の身になりや耐らまい。折角あれまでに貴方が丹精して拵へ上げたものを、言はゞ悉くり他人に遣つて了ふやうなもんだてね。そりや惜しいが人情だ。」齋田だけはお菊の肚の中を汲んで然う言つた。「何せい貴方が些と早まり過ぎた。最少し相續さすのを見合せると可かつたが、時次さんぢや最う民法上立派な戶主だちふ强味があるもんだて、我儘も餘計に言ふちふものだ。私をお見さい、此年になつても丁と惡しとるもんだて、娘でも婿でも家の財產ちふものは別のもんて、自分達は自分達てもに成らんものと思つとる。私も隱居なんちふ事は死ぬまでせんても困りやせんて、是なら相續さしても可いちふ見留めの付くまでは家へ入れりやせん。二人にもそりや言ひ聞かしてある。」

「横濱からお歸りて、家にお居てるちふ話だつたが何うお爲いたね。」

「家に置くと、遊んで食つとれるやうな氣になつて可か無いて、勤め口が決まるまで家の借家に入いらせとらね。」

「貴方の事なら家賃をお取りるら？」

齋田は唯苦笑ひをしてゐた。

「貴方の所ても、時次さんがあゝして未だ外へ出とるて可いが、家へ入ると面倒だぞね。今の中に貴方も心懸けて隱居金ても拵へとかんと——」

「私あ家の身上を皆隱居金にしとかあね。戸主だらあが何だらあが、死ぬまて鍵は渡しやせん。」と笑談らしくお菊は言つた。

然かし死ぬまて握つてゐた所て、死んだ後は彌張り養子に遺して行くのてある。お菊は死にたく無いと思つた。

八

「世の中の事は何一つ思ふやうにや成りやせん。何うして可いか私にや全て分らんくなつて了つた—」

時次に賴まれて女の始末を相談に來た重吉に、お菊はこんな事も言つたりした。

「然う氣が付いたら、お前も不承して肯いてやるが可い。老いては子に從ふちふが、年を取りや爲方が無い、若い者には負けてやるだが。」

「何うてもまあ、貴方にお任せ爲らあね。」と面倒臭さうに言つた。

時次は時次の勝手てある、自分は自分の事を考へるより外は無い、恁うお菊は諦めた。犬の子を貰ふとは違ふ、眞似事だけても儀式めいた事もさせねば成るまいと、恁ういふ事には人一倍骨を折つて重吉

の肝煎りするがまゝに任せて置いた。女が着て來る物など、重吉に言はれて死んだ娘の物も出してやつた。

岡崎の藤井夫婦が、仲人も假親も兼ねた。花嫁は薄色の絽の裾模様を着て、それが借着らしくも見えなかつた。腹の目立たぬやうに結び締めた立やの字の幅の廣い帯が切なさうであつた。結立ての高髷を重さうにして、晴がましさうに座敷へ直つた姿が、死んだ娘を思出させてお菊は涙含んだ。妙に優しい氣になつて、藏つてあつたお政の晴着を取更へ着させたりした。盃の終るまで絽の一枚で押通した仲人の細君は、あれだけの着物が貰へるだけでもお鶴さんは仕合せだと、後で羨しさうに夫に言つた。

是まで料理屋奉公をして、多くの人に顔を見知られたお鶴を連れては、岡崎の學校へ時次も歸任し憎くかつた。休暇中に何所か轉任の口を見付けたいと躁つても見たが、思ふやうには運ばなかつた。お政の死んだ頃から、彼は養母に内密で中等敎員の檢定試驗の準備をしつゝあつた。不審一つ質す人も無いやうな片田舎へは轉任したく無かつた。前に奉職した土地の學校ならば入れぬ事も無かつたが、實は養母の傍からも放れたかつた。時次が一人の時とは違つて、彼等夫婦に對するお菊の態度は變らない譯には行かなかつた。婿に對する素振と、嫁に對する爲打との間に、お鶴の腑に落ちかねる事が些いく見えた。其處に氣の廻らないほど彼女は生子な花嫁では無かつた。

「姙娠は大事だて、體を氣を付けんと可かんぞね。寐相が惡くてもお胎の子に障るちふてね、氣を付けて上げるに私の蚊帳へ入いてお寐ん。何んの、遠慮せんても、何うせ私あ夜睡られんだて。」とお菊は言

つた。

お鶴は何を言はれても素直に逆らはなかつた。大人しい嫁だと誰も褒めた。重吉は仲へ入つて口も利いたヾけに、評判の好いのを自分の勳でもあるやうにお菊に誇つた。然かしお菊は決して氣を許さなかつた。細かしい鋭い彼女の目にはチラ／＼不快な事が映つた。

「當人に言ふのも氣の毒だて默つとるが、お前さんから能くお鶴に言ふが可いぞね。何うせお政の物はあの通り悉くら遣つとるだて、欲しけりや私に言ふが可いちつて——私の留守に默つて簞笥を捌いてくれちや困るちつて」と時次に注意した。

それは事實であつた。然かもお菊は然うした事をしさうな女の弱點を察して、故と簞笥の錠を卸さずに外出したりした。而して中の物の重ねやうや疊みやうて、觸れば直ぐ分るやうな心覺えをして置いた。

「そんな難癖付けて、貴方に水をお注しるだあね。何時の何日に私が簞笥なんか捌いたか、慥かな證據を見して貰ふ。」お鶴は氣の強い事を時次には言つた。

「それよりも——貴方が心配お爲るだらあと思つて内密にしとつたが、此間私が血の道て寐とつた時、阿母さんが金光樣て頂いたちつてお水見たやうな物をお下れてね。變な味がしたもんだて皆は私も飲まなんだが、それても後てお肚が痛んて／＼、本當に子も何も墮りて了ひさうだつたにね。浮かり皆飲んだら何うだつたづら。私は思つてもゾッとする——」

と大業に身顫ひしても見せた。

時次は男だけに、女の言ふ事を一々取上げもしなかつた。取上げた日にはそれこそ家の中は大揉めてある。それに就けても就職口が急がれた。長い夏の休暇も終つて、袷着に辨當包みを脊負つた小さい生徒の群がゾロゾロ郊外の方へ續く頃になつても、彼は未だ家に遊んだ。

「貴方の所のは、此節何うお爲いたね。」お菊は婿の不平を訴へに行つた次手に、齋田の養子の近狀も訊ねて見た。

「那れは此節毎日ステンショ前の運送店へ通つとらね。幾ら貰つとるか知らんが、一杯一杯に遣つて了ふやうぢや身上は持てんちつて彌喧しく言つてね、毎月殘つたとけづゝ私の所へ預けに來さしとる。」と幾らか齋田も自慢らしかつた。

「そりやまあ貴方もお安心だね。道理て富江さん、此節些とも私の所へもお見えんと思つた。」と厭な顏をしたが、「貴方の所ぢや富江さんちふ生みの子がお有りるて、何ちつても治まりが好い。私の所ぢやなかなか然うは行かんて——それてね、今日は貴方に一つお願ひせいと思つて。」

お菊は纒つた金の入る毎に確實な銀行へ預けた。而して容易に其れは自分でも引出されぬやうに必らず定期預けにした。時次に無心をされた時や、重吉などから時借りを言込まれた時斷るのに、何時も其れを手元に金の無い證明にした。それは然かし不時の入用などに自分でも不自由しなければ成らなかつた。少しは現金て持つてゐて自由に使ひたいとも思つた。處がお菊の金を持つてゐる事を時次が最う嗅付けたらしかつた。

「今まではそんな風ぢや無かつたが、嫁が來てから急に那れめがね、一々私が金の出し入れに目を付けとるもんだて油斷が成りやせん。何うだらあ、貴方のお持ちとる公債を一月でも二月でもお貸して貰へんだらあか。私、是々の物を買つて了つたちつて時次の前を作らあと思ふて。」

「そりや家に置いたちつても決つた利子よりや入らんもんだて、貸して上げても可いが――公債らふと金も同じだて――」

「金利ぐらゐの事は私も出さあね。」

お菊はこんな拵へ事もしなければ成らなかつた。

九

今年の夏は、お菊も是までに無く暑さが體に徹へた。年を取つてそれだけ弱つたのかとも思へた。每年夏は瘦せる質であるが、秋風が立つと恢復した。裏の檜へ百舌鳥が來て高啼く頃には、暗い陰氣な家の中にジツとしてゐられないやうな心持になつて、二里三里の遠道を辨當持ちて能く茸狩に行つた。每年決つた其朋輩が誘ひに來たが、今年はお菊も出掛ける氣に成れなかつた。體が大儀て、夏から細つた食慾も何時までも進まなかつた。氣にしては懇意な醫者にも見て貰つたが、神經衰弱だらうぐらゐて藥も下れなかつた。暢氣に溫泉へでも行つて來るさ。と每も決つて然う言つた。

「金持の隱居さんちふものは何所か福々したもんだに、家の阿母さんは何うづら、段々お瘦せるばかり

て、體ても手足ても全て骨と皮ばかりだにね。私、風呂て流して上げても傷々しいやうだ。」と皮肉な蔭口をお鶴は言つた。

「金の事ばかり心配しとるもんだて――ありや慾痩せちふのだ。」と時次も蔭て罵つた。

醫者の勸めもあるし、お菊も何所か靜な温泉場て、緩くり保養をして來たいと思ひ／＼暮らした。氣心の知れない嫁に留守を預けて出掛けるのが心配だつた。前には能く時次や、年も行かない姪なぞに家を任せて出歩いたものてあるが、嫁が來てから時次までが何だか氣が許せなくなつた。何時ても出掛けられるやうに夏の中から用意をしたまゝ、終に出掛け得ずに凉しくなつた、旅費を入れた紙入の中から黴の生へた水中りの藥を出して、お秋の日の椽先に干した。

狹い庭には鷄頭や千日紅が咲いた。お菊は毎朝其れを切つて來ては、死んだ娘の佛に供へた。佛壇の前て長い間瞑目して座つてゐるやうな事もあつた。時次夫婦には其れさへ妙に氣が廻された。

少し遠いが、名古屋に口があつて、漸く其れへ時次が赴任したのは最う十月の末てあつた。汽車に乘る時お鶴はセルのコートなぞ用意した。

お菊は水中りの藥を又紙入へ入れた。信玄袋へ詰めてあつた夏の着更へを冬物と入れ替へて、暖い伊豆の方の温泉へ出掛けた。留守は自分の貸家に三十何年と住んてゐる物堅い翁さんに頼んだ。他人の其の方が憖ひ親内よりは安心に思へた。

湯の利き目の見えるまては、冬中山の中て送つても差支無いやうにして出掛けたのてあるが、彌張り

家の事が氣に懸つて然うはお菊も落着いてゐられなかつた。狭い單調な山の中の生活が、所在の無い彼女を直き倦ませもした。四週間目には最う飽き〳〵して山を下つた。一月振りにステーションを降りた彼女の目には、生れた土地が彌張り懐しかつた。歳末に近い人氣立つた町のゴタ〳〵した氣色も、雲ばかり見てゐるやうな靜な山の中よりも嗜好に適つた。

暮には名古屋の時次から無心が來た。お菊は澁々半分だけ送つた。重吉からも女の着物や頭の物など一包みにして、それを引當てに融通を頼んで來たが、それは斷つて了つた。

「何事かあると、直きに兄さん頼むちつては己れの所へ來といて、偶には此方の頼みも肯いてくれるが可いぢや無いか。」と重吉も膝詰めて懸合つて見た。

「親内の間で金の貸借りだけは、忘れても爲んちふ私の元からの決めだて——貴方も今は惡るくお思ひるだらあが、此先き何時までも近しくして行かあちふには——」

「そりや借りても返さん時を案じるもんだてだが、俺うしてお前、丁と金高以上の品物も預けとくもの、間違ひの有りやうが無い。」

「そいだて、質屋へお行きませうと言ふだあね。是だけの品物がお有りるだもの、何所の質屋だちつても——」

「そんな所へ持ち歩るいて、耻を曝したか無いてお前に頼むのだ。最う可い、頼まん、是から己れも其の了見で付合ふ！」重吉は火のやうになつて歸つた。

それは十二月も押詰つた三十日の晩であつた。重吉の歸つて行つた料理屋の家では、未だ春の門飾も出來ない店先きを宵から閉めて了つて、お上は長火鉢の前でチビ〳〵燗冷しを飮んでゐた。行き所の無い酌婦のやうな青い顔の女が、傍で懷手をして居睡りをした。

十

齋田の娘の富江は、暮にも正月にもお菊の所へ顔出し爲なかつた。富江の亭主には、通勤先きの行き歸りなぞに折々出會つた。富江が金など借りてゐる事は知らないものの如く、彼は通り一遍の挨拶をするに過ぎなかつた。

「富江さんは何うお爲ましたね、些とも顔をお見せんが——些とお遊びにお來でませうちつて、然う言つてお下れませう。」とお菊は厭味交りに言傳てた。

　正月齋田の女房が年禮に來た時にも、富江の不義理を責めるやうな口氣を洩らした。自分と違つて、齋田が家族にまでも刻薄なのを同情して、お菊は内密で彼女の不自由を助けてやつた事も少なくなかつた。娘に貰つたと言つて、古い型ながら縞羅紗の暖さうな吾妻コートに裹つて、髮も新年らしく圓髷に結つた。お菊は温泉から歸ると始終鼻風など感き込んで、春になつても炬燵を離れられなかつた。常には年寄りの癖にと蔭口言はれるくらゐ身奇麗にしてゐる彼女も、藥の褪げた白髮交りの頭を亂して、骨立つた體に萎々の寐衣など着てゐると、寄る年の傷ましい迹は隱されなかつた。

「貴方は何ちつてもお若いねえ、然うして丁とした風をしてお居てると見違へるぞね。」

恁う齋田の女房に言つて小さい溜息もした。

「私も苦勞ちふ苦勞をし拔いたて、是から些と——娘たちも傍へ來とる事だしね、小使錢ぐらゐは不自由させまいだらあて、些と出歩るいて保養でもするだあね。今日も娘の所から呼びに來たもんだて、阿父さんに内密で御馳走になつて來うと思つてね。」と得意さうに見えた。

「貴方、富江さんの所へお行きたら然う言つてお下れませう。お菊の婆も何時まで最う生きられる年ぢや無いて、早く返すものは返して貰はにや成らんちつたて——忘れずに然う言つてお下れませう！」急にお菊の險脈は變つた。

　母から其話を聞いて、富江は行き愁いのを努めてお菊を訪ねた。世間では因業婆だなぞ言つても、自分に對しては小兒の時から始終偷らぬ優しい情誼を富江も忘れはしなかつた。金錢には甚いと聞いてゐるだけに、仍更自分へは快く貸してくれたものを返さないのが心苦しかつた。亭主の就職口が決まればと堅くも約した其違約が、一層行憎くさせた。亭主は今の所未だ通勤先きの新顏で、店員の見習ひと云つたやうな資格であつた。俸給と云つても、今二三ヶ月店務に熟するまでは、僅に夫婦が食つて行き得るぐらゐの手當てに過ぎなかつた。其中から父の機嫌取りに月々幾らかづゝを預けねば成らぬ。それは殘つて預けるのでは無かつた。足らない中へ無理な工面をして父の前を繕ふのであつた。富江は亭主に内密で着物も賣つた。知つた呉服屋から掛けて取つた反物を、右から左へ古着屋の手に渡して現金にし

たりした。

「それも最う二三ヶ月の辛抱だと思つて、私も目を瞑つて――此方らへも御無沙汰を承知しい〳〵故と上らずに居ましたの。」小兒の時からお政さんと姉妹か何ぞのやうに可愛がつて頂いて、今更小母さんに義理知らずだと思はれるのは、私、何よりも愁くつて――」と富江は聲を顫はせた。

然う聞けば、春着にしては粗末な糸織の縞物も可哀さうに見えた。お菊の好きな事を覺えてゐて、甘納豆の大瓶詰めの手土産までが氣の毒だつた。

「阿父さんも何ちふ人だらあ。若い人達は色々錢も要るに、そんな無理な事を貴方達にお爲せんでもねえ。家の時次をお見さい、取るだけて足らんて、去年の暮にも亦無心だあね。」

お菊は近所の仕出し屋から故々料理まで取寄せて、午飯の馳走をしたりした。而して死んだ娘の事を言ひ出して、富江と遊んだ頃の事なぞ思ひ出しては懷しさうに語つた。

「私も那の子に死なれたのが今ても殘り惜しいわね。貴方も同胞は無いし、お政が生きとつたら力にもなり合つて、何んなに私も樂しみづら。那れさへ生きとりや時次だちつてもね、今のやうにや成らあちつても成りやせんだが、今度の嫁が來てから悉かり那奴に卷かられて了つとるもんだて――私も年取つてあんな者達に懸からにや成らんかと思ふと情無い、他人の方が何のくらゐ賴もしいか――」

「私もお政さんと姉妹のやうに可愛がつて頂いたんですから、小母さんも何うか、私て間に合ふ事があつたらお政さんの代りに使つて下さいな、何んな事でもしますから。」と富江は慰めた。

慰めたり慰められたり、お菊も今日のやうに氣の晴れた事は暮から始めてだと喜んだ。小女に言付けて、久振りて炬燵も除けさせた。午からは横日の射す障子際へ娘の遺物の旅簞笥など持出して、富江に薄茶を立てさせたりした。性の拔けた障子紙は所々丹念に切り張りされた。柱も框も古く黑光りに拭き込まれた床の間には、金光敎の懸軸を懸けて、小さな鏡餅と苔の固い福壽草の小鉢とが飾られた。外には春らしい支度も見えなかつた。毎もの通り奇麗に片付いて、子の無い老女の潔癖な獨り暮らしを思はせた。金が殖えると云ふ言ひ慣はしから、朝々茶殼をやつて株を肥した鉢前の南天の實に、折々溝鷦鷯が來て囀つた。町通りから少し引込んて、車の音も滅多に聞えぬ。周圍は靜かて、小體な獨り暮らして、自然と考事てもするより外に此所ては氣の紛れやうが無かつた。一日炬燵に凭れて、死んだ娘の事や、短い生先きの事を果しも無く考へてゐるお菊の寂しい遣瀬無い生活を、富江も想像して見た。

「此間のやうに見限らずにね、些い〳〵又遊びに來てお下れませう、私も話對手が無くて寂しいに。可いかね、餘り顏をお見せんと又慍るぞね。」富江の歸りを送つて出てお菊は念押しした。

すると其月の末てあつた。富江は又鑵詰のやうな物を手土産に持つて訪ねて來た。拜借したのが餘り長くなるからと言つて、是までの利子を總算して來て出した。お菊は些つと異樣に思つた。固よりそんな事りて用立てたものては無いから取るまいとしたが、それては氣が濟まぬと言つて强ひて押付けた。利子が、それだけては無かつた。富江は然うして置いて新に又幾らか貸してくれと言ふのてあつた。利子を受取らせて置いて、而して斷るに斷れないやうな、人の惡い、押の强い其の遣り口をお菊は不快に

思つた。欲しい物も父に強請り得んで、陰でシク〳〵泣いてゐた昔の富江では無いと思つた。彼女が小兒の頃、お政と腹違ひの姉妹でゞもあるやうに人から能く譯はれた。そんな事を今も覺えてゐるのでは無からうかと、偶とお菊は思つた。然う思ふと、甘へて寄つて來る子を邪慳に突放してやる時のやうな、一種憎しみの感が發つた。

お菊は一旦受取つた利子を返して、而して素氣無く斷はつて了つた。

十一

名古屋の時次からは又無心が來た。今度中等教員の檢定試驗を受けたいと思ふから、其準備に是非無くては成らぬ字書や參考書を買ひたい、受驗料も納めねば成らぬ。直ぐにも送金して貰ひたいやうに言つて來た。而して中等教員の資格さへ得れば、最う是までのやうに家から補助を仰がずとも濟むやうな事も書添へてあつた。お菊は又かと顏を蹙めずには居られなかつた。此節は時次に金を遣るのが、何だか他人に與れるよりも惜しいやうな氣がする。中等教員の試驗を受けると云ふのも初耳である。毎もより は無心の金高も多い、そんな口實でも設けなければ言つて寄來しやうがあるまい。自墮落な女房と二人で何をしてゐるか分つたものでは無い、然う彼女は思つた。其のまゝ返事も遣らずに置いた。

すると、追懸けて又端書を寄來した。今月中と思つた出願期限が、能く問合せて見ると此十五日限り――明後日であつた。明日午後三時の學校の退けを待つて其地へ出向くから、何うぞ都合をして置いて

くれとあつた。顏を合はせればお菊も厭と言はれぬ弱味があつた。

時次が夕方の汽車で來て見ると、家は戶閉めになつた。隣で聞合すと、今朝小女を連れてお菊は出掛けた。着物も着更へて、信玄袋のやうな物を小女に持たせて、何所か遊びにでもお行きるやうな風であつたと言つた。

前以て端書も出して置いた。自分の今日來るのを知つて避けたのである。當にして遠い所を來たゞけに、失望と憤懣とは毎もの時次と人が違つたやうに見えさせた。ステーションから乘つて來た俥を直ぐ又重吉の所へ走らせた。其頃は最う重吉の居た小料理屋も店を疊んだ。お上と一所に小さな仕舞家へ採療治の看板を出して、彼が若い頃に覺えた一心流の柔術が其れに益立つた。

「然ういふ奴だ！己れも愛想が盡きて此節は些とも往來せんて、何處へ行つたゞか更ぱり見當が付かんが――今夜持つて歸らにや成らんちふに、そりや困つたのう。二十や三十の事だて、己れの所で立換へてやつても可いが――後で乾度何だ彼だと腹の立つやうな事を義妹が言やがるに決つとる。そいぢや然うせう、是から一處に齋田へ行つて、義弟に出させう。那れにはお菊も一目置いとるて、餘計な事をしてくれたちつて苦情も言ふまい。」

重吉は然う言つて時次を齋田へ伴つた。其所は麥畠を隣にした新開のやうな町外れて、土を取つた水溜りに宵闇の蛙が啼いた。女房が小餌ひの鷄の腥い塒の匂ひを緣先きへ避けて、齋田は薄暗い三分心のランプの明りで養子と碁を打つてゐた。

「本來なら、一應お菊さんに斷らにや用立てゝ上げる譯に行かんだが、然ういふ場合ぢや貴方も氣が氣ぢやあらまい。可うがす、貸して上げませい。」勿體げに言つて、齋田は老眼鏡を外して重吉に、「其代り、せがれが連れてお來てたとて、お菊さんの方へは貴方から話してお下れませう。」

「お婆は毎も口癖のやうに、金ぢや一文も持つとらん、買ひたい物も買はずに不自由しとるなんちつて――私は何時か佛壇の上に紙入が置き忘れてあるのを何氣無く開けて見て、丁と知つとる。」と時次はそんな事も言つた。

「だが――今度は然ういふ事でお要りるのだて爲方も無いが、貴方も是から些と始末好くやつて、お菊さんに餘り心配を懸けんやうにせんと可かんぞね。」と齋田は苦い事も言つた。

汽車の時間を案じて、時次が慌てゝ暇を告げて行つた後で、

「お菊もお菊だ！」と重吉は言つた。「幾ら惜しんだちつて、何うせ皆時次に遺して行かにや成らんもんぢや無いか。」

「皆遺して貰ふだもんだて、時次も有難いと思つて、最些とお菊さんを安心させるやうに爲にや可か無い。」と齋田の言ふのも無理では無かつた。

「寧その事――」傍に居た齋田の養子が、若者にあり勝ちな思遣りの無い冷笑をして、

「人に遺して行くのも惜しけりや、お菊さんもウンと面白い目でもして、死ぬまでに使へるだけ使つて了つたら可からうに。」

「馬鹿な――丹精して拵へたものを、勿體無くてそんな事が出來るもんぢや無い。」と齋田は苦り切つた。

「ぢや慈善事業か何か、公益になるやうな事に財産全部を提供するのも面白い。お菊さんの德が死んだ後まで遺るが、氣に入らない養子に厭々遣つても、後で無くされて了つちや何にもならない。」然う言つたのは、幾らか養父に對する彼自身の反語でもあつた。

重吉の口から、齋田の養子の其言葉がお菊の耳へ入つた時、彼女の怒りは一通りでは無かつた。

「私が身上殘らず、慈善たらに寄附せいちつてお言ひださうだが――、堀田の財産に就いて、何もそんな人様に指圖がましい事を受ける覺えは私や無い。一體何ういふ腹で貴方のがお言ひたゞか、聞かしてお下れませう。」故々富江を呼び付けて詰つた。

十二

時次の中等教員檢定試驗も、豫備試驗さへ受からなかつた。春産れた子は最う留り歩きの出來るやうになつて、廻らぬ舌で阿父ちやん／＼と絡つた。彼も又一年コツ／＼勉強する氣には成れなかつた。自分の年や才分も考へられた。然かし子どもの成育するに付けても、月々の經費は嵩むばかりであつた。而して養母の方の無心は段々利かなくなつた。彼は先づ人の好い重吉から取込んだ。一家の戸主たるものが、何時までも餘所へ出てゐると云ふ法は無い、家へ入れるが可い、と重吉の口から言ひ出させた。

「然うするには、阿母さんに別居して貰はにや成らん。名ばかり隱居ちつても、是までのやうぢや到底も家の中が治まらんて。」と時次は本音を吐いた。

お菊は狂氣のやうになつて、時次の其の言分を罵り歩いた。自分を邪魔にして追出す了簡だとも言つた。而して堀田の身上を横領するのだとも言つた。別居してくれなら別居もしてやらう、其代り私が拵へた財産は私が殘らず持つて出るとも言つた。

「何時まで然う言つて頑張つとつても爲方があらまい。財産の幾分ちふものを隱居金に貰つて、それで氣樂に貴方も別れてお暮らしる事にしたら何うだね。」と齋田は諫めた。

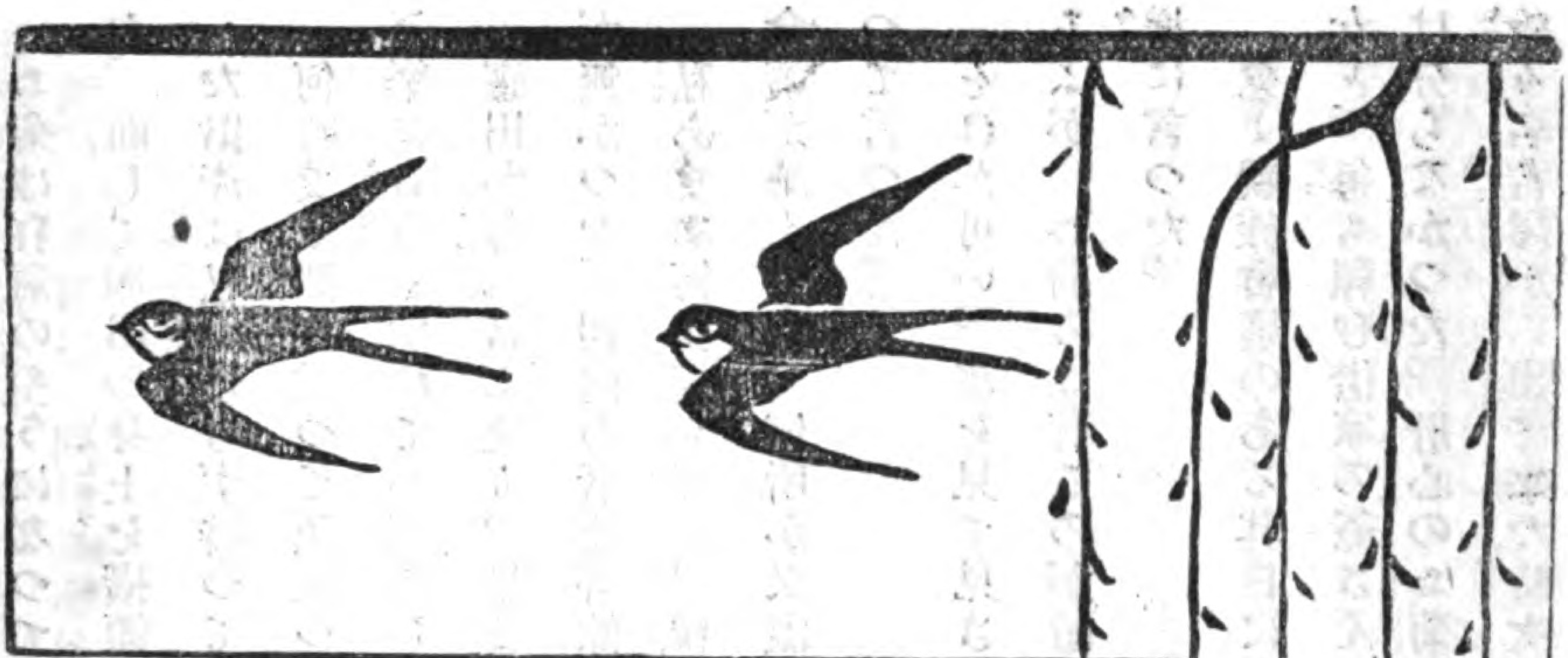
齋田が毎も言ふ通り、早まつて家督相續させたのが自分の手落ちだつたと、お菊も悔んで見たが爲方が無かつた。親内の者達も餘所に見かねて、親族會議を開く事にした。

「私あまあ何うでも可い、親類衆に任せるて、何うなりと貴方達の可いやうにしてお下れませう。親戚會議が濟んだら、何所か又温泉へでも行つて緩くり保養して來らね。」とお菊も我を折つたやうに萎れ返つて言つた。

「それが可い。鏡を見て見さい、頬も何も痩せ削け了つて幽靈のやうだが――世の中ちや金が無くて敵ちふが、お前のは有るのが敵だ。些と金の事なんか忘れて體の養生するが可い。」と重吉は義兄らしく大樣に言つた。

愈よ親族會議のある其日になると、お菊は何所へか出掛けて了つた。重吉が迎へに行くと、家には小女と。毎も頼む借家の爺さんとが留守をしてゐた。唯一二週間遊んで來ると言ひ置いただけで、行先きは分らなかつた。肝心のお菊が居なくては會議も開けなかつた。歸り次第に最う一度開き直す事にして、故々名古屋から出て來た時次を宥めて歸した。

（完）





暴君（社會劇二幕）

永井荷風

時代

現今

人物

川原忠澄。伯爵、三十二歳

川原忠正。川原伯の叔父、陸軍少將男爵、五十九歳。

鶴田十郎。川原伯爵家の家令、六十五歳
永山新太郎。外務省高等官、三十五歳
守屋靑鮭。極東新報主筆、三十五歳
君塚孝平。銀行頭取、六十歳
君塚千代子。頭取の令孃、後に川原伯爵の夫人、十九歳
春の家小富。藝者、二十七歳
其他、園遊會の來客、新聞記者、女中等。

第一幕

銀行頭取君塚孝平の庭園。園遊會。十月中の午後。舞臺は小高き丘の上の心にて、正面奧深く坂道の下り口。この邊の大木は皆後に向ひて斜に其の幹をのばし、崖下には廣き平地の庭ある事を想像せしむ。右手に狹き天幕を張りたるビール店。庭上よきところに、靑きペンキ塗り、ブリキ製のテーブル二三脚を据ゆ。左右ともに古びたる木立。色づきたる木の葉靜かに散る。

幕明くと、銀行員らしき男六人。(脊廣、モーニング、フロツクコート、羽織袴等)思ひ〳〵の服裝にてテーブルの一ツを圍み、ビールを呑みゐる。其れより隔りたる處に置かれし他のテーブルには同じく來客の一團(四人程)ビールを呑み終りたる體にて、幕明くとぢきに椅子を立つて左手に入る。天幕の中には、赤前垂れに赤襷をかけたる藝者風の女一人コツプをふきゐる。

(第一節)

來客の一。今日は君、隨分いろ〳〵な方面の名士が來集してゐるやうだね。
來客の二。實業界の歷々ばかりぢやない。大臣や華族樣なんかも隨分來てゐるやうだぜ。
來客の三。現代の勢力を盡く網羅したんだね。非常なもんだなア。
來客の四。此れも金權と政權とが提携し出した現象なんだらう。段々こうなつた日にやア、地位も金も何にもない奴は、ます〳〵世の中から蹴落されるばかりだ。
來客の五。兎に角大したもんだなア。日比谷の公園なんぞよりも餘程閑靜だ。
來客の六。これて大きな瀑でも落ちた日にやアまるて日光か箱根よろしくだ。
來客の一。何しろあれだけの來會者が、ちり〳〵ばら〳〵になると、何處へ行つたか分らない位に靜なんだからなア。
來客の二。何か又餘興でも始まつてるんぢやないか。
來客の三。もう一杯呑んて出掛けやうか。
來客の四。ちよつと、姐さん。ビールをどうぞ。
ビール店の女。はい。唯今。皆さんてすか。
來客の五。左樣々々。六つてすよ。
ビール店の女。かしこまりました。ビールをつぎはじめる。
來客の六。なか〳〵美人だな。

來客の一。君、さつき、お汁粉屋を出してゐた姐さんを見たかい。實に凄い位だつたね。
來客の二。假裝の令孃か。それとも何處かの藝者か知ら。
來客の三。君にも似合はないなア。有名な新橋の小富ツて云ふ藝者ぢやないか。僕は繪葉書て見覺えがある。
來客の四。さう云へば去年會社の忘年會にも來た事があつた……
來客の五。食物見世の姐さんはそれぢやア大概藝者なんだね。
ビール店の女。どうもお待遠うさま……コツプを盆に載せて持出てテーブルの上に並べる。
來客の六。姐さんはどちらからです、お名前を伺ひたいもんですね。
來客の一。新橋の方ですか。
女。ほゝゝ。存じません。
來客の二。滅多な事を云つて、何處か華族樣の御令孃だつたら大變だぜ。
來客の一。姐さん。あなたは御孃さんで被居るんですか。
女。見かけによらないでせう。これでもお落胤ですよ。ほゝゝゝ。
來客の三。姐さん。ほんとにお孃さんの出してゐる店があるなら、此の男に敎へてやつて下さい。
來客の四。持參金付き、お臺所持ちのお嫁さんを貰はふと思つて、鐘太皷てさがし歩いてゐるんですから、功德になりますよ。

一同。はゝゝゝは。

此時料亭の彼方にて盛に拍手する聲聞ゆる。同時に奥の坂道より、同じ赤前垂れの女出で來り、

女の二。姐さん。お前さんも早く行つて御覽なさいよ。宗十郎さんの沒酌が始まるところよ。六代目さんも來てゐるわ。

來客の一。役者の話が出たら、もう吾々は退却すべしだ。

來客の二。行つて見やうぢやないか。

來客の三。姐さん。一緒に行かうかね。

來客の四。何なら、僕が此の店の留守番をしやうか。はゝゝゝは。笑ひながら立つ。

ビール店の女。御親切さま。お後からすぐ參ります。

一同はがやがや云ひながら坂道に這入る。同時に、思ひ思ひの服裝したる來客の男女三四人づゝ左右の木陰よりいづれも急いで坂道に入る。女二人だけ居殘る。

（第二節）

第二の女。くたびれたといふ風にて椅子に腰をかけ、姐さんとこは靜でいゝわね。私のとこツたら皆さんの通も逃なんてせう。忙しくツて目が廻つちまつたわ。

ビール店の女。それだつて顏が見られゝば結構ぢやないか。

第二の女。もうあんな岡惚れは止めたのよ。

テーブルの上の麥酒を取つて呑む。ビーヤ店の女はテーブル上を片づけながら、

ビール店の女。　今日は芳町の方からも來てゐるやうだね、此處にゐるとちつとも様子が分らない。山奥だから。

第二の女。　その代り氣がせいくするわね。下にゐると逆上せちまつてよ。

ビール店の女。　小富さんは何を出してるの。

第二の女。　お池のそばでお汁粉屋さんを出してゝよ。

ビール店の女。　色消しだねえ。

第二の女。　姐さん。あの方にもお目にかゝつてよ。ハイカラな洋服を着てゐらつしやると、まるで高島屋さんそつくりだわね。小富さんが夢中になるのも無理はない。

ビール店の女。　此頃は氣の毒なほど窶いてるよ。

第二の女。　どうして。

ビール店の女。　奥様にお貰ひなさるんだとさ。しやうがないやね。何しろあちらは伯爵の殿様だし、此方は賤しい藝者風情だもの。小富さんだつてむちや諦めをつけてゐるだらうけれど。そこがねえ……

……

第二の女。　あゝつまらない。私やそんな話を聞くと人事だとは思はないわ。姐さん頂戴、私にも一杯。

ビール店の女。　いゝのかい。お前さんもう隨分呑んでるんだらう、ビール店の女はビールをついでやる。

第二の女。　はゞかりさま　ビールをのむ。此の時伯爵川原忠改、外務省高等官水山新太郎の両人話しながら左手の木陰より歩み出る。

（川原伯爵は一見して貴族と見らるべき秀麗なる容貌、鼻下に美しき髯を蓄へ、フロツクコートにシルクハツト、手に杖を持つ。水山も品格ある無髯の好男子、同じ服裝。）

（第三節）

伯爵。　この邊なら誰も來やしまい。

水山。　成程靜ていゝ。それに君、秋の日といふ奴は妙にぢり／＼照付けるから、日向にゐるとたまらないよ。

伯爵。　歩み出て、女達の姿を見て、　何だ。お前達はこんな處にかくれてゐるのか。

ビール店の女。　あら、御前……先日はどうも。

第二の女。　私はさつき下でお目にかゝつたのよ。だけれどわるいと思つて默つてゐたわ。

伯爵。　だまつてゐずと大きな聲でよべばよかつたのに……水山と共に椅子にかける。

ビール店の女。　ビールを差上げませうか。

伯爵。　頷付きながら、　お前達も見に行くがいゝ。宗十郎の次には寺島が踊るんだよ。

第二の女。　見に行かうに思つて相談してゐた處なんて御在ます。六代目さんも矢張素踊りて御在ますか。

伯爵。　さうだらう……シガアに火をつける。

ビール店の女。 ビールをテーブルの上に置き、御前にお留守番をして頂けばたしかだから。今の中に鳥渡の
ぞいて來ます。

伯爵。 其代りのろけ賃をうむと取るよ。

ビール店の女。 あら、お御門違ひですよ。

女二人手を引きつれて坂道へはいる。

(第四節)

伯爵。 やつと追出した。これでゆつくり話が出來る。

水山。 何だい。この間聞いた著述のことか。

伯爵。 それも話したいのだが、それよりもつと緊急な事件が起つてゐる。水山君、僕はいよ〳〵結婚
することになつた。

水山。 さうか。 あたりの木立などを眺めたまゝにて答へる。

伯爵。 家の家令だの親籍のものなぞが、頻りとこゝの家の令孃を押付けやうと思つて、一生懸命にな
つて騒いでゐるんだがね……君は見たかい。頭取の令孃を。

水山。 さつき二三人づれて池の縁を歩いてゐた、あの一番丈の高い令孃だらう。あれなら上野の音樂
會なぞでも見た事がある。

伯爵。 君は僕の結婚についてどう思ふ。

水山。別にどうも思はない。似合はしい結婚だと思ふだけだ。

伯爵。さうかなア。

水山。君は伯爵だし、先方は、銀行の頭取で、此れだけの立派な屋敷を持つてゐる富豪の令嬢だから……。

水山は冷淡かと思はれるまで落ついた調子にて云ふ。伯爵は急き込む調子を強いて和げ、

伯爵。そんな事を訊くんぢやない。君は僕見たやうな放蕩無頼な男が、あゝいふ可憐な處女を娶るのを見て、どう感じるか、君の考へがきゝたいんだ。水山君。僕は白狀するが。良心の苦痛に堪えられないやうな氣がしてならんのさ。

水山。良心の苦痛……？

伯爵。さうさ。僕の過去をよく知つてゐるのは君ばかりだから、それで僕は君にきゝたいのだ。君と二人で巴里やロンドンに遊んで居た時分の事を考へて見給へ。尤も君は外務省の役人といふ身分もあるし、それに、歸朝してからは非常に穩かな人になつたけれど、僕は今だに相變らず、賤しい女ばかりに接近してゐる……、君は僕のやうな放縱無頼なものが、あゝ云ふ無垢な世間見ずの處女を娶るのを見て、實際何とも思はないかね。すこしも道德上の義憤を感じないかね。

水山。さうさな……

伯爵。君自身の經驗はどうだつた。君は外國で放縱な生活を送り抜いた後、今の妻君を迎える時には、

どんな心持がした。

水山。さうさ……何となく氣の毒だつたね。

伯爵。單に氣の毒……たつた其れだけか。君は別に衷心から湧き起る苦痛を感じなかつたのだね。

水山。感じたにしても、僕は萬事につけてさう云ふ不便な問題は、なりたけ自身から閑却するやうにして行く流儀だからね。理想は理想、現實は現實と、僕は其の間にちやんと區別を立てゝ置く……

……

伯爵。君の主義は僕もよく知つてゐるよ。今の時代は眞面目に憤慨して戰ふ時代ぢやない。冷かに傍觀して笑ふ時代だ……と云ふ君の說には、僕も此頃は大に同感してゐる。けれども君、それは吾々一個人が大きな時代に絕望した揚句、社會とか時代とかに對して云ふ話なんて、一身上の問題にまで應用する必要はないだらう。

水山。「必要」といふ言葉は、其の人々によつて其の場合々々に解釋を異にするもんだからな……

伯爵。わかつたよ。君の場合は僕のよりも非常に範圍が廣いと云ふんだらう。さうかなア、吾々は個人としての生涯までぞ、矢張世間同樣に冷觀して行かなければならないかなア……

水山。だから、思想の問題は別さ。女だの結婚だのと云ふ事は、そんな高尙な眞面目な問題の中に入れべきものぢや無い。銀行や役所のデスクの上で取扱ふ事務と同じもんだ。まだ覺醒してゐない女性を取扱ふには、矢張り其れ相當な覺醒しない心を以てすれば、それていゝぢやないか。僕は自分の妻

なぞに對しては、僕が思想上の問題として抱いてゐる婦人觀なんぞを決して應用しやうとは思はない。先方は此れまで通り有り來りの細君として幸福に平凡に家事を收めてゐるのだ。親類のものや女學校時代の友達なんぞに對して、高等官の奥樣だ位の淺薄な虚榮心をほのめかして得々としてゐる。小學校で成績のいゝ子供の事を神童のやうに思つてほく／＼喜んで自慢にしてゐる。そんな事を一々むきになつて咎目立てをしてゐた日にはきりがない、だから僕も妻に對しては妻に對するだけの、平凡な宿六になつてすましこんで、脂下つてゐる……それが乃ち天下泰平家内安全と云ふものだ。

伯爵。　淋しい、情ない話だなア。

水山。　その代りに甚だ便利だよ。何しろ生きてゐる人間を日常の必要品として見て行くんだからね。下婢の取締に食事の注意と、それから尚一つ付け加ふれば性慾の整理かね。はゝゝ。兎に角家事といふ經濟上の道具にして行けばいゝ。いゝのぢやない。道具として見るのが双方の平和幸福の爲めに必要なんだから、何にも自分から煩悶して平地に波瀾を起す事はないのさ。尤も此ア僕達の境遇についての話なんだが、君なんぞの身分ぢやア經濟上の遣繰りは全く不必要なんだから、猶更譯けのない話ぢやないか。妻君をして幸福たらしめんと欲したら、理想だの人生だのとそんな事を考へるよりも、我輩位の中流社會だつたら、先づ充分に朝寢坊をさせて、間食をどし／＼させてやるんだね。それから道樂をしたつて差支はないから、晩くても家へは歸つて來るのだ。それから氣に入らない事があつたら、皮肉な態度をせずに、頭から眞面目に怒鳴りつける方がいゝ。その代り時々は曲馬の馬を馴ら

すやうに眼の縁へ接吻してやるのさ。わけアない話だ……

此の時左手の木陰より藝者小富、（凄艶なる容貌。）水淺黄の前掛をかけ茶店女に粧ひたるまゝの姿にて出で鳥渡此方を伺ひて、直ぐに這入る。伯爵と水山は更に心つかざる體。

伯爵。俯向きて、君の話をきいてゐると、僕は深い穴の底へでも沈んで行くやうな、冷たい、厭アな、悲しい心持がする。現實の生活に接近して苦しむと、人間はそこまで悟つてしまはなければ成らんものかねえ。僕なぞは、如何にしてもこの世襲の地位と財產とがつきまとつてゐる爲めに、それまでに傷ましく實生活の苦惱に接觸する事が出來ないから……つまり何時までたつても世間の云ふ華族の馬鹿殿樣だ、どうしても生活の底の底を割つて見る事ができない。誰れかの云つた通り眞理を得んとするものには、哲學よりも飢を與へよだ……

水山。君は幾年になつても、學生のやうに眞面目に煩悶してゐる。其の勇氣には僕は時々肅然として襟を正したい位だ。けれども君、それアつまらんから止め給へ。少くとも家の事だの妻君の事だのについては、苦しんでも功のない事だから、止した方がいゝ。

伯爵。僕も心の中では絶えず自分で注意してゐる。だから、君、僕は歸朝した當座のやうに、世間の事についてはあんまり憤慨しなくなつただらう。貴族院の選擧にも全然關係しないし、外交官にならうと云ふ計畫も捨てゝしまつたし、新聞社を起す事も思ひ止つたし、全く世間とは隔離して、唯だ自分の好きな本を讀んだり、道樂に文學をやつて見たりしてゐるばかりだ。自分ぢや此れでも非常に悟

つたのもりなんだよ。

水山。それァ僕も大に察してゐる。非常に角がとれて來たよ。

伯爵。二三年前だつたら、今度のやうな結婚談なんぞは、てんで頭から受け付けやしないさ。然し僕も此頃ぢやア、出來るものなら世間並みに察して行かうと心掛けてゐるから、それて先方さへ、僕のやうな放蕩兒といふ事を承知の上なら、妻の一人位迎えてもいゝ位の事は、家令の鶴田にも話をしたわけなのさ。然し君、いざ話がきまつたとなると、僕は非常な不安を感じ出した。自己を欺くといふ良心の苦痛に迫められてならなくなつた。

水山。君は自分に對しても他人に對しても餘り嚴格過ぎるよ。

伯爵。まア僕のいふ事を聞いてくれたまへ。いつだつたか、社會に名を知られてゐる紳士て、何遍妻君を取代たか分らないといふ奴の話が出た時、吾々は何と云つてそれを批評したか、君は忘れやしまい。君は例の皮肉な冷笑を浮べながら、日本といふ國は、助兵衛な爺供には實に便利に出來てゐる處だ。血統の爲めといふ口實の下には、社會的道德の上からでも、立派に多妻主義が許されてゐるし、一家の事情と云ふ勝手な申譯を楯にさへすれば、男は幾度でも新しい妻を持ちかへる事が出來る。結婚といふ事は法律制裁の保護の下に處女を弄ぶのも同樣だ。半玉を水上げして遊ぶよりも、社會から非難を受けないだけでも、此の方が餘程利功な遣り方だと云つたぢやないか。僕が英吉利から佛蘭西、佛蘭西から伊太利亞、それから埃及まで遊び歩いて、何十度戀人を替へたか知れない揚句に、あの可

醜な處女と妻の契りを結ぶ。あゝ、君、何と云ふ醜怪な行爲だらう。それをば親類のものや家令供は、殿樣のお身持が直つたのだと云つて、お目出度がつて喜び騷ぐのだ。妻にならうと云ふあの處女自身も、平然として僕のやうな放蕩兒を不潔だとも何とも思つてゐないらしい。一時は恐しい病氣の爲めに、腐りかゝつて行く肉體を、辛くも醫者の手で救ひ上げられた、さう云ふ僕の身體を何とも思はない。さう云ふ恐しい秘密の隱れてゐた事を、探究しやうとも何とも思はない。馬鹿と云はうか、無神經と云はうか、僕はもう呆れ返るばかりだ。

水山。まつたくだね……

伯爵。君だつて呆れ返るだらう。

水山。だからさ。呆返つて、その儘先方の云ふまゝにして置けばいゝ。いつまでも唯だ呆れてゐたまへ。憤慨するだけ餘計な事だ。

伯爵。水山君。外の話とはちがふ。すこしは眞面目になつてくれたまへ。

水山。大に眞面目なんだよ。だから僕は眞面目に忠告する。何に限らず君は完全と云ふ事を望み過ぎる。あんまり世間の人達を立派なものに見過ぎて、そして嚴肅に取扱ひ過ぎるのだよ。未來の伯爵夫人たるべき此處の令孃なんぞは、僕の眼から見れば失禮かも知れないが、大工や桶屋の娘と同じ事だ。自覺しない世間一般のお目出度い女だ。それを君はあんまり偉いものに見過ぎてゐるから、餘計な心配や憤慨をするんだ。今の女性は一體に自覺しないやうにやうにと教育されてゐるのだから、つまり

自覺せずにゐる方が、親孝行にもなるし、貞女にもなるし、萬事につけて、自分の身の上にも都合がいゝのさ。

伯爵。然し、こゝの家の令孃なぞは隨分高い敎育を受けてゐるし、音樂の素養もあるんだがなあ……

……

水山。それがそも〳〵誤謬の初りだよ。現代の女子敎育といふ奴は、敢へて女子敎育ばかりには限らんのだが……單に書物を讀む事を敎へるだけなんて、書物に書いてある事の意義を解釋させるのぢやない。學生をして其の內心から發する獨立の思想感情で、自分の身の上や世の中の事をしみ〴〵と理解させるやうな方針は取らない。寧ろそれをば惡い事、危險な事だとしてゐる位だ。だから、こゝの令孃なんぞも、目先と口先だけては英語を知つてゐるだらう。けれども其の思想と感情に於ては、半生を女郞屋と瘋癲院の一室に送つてしまふ吉原の娼妓と變りはない。唯だ柔順な Passive な動物さ。シエーキスピヤの Othello は讀むだらう。讀めなければ先生に叱かられるからだ。然しかわいさうな事には Desdemone がどういふわけて、自らオテロを良人に撰んだかといふ事は知らない。知る事を禁じられてゐるんだ。禁じられてゐる事を不思議に思はないんだ。不思議に思ふだけの能力がないんだ。さう云ふ女性が親の命令通りになつて嫁に行く先きは、大概知れてゐる。若し君の處へ來ないのならば、君よりも倘一層心のすさんだ品性の下等な男の處へ行くのにきまつてゐる。君ならば僕は實際結構過ぎる位だと思ふ。少しも良心に咎める必要はない。成金紳士が半玉を買ふやうな心持て、最

氣よく三々九度をやつたらいゝぢやないか。世間並みには世間並みを以て此れに對するより外に方法はない。覺めざるものは覺めざらしめよて、なにも吾々なんぞが横合ひから躍氣になつて騒かずとも、世の中は世の中のなすまゝにさして置けば段々よくなつて行くよ。忠君愛國の敎義は株屋と結托する政治家に任かして置けばいゝ。慈善事業は勳章のほしい成金紳士に、女性の解放は救世軍て澤山だ。吾々なんぞの出る幕ぢやない……あんまり饒舌つたんて咽喉がヒリ〳〵して來た。姐さん達は役者を見に行つて、御留守なんだな。

水山は立ち上つてビール店の方に進み寄り、獨りてビールをつなぎながら、

水山。一杯どうだね。

伯爵。いや。澤山……

俯向いたまゝ杖の先きにて地面をつゝいて居る。舞臺奥の方にて再び拍手の響と共に、囃子入長唄の三味線（連獅子か何かのごく早き合方）かすかに聞える。

水山。君。茂つた靜な樹の間から遠くの音樂を聞いてゐると、どんなつまらないものでも、皆な神秘に聞えるものだねえ。あれは、月のいゝ晩だつたッけね、サンクルウの森の中に寢轉びながら、遠くに聞える田舍の踊場のワルスを聞いた時の心持は、實に何とも云へなかつたぢやないか……

伯爵。凡ては逝けり。凡ては去れり……さ。

兩人暫くだまつて耳をすます。長唄の合の手一段とまかく急速になる。此の時木蔭にかくれたる以前の藝者小富二三歩あゆみ出て、物思はし氣にためらふ。水山は早くも認めて。

水山。や、小富か。君、小富が來た……
然し伯爵は依然として傍向いてゐる。小富は進み出て、
小富。水山さん。ほんとに暫くですねえ。
水山。暫く逢はないね。下の方はいそがしいだらう。
小富。眼がまはるやうです。水山さん。實は此間からお目にかゝりたいと思つて、隨分焦れてゐたんですよ。此頃はちつとも御出掛けになりませんね。
水山。何か耳寄りな話でもありますかな。
小富。すこしお話したい事があるんです。
伯爵。おい。お富。水山君をつかまへて、またつまらない愚痴を聞かせやうと云ふんだらう。近所迷惑だから止すがいゝよ。
小富。またそんな、邪慳な事ばかり仰有らないだつて能う御坐んすよ。もうちやんと分つてるんですから……
水山。それこそ近所迷惑だから、なりたけ平和にやつて貰ひたいなア……誰か來やしないか。
小富。御迷惑になるといけないから……それぢや水山さん、ほんとにお約束してよ。
水山。僕もすこし賑な方へ行つて見やう……どうだ、君。
伯爵。いゝ、うざう、むざうに挨拶されるのが面倒だから。

水山と小富とは伯爵を置いて、左手の木蔭へ這入る。伯爵は退儀さうに椅子から立上つて、

伯爵。　あれも、かわいさうな女だ。考へて見れば無理もない……………

茫然として、木の葉の散り來るを眺めてゐる。

（第五節）

正面の坂道より、人々の犀して、園遊會の主人、君塚孝平（丈低く肥りたる老人。フロックコート。）其の令嬢千代子（高島田、裾模様）。つゞいて伯爵家々令鶴田十郎（羽織袴。少しく腰の曲つたる頑固らしき白髮の老人。）出て來る。

鶴田。　どこまでも能く御掃除が行き届いて居りまするな。

君塚。　いやもう植木屋まかせにして置きますので、荒地も同様て御在ます。　坂道を上り盡して舞臺に來り、

伯爵はそこにお居てゝしたか。

伯爵は眉をひそめ、聞えぬ振りして左手の木蔭に這入らうとする。家令鶴田十郎二三歩追ひ行きながら、大きな聲にて、

鶴田。　もし、御前。頭取がお呼びて被居います。

君塚頭取は千代子と共にビール店の椅子に腰をかけ、伯爵の方に向きながら、

君塚。　混雜して居りましたんて、ついまだ御挨拶も致しませんてした。どうぞ……………。　隣りの椅子を引き出す。

伯爵。　どうも恐れ入ります。

伯爵は眼をかけたまゝ俯向いて沈默する。鶴田は椅子を少し後に引き下げて同じく眼をかけ。

鶴田。大木の繁り具合と云ひ、木の葉の散る風情と云ひ、まるで深山幽谷の趣きが御在ますな。

君塚。今時分はまだよいのですが、冬になつて風が吹きますと、下の方の庭まで一面枯葉だらけになれますので、いつも困り切るのです。

鶴田。いや、お庭は餘り細々しく手を入れますより、矢張り自然の風趣を備へて居るのに限ります。

君塚。それはさうと……鶴田さん。いづれ改めてあなたから伯爵へ御相談を願はうと思つてゐたのですが、婚禮の日取りもいよ〳〵來月の十日と云ふ事まで定まつて居るのですから、いかゞでせう。其の前に近々に一ッ、伯爵のお出てを願つて、私の方の家中のものだけで、極く略式の食事のやうな宴會のやうな遊び事がして見たいと思つて居るのですが……御懇意な上にも猶御懇意になつて置きたいと思ひまして……

鶴田。御尤な次第で御在ます。

君塚。伯爵はいつ頃が御暇でゐらつしやいます。此の土曜日頃はいかゞでせう。

伯爵。有りがたう御在ます。實は友達と秩父の方へ銃獵に行かうかと思つてゐたのですが……。

鶴田。御延引遊ばしたらいかゞです。御前は兎に角御閑散の御身分ですし、頭取の御身分の方は、いつもなか〳〵お忙しいのですから……。

伯爵。それてすから私はお受けするつもりて居る。お前からも宜しく御禮を申して下さい。

君塚。却て御惑迷の處を……恐れ入ります。(今度千代子の方を振向きて、)千代子、お前も其の時までに何か御聞かせ申すやうな物をよく練習して置くがいゝ。

鶴田。御令嬢には大層ピアノが御丹錬(たんれん)ださうで御在ますなア。

千代子。いゝえ、どう致しまして……

君塚。私(わし)には一向分(わか)らんのですが、學校へ行つて居る時分から、もう彼れこれ四五年稽古して居りますかなア。

鶴田。それでは定めし御熟練の事で御在ませう。私供のやうな武骨に育(そだ)ちましたものには、一向風流の嗜みが薄う御在ますが、然し熟練した音曲を聞きますれば、矢張り何となく面白く覺えます……

此の時又もや下の方にて人々の喝采拍手する聲起る

君塚。役者の踊りがすんだのかも知れん……。

幕明きに出てきたる若き來客の三名、此時がや／＼云ひながら左手木蔭より出て、頭取の姿を見て、びつくりして立止り、一同帽子を取つて禮をする。

來客の一。今日はいろ／＼どうも……

來客の二。芝居へ行くよりも面白う御在ました。

來客の三。營業部の増田さんが頭取を捜(さが)してお居てになりましたやうです。

君塚。さうですか。ありがたう。

來客の一。失禮いたします。

一同再び禮をして急ぎ足に右手へ退入る。君塚頭取は立ちかけながら。

君塚。何の用か知らんが……それでは伯爵、土曜日にはお待ちして居ります。どうぞ御ゆるり……

……

令孃千代子も立つて恭しく禮をする。伯爵も椅子を去つて、

伯爵。ありがたう御在ます。

禮をして鶴田と共に二三歩おくれて同じく坂道の方へ行きかける。同時に右手より「極東評論」の主筆守谷青巖（鼻眼鏡をかけたる美髯の紳士。フロツクコート（シルクハツト、外套の服裝）急ぎ足にて出て、伯爵を呼び止める。

（第六節）

守谷。伯爵閣下。大變御無沙汰をいたして居りました。

伯爵振向いて立止る。此の間に家令の鶴田は君塚頭取と共に退入る。

伯爵。や、守谷君。

守谷。京都の方へ旅行して居りましたので、大變御無沙汰してしまひました。先達伺ひました御著作はどうなりました。實は明日にも御屋敷へ拜見に出やうかと思つて居た處なのです。もう大分出來ましたてせうな。

伯爵は守谷の話の中、ひそかに四邊を見廻し、梅田の姿の見えざるに安心する體。椅子に腰をかく。

伯爵。一心不亂に勉強してゐるんがね。なか〳〵筆が運ばない。兎に角普通の小説や何かとは違つて、歴史的考證がなか〳〵困難だし、それに君、何にしろ發表するまでは、深く秘密にしてゐなければならんのだから、自分の屋敷の倉とは云ひながら餘り大袈裟に參考の書類や記錄を取り出す譯にも行かないしさ。非常に困難だよ。

守谷。さうでせう。然し困難だけに出來上つた日には破天荒の事業ですからな。少くともこれから曲學阿世の學者供が作出さうとする嘘八百の歴史を、見事根底から破壞してしまふのですからな。

伯爵。全く痛快極まるねえ。守谷君、僕は實際、どうして今日まで、あんな貴重な材料が自分の家の土藏の中にしまつてある事を氣づかなかつたのかと、不思議に感じてゐる位だ。今年の夏……僕は生涯忘れない、眼のくらむやうな暑い日だつたよ。丁度其の前の晩、君から藩閥政府の役人供が、云はゞ自分達の功勞ばかりを賞讃させるやうに、不公平な明治建國史の編纂をやり始めたと云ふ話を聞いて、僕も君も共々に、學問の神聖、歴史的眞理の獨立といふ事について熱心に論じ合つた事があつたねえ。すると丁度その翌日だ。偶然にも土藏の虫干で、僕は何の氣なしに其の邊に出てゐる書類などを見てゐる中、計らずもあのやうな不思議な寶を手に入れた……。その時の僕の心持はどんなだと思ふ。敢て維新の歴史に關するばかりではない。亡つた父を始じめ今日まで叔父の男爵や家令や家扶や老女供までが、幾度となく子供の時から僕の耳に話して聞かした御家の歴史や先祖の逸話と云

ふものはあれア皆な嘘だ。少くともそんなに偉いものてはなかつたと云ふ事を始めて知つた、其の時の心持はどんなだと思ふ。僕は燒くやうに照りつける烈日の下に立つて、三十何年周圍のものから欺かれてゐた此の憤恨をいかにして癒すべきかと瞑想してゐる中に、突然すさまじい雷鳴の轟きと共に黑雲は忽ち天を蔽ひ、夕立は瀧のやうに降り注いで來たぢやないか。僕は今日まであんな悲壯な雷鳴神秘な夕立に出遇つた事はない。守谷君、僕は實際あの瞬間には、何とも云へない英雄的な偉大な魂が、天上から閃いて來て、僕の身體の中へ乘移つたやうな心持がした。

守谷。不意の天變地妖と人間の思想の大波瀾とには、必ず何か深い不思議な連絡があるものだと見えます。新しい宗教を興したり新しい國を建設したりする偉人英雄の傳記は、皆さう云ふ事を證明してゐるのですからな。私は伯爵閣下のお話を聞いても、矢張さう云ふ風に、神秘に偉大に考へます……考へないわけには行かないです。私は實に痛快でたまりません。伯爵の文章がいよ／＼私達の經營してゐる雜誌社から世の中に公表されると云ふ其時には、天下の腐儒どもはどんなに狼狽して騷ぐだらうと思ふと、もう實に痛快て痛快て、たまらないやうな心持がします。

伯爵。はゝゝゝは。もう暫くの間だ。樂しみにして待つてゐてくれ給へ。僕はどんな社會の迫害を受けたつて一向構はん。やりだしたとなつたら、どんな事をしても後へ引かないのだから……

守谷。いざと云ふ時には、理想の爲めてす。私だつて獻身の覺悟はちやんとして居ります。然し伯爵、世の中は唯だ苦々しく顏をしかめるだけて、實際はどうする事も出來ますまい。政治上や社會上の問

題がなくて、論ずる處は單に純粹な學問上、史學上の研究方法についての事なんですからなア。直接には何とも迫害の與へやうがありますまい。それだから猶更痛快です……

伯爵。兎に角一生懸命に勉強しなくちやならん。この頃はその爲めに一切酒も止めてゐる位だよ。實はもうやけ酒を呑む必要がなくなつたんだからね。

守谷。どんな強い酒だからつて、とても「復讐」と云ふ瓶から呑み干す酒の味ひには敵ひません……私は伯爵の成功を今日からお祝ひ申して置きます。あんまり長くお話をしてゐて、人に怪まれてもつまりませんから、それでは又明日にでもお屋敷へ參上してお話を伺ふ事にしませう……

伯爵。是非來て呉れ給へ。いろ〳〵君の助力を得たい處があるんだから。

守谷は立上ると共に何者か人の來る樣子に心付きたる體にて、樹木の間を見すかしながら、

守谷。伯爵。向から厭な奴がやつて來ます。きつと私に伯爵を紹介しろと云ふに違ひありません。見付けられると面倒ですから……

伯爵。誰だい。伯爵も立上る。

守谷。さくら新聞の記者です。一度口をきくとうるさく付き纏つて來る下等な奴です。

伯爵。それア堪らん。

守谷。あゝ云ふ連中に逢つちや、實際たまりません。二人とも右手の木蔭に逃入る。

（第七節）

新聞記者某（無性髯を剃らざる汚き顔付。山高帽を少し阿彌陀にかぶり、膝の出たるヅボン、古びたるフロックコート、垢じみたるインバネス）きよろ〳〵しながら右手より出て來り、伯爵の去りたる方を見送りながら、

新聞記者。己れの姿を見るよ何奴も此奴も、みんな厭に敬遠主義を取りやアがる。失敬な奴だなア。誰もゐないのか。空ッぽの店とは驚いた。テーブルの上に伯爵の捨行きたる呑みかけの葉卷を見付け、これアいゝ匂ひだ。取り上げてうまさうに呑む。流石は富豪の園遊會だ。卷煙草がいやに澤山積んであるなア。テーブルの皿の上に積んである紙卷煙草を取つて見て、此れア敷島ぢやない、ヅッと上等の十本十五錢のオリエントだ。あたりを見廻しながら、オリエントを鷲掴みにして無暗にポケットの中へ盜み入れる。侮蔑されても此れだけ收入があれば結構だ。人の來る樣子に心付き、あはてゝ椅子より立ち、こそ〳〵と左手木蔭へ逃入る。

（第八節）

右手より以前の水山新太郎、藝者小富と話しながら出る。

水山。つまらない取越苦勞はしない方がいゝよ。世の中の事はいくら苦勞したつて成るやうにしきやア成らないもんだから……。二人とも椅子につく。

小富。それアどうせ、いつか一度はこうなるんだらうと、私も最初から諦めはつけてはゐたんですけれど……ねえ、あなた。やつぱりいゝ心持はしませんからねえ。

水山。それも當分の中だよ。辛いところをすこし我慢してゐればいゝんぢやないか。どうせあの人の事だもの、結婚したつて、なか〳〵家におとなしくしてゐられる氣遣ひはない。あんまり愚痴を聞か

せない方がいゝ。おとなしく默つてゐるに限るよ。何か云ひ出すと、却て打破しになる。何しろ非常な癇癪持ちなんだからねえ。怒り出すと手がつけられない……。

小宮。それですから、私はほんとにこわいんですよ。水川さん。此間もこうなんですよ。すこし加減がわるくつてお酒を頂戴しなかつたら、こわい顔なすつてね、何を酔いてゐるんだ。云ふ事があるならづんく云つてくれ。と仰有るんぢやありませんか。ほんとに困つてしまつたんですよ。

水山。それも心の中では、あなたに對して非常に氣の毒だと思つてゐるからだよ。つまりいろくの事が思ふやうにならないんで、獨りで焦れきつてゐるんだからね、兎に角逆はないやうに唯だはいく云つてるが一番だ。我儘なやうで、あれでなかく分つたところがあるんだから……

小宮。それア私も知つてます。何も彼も氣がついてゐて、それで何にも知らないやうな顔をなすつて居らつしやるんだから……却て困ることがあるんですよ。まるで華族樣のやうぢやないことねえ……

水山。それといふのが、小供の時分から、あんまり嚴しく責められ過ぎたからだ。華族なんてものは矢張苦勞させずに、淺野內匠にお目出度く育て上げるに限るんだ。いくら其の人だけ世間優れて利功に育ッたつて、周圍の世の中が昔の通りぢや、却て其の人の不仕合せになるばかりだからね。

小宮。御前はお小い時から、そんなに苦勞をなすつたんですか。

水山。先代の伯爵が生きてゐられたら、さうでもなかつたんだらうが、何にしろ十二三の時男爵に別

れてから後は、鏡舘さま見たやうな陸軍少將の叔父さんに嚴しく監督されたんだ。それがつまり伯爵の性質をすつかりひねくれさして仕舞つたんだね。叔父さんの方ぢや決して惡い氣でさうしたのぢやない。兎角世間にある通り華族の殿樣にや馬鹿が出來るもんだから、さう云ふものにしてはお家へ對して申譯がないと云ふので、度合を計らずに無暗に嚴しい軍人教育を施した譯なのさ。だから伯爵は華族學校なんぞには行かずに、吾々平民の子ばかり行く町の中學校へ通はされた揚句が、柔術と漢學を敎へる私塾へ入れられてゐた事もあつた。

小富。そのせいだわね、御前は軍人さんは大嫌ひねえ……いつだつたか伊香保の方へお伴して行つたときなんぞ、軍人さんが這入つて來ると、いやアな顏なすつて、わざ〳〵下りて別の滊車に乘り替へてお仕舞ひなさるんですよ。

水山。はゝゝゝは。軍人さんばかりぢやないよ。伯爵の嫌ひなものを數へ出した日には限りがない。華族さまに、お役人に、警視總監に、新聞記者に、議員さんに、ハイカラの藝者に、帝國座の女優に……大概なものはみんな嫌ひだらう。お氣に入つてるのはお前さん位のもんかね、はゝゝゝは。

小富。御冗談ですよ。まア……

水山。實際だよ。時々手嚴しいおのろけを拜聽させられる事がある。だから僕は、先刻から安心してゐる方がいゝと云つてるんぢやないか。

小富。まア、さう仰有つて下されば、嘘でもねえ……

水山。　怒りッぽい人だなア。一體お前さんは、伯爵がどう云ふ譯てお前さんを贔負にするのか、その譯をよく呑み込んてゐないからいけない。ちつと六ヶ敷い話だがねえ。伯爵はお前さんがすいも甘いも浮世の苦勞といふ苦勞をしぬいた身の上に打込んてゐるのさ。何代かつゞいた大家の身代を滅茶々々にさした事もあるかと思へば、色男と心中しそねた事もあるしさ、反對に役者を泣かした事もあるし……と云つたやうな、まづ海山千年の經歷が、伯爵のお氣にめしたんだ。全く、お前さん位いろ〳〵な身の上話を持つてる女は、今時の藝者には恐らくあるまい。伯爵はもう遊び倦きてゐるのを無理に遊んてゐる人だから、お前さんのやうな女てなくつちや、つまりお相手が出來ないんだ……

……

小宮。　わかりました。そんな事を仰有られると何だか悲しいやうな、妙な心持がして仕樣がありませんよ。

水山。　昔の事を思出すからか。

小宮。　さうぢやないんてすけど……氣を替へて、水山さん。一體御前は始終何を考へてゐらつしやるんてす。お茶屋なんかて大勢藝者や藝人のゐる前ぢや、隨分陽氣にお騷ぎになるけれど、御一人になると妙に沈んて、こわい顏をなさるわねえ……。

水山。　いろ〳〵世の中が面白くないからさ。そんな事はまア、お前さんが心配しないでもいゝ。それよりか、あんまり大酒をさせないやうに注意した方がいゝよ。此頃ぢやどうだね、矢張り例の大盃を

やるかね。

小宮。いゝえ。いゝ鹽梅に此頃はさう亂暴な事はなさいません……………けれども隨分お强いわね。どうしてもお銚子の十本はたしかですね……

水山。一ッは遺傳だなア。お祖父さんに當る伯爵の先々代の殿樣といふのが座敷牢へ入れられた程の放蕩家だつたといふ話だから……

小宮。いつ時分の事なんです。

水山。それア。もうずつと昔だ。御維新前の話さ。

二人とも暫く話が途絶す。秋の木の葉徐ろに散る。水山は椅子より立上つて、

水山。下の方も大分に靜かになつたやうだ。踊の後は何があるんだ。餘興はあれつきりなのかね。

小宮。新派の喜劇とか何とか書いてあつたやうですよ。あんまり此樣處で橫着してゐるとわるいから、私はもう下へ行きますよ。水山さん、それぢや、ほんとにお近い中にねえ。

水山。僕も久しく伯爵と一緒にならないから、きつと出掛けるよ。それアさうと伯爵はどこへ行つちまつたのか知ら……

話しながら歩いて共に坂道の下り口へ來る。水山は立止つて下の庭を見下しながら、

水山。一寸御覧。伯爵が踊つてゐる。見えるだらう。役人見たやうな鰌髭の男にひよこ／＼挨拶をされて閉口してゐる。

小富は水山の肩につかまつて、少しく背伸(せの)びをなし。

小富。　あら、あなた。早く行つてどうかしてお上げなさいよ。

水山。　伯爵ほど毛嫌ひをする人も少(すくな)いよ。はゝゝは。

共々坂道に下りる。以前の新聞記者再び左手木蔭より出て、取り出したる皿の上の巻煙草ん盗まうとする。突然花火の響轟く。新聞記者驚いて椅子の上に尻餅をつく、同時に、左右の木蔭より園遊會い來客男女大勢出て、空を仰ぎながら拍手する。この模様よろしく幕。

第二幕　(第一場)

川原伯爵の書齊。凡て近世式佛蘭西風の家具及裝飾よろしく、正面出入りの硝子戸、其の外ヴェランダ。うつくしき庭園の樹木を見る。左右の壁に出入りの扉。五月末の午後。

幕明くと、川原伯爵、二重ボタンの背廣にて、机に向ひ、巳に綴ぢ終りたる厚き原稿を前にし、手に持ちたるペンを投げ捨てゝ、疲れたる吐息をつく。

(第一節)

伯爵。　あ。やつとこれて、おれの事業も完成した。去年の秋、筆を取り初めてからの事を考へると、まるて夢から覺めたやうな心持だ。窓の外をながめ、いつか知ら、冬も去り、春も過ぎて行くのだ。庭中はもう若葉の夏にならうとしてゐる……月日のたつのは早いもんだ。

再び机の上なる大册の原稿に眼を注ぎて沈思する。輕く扉を叩く音聞える。

誰だ。

女中。扉を開けながら、お茶を入れて參りました。

高島田の女中、紅茶と西洋菓子一皿とを載せたる銀の盆を持ち出る。

伯爵。たつた今午餐をたべたばかりだと思つてゐたのに、もうお茶の時分になつたのか。

女中。はい。もう三時過ぎて御在ます。

片隅のテーブルの上に盆を置き其の儘立去らうとする。伯爵は机を去つてテーブルの方に歩みながら、突然思出したやうに、

伯爵。おい。お高。

女中。扉のそばにて立ち止り、はい、

伯爵。今日は私も最う暇になつたから、一所にお茶を呑むやうに、奥へ行つてさう云つて來てくれ。

女中禮をして退入る。伯爵は紅茶を一呑みした後、葉卷に火をつけ、何事か考へながら室内を歩き、立止つて窓外の庭を打目戍る。

再び扉をたゝく音と共に、伯爵夫人千代子、庇髪、羽織にて出る。伯爵は急いで其の方に歩みながら、

伯爵。今日から私も最うすつかり暇になつた。これからは、旅行なり芝居へなり、何處へでも一所に行つて、ゆつくり遊ばうと思つてゐる。

伯爵は自ら扉を閉め、寄添ふやうに夫人と共に長椅子に腰をかける。

伯爵。何にしろ遣りかけたこの仕事を仕上げてしまはない中は、どうも氣がすまないので……。あれは去年の十一月だつたね、結婚の儀式だけは濟ましたものゝ、碌々話をする暇もなかつたんだが、

もういゝ、今日ですつかり重荷を下してしまつた。

夫人。 私はあんなに幾晩もつゞけて徹夜をなすつて被居つては、お身體にさわりはしないかと、そればかり心配して居たんで御在ます。もうすつかりお書き上げになつたんで御在ますか。

伯爵。 うむ。すつかり書き上げてしまつた、（机の方を指して、）何にしろ紙數にしても五百枚からある。それにあれを書くには、一々昔の書類なんぞを調べなければならなかつたのだから、隨分骨が折れた。

夫人。 どう云ふ御本なんで御在ます。

伯爵。 御維新時分の私の家の歴史を書いたんだ。今日にても守谷といふ男が來たら、直ぐに出版の準備に取りかゝらせるつもりだ。然し千代子。それまでは以前からも注意した通り、必づ家令の鶴田なぞに云つてはならんよ。

夫人。 は。それは承知して居ります。然しあなた、もう鶴田はとうからあなたの御様子を變に思つて、大變心配してゐるやうで御座ますよ。

伯爵。 なに、鶴田が……うむ、それぢやア、私が土藏の中に收つてあるいろ／＼な書類を盗み出したのを感付いたに違ひない。どうせ一度は知れる事だ。もう此れさへ書き上げてしまへば書類などは反古も同様だ。どんな奴が反對したつて少しも恐れる處はない……

この時女中再び紅茶を持ち出て、テーブルの上にて茶をつぐ。伯爵は茶碗を取上げつゝ。

伯爵。 ……まア、ゆつくりお茶でも呑んで面白い話をしやうぢやないか。兎に角私はお前に氣の毒でなら

ない………

夫人。まア、どうしてと御座まいす。夫人も茶碗を取り上げる。

伯爵。どうしてッて。ほんのお儀式に二日ほど新婚旅行をしたつきりまだどこへも一所に遊びに行つた事がないんだから、……随分私の事を妙な男だと思つてゐたらうねえ。

夫人。いゝえ、そんな事が御座いますものか。お仕事の方がおいそがしかつたんですから、仕様が御座いません。

伯爵。お父さんの家の方でも別に何とも云つては居なかつたか。

夫人。いゝえ。別にあなた、何とも申す譯が御座いませんもの……

伯爵。さうか。云ひ切つて夫人の顔を眺め、千代子。それぢや、お前も別に何とも思つてはゐないんだね。

夫人。何をで御座います。

伯爵。こうして私の家にゐる事を、お前は別に不幸だとも何とも思つちやゐないのだね。

夫人。あら、まア。何を仰有るんで御座います。こちらへ參つたのが不幸だなんて……

伯爵。お前さへ何とも思つてゐないのなら、それでいゝ。私は唯だ、これまでお前が嘸ぞ不滿足に思つてゐた事だらうと心配してゐたんだが……お前さへ不幸でないと云つてくれるなら、私も其れで安心した。私はこの仕事を仕上げてしまひさへすれば、心もおちつくし、氣もゆつくりするんだから、これからはさう癇癪なぞを起す事もあるまい。再び千代子の顔をつくづく見ながら、人間といふものは矢

ッ張り安樂に豐かに、可愛がられて育たなければならんものだ。千代子。お前は生れてから今日まで
に、一番悲しいとか口惜しいとか思つた事はどんな事だつたね……

夫人。一番口惜しいこと……

伯爵。口惜しなぞと思つた事はなかつたかね。

夫人。いゝえ、それア御座います。少し考へて、學校に居ります時分、先生から人違ひをされて叱られ
た事が御座いました。それから……

伯爵。それから……

夫人。それから……もう大抵忘れてしまひました。

伯爵。はゝゝゝは。それぢや矢ッ張り悲しいと思ふ事なぞは一度もなかつたのだ。忘れてしまへるや
うな悲しい事なら、ほんとに悲しいのでも口惜しいのでもない。お前は實に羨しいほど幸福に素直に
育つたんだなア。

夫人。急に思ひ出して、あ、御座いました。一冬飼つて置いた小さな雀の子が死んだ時で御座います。そ
の時はほんとに口惜しう御座いました。あの、冬の寒いしぐれた夕方で御座いました。椽側の雨を戸
閉めて居りました家の女中が、いきなり大きな聲でお孃樣々々ッて呼びますから、私は何だと思つて
行つて見ますと、雀の子が一羽、逃げやうと思つて、ばた／＼翼ばたきをしても、翼がきかないので、
逃げる事が出來ないんで御座います。女中と二人でつかまへて見ますと、きつと鷄にでも追はれたの

だと見えて。方々の羽が抜けてゐるんて御座います。……もう直しませう。何だか、あんまり小供らしくつて……。

伯爵。いゝよ。小供らしい方が無邪氣でいゝ。罪のないお前の話を聞いてゐると、私はまるで兒守歌ても聞くやうな懷しい心持がする。お前が助けてやつた其の雀は死んでしまつたんだね。

夫人。冬中は丈夫に生きてゐましたから、もう此れで安心だと思ふと間もなく、却て春になつて暖かになる時分にころりと死んでしまつたんて御座います。よく馴れて私の手の上からても餌をたべる位て御座いました。

伯爵。私も人間と生れたからは、お前のやうなたわいもない懷しい追憶を持つてゐる身分になりたかつた。苦しい過去と不安な現在と暗黒な將來……。私は罪のない穩かなお前の眼の色を見てゐると、何となく泣きたいやうな淋しい心持がして來る。

伯爵は俯向いて考へ込む。千代子は心配さうに寄添ひ、

夫人。すこしお庭の方でも御運動なすつたら……あんまりお部屋にばかり閉籠つてゐらつしやるからですよ。何だかお顏色もよくないやうぢや御座いませんか。

伯爵。顏を上げて頰を撫でながら、この二三日は髯も剃らずにゐたせいだらう。湯にでも這入つて髯でも剃ればすぐに直るよ。今夜は一所に帝國ホテルか何處かへ晩餐でも食ひに行つて、それから芝居へ廻つて見やうぢやないか。

夫人。　はア。大變歌舞伎座が面白いさうで御座います。日延べをしたさうで御座います。

伯爵。　それぢや歌舞伎座へ行く事にしやうかね。

伯爵は立ち上つて大儀らしく欠伸をするやうに手を動かす。扉を叩く音して、女中出る。

女中。　お客樣て御在ます。

小さき銀の皿に載せたる名刺を示す。伯爵名刺を取上げて、

伯爵。　何だ、守谷か。すぐこゝへ通してくれ。

女中退入る。伯爵は夫人を顧みて、

伯爵。　それぢやお前も仕度をして置くがいゝ。

夫人。　はア、其のまゝ右手の扉より退入る。

(第二節)

同時に左手の扉より守谷青樸背廣、中折帽にて出る。

守谷。　先日は失禮をいたしました。いかゞです。もう御書き上げになりましたか。

伯爵。　君。この通りだ。すつかり出來上つた。机の方を指さす。

守谷。　非常な大部なものになりましたな。一ッ拜見しませう。

伯爵は自ら椅子を机のそばに引き寄せ、

伯爵。　さア掛けたまへ。

守谷。いや、恐れ入りました。伯爵の勸したる椅子につく。

伯爵。机の前の肱掛椅子に座つて。おしまへの方は大分亂暴だよ。稿本を守谷に渡しながら 兎に角邪魔のない中に早く書き上げてしまはうと思ふものだから、しまひの方になると猶ほ氣がせくんでねえ。一昨日の晩は二時まで起きてゐたし、昨夜はとう〳〵徹夜をして仕舞つた。

守谷。それア、どうも、非常な御勉強でしたなア……。原稿を開いて見ながら、この邊のところは先日拜見しましたやうです……第六篇、あゝこゝからです。默讀する。

伯爵。新しき葉卷に火をつけつゝ、ねえ君、さう云ふ風な書き方をして置けば、事情を知らん奴は唯だの小說だと思ふから、一向差支はあるまい。政府の檢閱局だつて、作り話しの小說だからと云へば、何ともする事は出來ないだらう。

守谷。閣下も大分功妙な筆法をお用ひになるやうになりましたなア……然しあの當時には、實際こんな事があつたんですかな。猶續けて默讀する。

伯爵。全く小說よりも奇なりさね。

伯爵は會心の笑みを浮べて葉卷をすふ。扉を叩いて女中出る。

女中。御前。鶴田さんが一寸お目通り致したいと仰有つてゞ御在います。

伯爵。守谷の方を顧みつゝ、はゝア、とう〳〵嗅ぎつけて、やつて來た。うるさい奴だなア。

守谷。私が居たら、却てなんでせう。また改めてお伺ひしませうか。

伯爵。　さうだね。家ぢや兎角氣をおちつけて、ゆつくり話も出來ないしするから、二三日中に僕の方から會合の塲合を通知しやう。

守谷。　さうして頂けば結構です。活字の組方や書物の體裁などについても、猶いろ〳〵お話を伺はなければなりませんから。それでは………

伯爵。　それではこゝで失禮します。

守谷禮をして這入る。女中も其の後につゞいて這入る。家令鶴田十郎すぐに出る。

（第三節）

伯爵。　何の用だね。冷かなる調子にて云ふ。

鶴田。　すこし折入つてお話し致したい事が御座いまして……。

伯爵。　さうか。まァ掛けるがいゝ。是椅子に腰をかけ、また經費節減の話かね。

鶴田。　突立ちたるまゝにて、いや、其の事では御坐いません。お家の大事件で御坐います。

伯爵。　まア、立つてゐずと掛けるがいゝ。鶴田禮をして椅子にかける、伯爵はそしらぬ顔にて、屋敷の事なんざ一々私に相談せずとも、お前のいゝやうに取計らつておいてくれ。お前さへ居ればどんな大事件だつて安心だからね。

鶴田。　恐れ入ります。然し今度の事は私一存では參り兼ねます。御前がどうあつてもお聞き入れになりません時には、致し方が御坐いませんから、叔父上樣の男爵閣下にお願ひ申す覺悟で御坐います。

伯爵。　それアどうも、大變な騷ぎだね。

伯爵は他を向いて煙を吹いてゐる。鶴田は急き込みたる調子に爲り。

鶴田。　御前。私はもうとうから御前のなすつて被居ることを知つて居ります。なまなか御異見を申上げてもお聞入れ遊さないだらうといふ事も承知して居りますから、どうしてよいものかと、わざと今日までは知らない風をいたして居つたので御坐いますが……御前、どうか其の御本の事は、お思ひ返しを願ひたいもので御坐います。

伯爵。　それア出來んよ。

鶴田。　どうあつても御聽き入れ下さいませんのですか。

伯爵。　無論の事だ。

鶴田。　それでは是非が御坐いません。男爵樣へお願ひ申して御異見を申上るより……

伯爵。　立ち上つて、　誰が何と云はうと無駄な話だ。私は此れまで、已に幾度びお前達の云ふ事を唯だはい／＼と云つて、承知してやつたか知れないぢやないか。政治運動も止めにする。新聞社を起さうとした事も止めにする。それが爲めに、私は今日でも守谷なぞに對して、どれだけ面目を失つてゐるか知れないのだ。それにまた、去年の秋にはとう／＼、心にもない結婚といふ大事件までを、私はお前達の云ふ通り、默つて承知してやつたぢやないか。もう其れで澤山だ。私は此の上一歩たりとも讓る事は出來ん。お前達に話をしたつて分らんのだから、云ひたい事があるなら、さつさと男爵を呼んで

來るがいゝ。家の自働車に乘つてさつさと迎ひに行つて來い。

鶴田。　さう御立腹遊ばしては恐れ入ります。

伯爵。　鶴田、私は……よく聞くがいゝ。例へ家が潰れやうとも、私の地位財産がなくならうとも、今度の事はやり通す覺悟なんだ。お前もそのつもりで、頑迷な男爵にもよく然う云つてやるがいゝ。

鶴田は伯爵の見幕に茫然としてゐる。何を愚圖々々してゐるんだ。早く迎ひに行かんのか。

鶴田。　御前、それではあまりに御癇癖が過ぎは致しませんか。

伯爵。　過ぎるも、過ぎないも、お前なぞの知つたことぢやない。

兩人暫く無言になる。伯爵は靜に机の方に進み原稿を取上げ鶴田の方に示して、

鶴田、能く見ろ。これは私の命だ。私がまだ生れない先から、お前達が私の魂の上に蒙らした、いろ〳〵な束縛に對する憤恨の妄念が、今この書物になつてこゝに、現はれ出たのだ。鶴田。お前達は御維新の騷動の時分、先々代の主人に對してどう云ふ事をしたか、ようく反省して見ろ。人間の身體は亡びても、人間の魂は決して亡びないのだぞ。

原稿を小脇に抱えたまゝ、腹立し氣に、庭に面する扉より外縁に出て、有り合ふ椅子を引寄せ後向きになつて腰をかける。(この有樣硝子戸越しによく見える。)鶴田暫く茫然として眺めゐたる後、しほ〳〵として、室内右手の扉より退入る。

（第四節）

伯爵は靜かに立ち上り、煩悶に堪えぬらしく一二回外縁の上を往來してゐる。此の時、左手の扉より、前幕

に出てたる外務省高等官水山新太郎、娶り地のモオニングコオト。薄色の山高帽、手袋、ステツキにて出て
一寸室内を見廻したる後。直様、伯爵の姿を認めて、進み出でながら、

水山。しばらく………。いゝ時候になつたぢやないか。

伯爵。や。　驚いて振向き、戸口に立止る。

水山。天氣のいゝ日曜日だから、留守ぢやないかと思つてゐたんだ。　長椅子に坐つて、手袋を取りかける。

伯爵。室内にすゝみ入りながら、今日は日曜日だつたね。無職業の遊民はこれだから困るんだね。　机の上に原稿を置く。

水山。大層勉強だね。

伯爵。此間話したあの原稿だよ。昨夜徹夜してとう〳〵書き上げてしまつたんだ。水山君。いよ〳〵此れから大活劇が初まらうといふ處だ。鶴田の老人が自働車に乗つて叔父の男爵を呼んで來るといふ騒ぎさ。

水山。さうか。それア面白い處へ來合にしたな。何しろ傍觀者には結構な事だ。

伯爵。ゆつくり遊んで見て行きたまへ。

水山。男爵は今でも、矢張り報恩會の會長をして居られるのかね。

伯爵。己れを知らざるにも程があるよ。退職した古手の軍人なんさ、有難く恩給を貰つて引込んでればそれていゝんだ。あゝ云ふ古い人間が新しい世の中に顔を出すのは、何かにつけて、どれだけ社會の公益を害するか知れないからね。

（此時、女中ウイスキイを持ち出て去る。水山盃を手にして）

水山。　君は此頃ちつとも出掛けないさうだね。

伯爵。　うむ。（頷付いて、）僕は此の二タ月といふものは、一歩も庭へさへ出た事がない。何にしろ邪魔の出ない中一日も早く書上げてしまはふと思つたもんだからね。君は此頃、あれに逢つたか。

水山。　小富の事か。

伯爵。　（默つてうなづく。）

水山。　四五日前送別會があつてね、香雪軒て一寸逢つた。

伯爵。　何か云つてゐたか。

水山。　いや、別に何とも云つてはゐなかつた。兎に角苦勞したゞけに話のわかつた女だからね。心配する事はないよ。

伯爵。　それだから、猶の事僕は氣の毒てならんのだよ。女といふものは、あればかりには限らないのだが……女ほど自分の身の上の不仕合に對して、反抗しない、締めのいゝ哀れなものはないねえ。僕は自分の妻の、罪のない穩かな顔付を見たゞけても、どうかすると、胸が一杯になつて、妙に氣が沈んてしまふ。また君に笑はれるかも知れないが、僕はどうして、かう思切りがわるいのかなア。悟れないのかなア。

水山。　まだ絶望の仕方が足りないからだらう。人間の生活は人間の力てよくなり得べきものだ、とい

ふやうな希望や信念を根本から捨てゝしまふ事が出來ないからだ。

伯爵。僕は別にそれほどの深い信仰も持つてゐやしないのだがなア……。

水山。それぢア、あんまり本を讀み過ぎたからだらう。書物といふ奴は人間の感情を絶えず刺撃さして、人間の智識を鞭撻するもんだからね。書物をよんで物を深く考へる癖をつけると、何にかぎらず事が面倒になつていかん……。

伯爵。大きにさうだな。

水山。だから、そこへ行くと、性來懶惰な僕なんぞは、實に有難いものさ。世の中にどんな事が起らうと、例へば秦の始皇帝見たやうな人が出て來て、馬を鹿だと云はせる世の中にならうとも、僕なぞの連中は、根が無性て、物事を根本に溯つて、眞面目に探究するのが、面倒で厭だから、どつちにても、成りたけ都合のいゝ方に、すぐと鳧をつけてそれて納まつて行ける。處が、君のやうな學者になるとさうは行かない。人の云つた事世の中の定めた事は何に限らず、一々自分の心に問うて、判斷したり吟味したり反省して見たりした上てなくつちや、なかなか承知ができないといふ事になるんだからね。

伯爵。一時はさうだつたかも知れないが、然し此頃ぢや僕も大分わかつて來た。世の中を取扱ふには、矢張り君のやうにして行かなくつちや成らないのだ。君はどうしても偉い。實際吾々はいかに考へても苦しんでも、何にもならない。何の役にも立ちやアしないのだ。それよりか、五十年の一生涯を、

どうせ生きて行かなければならないものなら、何も自分から社會や人生の欠點をさがし出して、自分の生涯を不愉快にして行く必要はない。僕なぞはつまり君より器が小さかつたんだ。

水山。どうも恐縮するね。

伯爵。僕はつまり、人間が古かつた。節義だとか節操だとか云ふ古い時代の根無し言を眞に受けて、今だにはつきり目を覺す事が出來ずにゐる。そこへ行くと、君は殆ど世の中の嘘の皮をすつかり剝取つて了つて、それで悲しみもせず絶望もせず自棄にもならず、平然として笑つてゐられるのだからなア。此頃ぢやつく〴〵、偉いと思ふより外に思ひやうがなくなつた。

水山。はゝゝ。いよ〳〵以て恐縮するね。

伯爵。全く、冗談ぢやない、僕ももうこんどの事て、漸く氣がおちついて來た。これを最後の腹癒せにして、其れが濟んだら、全く君の流義にならふつもりだ。

水山。それア、兎に角惡くない心掛けさね。（庭の方を見返つて、）さすがに君のとこの庭は、いつ見ても好い心持だ。あれアみんな楓かね。

伯爵。さうだらう。何にしろ二個月も外へ出なかつたんて、頭がいたくてならん。すこし庭を歩いて見ないか。

水山。今ても裏の方は、矢張り竹藪にしてあるのかね。

伯爵。昔の通りに打捨つてある。今頃は誰れも掘らないから筍が澤山に生えてゐるだらう。（云ひながら、

原稿を机の曳出しに入れ、丁寧に鍵をかける。

水山。小學校の時分だつたなア。初めて君につれられて、華族様のお屋敷へ遊びに來て、あの竹藪の中へ連れられて行つた時は、實におそろしかつた。こゝへ來る度び、今だに僕はあの時の事を思ひ出すよ。話しながら外椽より庭に下る。

（第五節）

男爵川原忠正、陸軍少將の軍服、白髪白髯にて、鶴田と共に左手即より出る。鶴田顔の汗をふきつゝ室内を見て、

鶴田。お庭へでもいらしつたのかも知れません。どうぞお掛け下さいまし。唯今お呼び申してまゐります。

男爵。椅子につきつゝ、實にどうも………言語道断の事を爲出したもんぢや。私は今だに胸騒ぎがしてゐる位だ。

鶴田。少々お待ちを願ひます。

鶴田恐縮しつゝ庭に面する前面の入口に進み行く。外椽の向うの見えざる處より、高らかに笑ふ伯爵の聲聞ゆる。鶴田外椽に進み出て、

鶴田。御前、もし、御前。男爵様がお出で御坐います。呼びながら、庭に下りる。

伯爵手にばらの花を携て、外椽より靜かに室内に進み入り、叔父の男爵を見て、

伯爵。しばらく御目にかゝりませんでした。お變りも御坐いませんか。

冷淡なる調子にて云ひ、棧敷欄に置きたる花瓶にばらの花をさしてゐる。男爵はもう我慢が出來ぬといふ風にて、

男爵。私はもう何にも云はん。唯だ一言返事を聞けば、私の方にも量見がある。忠澄、お前はどうあつても、鶴田の云ふ意見をきかないつもりか。

伯爵。無論で御坐います。（靜に眼をかけ、）私の方でも、もう、とやかく私の考へをお話し申す必要がないと思つて居るので御坐います。私は誰が何と仰有らうと斷行する覺悟ですから……

男爵。よろしい。さう云はれゝば私の方にも相當の覺悟をせんければならん。お前は惡意を持つて、わざと伯爵家の名譽を毀損し、祖先の家に對して侮辱を加へやうといふのだな。

伯爵。あなた方の眼から御覽になつたら、或はさういふ風に見えるかも知れません。どうも致し方のない話で御坐います……然し私は實際、自分の家の名譽を高めやうとも、傷けやうとも、そんな事はどつちとも、一向念頭に置いて居らないのです。私は唯だ正當な眞實な、嘘のない家の歷史と其れに關連した維新當時の事件の一部を書き著したい、唯それだけが、私の目的なんですから、あなたが何うお考へにならうと、それア一向私には關係がありません。

男爵。名を歷史に借りて、吾々に迷惑をかけて喜ばうと云ふのだ。氣狂ひの仕業でない限りは、誰が見たつて、わざと惡意を以て、家名を傷けるとしか思はれやせん。實にどうも……不埒千萬な、言語道斷な事を思ひ立つたものだ……、

伯爵。　何とても御憤慨なさるがいゝてす。兎に角私は私の心の底から出た私の思ひ通りの事をして見やうといふのてすから、あなたが其程不埒だとか言語道斷だとか仰有るなら、直接私へお話しにならずとも、あなたの方は、あなたの御隨意に、私を親族會議に廻はして戸主の權利を廢止させるなり、どうなり御勝手になすつて下さい。或は又、私のこの著述に對して、御不同意の處があると仰有るならば、あなたも堂々として私の著述に對する反駁の論文をお書きになつて、其の判斷を天下の公論にお問ひなすつたらいゝてせう。維新の當時、徳川幕府と薩長とに關連した川原家八萬石の歷史の一部分は、一家私有の歷史てはなくて、つまり時代一般の共有する日本歷史の一頁なのてすから、其の歷史的事實ハ眞僞に對する判斷は、社會一般の輿論に任かすのが當然てせう。私の著述について何か仰有る事がありましたら、どうぞ社會に公表してからの事にお願ひします。その事についてなら、私は一々責任を帶びて御答辯致します。

男爵。　いよ〳〵以て怪しからん事をいふ。忠澄、その著述はどこにある。私に見せろ。

伯爵。　それをあなたにお見せ申せば、あなたは乾度取上げて燒くかどうかしてお仕舞ひなさるに違ひない。私の生命も同樣な其の著述は、鍵のかゝつたこの曳出しの奥にちやアんと仕舞つてあります。然し叔父さん。苟くもまだ……私が此處の家の主人てある限り、こゝは私の書齋てす。軍隊ては御座いませんから暴惡なミリタリズムは實施されません。

男爵。　もう、その儘には捨て置けん……

憤然として立ち上る。物蔭に様子を伺ひゐたる鶴田は驚いて左手扉より出で、兩人の様子を見て茫然として立ちすくむ。伯爵は手を上げて制し、ます〱冷靜なる調子になり。

伯爵。なにも、さう御立腹にならないでもいゝぢやありませんか。それほど御覽になりたければ、お見せ申してお宜しう御座います。もしあなたが、私の著述を取上げて、あなたの其の長い軍刀で、ずた〱に裂いてお仕舞ひになれば、私はまた最う一度書き直すばかりです。紙は裂いても思想は裂く事が出來ますまい。思想に對する武器は思想より外には無いので御座います。私の著述に對して御不同意の點がありますなら、今申上げた通り、堂々として社會公衆の前でお戰ひなさつて下さい。私は子爵家となるべき筈の川原家八萬石が、どういふ譯で、特に薩長政府から伯爵に叙せられたかといふ其の魂膽を忌憚なく暴露しました。先々代の老公は熱烈な佐幕黨であつた事は勿論です。其の爲め、薩長の鼻息を伺ふあなた方一派の爲めに、僞狂人(にせきちがひ)にされて座敷牢に入れられた事まで、私は一々實證を引いて書いたのです。それに間違ひがあると仰有るなら、それは歷史編纂上の問題です、こゝで一々御答は出來ません。私は生憎(あいにく)來客を庭に待たしてありますから、今日はこゝて失禮します。

伯爵靜にヴエランダより庭に去る。

(第六節)

男爵は立ち上りたるまゝ、手を振りて云ふ處を知らず。鶴田恐る〱進み寄りて、

鶴田。どうぞ御勘辨を……私から幾重にも御詫びを致します。

男爵。實に容易ならん事(こと)ッた。あのまゝにして置いたら、此の後も何をしだすか知れやせん。

鶴田。どうしたら宜しう御座いませう。

男爵。戸主の權利を廢止させるより仕方があるまい。

鶴田。大變な事になりました。

男爵。私も一遍よく考へて見た上で、またお前とも相談をせんければならん。今夜か明日の晩にでも私の家へ來てくれんか。

鶴田。は。承知致しました。早速今夜參上致します。

男爵。それぢや、其の時ゆつくり相談しよう。實に不埒千萬な事だ……

男爵は先きに、鶴田も共に左手扉より退入る。

（第七節）

伯爵と水山話しながらヴエランダより歩み入る。

水山。大分激烈なやうだつたな。

伯爵。思つたより手弱なので、力拔けがした位だ。然しあのまゝで濟む筈はない。

水山。親族會議でも開いて、いよ／＼不信任問題を持ち出すつもりかね。

伯爵。大方そんな事だらう。僕は生れない先きから自分の名前の上に付纒つてゐる空虚な肩書の剝ぎ取られるのを待つてゐるんだ。因習の絆から切り放されて、自由な獨り立ちの身體になるのは其の時だ。僕は世襲の地位と世襲の財産から切り放されて、生活の荒波の中に投り出されて見たい。それが

何よりの試驗ぢやないか。それが生活の眞味を嘗めさせる唯一の方法ぢやないか。

水山。尤至極の話だ。乞食は一番自由だからねえ。昔から三日乞食をすれば忘られないと云つてゐる位だからね。然しそんな悲壯な手段を取るほど、人間の生活といふものは價値のあるものぢや無い……少くとも僕はそれほどの價値を認めないね。

伯爵。何故…………

水山。別に理由と云つて說明する事は出來ないが。僕にはまア何だね。君のやうに眞面目に生きて見やう、充分に生活の力を味はうと云ふやうな好奇心がないからさ。

伯爵。好奇心とは驚いた……

水山。好奇心に違ひないさ。眞理に到達しやうとか。新しい生活の意義を見出さうとか云つて、理想家や先覺者の騷ぎ廻るのは、骨董家が掘出し物を搜し廻るのと少しも違ひはない。つまり手數のかゝつた其の人の御道樂だね。

伯爵。君の流義に解釋すれば、或はさうかも知れん。然し僕などに取つては、どうしても抑えられない熱情と云ふ奴が、心の底から湧き起つて來るから、それを滿足させない中は、どうにも彼うにも平穩に其の日を送つて行く事が出來なくなるんだ。

水山。それはよく昔の人の云ふ虫といふやつだよ。面白い話があるよ。此間も送別會で女達とくだらない話をして笑つたんだが、生れついて手癖がわるいとか、女ならば身上がわるいとか云ふやつは、

あれア、みんな虫が動くからだと云んてね。それから邪淫の虫は赤いんだとか黒いんだとか云つて大笑ひをしたものさ。

此の時家令の鶴田左手の扉を明けて出る。

伯爵。また、何の用だ。

鶴田。男爵さまの事につきまして、もう一度申上げなければ成りません。

伯爵。まだ、お歸りにならんのか。

鶴田。いえ、もうお歸りにはなりましたが、それにつきまして鳥度御前にお話し申して置かなければなりません。

水山は此の時テーブルの上に置いたウイスキーの盃を呑み干して、

水山。大きにお邪魔をした。僕は此れから小石川まで行く用事があるから、

伯爵。さうか。一緒に晩餐でも食べやうと思つてゐたのに………

水山。いや、また其の中ゆつくり出直して來る。

握手して退入る。鶴田恭々しく禮をなし、扉を閉めて進み出る。伯爵は机に坐る。

(第八節)

鶴田。御前。私はこれから鳥渡男爵様のお屋敷へ伺ひまして、御相談申すので御座いますが………

伯爵。机に坐り洋書を開きて讀み初めながら、もう其の事なら、私に云ふ必要はない。男爵とい丶やうに勝手

に相談するがいゝ。

鶴田。御前がさう仰有つても、私の身分として、さうは參りません。御前、男爵樣はどうあつても御前が御聞き遊ばさない時には、お家の名譽には代られません故、戸主の權利を止めさした上に治產權の禁止をするとまで仰有つてゞ御座います。

伯爵。そんなら、構はずにさうしたら好いぢやないか。私は一向かまはんよ。

依然として讀書す。鶴田は暫く考へゐたる後、突然ずかずかと机の傍まで進み出て、ぺたりと床の上に平伏し聲を顫はして、

鶴田。御前。かうなりました上は、私は身命を抛てゝも御意見を申上げます。

流石の伯爵も驚いて鶴田の顔を見詰める。鶴田は取りすがるばかりに伯爵の足下に進み寄り、

鶴田。御先祖へ對して申譯が御座いません。私は身命を抛てゝも、御諫言申上げねば、この場は引き取りません。御前、どうぞお思ひ返しを願ひます。

伯爵。もう無駄だから止しなさい。私は聞く耳を持たない。

鶴田。私が生命をすてましても……

伯爵。生命を捨てる。それア何の事だ……

鶴田。私は切腹して御先祖へ申譯をいたす覺悟で御坐います。

伯爵。切腹……？　はゝゝゝは。馬鹿な事を云ふにも程がある。そんな芝居見たやうな、子供だましを云つたつて誰が眞に受けるものか。お前は氣が狂つたんぢやないか。

鶴田。いや、決して取亂しては居りません。御前、恐入りますが、私の今の身の上――叔父上の男爵様と御前の間に立ちました私の身の上を少しはお考へ遊ばして下さいまし。いかにお家の爲めとは申しながら、臣下の身分として現在の御主人に對し、戸主廢止の手續をすると云ふやうな事が、どうして出來ませう。と申して、此の儘お家の御名譽にも係る事を、默つて見て居る譯にも參りませぬ。私は御前がどうあつても、私共の意見をお聞き遊ばさないと云ふ時には、私はこの際どうしても、生命を捨てまするより外には身の振方がないぢや御坐いませんか。氣が狂つたなぞと、いかに愚弄いたしましても……それァあまりのお下げ賤みて御坐います。

伯爵。ちつと鶴田の顏を眺めて、お前の心持はよくわかつた。お前は世の中がすつかり變つてしまつた今日になつても、まだ百年も二百年も前の廢れた教義にならつて自殺をしやうといふんだな。

鶴田。御前恐れながら、人間の踏みまする人倫五常の道には、千年萬年たちましても變りはないと存じて居ります。私は武士の教通り、立派に死んでお目にかけます。

伯爵。鶴田、そんな頑固な事を云はんで、よく考へて見るがいゝ。お前には子供もある。孫もある。お前は家族をどうするつもりだ。

鶴田。苦悶を忍んで、左樣なものを顧る時ては御在ません。私は唯だ御先祖代々への御恩といふ事より外、何事も考へては居りません。

兩人とも暫く言葉なし。伯爵はつくづく鶴田の樣子を目戍りながら、嘲弄のやうな調子にて、

伯爵。　あゝ。私はお前の生命と引替へに、私の著述を世に出すか、どうかと云ふ場合になつたのだ‥‥‥‥‥

鶴田。　私も覺悟をいたしましたからには、もう御意見は申上げません。いづれなりと御前の御隨意に遊ばして下さいまし。

伯爵苦痛に堪えざるものゝ如く席より立つ。鶴田は遂に平然たる調子になり、

鶴田。　いづれなりと、どうぞ御返事を承はり度う御坐います。

伯爵。　大なる事業の前には、大なる犧牲を要するのは知れた事だ。然し‥‥‥‥私はもう一度考へて見なければならない。鶴田、お前は私にそれだけの猶豫を與へてくれるか。　鶴田は猶平伏したまゝにて會釋く。　一日かゝるか、二日かゝるか‥‥‥‥、兎に角私から返事をするまで待つて居てくれ。

鶴田。　失禮な事ばかり申上げました。それでは御返事をお待ち申して居ります。

禮をして立上り、左手の扉に退入る。伯爵此れを見送る。

此の時夫人千代子盛装して右手の扉より出る。

（第九節）

夫人。　もう仕度をいたしました。あなたは日本服を召していらつしやいますか。

伯爵。　びつくりして我に返り、あ、千代子。もう芝居どころの騒ぎぢやない。進み寄つて、私は考へなければならない。私は人を殺さうか、どうしやうかと思つてゐるところだ。氣の毒だが‥‥‥‥お前一人

て、女中をつれて見に行つてくれ。私はもう家には居られん。二三日どこへか行つて考へなければならない……。千代子、ゆるしてくれ。

千代子の手を取りたるまゝ長椅子に坐る。幕

第二幕（第二場）

立派なる待合の奥坐敷。五月末の夜。正面、床の間ちがひ棚。右手寄りに二枚立の障子（此の外は中庭のつもり。）左右ともに襖。床の間のかざり、屏風、襖なぞ凡て數寄を凝らす。

川原伯爵、五ツ紋の着流し、宿醉さめざる體にて脇息によりかゝりゐる。その傍に藝者小富、好みの着付。中玉二人、女中一人侍る。伯爵の前には膳を据へ、日本酒の銚子二三本とウイスキー、葡萄酒、平野水なぞの罎をも置く。

左手には清元の藝者、三味線三人、唄二人居並び、若く美しい藝者二人にて式三番を踊り居る體にて幕明く。

（第一節）

踊の間に伯爵は絶えずコップにて日本酒をあほり、小富に酌をさせる。

小富を初め皆々、なりたけ伯爵に呑ませまいとするを、伯爵無理に次々とつがせる、

日本酒の銚子忽ちに空になる。伯爵は更にウイスキーをつがしめる。

とかくする中に踊りの曲いよ〳〵酣になる。伯爵は脇息より肱をすべらし、其のまゝ横に倒れる。

小富膝枕をさせる。

踊の曲いよ〳〵進んで漸く終りに近く頃、伯爵は次第に疲れて眠る。

小富上より伯爵の顔を覗き込みて、

小富。 御前、おやすみになつたんですか。

半玉の一。 (にじり寄つて、) 御前、どうなすつたのよ。

半玉の二。 (同じ様に伯爵の顔をのぞき込み、) あら、ほんとにおよつちまつたのよ。

女中。 しづかにおしよ。 大變に醉つてゐらつしやるやうだから、お起し申さない方がいゝよ。

小富は扇子にて靜かに伯爵の顔をあほぎ居る。此の時、清元の曲終つて、藝者舞ひ收める。伯爵苦し氣に片手を動し。

伯爵。 水をくれ。

女中。 はい。唯今。

女中坐を立つ。

踊りの藝者達一同伯爵のそばに歩み寄つて、

藝者の一。 ほんとにお苦しさうだわね。

小富。 何しろ、今夜で二日二晩呑みつゞけてゐらつしやるんだもの。

藝者の二。 それぢや、何ぼお強くたつて、たまらないわねえ。

藝者の三。 それに、御前と來たら、いつても、ウイスキーだのビールだの日本酒だの、皆なちやんぽんなんてせう。私達だつたら死んじまひますよ。

藝者の四。 (一番年ふけたるつくり) だけれど、私や此方の御前はほんとに頼もしい方だと思ふよ。

藝者の五。 どうして、姐さん。

藝者の四。　御自分ばかりは、どんなに召上つてゐても、藝者衆には、一度だつて、無理にお酒を强ひたりなんぞ、なさらないから……

小富。　あんまり、さうでもありませんよ。

藝者の四。　それアお前さんはしやうが無いやね。

女中銀瓶を盆に載せ出る。

女中。　御前。お水がまゐりました。

伯爵横になりたるまゝにて、小富の手より水を一呑みして、四邊を眺め、

伯爵。　踊りはどうした。　もうよしたのか。

半玉の一。　あら、ほゝゝ。もうとうにお仕舞ひになつちまつたわ。

半玉の二。　御前はぐう／＼およつちまふんだもの。ねえ、姐さん。

伯爵。　もう一曲。　半玉に向いて、　今度はお前が立つんだ。梅の春でも何でもいゝ。

半玉の一。　いやよ。御前は人に踊らしといておよつちまうんだから……

伯爵。　お前のなら、ちやんと見てゐる。ちやんと眼をあいて見てゐる……

云ひながら其の儘再び眼を閉る。

半玉の二。　御前。そら御覽なさい。ほゝゝほ。

藝者の四。　あたりを片付ながら、　何かおかけ申したら。風邪を召すといけない。

女中立つて次の間より縮緬のかひまき持ち出づる。
藝者達は銚子其他を片付ながら、よき程に一人一人坐を立つ。然らざるものは、小富に目禮して去る。
小富と半玉二人だけ居殘ると、座敷俄かにしんとなり、遠くの座敷にて「粋な浮世」を歌ふ女の聲かすかに聞え出す。

（第二節）

半玉の一。姐さん。もう何時でせうね。
小富。何だか、みんなが行つちまつたら、急に夜がふけて來たやうだねえ。
半玉の二。御前が時計を持つてゐらしツてよ。
半玉は横になりたる伯爵の帯の間より滑り出したる懐中時計を見る。
小富。何時？
半玉の二。もう十一時よ。
小富。お前さん達も歸るなら、もう歸つてもいゝよ。
半玉。えゝ。
氣付いて何心なく伯爵の方を顧る。伯爵眼を閉ぢたるまゝにて、
伯爵。おい。お富。
小富。お目覺めですか。
伯爵。矢張横になりたるまゝにて、靜かに、私の包みをこゝへ持つて來てくれ。

小富。あの紫の袱紗にお包みになつた、あれて御坐いますか。

伯爵うなづく。小富立つて、梅と共に床の間の硯蓋に載せありたる包みを持ち出す。伯爵半身を起して包を解きかける。

半玉の一。御前。なアに。

半玉の二。あら、汚い本だわねえ。

半玉の一。繪本ぢやないの。

伯爵。これをお前達にやらう。二幕目の原稿を取出して投げやりながら、滅茶滅茶に破いてくれ。

半玉の二。やぶくんてすか。ほんとに。

伯爵。さうだ。早くやぶいてくれ。やぶいてくれ。

半玉の一。ほんとに、よくつて。

伯爵。ほんとだよ。早く破くんだ。

半玉二人、何のわけとも分らず云はるゝまゝに兩手にて引裂り破く。

さうだ。さうだ。もつと破くんだ。もつと／＼。

云ひながら伯爵は次第ににぢり出てゝ縋るやうに小富の膝によりかゝる。

小富。御前、どうかなすつたんぢや……。

伯爵。いゝから、打つちやつておけ。お前も一緒に、庭に持つて行つて燃してしまつてくれ。マッチ

はあるか。マッチ……。

半玉の一。あります。煙草盆の内にありしマッチを示す。

伯爵。早く燃してくれ。早く燃してしまへ。

小富は呆気に取られつゝ正面の障子をあける。

すつかり燃すんだ。一枚残らず燃してしまふんだ。

半玉二人引裂きたる原稿を携へ中庭に下りる(半玉の姿は見えず其の聲ばかりにて)

半玉の一。御前、ほんとに燃しますよ。

伯爵。早く燃せ。燃せ。

半玉の二。御前、ほら、燃えますよ。

半玉の一。燃える〳〵。

半玉の二。大變な烟だ。おゝ烟つたい。

障子に赤き烟の色ぱつと映る。小富は障子のそばに坐を占め、袖にて烟を拂ふ。伯爵は半身を起して、伸び上るやうに烟の色を見込む。向う座敷の三味線つゞいて聞える。

伯爵。力なき聲にて、もうみんな燃えてしまつたか。

小富。えゝ、もうみんな灰になつてしまひました。

伯爵。灰になつたか。半生の事業は灰になつた……吐息を漏らして俯向く。小富心配さうに伯爵のそばに摺寄る。

お富。その灰を拾つて、家令の鶴田の家へ届けてやつてくれ。小富は伯爵の顔を覗込みたるまゝにて只頷付く。私の用はもうこれで濟んだ。私はもう屋敷へは歸らん。お富。これからはお前と二人きりで、浮世の外の、樂しい日蔭の暮しをしやうぢやないか。

小富。私は嬉しう御坐いますけれども、それでも、あなたお屋敷には奥樣が……

伯爵。もう、そんな、人の身の上なぞ心配してゐる餘裕はない。打捨つて置け。親の命令通りになつて、私見たやうなものを良人にしたのが、そも／＼の誤りなんだ。自分自ら良人を撰ばなかつたのが彼の女の誤りなんだ。古い道徳のなした罪だ。私はもう人の身の上なぞ構つてゐる餘裕はない。私はお前と一緒に浮世の外の、日向りの悪い横町に、身を隠してしまはう。世をすねてお前と一緒に靜かに暮さう……。

焔の色再び障子に映る。伯爵は半醉半醒の體にて小富の膝を枕にして横になる。小富その肩の上に顔を押宛てる。端唄のつゞき。

半玉の二人あけたる障子より出で、二人の様子を見て、母指と小指を出し、可笑し氣なる身振りにて頷付き合ひながら、拔足して這入る。（幕）

山路愛山譯 本紀及列傳全五册

菊判總クロース金字入一册紙數約七百頁‖裝釘中村不折畫伯意匠

水戸德川侯爵家藏版

譯文大日本史

豫約募集

大日本史は我帝國に於て一ありて二なき名著なるは云ふまでもなきことながら、紀するに悉く漢文を以てしたるが故に、今の世には讀み易からず思ふものなきに非ず。源義公を始め水府の諸名家が苦心の迹も多く人に知られず、廣く世に讀まれざるは惜むべきことゝもなれば、此度全卷を逐字譯に書下し、且つ傍訓を施して何人にも讀み且つ解し得るやうにしたり。大日本史の原文は漢學の力のみにては通じ難きものにて、國文國學の素あるものにして始めて解し得べきものなれば、實は史學を專門とする讀史者に取りても、訓讀の書は必要なものなり。されば此の書を世に公にする微志は、獨り唯だ漢文を讀み易からず思ふものゝ便宜のみを計るにあらず、亦實に日本史學の進歩を助けんと欲するに在り、江湖の君子、出版者の微意を諒し愛讀せられんには、古人の志今日に伸ぶるを得るものなりと謂つべし。此に今文に改譯したる理由を述べて、廣く天下の同情を求むと云爾。

譯者 山路愛山識

正價金拾貳圓

豫約特價
- 甲種（一時拂込）金八圓五拾錢
- 乙種 五回に月割拂込 金十圓

送本料 壹册に付 市內四錢 內地十四錢 臺灣樺太三十錢 支那朝鮮四十錢

▲豫約部數 一萬部限 申込數一萬部を超過したるときは申込順に依り打切

▲申込期日 明治四十五年一月末日限

▲豫約金拂込方法は
- 甲種豫約 明治四十五年一月末日迄に送本料共全額拂込の事
- 乙種豫約 同上締切迄に豫約保證金として金二圓を拂込み同年三月より七月迄毎月五日限金二圓に一册分の送本料を添へ拂込の事

但右保證金貳圓は最終の拂込金に充當可致に付最終七月は單に一册分の送本料のみ拂込の事

▲送本期日 明治四十五年二月より每月一册送本七月にて完結

◉見本は往復端書にて御申越あれ

發行所 東京市神田區駿河臺南甲賀町八番地 電話本局四二四二 振替東京一一九八二 國民雜誌社

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

故公爵伊藤博文
侯爵井上馨

二元老直話

文學博士 子爵末松謙澄著

維新風雲録

菊判洋綴清洒
定價金七拾錢
郵稅八錢

維新の鴻業は二元老の關係甚だ重要の位置を占む本書に非ざれば邦家今日の隆たる所以を見るに至らず此書は博士が自ら問題を提起し若しくは編輯補助員をして問題を提出せしめて得たる二元老の答話を速記したるものを首とし是れに附隨して二元老壯年時代の重要なる閲歷を編纂したる維新活歷史なり

卷頭井上侯故伊藤公高杉晋作氏等靑年時代の寫眞及二元老手簡眞蹟數葉挿入

發兌元

東京神田區表神保町
振替口座一九〇四四

福岡書店

（中付三の四）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

新年附録 新案家庭雙六＝娘の一生

紛華を極めたる極彩色石版

笹木幸子案　井川洗厓画

新年號 婦女界

各大家の意見

◎修學せんとする婦女の心得　文學博士 中島力造

◎現代は學問ある女を要求す　文學博士 桑木嚴翼

◎余の見たる女子の虚榮心　文學博士 村上專精

◎宜しく趣味の向上をはかれ　文學博士 幸田露伴

◎婦人の缺點弊風を改むる好時機…高島平三郎

◎賢母と愚母　宮田修

◎倫敦通信　大谷繞石
◎文藝折々　沼波學士
◎英詩評釋　若月學士
◎日常作法　笹木幸子
◎新年祝物　安藤生
◎今年流行のショール
◎正月に咲く花
◎現代女流面影

▲福壽草の話……伊藤博士
▲よく遊びよく働く動物…下田次郎
▲私の新年……戸川殘花
▲簡易主義の正月…佐治實然
▲舊幕時代の新年…内藤鳴雪
▲女學生の今昔……櫻井ちか子

◎小說 柚湯…三宅花圃
◎小說 お由…野上彌生子
▲名婦傳『平政子』…千萬樹

▼正月 室内の遊
▲衛生的な臺所
▲西洋料理 家庭新年宴會
▼諸國正月の奇習
▼全國雜煮旅行
◎處女の衛生　大[illegible]學士
◎正月と子供の食物　[illegible]醫學士

一冊金十五錢 郵税金一錢半 六冊九十錢 十二冊一圓七十五錢

東京神田 同文館 振替東一三五



鏡

鈴木三重吉

一

叔母さんは直きに歸るからと言ッて、久代と二人て吉非へ行ッたのださうだけれど、もうそろ〱小暗くなるに間もないのに、まだ歸ッて來ない。祖母はあちらで下女と二人てこそ〱と何をかしてゐる。三千二はどこで飛び廻ッてゐるのだか。どうやら繼母が來てくれるらしい容子ださうだけれど、三千二だけはまだ何んにも知らないのである。此間叔母さんが來て、わたしたちの繼母に來てもらへばいゝといふ人について、祖母に相談をして行ッた際に、まだしッかり纏らない内は三千二にも言はないで置きたい、此前のやうに、どうなるかも解らない事をあの子が外へ出て人に言ふては

困る。さうしといてまた今度も話が毀れてもしたら外聞が惡いから――から言ッて歸ッたから、まだ三千二には何んにも聞かせてないのだッた。

いつもがじ〳〵と頭の痛いわたしは、久代や叔母さんが歸ッて來ないので、何だかそは〳〵するやうな氣がして、調べかけた譯解もろくに片附けないで、いろんな取りとめもない事ばかり考へつゝ、ぐずり〳〵怠惰けてゐた。もう間もなく日もくれて了ふのだ。

纒りのないムードをして、厭き〳〵したやうに、上り口の下駄の上に下りたわたしは格子戸を開けて外へ出て、表の門口の外に立ちながら、何を見るでもなく茫んやりと、人通りのない小寒い往來を見てゐた。直ぐ向ひの西洋人の家の裏口に、もう日影も何もない物干綱に、灰色をしたシャツの列りが忘られたやうにかゝッてゐるのが、どんよりした、裸の桐の木の間から寒く目に這入る。赤黒く塗ッた、板壁の屋根に覗いた、小さい煙突から、ストーブに焚くらしい稀薄な煙が、濁り淀んだ空よりも稍黒く立ち出てゐた。――わたしの足もとには、どこからころがッて來たのか、泥濘の土のついたやうな鉋屑が、くる〳〵巻きになッてころがッてゐる。所在ないわたしはそんなものが夕方の陰りの中にほろゝ寒く見入られた。――やッぱり頭ががじ〳〵痛い。

わたしはいつしか、また繼母の事を考へてゐた。どんな女だか解らないけれども、わたしがいつも求め晝くやうな、しッとりした、素直な女だと考へずにはゐられない。それでなくば厭である。もし下層た、厭な女だッたら、どんなに不愉快だらう。――わたしはそれも氣づかはれないでもない。たゞ叔母

さんが撰み出して來たのだから、わたしたちにひどく厭な女ではないといふだけは信じられるけれど——それでも、わたしはやッぱりわたしの求める通りに想像しずにはゐられなかッた。

わたしは母が來てくれてからの、日々を考へ廻らすと、何んだか、久しい間冷たい、暗い蔭ばかりだッたところへ、十月の晝のやうな柔らかい日向が射して來るやうな心持もして來る。さうなればもう久代なぞはゐなくもいゝ。わたしの言ふ事がしッかり解ッてくれないやうな久代——さうして何かといふと母の方へ歸りたいといふ素振りを見せて、たかぶるやうな目附きになる女はゐてくれんでもいゝのだ。——

わたしは今朝學校へ出がけに、久代の氣に食はないのが癪にさわッた心持の續きを作る事が出來る。母が來たものだから得意になッて附き纏うてゐるのが妬ましくもある。母のないわたしは小寂しい。

こんな事を考へつゝ立ッてゐると、向ふから一人とぼ／＼と、小さい三千二が歸ッて來る。午から中外にゐて、うす寒く疲れたやうに、鎖のやうなものを土に引き摺ッて、寂しい夕方の巣にかへる鳥のやうに、何か一人言を言ひ／＼歸ッて來る。

わたしのゐるのに氣づいたらしく、小足を刻んで門口へ來た三千二は、鎖の先に馬の蹄鐵を附けて引き摺ッてゐるのだッた。

「どうしたんだ、そんなものを。」

「拾ッたの。」

「これぢやない、その[illegible]をい。」

「貰ッたの。」

「だれから。」

それには答へずに、三千二は考へ出したやうに、

「兄さん、さッきのい、兄さんと同じ學校の生徒がゐましたい。大きな人が二人て、あッちの方へずッと行ッたの。」とそれが午から以來の珍らしい事件のやうに言ッてわたしを見上げる。

「大きい目だね、お前の目は。」とわたしはさッさと内へ這入る三千二の後から入口の木戸を閉めた。

「お待ちよ三千。いゝ事があるんだから。」

　わたしは格子戸の外の板戸をも繰り入れつゝ、二人に繼母が出來るのだといふ事を話したが、三千二わたしに調弄はれてもしたやうに、

「本當?。」と疑ッたやうに言ひつゝ、祖母を求めて上ッて行ッた。けれども三千二はやがて父からもそれを聞く時が來た。——

二

　わたしがその夜二階で下調べをしてゐると、父が一寸來いといッてゐるとて、三千二がとこ／＼上ッて來た。三千二は人と梯子段を下りる時にはいつても、自分が先に下りるのだと言ッて、きやッ／＼と騒ぐやうに急いて下りて行くのが癖だッた。

父は下の六疊で小暗いランプの側で、祖母が見え惡い目で書きつけた小使帳を披げて、何をか飛び〳〵に探して計算するやうに、紙切れへ鉛筆で數字を書いてゐた。何事にも口に出して不足を言ッた事もなく何んでも一人うす暗く怺へてゐるやうな父だッたから、わたしは、來いと言はれて出て行くと、何んにも言はれない先から、何か自分の惡い事にあてつけに、さうした曇ッた顏色をされてでもするやうに氣が咎める。さし向き、晝に、要りもしない贅澤なナイフやペン先入れなんかを借りにして取ッて來た事が、自分で惡事を隱してゐるやうに氣がとがめる。わたしは後ろ暗いやうなアンイージーなムードを包みつゝ、這入ッたばかりのやうなところに續きもなさ相に坐ッて、父の用向を待ッた。――三千二はランプの向うへ坐ッて、ホヤへ鼻を寫して見てゐるやうに、顏を近附けたり離したりしてゐる。

父は間もなく紙切を帳面に挿んで閉ぢて、

「もッとこちらへお坐りよ。」としッとりいふ。

「その傷はまだ直らんのかい。」と、前へ行ッて坐るわたしの、左の手のべにさし指にまだ小さく繃帶をしてゐるのに目を注いだ。二三日前に、庖丁で怪我をしたのだッた。もう何の事はない。

「あたしもよお父ゥさん。目がかうしてかうするやうに痛かッたのい。」と、いつの事だッたか、此間目に塵埃が這入ッてわたしに吹かせたのを、たッた今の事のやうに言ッてわたしに負けないとするやうに父に見させるのだ。

「フヽ、どうもないのですぞ。とッくの事なのに。」とわたしは笑ッた。

「そんなに擦ッちやいけないよ、三千。お前もう眠いのぢやないか。」と父はそれても氣になるやうに、下瞼を返して見た。

「もう痛くはないだろ？」

「何ともない。」と三千二はそれて直ッたやうに言ッて、父の閉ぢた帳面を取ッて逆さに膝の上で開いて字を書く所作などをして見せる。——父は默ッて三千二のする事を見てゐたが、と氣を換へて、

「三千、それを下にお置き、まだ眠くなけれやお父さんが二人に相談する事があるから。」

と、わたしを呼んだ用事を言はうとした。父の口振てわたしにはそれがどういふ事てあるかは、もう解ッてゐた。

「その……まだどうなるか、しッかり別らんのだが、お前たちは、うちへ繼母が來ても厭てはないかい？」と幾ッた事を聞くものだ。

「お前は少しは話を聞いてるだらうが、三千二は何んにも知らんのだらう？——三千はきちんと、ここへ手を置いてよくお聞きよ。他所から知らない小母さんが來て、三千の母さまになッても、三千はそれを母アさまにして上げるかい？」と小供に解らせるやうに言ふのだッた。生れたばかりの年に母に亡くなられて、どういふのが母だといふ事も知らずに祖母にのみ育てられて來た三千二には、平生別に母が欲しいといふ氣もないらしいのだッた。かうして父から聞かれても、どう言へばいゝのか別らないのて、たゞ極り惡さうにもじ〳〵しつゝ返事をわたしに相談するやうな目附きをするのだ。

「お返事をおしよ三千坊。厭ぢやないッて此間さう言ッたぢやないか。」とわたしは引き入れるやうにかう言ッた。

「いゝだろ？三千。」

わたしがさういふから、いゝのだらうといふやうに、三千二は安心して首肯いた。

「三千は取ッて五つになッたのかね今度。」と。父は膝に置いた小さい手を見つめてゐる三千二を見守ッた。母もなしにいつの間にか、かうして大きくなッたのだと考へつゝ見てゐるのだ。母は三千二がこれだけに育つのを得見ないで、永久にゐなくなッて了ッたのである。三千二は赤ん坊の時にはよく引きつけたりして母をさわがせた事があッた。病氣の母の生んだ子だからか、ひよわい、育ちの惡い子だッた。わたしは母の顔をしかと記憶へてゐないやうな氣もするけれど、いつだッたか、三千二が一時冷たくなッて目を白くした事があッた時、母はやう／＼小さい息を返して眠る赤子を見守りつゝ、此子が無事に育つものだらうかのい、と髪の乏しい痩せ青ざめた顔に涙をためて、子供のわたしに解る事のやうにかう言ひつゝ、わたしに、來て覗いて見よと言ひ足しかけて、ぴん／＼とひきれの入るやうに咳き入ッて、いつまで咳いても咳き止まれなかッたのを記憶へてゐる。さういふ苦しい顔だけしかわたしは記憶してゐない。三千二とわたしとの間に女と男と二人の子を亡くした母は、自分のからだゝ危しまれる長い病苦の中に、さうしたひよわい子を牛乳で育てゝゐたのだッた。——

わたしは、いつしか、向ふの押入の、暗い襖を見守りながら、こんな、此場からかけ離れた事を一

人で寄へ入ッてゐた。何だか母が亡くなッてしまッたのが母のためにも恨めしい。わたしたちの爲には母が自分一人の了簡で、わたしたちを置いて去ッて了ひでもしたやうに恨めしい。——

「おい／＼三千二、目が閉るのい。さ、もうあちらへ行ッて寢せてお貰ひよ。三千はだれと寢るのかの。まだ久代さんは歸ッて來ないやうだな。さ、早くあちらへ行ッて一人で先に寢てお出て。」といふ。わたしは父が久代の事をいふと、後ろ暗いやうな心持に突ッつかれる。わたしが久代を自分のものゝやうに使ッてゐるのを父に知られたら氣拙いのだ。——

三千二は眠たさうな目をしつゝ、

「お父うさんお休み。」と言ひ惡さうに辭儀をして立ッて行く。——わたしは自分の前に自分の心持を忘れやうとするやうに、三千二があちらへ行ッて何かぶつ／＼言ふのに耳を注いだ。着物を解いて、背中の痒いところでも搔かせてゐるのらしい。

「もッと上ですかのい？こうですかのい？。」

と下女が言ふ。三千二は甘へたやうにぶつ／＼何をか言ッてゐる。

「あの子にはまだ何んにも解らないのだ。」

と父は二人になッての話を繼いた。

「本當なら。これまで母がなくても、どうにか濟んで來たやうなものだから、今になッて貰はんてすまされゝば言ふ事はないのだけれども。——お前たち二人は一番母がゐなくてはならない時になくて來た

のだッた。わたしやお前たちのためにはもうどうでもいゝのだけれど。いかに何んてゝもうお祖母アさんにいつまでもあゝして何から何まで世話をしてもらふのが見てゐられなくなッたものだから、たきの言ふのに負けて一人貰はなければならないかとも考へるのだけれど――」と父は少ししか入れてない火のもう消えかゝッて了ッた火鉢を前に、小寒さうに懐手をして、暗く考へ惑ふやうな顔をしてゐる。貰ふには貰ッても、それだけ色んな面倒な事も出て來るのだがと、それも考へ量らなければならないと言ッたやうな容子に見える。

父がお祖母アさんの事をさういふやうに言ふまでは――たッた今晩まで、わたしは祖母が氣の毒だといふ事はそんなにしみ〴〵とは考へなかッた。たゞ何かに面倒を見て上げるものゝない、一人ぽッちの父と、理解のない祖母の盲目的の慈愛に飽きたらないわたしのために、わたしの包まれたい、母といふ日向のためにのみ、繼母を求め苛らッてゐたのだッた。目の見え惡い祖母が、あの年をして一々萬事を面倒を見てゐるのを當然の事のやうに思ッて、いろんな不足ばかり並べてゐた。下女を置けば、祖母の不束なのに乘じて盜み掠めをして出て了ふ。正直な女は何一つろくに足しにもならないで荷厄介になる。久代がゐたッて一ん日縫ひものに出てゐるのだから一つも助けにはならない。少しは祖母の手傳ひもさせるつもりで叔母ゝ久代をうちへ預けたのだけれど、久代はうちの子と同じに祖母に世話をかけてゐる。――考へて見ると祖母は此一年ばかりからげッそり年が寄ッて、よろ〳〵しさうになッた。これまでは、わたしが癇癪を出してがみ〳〵言ふと、祖母はしまひにはやるせなさ相に、もう怺へておくれよ、

そんなにお前さんたちが困らせると、お祖母アさんは泣き〲死んで了ふぞの。わたしもこんなによぼけてゐるのぢやけ、いつ死んで了ふかも解らんのぞ、とこんな事を言ひ出すのが、自分の言ひやうのないのを誤魔化さうとする意地の惡い遁げ口のやうに考へられて、一層わたしの不愉快を加へるばかりだッたけれど、もしそんなにして急に亡くなりでもされたら、わたしたちが心配ばかりさせて死なせた事になる。――わたしは最早さうなッた日のわたしの悔いと自責とが目に見えるやうな氣がする。早く母に來てもらッて、お祖母アさんには何んにもさせなくてもいゝやうにしたい。わたしはもうこれからはお祖母アさんのされる事には何んでも從うて、がみ〲言ッたりなぞしはしない。――

わたしはこんな事を思ひつゝ、父が次に何を言ふかを待つやうにしてゐた。

「とにかく母を貰ふにしても、よくお前たちが納得してくれないでは非が極らないのだが。」

と變な事をいふのだッた。何てわたしたちが厭だの厭でないのと言はう。父はわたしが父のためばかりにでも、どんなに母を求めてゐたかを察してゐてくれないのだ。

「まアよく考へて置いておくれよ。けふたさが役所へ來て、先方の事情を詳しく話して行ッたけれど、わたしはまだどうするかも解らない。お前たちに取ッては俗ていふまゝ母が來るのだから、生んでくれた母のとほりに大事には出來ないかも知れない。」

と皮肉なやうな口調でいふものだ。

「どうしてそんな先の事が解るのです。わたしが母にどんなに仕向けるかお父さんにはわかりません。」

とわたしは口答へをするやうに不愉快にかう言ッた。

「だッてお祖母アさんに對してても、わたしがいくたび言ッて聞かせても聞かないて、やッぱり惡體をついたりがみ〳〵言ッたりするぢやないか。――お祖母アさんがゐて下さらなんだとして見たら、だれが今日までお前たちの世話をしてくれたろ、お前はさういふ事をわきまへないから駄目ぞの。」

「それはこれまでは少しはそんな事をしもしたけれど。」とわたしは言ひ譯をするやうに一人で口の中で言ッた。

「よそから來たものにそんなに我儘に當りてもして御覧、一ん日だッてゐてくれはしないけのい。來るのは來てもお前との關係てまた直ぐ出て了ふやうだと、いッそ來させない方が面倒がなくて濟むんだ。」

それては、貰ふのには何のさしつかへもないのだけれど、たゞわたしの我儘のために躊躇されるといふ意味になる。そんなにわたしばかりを惡いものにしなくもいゝのだ。父はわたしを解してゐてくれない。わたしが祖母に對してがみ〳〵いふのをても、祖母が了解してゐてくれる程解ッてゐてはくれないのだ。わたしは一寸も祖母を厭ッてそんなにつけ〳〵當るのぢやない。母がゐないから祖母が二人分の心配をする。それを省かうといふ心持もあッて、祖母にあれこれしては要らないといふのだのに、祖母がしつこいから癇癪を出す事もある。それに頭がぐぢや〳〵と痛いから外の人よりも、物事が癇に障るのだ。そんな心持が父には解ッてゐないのだ。わたしが母がなくて、どんなに薄ら冷めたい心持にがじがじと生きてゐるかゞ解らないのだ。――

わたしはだれもわたしを解し包んでくれるものもないやうに寂しく悔しくて、一人でひい〳〵泣き出した。

「何をそんなに泣くのだ。」

「何んで泣くッたッて……」とわたしは何を言はうにも言はれず、たゞ悲しさがこみ上げて來て、泣き止めやうとしても止められない。

「止めよ、もう。だれか歸ッて來たぢやないか。――たきが歸ッたんだから、もう止せ。見ッともないから。」と父は暗い〳〵顔をしてゐる。叔母さんが歸ッたのならわざと餘計に泣いてやりたい。叔母さんが父のところへ行ッてさう言ッたのにちがひない。母が來るにしても、わたしが困りものだといふやうな事を言ッて父に今のやうな事を言はせたのかも知れない。父だッてわたしに相談してから決着をつけるやうに言ひ出したくせに、あゝしてわたしの危險を押へて置かうといふのかも解らない。そんな卑怯な事は不愉快である。――

「たゞ今歸りました。」と久代が言ふ。二人で上り口に上ッて來る。

「まアま遲くなッた事。」と叔母は一人言のやうに言ひつゝ、こちらへ來る。

わたしはわざと、わたしが泣いてゐるのを叔母に見せつけるやうにしく〳〵と涙を啜ッてゐた。

三

學校から歸ッたわたしは茶の間の炬燵にあたッて悄んぼりしてゐる祖母に挨拶をした。叔母は午前に

歸ッて行ッたのださうてあッた。

「三十はどこにゐます？」

「外へ出たんだらう？どこかの子供がさそひに來たやうだッた。」

「下女は？」

と、わたしは外から歸ると、立ちがゝッてゐて一々さう言ッて聞くのが癖だッた。ゐるべきものがゐないと、寂しいやうな物足りないやうな心持がするのだ。

「一寸こゝまてお出てよ。たきがこれをあんたに上げるのだとい。」と祖母が紙に包んだものを炬燵の蒲團の上に置く。叔母が小使をくれたんだ。開けて見ると五十錢銀貨が六枚這入ッてゐる。包んだ紙に字が書いてあるから何氣なく披げて讀んで見る。——叔母の手紙だ。

「お前さまが學校へお出かけだから、悠ッくりはなしもしてゐられなんだけれど、いろ／＼言ひ遺した事もあります。こんど來るなら母さまを伴らッて來るやうになるてしやう。もう少しの間だから序てに我慢して何んても怺へてゐて下さい。母さまが見えたら萬事よくなります。それから角の店てもう借りをしないやうになさい。かみさんがお金を取りに來たからわたしが拂ひました。物の不自由をするのはさき／＼のためになります。からだを大事に、癇を出さんやうに祈ります。

たき　より」

と書いてある。雜貨店の婆アが少しばかりの借りをけち／＼言ッて、うちへ取りに來たといふのが忌々

しい。昨日のナイフを下女に持たして遣ッて、つッ返して來させてやらうかと考へた。叔母に對してもいかにもわたしが不規律なやうで、極りが惡い。そんなにいつも／＼借りはしないのだ。

「あれ、また蒲團の綴ぢ糸を切ッたのい。」と祖母が目を皺める。

「フヽそんな顏をなさらんでもいゝぢやないの？」

「だッて三千までが眞似をして、わたしの顏を見い見い、ぶす／＼切るがの。これから母アさんでも來れはお前さんからして行儀をよくしてくれないと、わたしの育て方が惡かッた事になるけ、わたしが困るその。」と子供に言ふやうな事をいふものだ。

わたしは二階へ引き上げにかゝッた。

「お前さん、今日は何日かのい。」

と祖母は、からだがぐッたりしたやうに蒲團の上に顏を伏せつゝ、附かぬ事を問く。

「どこか加減でも惡いのですかあなた。」

「いゝや、何だか辛どいけよ。」とやッぱり懶げに俯っ伏してゐる。

二階へ上ッて見ると、久代がわたしの坐蒲團をしいて坐ッて、カーテンを引いた硝子障子を通して、疊にさす薄寒い日向に背を向けて縫ひものをしてゐた。

「こゝが日向てしたから、仕事をこゝへ持ッて來ましたのい。」と惡い事でもしたやうに言ひつゝ、立ッて押入れから、わたしの着物を出してくれて、こそ／＼縫ひ物を片附けかける。そこらに落ち散ッた糸

屑を摘んで女らしく前歯に噛み入れる。髪を結ひ直して質素らしい白いたけながをかけてゐる。

「どうして縫物を休んだのだ。」とわたしは日向に足を投げ出して、指の綳帯を解いて見る。母をステーションまで見送ッたから序てに休んだのだと言ひつゝ、久代は、その儘、立ッて行かうともしないでわたしのする事を見守ッてゐる。

「もう傷はすッくり喰ッつきましたぞのい。」

と言ッて、何をか手の平に入れてるものを指でいぢくるのだ。

「何だい、それは。」

「これ。」と手の平を披げて見せるはづみにばら〳〵と二つ三つ疊に落ちる。赤い南天の實を持ッてゐるのだッた。

「倉の後ろのところに四五本植ッてるてしやう？あの綺麗な實を鳥が澤山來て突ッついて食べて了ふのですのぞ。隨分あッたのに、下へ落したり食べたりして、少しにして了ひましたのい。鳥が十匹も二十匹も來るのですのい。わたしは惜しいからこれだけ取ッといたのですの。」

「取ッといて何にするのかい。」

「でも綺麗ですけ。こんなに眞ッ赤いのですもの。」と拙らない事を言ッてゐる。わたしはそれには取り合はないで下へ行ッて火種を持ッて來てくれと言ひつける。久代は素直に立ッて、片づけた針仕事を提げて下りて行ッた。

間もなく十能を持ッて上ッて來て、馴れない手附きて火鉢に炭をついて火を拵へて、再び下へ下りかけたが、

「わたしのい、十さん。」と何か言ひたげに下り口の柱につかまるやうにして、氣のなさ相な目もとをして、雲の往き來に日影の曇り／＼する外の方を見てゐるのだ。

「どうしたんぞの。」とわたしは氣にして聞く。

「どうしたのかお言ひよ。言はないのなら下りてお出でよ。わたしは學課をしなければならんから邪魔になる。」

此子のねッちりした癖のあるのが厭だからわたしは面倒くさくかう言ッた。

「わたしに對して何か氣に喰はん事があるの？」

「いゝえ。」

「そんならお祖母アさんかい？」

「そんな事ぢやないのです。あとで自り別りますけ。」と言ひつゝ、涙ぐんだやうにして下りて行く。

わたしはもう久代をそんなに好かなくなッた。なんて二人があんな事になッたのだッたらう。わたしはそんな事を祖母や父やに氣づかれはしまいかといふ後暗さに、人の言ふ拙らない事までがわたしへのあてこすりのやうに不愉快である。それに二人が人の目を偷みはじめてからは、わたしは浮か／＼した夜晝を送ッて學校の方の事が一つも手に附かない。幾何でも段々に六づかしくなッて行くのに、怠惰

けてばかりゐるわたしには此頃のところなぞは何が何だか一寸も解らない。これでは試驗に困るのは目に見えてゐる。漢文だッても小六づかしくて頭に這入らない。――そんな事を考へると氣がくさ〳〵して苛ら立たしい。それにわたしのやうな十七になッたばかりのものが戀なんかして惡い事をするのも、考へると空怖ろしい。久代もわたしよりも下のくせにづう〳〵しいやうな氣がする。それもわたしの罪だッた。わたしは母でも來たら、これまでのわたしの缺點を何もかも直すのだから、もう久代とも元の二人に返りたい。目の前にゐては區切りがないやうで厭だから序でに母の方へでも歸るといゝ、もう女と下らない關係なぞ引いてゐるのは厭だ。――

わたしはこんな氣になッて、開きたくもない本を開いた。

夕方食事がすんでから、いつまでも下の炬燵に這入ッてゐたら祖母が、こんな事を言ひ出した。

「つかん事だけれど、わたしは叔母にひどく叱られた事があるんだけどのい。」と言ひ惡さうに言ふのだッた。何の事だか別らないけれどわたしは氣を廻して厭な、もじ〳〵するやうな心持に押へられずにはゐられなかッた。久代と二人の事を言ふのではないかと、どぎまぎした。

「久代さんはそこにゐるかい?」と言ふ。わたしは默ッてゐた。

「久代。」

「はい。」と下女と二人で板の間を片附けてゐた久代は向うから返事をした。わたしはすッと立ッて二階へ上ッた。

それでも、もじ〳〵して落附かないから、後程下へ下りて、何ヶ言はれたのか久代に聞いて見やうとした。久代は中の間で縫物をしてゐた。襖を閉ぢたこちらには父がゐるのだから困ッて、わたしは上り口の間へ行ッて、久代を手招いた。二人は暗い中で私語いた。祖母が言ッたのは久代の何か母に言ひ附かッた事をしなかッたので、叔母が祖母にまでぶつ〳〵言ッたのだと言ふ。それならまアよかッた。

「二人の事をだれも知ッてやしまいね。」

「どうですかのい。」

「どうですかぢやいけない。知らないだらうね、誰も。」

「えゝ、わたしは何んにも口へ出した事はないのですもの。」

と言ッたが間を置いて、

「わたしは今度あなたのお母アさんが見えたら、吉井の方へやられるのですがのい。」と困ッたやうにいふのだ。女の子がゐては來た母が氣を置くから――殊にうちの子でもないものだし、二人の子供もゐての上だから――さし向きのところ、久代は吉井の方へ預ッてもらふ事にするやうに、叔母が祖母と二人てさう極めてゐるのだと言ふ。

「お前さんにさう言ッたかい。」

「母がさう言ひましたのい。」

「だッて仕方がないぢやないか。」とわたしは丁度いゝ幸だと考へつゝから言ッたが、

「だッて當分だけだといふのぢやないか。その内には、またこッちへ來れるもの。」と、わたしは、わたしの心持を隱すやうにこんな事を言ッた。

「さうてしやうかのい。それだッたらいゝのですけれどのい。」と久代は涙を啜るやうにした。

わたしはそれきり何んにも言はなかッた。女がべそ／＼するのは面倒くさい。それをわたしが責任を帶びなければならないやうな氣がするのが面倒くさい。わたしが久代とこんな事になッたのが損だッた。

「もうわたしはあちらへ行くよ。だれか來ると變だから。」とわたしは此場をはづすためにさう言ッて中の間へ出た。

四

それから五六日ばかりしてから、わたしも久代も、さういふ事も忘れたやうに、やッぱりこれまでのとほりに、ぐずり／＼同じ關係を引いてくらしてゐるところへ、叔母から祖母へ手紙が來た。祖母はそれをわたしに示して、

「繼母アさんの話が纏りさうなのぞ。」と言つた。讀んで見ると繼母になる人は、自分て何かの問合はせをしに、こちらへ來てゐるのださうて、平網町にゐる伯母さんのところにゐるのらしく書いてある。來て辛棒して見る考になりかけたといふ手紙が今來た。同時にこれまでかゝつてゐたところに置いてある荷物をすッくり受け取ッてこちらへ送ってくれまいかとの事だ。それには少しわけもあッて、そちらの

方へは自分で顔を出したくないのらしい。――こんな事が書いてあッた。叔母は二三日してまたこちらへ出て來るといふのだッた。久代の事はあの子への手紙に書いてありますと、仕まいに、せか〱と附け足してある。

丁度此の手紙を讀んでおるところへ、下山の小母公がやッて來た。娘の頃にわたしのところに使はれてゐた女で、何かといふと出て來て世話をする人間だッた。此のたッた二三日前にどこの人だか、氣のよさ相な上品な五十ばかりの婦人が來て、いろ〱とお宅の事を根掘り葉掘りわたしに聞いて行ッたから、ひよッとすると久代さんの御縁談か、それともお宅へ後の方でもお出になるかだらうと思ッて、何にせよ久しく御ぶさたばかりしてゐますものですけ――と口早に祖母に言ふ。正直な女だけれど狐のやうな顔をしてぺちや〱よく喋るから、わたしは面倒だから逃げた。

「本當に物といふものは隱されないものぞのい。」と祖母はこんな事を言ッて、譯を話して聞かせるらしかッた。

小母やんはしばらくして、わたしを探して來て、祝ひを言ッたが

「その……お母アさんに來て下さる方といふのはこれまでどうしてゐなした方ですの？」

と、祖母がそこまでは言はなかつた事をわたしに聞きほじらうとするのだ。この女がどこへ行ッてもしやべり廻るから祖母もさういふ事は話さなかッたのだらう。わたしは知らないから知らないと言ッた。

わたしは此間から此話があッても、母になる人の今の境遇や、これまでの事情については一寸も聞き尋

ねもしない。子になるわたしたちに取つては、母に來るものゝ事を何んにも知らない方がいゝといふ積りだから、祖母も叔母もそんな事はわたしたちには一寸も言はない。わたしも聞きたくない。これまでの事情の中にわたしの描き求める母としての感じを汚すやうな事がありてもすればわたしに厭であるのと共に、母になッて來てくれた後にその人に、わたしたちへ對して權威のないやうな心持をさせるやうな思ひがして、何だか氣の毒である。わたしは自分の欲してゐる型の母を、一人て描いてゐればいゝのだッた。たゞ一度緣附いたのが何か不仕合せな事情て歸ッてゐるといふ事と、これまて子を持つた事のない人だといふ事しか聞いてゐない。

「まアま何にしても結構てございますぞのい。」と言ッて小母やんは、わたしがそれ以上に口を開かないものだから間が拔けたやうにして、また祖母の方へ行ッた。と、それまでどこにゐたのだッたか、三千二がやッて來て、

「兄さん、狐の小母さんが來てるい。」と大きな聲でいふ。わたしがいつも狐々といふからてある。

「そんな事を言ふと小母さんに嚙まれるよ。」とわたしは調弄ふやうに言ッた。三千二は向ふへ飛んて行ッて、

「狐の小母さん。」と、唐紙にもたれて茶の間を覗きつゝ、向きつけて言ふのだ。

「はい〳〵。こゝへ入らしませ坊ッちやまや小母やが一寸見ない間に坊ちやまがずん〳〵大きくおなりなさる事いのい。」と三千二の相手になる當人は、狐といふわけを知らないのだつた。

「お狐さん、〳〵、狐のこん〳〵お狐さん。」

と三千二は唐紙を叩きつゝ、出鱈目の事を節をつけて謡ひながら一人で遊ぶのだッた。――

わたしは日の影のない六疊の障子の根に小寒く膝を組んで、そこの障子に、久代が落しといたらしいのを、誰れかゞ拾ろッて刺して置いたと見える針を拔いて、障子の紙へぶす〳〵と穴を開けながら、母が來てからの事をあれこれと心に描いてゐた。――頭ががじ〳〵痛いから二階へ上つて學校の事をするのも厭なので、こんなにして、變なところにぐずり〳〵して、取りとめのない事を、怠惰なムードに考へ續けるのが癖である。――久代の事もいつしか考へつゝあッた。かうして一人でゐて考へると、もう久代は吉井へ行ッて了ッてゐて、わたしばかりが、一人こんなにして、も早しげ〳〵見られないものゝ事を回想してゐるやうな心持ちがするのだッた。

夕方に久代はお針から歸ッた。わたしがアンチピリンを買ッて歸ッて來ると、久代は、中の間の唐紙の隅に一人坐つて今日の祖母への手紙の中に一緒に這入ッて來たらしい母からの手紙を讀んでゐた。「久代どの」と書いた叔母の手の狀袋が、――同じ大きさの上袋へ這入ッて來た證據に、上と横とに折目の附いたのが膝の下に置いてある。久代は浮かない顏をして讀んでゐた。

父は置炬燵をして、蒲團を被ッて這入ッてゐた。ぞく〳〵寒氣がして氣分が惡いと言ッて、歸ると直ぐに床を取ッたのだつた。

「これを服用には湯がいゝのでしやう？」とわたしは頭もとへ行ッて聞いて、臺所から盆へ乗せて持つ

來て、アンチピリンの包みを開いた。髮の汚れた頭をして枕に俯つ伏してゐた、父は何をか考へ入ッてもゐるやうに、少らく顔を上げなかッたが、わたしが座ッて待ッてゐるのに促がされたやうに、やッと顔を上げてそれを飲んだ。

「あとて、そこの、蒲團の後ろを徐ッと叩いて置ッてくれ、すう〳〵する。」と、心持惡さうに顔をしかめて目を閉ッた。

わたしは、こんな時にてもだれとて手の屆く世話をして上げるものゝない、小暗く一人ぼッちの父を傷ましく思ひながら、自分らも寂しい心持になッて、後ろへ廻ッて蒲團の隙いてるのを押へ〳〵した。祖母はわたしたちの事についてはやきもきして心配するのだけれど父の事は父が自分ですればいゝやうに、一寸も構ッて上げない人だッた。父も自分の事は自分でしてゐる。こんなにして寢てゐても祖母は來て見ないからわたしが話すまでは知らないだらう。父も言はないで、たゞわたしにピリンを買ひに出して置いて、一人て蒲團でも出して寢たのだらう。下女は臭いやうな汚ない女だから下を働くだけてある。久代は祖母が庇ふばかりで何一つさせないのだから、いつまでも物事に氣のつく女子にはなれない。物ても、言はなければしはしない。だれもかれも氣が利かない。――

わたしは炬燵の上に脱ぎかけてあッた父の不斷着を取り上げて疊みかけると、父は閉ッてゐた目を開けて、

「そんな事は放棄ッとけよい。男が要らん事に氣を使ふものぢやない。」と苦々しさうにいふ。父が平生

からわたしの餘計な事にまで神經を配る性質を氣にしてゐるからこんなに言ふのだといふ事は解ッてゐるけれど、かういふ際にそんなに言はれると、何だかわたしの情合といふものを受け入れやうとしてはくれない、冷たい、一人暗く閉した父のやうに不愉快である。そんなにしていつも一人見捨てられたやうなムードを自分で作ッてゐる損な性分を恨みたい。——わたしは惡い事をして叱られてもしたやうに、取り下ろした着物をまた掛けたなりにして置いて、唐紙を閉めてこちらへ出た。

わたしは行くところもないやうに茶の間の方へ行ッたが。そこには久代が、簞笥から何をか出しかけてゐる祖母のところにぽつねんと坐ッて、何だか浮かない相談をしてゐる容子だッた。三千二は横向きに炬燵に轉んで、拙らなさうに物尺で以て、疊を掻き廻してゐた。わたしは取りつくところもないやうな心持をして二階へ上ッて、暗くなり行く蔭りの中に、物の何一つとして面白くないやうな心持を見つつ、悄んぼりして、火鉢の灰を均らしてゐた。

それから心淋しくランプを點してあす當てられさうな代數の問題をやらうとしたが、氣が乘らないから、ノートに徒ら書きをした。三角形の中へ、いくつも三角を重ねて書いたり、定規で縱の直線を並べて引いたりしてゐたが、その內に押入れに隱して持つてゐる近松全集を出して讀ってゐた。そんな色戀の事や人情の纒綿を書いたものなぞを讀んだり、殊に淨瑠璃なんて言つたやうな學校の生徒に似合はないものを買ッてゐるといふ事が、人に見られたら、變に誤解でもされさうな、墮落けたやうに見られさうなのが厭だから、一人で氣が咎めて、いつもは隱して置くのだ。

わたしはそんなものを讀んでゐると、いつでも悲しい戀のしたいやうなそしてしみ〴〵と、母や祖母や、さういふ、わたしが切るに切られない女と心中でもして、悲しい最後を遂げたのを聞いて、消へ入るやうに泣き惑うてくれるものが欲しいやうな氣持ちになる。わたしは自分でつとめて、一行〳〵の文句に、センチメントを漲らすやうにして讀んで行くのだ。書いてある事に加へて自分で悲哀を作り添へて讀むのだッた。しまひには亡くなつた母が戀しくなる。祖母も久代も父も三千二もみんな、そのムードの中に物哀れに考へ浮べられて來るのである。さうして、自分の目で見て、しみ〴〵とした人情のある、素直な自分自身を見得るのだッた。また、こんな際にはわたしは自分の惡い事を悔ひるやうな、物さびしい心持にもなつて來る事もあッた。

わたしはさッきからどのくらゐの間かうして一人讀んだり考へ入ッたりしてゐたらう。わたしはいつしか、久代の事を考へ續けてゐた。久代が、好きなお祖母あさんのところを放れて、父方の伯父さんの家へ行き、他人の伯母さんの厄介になるのだから、こゝを出るのを厭がるのだと考へ〳〵父のない女の子として、母のもとから一人で出て來てゐる心に、どんなにたよりないかと自分のさせる事のやうに解るのだッた。わたしが罪のない久代を厭ふのもわたしが惡いやうに責められても來る。

わたしはもう調べも厭だから、下へ行ッて寢て了ふ事にして、下りて行ッた。

「十さん、寢るなら蒲團をして上げやうかい。もう今日する事は濟んだのかい?。」炬燵にあたつて、寂しさうにしてゐた祖母は、わたしが物に飽きたやうにして、詰らなさ相に懐ろ手ををして突ッ立ッてゐ

るのを見て、かう言ッた。わたしが、さッきから一心に學課を調べてゐたのだと思ッてゐるのだ。祖母の傍には三千二が半蒲團を枕にさせられて、小さい寢息になッてうたゝ寢をしてゐる。

「まアこゝへおあたりよ。」と祖母は學課に疲れたわたしを氣にするやうに言ふのだ。

「久代はどうしたの？」とわたしはさり氣なく言ひつゝ、蒲團に膝を突いて、何だか氣になッて聞いた。

「久さんや、またあすの事にして、もうこちらへ來ておあたりよ。」と襖の向ふへ向けて言ッたが、

「あれも可愛相だけれど仕方がないぞのい。」と暗い目を皺めて、小指で髮の中を掻く。久代は、「あす、吉井の下女に荷物を取りに來させるやうに言ッて置いたから、さし向き要るものを纏めて置け。一所に吉井の方へ越すやうに」といふ、母の手紙なので、下女に手傳はせて、ざッと、纏めるものを纏めてゐるのだといふのである。

　それならさうだと久代はなぜわたしには言はないで、默ッてこそ〳〵と、そんなに急がんでもいゝ荷造りなどをするのだらう。——わたしは、もう久代が、冷やかなわたしには相手になつても貰へないやうに、一人て、一人を閉ぢてゐるやうに疑はれてアンイージーな氣がするのだッた。

　そッと立ッて、襖を開けて見ると、久代は自分のもの丶入れてある、四疊の押入を開けて、小箪笥の抽斗なぞを拔いて、行李に物を詰め入れやうとしてゐる。いろんなものをごた〳〵取り出して約りが附かないやうな、くさ〳〵した顔をしてゐる。踏み臺の上に置いた暗い小さいランプのこちらに、山出しの下女は、何を手傳ッていゝか解らなさうに、茫んやりと坐ッて、何んにも知らない氣の利かない顔をし

て、いかにも田舎ものゝやうに坐ッてゐる。

「久代さん、無理にさういら〱して出て行かんでもいゝぢやないの？」と、わたしはわたしを取り除けにしてゐるのを怨じる如くに言ふと、久代は、

「だッてお母アさんは、かうと言ッたら直ぐにしないと怒るんですもの。」と髮の毛の女らしく解れてかかる額を横に見せて、涙ぐんだやうな目元をランプの笠の小黑い汚れに注ぎつゝ、わたしには通はない、一人はかない息を包んだやうな容子をする。取りちらかしたものの間には、久しくわたしの目に入らなんだ、久代が祖母から貰ッた、古りた千代紙の疊紙や、小さい頃の持物だッた、赤や青の麥藁を貼ッた小箱なぞがあッた。わたしの好きな、紅絹切なぞの布切の入ッた紫のビロードの手文庫なぞもあつた。――このやうなものをすッくり持ッて越して行ッて、あとには、何の色彩もない中に、わたしは一人老いたお祖母アさんだけを相手にして、厭な學課に飽きつゝ、久代のゐない晝と夜とを見守るのかと思ふと、恨めしい心持がする。

「また、あすの事にしてこッちへお出てよ。」

とわたしはいら〱寂しいやうな氣分を壓へつゝかう言ッた。

「わたし、どうすればいゝか解らなくなッたけ。」と久代は目元をうるませて、指の先を見つめてぼんやりしてゐる。下女は二人の顔をじろ〱見比べてゐる。

わたしは祖母や下女にわたしの心持を見られるのを厭ふやうに、それぎり久代を放棄ッといて、自分

て蒲團を下ろして、床を取りにかゝッた。

「久代さん、來てこれを見てやりよい。」

と祖母がいふ。久代は間を置いて默ッて悄んぼりとこちらへ來て手傳ッてくれる。わたしは久代に言はうとする事があつても、祖母たちがゐるから何んにも言はれない。久代はわたしの心持がわからぬやうに、もう、二人の何んでもなかッた以前のやうな、自分を鎖した容子をして、

「さ、三千さん、これをお着なさい。お手を通して下さいのい。」と寢ぼけた三千二に寢間着を換着へさせるのである。

下女はどこかまだ閉めないてあッた雨戸を繰る。わたしは蒲團に這入ッて、も早、當分今宵限りの二人が戀を考へてゐた。

「お祖母アさんも、もうお休みなさいませ。」と久代はいふ。

「お前さんあとで一寸伯父さんの炬燵を見て上げておくれよのい。夜中に火が消えないやうに、よくしといておくれよのい。」と言ひつゝ祖母はまだ寢やうともしない。父は一人暗く寢てゐるのだらう。

——久代が祖母のところにぼつんと坐ッて、前髮に櫛を入れてゐる影がこちらの、障子に寫る。

わたしは別れる戀といふ事を、自分て見るのははじめてゞある。このやうな心持も面白いやうな氣もするけれど、別れるのなら、もッと悲しい事情の下に、もう再び會へないやうに隔ッて了つて、血の出るやうな悲しみに咲き悶えたいやうな氣もして來る。わたしは、さッき讀んだ戀の男女に想ひ比べたり

しつゝ、疑たやうな振りをして、一人それからそれへと放想を續けてゐた。かうして久代も下女も寢て、暗くなるのを待つのである。久代にはいろ〳〵さゝやきたい事があるやうな氣がする。もう此一夜のみとなッたのだから、物惜しい。

祖母はわたしの向ひ側へ、久代と三千二とが簞笥の方へ——から三方に一つの炬燵へ寢るのである。下女は、もう自分の部屋へ退ッた。祖母はまだとぼり〳〵久代に何か言ッてゐる。久代のじッとした影は、まだ、まどろッかしく障子に寫ッてゐる。

五

久代はもう吉井へ行ッただらうか。下女がわたしのゐない間に伴れに來たやうな氣もする。行ッて了ッたとすれば、わたしは何だか久代に言ッて置くべき事をいくつも言ひ遺してゐるやうな氣持がして物惜しい。——

わたしは久代の事ばかり考へつゝ學校から歸ッて來るのだッた。久代はわたしのうちを出てもわたしのものだ。いつでもわたしが欲する時に自由にすべき女でなければならない。戀の讀み物を讀んだりする時にも、わたしが自分をその中の男に擬する相手として久代はどこにゐてもわたしのものになつてゐてくれなければ厭だ。側にゐなければ段々にわたしを忘れて了つては厭だ。——わたしは何うにか言ッて、久代がいつもわたしの事を考へてゐてくれるやうにして置くべきだッたのに、何だか心もとないやうな氣持もする。——

こんな事を考へつゝ歸つて見ると、久代はまだ家にゐた。下女が荷物を取りに來ないからと言つて、祖母を手傳ッて、客用の蒲團の襟のビロードを取りかへてゐる。繼母が來たら着せて寢せる蒲團だと言ッてゐる。

下女はとうと夜になッても來なかッた。わたしと久代とには、昨日と同じ心持の晝と夜とが繰り返へされた。

父はいつものやうに役所へ出て同じ刻限に歸ッて來たが、苦しいのを無理に我慢してゐたのが惡かッたらしく、ひどく咳さへ附いて、ごほん／＼と言ひつゝ、直ぐに蒲團に這入ッた。

あくる朝、いつもわたしと前後して床を出る父がいつまでも起きないから、どうしてゐるのかと氣づかッて行ッて見ると、ひどく熱がして氣分が惡いから、とても出られまいといふ。祖母も來て、

「どうしてあげればいゝぢやらうぞのい。熱いお粥を拵へて上げるから、それを食べてじッと寢てゐて見るといゝだらうい。」と蒲團の肩を抑へ／＼して小供へ言ふやうに心配してゐる。

「もういゝですから心配しないで下さい。大した事でもないのですから。」と事もなさ相にわざとさう言ッて、それぎり默ッて目を閉いてゐる。

「それならいゝけれどのい。」と祖母は見え惡い目をして覗いてゐる。――わたしは學校へ出て行ッた。

まだ大丈夫だと思ッてゐた幾何の平常試驗を出し拔けにやられてわたしは零だッた。三つ出た問題の内て、二つは本さへさらへてゐれば出來るのだッたといふけれど、わたしは怠惰けてばかりゐるから、

それすら出來ないのだッた。敎師からあとてわたし一人呼びつけられて小言を言はれた。わたしは不愉快にわたしを自責しつゝ、たゞ黒い不安な心持に閉ぢられて家へ歸ッた。わたしは此間から、こんな事になり相な氣がして、危惧に突ッつかれてゐたのがやッぱりその通りになつたのだ。わたしはわたし一人がさういふ悔しい目を見るのが忌々しかつた。わたしが女なぞに氣を奪はれたりして間違ッた了簡に誤られてゐた罰だと考へると、仲間の生徒に顏を見られるのも恥かしいやうな氣がする。みんな、わたしの、女と關係してゐたりするのを知ッてゐて、蔭てはわたしを擯斥しててもゐるやうに、譯もなく氣が廻ッたりして不愉快てならないのだッた。

わたしは家へ歸ると、隱れるやうにいきなりすッと二階へ上ッてがじ〳〵する頭を抱へて机に倚りかかッて自分を悔ひ咀うてゐた。

と、久代が上ッて來て襖を開ける。見ないても久代だといふ事は解ッてゐる。

「十さん、わたしはさッきにから待つてゐましたのい。」としめ〳〵しく言ふのだ。もう厭だ。わたしはわたし自らさへ厭なんだ。

ちやア行ッてもようござんすのい？」といふ。

「どこへなりとお出てよ。わたしに聞かんてもいゝぢやないか。」

「てゝ吉井からは女中がつれに來てゝわたしのゐない間に出て行ッたら厭だッてま言ひなしたけ、わたしはさッきから、下女に待ッて貰ッてゐるのてすのに。」

「だからもうお出てよ。」とわたしは振り返りもしないで、つけ〳〵しくかう言ッた。

「そんなに腹をお立てなすなら、わたしどうしましやうぞ。わたしだッて行きたくはないのですのに。」

とおろ〳〵したやうにいふのである。わたしが、久代が出て行くのを癪に障へて恨んでゐるのと取ッてゐるらしい。

「のい。十さん。」

「もうお出てよ。下女が變に疑ぐると厭だからわたし。」と、わたしの、そんな事で怒ッてゐるのではないといふ心持を示すやうにかう言ッて久代を見ると、久代はもう出て行くばかりに外出(そとで)の着物に着換へて、綺麗にしてゐるのだッた。

わたしはもう此女と關係を絕つのだからどうでもいゝ。

「下へお下りよ。人が見ると厭だから。」といら〳〵しく言ッた。久代は、うなだれた顏をしたまゝ、わたしに濟まないやうに下りて行ッた。もうわたしの事は忘れて了ッてくれるがいゝ。わたしはお前さんとも何の關係もなくなるのだ。——

わたしはかう一人言ひつゝ、ぼろ〳〵と淚をこぼすのだッた。どうして泣くのか別らない。わたしはみんなから見捨てられてもしたやうな、あぢきない、がじ〳〵した寂しさに襲はれて、たゞ暗い淚が嚙みしめても〳〵止まないのだッた。

さうしてるところへ三千二が上ッて來た。

「兄さん、久代姉さんが、父うさんに叱られて泣いてるよ。」と言ひつゝ、涙に汚れたわたしの顔をじろじろ見る。

「下へ下りてろ三千。」とわたしは自分の極りの惡いのを隱すためにつれなく叱ッた。

三千二はべそ〳〵泣きながら下りて行く。どうして久代は父から叱られたのだらう。――わたしは久代がわたしのためにぐづ〳〵してゐた事について父がどうとか言ッたのではなからうかといふ氣がしてもじ〳〵する。何だか不安だけれどそれとなく下りて行ッて見るのも氣がさすやうで下りられない。――それはわたしの氣の曲りだらうか。

わたしは父の前から隱れてゐてもするやうにいつまでも、そこにぐずり〳〵してゐた。

六

わたしは父がわたしにも何か言ひはしまいかといふ氣がして、びく〳〵してゐたが、わたしには何も言はなかッた。寢がけに祖母に聞いて見たら、久代の叱られた事を祖母は知らなかッた。

「お父さんがどう言ふたか知らんけど、久代ももう子供ではないのだからもうこれからは、あれが來ても、あんまり馴れ〳〵しくしてはいけないぞの。かういふ事は二人ともよく考へてゐないとのい。」と祖母はそれとなく諭すやうな調子でかう言ッて、後は外の事に紛らせて、わたしに拵へてくれた着物の仕立が狐のところから出來て來た事を告げた。わたしは默つて寢た風を裝うてゐた。何だか、少くとも祖母だけは久代と二人の關係をうす〳〵知つてるのではないかと氣拙い心持がするのだッた。それでなけ

れぱどうして祖母がそんな事をいふのだらう。それとまではたしかには突きとめてはゐないけれど二人の容子か、又は少くとも久代のそぶりで少しは變に疑りかけてゐるといふくらゐの事だらうか。――わたしは何だかもじ〳〵して氣になッた。祖母のみが一人さういふ疑ひを持ッてゐるだけなら、もうこれからは久代なぞを戀しないつもりだから、どうでもいゝけれど、もしそんな事を父が何んとか疑ッてでもゐるとか、すッくり感附いてゐてもするのだッたら、わたしは家にはゐたゝまれない。極りが惡いから直ぐどこかへ遁げて出て了ふ。學校なんかどうでもいゝから、どんな落ぶれものにでもなッて死んで了ふ。父は久代に何を言ッたのだらう。久代に聞いて置けばよかッた。あす下女に用事をかこつけて手紙を持たせてやッて、返事を取ッて來させやうか。

わたしは何事かの凶惡を暗示するやうな、アンイージーな心持に囓まれながら、色々に心配して不愉快なだと黒い眠りに這入ッた。

朝目がさめても、それを考へ出すと不安になッて、學校なぞへ出て行く空もなかッたけれど、うちにぐず〳〵してゐると父に顏を合はさなければならないから厭である。わたしは惡事をでも包んでゐるやうな心持を見つゝ、父の見る目からこッそり遁げ拔けるやうに、こそ〳〵と裏口から出て行ッた。

學校でも、その事を考へ出すと、一人窃かに不愉快で、黒い息が腹にたまるやうにもじ〳〵された、わたしはわたしのした事を咀うた。久代との事ばかりでなく、わたしのすべてに亘ッての惡い欠點や、これまでしたいろ〳〵のよくない事までが固めて自責されるやうな心持がした。久代はあちらへ行ッて

はじめての一晩を寢て起きた今日を、どんな心に見てゐるだらう。向ふへ行けば向ふへ行ッたゞけの氣になッて、わたしのかういふ不安に浸されて不愉快な目を見てゐるのも考へずに、伯母さんと、話しがてらたゞの氣で普通の仕事をしてゐるのではないかと考へると、あの不斷の赤い帶をしてゐる姿が小憎くも目に浮んで、わたし一人がこんな思ひをしてゐるのが忌々しくもあッた。

わたしは歸りがけに廻り道をして久代の行くお針の先生の近所まで來た。何のためにわたしはこんな事をするのか自分でも別らない。丁度四つ辻になッてゐる角にわたしは立ち止まッて、茫んやり立ッてゐたけれど、その家の前を通らないで脇へ這入ッた。わたしはかうして久代を戀ひ求めて來たやうな氣もするのだッた。

歸ッて見たら父はもう役所へ出てゐる留守だッた。風邪はまだすッくり直り切らないやうだがと祖母は言ッた。

わたしは二三日の間一心に、怠ッてゐた學課を調べた。幾何も、解らないところは人に聞きに行ッたりしてこつ／＼と學校の事に心を注いだ。かうして、抜けてゐたところを取り返さうとしたと同時に、そんな事でもして久代との事についての例の不安を忘れ紛らすうとするのだッた。心を入れ代へてこつこつと勉强をすればこれまでの非行を考へたりする事もなく、自分で自分の義務を履行してゐうやうな氣にもなれるからである。

けれどもわたしは學課に飽きて、一人ごろ／＼してゐると寂しかッた。何だか自分の或物を奪はれた

やうに物淋しい。

わたしには、綺麗な着物を着て家を出て行ッた久代の面影が、最早餘程以前にわたしから永久に去ッて、再び取り返す事の出來ないものゝやうに物哀れに心に往來した。さうかと、思ふと二人が互の顏を喰ッ附けるやうにして小鳥と小鳥とのさゝやきのやうに窃かなる戀を語つてゐたのがつい昨日までの事のやうにも思はれて、甘いやうな、赤色の心持にもなる。一人二階にゐてもやはりこれまでの續きのやうに、もう少したつと、久代がお針から歸ッて、足音を盜むやうにこゝへ上ッて來て、わたしにからだを摺り寄せるやうにして、罪もない話をしかけるのが待たれるやうな氣がして來たりする。わたしはふと壁の隅の疊の合せ目から、いつか久代が採ッて來た南天の實が、ぽつちり一粒はさまつてゐるのを見出して、ペン先入の中へ入れて取つて置いた。それから二人が叔母さんの左右に立つて三人で撮した寫眞を出して見入ッたりした。そして、久代が一人で撮つた寫眞が欲しいやうに考へたりした。わたしはそんな心持のもとに久代へあてゝ手紙を書いて見た。自分の女へはじめて文といふものをやるといふ心持が樂しかつた。けれどもわたしはそれにどういふ事を書いていゝのか解らない。久代へ候體の手紙なぞをかくといふのも變なやうな氣がした。仕まひには、近松の淨瑠璃で覺えた戀の文句を書きつけて、くしや〳〵に揉んで嚙んだりした。

それでもわたしは自分に返るやうな警戒を自分に加へつゝ、さうした妄想を拂ッて幾何の問題を解きもした。

久代は出た翌る日に、夜分に女中と伴ッて一寸來たのださうだッたけれど、わたしは留守だッた。わたしは毎夜寢る時に今日て久代が行ッてから何日になるといふ事を勘定しいしいした。

久代の事を忘れてゐると、わたしは寂しかッた。日當りの少ない家の内は、どんよりして薄冷めたい。わたしは二階の日向の蔭むのを惜しむやうにして、よく一人ぼつねんとしてゐた。その日影がないやうになると、わたしは門の外まて、弱い日向を追うて出て、一人寂しく、彳んて取りとめもない事を考へ續けたりした。こんな時に母が欲しくなる、なぜとはなく欲しい。母がゐて、溫かな空氣が出來たらわたしは何を求める事もなく、しッとり勉强ばかり出來るだらうにと思ッた。

叔母からはその後何とも言うて來ない。四五日したら出て行くといふたのに出ても來ない。わたしは祖母に、母の事はどうなッたのだらうかと聞いて見た。

「だッてこんな事といふものはさう容易にはこぶものでもない。來る氣になッたといふても、向ふでも、またそれ〳〵片附ける事もあらうけのい。」と言ッてゐた。それでも祖母は母の來るのを待ッてゐた。

「わたしは何もかもすッくり讓ッて、お倉の中へでも疊をしいて一人引ッこむのい。どんなにか氣が樂にならうぞ。わたしがうろ〳〵しさへしなければお前たちに癇を起さす事もないけの。」と、母が來たさきの事を話したりしたが、

「けれどのい、お前たちも本當の母アさんのやうには行かんけ、氣拙い目をする事もあらうぞのい。何だか子供たち二人が不憫にもある。」

此やうな事も言ッて暗い目もとをした。わたしはそんな世間でいふやうな繼母と子との關係めいた事は考へに入れたくはなかッた。わたしの母になる人はそんな母ぢやない。わたしはそんな母を欲してゐるのではない。

わたしは一度、母になる人がゐるといふ平網町の通りをぶら〳〵歩いても見た。そこは、ごた〳〵した小さい商ひ屋の並んだ町で、合間〳〵に、格子戸の嵌ッたしもた家見たいな家があッた。わたしは母のゐる家を探し求めるやうに、一つ〳〵の家を見い見歩いた。けれどももとよりその家の名前を知ッてゐるのでもなければ、どれがそれだとわかる譯もない。それから本町通りへ出て吉井の前をも通ッて見た。吉井は本町の角の大きい紙屋である。店には、伯父さんが帳場に出てゐたが、用事をしてゐて、わたしの通るのを見なかッた。通りかゝッた風をして這入ッて、久代でもゐたらそれとなく會ッて來たいやうな氣もしたけれど、何だか伯母さんたちにわたしの腹を見られるやうな氣がしたので、荷車の過ぎる蔭にかくれて再び前を通ッて引き返した。それから久代の行くお針の先生の家の前をわざ〳〵通ッて歸ッて來た。丁度十五日の日なので、そこが休みである事は知ッてゐたのだッたけれど。

七

その翌る日の事である。わたしはどうしたのかひどく頭ががじ〳〵痛くて氣分が惡いので、一時間早引をして學校から歸ッて來た。天氣も變に陰欝な日で冷い暗い空が低く頭に押しかぶさるやうな厭な午後だッた。わたしは、かういふ日には祖母ばかりしかゐないどんよりした家へ歸るのは厭だから、どこ

か日向のやうな氣のするところへ歸るのならいゝのにと考へつゝ、寂しい心持をしてとぼ／＼とわたしの家のある陰氣な士族町の灰色の板垣の多いところを歸ッて來た。

　わたしは途々何からともなく久代の事を考へてゐた。母が來ない間はやはり久代がゐなければ物寂しい。久代があちらへ行ッてから六日になる。あんなにお祖母アさん／＼と言ッてゐた癖に、向ふへ行けば向ふに馴れたやうに、あれから一度しか家へは出て來ない。わたしの事も、もう相手にはして貰へないつもりで忘れて行かうとするのではあるまいか。久代がわたしの此心持を知らないのが恨めしい。わたしもあれが出て行く際に、あんなにして、あの子を厭うやうな容子を示したのが惡かッた。それにしても出て了へばもうそれきりのやうにわたしを戀し求めて來ないのが小憎らしい。此次來たら厭味をいうてやるのだ。それにしても今日は何だか久代に會ひたい。會ッてわたしをまだ戀ひ忘れ得ないといふ實證を見たい。下女にさう言ッてお祖母アさんの用事だと僞ッて呼んで來させてやらうか知ら。——

　わたしは寂しさに、こんな事を考へつゝ、家へ上ッて、祖母のゐるところを覗くと、叔母が來てゐる。祖母と二人が浮かない顏をして、火の氣もないやうな唐紙のところに悄んぼり坐ッてゐるのだッた。叔母は今着いたばかりといふやうに、まだコートをも脱がないまゝで坐つてゐる。

「お歸りなさい。服を脱いでからこちらへお出てよ。わたしは十さんに篤ッくり話して置く事があるけ。」と叔母はいつもにない機嫌の惡い顏をして言ふのだッた。祖母は困ッた事だといふやうな容子を見せて默ッてゐる。わたしは久代との事でわたしに厭味を言はうとするのではないのかと氣がさして、ど

きく〳〵しつゝ二階へ上ッて着物に着換へて下りて行ッた。どうせろくな事ではないに極ッてゐるけれど、かういふ氣分の惡い日には止してくれるといゝのだといはないばかりに、不安な心持をして坐ると、叔母は、

「十さん此間のお母アさんの話は向うから斷ッてしまはれたぞのい。わたしは今會ッて來たのぞい。」

「どうして斷ッたのだらう。」

「それがよい。お前さんが我儘で、お祖母アさんにまでつけ〳〵言ッて粗い口を聞くといふ事が、もう此近所で評判になッてゐると見えるのぞ。どこで誰に聞いたものか知らないが、十さんといふ方が少し當り前とちがッた方ださうてすけ、それではとてもわたしのやうな不束なものには氣に入るやうにお世話をする事が出來んだらうと思ひますけ、折角のお話てしたけれどどうぞ休へてもらひたいといふのぞ。」

「そんな解らない人間は來ない方が仕合せだ。わたしが來た母に對して、ひどい無理をいふとか言ふ事がどうして來ない先に解るだろう。」とわたしは叔母までが癪にさわるやうにかう言ッた。そんな下らない事があるものか。それは何か外の事の口實で言ッたのに極ッてゐる。

「そんなに近所の評判になッてるなんて、大袈裟な事からが嘘ぢやないか。」

「嘘ではあるまいよ。自分の方では分らなくても人には何が傳はッてゐるかも別らんけのい。それでわたしは言ふたのぞ。それはこれまで年の行かない内には少々我儘な事も言ひ、癇癪も出して物を投げつけたりしたやうな事もないではないけども、もういゝ加減な年にもなるものですけ、物の譯も解ッて來

たし、只今てはそんな事は決してありァしません。それに性來情合には脆い子てすけ、あなたの出方一つては、あの子が一番あなたの味方をしますのい。もうとくにから母を〳〵と言ッてるのてすし。——まァ一つわたしにだまされたと思ッて行ッて見てはくれまいかッて、事を別けて話したんだけどものい。」

「だから、わたしがどうすればいゝといふの？」

「（どうすればいゝ）ぢやない。人にそんなに噂をされないやうに、素直な子にならないぢやお前さんが學業の方でどんなに豪いものになッても人が信用してくれないけのい。もう來ないと言ふなら來て貰はんても、またいゝ人を探せばいゝ譯だけ、今度の事をとやかくいふのぢやないけれど、一體てよく心を入れがへてお祖母ァさんをても大事におしてないと、他人の評はどうてもいゝとしても、さういふ行狀てはお前さんが後々立派な人間になれないけのい。」と叔母は沈んだぐち〳〵しい事をいふ。そんな理屈はくだ〳〵言はんてもいゝ。解ッてゐる。

「それァ、お前さんの事だけて斷ッたといふのてもないだらうよ。他に氣に入らない點もあるからの話だらうけれどのい。」

「それ御覽。」とわたしは心に言ッた。

「けれど、お前さんの事をそんなに言ッたのは本當ぞの。どうも先々、年ても寄ッてから子供にひどくされるやうても何てすけと言ッて他所の話をして、暗にわたしもそんな目にても會うやうては困るから

と言はないばかりに言ふたのぞ。」
「それはかうした厄介な年寄もゐるし、繼子が二人といふのでは一寸したものは二の足を踏むけのい。」
と祖母はわたし一人を惡くするのを消すやうに、
「この子は近頃はいゝ子になッたのぢやけそんなに後ろ指をさゝれる事もないけれどのい。」
とわたしを辯護するのだ。
「まアそれだけの事い。わたしの言ふた事をよく忘れんて下さいよのい。」と叔母はもうさういふ不愉快な事は忘れさせやうとするやうに氣を換へて、
「それからすまないけれど、一寸そこらへ行ッて三ッちやんを探して來て下さいよ。下女が今吉井に行ッてるけ。――三ッちやんを病院へつれてッて來やうと思ふのい。此間から喉が膨れて物を食べるに痛くて困ッてるさうぢやとのい？。」
「わたしは知りません？。」
「ぢやアお母アさま、三ッちやんの着換へを出しといて下さいましのい。」といふ。
わたしは氣分の惡いのを怺へて外へ探しに出た。
わたしは母の話が破れて了ッたのが不平て堪らない。どこが惡くて、一旦傾いてゐたのをまた來ないと言ひ出したのか知らないけれど、わたしの家がそんなに來るに足らない家だとも考へられない。わたしの事を又聞きしてそれてよして了ッたといふのなら餘りに上ッすべりな女である。そんな女に來ても

らはなくてもいゝけれど、わたしが想ひ書いてゐた期待がすッくり壞されて了ッたのが恨めしい。わたしがその母なる人に被せてゐた幻影がすッくり剝げて、物の解らないねち〳〵しいやうな一人もの丶女を想ひ浮べなければならなくなッたのが忌々しい。父は歸ッて此話を聞いて何といふ心持がするだらう。あの暗い寂しい父が氣の毒である。それもわたしの素行が一部分、又は全部の障碍したといふのであッて見ればわたしが父に濟まないやうな氣がする。もしわたしがゐれば母が來ないといふなら、わたしは家を出てもいゝ。家を出て了ッてどんなものになッてもいゝから母を入れたい。みんなのために母を入れたい。——

かういふ調子だッたらいつ母が出來るのだらう。とうとだれも來ないで、その内に祖母でも死んだとしたら家はどうなるだらう。——わたしは生母の死んだのが恨めしくなッた。あの青ざめ瘠せて息を引いた母の面影が、恨み多く目に浮ぶ。——わたしは步き〳〵ぼろ〳〵と淚を流してゐた。

わたしは淚を拭き〳〵、三千のよく行ッて遊ぶ家を二三軒廻ッて見たがゐない、と、或小さい家のぼろけた壁の出窓から女の子が顏を出して、

「三千二さんは、あすこの西洋人の家の裏の方で遊んでゐなしたい。」と敎へてくれる。わたしは、當分母も來さうにない、不自由な寂しい日々を、これからまだどのくらゐ祖母と二人で見る事かと思ひつゝ、異人の家の裏口へ這入ッた。

わたしはこんな事になるくらゐなら久代をよそに出させるのではなかッたやうな氣がして來た。久代

が戀しい、寂しいから戀しい。もう叔母は久代をわたしの家へは歸させないつもりだらうか。祖母が、二人とも、もう子供ではないから、馴れ〳〵しくしては困ると言ッたのが頭に浮んで來る。事によッたら叔母も二人の關係を嗅んで、母が來るといふのを機にして久代と二人を分けたのではあるまいかといふ氣がして來た。さうなのぢやないだらうか。もしさうだッたら叔母に極りが惡い。極りがわるいけれど、今のわたしの心持には、さうだッたら一層久代が戀しいやうな氣がする。わたしは讀み物の中のわたしだッたら、これから久代をつれ出して二人で手を取ッて遁げて行きたい。さうして二人で死んで了ッたら二人を別けはなした叔母や祖母がどんなにさうした事を悔いるだらう。わたしは久代が戀しい。久代が取り返したい。――

此やうな事を考へつゝ、異人の家の裏口の桐の木の寒く立ち重なつた間を拔けて、よく子供等が行ッて飛び廻る、家の後庭の芝生のところへ行ッて見ると、だれ一人もゐない。赤黑く塗ッた小汚い西洋造りの建物の屋根から出るストーブの烟がどんよりした、蔭のやうな空氣の中に淋しく立ち出てゐるだけで、薄ら寒くひッそりとしてゐる。

と見ると建物の後ろの上り口の石段の向うに三千二が隱れたやうにしてたッた一人で悄んぼりと立ッてゐるのだッた。

「三千、一人で何をしてる。寒いのに」と言ひつゝ近附くと三千二は壁の方を向いて立ッて、しく〳〵泣いてゐる。

「どうしたのだ三千、何を泣いてゐるのだ。」

と聞くと、三千二は言葉をかけられて一層悲しくなッたやうに大きい涙を浮べて泣くのだ。

「もう行かう、さ。――みんなに置いてかれたのか？」といへばかぶりを振る。

「一人で遊んでゐたんか。」といへどやはりかぶりを振ッて、

「こゝが痛い。」喉を押へて泣いじやくる。

「だからこれからお醫者のところへ行くんだからお歸りよ。――お叔母さんがつれて行くんだといの。久代姉さんのお母アさんが來てゐなすのぞ。さうすると直ぐ直るけのい。」

とわたしは三千二のエープロンで涙を拭いてやッて、先に立ッて歸りかけると三千二は途中からまた引き返してそこの建物の石段を上りかけるのだ。

「何をするの三千。」と見てゐると三千二はその一番上の段から、赤い紙切れのやうなものを取ッて下りて來る。忘れて置いたのを取りに上ッたらしい。

見ると、それは名刺入のやうに二つ折になッたもので赤いのは緋縮緬を貼ッたのである。何を持ッてるのだと見ると、それは女の懐中鏡であッた。

「どこから持ッて來たこんなものぞ。」

「久代姉さんに貰ッたの。」と濟ましてゐる。

「こんなものは三千などの玩弄物にするものぢやない。姉さんの大事なものぢやのに。」とわたしはそ

れを手に取ッた。久代がこんなものを持ッてゐたのは知らなんだけれど、三千二に聞きわけなくせかまれて貸して置くつもりてくれたのらしい。

「三千、これを兄さんにおくれよ。」と言ふと三千二は厭々さうに首肯く。

「ね、また兄さんがいゝものをやるから。」

とわたしは歩きながら言ッた。

「上げる。」と惜しさうに言ふ。

「そしてのい、三千、お前はいゝ子だから兄さんにこれをくれた事を、お祖母アさんや叔母さんに言ふのぢやないぞの。それから父うさんにも。久代姉さんにも。――いゝかい？」と言ふと三千二はわたしの意を解しない目をしてじろ／＼見上げつゝ、肯ふのだッた。

三千二はとぼ／＼先に歩いて家の門を這入る。わたしはその鏡を懐へ入れたまゝ門口に殘ッて佇んだ。何だか叔母に顔を合はすのが氣拙くなッた。わたしは叔母が久代をわざと遠ざけたのではないといふ事を確めるまでは――二人の事を何んにも知りはしないといふ事が解るまでは家へ這入り難いやうな氣がして、もぢ／＼そこに佇んでゐたが、いつしかその儘とぼ／＼と家を後に向うへ歩いて行くのだッた。

わたしはかうしてどこへ向けて行くつもりなのか自分にも解らない。たゞ、久代を戀ひつゝ懐ろに久代の鏡を隠しつゝ、人通りのない町筋を寂しく歩いて行く自分であるだけは事實だッた。



かのやうに

鷗外

朝小間使の雪が火鉢に火を入れに來た時、奥さんが不安らしい顔をして、

「秀麿の部屋にはゆうべも又電氣が附いてゐたね」と云つた。

「おや。さやうでございましたか。先つき瓦斯煖爐に火を附けにまゐりました時は、明りはお消しになつて、お床の中で烟草を召し上がつて入らつしやいました。」

雪は此返事をしながら、戸を開けて自分が這入つた時、大きい葉巻の火が、暗い部屋の、しんとしてゐる中で、ぼうつと明るくなつては、又微かになつてゐたことを思ひ出して、折々あることではあるが、今朝もはつと思つて、「おや」と口に出さうであつたのを呑み込んだ、その瞬間の事を思ひ浮べてゐた。

「さうかい」と云つて、奥さんは雪が火を活けて、大きい枠火鉢の中の、眞

つ白い灰を綺麗に、盛り上げたやうにして置いて、起つて行くのを、矢張不安な顔をして、見送つてゐた。邸では瓦斯が勝手にまで使つてあるのに、奥さんは逆上せると云つて、炭火に當つてゐるのである。

電燈は邸ではどの寐間にも夜どほし附いてゐる。併し秀麿は寢る時必ず消して寢る習慣を持つてゐるので、それが附いてゐれば、又徹夜して本を讀んでゐたと云ふことが分かる。それで奥さんは手水に起きる度に、廊下から見て、秀麿のゐる洋室の窓の隙から、火の光の漏れるのを氣にしてゐるのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

秀麿は學習院から文科大學に這入つて、歴史科で立派に卒業した。卒業論文には、國史は自分が畢生の事業として研究する積りでゐるのだから、苟しくも筆を着けたくないと云つて、古代印度史の中から「迦膩色迦王と佛典結集」と云ふ題を選んだ。これは阿輸迦王の事はこれ迄問題になつてゐて、此王の事がまだ研究してなかつたからである。併しこれまで特別にさう云ふ方面の研究をしてゐたのでないから、秀麿は一歩一歩非常な困難に撞着して、どうしてもこれはサンスクリットを丸で知らないでは、正確な判斷は下されないと考へて、急に高楠博士の所へ駈け附けて、梵語研究の手ほどきをして貰つた。併しから云ふ學問はなかなか急拵へに出來る筈のものでないから、少しづゝ分かつて來れば來る程、困難は增すばかりであつた。それでも屈せずに、選んだ問題だけは、どうにかかうにか解決を附けた。自分ではひどく不滿足に思つてゐるが、率直な、一切の修飾を卻けた秀麿の記述は、これまでの卒業論文には餘り類がないと云ふことであつた。

丁度此卒業論文問題の起つた頃からである。秀麿は別に病氣はないのに、元氣がなくなつて、顔色が蒼く、目が異樣に赫いて、これまでも多く人に交際をしない男が、一層社交に遠ざかつて來た。五條家では、奧さんを始として、ひどく心配して、醫者に見せようとしたが、「わたくしは病氣なんぞはありません」と云つて、どうしても聽かない。奧さんは内證で青山博士が來た時尋ねて見た。青山博士は意外な事を問はれたと云ふやうな顔をして、かう云つた。

「秀麿さんですか。診察しなくちや、なんとも云はれませんね。ふん。さうですか。病氣はないから、醫者には見せないと云ふのでしたつけ。さうかも知れません。わたくしなんぞは學生を大勢見てゐるのですが、少し物の出來る奴が卒業する前後には、皆あんな顔をしてゐますよ。毎年卒業式の時、側で見てゐますが、お時計を頂戴しに出て來る優等生は、大抵秀麿さんのやうな顔をしてゐて、卒倒でもしなければ好いと思ふ位です。も少しで神經衰弱になると云ふ所で、ならずに濟んでゐるのです。卒業さへしてしまへば直ります。」

奧さんもなる程さうかと思つて、強ひて心配を押さへ附けて、今に直るだらう、今に直るだらうと、自分で自分に暗示を與へるやうに努めてゐた。秀麿が目の前にゐない時は、青山博士の言つた事を、一句一句繰り返して味つて見て、「なる程さうだ、なんの秀麿に病氣があるものか、大丈夫だ、今に直る」と思つて見る。そこへ秀麿が蒼い顔をして出て來て、何か上の空で言つて、跡は默り込んでしまふ。こつちから何か話し掛けると、實の入つてゐないやうな、責を塞ぐやうな返事を、詞の調子だけ優しくし

てする。なんだか、こつちの詞は、子供が銅像に吹矢を射掛けたやうに、皮膚から彈き戻されてしまふやうな心持がする。それを見ると、切角青山博士の詞を基礎にして築き上げた樓閣が、覺束なくぐらついて來るので、奥さんは又心配をし出すのであつた。

*　*　*　*　*　*　*　*

秀麿は卒業後直に洋行した。秀麿と大した點數の懸隔もなくて、優等生として銀時計を頂戴した同科の新學士は、文部省から派遣せられる筈だのに、現にヨオロッパにゐる一人が歸らなくては、經費が出ないので、それを待つてゐるうちに、秀麿の方は當主の五條子爵が先へ立たせてしまつた。子爵は財政が割合に豊かなので、嫡子に外國で學生並の生活をさせる位の事には、さ程困難を感ぜないからである。

洋行すると云ふことになつてから、餘程元氣附いて來た秀麿が、途中からよこした手紙も、ベルリンに着いてからのも、總ての周圍の物に興味を持つてゐて書いたものらしく見えた。印度の港で魚のやうに波の底に潜つて、銀錢を拾ふ黑ん坊の子供の事や、ポルトセエドで上陸して見たと云ふ、ステレオチイプな笑顔の女藝人が種々の樂器を奏する國際的團體の事や、マルセイユで始て西洋の町を散歩して、噓と云ふものを衝かぬ店で、掛値と云ふもののない品物を買つて、それを持つて歸らうとして、紳士がそんな物をぶら下げてお歩きにならなくても、こちらからお宿へ届けると云はれ、賴んで置いて歸つて見ると、品物が先へ届いてゐた事や、それからパリイに滯在してゐて、或る同族の若殿に案內せられてオペラを見に行つた時、フォアイエエで立派な貴夫人が來て何か云ふと、若殿がつつけんどんに、わた

し共はフランス語は話しませんと云つて置いて、自分が呆れた顔をしたのを見て女に聞えたかと思ふ程大きい聲をして、「Tout ce qui brille, n'est pas or」と云つたので、始てなる程と悟つた事や、それからベルリンに着いた當時の印象を瑣細な事まで書いてあつて、子爵夫婦を面白がらせた。子爵は奥さんに三省堂の世界地圖を一枚買つて渡して、電報や手紙が來る度に、鉛筆て點を打つたり線を引いたりして、秀麿はこゝに着いたのだ、こゝを通つてゐるのだと言つて聞せた。

ヨオロッパてはベルリンに三年ゐた。その三年目がエエリヒ・シユミットの總長の下に、大學の三百年祭をする年に當つたので、秀麿も錫の嵌まつた松明を手に持つて、松明行列の仲間に這入つて、ベルリンの町を練つて歩いた。大學にゐる間、秀麿は此期にはこれ〳〵の講義を聽くと云ふことを、精しく子爵の所へ知らせてよこしたが、その中にはイタリア復興時代だとか、宗教革新の起原だとか云ふやうな、歴史その物の講義と、史的研究の原理と云ふやうな、抽象的な史學の講義とがあるかと思ふと、民族心理學やら神話成立やらがある。プラグマチスムスの哲學史上の地位と云ふのがある。或る助教授の受持つてゐるフリイドリヒ・ヘッベルと云ふ文藝史方面のものがある。ずつと飛び離れて、神學科の寺院史や教義史がある。學期ごとにこんな風て、專門の學問に手を出した事のない子爵には、どんな物だか見當の附かぬ學科さへあるが、兎に角隨分雜駁な學問のしやうをしてゐるらしいと云ふ事丈は判斷が出來た。併し子爵はそれを苦にもしない。息子を大學に入れたり、洋行をさせたりしたのは、何も專門の職業がさせたいからの事てはない。追つて家督相續をさせた後に、恐多いが皇室の藩屏になつて、身分相

應な働きをして行くのに、基礎になる見識があつてくれれば好い。その爲めに普通教育より一段上の教育を受けさせて置かうとした。だから本人の氣の向く學科を、勝手に選んでさせて置いて好いと思つてゐるのであつた。

ベルリンにゐる間、秀麿が學者の噂をしてよこした中に、エエリヒ・シユミツトの文才や辯説も度々褒めてあつたが、それよりも神學者オツトオ・ハルナツクの事業や勢力がどんなものだと云ふことを、繰り返してお父うさんに書いてよこしたのが、どうも特別な意味のある事らしく、歸つて顔を見て、土産話にするのが待ち遠いので、手紙でお父うさんに飲み込ませたいとでも云ふやうな熱心が文章の間に見えてゐた。殊に大學の三百年祭の事を知らせてよこした時なんぞは、秀麿はハルナツクをこの目覺ましい祭の中心人物として書いて、ヰルヘルム第二世とハルナツクとの君臣の間柄は、人主が學者を任用し、學者が献身的態度を以て學術界に貢献しながら、同時に君國の用をなすと云ふ方面から見ると、模範的だと云つて、ハルナツクが事業の根抵をはつきりさせる爲めに、とう／＼兄テオドジウスの事にまで溯つて、精しく新教神學發展の跡を辿つて述べてゐた。自分の專門だと云つてゐる歴史の事に就いても、こんなに力を入れて書いてよこしたことはないのに、どうしてハルナツクの事ばかりを、特別に言つてよこすのだらうと子爵は不審に思つて、此手紙だけ念を入れて、度々讀み返して見た。そしてその手紙の要點を掴まへようとして、おほよそこんな意味の事が書いてあるやうに判斷した。政治は多數を相手にした爲事である。それだから政治をするには、今でも多數を動かしてゐる宗教に重きを置かなくては

ならない。ドイツは内治の上では、全く宗教を異にしてゐる北と南とを擣きくるめて、人心の歸嚮を繰つて行かなくてはならないし、外交の上でも、いかに勢力を失墜してゐるとは云へ、まだ深い根柢を持つてゐるロオマ法王を計算の外に置くことは出來ない。それだからドイツの政治は、舊教の南ドイツを逆はないやうに抑へてゐて、北ドイツの新教の精神で、文化の進歩を謀つて行かなくてはならない。それには君主が宗教上の、しつかりした基礎を持つてゐなくてはならない。その基礎が新教神學に置いてある。その新教神學を現に代表してゐる學者はハルナックである。さう云ふ意味のある地位に置かれたハルナックが、少しでも政治の都合の好いやうに、神學上の意見を曲げてゐるかと云ふに、そんな事はしてゐない。君主もそんな事をさせようとはしてゐない。そこにドイツの強みがある。それでドイツは世界に羽をのして、息張つてゐることが出來る。それで今のやうな、社會民政黨の跋扈してゐる時代になつても、ヰルヘルム第二世は護衛兵も連れずに、侍從武官と自働車に相乘をして、ぷつぷと喇叭を吹かせて、ベルリン中を駈け歩いて、出し拔に展覽會を見物しに行つたり、店へ買物をしに行つたりすることが出來るのである。ロシアとでも比べて見るが好い。グレシア正教の寺院を沈滯の儘に委せて、上邊を眞綿にくるむやうにして、そつとして置いて、黔首を愚にするとでも云ひたい政治をしてゐる。その愚にせられた黔首が少しでも目を醒ますと、極端な無政府主義者になる。だからツアアルは平服を着た警察官が垣を結つたやうに立つてゐる間でなくては歩かれないのである。一體宗教を信ずるには神學はいらない。ドイツでも、神學を修めるのは、牧師になる爲めで、ちよつと思ふと、宗教界に籍を置か

ないものには、神學は不用なやうに見える。併し學問などをしない、智力の發展してゐない多數に不用なのである。學問をしたものには、それが有用になつて來る。原來學問をしたものには、宗教家の謂ふ「信仰」は無い。さう云ふ人、即ち教育があつて、信仰のない人に、單に神を尊敬しろ、福音を尊敬しろと云つても、それは出來ない。そこで信仰しないと同時に、宗教の必要をも認めなくなる。さう云ふ人は危險思想家である。中には實際は危險思想家になつてゐながら、信仰のないのに、信仰のある眞似をしたり、宗教の必要を認めないのに、認めてゐる眞似をしてゐる。實際この眞似をしてゐる人は隨分多い。そこでドイツの新教神學のやうな、教義や寺院の歷史をしつかり調べたものが出來てゐると、教育のあるものは、志さへあれば、專門家の綺麗に洗ひ上げた、滓のこびり付いてゐない教義をも覗いて見ることが出來る。それを覗いて見ると、信仰はしないまでも、宗教の必要丈は認めるやうになる。そこで穩健な思想家が出來る。ドイツにはかう云ふ立脚地を有してゐる人の數がなか〳〵多い。ドイツの強みが神學に基づいてゐると云ふのは、こゝにある。秀麿はかう云ふ意味で、ハルナックの人物を稱讃してゐるらしく、子爵は判斷したのである。

西洋事情や輿地誌畧の盛んに行はれてゐた時代に人となつて、翻譯書で當用を辨ずることが出來、華族仲間で口が利かれる程度に、自分を養成した丈の子爵は、精神上の事には、朱子の註に據て、論語を講釋するのを聞いたより外、なんの智識もないのだが、頭の好い人なので、これ丈の判斷は出來て、さて内々自ら省みて見た。倅の手紙にある宗教と云ふのはクリスト教で、神と云ふのはクリスト教の神で

ある。そんな物は自分とは全く沒交渉である。自分の家には昔から菩提所に定まつてゐる寺があつた。それを維新の時、先代が殆ど縁を切つたやうにして、家の葬祭を神官に任せてしまつた。それからは佛と云ふものとも、全く沒交渉になつて、今は祖先の神靈と云ふものより外、認めてゐない。現に邸内にも祖先を祭つた神社丈はあつて、鄭重な祭をしてゐる。ところが、その祖先の神靈が存在してゐると、自分は信じてゐるだらうか。祭をする度に、祭るに在すが如くすと云ふ論語の句が頭に浮ぶ。併しそれは祖先が存在してゐられるやうに思つて、お祭をしなくてはならないと云ふ意味で、自分を顧みて見るに、實際存在してゐられると思ふのではないらしい。ゐられるやうに思ふのでもないかも知れない。ゐられるやうに思はうと努力するに過ぎない位ではあるまいか。さうして見ると、倅の謂ふ、信仰がなくて、宗敎の必要丈を認めると云ふ人の部類に、自分は這入つてゐるものと見える。いや／＼。さうではない。倅の謂ふのは、神學でも覗いて見て、これ丈の敎義は、信仰しないまでも、必要を認めなくてはならぬと、理性で判斷した上で認めることである。自分は神道の書物なぞを覗いて見たことはない。又自分の覗いて見られるやうな書物があるか、どうだか、それさへ知らずにゐる。そんならと云つて、敎育のない、信仰のある人が、直覺的に神靈の存在を信じて、その間になんの疑をも挿まないのとも違ふから、自分の祭をしてゐるのは形式丈で、內容がない。よしや、在すが如く思はうと努力してゐても、それは空虛な努力である。いや／＼。空虛な努力と云ふものはありやうがない。そんな事は不可能である。さうして見ると、敎育のない人の信仰が遺傳して、微かに殘つてゐるとでも思はなくてはなるまい。

併しこれは倅の考へるやうに、敎育が信仰を破壞すると云ふことを認めた上の話である。果してさうであらうか。どうもさうらしい。今の敎育を受けて、神話と歷史とを一つにして考へてゐることは出來ない。世界がどうして出來て、どうして發展したか、人類がどうして出來て、どうして發展したかと云ふことを、學問に手を出せば、どんな淺い學問の爲方をしても、何かの端々で考へさせられる。そしてその考へる事は、神話を事實として見させては置かない。神話と歷史とをはつきり考へ分けると同時に、先祖その外の神靈の存在は疑問になつて來るのである。一體世間の人はこんな問題をどう考へてゐるだらう。昔の人が眞實だと思つてゐた、神靈の存在を、今の人が嘘だと思つてゐるのを、世間の人は當り前だとして、平氣でゐるのではあるまいか。隨つてあらゆる祭やなんぞが皆内容のない形式になつてしまつてゐるのも、同じく當り前だとしてゐるのではあるまいか。又子供に神話を歷史として敎へるのも、同じく當り前だとしてゐるのではあるまいか。そして誰も誰も、自分は神話と歷史とをはつきり別にして考へてゐながら、それをわざと擣き交ぜて子供に敎へて、怪まずにゐるのではあるまいか。自分は神靈の存在なんぞは少しも信仰せずに、唯俗に從つて聊復爾り位の考で、糊塗して遣つてゐて、その風俗、即ち昔神靈の存在を信じた世に出來て、今神靈の存在を信ぜない世に殘つてゐる風俗が、いつまで現狀を維持してゐようが、いつになつたら滅亡してしまはうが、そんな事には頓着しないのではあるまいか。自分が信ぜない事を、信じてゐるらしく行つて、虛僞だと思つて疚しがりもせず、それを子供に敎へて、子供の心理狀態がどうならうと云ふことさへ考へても見ないのではあるまいか。倅は信仰はなくても、

宗教の必要を認めると云ふことを言つてゐる。その必要を認めなくてはならないと云ふこと、その必要を認める必要を、世間の人は思つても見ないから、どうしたら神話を歴史だと思はず、神靈の存在を信ぜずに、宗教の必要が現在に於いて認めてゐられるか、未來に於いて認めて行かれるかと云ふことなんぞを思つて見やうもなく、一切無頓着でゐるのではあるまいか。どうも世間の敎育を受けた人の多數は、こんな物ではないかと推察せられる。無論此多數の外に立つて、現今の頽勢を挽回しようとしてゐる人はある。さう云ふ人は、倅の謂ふ、單に神を信仰しろ、福音を信仰しろと云ふ類である。又それに雷同してゐる人はある。それは倅の謂ふ、眞似をしてゐる人である。これが賴みにならうか。更に反對の方面を見ると、信仰もなくしてしまひ、宗教の必要をも認めなくなつてしまつて、それを正直に告白してゐる人のあることも、或る種類の著述に徵して知ることが出來る。倅はさう云ふ人は危險思想家だと云つてゐるが、危險思想家を嗅ぎ出すことに骨を折つてゐる人も、こつちでは存外そこまでは氣が附いてゐないらしい。實際こつちでは、治安妨害とか、風俗壞亂とか云ふ名目の下に、そんな人を羅致した實例を見たことがない。

五條子爵は秀麿の手紙を讀んでから、自己を反省したり、世間を見渡したりして、ざつとこれ丈の事を考へた。併しそれに就いて倅と往復を重ねた所で、自分の滿足する丈の解決が出來さうにもなく、倅の歸つて來る時期も近づいてゐるので、それまで待つ氣になつて、返信は別に宗教問題なんぞに立ち入らずに、只委細承知した、どうぞなるべく穩健な思想を養つて、國家の用に立つ人物になつて歸つてく

れとしか云つて遣らなかつた。そこて秀麿の方ても、お父うさんにどれ丈自分の言つた事が分かつたか知らずにゐた。

秀麿は平生丁度その時思つてゐる事を、人に話して見たり、手紙て言つて遣つて見たりするが、それをその人に是非十分飲み込ませようともせず、人を自說に轉ぜさせよう、服させようともしない。それよりは話す間、手紙を書く間に、自分て自分の思想をはつきりさせて見て、そこに滿足を感ずる。そして自分の思想は、又新しい刺戟を受けて、別な方面へ移つて行く。だからあの時子爵が精しい返事を遣つたところて、秀麿はもう同じ問題の上て、お父うさんの滿足するやうな事を言つてはよこさなかつたかも知れない。

* * * * * * * * *

洋行をさせる時健康を氣遣つた秀麿が、旅に出ると元氣になつたらしく、筆まめに書いてよこす手紙にも生々した樣子が見え、ドイツて秀麿と親しくしたと云つて、歸つてから尋ねて來る同族の人も、秀麿は隨分勉强をしてゐるが、玉も衝けば氷滑りもすると云ふ風て、上流の人を相手にして開いてゐる、某夫人のパンジオナアトては、若い男女の寄宿人が、芝居の初興行をでも見に行くとき、キコント五條が一しよてなくては面白くないと云ふ程だと話して聞せるので、子爵夫婦は喜んで、早く丈夫な男になつて歸つて來るのを見たいと思つてゐた。

秀麿は去年の暮に、書物をむやみに澤山持つて、歸つて來た。洋行前にはまだどこやら少年らしい所

のあつたのが、三年の間にすつかり男らしくなつて、血色も好くなり、肉も少し附いてゐる。併し待ち構へてゐた奥さんが氣を附けて樣子を見ると、どうも物の言振が面白くないやうに思はれた。それは大學を卒業した頃から、西洋へ立つ時まで、何か物を案じてゐて、好い加減に人に應對してゐると云ふやうな、沈默勝な會話振が、定めてすつかり直つて歸つたことと思つてゐたのに、歸つた今も矢張立つ前と同じやうに思はれたのである。

新橋へ着いた日の事であつた。出迎をした親類や心安い人の中には、邸まで附いて來たのもあつて、五條家ではさう云ふ人達に、一寸した肴で酒を出した。それが濟んだ跡で、子爵と秀麿との間に、こんな對話があつた。

子爵は袴を着けて据わつて、刻烟草を烟管で飮んでゐたが、痩せた顏の目の縁に、皺を澤山寄せて、嬉しげに息子をぢつと見て、只一言「どうだ」と云つた。

「はい」と父の顏を見返しながら秀麿は云つたが、傍で見てゐる奥さんには、その立派な洋服姿が、どうも先つき客の前で勸めてゐた時と變らないやうに、少しも寛いだ樣子がないやうに思はれて、それが氣に掛かつた。

子爵は息子がまだ何か云ふだらうと思つて、暫く默つてゐたが、それ切りなんとも云はないので、詞を續いだ。「書物を澤山持つて歸つたさうだね。」

「こつちで爲事をするのに差支へないやうにと思つて、中には讀んで見る方の本でない、物を捜し出す

方の本も買つて蹄つたものですから、嵩が大きくなりました。」
「ふん。早く爲事に掛かりたからうなあ。」
秀麿は少し返事に躊躇するらしく見えた。「それは舟の中でも色々考へて見ましたが、どうも當分手が着けられさうもないのです。」から云つて、何か考へるやうな顏をしてゐる。
「急ぐ事はない。お前のは賣らなくてはならんと云ふのでもなし、學位が欲しいと云ふのでもないからな。」一旦から は云つたが、子爵は更に「學位は貰つても惡くはないが」と言ひ足して笑つた。
こゝまで傍聽してゐた奥さんが、待ち兼ねたやうに、いろ〳〵な話をし掛けると、秀麿は優しく受答をしてゐた。此時奥さんは、どうも秀麿の話は氣乘がしてゐない、附合に物を言つてゐるやうだと云ふ第一印象を受けたのであつた。
それで秀麿が座を立つた跡で、奥さんが子爵に言つた。「體は大層好くなりましたが、なんだかから控へ目に、考へ〳〵物を言ふやうではございませんか。」
「それは大人になつたからだ。男と云ふものは、奥さんのやうに口から出任せに物を言つては行けないのだ。」
「まあ。」奥さんは目を睜つた。四十代が半分過ぎてゐるのに、まだぱつちりした、可哀らしい目をしてゐる女である。
「おこつては行けない。」

「おこりなんかいたしませんわ」と云つて、奥さんはちよいと笑つたが、秀麿の返事より、此笑の方が附合らしかつた。

* * * * * * * * *

その時からもう一年近く立つてゐる。久し振の新年も迎へた。秀麿は位階があるので、お父う様程忙しくはないが、幾分か儀式らしい事もしなくてはならぬ。新調せられた禮服を著て、不精らしい顔をせずに、それを濟ませた。「西洋のお正月はどんなだつたえ」とお母あ様が問ふと、秀麿は愛想好く笑ふ。「一向駄目ですね。學生は料理屋へ大晦日の晩から行つてゐまして、ボオレと云つて、シヤンパンに葡萄酒に砂糖に炭酸水と云ふやうに、いろ〳〵交ぜて溫めて、レモンを輪切にして入れた酒を拵へて、夜なかになるのを待つてゐます。そして十二時の時計が鳴り始めると同時に、さあ新年だと云ふので、その酒を注いだ杯をてんでに持つて、こつ〳〵打ち附けて、プロジット・ノイヤアルと大聲で呼んで飲むのです。それからふざけながら町を歩いて歸ると、元日には寢てゐて、午まで起きはしません。町でも家は大抵戸を締めて、ひつそりしてゐます。まあ、クリスマスにお祭らしい事はしてしまつて、新年の方はお留守になつてゐるやうなわけです」と云ふ。「でもお上のお儀式はあるだらうね。」「それはございますさうです。拜賀が午後二時だとか云ふことでした。」こんな風に、何事につけても人が問へば、ヨオロツパの話もするが、自分から進んで話すことはない。

二三月の一番寒い頃も過ぎた。お母あ様が「向うはこんな事ではあるまいね」と尋ねて見た。「それは

グラットアイスと云つて、寒い盛りに一寸温い晩があつて、積つた雪が上融をして、それが朝氷つてゐることがあります。木の枝は硝子で包んだやうになつてゐます。ベルリンのウンテル・デン・リンデンと云ふ大通りの人道が、少し凸凹のある鏡のやうになつてゐて、滑つて歩くことが出來ないので、人足が沙を入れた籠を腋に抱へて、蒔いて歩いてゐます。さう云ふ時が一番寒いのですが、それでもロシアのやうに、町を歩いてゐて鼻が腐るやうな事はありません。煖爐のない家もないし、毛皮を着ない人もない位ですから、寒さが體には徹へません。こちらでは夏座敷に住んで、夏の支度をして、寒がつてゐるやうなものですね。」秀麿はこんな話をした。

櫻の咲く春も過ぎた。お母あ樣に櫻の事を問はれて、秀麿は云つた。「ドイツのやうな寒い國では、春が一どきに來て、何の花も一しよに咲きます。美しい五月と云ふ詞があります。櫻の花もないことはありませんが、あつちの人は櫻と云ふ木は櫻ん坊のなる木だとばかり思つてゐますから、花見はいたしません。ベルリンから半道ばかりの、ストララウと云ふ村に、スプレエ川の岸で、櫻の澤山植ゑてある所があります。そこへ日本から行つてゐる學生が揃つて、花見に行つたことがありましたよ。絨緞を織る工場の女工なんぞが通り掛かつて、あの人達は木の下で何をしてゐるのだらうと云つて、驚いて見てゐました。」

暑い夏も過ぎた。秀麿はお母あ樣に、「ベルリンではこんな日にどうしてゐるの」と問はれて、暫く頭を傾けてゐたが、とう／＼笑ひながら、かう云つた。「一番詰まらない季節ですね。誰も彼も旅行してし

まひます。若い娘なんぞがスキツツルに行つて、高い山に登ります。跡に殘つてゐる人は爲方がないので、公園内の飲食店で催す演奏會へでも往つて、夜なかまで涼みます。大ぶ北極が近くなつてゐる國ですから、そんなにして遊んで歸つて、夜なかを過ぎて寢ようとすると、もう窓が明るくなり掛かつてゐます。」

彼此するうちに秋になつた。「ヨオロツパでは寒さが早く來ますから、こんな秋日和の味は味ふことが出來ませんね」と、秀麿は云つて、お母あ樣に對して、ちよつと愉快げな笑顏をして見せる。大抵こんな話をするのは食事の時位で、その外の時間には、秀麿は自分の居間になつてゐる洋室に籠つてゐる。西洋から持つて來た書物が多いので、本箱なんぞでは間に合はなくなつて、此一間丈壁に悉く棚を取り附けさせて、それへ一ばい書物を詰め込んだ。棚の前には薄い綠色の幕を引かせたので、一種の裝飾にはなつたが、壁がこれまでの倍以上の厚さになつたと同じわけだから、室内が餘程暗くなつて、それと同時に、一間が外より物音の聞えない、しんとした所になつてしまつた。小春の空が快く晴れて、誰も彼も出歩く頃になつても、秀麿はこのしんとした所に籠つて、卓の傍を離れずに本を讀んでゐる。窓の明りが左手から斜に差し込んで、綠の羅紗の張つてある上を半分明るくしてゐる卓である。

* * * * * * * *

此秋は暖い／＼と云つてゐるうちに、稀に降る雨がいつか時雨めいて來て、もう二三日前から、秀麿の部屋のフウベン形の瓦斯煖爐にも、小間使の雪が來て點火することになつてゐる。

朝起きて、庭の方へ築き出してある小さいエランダへ出て見ると、庭には一面に、大きい黄いろい梧桐の葉と、小さい赤い山もみぢの葉とが散らばつて、エランダから庭へ降りる石段の上まで、殆ど隙間もなく彩つてゐる。石垣に沿うて、露に濡れた、老緑の廣葉を茂らせてゐる八角金盛が、所々に白い莖を、枝のある燭臺のやうに抽き出して、白い花を咲かせてゐる上に、薄曇の空から日光が少し漏れて、雀が二三羽鳴きながら飛び交はしてゐる。

秀麿は暫く眺めてゐて、兩手を力なく垂れた儘て、背を反らせて伸びをして、深い息を衝いた。それから部屋に這入つて、洗面卓の傍へ行つて、雪が取つて置いた湯を使つて、背廣の服を引つ掛けた。洋行して歸つてからは、いつも洋服を着てゐるのである。

そこへお母あ樣が這入つて來た。「けふは日曜だから、お父う樣は少しゆつくりして入らつしやるのだが、わたしはもう御飯を戴くから、お前もおいでゞないか。」から云つて、息子の顏を横から覗くやうに見て、詞を續けた。「ゆうべも大層遲くまで起きてゐましたね。いつも同じ事を言ふやうですが、西洋から歸つてお出の時は、あんなに體が好かつたのに、餘り勉强ばかりして、段々顏色を惡くしておしまひなのね。」

「なに。體はどうもありません。外へ出ないでゐるから、日に燒けないのでせう。」笑ひながら云つて、一しよに洋室を出た。

併し奥さんにはその笑聲が胸を刺すやうに感ぜられた。秀麿が心からでなく、人に目潰しに何か投げ

附けるやうに笑聲をあびせ掛ける習癖を、自分も意識せずに、いつの間にか養成してゐるのを、奥さんは本能的に知つてゐるのである。

食事をしまつて歸つた時は、明方に薄曇のしてゐた空がすつかり晴れて、日光が色々に邪魔をする物のある秀麿の室を、物見高い心から、依怙地に覗かうとするやうに、窓帷のへりや書棚のふちを彩つて、卓の上に幅の廣い、明るい帶をなして、インク壺を光らせたり、床に敷いてある絨緞の空想的な花摸樣に、刹那の性命を與へたりしてゐる。そんな風に、日光の差し込んでゐる處の空氣は、黄いろに染まり掛かつた青葉のやうな色をして、その中には細かい塵が躍つてゐる。

室内の溫度の餘り高いのを喜ばない秀麿は、煖爐のコックを三分一程閉ぢて、葉卷を銜へて、運動椅子に身を投げ掛けた。

秀麿の心理狀態を簡單に說明すれば、無聊に苦んでゐると云ふより外はない。それも何事もすることの出來ない、低い刺戟に饑ゑてゐる人の感ずる退屈とは違ふ。内に眠つてゐる事業に壓迫せられるやうな心持である。潛勢力の苦痛である。三國時代の英雄は髀に肉を生じたのを見て歎じた。それと同じやうに、餘所目には痩せて血色の惡い秀麿が、自己の力を知覺してゐて、腦髓が醫者の謂ふ無動作性萎縮に陷いらねば好いがと愛へてゐる。そして思量の體操をする積りで、哲學の本なんぞを讀み耽つてゐるのである。お母あ樣程には、秀麿の健康狀態に就いて悲觀してゐない父の子爵が、いつだつたか食事の時息子を顧みて、「一肚皮時宜に合はずかな」と云つて、意味ありげに笑つた。秀麿は例の笑を顏に湛へ

て、「僕は不平家ではありません」と答へた。どうもお父う様はこつちが極端な自由思想をでも持つてゐはしないかと疑つてゐるらしい。それは誤解である。併し流石男親丈にお母あ様よりは、切實に少くもこつちの心理狀態の一面を解してゐてくれるやうだと、秀麿は思つた。

秀麿は父の詞を一つ思ひ出したのが機緣になつて、今一つの父の詞を思ひ出した。それは又或る日食事をしてゐる時、父が「どうも人間が猿から出來たなんぞと思つてゐられては困るからな」と云つた。秀麿はぎくりとした。秀麿だつて、ヘッケルのアントロポゲニイに連署して、それを自分の告白にしても好いとは思つてゐない。併しお父う樣の此詞の奥には、こつちの思想と相容れない何物かが潜んでゐるらしい。まさかお父う樣だつて、草昧の世に一國民の造つた神話を、その儘歴史だと信じてはゐられまいが、うかと神話が歴史でないと云ふことを明言しては、人生の重大な物の一角が崩れ始めて、船底の穴から水の這入るやうに物質的思想が這入つて來て、船を沈没させずには置かないと思つてゐられるのではあるまいか。さう思つて知らず識らず、頑冥な人物や、假面を被つた思想家と同じ穴に陷いつてゐられるのではあるまいかと、秀麿は思つた。

かう思ふので、秀麿は父の誤解を打ち破らうとして進むことを躊躇してゐる。秀麿が爲めには、神話が歴史でないと云ふことを明言することは、良心の命ずる所である。それを明言しても、果物が堅實な核を藏してゐるやうに、神話の包んでゐる人生の重要な物は、保護して行かれると思つてゐる。彼を承認して置いて、此を維持して行くのが、學者の務だと云ふばかりではなく、人間の務だと思つてゐる。

そこで秀麿は父と自分との間に、狹くて深い谷があるやうに感ずる。それと同時に、父が自分と話をする時、危險な物の這入つてゐる疑のある箱の蓋を、そつと開けて見ようとしては、その手を又引つ込めてしまふやうな態度に出るのを見て、齒痒いやうにも思ひ、又氣の毒だから、いたはつて、手を出させずに置かなくてはならないやうにも思ふ。父が箱の蓋を取つて見て、白晝に鬼を見て、毒でもなんてもない物を毒だと思つて怖れるよりは、箱の内容を疑はせて置くのが、まだしもの事かと思ふ。秀麿と父との對話が、ヨオロッパから歸つて、もう一年にもなるのに、兎角對陣してゐる兩軍が、雙方から斥候を出して、その斥候が敵の影を認める度に、遠方から射撃して還るやうに、はか／＼しい衝突もせぬ代りに、平和に打ち明けることもなくてゐるのは、かう云ふわけである。

秀麿の銜へてゐる葉卷の白い灰が、大ぶ長くなつて持つてゐたのが、とう／＼折れて、運動椅子に倚り掛かつてゐる秀麿のチョッキの上に、細い鱗のやうな破片を留めて、絨緞の上に落ちて碎けた。今のやうに何もせずにゐると、秀麿はいつも内には事業の壓迫と云ふやうな物を受け、外には家庭の空氣の或る緊張を覺えて、不快である。

秀麿は「又本を讀むかな」と思つた。兼ねて生涯の事業にしようと企てた本國の歷史を書くことは、どうも神話と歷史との限界をはつきりさせずには手が着けられない。寧ろ先づ神話の結成を學問上に綺麗に洗ひ上げて、それに伴ふ信仰を、敎義史體にはつきり書き、その信仰を司祭的に取り扱つた機關を寺院史體にはつきり書く方が好ささうだ。さうしたつてプロテスタント敎がその敎義史と寺院史とで毀

損せられないと同じ事で、祖先崇拜の教義や機關も、特にそのために危害を受ける筈はない。これ丈の事を完成するのは、極て容易だと思ふと、もうその平明な、小ざつぱりした記載を目の前に見るやうな氣がする。それが濟んだら、安心して歴史に取り掛られるだらう。併しそれを敢てする事、その目に見えてゐる物を手に取る事を、どうしても周圍の事情が許しさうにないと云ふ認識は、ベルリンでそろ〳〵故郷へ歸る支度に手を着け始めた頃から、段々に、或る液體の中に浮んだ一點の塵を中心にして、結晶が出來て、それが大きくなるやうに、秀麿の意識の上に形づくられた。これが秀麿の腦髓の中に蟠結してゐる暗黑な塊で、秀麿の企てゝゐる事業は、此塊に礙げられて、どうしても發展させるわけに行かないのである。それで秀麿は製作的方面の脈管を總て塞いで、思量の體操として本だけ讀んでゐる。本を讀み出すと、秀麿は不思議に精神をそこに集注することが出來て、事業の壓迫をも感ぜず、家庭の空氣の緊張をも感ぜないでゐる。それで本ばかり讀んでゐることになるのである。

「又本を讀むかな」と秀麿は思つた。そして運動椅子から身を起した。

丁度その時こつ〳〵と戸を叩いて、秀麿の返事をするのを待つて、雪が這入つて來た。小さい顏に、くり〳〵した、漆のやうに黑い目を光らして、小さくて鋭く高い鼻が少し仰向いてゐるのが、ひどく可哀らしい。秀麿が歸つた當座、雪はまだ西洋室で用をしたことがなかつたので、開けた戸を、内からしやがんて締めて、絨緞の上に手を衝いて物を言つた。秀麿は驚いて、笑顏をして西洋室での行儀を敎へて遣つた。なんても一度言つて聞せると、しつかり覺えて、その次の度からは慣れたものゝやうにする

のである。

煖爐を背にして立つて、戸口を這入つた雪を見た秀麿の顏は晴やかになつた。エロチックの方面の生活の丸で眠つてゐる秀麿が、平和ではあつても陰氣な此家で、心から爽快を覺えるのは、この小さい小間使を見る時ばかりだと云つても好い位である。

「綾小路さんが入らつしやいました」と、雪は籠の中の小鳥が人を見るやうに、くり〳〵した目の瞳を秀麿の顏に向けて云つた。雪は若檀那樣に物を言ふ機會が生ずる度に、胸の中で凱歌の聲が起る程、無意味に、何の欲望もなく、秀麿を崇拜してゐるのである。

此時雪の締めて置いた戸を、廊下の方からあら〳〵しく開けて、茶の天鵞絨の服を着た、秀麿と同年位の男が、驅け込むやうに這入つて來て、行きなり雪の肩を、太つた赤い手で押へた。「おい、雪。若檀那の顏ばかり見てゐて、取次をするのを忘れては困るぢやないか。」

雪の顏は眞つ赤になつた。そして逃げるやうに、默つて部屋を出て行つた。綾小路の方は振り返つても見なかつたのである。

秀麿の眉間には、注意して見なくては見えない程の皺が寄つたが、それが又注意して見ても見えない程早く消えて、顏の表情は極眞面目になつてゐる。「君詰まらない笑談は、僕の所で丈はよしてくれ給へ。」

「勞頭第一に小言を食はせるなんぞは驚いたね。氣持の好い天氣だぜ。君の内の親玉なんぞは、秋晴と

かなんとか云ふのだらう。尤もセゾンはもう冬かも知れないが、過渡時代には、冬の日になつたり、秋の日になつたりするのだ。けふはまだ秋だとして置くね。どこか底の方に、ぴりつとした冬の分子が潜んでゐて、夕日が沈み掛かつて、かつと照るやうな、悲哀を帶びて爽快な處がある。まあ、年増の美人のやうなものだね。こんな日に鼹鼠のやうになつて、内に引つ込んで、本を讀んでゐるのは、世界は廣いが、先づ君位なものだらう。それでも机の上に俯さつてゐなかつた丈を、僕は褒めて置くね。」

秀麿は眞面目てはあるが、厭がりもしないらしい顏をして、盛んに饒舌り立ててゐる綾小路の樣子を見てゐる。簡單に言へば、此男には餓鬼大將と云ふ表情がある。額際から顱頂へ掛けて、少し長めに刈つた髮を、眞つ直に背後へ向けて掻き上げたのが、日本書にかく野猪の毛のやうに逆立つてゐる。細い目のちよいと下がつた目尻に、嘲笑的な微笑を湛へて、幅廣く廣げた口を閉むやうに、左右の頰に大きい括弧に似た、深い皺を寄せてゐる。

綾小路はまだ饒舌る。「そんなに僕の顏ばかし見給ふな。心中大いに僕を輕侮してゐるのだらう。好いぢやないか。君がロアて、僕がブツフオンか。ドイツ語てホオフナルと云ふのだ。陛下の俳優を以て遇する所か。」

秀麿は覺えず噴き出した。「僕がそんな侮辱的な考をするものか。」

「そんなら頭からけんつくなんぞを食はせないが好い。」

「うん。僕が惡かつた。」秀麿は葉卷の箱の蓋を開けて勸めながら、獨語のやうにつぶやいた。「僕は人の

空想に毒を注ぎ込むやうに感じるものだから。」

「それがサンチマンタルなのだよ」と云ひながら、綾小路は葉卷を取つた。秀麿はマッチを磨つた。

「メルシイ」と云つて、綾小路が吸い附けた。

「暖かい所が好からう」と云つて、秀麿は椅子を一つ煖爐の前に押し遣つた。

綾小路は椅背に手を掛けたが、すぐに据わらずに、あたりを見廻して、卓の上にゆうべから開けた儘になつてゐる、厚い、假綴の洋書に目を着けた。傍には幅の廣い篦のやうな形をした、髓甲の紙切小刀が置いてある。「又何か大きな物にかじり附いてゐるね。」かう云つて秀麿の顏を見ながら、腰を卸した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

綾小路は學習院を秀麿と同期で通過した男である。秀麿は大學に行くのに、綾小路は畫かきになると云つて、溜池の洋畫研究所へ通ひ始めた。それから秀麿がまだ文科にゐるうちに、綾小路は先へ洋行して、パリイにゐた。秀麿がマルセイユから上陸して、ベルリンへ行く途中で、二三日パリイに滯在してゐた時には、親切に世話を燒いて、シヤン・ゼリゼエの散歩やら、テアアトル・フランセエとジムナアズ・ドラマチックとの芝居見物やら、時間を吝まずに案内をして歩いて、ベルリンへ行つてから着る服まで誂へさせてくれた。

綾小路は目と耳とばかりで生活してゐるやうな男で、藝術をさへ餘り眞面目には取り扱つてゐないが、明敏な頭腦がいつも何物にか饑ゑてゐる。それで故鄕へ歸つて以來引き籠り勝にしてゐる秀麿の方から

は、尋ねても行かぬのに、折々遊びに來て、秀麿の讀んでゐる本の話を、口ではちやかしながら、眞面目に聞いて考へても見るのである。

綾小路は卓の所へ歩いて行つて、開けてある本の表紙を引つ繰り返して見た。「ヂイ・フィロゾフィイ・デス・アルス・オップか。妙な標題だなあ。」

そこへ雪が楕圓形のニッケル盆に香茶の道具を載せて持つて來た。そして小さい卓を煖爐の前へ運んで、その上に盆を置いて、綾小路の方を見ぬやうにしてちよいと見て、そつと部屋を出て行つた。何か言はれはしないだらうか。言へば又恥かしいやうな事を言ふだらう。どんな事を言ふだらう。言はせて聞いても見たいと云ふやうな心持で雪はゐたが、こん度は綾小路が默つてゐた。

秀麿は伏せてあるタッスを起して茶を注いだ。そして「牛乳を入れるのだらうな」と云つて、綾小路を顧みた。

「こなひだのやうに澤山入れないでくれ給へ。一體アルス・オップとはなんだい。」から云ひながら、綾小路は煖爐の前の椅子に掛けた。

「コム・シイさ。かのやうにとでも云つたら好いのだらう。妙な所を押さへて、考を押し廣めて行つたものだが、不思議に僕の立場其儘を說明してくれるやうで、愉快で溜まらないから、とう〳〵ゆうべは三時まで讀んでゐた。」

「三時まで。」綾小路は目を瞬つた。「どうして、どこが君の立場其儘なのだ。」

「さう」と云つて、秀麿は暫く考へてゐた。千ペエジ近い本を六七分通り讀んだのだから、どんな風に要點を撮んで話したものかと考へたのである。「先づ本當だと云ふ詞からして考へて掛からなくてはならないね。裁判所で證據立てをして拵へた判決文を事實だと云つて、それを本當だとするのが、普通の意味の本當だらう。ところが、さう云ふ意味の事實と云ふものは存在しない。事實だと云つても、人間の寫象を通過した以上は、物質論者のラングの謂ふ湊合が加はつてゐる。意識せずに詩にしてゐる。嘘になつてゐる。そこで今一の意味の本當と云ふものを立てなくてはならなくなる。小說は事實を本當とする意味に於いては嘘だ。併しこれは最初から事實がらないで、嘘と意識して作つて、通用させてゐる。そしてその中に性命がある。價値がある。尊い神話も同じやうに出來て、通用して來たのだが、あれは最初事實がつた丈違ふ。君のかく畫も、どれ程寫生したところで、實物ではない。嘘の積りでかいてゐる。人生の性命あり、價値あるものは、皆この意識した嘘だ。第二の意味の本當はこれより外には求められない。かう云ふ風に本當を二つに見ることは、カントが元祖で、近頃プラグマチスムなんぞで、餘程卑俗にして繰り返してゐるのも同じ事だ。これ丈の事は一寸云つて置かなくては、話が出來ないのだがね。」

「宜しい。詞はどうでも好い。その位な事は僕にも分かつてゐる。僕のかく畫だつて、實物ではないが、今年も展覽會で一枚賣れたから、慥かに多少の價値がある。だから僕の畫を本當だとするには、異議はない。そこでコム・シイはどうなるのだ。」

「まあ待ち給へ。そこで人間のあらゆる智識、あらゆる學問の根本を調べて見るのだね。一番正確だとしてある數學方面で、點だの線だのと云ふものがある。どんなに細かくぽつんと打つたつて點にはならない。どんなに細くすうつと引いたつて線にはならない。どんなに好く削つた板の縁も線にはなつてゐない。角も點にはなつてゐない。點と線は存在しない。例の意識した嘘だ。併し點と線があるかのやうに考へなくては、幾何學は成り立たない。あるかのやうにだね。コム・シイだね。自然科學はどうだ。物質と云ふものでからが存在はしない。物質が元子から組み立てられてゐると云ふ。その元子も存在はしない。併し物質があつて、元子から組み立ててあるかのやうに考へなくては、元子量の勘定が出來ないから、化學は成り立たない。精神學の方面はどうだ。自由だの、靈魂不滅だの、義務だのは存在しない。その無いものを有るかのやうに考へなくては、倫理は成り立たない。理想と云つてゐるものはそれだ。法律の自由意志と云ふものの存在しないのも、疾つくに分かつてゐる。併し自由意志があるかのやうに考へなくては、刑法が全部無意味になる。どんな哲學者も、近世になつては大抵世界を相待に見て、絶待の存在しないことを認めてはゐるが、それでも絶待があるかのやうに考へてゐる。宗教でも、もう大ぶ古くシユライエルマツヘルが神を父であるかのやうに考へると云つてゐる。孔子もずつと古く祭るに在すが如くすと云つてゐる。先祖の靈があるかのやうに祭るのだ。さうして見ると、人間の智識、學問は扨置き、宗教でもなんでも、その根本を調べて見ると、事實として證據立てられない或る物を建立してゐる。即ちかのやうにが土臺に横はつてゐるのだね。」

一まあ一寸待つてくれ給へ。君は僕の事を饒舌る饒舌ると云ふが、君が饒舌り出して來ると、駈足になるから、附いて行かれない。その、かのやうにと云ふ怪物の正體も、少し見え掛かつては來たが、まあ、茶でももう一杯飲んで考へて見なくつては、はつきりしないね。」

「もうぬるくなつただらう。」

「なに。好いよ。雪と云ふ、證據立てられる事實が間へ這入つて來ると、君がこんがらかつて來るからね。さうすると、詰まり事實と事實がごろ〳〵轉がつてゐてもしやうがない。それを結び附けて考へようとすると、厭でも或る物を土臺にしなくてはならない。その土臺が例のかのやうにだと云ふのだね。宜しい。ところが、僕はそんな怪物の事は考へずに置く。考へても言はずに置く。」綾小路は生温い香茶をぐつと飲んで、決然と言ひ放つた。

秀麿は顏を蹙めた。「それは僕も言はずにゐる。併し君は畫だけかいて、言はずにゐられようが、僕は言ふ爲めに學問をしたのだ。考へずには無論ゐられない。考へてそれを眞つ直に言はずにゐるには、默つてしまふか、別に噓を拵へて言はなくてはならない。それでは僕の立場がなくなつてしまふのだ。」

「併しね、君、その君が言ふ爲めに學問をしたと云ふのは、歴史を書くことだらう。僕が畫をかくやうに、怪物が土臺になつてゐても好いから、構はずにずん〳〵書けば好いぢやないか。」

「さうは行かないよ。書き始めるには、どうしても神話を別にしなくてはならないのだ。別にすると、なぜ別にする、なぜごちや〳〵にして置かないかと云ふ疑問が起る。どうしても歴史は、畫のやうに一

刹那を捉へて遣つてゐるわけには行かないのだ。」

「それでは僕のかく書には怪物が隱れてゐるから好い。君の書く歴史には怪物が現れて來るから行けないと云ふのだね。」

「まあ、さうだ。」

「意氣地がないねえ。現れたら、どうなるのだ。」

「危險思想だと云はれる。それも世間が彼此云ふだけなら、奮鬪もしよう。第一父が承知しないだらうと思ふのだ。」

「いよく\意氣地がないねえ。そんな葛藤なら、僕はもう疾つくに解決してしまつてゐる。僕は書かきになる時、親爺が見限つてしまつて、現に高等遊民として取扱つてゐるのだ。君は歴史家になると云ふのを、お父うさんが喜んで承知した。そこで大學も卒業した。洋行も僕のやうに無理をしないで、氣樂にした。君は今まで葛藤の繰延をしてゐたのだ。僕の五六年前に解決した事を、君は今解決して、好きなやうに歴史を書くが好いぢやないか。已むを得んぢやないか。」

「併し僕はそんな葛藤を起さずに遣つて行かれる筈だと思つてゐる。平和な解決がつひ目の前に見えてゐる。手に取られるやうに見えてゐる。それを下手に手に取らうとして失敗をすることなんぞは、避けたいと思つてゐる。それでぐづく\してゐて、君にまで意氣地がないと云はれるのだ。」秀麿は溜息を衝いた。

「ふん。どうしてお父うさんを納得させようと云ふのだ。」
「僕の思想が危險思想でもなんでもないと云ふことを言つて聞せさへすれば好いのだが。」
「どう言つて聞せるね。僕がお父うさんだと思つて、そこで一つ言つて見給へ。」
「困るなあ」と云つて、秀麿は立つて、室内をあちこち歩き出した。
日はもうエランダの檐を越して、屋根の上に移つてしまつた。眞つ蒼に澄み切つた、まだ秋らしい空の色がエランダの硝子戸を靑玉のやうに染めたのが、窓越しに少し翳んで見えてゐる。山の手の日曜日の寂しさが、大ぶ廣い此邸の庭に、田舍の別莊めいた感じを與へる。突然自動車が一臺煉瓦塀の外をけたたましく過ぎて、跡は又元の寂しさに戻つた。
　秀麿は語を續いだ。「まあ、かうだ。君がさつきから怪物々々と云つてゐる、その、かのやうにだがね。あれは決して怪物ではない。かのやうにがなくては、學問もなければ、藝術もない、宗教もない。人生のあらゆる價値のあるものは、かのやうにを中心にしてゐる。昔の人が人格のある單數の神や、複數の神の存在を信じて、その前に頭を屈めたやうに、僕はかのやうにの前に、敬虔に頭を屈める。その尊敬の情が熱烈ではないが、澄み切つた、純潔な感情なのだ。道德だつてさうだ。義務が事實として證據立てられるものでないと云ふことと丈分かつて、怪物扱、幽靈扱にするイプセンの芝居なんぞを見る度に、僕は憤慨に堪へない。破壞は免るべからざる破壞かも知れない。併しその跡には果してなんにもないのか。手に取られない、微かな様な外觀のものではあるが、底にはかのやうにが儼乎として存立してゐる。人

間は飽くまでも義務があるかのやうに行はなくてはならない。僕はさう行つて行く積りだ。人間が猿から出來たと云ふのは、あれは事實問題て、事實として證明しようと掛かつてゐるのだから、ヒポテジスてあつて、かのやうにてはないが、進化の根本思想は矢張かのやうにだ。生類は進化するかのやうにしか考へられない。僕は人間の前途に光明を見て進んで行く。祖先の靈があるかのやうに背後を顧みて、祖先崇拜をして、義務があるかのやうに、德義の道を踏んで、前途に光明を見て進んで行く。さうして見れば、僕は事實上極蒙昧な、極從順な、山の中の百姓と、なんの擇ぶ所もない。只頭がぼんやりしてゐない丈だ。極頑固な、極篤實な、敬神家や道學先生と、なんの擇ぶ所もない。只頭がごつ〳〵してゐない丈だ。ねえ、君、この位安全な、危險てない思想はないぢやないか。神が事實でない。義務が事實てない。これはどうしても今日になつて認めずにはゐられないが、それを認めたのを手柄にして、神を瀆す。義務を蹂躙する。そこに危險は始て生じる。行爲は勿論、思想まで、さう云ふ危險な事は十分撲滅しようとするが好い。併しそんな奴の出て來たのを見て、天國を信ずる昔に戻さう、地球が動かずにゐて、太陽が巡回してゐると思ふ昔に戻さうとしたつて、それは不可能だ。さうするには大學も何も潰してしまつて、世間をくら闇にしなくてはならない。黔首を愚にしなくてはならない。それは不可能だ。どうしても、かのやうにを尊敬する、僕の立場より外に、立場はない。」

　これまで例の口の端の括弧を二重三重にして、妙な微笑を顔に湛へて、葉卷の烟を吹きながら聞いてゐた綾小路は、烟草の灰を灰皿に叩き落して、身を起しながら、「駄目だ」と、簡單に一言云つて、煖爐

を背にして立つた。そしてめまぐろしく歩き廻りながら饒舌つてゐる秀麿を、冷やかに見てゐる。

秀麿は綾小路の正面に立ち止まつて相手の顔を見詰めた。蒼い顔の目の縁がぽつと赤くなつて、その目の奥にはファナチスムの火に似た、一種の光がある。「なぜ。なぜ駄目だ。」

「なぜつて。知れてゐるぢやないか。人に君のやうな考になれと云つたつて、誰がなるものか。百姓はシの字を書いた三角の物を額へ當てゝ、先祖の幽靈が盆にのこ／＼歩いて來ると思つてゐる。道學先生は義務の發電所のやうなものが、天の上かどこかにあつて、自分の教はつた師匠がその電氣を取り續いて、自分に掛けてくれて、そのお蔭で自分が生涯びり／＼と動いてゐるやうに思つてゐる。みんな手應のあるものを向うに見てゐるから、崇拜も出來れば、遵奉も出來るのだ。人に僕のかいた裸體畫を一枚遣つて、女房を持たずにゐろ、けしからん所へ往かずにゐろ、これを生きた女であるかのやうに思へと云つたつて、聽くものか。君のかのやうにはそれだ。」

「そんなら君はどうしてゐる。幽靈がのこ／＼歩いて來ると思ふのか。電氣を掛けられてゐると思ふのか。」

「そんな事はない。」

「そんならどう思ふ。」

「どうも思はずにゐる。」

「思はずにゐられるか。」

「さうさね。丸で思はない事もない。併しなる丈思はないやうにしてゐる。極めずに置く。書をかくには極めなくても好いからね。」
「そんなら君が假に僕の地位に立つて、歴史を書かなくてはならないとなつたら、どうする。」
「僕は歴史を書かなくてはならないやうな位地には立たない。御免を蒙る。」綾小路の顔からは微笑の影がいつか消えて、本氣な、殆ど不愛想な表情になつてゐる。
秀麿は氣抜けがしたやうに、兩手を力なく垂れて、こん度は自分が寂しく微笑んだ。「さうだね。てんでに自分の職業を遣つて、そんな問題はそつとして置くのだらう。僕は職業の選びやうが惡かつた。ぼんやりして遣つたり、嘘を衝いて遣れば造做はないが、正直に、眞面目に遣らうとすると、八方塞がりになる職業を、僕は不幸にして選んだのだ。」
綾小路の目は一刹那鋼鐵のやうに光つた。「八方塞がりになつたら、突貫して行く積りで、なぜ遣らない。」
秀麿は又目の縁を赤くした。そして殆ど大人の前に出た子供のやうな口吻で、聲低く云つた。「所詮父と妥協して遣る望はあるまいかね。」
「駄目、駄目」と綾小路は云つた。
綾小路は背をあぶるやうに、煖爐に太つた體を近づけて、兩手を腰のうしろに廻して、少し前屈みになつて立ち、秀麿はその二三歩前に、痩せた、しなやかな體を、まだこれから延びようとする今年竹のやうに、眞つ直にして立ち、二人は目と目を見合はせて、良久しく默つてゐる。
山の手の日曜日の寂しさが、二人の周圍を依然支配してゐる。

（完）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

劈頭隨一之巨觀

太陽

一月初刷　十八卷第壹號　正價卅錢　本號に限郵税三錢五厘　十六冊前金四圓六十八錢

◎文藝時評　金子筑水

◎財政經濟時評　本多精一

■四十五年度豫算計畫批評　澁澤男、武富、中野、大隈伯、阪谷男、橋本次官、若槻諸氏

□ナポレオン失敗の原因　箕作博士

□國史より見たる支那革命亂　三浦博士

□百年前の世界と百年後の世界　浮田博士

新年大附録

●黒摘毛（長篇歴史小説）　塚原澁柿

○客　田山花袋

●茶の間　正宗白鳥

○お濱と叔母　鈴木三重吉

●酒顛童子　岡本綺堂

□社會問題は何故に起るか　平沼淑郎

□社會主義と個人主義　戸田博士

□南九州道中記　坪谷水哉

■經濟政策と財政策　神戸博士

◎政治外交時評　淺田江村

◎將來の革命　岡村博士

（後付の）

東京市本町　博文館

信用なき店舗及卑猥なる賞品の廣告掲載は謝絶す

本號特價金五拾錢　郵稅四錢

關東大賣捌所

東京神田表神保町　東京堂
仝　神田裏神保町　上田屋
仝　京橋尾張町　東海堂
仝　京橋元數寄屋町　北隆館
仝　京橋西紺屋町　良明堂
仝　日本橋本石町　至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町　盛文館
仝　京町堀　太華堂
京都佛光寺　東枝書肆

○改正定價　金貳拾五錢外に郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但清國を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵稅共		

▲但新年號春秋二期特別號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

送金注意

一郵便爲替　にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京市東片町局と指定あれば途中盗取の虞なし

一振替貯金　口座は東京三十四番なり、これにより御送金の方は外に登記料一錢を加えらるべし、然らざれば送金額より差引くにより端金となりて却て面倒となるべし

一郵券代用　必ず一割增の事

一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、座ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記集金委托料及送達料金を加えたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄　金五錢
一金三圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
（集金委托料及送達料）

一受領證請求　は必ず返信料金を要す

明治四十四年十二月廿五日印刷納本
明治四十五年一月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　藤本兼吉

東京市本鄉區駒込西片町十番地
發行所　反省社
振替口座東京三十四番
電話下谷九一九
電信略號ハンセイ

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　[illegible]

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Hansei-sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月二十九日 第三種郵便物認可
明治四十五年一月一日發行（毎月一回一日發行）

中央公論第二十七年第一號